

ポケットモンスター let's goリーリエ！

夢叶

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アニメポケットモンスターを絡ませており、主人公はリーリエと  
しています。ポケモントレーナーとなったリーリエが

カントー地方を舞台に新たな仲間や新たなポケモンと出会いなが  
ら

旅をしていく物語となっています。

リーリエはサトシとピカチュウが帰国した二週間後にカントー地  
方を訪れる設定となっております。

カントー地方が舞台とされていますが、出てくるポケモンはカン  
トーのみあらず出していきます。

至らぬ点があると思いますが、よろしく願います。  
気軽に読んでいただけたらいいと思います。

# 目次

はじめに	1
手持ち	6
第一章	
第一話 新たな物語	11
第二話 マサキを訪ねて	13
第三話 新たな目標	16
第四話 始まりの町へ	20
第五話 二人の訪問者	25
第六話 忍び寄る【R】	29
第七話 研究所での決戦	36
第八話 昔と今	42
第九話 新たな仲間と初ゲット!!?	52
第十話 常盤での出会い	62
第十一話 彼女の願い	71
第十二話 森の怪物	86
第十三話 VSニビジム 最初の試練	106
第十四話 暴走	135
第十五話 少年とポケモン達	161
第十六話 チャンピオンの実力	187
第十七話 細くも樫の木	205
第十八話 オツキミ山の独裁者	235
第十九話 神秘の町	258
第二十話 ノゾミの研鑽	279

第二十一話	V S ハナダジム 水のフィールド	298
第二十二話	友情の灯火	332
第二十三話	ポケモンバトル	359
第二十四話	V S ダークカイリユ	386
第二十五話	アローラ祭！全員集合！	422
第二十六話	Z 技 V S メガシンカ 前半	438
第二十七話	Z 技 V S メガシンカ 後半	465
第二十八話	V S クチバジム 怒涛の雷撃	483
第二十九話	再スタート	506
第三十話	サトシ	525
第三十一話	うずまきカップ	539
第三十二話	最弱から最強へ	553
第三十三話	デイグダの穴の荒くれ者	572
第三十四話	育て屋の少女	597
第三十五話	行方不明の研究員	608
第三十六話	幹部登場	628
第三十七話	V S タママシジム 苧環	637
第三十八話	スイレンとイーブイ	663
第三十九話	彼岸の守り神	676
第四十話	前向きロケット団	692
第四十一話	起きてよ！カビゴン！	714
第四十二話	三番勝負 V S アイラ	730
第四十三話	二人の絆	741
第四十四話	どんどん行くよ！ドンバトル ①	770
第四十五話	どんどん行くよ！ドンバトル ②	803

第四十六話 どんどん行くよ！ドンバトル ③  
ポケットモンスターG 番外編

ACT	ACT	ACT	ACT	ACT	
5	4	3	2	1	
880	870	860	855	850	830

## 始めに

### 詳細設定

お目通しいただきありがとうございます。

今さらながらですが、この小説における大まかな設定を記載して置こうかと思えます。

理由としましては、この物語はアニポケの方と同時進行で開始したため、今後のアニポケの展開を最終回まで自分なりにどう物語が進んでいくか予想を立てていきながら執筆していききました。

そのためアニポケと絡ませていると詳細したのにも関わらず、話が噛み合わなくなっている事で、読者の皆さんを混乱させているのではないと思い記載する事にしました。

すでに此方を読まれている方々には遅くなってしまう申し訳ありません。

そして新規の方々は此方の詳細を確認にした上で楽しんで頂けたらと思っております。

尚、アニポケで追加された要素は回収していくつもりでいますのでよろしく願います。

リーリエ

ゲームの方に基づいて母の後遺症の回復の手がかりを見つける目的としてパートナーのシロンと一緒にカントー地方へと足を運んだ事になっています。

- ・ポケモンに触れなかった過去
- ・シルヴァデイとの和解
- ・ゼットリングと氷Zの所持などは取り入れています。

ルザミーネ

ルザミーネはゲームの方の設定に基づいて書かれています。手持ちはアニメの方で揃えています。

グラジオ

ウルトラホールでの戦いとルザミーネの救出後、エーテル財団の代表代理へと就任とゲームに基づいた設定となっています。

サトシ達とは面識あり

手持ちに関してはアニメの方で基づきます。

サトシ

『島巡り』

四島の試練、大試練は全て達成

『Zクリスタルの所持数』

アニメと同じ

『ポケモンリーグ』

アローラリーグはウルトラビーストの襲撃により延期という設定。そのアローラリーグに向けてサトシとピカチュウは修行のため一時的に帰国しているという設定です。

『手持ち』

・ピカチュウ

技構成は【エレキボール】から【エレキネット】へと変更あり

・ニャビー

ガオガエンにはククイ博士のガオガエンとの激闘の末に進化しました。そこはアニポケに遵守していきたいので進化はさせずにニャビーのまま進めさせていただきます。

・アーゴヨン

サトシ達と面識はありますが、まだベベノムだった頃にウルトラホールでお別れした所から時間は止まっている事にします。

・モクロー とルガルガンは変更なし。

・メルメタルは現時点ではサトシの手持ちにはいませんが、今後の展開で回収していきます。

『ゲッコウガ』

歴代のサトシのポケモン達も登場させて行きたいと思っています。プニちゃんと一緒にアローラの危機を察知したゲッコウガがウルトラビーストとの戦いにおいて再開を気にサトシの元へと戻った事にしました。

『ロトム』

サトシと一緒にマサラタウンへと着いて行かずにククイ博士の元へと止まる。



マオ

- ・ゼットリングと草乙入手済み
- ・手持ちはアママイコ
- ・現時点でのシェイミの加入はなし

カキ

- ・乙クリスタル数はアニメと同じ
- ・手持ちはバクガメス、ガラガラ、リザードン

スイレン

- ・ゼットリングと水乙入手済み
- ・手持ちはアシマリ
- ・現時点でのナギサの加入はなし

マーマネ

- ・ゼットリングと虫乙入手済み
- ・手持ちはトゲデマルとクワガノン
- ・クワガノンは進化条件とやらの関係で、カントーでの進化は難しいと判断したため、すでに進化済みという設定で行きます。

ククイ博士

- ・正体がロイヤルマスクとはサトシ達にはバレてません
- ・バーバネット博士とは夫妻
- ・手持ちはアニポケの方で基づく

- ムサシ・コジロウ・ニヤース・ソーナンス
- ・ロケット団は本部の命令により一時帰還
- ・ゼットリングと悪Z・ミミックユZ所持
- ・キテルグマ達はついてきてません

タケシとカスミ

アローラ組とは面識はなしという設定でいきます。(プリンもです)

宜しく願います。

## 手持ち

シロン (ロコン アローラの姿)

タイプ こおり

性別 ♀

性格 おとなしい

特性 ゆきがくれ

技構成

【れいとうビーム】【こおりのつぶて】【ごごえるかせ】【ムーンフォー  
ス】

リーリエの最初のパートナーにして一番の相棒である。ニツク  
ネームのシロンはリーリエが卵の頃から育てている時に名付けられ  
ていた。その由来は白くてコロコロと転がるだからそうだ。

落ち着いた性格もあって寄せ付けない空気を漂わせていたのだが、  
リーリエが空振りしたモンスターボールに自らの意思で入ったり、  
リーリエを護るために勇敢にロケット団に立ち向かったりと、リーリ  
エにはすぐに懐いていた。当時はピカチュウ達の輪の中に入ろうと  
もしなかつたが、スクールの仲間たちと共に過ごしていくにつれて、  
自分からスキンシップを取ったりする様子などが見られるようにな  
った。しかしリーリエから離れると寂しくなり不安になるため  
リーリエの側からなるべく離れないようにしている。

ポケモンバトルでは、普段の性格からは一変して勇ましく立ち振る  
舞い、リーリエも驚くようなバトルを披露していく。

ムツクル ↓ ムクバード

タイプ ノーマル・ひこう

性別 ♀

性格 がんばりや

特性 いかく

技構成

【つばめがえし】【はがねのつばき】【かげぶんしん】【でんこうせっか】  
カントー地方にてリーリエが初めて捕獲に成功したポケモンであつて上空から相手の出方を伺つたりなど、その高度なバトルスタイルは野生の頃から備わっていた。

ムツクルの頃から根性があつて、勝負に敗れたその次の日にはリーリエを特訓へと引つ張つたりと、とにかく負けず嫌いな性格をしている。

オツキミ山ではズルズキンを相手に果敢と立ち向かい、その最中でムクバードへと進化を遂げた。

キモリ

タイプ くさ

性別 ♂

性格 れいせい

特性 しんりよく

技構成

【ギガドレイン】【あなをほる】【でんこうせっか】【はたく】

トキワシテイで知り合つた少女、スマレから譲り受けたポケモン。

スマレがリーリエにキモリを託そうとした時は彼女と一緒にポケモンリーグに出る夢を持っていたため、彼女から離れる事を激しく拒んでいた。しかしスマレの思いやリーリエの優しさに触れたことをきっかけに、その夢を叶えるためにリーリエの手持ちに加わる事になった。

冷静でそのクールな性格もあつてそんなに感情を表へど出したりしないので、最初はシロン達と仲良く出来るか心配していたが、カノンやサトルのポケモン達との特訓に付き合つてあげたり、問題が起こると真つ先に仲間を助けようと前へと出たりと、仲間のためなら身を呈して闘う。その様は他のポケモン達からも信頼されている。

だがリーリエ対して忠誠心が強いためか、その行き過ぎた行動は時にはリーリエも困らせたりと度々騒動を起こす引き金を引いてしまふ事もある。

コイキング ↓ ギャラドス

タイプ みず・ひこう

性別 ♂

性格 ゆうかん

特性 いかく

技構成

【たいあたり】【かみつく】【アクアテール】【りゅうのいかり】

旅の途中で傷だらけに倒れていた所をサトルとカノンが発見して、傷の手当てをしたが出会いの始まり。通りすがりのトレーナーからは弱いポケモンというレッテルを貼られて、全く相手にされない事が悔しくて、傷だらけになりながらも特訓しようとするなど無茶を繰り返したりする。その行動はよく水辺で一緒にいたブイゼルにも止められていた。ロケット団との戦いの後、頑張り屋で勇敢に戦う姿に目を光らせたリーリエからの誘いをきっかけに手持ちに加わる事となった。

数々のバトルの中ではリーリエの起点にもすぐに応えてくれたり、うずまきカップでは自分よりも大きな体を持つミロカロスを倒すなどとその強さは本物である。自分を信じてくれるリーリエのためならどんな相手であろうと戦う。その強靱な意志はギャラドスへと進化した今でも変わらない。

ズルズキン

タイプ あく・かくとう

性別 ♂

性格 いじっぱり

特性 じしんかじょう

技構成

【からてチョップ】【とびひざげり】【あくのはどう】【もろはのずつき】  
リーリエに出会う前は多くのズルツク達を引き連れる親玉であり、

ピイヤピツピとオツキミ山に生息する他の野生のポケモン達を追い出してはオツキミ山を占拠していた。ジュンサーから捕獲の依頼を受けた多くのトレーナー達を追い払う程の実力を持ち、そのカリスマ性はズルツグ達を平伏させていた。

手持ちに加わった後は主人であるリーリエに対して心を開くこともなく指示をも聞こうともしない。しかしズルズキンといつか心を通わせられる日が来る事を信じているリーリエの純粋な気持ちにはたまに気を向ける事もある。デイグダの洞窟では敵の攻撃からリーリエを守った事もあり、主人であるリーリエを完全に信用していないわけではないみたいだ。

そんなある日、ロケット団に捕まった自分を守る姿やシロン達に向ける優しさに気づくことが出来た事により信頼を寄せる事が出来た。イワヤマトンネルで出逢った四天王のシバとのバトルをきっかけに晴れて本当のパートナーになる事が出来た。

ヒノアラシ

タイプ ほのお

性別 ♂

性格 すなお

特性 もうか

技構成

【かえんほうしゃ】【ニトロチャージ】【スピードスター】【えんまく】  
旅の途中で衰弱していた所を助けたのが出会いのきっかけ。後にヒノアラシを捨てたトレーナーのスワマとのバトルで共闘をしたことにより、自分に対し真っ直ぐに接してくれるリーリエに付いて行く事を決めた。

バトルでは【ニトロチャージ】で加速したり【えんまく】で目眩ましなど、色んなスタイル展開して行く。相手の実力に圧倒されて不安になる事もあるが、リーリエからのエールがあれば背中を吹き出しては気合を入れ直す。

ゼニガメ

タイプ みず

性別 ♀

性格 さみしがり

特性 げきりゆう

技構成

【みずてっぼう】【アクアジェット】【しろいきり】【こうそくスピン】  
サトシのゼニガメが団長を務めるゼニガメ消防団の団員であった。  
手持ちじゃない時からリーリエや他のポケモン達と親しい愛柄でも  
あり、うずまきカップではリーリエとは息の合ったバトルを行っ  
た。別れ際、サトシのゼニガメに背中に押されて貰った事により正式  
にリーリエの手持ちへと加入した。消防団仕込みで鍛えられたその  
目は暗闇の中であると砂煙が舞う中であろうと確実に相手の姿を捕  
らえる事ができる。

ヒトツキ

タイプ はがね・ゴースト

性別 ♂

性格 おくびよう

特性 ノーガード

技構成

【れんぞくぎり】【かげうち】【きんぞくおん】【おいうち】

ポケモンタワーに向かう途中で出会った。性格はかなりの臆病で  
あり、リーリエのリュックやモンスターボールの中へとすぐに逃げ込  
んでしまう。リーリエの手持ちに入ったのもデントの叫び声に驚い  
てリュックサックの中へと逃げ込んだ際にモンスターボールの開閉  
スイッチに触れてしまった事がきっかけである。

## 第一章

### 第一話 新たな物語

新たな一日を告げるかのようにゆつくりと朝日が昇る。

それと同時に一人の少女が海を眺めていた。白を基準としたシャツとスカート。腰まで長くのびた金髪をポニーテールに纏めた少女はゆつくりと照らされた朝日の光を浴びていた。船は故郷であるアローラ地方を離れ、まもなくカントー地方へ上陸しようとしている。

「お嬢様！ その格好ですと肌寒いはず。まだ早朝まもないのでありますから」

ロフトから一人の使用人が慌てて上着を持ち、あがってきた。

「大丈夫ですわ。ジェームズ！ このぐらいなんともありません。ん。」

ちょうど太陽の光が当たって暖かいですもの」

そう彼女はガッツポーズを取りながら笑顔でかえした。

「ジェームズ。お母様の具合はどうでしたか」

「御安心を、これといってなんの異変もありません」

「そうですか。よかったです」

「カントー地方へ上陸しましたら、すぐに車を手配します。手配次第マサキ様の元へすぐに向かいましょう」

「はい！」

そう少女がカントー地方へやってきた理由はウルトラビーストの神経毒によって衰弱された母を助けるためである。

完全に回復するまでにいたらないため、過去にポケモンと融合してしまった前例があるマサキという人物を訪ねれば何か分かるかもしれない。そのため彼女は使用人のジェームズと一緒にカントー地方へとやってきたのである。

「これで奥様の体調がよくなればいいのですが・・・」

「大丈夫よジェームズ。きっとよくなるわよ。絶対に」



「そうですね。そうでございませぬ！」

お嬢様を慰めるべきが逆に慰められてしまった。トレーナーズスクールやエーテル財団の事件を通して頼もしくなられた姿をみて、ジェームズは少女の成長を改めて感じた。

【ピンポンパンポーン】

その直後、アナウンスが鳴り響いた。上空ではキャモメの群れが船と同じ進行方向に飛んでいた。その先に見えてきたのは

【御来場のみなさま、長旅お疲れ様でした。まもなくカントー地方へ上陸いたします。お忘れ物なき様、ご上陸の準備をお願いいたします。】

見えてきたカントー地方。ジェームズは一足さきに上陸準備のためロフトへと戻って行った。

「あれがカントー地方。」

すると少女は一つのモンスターボールを取り出し、その開閉スイッチを開いた。中から出てきたのはトレーナーズ・スクールで卵から孵化させ大切に育ててきたポケモン。アローラ地方の環境の変化で氷タイプに分類されたポケモンロコンであった。少女はロコンを抱え、もうすぐあの地に足を踏み入れようとなるカントー地方を見つめた。

「ロコン。あそこに見えますのがカントー地方。サトシとピカチュウの故郷です。」

波風にあたりながらロコンも少女と同じようにカントー地方を見つめた。少女の名前はリーリエ。新たな大地 新たな出会い それと同時に少女の新たな物語も始まろうとしていた。

## 第二話 マサキを訪ねて

クチバシテイ。カントー地方の港町であり地方からやってきた観光客は必ずここを訪れる。もちろん地方のトレーナーもだ。そのためカントーのトレーナーは待ち構えてはバトルを申し込んでくるので港町の外れのほうにはいくつものバトルフィールドが設備されている。いま、まさにバトルの真つ最中だ。

「ゲンガー　！『シャドーボール』!!?」

「ニドリーノ！かわして『どくづき』だ!!?」

アローラ地方でもポケモンバトルはもちろんあるが、やはり他方に生息しているポケモンのバトルは自然とみてしまう。特にニドリーノはアローラには生息していないポケモンなためリーリエもついつい目をやってしまう。バトルの申し込みを恐れロコンは一度モンスターボールにしまっている。リーリエもバトルの経験はアローラにいた頃、マオ達と遊び感覚でやってみただけで公式での試合経験はない。

友人以外の人とのバトルはやつとことがないのだ。

「お嬢様！お待たせしました」

クチバシテイにあるレンタカーを借りてきたジェームズは後部座席にリーリエの母であるルザミーネを寝かせ、リーリエも助手席へと乗った。

「それでジェームズ。マサキさんのお宅はわかりましたか」

「大丈夫です。どうやらハナダシテイの岬に住んでいらつしやると聞いてきました。それでは行きますよ」

車はクチバシテイを後にしてハナダシテイへと向かった。

クチバシテイからはそんなに離れていないためものの30分ぐらいでハナダシテイへと到着した。そこからハナダの岬にある一軒家がポケモンボックス管理人マサキの自宅である。

「さあ、つきまたぞよ。お嬢様」

「はい。ありがとうジェームズ」

車から降りたりリーリエはすぐにマサキの自宅のインターホンを鳴らした。

「こんにちは。マサキさんはご在宅でしょうか。アローラ地方というところから来ました。リーリエと申します。マサキさんいますか」すると、ドアが開き茶髪の青年が顔を出した。

「アローラ地方とはまたそないな遠いところから わいになんの用得っか？」

関西弁を喋る青年 どうやらこの人がマサキさんらしい。

「ボックス管理の不具合なら任せておき。この天才発明家マサキさんの手にかかれれば朝飯前や！」

「あのすいません。そのことではないのです」

「ん？ それではない？」

「はい。お話を聞いて下さいますせんか」

リーリエとジエームズはルザミーネをベッドに寝かせ、マサキに事情を説明した。

「なるほどな。たしかにわいはコラツタというポケモンとそんないな経験をしたことはあんやけど。あれは自分の機械による不具合やったからすんなり対処できたんやわ」

「やっぱり、ダメか。そうリーリエが肩を落としたとき」

「せやけど、調べてみればなんとかなる気はするかもしれへん」

「マサキ様。それを言いますと？」

ジエームズの疑問にマサキはこう答えた。

「世の中にはポケモン研究者の理論を覆すポケモンはまだ存在するんや。直接脳裏に語りかけてくるテレパシーを持ったポケモンもおれば、まだ確認されたことのない進化を遂げるポケモンもおる。あんさん達とこの出身であるアローラもそうや。リージョンフォームや乙技やって最近になって知った人もいるぐらいや」

「理論を覆す……」

リーリエ自身もそう感じたこともあった。カントーからやってきた友人サトシもそうだ。相性をひっくり返すバトルスタイルやまだ

野生のポケモンと普通に心を通わす不思議な魅力。また、エーテル財団との戦いにおいては途中で再開を果たしたゲッコウガとはメガ進化とは全く違う進化、キズナ現象を放っていた。サトシと出会ったことで、真実は本に記されたこと全てではないとリーリエはそう思うようになったのだ。

「せやから、そのウルトラビーストというんか。ポケモンでもなんでもないそいつらことやって、ちゃんと調べたことも無いからルザミーネさんの治療法が見つからんやろ。せやったら、全身全霊をかけて調べていけばその治療法やつて見つかるかもしれへんしな。任せとおき！他の研究者にも当たって調べみるわ。」

「マサキさん！ありがとうございます!!!」

リーリエは嬉しさのあまりマサキの両手を握った。突然のことにマサキの顔はドテガバシの嘴のように真っ赤になった。

「え…ええって！せっかくアローラから来てくれたんやもん。」

わいやってそのウルトラビーストって奴らにも興味あるしな」

照れ臭そうに言うマサキを前に改めてお礼を言うリーリエとジエームズ。出口の見えない迷路からようやく光が差し込んできたようだ。

### 第三話 新たな目標

「そうか。ありがとなりリーリエ。ジエームズさんも」

「もう、当然じゃありませんか兄様。助け合うのが家族ですもの」

その日の夜、リーリエはアローラにいるグラジオに今日のことを報告するために電話を掛けていた。現在グラジオはエーテル財団の復興のため一時的に代表代理を務めることになった。また、国際警察とともに散り散りになったウルトラビーストの保護も行なった。おかげで、一連の事件によって失われたエーテル財団の信頼は取り戻しつつある。保護施設も新たに建設してウルトラビーストだけでなくこの事件で傷を負ったポケモンの保護も行なっている。

「お坊ちゃま ありがとうございます。奥様の会社をここまで立て直して下さいまして」

「俺のほうこそジエームズさんには感謝しきれないですよ。リーリエと一緒にカントーまでついて行ってもらってありがとうございます」

バラバラになった家族がようやく一つになった。リーリエは自然と涙が溢れて来た。

「おいおい頼もしくなったと思いきや泣き虫リーリエに逆戻りか？」

「もうやめて下さいよ。兄様！」

そう言ってからかったグラジオ本人も久しぶりに兄妹らしい会話ができただのか、少し鼻声になっている。二人が幼少時代から屋敷に使っていたジエームズもこの光景を懐かしく思ったのか。二人よりも大粒の涙を流していた。そんなジエームズをみたリーリエとグラジオの笑い声が少しの間だけ続いた

「母さんの件はマサキさんに任せるとしてリーリエはこれからどうするつもりだ？」

「私も暫くカントーの方にお母様の看病を続けようと思っっています。お母様を残してアローラに帰るのもなんですし」

リーリエはルザミーネの看病に専念すると決めていたがグラジオ

はある提案をリーリエに伝えた。

「リーリエ。このカントー地方旅してみる気はないか？」

「えっ？」

突然のグラジオオからの一言にリーリエは驚いた。

「リーリエには母さんのことや俺のことですいません。辛い思いをさせちゃった。ポケモンにも触れなくなるほどの大きな心の傷もつけてしまった。母さんや俺の身勝手さがお前から自由を奪った」

「そんな、兄様！ 私そんなこと何一つ思っただけじゃないです」

「お前がそう思っていないからお前を悲しませたのは確かだ。だから、リーリエにはいままで背負わせてしまった枷を全部外してもらって、何事にも囚われず自分が思うがままに羽ばたいて欲しいと思うんだ。新たなこの地で！新たな自分と共に！」

旅 一人のポケモントレーナーとして..

トレーナーズスクールでもサトシからいままでの旅の話などを聞いたりもして少し興味を持つようにはなっていた。カントー地方を訪れたときも一瞬だけ高揚感が湧き上がっていたのも事実だ。できることならやってみたい。だけど、体調が安定してきているからといってまだ寝たきりの母を置いてしまっているのか。その罪悪感もがリーリエを悩ませてしまった。

そんなリーリエの様子をみたジエームズは優しくリーリエの肩に手を置いた。

「お嬢様、わたくしはお坊ちやまの提案には賛成でございます。奥様を残して行くのに対して躊躇う気持ちは分かります。ですがお嬢様には誰かのために行動を移すだけでなく、今度は自分自身のためのも歩いて欲しいのもわたくしジエームズの願いでもあります。卵からロコンが生まれ、ロコンを初めて抱いたお嬢様を見てわたくしはとても嬉しかったでございます。お嬢様が再びポケモンにふれあう楽しさを取り戻してくれたように、自分らしさを取り戻して頂きたいのです。」

「ジエームズ..」

「わいも賛成やな！」

声のほうに振り返ると、マサキが立っていた。

「リーリエはん！この際やってみたらええやないか？なーにお母さんのことは任せておき！そんで持って目を覚ましたお母さんに自分の成長した姿を見せたりや！」

「マサキさん」

「……。」

「わかりました。私やってみます！」

リーリエはカントー地方を旅することに決めた。その決心した彼女にマサキはあることを提案した。

「せやったら、ポケモンリーグを目標にジム巡りをしてみたらどうやろう？」

「ジム？」

「アローラという島巡りみたいなもんだよ。各ジムにいるジムリーダーとの勝負に勝って勝者の証であるジムバッチを八つ集めるんだ。それがポケモンリーグの出場資格になるんだ」

「ポケモンリーグ……」

その話を聞いたリーリエの決断は早かった。

「私、そのジム巡りに挑戦してみます！そして優勝してお母様をびつくりさせるのです！」

いきなりの優勝宣言をはなつたリーリエに三人は笑いだした。

「いきなり優勝宣言ってマジかよリーリエ！」

「これはとんでもない新人が現れたみたいやな！」

「えええ！そんなに笑うことですか！」

「よいではありませんか。目標はつねに高く持つというのは」

「ジエームズまでえええ!!？」

顔を真っ赤にしたリーリエをいのように三人の笑い声が収まる気配はない。それと同時にこの三人を見返してやりたいと強く思うようになったリーリエであった。



## 第四話 始まりの町へ

翌朝、リーリエはマサキの自宅で目が覚めた。ポケモンセンターに泊まろうと思っていたが、グラジオとの連絡が終えた頃はもう夜10時をまわっていたので仮眠室を貸してもらったことになった。たまに研究仲間と徹夜ごしになることもあり仮眠室だけでも6部屋あるのは驚きだ。

「おはようございます。お母様」

一緒のベッドで眠っていたルザミーネに朝の挨拶を交わしながら軽く頬にキスをした。このまま眠れる森の美女のお話通りに目が覚めてくれたらいいのに。そんなことを思いながら、まだ重たい瞼を擦りながら洗面所へと向かった。

着替えをすませ、リビングに向かうとすでにジエームズが朝食の用意をしていた。昨日のうちに聞いたリーリエとマサキのリクエスト通り、私にはパンやコーンスープやスクランブルエッグといった洋食メニュー。マサキにはご飯と味噌汁と卵焼きといった和食メニューが置かれた。ジエームズはその人の好みに合わせて多種多様な料理は作れるようにしているため彼が作れない料理はない。もちろん味の方も一流だ。

「おはようございます。ロコン」

モンスタールボールから出てきたロコンはリーリエを見るなりすぐに顔を舐めてきた。これがロコンなりの朝の挨拶であるらしい。ロコンの食事はリーリエが担当している。リーリエはそのポケモンの好みに合わせてポケモンフーズをブレンドしているのだ。朝食のにおいにつられてようやく起きてきたマサキとテーブルを並べて朝食をとった。

「うーん。ほんま美味しいですよ。ジエームズさん」

「ほほっ。お口に合って何よりでございます」

「ジエームズの料理は世界一なのですよ」

「どのようなご注文も申された通りに用意する。それがわたくし使用人としての使命であるのでございます」

朝食を終え、ジエームズが用意した紅茶を飲みながらマサキは二人にこれからのことを話した。

「ルザミーネさんの件についてはオーキド博士にも聞いてみようと思っくんや」

「オーキド博士ですか」

「せや！何よりもオーキド博士はポケモン研究家の中でも世界的権威でもあるし、オーキド博士なら力になってくれるかもしれへん。せやからいまからルザミーネさんも連れてマサラタウンに行こうと思っつとるんやけど、それでええか」

「私どもからするとオーキド博士が力を貸して下さいるのであれば是非、お願いしたいです」

「私もです！」

「決まりや！ちよつと待つてください。いまからオーキド博士にアポ取ってきますわ」

そう言っつて、急いでマサキはオーキド博士に連絡を取りに行った。マサラタウン、それを聞いたリーリエはある友人の姿を思い浮かべた。それはジエームズも一緒のようだ。

「お嬢様。マサラタウンと言いますと、サトシ様のご出身では」

「ええ！、そうですわ、ジエームズ。久しぶりにお会いできるかもしれません。ねえ、ロコン」

そう言っつと、ロコンも大きく尻尾を振っつてる。ロコン自身もピカチュウに会いたたいようだ。その後、オーキド博士と連絡を取ったマサキが戻り、ルザミーネを車椅子に乗せたうえマサラタウンへと出発した。

マサラタウンへはクチバシティにある電車から乗れば行けるよう  
で

およそ40分の乗車で目的地マサラタウンへと到着した。とても

空気が澄んだ町であり、ロコンもまだ見ぬ町だというのにはしやぎ回っている。そのぐらい人もポケモンも過ごしやすい町であるのだ。その町に建っている大きな風車がある家がオーキド博士の研究所だ。

「博士。お忙しいなかすみません」

「おおーマサキか。なーに大丈夫じゃよ」

出迎えてくれたのは、トレーナーズスクールのオーキド校長の従兄弟であり、カントー地方のポケモン研究家オーキド博士である。

ジェームズは白手袋を外すとオーキド博士と握手を交わした。

「アローラ地方から参りました。ジェームズと申します。この度は無理言ったお願いをお受け頂きましたありがとうございます。ごさいます」

「さぞよ大変だったでしょう。わしもできる限り誠意を尽くしていきます。さあ、中へ」

オーキド博士の招きによりリーリエ達は研究所へと入っていった。リビングにはオーキド博士の助手のケンジとオーキド博士のパートナー

ロトムがいた。すぐにルザミーネをマサキとケンジとでベッドに寝かせたあと、ウルトラビーストのことなどオーキド博士に説明をした。

「分かりました。まずはそのウルトラビーストの生態について調べないといけません」

「ええ、それが一応保護されているウルトラビーストはいるのですが

興奮状態が収まらず、調べようにも手に負えない状態なのです」

「そうですか。でしたらそのウルトラビーストがこっちの世界に通ってきたというウルトラホールについて、ククイ博士を通してそのデータの解読から入ってみましょう。そこからでもウルトラビーストの力の生態エネルギーを測ることもできると思えますしな」

オーキド博士のおかげでやるべきことがわかり、リーリエは少し安心した。そんなリーリエにオーキド博士は

「リーリエちゃん安心してください。お母さんは必ず助けてみせる

からね」

その言葉を聞いたリーリエは自然と涙が溢れてきた。このままお母さんが二度と起きないかもしれない不安から解放され、もう一度オーキド博士に頭を下げた。それを見たロコンも慰めるかのようにリーリエの足に自分の体をこすりつけて来た。

「ほお　これがアローラ地方に生息しておる氷タイプのロコンなのじゃな。資料でみたことがあるが実物をみたのは初めてじゃ。アローラへ行くサトシに預けた卵はこっちでいう炎タイプのロコンじゃからの」

それを聞いたリーリエはおもわず

「そうですわ博士！　サトシはいまこちらにいますのでしょうか」

「あつ…サトシか。　それがまた修行の旅に出てしまったのじゃ」

「えっ…　　そうなのですか」

「アローラで起こった事件でアローラリーグの開催時が伸びてしまったから、それに向けてポケモン達を調整すると言って武者修行に出たのじゃ。　じゃが、ジム巡りをするわけでもないから定期的にはマサラタウンには帰ってくるんじゃないが。　昨日また手持ちを変えて行ってしまったんじゃないよ」

「そうでしたか」  
久しぶりにサトシと再会できると思ったので、がっくり肩を落としました。

「せや博士！　リーリエはん。　ここカントーのポケモンリーグに挑戦するんやわ」

「ほお！　　そうか　　そうか」

「はい！　お母様が目が覚めた時に強くなった私は見て頂きたいと思ひまして、それに自分を高めていきたいとも思ひまして」

「そういうことなら！　　おいケンジ！　　リーリエちゃんにポケモン図鑑と新人用のポケモンを渡してあげてくれないか」

ケンジと呼ばれた青年はモンスターボールとポケモン図鑑を持ってくると

「博士、忘れていませんか。今日新人トレーナーが来る日ですよ」  
「あつ！そうであったか」

その後、インターホンが研究所に鳴り響いた。どうやら新人トレーナーがポケモンを貰いにきたようだ。

## 第五話 二人の訪問者

「こんにちは!!? ポケモンくださいー!!!」

「そんなに大声で言わなくてもいいよ。カノン」

研究所に訪れたのは薄紫色のセミロングヘアをした天真爛漫な笑顔を向けている少女とそれとは正反対で帽子を深々と被り少し長めの黒髪をしたおとなしめの少年の二人だった。どちらもリーリエと同じ年ぐらいみたいだ。そのうち薄紫色の髪を持つ少女はリーリエのロコンを見ては目を輝かせ、一目散にロコンの元へ駆け寄った。

「なにになに!この子あなたのロコン? すごい!!? 白いロコンなんて初めて見た! 色違いなのかな」

その少女の明るさを前にリーリエは押されてしまい、軽くパニック状態になってしまった。そんなリーリエを見かねた少年は慌てて彼女を止めに入った。

「落ち着いてカノン。その女の子もロコンも困ってるよ」

「えっ?」

その少年の一声で少女は我に返った。

「それにそのロコンは色違いでもなんでもないよ。たしかアローラ地方というところで環境の変化によって突然変異を遂げたポケモンだよ。ちなみにそれをリージョンフォームと言ってロコンの場合は炎から氷タイプに変わるんだ」

「へえ〜そうなんだ。よく知ってるねサトル!」

「ええ... いや... それ授業で教わったじゃん」

あれ? そうだっけと顔をするカノンと言った少女とそれを見て呆れてしまったサトルという少年のやりとりにおもわずリーリエは笑ってしまった。

「あれれ〜そんなに笑わなくてもいいんじゃないかな?」

「ごめんなさい。ついっ」

笑っているリーリエをからかうかのように覗き込んだカノンはさらに質問をぶつけてきた。

「それじゃ、あなたアローラから来たの?」

「はい。一身上の都合により こちらの方に」

「そうなんだ。じゃあ、お互いに初めてどうしだね！」

人見知りを一切しないカノンはリーリエの手を握ってよろしくの挨拶を交わした。リーリエもどこことなくマオと性格が似ているカノンに不思議と親近感が湧いてきた。

「よーし！それじゃ私の友達も紹介するね♪」

そう言うと彼女はリーリエにウインクをした後、一つのモンスターボールの開閉スイッチを開いた。中から飛び出して来たのは炎タイプの

こぎるポケモン ヒコザルだ。

「おおっ！ヒコザルか。シンオウ地方の初心者用ポケモンの一体じゃな」

「えっ？シンオウ地方」

オーキド博士の言葉にリーリエは疑問に思った。ヒコザルはカントーのポケモンではない。ましてや野生では滅多に出現しないシンオウ地方のポケモンを彼女はなぜ持っているのか。すぐさまカノンはリーリエに説明した。

「私ももとはシンオウ出身なんだ！小さい時たまにナナカマド博士の研究所に遊びに行ったりしてね！その時にこのヒコザルと仲良くなったんだよね！ ね〜ヒコザル♪」

そう語りかけてきたカノンにヒコザルも元気よく応答した。見てもわかるぐらい二人はいいコンビである。ヒコザルを抱きかかえたカノンはサトルの方を見た。

「はいはい！ サトルくん！なにヤドンみたいにポケ〜つとしているのかな？ はやくサトルの相棒も出して！ 出してー！」

「あ… ああ！ わかつてるよ」

サトルも自分のボールを取り出した。そのボールはモンスターボールではなく、なつき度マックスの効果を持たされるフレンドボールだった。そしてそのフレンドボールの開閉スイッチが押され中から飛び出して来たのはカントーでおなじみの電気タイプのねずみポケモン

ピカチュウだ。元気よく飛び出したピカチュウはすぐにサトルの肩の上に登ってきた。その光景をみてリーリエはおもわず微笑んだ。

「あれ？ リーリエどうしたの？ サトルの顔がやばかった？」

「カノン。それはどうやばいの？」

「いえ、私の友人にもピカチュウを相棒にしている人がいます。サトシって言うんですけど、そのピカチュウもサトルさんのピカチュウと同じですぐに肩に乗ろうとするのですよ」

そう言ったリーリエに二人は目が点となった。

「あの… どうなされました？」

すぐさまカノンは口を開いた。

「リーリエ。サトシと友達なの？」

「ええ！ そうですけど… わああ!!？」

すぐさまカノンは先制技のねこだましを繰り出したかのようにすぐさまリーリエの両肩を掴んだ。あまりのことにリーリエは目を丸くして怯んでしまった。そんなリーリエにおかまいなしにカノンは同じことを繰り返してくる。

「すごい！リーリエって サトシの友達なの！」

「えっ… ええ、そうですけど。それって一体」

「だって！ カロスリーグでは準優勝者！バトルフロンティア制覇も成し遂げ、オレンジ諸島のポケモンリーグでは優勝！その他の大会でも高実績を讃えてるんだよ！しかもまだ私たちよりも六つぐらい下の時からだよ！このマサラタウンのヒーローみたいな人なんだから！」

「やっぱり、サトシはすごい方なのですね」

「すごいってもんじゃないよ。マサラタウンのトレーナーズスクールの卒業生はみんな憧れてるんだよ！ だからサトルだって最初の相棒にピカチュウを選んだぐらいだしね」

「なっ!!？ いいだろ！ そんなこと言わなくても！」

サトルは恥ずかしくなりさらに深々と帽子を被ってしまった。

たしかに初めてポケモンリーグに出場したのは10歳のとき。

大人の人でも勝ち進むのが難しい本戦まで勝ち進んでしまうなん



てそう考えてみればすごいことだ。そんなサトシの話で盛り上がっているなかそろそろ本題へ入ろうといわんばかりにオーキド博士はリーリエ達を呼び止めた。

「おほん！ サトシの話で盛り上がっているとところで悪いがそろそろよろしいかのお？」

オーキド博士がそう言うのとケンジに続いてカントーの初心者用ポケモンが姿を現した。

## 第六話 忍び寄る【R】

時代の流れと同時に、ポケモン制度も大きく変わっていった。

まず一つ目はポケモントレーナーの資格についてだ。サトシが初めてトレーナーとして旅立つ頃は10歳からトレーナーになる権利を与えられていたが、他方からの野生ポケモンの加入のこともあってポケモンに対する知識や戦闘経験が身についてない状態で旅をさせることは危険行為と判断したポケモン協会は新たに

### 【ポケモン義務教育制度】

をつくることにした。これは全ての子供達が6歳になると、トレーナーになるにならないに関わらずトレーナーズスクールでポケモンの生態や技やタイプや特性。さらには戦い方や捕獲の仕方を学ばせなければならぬ教育のことである。そして9年間の義務教育を受けた生徒はトレーナーズスクールを卒業すると同時にポケモン取り扱い免許証となるトレーナーカードが発行されるのである。そしてようやくポケモントレーナーになる許可を得ることができるようだ。

二つ目は手持ちポケモンに関してのことだ。新人トレーナーが立つ際に所持するポケモンは最低でも二体所持しなければならないことも義務つけられた。それは途中で所持ポケモンが戦闘不能となり戦う手段がなくなつた状態で、野生ポケモンに襲われる危険性を無くすためである。連れていくポケモンもある程度の戦闘経験を積んでいるポケモンと決められているので、トレーナーズスクールでは講義だけでなく実際にポケモンバトルをする授業も実施されている。もちろん新人用に渡されるポケモン達もポケモンバトルの訓練を受けたうえで新人トレーナーに渡すことになっている。こうして多くの新人トレーナーはトレーナーズスクールで一緒に学んだポケモンと各地方で渡される新人用ポケモンの二体を連れて旅に出ることが主となっている。

新人トレーナー達が安心して旅立つてもらうために、こうして改変されたのであった。

「うわああー可愛い!!!」

現れた新人用ポケモンにカノンは大はしやぎである。ポケモン図鑑を持ってきたケンジと一体のフシギダネに連れられて、カントーの新人用ポケモンの二体、フシギダネとヒトカゲが現れた。

あれ？ 二体？ と思ったリーリエはオーキド博士に聞いてみた。

「オーキド博士。たしかカントーの新人用ポケモンはあと水タイプのゼニガメもいると思うのですが…」

そう言うと博士は一瞬だけ困った顔を見せた。新人トレーナーとなるカノンとサトルの二人も事情を察したか。少し締まりのなくなった表情をしている。

「実はもう。カノンちゃんとサトルくんがくる前にもう一人の新人トレーナーが先に研究所を訪れたんじや。それで早く旅に出たいと言うから先に選ばしてしまったのじや。」

オーキド博士の弱々しい発言からして、かなり強引なトレーナーであったことはたしかだとリーリエは思った。

「まあ、あいつはスクールの時からそうだったもんね」

「カノンさん。お知り合いなのですか？」

「うん！同じクラスと同級生だよ。本当はそいつとサトルと三人でオーキド博士の研究所に行く予定だったんだけど」

「待っていられなくなって、僕たちに断りもなく先にポケモンを貰いに行つて、先に旅にでてしまったところかな」

アハハと愛想笑いをするカノンと困り果てたサトルにつられてリーリエも愛想笑いで返した。

「まあ、そんなことよりポケモン選ぼつと！ほらサトルはやく！前に来なつて！」

「うん。待つてよ」

「じゃあ、私はこの子！」

「てっ!!？ 早くない」

サトルが二体の前に行こうとした直後、カノンはあるポケモンを抱えて君に決めた！とコールした。選んだポケモンはフシギダネだ。

「私はこの子にするから。サトルはヒトカゲで決まりダネ！」

当然、カノンがフシギダネを選んだとなると自動的にサトルはヒトカゲを手にすることになる。

「…まあ、カノンはもうすでに炎タイプのヒコザルを所持しているから。同じ炎タイプのヒトカゲを選んでしまうとパーティのバランスが悪いもんね。わかった。僕はヒトカゲにするよ」

すると、ヒトカゲは口から小さな火の玉をサトルの前に放射した。それに驚いたサトルは後ずさりした際にバランスを崩して、しりもちをついてしまった。それをみたリーリエとカノンは二人一緒におもわず笑ってしまった。

「いきなりなんだよ。ヒトカゲ」

「あはは…そりゃ、ついでもみたいな感じで選ばれたから怒っちゃったんじゃない！」

「あはは… そうかもしれませんね！」

笑いすぎて涙が少し滲んできたリーリエとカノンに一体のフシギダネがお得意のツルを使ってハンカチを二人の前に差し出した。リーリエとカノンはお礼を言つてフシギダネからハンカチを受け取った。その紳士的なフシギダネを見たリーリエは新人用のポケモンではないことがすぐに分かった。

「このフシギダネはオーキド博士のポケモンなのですか？」

すると、オーキド博士はその質問に喜んで答えた。

「いや、このフシギダネはサトシのポケモンじゃよ」

「えっ！… そうなのですか！」

そのフシギダネはサトシがカントー地方での旅の途中に出会ったポケモンであり、いままでゲットしたポケモンの中でも長い付き合いがあるポケモンだ。とても面倒みがよく、今は研究所のポケモンたちをまとめるリーダー的な役割を行なっている。新人用のポケモン達の面倒も見ているのもこのフシギダネだ。

「初めまして、フシギダネ。私はリーリエ！」

サトシの友達です。こっちは私のパートナーのロコンです。」

リーリエの自己紹介と一緒にロコンもフシギダネに挨拶をした。フシギダネも二本のつるを伸ばしてリーリエの手とロコンの前足に

つるを巻きつけた。これがフシギダネなりの握手だそうだ。

カノンとサトルのポケモン選びも終え、研究所のみんなはジエームズが用意してくれた紅茶を飲みながらソファアに腰をおろしていた。

「リーリエもカントー地方を旅するんだね」

「はい！ポケモンジムを巡ってポケモンリーグに挑戦しようと思っ  
ています」

「僕たちと同じだね。僕とカノンもジムを回ってバッチをゲットして、ポケモンリーグに出場するつもりでいるんだ」

「するつもりじゃなくて、絶対に出るの！」

ふふっ それじゃあ、私たちはライバルってことになるね」

「そうですね。まずは一緒にポケモンリーグに出れるように頑張りましょう」

「うん！ そうだね！ よっおおし！」

お互いにかんばりーリエ！だね♪」

「が… かんば… リーリエ ですか？」

「うん！ かんばりーリエ！」

「もうっ!!? 何を言ってるんですか！カノンさん」

「わあお！今度はおこりーリエだ！可愛い〜 怒ってる顔も可愛いよりーリエ！」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるリーリエ。それを見てはさらにか  
らかい続けるカノン。その様子をみてやれやれと思いつつ紅茶を楽  
しんでいるサトル。これから始まろうとする冒険に胸を弾ませてい  
る三人の新人トレーナーの図がそこにあった。

「ほほっ。これはみんな良きライバルが出たようじゃの」

この光景を微笑ましくみていたオーキド博士は紅茶を飲みながら  
言った。

「ライバル 同じ目標を持つもの同士」

その言葉がリーリエのやる気を更に募らせていった。カノンもサ  
トルもきつと同じ気持ちでいるであろう。

その直後、三人の情熱の炎を吹き飛ばすかのように研究所の庭のほ  
うから大きな地響きが鳴り響いた。

その振動は研究所へと伝わり、持っていた紅茶がティーカップから溢れ落ちてしまった。かなりの衝撃であったことがわかる。

「何事でございますか!」

「なんや なんや!!! 何が起こったんや」

「博士!これは一体」

「分からん。とにかく行ってみよう」

博士の言葉を合図にみんなは研究所の中庭へと走りだした。

地響きが鳴った場所へ行ってみると、そこには円形型の大きなクレーターが出来ていた。大きさからみるとかなりの爆薬を投了されたのであろう。何者かの手によって。

「これは!これは!ポケモン研究家のオーキド博士どの お忙しい中失礼致しましたぞ」

リーリエたちの目の前にはおよそ15人ぐらいの黒の制服を身に纏った男女が立っていた。リーリエはその人達の制服に記されていた

【R】マークを見て、この人たちがどのような集団であるのか瞬時に理解した。トレーナーズスクール時代にも人間の言葉を話すニャースを連れた二人組とは何度も遭遇したことがあるからだ。

そうカントー地方のポケモンマフィア

ロケット団だ。団員たちはそれぞれモンスターボールを手にするとリーリエたちを威嚇してきた。

「悪いが、ロケット団のさらなる発展のためこの研究所にいるポケモンたちをすべて頂かせていただく。抵抗するのであればどうなるかわかってるだろうな」

他の団員たちも不敵な笑みを浮かべながらこちらを見下している。あの人数相手にどうすればいいのかと考えていたら、博士の助手を務めているケンジがリーリエたちの前に立ち、自分の腰のベルトに装着されたモンスターボールを取り出し博士の方を向いた。

「ここは僕がなんとか食い止めてみせます」

博士は子供達を安全な場所に避難させたあとジュンサーさんに連

絡して下さい」

「無茶じゃケンジ！あの人数では一人では対処できん」

「ですが、このままでは」

博士の言う通りだ。ケンジ一人であの人数を相手にするのは無茶である。しかし、このままでは解決策が見つからないのも事実だ。

「ですが、このまま固まっついてはどうすることも出来ません。ケンジ様のおっしやる通り、誰かがあの者たちを食い止めなければなりません」

そう言うと、ジエームズもモンスターボールを手に取りリーリエたちの前に立った。

「ジエームズー！」

「博士！ここはお任せ下さい！わたくしとケンジ様とでなんとか足止めます。早く」

二人の言葉にオーキド博士は止む得なく了承した。

「分かりました。お二人ともどうか無茶だけはせんように！」

「分かりました！」

「お嬢様たちのことよろしくお願いします」

「ジエームズ！無理はしないでください」

そう言葉を残しリーリエたちは研究所へと走り出した。

「ほう、どうやら やられてみねえとわかんないようだな」

ロケット団員たちは一斉にモンスターボールを解き放した。

「行きましょう ジエームズさん」

「では、参ります」

二人もモンスターボールを投げ入れた。

「頼むぞー！ハッサム」

「お願いしますぞー！ オドリドリ」

ケンジとジエームズを残し、リーリエたちは急いで研究所へと帰ってきた。だが、

「おっと！ジュンサーに応援を頼もうとしているけど」

「悪いが そうはさせない」

研究所の前には二人の男女が立ち塞がっていた。考えてみれば、任務を確実に遂行するためにあの団員たちをまとめている人物がいな  
いってのは不自然であった。見るからに先ほどの団員たちとは違う  
空気を漂わせている。

「なんなの！ あなたたちは!!？」

カノンの質問に答えるかのように その二人組は名乗りをあげて  
きた。

「何だかんだと聞かれたら」

「答えないのが普通だが」

「まあ 特別に答えてやろう」



## 第七話 研究所での決戦

カントー地方を拠点に持つ犯罪組織

【ロケット団】

ポケモンの力を利用した世界征服を目論み、カントーとジョウトを中心にポケモンの強奪や洗脳といった悪事を行っている。

最近では、さまざま地方のポケモン捕まえカントーに輸入しては、その戦力を伸ばしつつある。カントー地方に多くの他の地方のポケモンが住み着いてしまったのは、これも原因の一つとされている。

そしていま、オーキド研究所はロケット団の襲撃に遭っていた。

「地球の破壊を防ぐため」

「地球の平和を守るため」

「愛と誠実な悪を貫く」

「キュートでお茶目な敵役」

「ヤマト！」

「コサブロウ！」

「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

「シヨツキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

「なーんてな」

「ボツツー!!?」

自分たちの代名詞とも言える口上を終えたその二人組はヤマトとコサブロウ。ロケット団の中でもエリート候補であり、その実力はロケット団のボス サカキからも期待されている。

そのカリスマ性も多くの団員にも憧れており、このような作戦にも進んで協力をしてくれたりとても慕われている。

「まずはあんた達が持っているポケモン全て 私達に渡してもらおうか」

「博士。子供たちを傷つけて欲しくないなら、我々の言うことを聞いた方が身のためだぜ」

ロケット団の二人はゆっくりとリーリエ達の元へ歩いてきた。カノンもサトルも初めて目の前にした犯罪組織を前に恐怖が込み上げ

ていた。そんな二人の肩に手を置いたオーキド博士は優しく微笑みかけた。

「みんな。わしの後ろに隠れておるのじゃ」

博士はリーリエ達を後ろに下がらせて、モンスターボールを片手に戦闘準備に入った。フシギダネもロケット団の二人を睨みつけては威嚇している。

「悪いが、子供たちにも研究所のポケモンにも指一本触れさせはせぬぞ！」

「あら、逆ろうってんの？ だったら力づくで奪い取るまでよ！ いくわよ！ コサンジ!!？」

「おう！ 　って違う!!？ コサブロウだ!!!」

ヤマトとコサブロウもモンスターボールを取り出しポケモンを繰り出す。中から現れたのはダークポケモンのデルビルとさかだちポケモンのカポエラーだ。

「フシギダネ！ お前さんも力を貸してくれ！」

ゆけっ！ ロトム!!？」

オーキド博士も自身のポケモンであるロトムを繰り出し、フシギダネと共に戦いに挑む。

~~~~~

リーリエ達がヤマトとコサブロウに出くわした頃、ケンジとジェームズもロケット団員との戦いが繰り広げられていた。

「ハッサム ！ 【スピードスター】 !!？」

「オドリドリ！ 【めぎめるダンス】 !!？」

ケンジは、はさみポケモンのハッサム。ジェームズは、アローラ地方のメレメレ島の花の蜜によりぱちぱちスタイルとなったダンスポケモンのオドリドリを繰り出していた。

幸いにもロケット団員の手持ちポケモンは

コラツタやズバットやポチエナとそんなに能力値が高くないポケモンで一人一体ずつではあったが、流石に二人で十五人を相手にするのはそう楽ではなかった。やっと五体目を倒したところでケンジのハッサムは息を切らし始めていた。

「ハッサム！大丈夫か!!？」

ハッサム自身はまだ行けるとケンジの方を向いてうなづいてはいたが、ハッサムの体力はもう底を尽きかけていた。

ケンジのハッサムはストライクだった時にオレンジ諸島のマーコット島で出会った。野生だった頃、群のリーダーを長年務めていたポケモンだったため高齢で体力的に長時間戦うことが出来ないのだ。

それにケンジもこのロケット団員をまとめているリーダーらしき人物がいないことには疑問を持っていた。

万が一、この団員を倒したとしてもこの作戦を企だてたリーダーと残りの団員が研究所に向かっていているとしたら、他の手持ちポケモンは体力温存のためにとむやみに出すことが出来ないうでいた。だが、ケンジの考えが当たっているとしたら早くこの場を乗り切らないといけないのは確かだ。

「ケンジ様！...これを!!？」

押し立てるように見えるが、追い込まれているのは自分たちの方かもしれないと思ったケンジにジエームズはあるものをケンジに手渡した。受け取ったものを確かめたケンジはジエームズのやろうとしていることを理解し、ジエームズにうなづいた。

「それではいきます！」

ジエームズの掛け声と共にオドリドリは踊りの体勢をとった。

「オドリドリ【フラフラダンス】!!？」

オドリドリは優雅にダンスを始めると次々とポケモン達は混乱状態へと陥ってしまった。

【フラフラダンス】は周囲にいる全てのポケモンを混乱状態にする技である。もちろん、一緒に戦っているハッサムもこの技の対象であったがケンジはジエームズに渡されたものをハッサムに手渡した。

それは混乱状態を治すキーの実だ。受け取ったキーの実のおかげでハッサムは混乱状態にならずに済んだ。

「おいーてめーらしくりしろー!」

オドリドリはフラフラダンスで混乱状態になったロケット団員のポケモン達は目を回しており、真面に戦える状態ではなくなった。

「よし、ハッサムー!【つるぎのまい】だ!!?」

ハッサムは【つるぎのまい】で自身の攻撃力を上げた。すると、オドリドリもハッサムの【つるぎのまい】を真似ては自分の攻撃力を上げてきた。

「ほほっ、オドリドリの特性 “おどりこ” でございます。場にいるポケモンが踊り系の技を使用されますと、その直後に自分も使用することが出来るオドリドリ専用の特性でございます」

お互いに攻撃力が高まった状態。もうこの戦いの勝敗は決まったのも同然である。

「決めます。ハッサム!【メタルクロー】!!?」

「オドリドリ!【おうふくビンタ】!!?」

ハッサムは左からオドリドリは右から攻めるようにして攻撃を繰り出した。技を受けたロケット団員のポケモン達は次々と戦闘不能へとなっていく。彼らに戦う術はもうない。モンスターボールを戻した後、脱兎の如くその場を逃げ出した。

ケンジとジエームズの勝利である。

「やりましたな。ケンジ様!」

「はい!ですが、博士達が心配です。すぐに博士達の元へ向かいましょう」

二人は自分たちのポケモンをモンスターボールへ戻すと、急いで研究所へと向かった。

~~~~~

「デルビル！【かえんほうしゃ】！！？」

「カポエラー！【まわしげり】！！？」

「フシギダネ！【つるのムチ】！！？」

ロトム！【シャドーボール】！！？」

デルビルの【かえんほうしゃ】とロトムの【シャドーボール】がぶつかっては爆風が起こり、フシギダネの【つるのムチ】とカポエラーの【まわしげり】がぶつかる。

「デルビル！【かみくだく】！！？」

爆風によって視界を遮られてしまったロトムにデルビルの技【かみくだく】が決まってしまった。ゴーストタイプのロトムに悪タイプの技は効果は抜群。ロトムはそのまま戦闘不能となってしまった。

「ロトムよく頑張った！戻るんじゃ」

ロトムが倒されフシギダネ一体となってしまったオーキド博士。いくらサトシのポケモンだからといえ、二体を相手にするのは難しいしヤマトとコサブロウにはまだ別のポケモンも持っている可能性もある。状況は極めて困難であった。

「マサキさん。マサキさんは戦えないんですか？」

「すまない。わいはポケモンバトルどころかポケモンも持ってないんやわ」

オーキド博士の後ろでこの戦いを見守っているリーリエ達。ケンジとジェームズはまだ戻ってくる気配はない。このままオーキド博士一人に戦いを任せるのは危険すぎる。

「私、助けに行ってくる」

と、カノンはヒコザルが入ったボールを取り出しオーキド博士の加勢に向かおうとしていた。だがカノンが前に出ようとした時、カノンの腕をサトルは掴んだ。

「無茶だよ。相手はロケット団なんだよ。学校の授業とは意味が違うんだぞ」

「だからって、このまま指を啜えて見てるだけなの？あのままだったら、博士が負けちゃうよ」

「まだ、バトルの経験が浅い僕らが行ったところで返って足手まといになるだけだよ」

「だったら、このまま負けるのを待ってればいいの？サトルは自分の大切なポケモン達が取られてもいいんだ！」

「そうは言ってはないだろ！ただ無計画に突っ込んだところで博士の力になれないってことだよ！」

言い争う二人にリーリエは……。

「私が行ってきます!!?」

リーリエは力強く言ったのである。そんなリーリエにサトルは慌てて止めに入った。

「リーリエさんも何言ってるんだよ。それに向こうのポケモンは炎と悪タイプのデルビルに格闘タイプのカポエラーなんだ。リーリエさんの氷タイプのアローラロコンでは相性最悪なんだよ」

確かに氷タイプのポケモンは炎と格闘とは相性が悪いはずだ。しかしリーリエは笑顔で二人にこう返した。

「ですが、サトシなら迷わず助けに行くと思っんです」

その言葉にサトルは黙り込んでしまった。

「リ…リーリエ」

心配そうにリーリエを見つめるカノン…。

「カノンさん。がんばりリーリエしてきます」

そう笑顔で告げた彼女はモンスターボールを手に戦いの場へと走っていった。その走り行く後ろ姿は、カノンとサトルの目には二人の憧れでもある少年と重なってみえたのであった。

## 第八話 昔と今

「どうやら、ここまでのようね。博士」

ロトムを失ったいま、フシギダネ一体で二体のポケモンを相手に戦っているオーキド博士だったが、このままだとフシギダネの体力が尽きるのは時間の問題だ。

ケンジ達に向こうでの戦いを終え、こちらに加勢してくることを願っていたがこちらに向かつてくる気配はない。

しかしここで自分が負けてしまうと、次に狙われてしまうのはリーリエ達。負けは許されない緊張感がオーキド博士に焦りを感じさせる。

「さあ、止めと行こうか。カポエラー【まわしげり】だ!!?」

コサブロウの指示のもと、カポエラーは空中に飛び上がり攻撃の体勢に入る。足を横に腰を回しながら繰り出す蹴りは、フシギダネに向かつて蹴り出された。オーキド博士は急いでフシギダネに回避の指示を出そうとしたその時、勢いよく放たれた氷の塊がカポエラーの足に向かつて命中したのである。

「なんだ!?? カポエラー。一旦下がれ!」

予測不能な攻撃に驚いたコサブロウはすぐにカポエラーを自分の元へ戻らせた。カポエラーの技が決まる前に一瞬でダメージを与えた氷の塊による攻撃。

「今のは... 【こおりのつぶて】?」

【こおりのつぶて】相手の素早さに関係なく氷の塊を素早く相手に放つ氷タイプの先制技。だがその技はもちろん、フシギダネが放った技ではない。その技はオーキド博士の後ろから放たれたものであった。すぐにオーキド博士はその技を放った方角に目をやると、そこには戦う決意の目をしたリーリエとそのパートナーシロンの姿がそこにあった。

「大丈夫ですか? 博士!」

「リーリエちゃん!!?」

安否の確認を取ったリーリエはすぐにオーキド博士の元へと向

かった。

「間に合ってよかったです！」

「ああ…。しかし、リーリエちゃん。なぜここに…」

「皆さんとここのポケモン達を護るためです!!？」

そう言い放ったリーリエの目からは静かな闘志が感じられた。オーキド博士は不思議とリーリエをとどめようとはしなかった。

「あらら、お嬢さん。もしかして私たちと戦うつもりでいるのかしら？」

「はい。戦うつもりでいます」

「そうか。なら新人トレーナーとして旅立つ前に、お兄さん達が社会の厳しさについて教えてやろう」

デルビルとカポエラーは攻撃体勢をとり、二人からの指示を待つ。シロンもフシギダネの隣に立ち、相手二匹に身構える。

リーリエは考えた。タイプの相性はこちらが不利であり、自身のバトルの経験も浅い。サトルに言われた通り、無計画に突っ込んでいくのは命取りだ。シロンと比べてフシギダネの方はサトシのポケモンであってバトルも多く経験もしているはず。ここはフシギダネが戦いやすい場を作ることが最優先であるとリーリエは判断した。

「いきまず。シロン！【ごごえるかぜ】です!!？」

シロンは大きく息を吸うと、一気に冷気を放射した。それは相手二匹を同時に包み込めるほど範囲がとて広い攻撃だ。【ごごえるかぜ】はダメージを与えるだけでなく、相手の素早さを下げる効果もある。まずは相手を鈍足状態にさせて、相手二匹の行動を鈍らせることがリーリエの狙いだ。しかし、その技の効果はヤマトとコサブロウも知っていたのだ。

「あまいな。カポエラー！【ワイドガード】!!？」

カポエラーは仲間のデルビルも護れるほどの大きなバリアーを展開した。【ワイドガード】は味方全体に当たる攻撃を防ぐ技。シロンの攻撃はそのままバリアーによって防がれてしまった。

「狙いはよかったがそんなことも知らない我々、ロケット団ではない」「その通り。デルビル！ロコンに【かえんほうしゃ】!!？」



すぐさまデルビルはシロンに向かって攻撃を仕掛けた。デルビルが放った炎は真面に喰らえば一気に戦闘不能へと持っていかれてしまうほどの威力であった。

「フシギダネー・【つるのムチ】で助けるんじゃー！」

すぐにフシギダネは一本のつるをシロンの身体に巻きつけ、自分の方へと引つ張った。間一髪のところまでシロンは相手の攻撃から逃れることができた。

「ありがとうございます。博士！フシギダネー！」

「うむつ。じゃが、まだ終わつとらんぞ。フシギダネ！今度は向こうに【つるのムチ】じゃ！！？」

「躲せつ！！！」

フシギダネの攻撃をデルビルとカポエラーはジャンプして躲した。躲した方角に向かってリーリエは次の指示をシロンに命じた。

「【こなゆき】！！？」

「【かえんほうしゃ】！！？」

シロンの冷気とデルビルの火炎がぶつかり合う。しかしレベルの差がついてしまったのか、シロンの攻撃はデルビルの攻撃に押し負けてしまった。シロンの冷気をかつ消した火炎がシロンとフシギダネに襲いかかる。

そんな時フシギダネはシロンを護るために自らシロンより前に立って、その攻撃を受けに行ったのだ。草タイプに炎タイプの攻撃は効果は抜群。フシギダネは大ダメージを負ってしまった。

「大丈夫かー！フシギダネ！！？」

心配するオーキド博士にフシギダネは根性で返事を返した。シロンの無事を確認したフシギダネは自分は大丈夫だと優しくシロンにうなづいた。

やはりサトシみたいにはいかないものなのかと自分のせいで傷つけてしまったフシギダネを見てリーリエは少々落ち込んでしまった。「大丈夫じゃ。それより少しお願いがあるのじゃが、聞いてくれぬか？」

そんなリーリエを励ますかのようにオーキド博士はあることを提

案した。落ち込んでいる暇はない。リーリエはすぐに切り替えてはオーキド博士の指示を聞いた。

「分かりました。シロン！もう一度【こなゆき】です!!?」

指示の元、シロンの冷気は再びデルビルとカポエラーに襲いかかる。シロンもリーリエの想いに応えるかのようになり、さっきの【こなゆき】よりもパワーのある攻撃を繰り出していた。

「なんどやろうと同じこと！カポエラー！【ワイドガード】!!?」

「シロン！そのまま【こなゆき】を続けて下さい！」

さつきと同じように防がられてしまったがシロンが攻撃を止めることはなかった。その威力を保ちながら冷気を放射し続けている。

相手の二匹もガードしているとはいえ、止むことがない攻撃に視界も遮られてしまっているため次の一手を繰り出せないでいた。そんな相手の攻撃にヤマトとコサブロウも不思議に思った。ダメージも負わせていない。このまま攻撃を続ける意味もない。ただ、自分たちのポケモンの足止めにならなっていないと…

足止め!!

そう脳裏を過ぎった二人はフシギダネの方を確認した。フシギダネは自分の象徴ともいえる背中にある大きな種に太陽のエネルギーを貯め込んでいた。エネルギーが蓄積された種は徐々に光始めていた。それを見たヤマトとコサブロウはすぐに行動を移した。

「くそっ!!?本当に足止めだったとは」

「もういいわ！すぐに攻撃に切り替えるわよコサンジ。あの技を食らったところでたいしたダメージにならない」

「だから！コサブロウだって… ええい、そんなこと言ってる場合じゃないか。カポエラー！【ワイドガード】を解除しろ」

「デルビル！もう一度ロコンに【かえんほうしゃ】!!?」

カポエラーはバリアーを解除したのち、すぐにデルビルは攻撃を仕掛けた。

「躲して下さい。シロン！」

躲すと同時にシロンの攻撃は止んだ。そして、まるで主人の考えがわかっているかのようにすぐにカポエラーはフシギダネに向かって

走り出していた。

しかし、すでにフシギダネは蓄積したエネルギーを解き放つ準備は完了していた。

「フシギダネー・「ソーラービーム」!!?」

フシギダネは貯めた太陽のエネルギーを一気にカポエラー目掛けて放射した。しかし、そのエネルギーはカポエラーの右に大きく外れてしまい、鮮やかな七色の光を咲かせながら上空へと消えてしまった。技が外れてしまったのだ。

失敗…。その二文字がリーリエの頭を過ぎった。さらに追い討ちをかけるかのようにヤマトとコサブロウは高笑いをあげていた。

「あつははー…どうやら絶好のチャンス逃してしまったようね」

フシギダネの大技が外れたいま、次の作戦の意向が思い当たらない。もう奇跡が起きない限りどうしようもないこの状況。もうダメかと思ったその時…

突然、上空からロケット団に目掛けて二種類の風の刃に見立てたエネルギー波が飛んできた。上空を見上げてみるとそこには、ケンホロウとファイアローの二体の鳥ポケモンがいた。おそらくさっきのはこの二体が繰り出した技だったのであろう。

「おおっ！以外にもこんな速く駆けつけに来てくれるとは。助かったわい」

オーキド博士は上空にいる二体のポケモンを見ては大きく手を振っていた。

どうやら、先ほどの「ソーラービーム」は攻撃をするためのものではなく仲間を呼ぶために放ったものであったようだ。さらに、助けに来てくれたのはあの二体だけではなかった。

前方からはものすごいスピードで向かってくる二つの影が見え、近づいてくるにつれその正体はつきりとした。現れたのは頭に炎を宿したポケモンのゴウカザルと腕に生えた大きな葉っぱの刀を持ったポケモンのジュカインだった。さらに後方からは大きな顎を持つポケモンのワルビアルと鋭い牙を持ったポケモンのフカマルが地中から姿を現した。

その四体はヤマトとコサブロウを取り囲むかのようにして戦闘体勢に入った。この状況にヤマトとコサブロウは流石にお手上げのよう  
うで、デルビルとカポエラーをモンスターボールへと戻した。

「止むえない。退却だ！出てこいツボツボ【すなあらし】!!?」

コサブロウはモンスターボールからツボツボを繰り出すと、自分たちを包み込むかのようにして砂嵐を発生させた。砂嵐がはれるとそこには二人の姿はなかった。

ロケット団を追い払うことができたリーリエは肩の荷がおりたのか、シロンを抱きかかえながらその場に座り込んでしまった。

「ありがとうリーリエちゃん。君とポケモンのおかげでロケット団を追い払うことができた」

「いえ、やっぱり私は博士の足を引っ張っていただけだったのでは..」

「そんなことはない！君が助けに来てくれなかったら、いまごろどうなっていたか..。君の勇気が研究所のポケモン達を救ってくれたのじゃよ」

すると、援軍に駆けつけてくれたゴウカザルを始めとしたポケモン達はリーリエの元へ近寄ると嬉しそうに鳴いていた。それはまるでありがとうと言っているようでリーリエも笑顔で返事を返した。

「リーリエ!!!」

カノンは涙を流しながら、後ろから勢いよくリーリエに抱きついた。

「よかったよ!!!リーリエ!!!心配したんだから!!?」

「もう、カノンさん！苦しいですよ」

慰めるようにリーリエはカノンの頭を優しく撫でた。サトルも慌ててリーリエの元へと駆け寄ってきた。

「リーリエさん！無事でよかったよ。本当に」

「はい。ご心配をお掛けしました」

リーリエの笑顔を見たサトルも安心しきったのか、その場に崩れ落ちてしまった。

こうしてロケット団の手から研究所のポケモン達を護ることがで

きた。学外での始めてのポケモンバトルは、やり遂げることが出来た達成感と同時に自分の不甲斐なさを改めて実感する結果となった。

もっと強くならなくてはならない。リーリエはバトルの疲れで膝の上で眠っているシロンを撫でながらそう思うのであった。

~~~~~

ロケット団が立ち去った後、すぐにジュンサーさんによる現場検証が始まった。

研究所のポケモン達は爆発が起きた直後、サトシのポケモン達が中心となってオーキド博士が指定した避難所へ誘導してくれたおかげで全員無事だったようだ。ロケット団と戦ったリーリエは事情聴取を聴かされ、それは夜まで続いた。

「お疲れ様です。お嬢様！ この度はわたくしが付いていながらもお嬢様を大変、危険な目に合わせてしまいました。誠に申し訳ありません」

「謝ることはありませんわジェームズ。おかげで研究所のポケモン達を護ることができましたもの。それにシロンも一緒でしたし」

「左様でございますか。すっかりお嬢様も立派になりましたな。お疲れでしょう。夕食の準備が終わるまで、お休みになられて下さい」

そう言いつつジェームズはキッチンへと向かった。リーリエはリビングのソファアーに腰を置き、今日の戦いで汚れてしまったシロンの手入れを始めた。

「シロン。今日はありがとうございました。」

無茶なことをさせてしまいました。これから多くのトレーナーやポケモン達と出会いながら一緒に頑張っていきましょう」

シロンもリーリエの言葉に返事をするように小さく吠えた。シロンの返事を聞いたリーリエはつい嬉しくなり、シロンを優しく抱きしめた。

「あつ、事情聴取終わったんだリーリエ」

声が聞こえた方へ目をやると、手を小振りに振っているカノンがいた。リーリエを見つけたカノンはリーリエの隣に座り、シロンの頭を優しく撫でた。

「リーリエはやっぱりすごいよ。ロケット団相手にあそこまで戦えるなんてね」

「そんなことはありません。博士が付いていたからこそ何とかなかっただけですし、もっと自分一人で戦える力を身につけなくてはならないと思います」

そんなことを話していると、サトルもリーリエとカノンの前に現れた。しかし視線はリーリエ達を見ようとせず、ただ下を向いていた。

「どうしたんですか？サトルくん」

サトルの様子が少しおかしいと感じたリーリエは心配そうに聞いてみた。サトルは重たそうな口を開いてリーリエ達の方へ目をやっていた。

「二人に謝りたくてね」

突然、二人に謝罪の言葉をならべたいと言ったサトルにリーリエとカノンは驚いた。そんなサトルにカノンは思わず口を開いた。

「どうしたのよサトル。急に謝りたいなんて、私達に何かした？」

「……………」ロケット団に二人が戦いに行こうとした時、僕は二人を止めた。僕もあの時は誰かが手助けしてやらないといけないことくらい分かってたんだけど、まだ戦い慣れていない僕らがロケット団なんかと敵うわけがないと勝手に決めていたんだ。現実ばかりを見て、研究所を護りたいと言った二人の意思と助かる可能性を僕は否定してしまった。リーリエさんがオーキド博士を助けに行かなかったら今頃、研究所のポケモンも僕たちのポケモンもロケット団に奪われていたのかもしれないのに二人を止めた後、どうするかも考えなかった。論理的なことをばっかり言ってた自分が情けない。無計画に突っ込んでいたのは僕のほうだった。本当にごめん」

サトルは自分の無知さを痛感させていた。これから旅立つトレーナーとして大切なこと

が自分には欠けていたのだと。足元へまた視線を逸らしてしまっ

たサトルにリーリエは口を開いた。

「気に病むことではありませんよ。サトルくんは私達のことを心配してくれて言っただけのことです。分かってます」

そう言うと、リーリエはカノンとサトルに自分がトレーナーズスクールに通っていた時の思い出を話し始めた。

「私もサトルくんと一緒にいた」

「えっ…僕と？」

「私はスクールに通っていたときは、ポケモンバトルおろかポケモンに触れることすら出来なかったのです」

「えっ！そうだったの」

「はい。なのでポケモンに触れなくても学校の授業や本に書いてあることが全て正しいと思っただけです。ここに記されたことの筋が通っていれば法則性に基づいて理屈が通っているものだと思います」

リーリエは少しシロンに視線を落としてからさらに話を続けた。

「ですが、サトシに出会ってスクールのみなどと一緒に授業を受けたリフィールドワークをしていくうちに、本には書いていない、新たな発見を見つけてきたのです。シロンを初め他のポケモン達にも触れるようになってからも分かったこともたくさんありました。この時、私の考えが如何に一方的なものであったか。私は感情的に考えることも必要だと知ることができたのです。昔の私でしたら、ロケット団と戦おうなんて思っただけだと思います」

そんなリーリエの話聞いたサトルは思った。まだ自分が知らないこともある。スクールで教わったことがすべてじゃない。その言葉はサトルに強い印象を与えたようで少し笑顔が戻った。

「サトル。私のほうこそポケモン達がどうなってもいいんだとか言ったりしてごめん」

カノンもサトルに続いて謝った。お互いに謝ってばかりのこの状況がおかしくなったのか、三人はお互いに笑い合った。

「なんか謝ってばかりで調子狂っちゃうよね。よし！もうこの話はこれでおしまい！おしまい！」

「そうですね。カノンさんの言う通りです！」

元氣よく言い放つリーリエにカノンは何か不満そうであった。

「カノン！」

「えっ？」

「リーリエはトレーナーズスクールの友達にも“さん”付けなのかな？それだとまだ私達と壁を置いているみたいで、なんか嫌だな」

意地悪そうに言うカノンにリーリエは改めて彼らの名前を呼んだ。

「はい！　これから友達としてもライバルとしてもよろしくお願いします。カノン！サトル！」

故郷であるアローラを旅立ち、マオ達とも暫く離れることになったリーリエ。少し寂しい気持ちはあったが、いま同じ目標を志す新たな仲間と出会うことができた。これから始まる冒険もリーリエにどんな出会いが待ち受けているのだろうか。さあ、明日はいよいよ旅立ちの時だ。



## 第九話 新たな仲間と初ゲッツ!!?

ロケット団による研究所の襲撃事件から翌日、この日リーリエとカノンとサトルはポケモントレーナーとして旅立つ日がやってきた。  
…はずだったのだが

「すまん、リーリエちゃん。新人用のポケモンのことなんじゃが、すぐには用意ができていないのう。」

そのはずだ。オーキド博士から新人用のポケモンを受け取るには申請届けを提出しなければならない。リーリエも急な申し立てのことだったので仕方のないことだと分かっていたが、規則上により旅に出るには所持ポケモンは二体と決められているのでリーリエはトレーナーとして旅にでることが出来ないのだ。

暫く、新人用のポケモンが用意されるまで研究所で待つしかないが、それがいつになるか分からない。悩んだ故カノンはあることを提案した。

「オーキド博士！連れて行くポケモンは戦闘経験を十分に経験しているポケモンならいいんですよね」

「うむっ！そうじゃな」

「だったら、リーリエの二体目はこれから捕まえに行けばよくないですか！野生ポケモンならそれなりに戦闘経験を積んでいるはずですし！」

「じゃが、そもそも野生ポケモンのエリアに入ることも出来ないのでは」

あっ…：そうかと思ったカノン。それを見かねてサトルは説明を加えた。

「フィールドワークの授業と同じように僕とカノンがリーリエのポケモンの捕獲のサポートにまわるのはどうでしょうか。禁止されているのはあくまで所持ポケモン不足による野生ポケモンエリアへの浸入です。僕たちと一緒に入れればその基準を超えられますし、野生ポケモンに襲われる危険性もなくなります」

「おー！それだよ！私が言いたかったこと♪」

「私もそれでよろしいければ、ぜひお願いしたいです」

所持ポケモン二体までというのは飽くまでトレーナーは一人で旅立つものだと考えたうえで作られた規則であり、他のトレーナーと一緒になら安全が確保されるのは確かだ。

しかし博士から新人用のポケモンを受け取らず旅に出たトレーナーは前例としてないため、一緒に行動すればいいからと言ってリーリエに旅の許可を出していいものか分からなかった。だが、ロケット団と戦いでリーリエの実力を知ることができたオーキド博士は特別にサトルの提案を受け入れることにした。

「それじゃあ、カノンちゃんとサトルくんはしっかりとサポートの方を頼んじやぞー！」

「はい!!」

「そういうことなら、リーリエちゃんにはこれを渡しておこうかの」

そうやってオーキド博士から渡されたのはポケモン図鑑だった。だが、カノンとサトルが貰った図鑑よりも大きいサイズの図鑑だ。それはリーリエが初めて目にしたものでもなかった。

「これは…ロトム図鑑ですか?」

「ロトム図鑑?」

カノンとサトルに説明しようとした途端、博士のではない一体のロトムが図鑑に入り込んだ。すると起動とともに図鑑は宙に浮き、ロトムが目を覚ます。

『アローラー・ユーズァーリーリエ! よロトしく! ん? ここはアローラーじゃないロトか?』

「喋った!!」

突然のことにカノンとサトルはついていけない。

「カノン! サトル! これはロトム図鑑と言いました…」

『そこはボクが説明するロト!』

リーリエが説明しようとしたがロトム図鑑は割って入って自分から説明し始めた。お喋りな性格は変わらないのですね…リーリエはこのやり取りに懐かしく思えた。

『ロトム図鑑は他の図鑑と違ってポケモンのデータはあらかじめ入っ

てはいないロト。出会ったポケモンからデータを集めてそれを図鑑に保存する。それがロトム図鑑ロト!」

ロトムはカメラ機能を使って、リーリエのパートナーのシロン。カノンとサトルのポケモンヒコザルとピカチュウそしてフシギダネとヒトカゲを写真で撮り始めた。

『このようにして写真に収めることで、出会ったポケモンの記録がどんどんアップデートされていくんだロト。』

「つまり、出会うことで図鑑が埋まっていく自己学習型のポケモン図鑑ってこと?」

『そういうことロト!』

ロトムの自己紹介も無事に終わることができた。ロトム図鑑はこれからリーリエの旅の仲間として一緒に行動することになる。

「ですが博士。この図鑑はどうして私に…」

自分用の新人ポケモンが用意されていないのなら、ポケモン図鑑も用意されていないと思っていたのでリーリエは少し驚いていた。するとテレビ携帯から一人の人物が現れた。

『僕からのプレゼントさ!リーリエ!』

そこに映っていたのは、トレーナーズスクールの担任でもあったクイ博士だった。

「お久しぶりです!クイ博士!」

『リーリエ!久しぶりだな。随分見ないうちにたくましくなってきたんじゃないか!』

久しぶりの再会の喜びにリーリエはテレビ携帯に映っているクイの元へ駆け出した。

『実は君のお兄さんからリーリエがトレーナーとしてカントーを巡るって聞いたんだ。だからリーリエの旅のサポートをしてあげるようにと急いでロトム図鑑をそっちに贈ったんだ!』

「ありがとうございます。博士!」

『しかしリーリエがトレーナーとして旅に出る日がくるとはなあ。スクール時代の時は正直考えもしなかった。ルザミーネさんのことは僕やオーキド博士達に任せて、トレーナー修行しっかりやってこい!』

ロトム。リーリエのこと宜しく頼むぞー!』

『任せるロト!他の図鑑と同様、ポケモンデータの解説機能も搭載されてるからリーリエがまだ見たことのないポケモンでも大丈夫ロトよ!』

するとロトムはサトルに近づきピカチュウの解説を始めた。

『ピカチュウ ねずみポケモン

尻尾を立てて、周りの気配を感じ取っている。むやみに尻尾を引つ張ると噛み付く』

ロトムは自分の解説が合っていることを証明するかのように、サトルのピカチュウの尻尾を引つ張る。

「あああああああ!!!」

驚いたピカチュウは電撃を繰り出した。サトルの肩に乗っていたため、もちろんサトルも電撃を食らうはめになった。

『噛み付くくじゃなくて電撃ロトか!!』

サトルとロトムの断末魔が鳴り響く。それをカノンは口を開けて大きく笑い、リーリエはサトルに申し訳ないと思いつつ、口を隠しながら笑っていた。その様子をクワイ博士は懐かしそうに見ていた。

リーリエは寝室に使った部屋に戻り、旅の道具の最終確認を行っていた。終えたリーリエはリュックを背負い、ルザミーネの元へ向かった。

行ってきます。お母様

リーリエはそう告げ、シロンと一緒に寝室を後にした。

研究所を出た三人に強い風が吹いていた。

その風が吹いた方を向くとそこは広大な草原が広がっていた。いよいよ始まる冒険。三人の門出を祝うかのように太陽の光が神々しく輝いていた。

「お嬢様。お気をつけて」

「ジェームズ。お母様のこと宜しくお願いします。」

「それじゃあ、三人ともしっかりのうー！」

「二はいー行つてきます!!!」

三人は見送るオーキド博士たちに手を振り

旅立っていった。三人の旅がよりいいものになるようにと願いながら三人の姿が見えなくなるまでオーキド博士たちも手を振り続けた。

~~~~~

ポケモントレーナーとして旅立ったりリーリエ。研究所で出会ったカノンとサトル。そして新たな仲間ロトム図鑑と一緒に次の町であるトキワシテイに向かっていた。そんな中リーリエは手持ちがロコンのシロンだけということもあり、まずは野生ポケモンを捕獲するところから始まった。そしていま、その真つ最中だ。

「シロンー! 【こなゆき】 !!?」

シロンの冷気は野生のポツポを包み込んだ。ポツポはあまりの寒さに身体を震わせ、地面に倒れこんでしまった。

「よし! 効いてる」

「いまだよ。リーリエー!」

二人の合図とともにリーリエはモンスターボールをポツポに目掛けて投げた。そのままポツポはモンスターボールへと吸い込まれていき、開閉スイッチが完全に閉まるまでのカウントダウンが始まった。ボールは右に揺れ、左に揺れ あともう少しのところだ…

「あつー!」

ポツポはモンスターボールから出てきてしまった。すぐにリーリエはシロンに次の技を指示しようとしたが、ポツポは「すなかけ」でシロンに砂をまきあげた。かかった砂が目に入り視覚を奪われてしまったシロン。その隙を見計らってポツポは逃げ出してしまった。

初めての捕獲は失敗に終わった。

「大丈夫ですか シロン！」

すぐにシロンの元へ駆け寄ったリーリエは急いでシロンの目に入った砂を水で洗い流してあげた。砂を洗い流したシロンはリーリエを見るなりしよんぼりとしていた。

「そんなに気を落とすことはありませんよ」

そんなシロンの頭をリーリエは優しく撫でてあげた。

「惜しかったね。リーリエ」

「はい。なかなか上手く行きませんが、まだまだこれからです。次は必ずゲットしてみせます」

「あはは！その意気だね」

そう言つて、カノンはリーリエの手を引っ張るようにして起き上がらせた。すぐにロトムもシロンの状態の確認にかかった。

『大丈夫ロト！シロンはそんなにダメージを負ってないロト！安心するロトよ！』

「そうですか！ありがとうございます。ロトム」

シロンに怪我はなかったことを知り、優しく抱きかかえた。シロンも尻尾をふりながら元氣よく鳴いた。

「もうすぐお昼だから、そろそろ休憩をいれよっか。時間的に野生ポケモンの探索はまだできるし」

「そうですね。みんなでお昼にしましょう」

リーリエたちは岩場に腰を下ろし、旅立つ前にジエームズが作ってくれたサンドイッチを取り出して昼食をとった。ポケモン達もリーリエが作ってくれたポケモンフーズを美味しいそうに食べ始める。

「みんなも美味しそうに食べてる！」

「ポケモンごとに好みに合わせて作るなんてすごいよ」

「ふふっ！ポケモン達も口に合ってくれたようでよかったです」

そんなポケモン達を見ながら、三人はこれからのことを話し合っ

た。

「次はどんなポケモンに挑戦してみよっか」

「図鑑で生息地を調べてみたけど、初心者としてはポツポコラツタ

「がやっぱり無難かな」

「でしたら、その二匹を中心に探したほうがいいのですか？」

「そうだね。でもポケモンバトルのことを考えると空中戦を得意としたポケモンはいた方が心強いと思う。出来れば鳥ポケモンを仲間に加えたいところだね」

『この辺りに鳥ポケモンが生息している確率は20%口ト。もう少し他を探索したほうがいい口トね』

その時ポケモン達は何かの気配を感じたのか周りを見渡し始めた。すると上空から一匹のポケモンがポケモンフーズ目掛けて急降下してきた。フーズの一粒を奪ったそのポケモンは近くの木の枝に留まり食べ始める。リーリエ達も急いでそのポケモンの方へ目をやった。

「あの、ポケモンは？」

すぐに口トムはそのポケモンの写真を撮り、解説を始めた。

『ムツクル。むくどりポケモン。』

「たくさん群れで行動している。体は小さいが羽ばたく力は非常に強い」

現れたのはシンオウ地方の鳥ポケモン、ムツクルだった。

「ムツクルか。ほんと昔のカントー地方だったら考えられないポケモンが現れたね」

「うん。だけどムツクルは単体での弱さをカバーするために普通は群れで行動しているポケモンなんだけど、他に仲間いないのかな」  
「でしたら、あの子ひとりぼっちなのでしょうか」

そんなムツクルを見たリーリエはすぐにリュックから空のモンスターボールを取り出した。

「決めました！私、あのムツクルをゲットしてみます！準備はいいで

すかシロン！」

リーリエの合図とともにシロンも前に出る。食事を終えたムツクルも翼を広げてはこちらを睨みつけてきた。どうやら向こうもこの勝負を受けて立つようだ。

「シロン！【こごえるかぜ】!!?」

シロンの冷気がムツクルに目掛けて繰り出された。一瞬にしてムツクルは上空へと飛びその技をかわした。スピードはかなりのものだ。あつという間に空へと飛んだムツクルはシロンの出方を疑うかのようにその周りを飛び始めた。

「それでしたら【こおりのつぶて】です!!?」

次の攻撃と切り替えたシロンだが、空を飛び回るムツクルのスピードを捉えることが出来ず外してしまった。シロンの動きが止まったところをムツクルは透かさず、嘴を尖らせ【つつく】攻撃を仕掛けた。シロンは技を出し終えた一瞬の隙を狙われムツクルの攻撃を食らってしてしまう。

「シロン!!」

ムツクルの攻撃を食らったシロンは蹠踉めきながらなんとか立ち上がる。しかしムツクルの攻撃が止むことはなかった。今度は一気に急降下をすると翼を鉄のように硬化させ、再びシロンへと襲いかかる。

「シロン！躲して下さい！」

今度はリーリエの指示が早かったためシロンはギリギリのところまでムツクルの攻撃を躲した。ムツクルの攻撃した場を見ると、地面が大きく抉り取られていた。威力はなかなかのものだ。

『いまのは【はがねのつばさ】ロト!』

「あのムツクル鋼タイプの技を使えるのか」

「リーリエ！頑張れ!!」

鋼タイプの技は氷タイプのシロンには大きなダメージが与えられてしまう。だが、相手は空中戦を得意としている鳥ポケモン。むやみに技を繰り出したところでは簡単に躲されてしまう。

するとムツクルはもう一度【はがねのつばさ】でシロンに攻撃を仕



掛けてきた。急降下して近づいて来るムツクルを前にリーリエはあ  
る策を思いついた。

「シロン！自分の周りに【こごえるかぜ】です!!?」

シロンは自分の周りに冷気を繰り出した。冷気によって冷やさ  
れた空気は白い霧を発生させ、そのままシロンを包み込んでいきシロ  
ンの姿を消してしまった。姿を見失ったムツクルは慌てて攻撃をやめ、  
距離を取ってからそのまま空中で止まった。

相手の動きが止まっているこのチャンスが無駄にするわけにはい  
かない。リーリエはすぐにシロンに攻撃の指示を送った。

「今ですー！【こおりのつぶて】!!?」

白い霧の中から氷の塊がムツクルに目掛けて放たれる。シロンの  
姿を捕らえられなかったムツクルは判断が遅れ、シロンの攻撃は見事  
に命中した。

「【こなゆき】!!?」

追い討ちをかけるようにシロンの【こなゆき】もムツクルに決まっ  
た。氷タイプの技を連続に食らってしまったムツクルはそのまま地  
面へと倒れこんだ。

『ムツクルの捕獲率！70%ロト!』

「はい！それでは行きます！お願いしますますモンスターボール!!?」

すぐにリーリエはモンスターボールをムツクルに投げた。そのま  
まムツクルはモンスターボールへと吸い込まれていき、開閉スイッチ  
が完全に閉まるまでのカウントダウンが始まった。ボールは右に揺  
れ、左に揺れ　そして…

カチツ!!?

開閉スイッチが閉まる音がした。それは捕獲成功の合図を意味し  
ていた。モンスターボールが止まったことを確認したリーリエは急  
いでモンスターボールを取りに向かった。モンスターボールを手に

取ると持っている方の腕を空高く伸ばし、喜びの表情を見せた。

「やりました！ムツクル ゲットです!!やりましたよ！シロン!!?初めてのゲットです!」

シロンもリーリエに飛びつき嬉しさのあまり一緒になってその場を飛び跳ねた。

「おめでとう！リーリエ」

「やったね!」

『よかったロト! 捕獲大成功だロト!』

すぐにカノン達もリーリエの元へと駆け寄った。

「ありがとうございます。みなさんが手伝ってくれたおかげです!」

「何言ってるの!リーリエとシロンが頑張った結果だよ!」

「そうだよ。それよりムツクルをモンスターボールから出してみようよ」

「そうですね!ムツクル出てきて下さい!」

モンスターボールから元気よくムツクルが飛び出してきた。ムツクルはすぐにリーリエの肩に留まった。

「これからよろしく願います。ムツクル!」

ムツクルも元気よくリーリエに挨拶をしてからシロンや他のポケモン達にも挨拶を交わした。

初めてのゲットを体験したリーリエはまだその喜びを隠せないでいた。こうしてリーリエ達は新たな仲間と一緒に目的地であるトキワシテイへと歩き出すのであった。

## 第十話 常盤での出会い

「見えてきたー！トキワシティだー！」

街が見えてくるなりカノンは嬉しそうに言った。そのカノンに続いてポケモン達も騒ぎ出した。

基本的にポケモンはモンスターボールに入れておくものだが、こうしてモンスターボールに入れずに一緒に連れて旅をするトレーナーもそう多くはない。

「日が落ちる前に着いてよかったですね」

「そうだね。もうクタクタだよ僕は」

「サトルは体力なさすぎ〜 そんなんじや、これからの旅も大変だよ♪よし、今からみんなで街まで競走!!? 行くよヒコザル！」

そう言うのと、カノンに続いてヒコザルは街の方に向かって駆け出して行った。その走りはさつきまでの旅の疲れを感じさせていないほどであった。

「待って下さいよ！カノン！」

「えっ、ちよつと！そんなに走らなくても」

そのカノンを追いかけるようにしてリーリエとシロンも走りだした。その後にサトルとピカチュウも慌てて二人の跡を追って行った。

~~~~~

「はあはあ…そんなに…走…らなくても…はあ…いいのに…」

「大丈夫ですか。サトル？」

『走った後に止まるのは心臓に負担がかかるロト！歩きながら呼吸を整えた方がいいロトよー！』

サトルが疲れ果てていることに気づいたリーリエも走るのをやめた。カノンはというとそのまま先へと行ってしまい姿が見えなくなってしまうた。

「カノンには…あとで…きつく…はあ…言っておかないと…はあ…いけないね」

「そ…そうですね…」

顔には出ていないが、サトルの静かな怒りのオーラはリーリエにも伝わっている。それはピカチュウにも伝わっているのか少し主人であるサトルとは距離を置いて歩いている。

暫く歩いて行くとカノンの姿が見えてきた。カノンはそのまま向こうの木々を見ているようで立ち尽くしていた。カノンの姿を見るなりサトルは前にいたリーリエを追い抜かし、カノンの元へと歩み寄る。

「カノン…君は少し周りのことを考えて…」

「しっ！静かにして」

サトルの説教をかき消すようにカノンは二人に静かにするよう合図を送った。カノンは何かを見つけたようでリーリエもサトルもカノンが指差す方へ目を向けた。そこにいたのは全身緑色のトカゲのようなポケモンだった。すぐにロトムの説明が始まった。

『キモリ            もりトカゲポケモン』

足の裏の小さなトゲを引っ掛けて垂直な壁を登ることが出来る。太い尻尾を叩きつけて攻撃をする。』

そこに居たのはハウエンの新人用ポケモンとしても渡されるポケモン、キモリだった。キモリは太い木の枝に寄りかかっているようにして座っていた。視線は空の方を見つめておりリーリエ達には気づいていないようだ。

「キモリか。どうしてこんな所に」

「分かんないけど、トレーナーらしき人が居なさそうだし野生かな？よし！今度は私がゲットしようかな♪」

カノンはヒコザルを連れてキモリの方へ向かった。その気配に気

づいたキモリもカノンの方へ目をやった。

「キモリ！いきなりで悪いけどあなたをゲットするね！ヒコザル【ひこのこ】!!?」

吐き出された無数の火の玉がキモリに繰り出される。キモリもすぐに【タネマシンガン】で相殺させた。ぶつかり合う二つの技は爆発を起こし、周りは煙に包まれる。煙が晴れるまでヒコザルは様子を伺っていたが、煙の中から飛び出したキモリはすぐさまに【でんこうせつか】をヒコザルに食らわせた。

『あの戦い方リーリエがムツクルをゲットした時と同じ戦法だ口トよ！』

「戦い慣れしている。やっぱり何処かにトレーナーがいるんじゃないか?」

「ですが、その人らしき人影はどこも見当たりません」

キモリの攻撃を食らったヒコザルは、すぐに立ち上がりカノンの指示を待つ。

「ヒコザル！とっておきいくよ！【かえんぐるま】!!?」

ヒコザルは尻尾の炎を大きく燃やし、その炎を全身に包みこんだ。炎を纏ったヒコザルはそのままキモリに突進した。キモリは【タネマシンガン】で応戦しようとしたが、燃えさかる炎の前では成すすべなくそのままキモリがいる場へと撃墜した。

「やったあ!!!」

カノンはヒコザルの【かえんぐるま】は決まったと思いそのままガッツポーズを取った。すぐに空のモンスターボールを取りキモリに投げようとしたが、そこにキモリの姿はなかった。代わりにキモリがいた所には一つの大きな穴が出現していた。撃墜したように見えたがそうではなかったのだ。

「えっ!!」

「キモリの姿がありません」

「もしかして…カノン！気をつけて！」

姿を消したキモリに動揺してしまったカノンとヒコザル。サトルの忠告も虚しく、ヒコザルの足元から出てきたキモリの拳がヒコザル

にヒットしてしまった。

さらにふらつくヒコザルに大きな尻尾を利用した【はたく】を食らわせ、ヒコザルをそのまま吹き飛ばした。後ろにあった大きな木に体を叩きつけてられてしまったヒコザルは目を回してしまい戦闘不能となる。

ヒコザルにもう戦う力が無いと分かったキモリは木をつたって林の中へと消えてしまった。

「ヒコザル!!!」

カノンはすぐにヒコザルの元へと駆け出した。ヒコザルは相当なダメージを負ってしまった。

『「あなをほる」地面タイプ of 技。ヒコザルには効果は抜群ロト!』

「カノン! 急いでヒコザルをポケモンセンターに連れて行きましょう!」

「もうここから街には近いはずだ! 急ごう!」

カノンはヒコザルを抱えすぐにリーリエ達は急いでトキワシティへ駆け出した。

~~~~~

緑色の木々に囲まれた街、トキワシティ。マサラタウンに続いて豊かな自然に囲まれたその街は人もポケモンも穏やかに暮らしている。新人トレーナーが旅の疲れを癒すのに最初に訪れる街として最適な街だ。

「ジョーイさん。ヒコザルをお願いします」

街に到着してすぐにリーリエ達はポケモンセンターでジョーイさんにヒコザルを預けた。すぐに担架に乗せられたヒコザルはジョーイとナースポケモンのラッキーと一緒に診察室へと運ばれて行った。心配そうにヒコザルを見つめているカノンにリーリエとサトルは元気づけようとポケモンセンター内のカフェにカノンを連れ出した。

「ポケモンバトルでポケモンが傷つくのは仕方ないことだよ。カノンがそんな顔をしているとカノンのために戦ったヒコザルが後で申し訳ないと思っちゃうだろ?」

「そうですね。私たちトレーナーやポケモンが安心して旅に出たりポケモンバトルをすることができるのはポケモンセンターがあるおかげなのですから、ヒコザルは元気になって戻ってきますよ!」

『全国のポケモンセンターは専門学校を卒業した優秀なジョーイさんとそのナースポケモンがそのポケモンに合った適切な治療を施しているロトよ!ポケモンセンターの安心度は100%だから心配いらないロト!』

「…そうだね。ありがとう二人とも!ロトムもね!」

二人とロトムの言葉にすっかり元気を取り戻したカノンはケーキを追加注文した。

ポケモンセンター内に設備されている食堂や温泉、宿泊等はトレーナーカードを提示すればすべて無料で利用することができる。トレーナー修行を育んでやっていけるようにポケモン協会が考えて提示した案だそうだ。

呼び出し放送でヒコザルの治療が終わったことを聞いたカノンはジョーイさんの元へと向かった。すっかり元気になったヒコザルはカノンの姿を見るなり飛び込んできた。

「うわあ!もう元気になったねヒコザル!ジョーイさんありがとうございまして!」

「いいえ、またのご利用をお待ちしております」

そう告げたジョーイさんはすぐに他のポケモンの治療へと向かった。ヒコザルの元気な姿をみたリーリエとサトルもホツとした様子であった。

「よかったですね。ヒコザル」

リーリエの言葉にヒコザルも元気に返事を返した。

「そろそろチェックインしに行こうか。早く行かないと泊まれる部屋が無くなってしまうかもしれないからね」

「じゃあ、もし泊まれる部屋がなかったら野宿ってことだよね!私、一度やってみたかったんだよね!」

「そうですね!綺麗な星を見たりポケモンたちの声を聞きながら旅の話しをするのも旅の醍醐味って感じでいいですね!」

「僕は出来れば、暖かい布団で寝たいけどね…」

以外にも野宿する気である女子たちを背にサトルは急いで泊まれる部屋がないか見に行った。

幸い泊まれる部屋が見つかり二部屋借りることができた。

「サトル♪寂しいなら一緒に部屋でもいいんだよ」

「それはダメだろ！リーリエだっているんだし。大体女子と同じ部屋で寝るのなんて、そんな破廉恥なことは…」

「はーい！勝手にムキになっているサトルくんは置いて、ご飯食べに行こうかリーリエ」

「えっ！ちよつと待ってよ!!」

ポケモントレーナーは一人で旅立つ者が多いがリーリエはこうして二人と知り合うことができ一緒に旅ができてよかったと思っている。サトシの話の中でも一緒に旅ができるトレーナーがいるのは良いものだと話してくれたのは今でも覚えている。サトシもこんな気持ちだったのかなと、カノンとサトルを見ながらそう思っていた。

食堂へ向かおうと前を向いたその時、リーリエは目を丸くしてその場に立ち止まった。

『リーリエーどうした口ト?』

「あれを見て下さい」

そうリーリエが言った先にはキモリがいたのだ。キモリは花束を手を持ち、小走りにポケモンセンターから出て行った。

「あのキモリもしかしてカノンとバトルしたキモリかな?」

「たぶんそうかも」

するとそのキモリの跡を追うかのようにシロンとヒコザルもポケモンセンターの外へ飛び出して行った。

「あつ、待って下さい！シロン!!?」

「ちよつと！ヒコザル!!?」

慌ててリーリエ達もシロンとヒコザルを連れ戻すべくポケモンセンターへ飛び出した。

辺りを見渡すと、シロンとヒコザルはそのままポケモンセンターの隣に建てられた大きな建物の中へと入って行った。その建物は人間



用の大きな総合病院であった。

『ヒコザルとシロンはあの病院の中に入ってたロトよ』

「たぶんキモリの跡を追ったんだろうね。病院に入ったということ  
は、やっぱりあのキモリ誰かのポケモンだったんだよ」

「それではどうして一匹であの木にいたのでしょうか？」

「それはあと！今はヒコザルとシロンを連れ戻さないと！」

そのままリーリエ達は総合病院の中へと入って行ったが、シロンと  
ヒコザルの姿はどこにもなく見失ってしまった。流石に病院内を探  
し回るわけにも行かないので、リーリエ達は受付で看護師に聞くこと  
にした。

「わかりました。そのお客様のポケモンが跡を追いかけたとされてい  
るキモリなのですが入院されている患者様のお一人に心当たりあり  
ますので、そちらにいるかもしれません」

「本当ですか」

看護師さんに聞いた情報によると、キモリを連れているトレーナー  
が一人ここの病院で入院検査をしていることを聞いた。その病室  
に案内しようと看護師が受付から出てきたその時、

「あの、もしかしてこの子達のことでしょうか？」

リーリエ達は声がした方に振り返ると、膝にキモリを座らせた車椅  
子の少女がそこにいた。その隣にはシロンとヒコザルの姿もあった。

「シロン。勝手にポケモンセンターから出ては行けませんよ。みんな  
心配してたんですから」

「ヒコザルもだよ」

無事にシロンとヒコザルを見つけることができたリーリエとカノ  
ン。二匹も二人を見つけるなり勢いよく飛び出してきた。

「わたくしたちのポケモン達を見つけてくださいましてありがとうございます  
ございます。わたくしはリーリエと申します」

『私はロトム。よロトしく』

「私はカノン！ありがとね」

「僕はサトル。えっ…と…」

「私はスマレって言います。無事に見つかってよかったです」

スマイレと名乗った少女は車椅子を前にリーリエ達へと向かった。キモリも膝から下りてはシロン達の前へと行く。リーリエは前屈みになりキモリと目線を合わせた。

「ごめんなさいキモリ。跡をつけるような真似をしてしまいました」  
リーリエに続いてシロンとヒコザルもキモリに謝って頭を深々と下げた。キモリはそんなリーリエ達に気にしていないと首を横に振った。

「ねえ、やっぱりあなたあの時のキモリだったりする？」

カノンの質問にキモリは首を縦に振り返事を返した。

「っ？キモリを知ってるんですか？」

「うん。トキワシティに入る前にね。実は野生のポケモンかと思ってゲットしようとしたんだけど、返り討ちにされちゃってね」

「うん、とても強かったよね。そのキモリ」

「そうなんですか？私まだキモリとバトルしたことがないのだけど…」

カノンとサトルの言葉に首を傾けながらスマイレはキモリの方を向いた。キモリはスマイレから目を逸らし何事もない態度をとる。キモリの性格を良く知っているスマイレはそこまで気を止めることはなく、視線をシロンに写した。

「リーリエさんのロコンは白くて綺麗。本で知っただけだけどこれはアローラの姿のロコンですよ。もしかして、リーリエさんはアローラ出身なの？」

「はい。今はシロンと一緒にポケモントレーナーの修行のためここカントーを旅しているのです」

「そうなんだ。…私は小さい時から身体が弱くてとてもポケモントレーナーとして旅をするのは難しいんだけど、いつかはキモリとこの広い世界と一緒に旅が出来たらいいなって思ってるんだ」

そう言うスマイレにキモリはスマイレの手に自分の手を重ねた。そんなキモリをスマイレは優しく微笑みかけた。

「そういえば、キモリはハウエンのポケモンのはず。スマイレさんはもしかしてハウエン出身の方なんですか？」

サトルはキモリは見ながらスミレに質問をした。

「実はそうなんです。ホウエンの時はシダケタウンという小さな街に居ただけで、最近になってここトキワシティに病院を移したんだ」  
「どうしてトキワシティに？」

「空気が綺麗で温かみのある街ということもあるんだけど、トキワシティの名の由来は木の葉が常に緑色で色を変えないという常磐という言葉から来ていると聞いてね。緑色の木々に囲まれたこの街なら私にとってもキモリにとつても住みやすいと思ったからなの」

スミレの言葉にキモリも頷いた。トキワシティは二人にとつては互いに条件が一致している街なのである。

暫くリーリエ達とこれまでの旅の話をスミレとしてしていると消灯時間が来てしまったのか、スミレは病室に戻らなければならなくなつた。病室へ戻ろうとしたスミレにカノンは

「スミレって外出たりしても大丈夫？」

と聞いて来たカノンにスミレは

「ええ：そんなに遠くなければだけど」

不思議そうに応えた。

「だったら、明日また迎えにいくね」

スミレと会う約束をしたカノンにリーリエはカノンの目的を聞いた。するとカノンは笑顔でリーリエとサトルに返答した。

「明日、ポケモンバトル大会を開きます」

それはカノンによる突然の計画だった。

## 第十一話 彼女の願い

翌朝、カノン主催によるポケモンバトル大会が開催されることになった。朝食を終えたリーリエはカノンとサトルがスマレを迎えに行っている間にある人物に連絡を取っていた。

「アローラ！って、そちらはもう夜でしたね！」

「アローラ、リーリエ！そっちは朝か。こうも時差があると連絡があまり取りづらいけど、久しぶりに話せて嬉しいよ！シロンも元気そうだよかった！」

リーリエに続いてシロンもその連絡相手に大きく返事を返した。その人物はアローラ地方にあるアイナ食堂の看板娘でもあるリーリエの友達の一人、マオだった。

「他のみなさんは元気ですか？」

「元気だよ！卒業してもみんなが集まったりしてるからね。それよりも、お母さんのことはククイ博士に聞いたよ。よかったねリーリエ」

「はい。ですが、まだどうなるか分かりませせんが…」

「ダメだよリーリエ！そんなマイナス思考で考えちゃ！リーリエが信じてあげなくてどうなの？」

「そうですね。そのためにお母様に強くなったわたしを見てもらうために、こうして旅に出たのですから」

「そうそう！落ち込んでるよりもいつも元気なのがリーリエの取柄なんだから！」

久しぶりにマオと話せたリーリエは旅のことやマオから聞いたアローラのことなどをたくさん話した。時間はあつという間に過ぎてしまい、スマレを連れてカノンとサトルがポケモンセンターへと帰ってきた。

「それじゃあ、また連絡しますね。マオ！」

「うん！そっちに行ったとき、私にもリーリエの友達を紹介してよね！」

「はい！……って…紹介ですか？」

「時期に分かるよ！それじゃあ」

マオと連絡を終えたリーリエはマオが最後に言った言葉を不思議に思いながらも、カノン達が待つバトルフィールドへ向かった。

~~~~~

「ただいまより！カノンちゃん主催によるポケモンバトル大会を開催しまっす!!？それでは、第一試合両者前へ！」

先ほどカノンが用意したくじ引きにより、対戦相手が決定した。最初はリーリエとスマレによるバトルだ。

最初は体力的にスマレを参加させても大丈夫なのかと思ったが、スマレは少しなら大丈夫だと言うことなので様子を見ながら参加してもらおうことにした。

「スマレさん！よろしくお願いしますね！」

「こちらこそよろしく！リーリエちゃん！」

お互いに挨拶を交わしたところでスマレはポケモンをバトルフィールドへ向かわせた。

スマレのポケモンはもちろんキモリだ。

キモリを見て自分も前へと行こうとしたシロンだがリーリエに手を前に出され止められてしまう。

「ごめんなさいシロン。今日はコンビネーションを高めるためにも、ムツクルで行こうと思っています。シロンはまた今度ね！」

不満そうであるシロンだったが、渋々リーリエに承諾した。

「それでは！ムツクル出て来て下さい！」

リーリエはモンスターボールを取り出すと勢いよくバトルフィールドに投げた。ボールの中から元気よくムツクルが飛び出してきた。

「ムツクル！これがわたくしと貴方との初めてのバトルです。頑張りますよう！」

リーリエの言葉にムツクルも自慢の羽を広げて大きく鳴いた。

「飛行タイプか。相性は悪いけど頑張っ行って行こうキモリ！」

スマレの掛け声にキモリも自分の闘志を燃やした。お互いのポケモンが出揃ったところでいよいよポケモンバトル開始だ。

「では、始め!!」

カノンによる勝負開始の合図と共にキモリとムツクルは戦闘態勢を取り始めた。睨み合う両者。先に攻撃を仕掛けたのはムツクルだった。

「ムツクル! 【つつく】!!?」

「キモリ! 躲して【はたく】!!?」

嘴にエネルギーを蓄えたムツクルはキモリに向かって突進する。迫り来るムツクルをギリギリまで惹きつけたキモリはそのまま右へと躲す。ムツクルの後ろを取ったキモリは大きな尻尾を使って、後ろから攻撃にかかる。キモリの技が決まると思った瞬間…。

「ムツクル! 【かげぶんしん】です!!?」

姿が消えたと同時に、ムツクルは無数の自分の分身を展開させキモリの周りを取り囲む。

「えっと…この場合どうしたら…」

今回がバトルするのが初めてのスマレはこの状況をどう打破するか悩んでいた。その感情がキモリにも伝わったのか、キモリはすぐに複数のムツクルに向かって「タネマシンガン」を放った。無数に放たれた種はムツクルの分身を次々と消していき、一瞬にしてムツクルの分身は消えてしまった。

「キモリ……。ありがとう!」

キモリはすぐにスマレの方を向くと軽く頷いて返事を返した。そんな二人のバトルをカノンはワクワクさせながら見ていた。

『いい勝負しているロト!』

「ええ、リーリエもだけどスマレもやるじゃん! ねえ、サトル!」

「……………」

「サトル?」

「えっ! ……ああ…そうだね」

サトルは何か考えていた様子であった。どうかしたのかカノンはサトルに聞いてみようと思ったが、二人のバトルの熱気にそれはかき消されてしまった。

「ムツクル! もう一度【つつく】です!!?」

「躲して！キモリ!!？」

再び迫り来るムツクルの攻撃を今度はキモリは「あなをほる」で躲した。地中に潜ったキモリを見つけるためリーリエはムツクルに急速上昇するよう指示をだす。リーリエとムツクルは注意して周りを見渡していると、ムツクルのすぐ後ろからキモリが地中から飛び出した。すぐにスマイレは指示を出す。

「キモリ！「タネマシンガン」!!？」

キモリの攻撃がムツクルに迫り来る。

「ムツクル！「はがねのつばさ」で振り払って下さい!!？」

翼を硬化させたムツクルは自分の体を回転させながら、無数に撃ちだされた「タネマシンガン」を次々と弾き返した。全弾、弾き返したムツクルはそのまま攻撃に入る。

「「はたく」で迎え撃って!!？」

迫ってくるムツクルにキモリは大きな尻尾を振り払った。二匹の攻撃はぶつかり合ったことで小さな衝撃波が生まれた。その反動で二匹は後ろへと後ずさりした。技の威力は互角のようだ。

「やるね！リーリエちゃんのムツクル!!？」

「スマイレさんの方こそ！キモリもすごく強いです!!？」

「でも負けないよ！「でんこっせつか」!!？」

「こちらは「つつく」です!!？」

二人の指示で攻撃を仕掛けようとした二匹の前に、何処からともなく「ヘドロばくだん」による攻撃が飛んできた。

『これは一体、何が起きたロトか？』

爆風によつて巻き起こった砂煙の中から二人の人物が立っていた。その人物は以前にオーキド研究所を襲撃しに来たあの二人組だった。

「なんロトか？と聞かれたら」

「答えないのが普通だが」

「まあ 特別に答えてやろう」

その二人が名乗りをあげようとした時、カノンはすぐに大きな声でその二人の名前を叫んだ。

「あんたたちはオーキド研究所を襲った奴らね！たしか：ヤマトとコ

サンジ！」

「違あああう!!コサブロウだ!!!」

「それより、何でまたここに?」

「何って!ここトキワシティに訪れようとしたトレーナーに片っ端からバトルを挑んでくる強いキモリがいるって情報を聞いたから、そいつを捕まえに來ただけよ!」

「それでキモリを発見したところに偶々、お前達が居たってだけだ」

ロケット団の目的がキモリだと知ったスマレは急いでキモリを自分の元へ戻らせた。

「あの、あなた達が言っているそのキモリはたぶんわたしのポケモンなんですが…」

「そうみたいね!でも、そのキモリが野生ではないからと言って引き下がる我々ロケット団ではないわ」

「その通りだ。野生でないならそのキモリを奪うまでだ」

トレーナーのポケモンだったからと言って引き下がるような奴らではない。ロケット団の二人はすぐに自分達のモンスターボールを取り出した。

「出てきな!ヤミラミ!!?」

「出てこい!グラエナ!!?」

研究所で繰り出したポケモンとはまた違うポケモンを繰り出したヤマトとコサブロウ。その二体はジリジリとスマレとキモリに迫って行く。初めて悪の組織を前にして恐怖に震えているスマレの元にキモリを渡してはならないと、リーリエがロケット団の前へと立ち上がった。

「あつ!あなたはあの時のジャリガールね」

「丁度いい。その白いロコンもこっちでは珍しいポケモンだ。キモリとまとめて頂いてやる」

二人の合図とともにヤミラミとグラエナは威嚇を始めた。カノンとサトルもリーリエとスマレの元へ急いで駆け出した。

「サトルはスマレを安全なところまで連れてって!リーリエ、私も一緒に戦うね!行くよヒコザル!!?」



カノンはりーリエと一緒にロケット団に立ち向かい、サトルはスミレの車椅子を引いて安全な場所へと連れて行った。

「子供だからって手加減はしないよ！ヤミラミ！【パワージエム】！！？」

「グラエナ！【シャドーボール】！！？」

「シロン！【こなゆき】！！？」

「ヒコザル！【ひのこ】！！？」

四体の攻撃はぶつかり合い、中央で大きな爆発が生まれた。

「グラエナ！【かみつく】攻撃だ！！？」

「シロン！【こおりのつぶて】！！？」

シロンよりも先に攻撃を仕掛けたグラエナだが、シロンの先制技によりグラエナはそのままダメージを負った。

「ヤミラミ！【シャドークロー】！！？」

「ヒコザル！躲して【ひのこ】！！？」

ヤミラミの攻撃を躲したヒコザルはそのままヤミラミに火の玉を浴びさせた。攻撃を食らった二体は蹠踉めきながらも直ぐに体勢を立て直すと次の指示がでるまで身構えた。

旅の中で多くの戦闘経験を積んできたりーリエ達。そんな彼女達の成長にヤマトとコサブロウは少しばかり驚いているようだ。

「よし、ここなら安全だと思うよ！」

「ありがとうサトルくん！」

スミレを安全な場所へと置いたサトルは自分のモンスターボールを取り出すと二人の加勢に向かおうとしていた。

だがその時、突然自分達の方向に先ほどと同じく【ヘドロばくだん】が撃ち出された。その方向を向くと、奴らのポケモンであるツボツボがサトルとスミレの前に現れたのだ。

「くっ！僕だってやるぞ！！？頼むヒトカゲ！！？」

サトルもヒトカゲを繰り出し、バトルを始めた。

「ヒトカゲ！【ひのこ】！！？」

無数に飛び散る火の玉がツボツボに向かって放たれるが、それをツボツボは自分の殻に籠ってガードした。さらにサトルはヒトカゲに

【ひっかく】 攻撃を指示するも、再びガードされてしまった。

ツボツボは全ポケモンの中でも防御力が優れており、虫と岩の両方のタイプを持つポケモンだ。ヒトカゲの攻撃はどれもツボツボには大したダメージを与えられないでいた。

「くっ！ヒコザル!!？」

カノンはサトルを助けに行こうとしたが、ヤミラミがサトルの元へ行かせないようにその場に立ち塞がる。

「悪いけど、助けに行こうなんて思わないことね！」

「まずはあのジャリボーイから片付けてやるか！やれツボツボ！【ヘドロばくだん】!!？」

ツボツボの【ヘドロばくだん】はヒトカゲに命中してしまった。攻撃を受けたヒトカゲは追加効果で毒状態になってしまい徐々に体力が奪われていく。戦闘不能寸前のヒトカゲに追い打ちをかけるようにツボツボは再び【ヘドロばくだん】を撃つ構えを取った。

万事休すかと思つたその時、地中から飛び出したキモリがツボツボに一撃を食らわせた。

「キモリ！……よし、そのままツボツボを【はたく】で吹き飛ばして!!？」

【あなをほる】が決まったツボツボに今度は【はたく】でロケット団がいる方向にツボツボを弾き飛ばした。

ツボツボはそのまま飛ばされた先にいるグラエナの口にがっしりとはまってしまい、二体はもはや戦闘出来る様子ではなくなつてしまった。

「なんだと!!？」

あまりにも突然なことにヤマトとコサブロウは呆気に取られてしまった。

「今ですシロン！グラエナとツボツボに向かって【こなゆき】です!!？」

シロンの冷気がグラエナとツボツボの二体を包み込み、二体は一瞬にして氷漬けになってしまった。

「なあ！グラエナ！ツボツボ！」

「何やってるのよ！ヤミラミ！【シャドークロー】!!?」

「ヒコザル！【かえんぐるま】!!?」

ヒコザルは火炎を纏ってヤミラミに突進する。ヤミラミも影を纏った爪でヒコザルに切りかかるとするが、とっさにヒコザルはヤミラミの攻撃を躲してそのままヤミラミに【かえんぐるま】を決めた。技を食らったヤミラミは氷漬けになったグラエナとツボツボぶつかり、そのまま三体はヤマトとコサブロウに目掛けて吹き飛ばされた。飛んできた三体の下敷きになるヤマトとコサブロウはもはや次の指示を出す余裕がなくなってしまった。

「行きますよシロン！」

リーリエの指示のもとシロンは全身を光らせ始めた。その光は旅立つ前にみた太陽のような眩い光ではなく、月のようなとても神秘的な光だった。その光は一つの大きなエネルギーの塊となり一気に放たれる。その技の名は…

「【ムーンフォース】!!?」

「うわああああああああああああああああああ!!!」

放たれた月のエネルギー砲はそのままロケット団を吹き飛ばした。

「くっく！次会ったら覚えておきなさい！」

「俺達ロケット団の恐ろしさはこれからだ！」

「いやな気持ち!!!」

キラッ!!?

ロケット団はそのままロケットが月に向かうような速さで空の彼方へと消えて行った。

ロケット団との戦いを終えたリーリエとカノンは急いでサトルとスマレの方へ向かった。二人とも無事のようで、ヒトカゲもサトルが持っていたモモンの実のおかげで毒状態から解放された。

「ヒトカゲごめんよ。僕がちゃんと指示を出していたらこんなことに…」

うまくバトルをすることが出来なくて落ち込むサトルにヒトカゲ

は自分は大丈夫だと元気よく飛びついた。

「ヒトカゲも元気そうだし大丈夫だよ！それにトレーナーがそんな顔をしてると自分のために戦ってくれたポケモンに申し訳ないんじゃないかな？」

「…そうだね。ありがとうカノン！」

自分が言われたことをそのまま返して励まそうとしたカノンにお礼を言ったサトルはヒトカゲの頭を優しく撫でた。

「ありがとうねキモリ。貴方を守らなくちや行けなかったのに逆に貴方に守られちゃったね」

「それよりもなんでロケット団はスマレのキモリのことを知ってたんだろう？野生のポケモンでもないのにね」

「その事なんだけど…」

不思議そうに頭を傾けながら言うカノンを見たサトルはカノンの疑問に応えてあげるように説明をし出した。

「ロケット団の二人はトレーナーに勝負を挑むキモリの情報を耳にしたって言ってたから、おそらくその情報はキモリと戦ったトレーナーから広まったんだと思うよ」

「トレーナーから？じゃあスマレのキモリはそんなに多くのトレーナーと勝負をしたってこと？」

「僕はそうだと思う。リーリエとスマレさんのバトルを思い返せばね、その根拠もあったし」

そう、サトルはリーリエとポケモンバトルをしているスマレのキモリを見てはいくつか不自然な点を発見していた。スマレの指示とは別に「タネマシガン」を放ったり、回避の指示をすると「あなをほる」で躲したりと、まるでスマレにいま自分が使える技を見せてあげているような戦い方をしていた。そんなキモリの行動をサトルは気になっていたので。

その点を含めてサトルは一つの結論をスマレに聞いてみた。

「スマレさん。もしかしてキモリが「タネマシガン」や「あなをほる」を使ったこと知らなかったんじゃないかな？」

「えっと…うん。そんな技キモリが覚えていたなんて今日初めて知っ

たよ」

「それがなんなのサトル？」

「今言った二つの技はどれもキモリが自然に覚える技ではなく、練習しないと所得できない技なんだ。昨日スミレさんにキモリと戦ったことを話したらキモリと一緒にバトルをした事がないと言っていた。それなのに何故、一緒にバトルをしたことがないポケモンが独学でこの二つの技を身につけようとしたのか？」

サトルの疑問を理解したのかりーリエが口を開く。

「キモリはスミレさんに内緒でトキワシティに訪れるトレーナーの方々との勝負を受けていたということですね」

「内緒で？」

「特にマサラタウンから旅立った新人トレーナーの多くは、一番近い街であるトキワシティに向かいます。それを知ったキモリは街に入るトレーナーを待ち伏せていたのではないかと思えます」

「キモリと私達が初めて会ったの偶然じゃなくて、キモリが私達がここに来るのを待っていたってことなの？」

「そうだと思うね。それに戦う相手がほとんど新人トレーナーだったらオーキド博士から貰っているポケモンとは多くバトルを積んできたはずだよ。だったらフシギダネはともかく、ヒトカゲ対策に「あなをほる」をゼニガメ対策に「タネマシンガン」を所得したというならキモリがその二つの技を覚えた理由と辻褃が合うね」

説明し終わるとキモリは大きく頷いていた。その様子からサトルの推理は正しかったのだと四人は納得した。

「そうだったんだね。キモリ」

キモリの行動を知ったスミレはキモリを呼ぶと自分の膝に乗せ優しく微笑みかけた。

「キモリはホウエンにいた時からずっと私のそばに居てくれたから病院生活の中でも退屈する日はなかったんだ。だけど、時々思うことがあるの」

「思うことって？」

「……私のせいでキモリが本当にやりたいことが出来ないでいるん

じゃないかなってね……。キモリと毎日いる日は楽しいよ。でも、やっぱり私は……。キモリにはここだけではなくてもっと広いところを冒険させてあげたい。そう思うようになったんだよね」

車椅子をぐるりと回転させたスマレはリーリエ達の前に立つ。リーリエ達もスマレの方に目をやるとスマレの目は何かを覚悟したようにキリツとした目をしていたが、それと同時にその瞳の奥には寂しげな感情も伝わってきた。

「みんなにお願いがあるんだけどいいかな？」

スマレは重々しい口を開いてリーリエ達にあるお願いをした。その内容はスマレの口から出て来るとは考えもしなかった内容であった。突然のことに困惑するリーリエ達。しかしスマレの真つ直ぐな目からはそれは冗談ではないことだと伝わった。スマレがリーリエ達にお願いしたいことそれは……

「キモリと一緒に連れてってあげてくれない？」

突然のことにリーリエはスマレに問いかける

「どうしてですか？スマレさん!!!だってスマレさんはキモリと一緒に旅をすることが夢だったのでは……」

「それは私の願望だよ。その夢がいつか叶うかも分からない根拠もないものだよ。そんなものにキモリをいつまで待たせる気なんて出来ないよ」

キモリを旅に出させる。それはスマレとキモリが離れ離れになることを意味するものでもある。戸惑うリーリエ達とキモリにさらにスマレは話を続けた。

「それにはもう一つどうしても叶えたい願いがあるんだよね」

「願いですか？」

「うん！それはね。キモリが心優しいトレーナーとこの広い世界を旅をして、新しい仲間と出会ったり、そしていつかはキモリがポケモンリーグで戦っている姿を見たい！それが私のもう一つの願いなんだ！他のポケモンと同じような経験をさせてあげたい！ここに閉じこもっているよりもキモリには私の分までこの広い世界を見て欲しいんだ！だから！……だから……キモリのこと……お願いしても……いいかな？」

スマレは寂しい気持ちを我慢するようにキモリのモンスターボールをリーリエ達の前に差し出そうとした。その時……

ガツ!!?

「キモリ!!!」

スマレの手から無理矢理に奪い取ったモンスターボールを手にキモリは、そのままリーリエ達に離れて行った。スマレと離れたくない、そんな思いがキモリから伝わってくるような感じがした。

「いま、キモリがスマレさんに内緒で多くのポケモントレーナーの方々とバトルをしていた理由がなんとなくわかりました。」

「理由？」

「スマレさんが安心して旅に出られるようにキモリはスマレさんを護れるぐらいに強くなるうとしていたんですよ。ポケモンバトルをしていた時もキモリはスマレさんの様子を見ながらバトルをしていましたし、少しでもスマレさんの身体に負担がかからないように自分の判断で動ける力を身につけようとしていたのですよ。そうですねキモリ」

優しく語りかけてくれるリーリエにキモリは大きく頷いた。スマレと同じようにキモリにも叶えたい夢と実現したい願いがあった。二人のそれぞれの願いの真意を知ったりリーリエはゆっくりとキモリの元へ歩み寄る。

「スマレさんは叶う根拠のない未来を追い続ける願いではなくキモリには今を歩き出すことが出来る新しい願いを持って欲しいと思つて

いるのです。ですがそれをどう受け止めるかは貴方自身が決めることです。無理矢理連れて行くとは思っていませんので、そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。キモリがスマレさんのことが大好きな気持ちは私達も知っていますから！」

リーリエの暖かい感情が伝わったのか、キモリは徐々に冷静さを取り戻した。そしてキモリはスマレの方を向くとこれまで過ごしてきたスマレとの思い出が回想となって頭の中に流れ込んできた。

自分が野生だった頃、その日は雨が降っていた。止むを得ず近くの木の下で雨宿りしていると、近くの家の窓から中に入ると呼びかけられた。その呼びかけた人物こそスマレだった。初めて人の優しさに触れたキモリはいつしか頻繁に彼女の元を訪れるようになり、やがて彼女のパートナーとなった。あの時、一緒にポケモンリーグの中継をテレビで観ながらいつしか一緒にあの舞台に立つ約束を交わしたことも今でも覚えている。忘れるわけがない。その約束を果たすためにキモリは強くなろうとしたのだから……

その想いはスマレも同じだった。だけど、それは必ず叶うか分からないのも事実。だからこそスマレは自分の分までキモリには、広い世界を見て回って欲しいと思うようになったのだ。スマレのためにと行動してきたキモリ。なら、今スマレのためにしてあげて自分を成せばいいのではと、スマレの今の想いを感じ取ったキモリは次第にそう考えるようになった。それが彼女の願いがああ時の願いに繋がるのなら……

キモリは一步一步前に進む。進む先は違うが目線はスマレの方を見ていた。キモリは覚悟した表情でスマレに軽く頷いた。それに対してスマレは笑顔で大きく頷いた。彼女を見て安堵したキモリは自分が持っているモンスターボールをある人物に差し出した。一人のトレーナーの想いと一体のポケモンの覚悟を悟ったその人物は差し出されたモンスターボールをキモリの手と一緒に優しく握りしめた。スマレとキモリの想いを覚悟を、そして願いを受け止めるかのように

……



「それじゃ、スマレ！私達もう行くね！」

「身体には気をつけて」

「うん！みんなも気をつけてね」

リーリエ達は次の街であるニビシティへ出発しようとしていた。その中にキモリもいた。キモリはもう一度スマレの手を握りお互いにゆつくりと抱き合った。寂しさはあるがキモリの主人がスマレであることは変わらない。離れていても二人の想いはずっと一緒である。その気持ちをしっかりと再確認した。そして新たにキモリと一緒に旅をしてくれるトレーナーに目を向けた。

「キモリのことよろしくね！リーリエ！」

「はい！任せて下さい！そして必ずスマレとキモリの夢を必ず叶えてみせます！」

「うん！キモリもしっかりね！」

リーリエとスマレはお互いに握手を交わした。そんな二人にカノンとサトルは次のことを話し始めた。

「だけど、リーグ前にはまた会えるよりリーリエ！スマレ！」

「え？そうなんですかカノン」

「実はここトキワシティにもポケモンジムがあるんだけど、そのジムはカントー最強と言われていていまの僕達のレベルじゃ太刀打ちできないジムなんだ」

「私達はトレーナーズスクールで聞いたことがあったから分かっていたんだけどリーリエに伝えてなかったなあと、今さっき思い出したんだ。ごめん♪ごめん♪」

「そうだったんですね。それでしたらまたここを訪れることになりますから、また会えますよ！スマレ！」

「うん！また会おうね!!!」

こうして、お互いに再開を約束しリーリエ達は次の街であるニビシティへ旅立った。

スマレの想いを胸に旅立ったキモリをスマレは手を振り続け、キモリも自分の背中を押ししてくれたスマレに手を振り続けた。それはお互いの姿が見えなくなるまで続いたのであった。

## 第十二話 森の怪物

### トキワの森

トキワシティとニビシティの境にあるカントー最大の森。ここにはたくさん草や虫タイプのポケモンが多く生息している。多くのトレーナーはニビジムに挑むために修行の場として利用されている。

そんな中、リーリエ達もニビシティに挑むためのトレーニングを兼ねてトキワの森に足を踏み入れていた。何やら、技の練習をしているようだ。

「ヒコザル！ヒトカゲ！」

「あなをほる」!!!」

ヒコザルとヒトカゲはキモリから「あなをほる」を教わっていた。ニビシティは岩タイプのジムなため、それに有効な地面タイプの技はどうしても覚えて置きたいのだ。そんな二匹もキモリの指導もあつてか、徐々にコツが掴めてきたようで少しずつ形にはなってきている。

『だいぶ出来てきてはいるロトね』

「はい！二匹ともかなりいい感じですよ」

「そうだね。少し休憩を入れようか」

二匹の疲れを癒すために、サトルは近くで採取したオレンの実を取り出し二匹にそれぞれ手渡ししてあげた。この森は色々な木の実もなっていて野生のポケモン達にとってはとても住みやすい環境のようだ。

主に森を住処にしているムツクルやキモリ、フシギダネやピカチュウはとても気持ち良さそうにしている。

「ピカチュウはとても嬉しそうですね」

「うん。実は僕のピカチュウはここトキワの森で出会ったんだ。」

「そうだったんですか」

「まだ、進化前のピチューだった頃にね」

そう言うと、ピカチュウの方を目にやるとピカチュウは木の実を見

つけ出しそれを美味しそうに食べていた。久しぶりに帰ってきた故郷にピカチュウはとても機嫌いいようだ。

「ニビシティに着くまでには『あなをほる』は完璧にマスターして置きたいね」

「でも、ヒコザル達もだんだんと出来てきてはいるし！もう一踏ん張りすればいけるよ！これも指導してくれるポケモンがいるおかげだね。付き合ってくれてありがとね。キモリー」

お礼を言うときモリは軽く頷いた。トキワシティから一緒に旅に出たばかりであったが、もうすっかりキモリはみんなとも馴染めてはきたようだ。クールな性格でもあって、あまり笑うことは無いがシロンを初めとした他のポケモン達との輪の中には入っていているように、その様子をみたリーリエは少しばかり安心している。

「ですが、サトルは大丈夫でしょうか？」

「えっ、何が？」

「いえ、変なつもりで言ったわけではないのですが……。ニビシティは岩タイプのジムだとお聞きしましたので、今のサトルの手持ちポケモンでは少し厳しいのではないかと思うのです」

リーリエの言っていることは最もであった。岩タイプのジムであるなら炎タイプのヒトカゲは相性的に不利。相手はジムリーダー。『あなをほる』をマスターしたところでそう簡単に勝てる相手ではない。

さらには岩タイプには地面タイプを持っているポケモンが多いため電気タイプのピカチュウも相当不利である。リーリエにはキモリ、カノンにはフシギダネとみたいに、この時点でサトルは相性からして有利なポケモンが手持ちにいないのだ。

「この際サトルはここで草タイプのポケモンを仲間にした方がいいんじゃない？」

『そういうことなら、草タイプのポケモンがどこに潜んでいるかサーチしてみるロトよ』

すぐにロトムはこの辺りに生息しているポケモンの情報をかき集めた。

『この森に草タイプのポケモンが生息している確率は80%ロト！かなりの数のポケモンが多く生息しているロト！…だけど、どんなポケモンがいるかまではわからないロト』

「それなら任せて！え…つと…」

新人トレーナーのサポートナビとして有能なロトム凶鑑だが、自己学習型のため生息しているポケモンの出現率は分かるが、どんなポケモンが生息しているかまでは分からないのが欠点などところである。自分のポケモン凶鑑を取り出したカノンはすぐにトキワの森に生息している草タイプのポケモンを調べ始めた。

「ここにいる草タイプのポケモンは…ナゾノクサ、ハネッコ、キノココ、スボミー、マスキツパ、それと…」

すると、何処からともなく木の上から一体のポケモンが飛び掛かってきた。そのポケモンは丁度、真下にいたサトルの頭めがけて飛び込んできた。

「いったあああああああいいいいいいいい!!!」

サトルに飛び込んできたそのポケモンは自分も相当痛かったであろう、頭の痛みに耐えながらもすぐに三人の前に飛び出した。

「くっ!!?」一体何なんだよ」

「このポケモンは?」

リーリエ達に現れたのは葉っぱの帽子を被った芋虫のようなポケモンだった。だが、それはキャタピーではない。ロトムはいつものようにそのポケモンの解説を始めた。

『クルミル さいほうポケモン

虫・草タイプ

葉っぱを噛み切り口から出す粘着糸で縫い合わせる。自分で服を作るポケモン』

「クルミルって言うのですね。わたくし始めて見ました」

「私もだよ。たしかこのポケモンも元々は……ハウエンのポケモンだった気が！」

「イツシユ地方だよ。いてて…本来クルミルはイツシユのヤグルマの森に生息しているポケモンなんだ」

「そうなのですね。それにしても、くすつ…。凄く元気な子ですね!!？」

クルミルはリーリエ達を見るなり、その場でジャンプを繰り返していた。野生にしては珍しくトレーナーを見ても何処かへ逃げ出したりしないポケモンであり、むしろただらない愛着を見せていた。

「そうだ！サトル。この子ゲットしたら！」

「え?」

「この子なんか人懐っこそうだしいいと思うよ。それに結構可愛いし」

カノンの提案に少し考えたサトルだが、リーリエに言われたこともある。空のモンスターボールを手に取るとヒトカゲを自分の前に出す。

「よし！やってみるか。頼むヒトカゲ！」

サトルの掛け声とともにヒトカゲも小さな火の玉を口から出し、やる気の様子を見せた。それをみたクルミルは逃げることはなかった。どうやらヒトカゲとの勝負を受けてくれるようだ。

「ヒトカゲ！【ひのこ】!!?」

無数の火の粉がクルミルに向かっていく。クルミルは口から糸を出し、近くの木の枝に糸をくつつけると、そのまま吐き出した糸を辿るようにして移動しヒトカゲの攻撃を躲した。攻撃を躲したクルミルは今度はヒトカゲに向かって糸を放射した。

「次は【ひっかく】だ!!?」

その糸をヒトカゲは鋭い爪で糸を切りさく。だがクルミルは怯むことなくヒトカゲの頭上から糸と【はっぱカッター】を交互に繰り返しながら攻撃する。

「やるね。あのクルミル」

「ええ、やはりフィールドがクルミルにとって戦いやすいのもあると

思います」

サトルがクルミルとバトルしている中ピカチュウは何かの気配を感じたのか、辺りを見渡し始めた。ちよくちよくピカチュウの頬袋に電気が流れると、さらに気になり出したピカチュウは近くの木へと駆け登った。そんなピカチュウの行動にリーリエは不思議に思った。

「ピカチュウ、どうしたのですか？」

リーリエの呼びかけに気づいていないのか、ピカチュウは辺りを見渡し始める。すると気配を感じたピカチュウの目に止まった木の影から電撃が放たれ、それがヒトカゲに直撃してしまった。

「ヒトカゲ!!!」

あまりにも突然なことにサトルはすぐにヒトカゲの元へ駆け寄った。

「大丈夫か？ヒトカゲ」

「えっ、いまの電撃は？」

『クルミルが放ったものではないロト。それにこの近くに別のポケモンの気配がするロトよ』

その犯人はすぐに分かることになる。その木の影から一体のポケモンがクルミルと同じように飛び出してきた。そのポケモンはピカチュウよりも体が小さい、ピカチュウに似ているポケモンだった。

『デデンネ アンテナポケモン』

電気・フェアリータイプ

ヒゲがアンテナの役割。電波を送受信して遠くの仲間と連絡を取り合うのだ』

カロス地方に生息しているポケモン、デデンネ。どうやらピカチュウはデデンネから発生された電気の帯を感じとっていたようであった。初めて見るその愛くるしい姿にリーリエとカノンは惚れ惚れしてしまった。

「わああ、可愛い!!!」

「電気タイプだけでなくフェアリータイプも併せ持っているのですね！それにしても可愛いです！」

『二人はすっかりメロメロ状態ロトね〜』

見惚れている二人には気にも留めず、デデンネはクルミルの元へ駆け寄ると少し慌てた様子でクルミルに訴えかけていた。デデンネの話に何のことやらと、思っているクルミルにデデンネは呆れた様子でクルミルの背中を軽く叩く。どうやら、この二体は仲間であることはこの二体のやり取りから何となく察しがついた。

今度はリーリエ達の方へ向いたデデンネは同じ電気タイプのピカチュウの元へ向かうと何やらピカチュウに話始めた。デデンネの話を聞いて慌てた様子になったピカチュウはすぐにサトルの方を向くと必死に鳴き始めた。

「何かを知らせたい？」

「えっ??」

「ピカチュウのこの様子から見るとデデンネは僕達に何か伝えたいことがあるみたいだよ。もしかして：クルミルも何かを伝えるために僕達の前に現れたんじゃないかな」

すると、デデンネは何処かへ駆け出しに行くとその後に続いてピカチュウとクルミルも走り出す。少し離れたところで足を止めると、リーリエ達に振り向いたデデンネは手でこちらに招く仕草を始めた。

『付いて来い。そう言ってるみたいロト』

「とにかく行ってみましょう！」

デデンネの仕草を見て、瞬時に理解したリーリエ達も急いでデデンネの後を追いかけて行った。

~~~~~

暫く走っていくと、前から一軒のツリーハウスが見えてきた。その中に入っていくデデンネ。続けてクルミルとピカチュウもその建物



の中に入って行った。

ピカチュウの後を追うようにその建物の中に入るとサトルに気づいたピカチュウはサトル元へ戻って行った。ピカチュウが手元に帰って来てくれて安心したリーリエ達は目を前にやると、一人の人物の影が見えてきた。そこに居たのは甲冑の鎧を身にまとっている戦国時代にいる侍の格好をした一人の青年であった。

「むっ、お主達は？」

「えつと…勝手に上がりこんでしまってますいません。僕達は別に怪しい者ではありません。さつき知り合ったクルミルとデデンネに連れられてここまで来たのです」

「旅の途中のトレーナーでござるな。しかしここは拙者が入り口の前に立ち入り禁止の立札を立てたはずなのでござるが…どうやら、虫ポケモン達に食べられたようでござるな」

よく周りを見てみると、デデンネやクルミル以外にもたくさんのか、お互いに身を寄せ合いながら端の方で震えていた。この様子からやはり何かあったに違いない。

「あの…おサムライさん。立ち入り禁止と言いますと、やはりこの森で何かあったのですか？」

「そうでござる。」

そういうと甲冑の青年はリーリエ達を木で出来たソファアに座らせると、説明し始めた。

「拙者はここを拠点として、訪れにくるトレーナーに出会ってはバトルを申し込み、ポケモン修行を育んできたでござる。まあ…それは昔の話で、今はここトキワの森のポケモン管理官を務めているでござる」

「おおっ！リーリエのキモリと一緒に！」

「カノン…。話を晒させないで……」

「……本題に入ろう。カントーの環境の変化により様々な多くのポケモンが住み着いてきているのはお主達も知っていると思う。それにより他のポケモン達との縄張り争いが絶え間なく続き、本来住んでい

たポケモン達が追い出されてしまうケースが出てきたのでござる。」

その問題はたしかに深刻な物である。今まで生息確認がされていなかったポケモンが出てくることで、縄張り争いにより闘争心が強くなりすぎたポケモンが容赦なく訪れたトレーナーを四方八方から襲いかかったり、行き場を無くした野生のポケモンが近くの街に住み着くケースも度々増えてきてしまっている。

いろんなポケモンに出会えることはトレーナーとしてはメリットではあると思うが、その分デメリットの方が大きいのである。

「本来、拙者はトキワの森の主でもありここら辺の鳥ポケモンの群れのリーダーであるピジヨットと一緒にここを護つて来たのでござるが、最近になって別の地方からやってきたポケモンにこの森の半分ぐらいが征服されてしまったのでござる。しかもそのポケモンのレベルがとても高く何よりも拙者はまだ全てのポケモンの情報に関してはまだ無知な部分もあるためお手上げの状態なのでござるよ」

「そのピジヨットはいまどちらに？」

「いま、鳥ポケモンの群れを連れて進化の儀式のためにここを空けているのでござるよ。いつこっちに戻ってくるかわからないでいるのでござる」

「そのピジヨットはおサムライさんのポケモンではないのですか？」

「拙者のポケモンでもないが、野生のポケモンでもない」

「「??」」

「まあ、それはおいといて。ピジヨットが留守をしている間に別のポケモンがこことキワの森を縄張りにしようとしている奴が出て来たのでござる」

「そっか、クルミル達はそれを私達に伝えたかったのね」

等の本人はと言うとそんなことも忘れてサトルに対して闘志をあらわにしていただけであつたが、クルミルが攻撃的になつていたのも今回のことが影響しているのではないかと思う。

それに自分の手持ちであるピカチュウの故郷が大変なことになっているのであれば見過ごすわけにはいかない、何に力になりたいと思つたサトルはサムライ青年に情報を教えて貰おうとした。

「サムライさん。その今トキワの森を征服しているのはどんなポケモンなんですか？特徴とか何でもいいから知つていることを教えてくださいませんか？」

サトルの問いにサムライ青年は答えた。

「うむ。全体が紫色で体の大きい割にはとても素早いポケモンでござる。タイプは【どくばり】や【メガホーン】といった技を使つてくることから毒と虫タイプだと思つてござるよ。」

すぐにサトルはポケモン凶鑑を取り出すと毒と虫ポケモンに絞つて、該当するポケモンを探した。

「このポケモンですか？」

「おおー其奴でござるー！」

そのポケモンはやはりカントーに生息していないはずのポケモンだった。その見た目から獰猛なイメージが強いポケモンでもあった。

『ペンドラー メガムカデポケモン

虫・毒タイプ

素早い動きで敵を追い詰め頭のツノで攻撃する。とどめを刺すまで容赦しないとても攻撃的なポケモン』

「ペンドラーか。これは厄介なポケモンだね」

「こんなポケモンに出会つたら、私達みたいに旅に出たばかりのトレーナーには無理だよ！」

ペンドラーの凶鑑データを確認したサムライ青年は今度はあるポケモンを調べて欲しいとサトルに注文する。

「このペンドラーとやらの進化前のポケモンはいるのでござるか？居たら其奴も調べて貰いたい」

「わかりました」

すぐにサトルはペンドラーの進化前に値するポケモンであるフシデとホイーガをサムライ青年に見せた。その二体を見た彼の表情は次第に固くなり、眉間にしわを寄せながら首を少し横に傾けた。

「…やはり、可笑しいでござる」

「可笑しいとはなんですか？」

「拙者はここに生息しているポケモン達のごときは全て把握しているでござる。しかし其奴の進化前であるそのポケモン達の姿は確認していないでござる」

「つまり、ペンドラーの進化前のポケモンをここには生息していないということ？」

「ここには何年も住んでいる拙者が言うのだ間違いない。つまり進化して現れたポケモンではないということでござる」

これほどの他方からのポケモンがカントーにいたのでそのポケモンもトキワの森に在ると考えても不思議ではないと思っただが、その進化前のポケモン達はこの森に住み着いていないことが判明された。

なのにペンドラーが突然として現れた理由。それは……

「誰かに捨てられたポケモン？」

それはカントーの生態を変えた原因の一つでもあり、人間の身勝手さが巻き起こした最も卑劣な行いであった。

「そうだとしか考えられないと思うよ。進化前のポケモンもいない、それなのに突然としてこの森に現れたポケモンってことからね」

「それが本当なら酷いよ。だってせっかく仲間になつてくれたポケモンにそんなことするなんて！許されることじゃないよ……」

トレーナーとして旅に出たばかりのリーリエ達にはとても考えにくいことだ。リーリエ達と同じくポケモントレーナーを夢に見た者がなぜそんなことを平気でやれるものなのかと、静かな怒りと胸の痛みがこみ上げてくる。

すると、何処からかデデンネは慌てた様子でサムライ青年の元へと向かった。髭に少しばかり電流を発していたその様子をみて、サムライ青年もすぐにその場を立ち上がる。

「どうしたんですか？」

「おそらく奴が現れたでござるよ」

「奴ってペンドラーのこと？」

「デデンネの髭はアンテナの役割になっていいて、電気を使って他の電気タイプのポケモンと交信をすることができるのでござるよ。たぶん、野生のピカチュウからのSOSをいま受け取ったのでござるな！デデンネ！案内するでござるよ」

家の外に飛び出したデデンネの跡を追うようにサムライ青年もすぐに外に出た。

「私達も行ってみよう！」

カノンの一言に真っ先にサトルのピカチュウは外へと飛び出して行った。同じ電気タイプのピカチュウならデデンネが行った場所までわかっているであろう、ピカチュウを先頭にリーリエ達もペンドラーが現れたという場所へと向かった。

くくくく

見渡す限り木々が生い茂っている。一回でも方向を間違えると、一瞬で迷い込んでしまうであろうトキワの森。だが、いまのリーリエ達はそんな心配はなかった。同じく繰り返される光景には気には止めず、ピカチュウは木から木へと走りぬく。それを追うようにリーリエ達も無事に目的である場所にたどり着いた。そこには先ほど先に向かっていたサムライ青年とデデンネ。そして、すっかり怯えきっているピチュウとピカチュウ達が身を寄せ合っている。

「野生のピチュウとピカチュウだ！」

サムライ青年の隠れるとの合図ですぐにリーリエ達は茂みに身を隠した。サムライ青年が指指した向こうにはポケモン図鑑で調べた通りであった、ペンドラーの姿を確認した。

『いた口ト！あれがペンドラー口ト！』

「大きい……」

「また、他のポケモン達の住処を奪っているのでござるか。慣れない

環境に放り出されイラつく気持ちは分かるが、これ以上はもう好きにはさせられないでござるよ!」

茂みから身を乗り出したサムライ青年はペンドラーの前にと立ちふさがった。突然現れた人間にペンドラーは威嚇を始めた。リーリエ達は自分達が今まで見てきたポケモンとは違う迫力差に一瞬、身ぶるいをしてしまった。だが、そんな中サムライ青年は震え上がるところか一歩と前にと進むとペンドラーを説得しにかかる。

「ペンドラー殿!お主が辛い気持ちは分かる!だがここで暮らすには他のポケモン達の事も考えるでござるよ!お主には協調性というものを持たねば……」

説得は虚しく、ペンドラーはすぐさま毒液をサムライ青年の少し前に向けて放たれた。当たらないように攻撃を仕掛けたというと次はこのままで済まさないというペンドラーからの忠告であろう。

「おサムライさん!!!」

「くっ、ならば仕方ないでござる!出陣でござるよ!」

放たれたモンスターボールからは一体のポケモンが出現した。もうこうなれば戦うしかペンドラーを大人しくさせる手段がない。

『カイロス くわがたポケモン』

虫タイプ

自分の体重の二倍もある相手をつノで挟み軽々と持ち上げる。寒い場所では体の動きが鈍る』

カイロスの出現にさらに興奮したペンドラーは頭の上の角を身ぶるいさせ、攻撃体勢に入る。

「覚悟するでござる!カイロス!【はさむ】 攻撃!!?」

カイロスは自慢の鋏を大きく広げ、ペンドラーに向かって走り出す。それに対抗するようにペンドラーは角を前に出し、虫タイプ最強

クラスの技「メガホーン」を繰り出す。

「受け止めるでござるー！」

ペンドラーの猛攻をカイロスは自慢のパワーで受け止めた。さらに鉄でペンドラーの体を掴むとそのまま自分の体重の倍以上もあるペンドラーを軽々と持ち上げた。

「すごいー！」

「そのまま投げ飛ばすでござるー！」

投げ飛ばされたペンドラーは木に叩きつけられてしまった。ダメージを負ったペンドラーに攻撃の手を緩めることなくカイロスはすぐ様次の攻撃を仕掛けに行く。

だが、もうすでにペンドラーは次の攻撃を繰り出していたことにサムライ青年もカイロスも気づいていなかった。毒エネルギーが帯びた長い尻尾がそのままカイロスを横に大きく振り払ったのだ。それなりに距離はあったのだが、胴体が長いペンドラーには関係のないことであった。

「カイロス!!!」

『今のは「ポイズンテール」だロト!』

「しっかりするでござる。カイロス!」

勝利を確信したのか、笑みを浮かべるペンドラーはさらに「どくばり」で追い討ちを掛けた。

「【ひのこ】!!」

無数に放たれた毒針は何処からか放たれた火の粉よって消されてしまった。ペンドラーは知らなかったのだ、自分が戦っている相手がサムライ青年のカイロスだけではなかったのだと：火の粉が放たれた方角に目を向けるとそこには三人のトレーナーが立っていた。

「お主達!!!」

「私達にも手伝わせて下さい!」

「あのペンドラー相当強いけどみんなで力を合わせれば倒せない相手じゃないね」

「うん!それじゃ行ってみますか!」

さらにイラつきが増したペンドラーは唸り声を上げトキワの森全

体を轟かせた。その威圧は辺りの野生ポケモン達が一斉にして逃げ出してしまうほどである。だがそんなものに負けるかと、リーリエ達もそのポケモン達もバトルの体勢を取り始める。

「シロンー！【こなゆき】!!? キモリー！【タネマシガン】!!?」

「ヒコザル！ヒトカゲ！【ひのこ】!!」

シロン達の攻撃が一斉に放たれた。しかしペンドラーはその巨体に似合わず、物凄いスピードでシロン達の攻撃を意図も簡単に躲いだのだ。

さらに攻撃を続けるのだが当てることができない。何を隠そう、ペンドラーは自身のステータスの中でも攻撃よりも素早さが最も高いポケモンなのだ。

「ダメー！早すぎるよ〜」

「あの素早い動きを封じない限り、わたくしたちの攻撃が当りません。どうすれば…」

素早さを封じるにもシロンの【こごえるかぜ】も当たらなければ意味がない。頭を悩ませる中、サトルはクルミルの方へ目をやるとある策を思いついた。

「そうだクルミル！君の粘着性が高い糸ならペンドラーの動きを封じることが出来るかもしれない！」

自分の帽子を縫い合わせるほどの粘着性の高いクルミルの糸なら、あのペンドラーの動きを少しばかりか止めることが出来るかもしれない。サトルの一言にクルミルを打ってくれるように、小刻みにジャンプしながらそれを表していた。

「ですが、攻撃が当たらなければ意味がないのでは……」

「……僕に考えがある。いいみんな！」

すぐにサトルは簡潔に自分が考えた作戦をリーリエとカノンに伝えた。リーリエはさらにモンスターボールからムツクルを取り出すと、二人はすぐにサトルの指示のもと自分達のポケモンに指示を出す。

「お願いします。ムツクル！キモリ！」

「ヒコザルもお願いね！Go!!?」



「ピカチュウも頼むー！」

ムツクルはペンドラーの周りを飛び、他三体は木から木へとつたつて同じようにペンドラーの周りを駆け回り始めた。

振り払おうとペンドラーは攻撃を仕掛けるがキモリ達は反撃することなくその攻撃を躲し続ける。すると攻撃を続けるペンドラーの動きが急ブレーキがかかったようにその場で止まってしまった。キモリ達の動きに気を取られすぎたのか、足元に目をやるとそこら中に糸が張り巡らせておりそれに足を取られてしまったようだ。

「よし、上手くいったー！」

キモリ達がペンドラーの気を引いているうちにクルミルは糸をペンドラーの行動範囲に張り巡らせていたのだ。それに気づかないペンドラーがその糸を絡ませて動きを封じる。これがサトルが考えた作戦だったのだ。

ペンドラーは必死にその糸から逃れようとするが、へばりつく糸から中々脱出できないでいた。

「フシギダネー！【つるのムチ】!!?」

さらに動きが止まったペンドラーにフシギダネはつるでがっちり拘束し、暴れないようにペンドラーを押さえつけた。

「シロンー！【ごごえるかぜ】!!?」

さらにリーリエはシロンの技で攻撃を仕掛ける。

『糸が切れるロト!!』

更新の力でなんとか糸の呪縛から解き放たれたペンドラーはシロンの方を目にやると、毒針を放射する体勢を取った。だが、もうすでにリーリエ達は次の攻撃の指示を送っていたことにペンドラーは気づいていなかった。

先程までペンドラーの周りを駆け回っていたキモリとヒコザルの姿はもうなかった。毒針を放射しようとして頭を前に乗り出したペンドラーに向かって、地中から三体のポケモンが飛び出した。【ごごえるかぜ】の追加効果もあったと思うが、判断が遅れたペンドラーはその攻撃を躲すことが出来なかった。

「【あなをほる】!!」

練習していた技が成功した。キモリとヒコザルとヒトカゲのトリプル攻撃は見事にペンドラーに決まった。虫タイプも加わっているので効果は抜群までにはいかなかったが、放とうとした毒針エネルギーも暴発し、そのダメージも合わさったこともあり十分なダメージを与えることができた。

フラつくペンドラー。キモリ達を呼び戻すとサムライ青年は最後の一撃をペンドラーに食らわせた。

「いまでござる！カイロス【ギガインパクト】!!？」

ノーマルタイプ最強の物理技が決まる。衝撃波が辺りに広がりその威力は凄まじいものであった。流石のペンドラーもこの攻撃を食らってしまったとなればもう戦う力が残されていない。カイロスに吹き飛ばされた後、その場で気絶してしまった。

「行けっ、モンスターボール！」

サムライ青年が投げたモンスターボールはペンドラーに向かって投げ出される。そのままペンドラーは吸い込まれていき、モンスターボールの開閉スイッチはしっかりと閉められた。

「ペンドラー捕獲完了でござる」

ペンドラーの捕獲が無事に完了されたことを知った野生のポケモン達は安心した様子でリーリエ達の周りに集まっていく。

「やりましたね」

「ああ…お主達が協力してくれたおかげでござる。忝ないでござる」

サムライ青年は深々とリーリエ達に頭を下げた。それに続くかのように野生のポケモン達もありがとうと言わんばかりに一齐にリーリエ達の周りで騒ぎ始めた。さつきまで静かだったトキワの森が急に騒がしくなり、リーリエ達はトキワの森にはこんなに多くのポケモン達が住んでいたのだと、改めて知ることが出来た。

「そのペンドラーはどうするのですか？」

「そのまま保護施設に預けるでござるよ。ペンドラーの侵入経路についても調べないと行けないでござるからな」

悪いようにはされないようで安心するリーリエ達。ペンドラーは好き勝手に暴れていたのではなく慣れない土地での生活によるスト

レスによつて引き起こされた物であることは分かっている。一番辛かったのはペンドラーであつたことは忘れてはいけないのだ。

「これもすべてサトルのおかげだよね」

「えっ…僕が?」

「そうですよ。サトルの適切な作戦のおかげで無事にペンドラーを保護することができたのですから。とてもカッコ良かったですよ」

「そ…そんなことは…」

「あゝサトル、リーリエにカッコ良いつて言われて照れちやたのかな  
〜♪」

「つつ!!? だけどみんなが力を合わせてくれたからこそ、この問題を解決できたんだし僕一人のおかげではないよ!それにクルミル達のおかげでもあるんだから、ありがとうクルミル!」

赤面した顔を誤魔化すようにサトルはクルミルに目をやる。クルミルもその場で小刻みにジャンプしていると、いきなりサトルの胸に向かつて体当たりしてきた。

「いてて…いきなりどうしたんだよ。クルミル?」

痛がるサトルに御構い無しにクルミルはサトルに笑顔を向けている。問題が解決したのにも関わらずクルミルはサトルの元を離れようとしないでいた。その様子を見たサムライ青年は笑いながらサトルに話かけた。

「はははっ…どうやら、クルミルはお主のことを気に入ったようござるよ。」

「えっ?」

「お主の戦いぶりを見て、自らお主のことを主人として認めたといいことござるな」

「そうか…クルミル。もしよかつたら僕と一緒に旅を試みないかな?」

サトルの問いにクルミルは大きく返事をする。どうやら、サトルの手持ちに加わってくれるようだ。

「やったね!サトル!」

すぐにサトルは空のモンスターボールを取り出すとそれを見たクルミルはサトルから少し離れて行った。クルミルの目つきは鋭くなり体をウズウズさせながらサトルを睨みつけている。

「どうやら、バトルはして欲しいようでごさるな」

その様子から悟ったサムライ青年はサトルに言い放った。その挑戦を受けてあげるようにヒトカゲも小さく鳴き始めた。

「よし分かった。バトルしよう。クルミル！」

合図とともにヒトカゲとクルミルはお互いを睨め付けあった。先手を繰り出したのはヒトカゲだ。

「ヒトカゲ！【ひのこ】!!?」

ヒトカゲの火の粉がクルミルに繰り出されると、クルミルは自分の糸を木の枝に貼り付けそのまま上へと登っていく。木々の茂みに隠れるとそのままヒトカゲに攻撃を繰り出していく。

『木々に身を隠して【はっぱカッター】を決める。良い作戦口ト!』

「これじゃあ、最初に戦ったときと同じだよ」

身を潜めるならこつちだつて、サトルはヒトカゲを後ずさりさせると次の攻撃の指示を言い放つ。

「それなら…ヒトカゲ！【あなをほる】!!?」

ヒトカゲも地中に潜って身を隠す。ヒトカゲの姿も見えなくなつたと同時にクルミルも攻撃の手を休めた。ヒトカゲの様子を確認しようと思つたから姿を現わすクルミル。すぐにサトルはヒトカゲに指示を送った。

【ひのこ】!!?」

地中から飛び出したヒトカゲはクルミルに火の粉を放った。咄嗟の判断でそれを躲したクルミルはすぐにヒトカゲに糸を放射した。

「もう一度【あなをほる】!!?」

すぐにまた地中に身を隠すヒトカゲ。出てきては攻撃をし躲されば地中に潜るの繰り返し、周りはヒトカゲが掘ったいくつもの穴が広がっている。ヒトカゲのヒットアンドウェイ戦法が暫く続く中、再び地中へと潜るがそのまま姿を見せなくなった。

「ヒトカゲ、出て来ませんね」

「サトル。何考えてるんだろ？」

ヒトカゲの攻撃が止んだ事に気になるクルミルは木から降りると、ヒトカゲが掘った穴を覗き込みヒトカゲの様子を伺おうとしていた。

「今だ、ヒトカゲ！そのまま【ひのこ】!!？」

ヒトカゲは地中に潜ったまま火の粉を放つ。火の粉は地中を掘り進む事で出来た通り道を通って、無数の穴から次々と火柱が立ち上がるようにして放射された。すぐに木へと移って躲そうとしたクルミルだが、近くの穴から放射された火柱によって空中へ吹き飛ばされてしまった。

「【ひつかく】だ!!？」

地中から飛び出したヒトカゲはそのまま空中で身動きが取れないクルミルに攻撃を決めた。火柱のダメージも負っているクルミルはそのまま地面へと倒れ込む。

『クルミル捕獲率82%ロト!』

「今だよ！サトル！」

「うん！よし、行け！モンスターボール！」

モンスターボールに吸い込まれていくクルミル。開閉スイッチが閉まるまでのカウントダウンが始まった。左右に大きく揺れていたモンスターボールは開閉スイッチが完全に閉まると一緒に止んだ。

「よし、クルミルゲットだ！お疲れ様ヒトカゲ！よく頑張ったね！」

「うむ！見事なゲットだったでござるよ」

「おめでとうございます。サトル！」

「ありがとう！よし、出てこいクルミル！」

モンスターボールが出てきたクルミルにサトルは腰を下ろし、改めてクルミルに挨拶を交わした。

「クルミル！これから宜しくねって…わあ!!？」

サトルがクルミルの頭を撫でようとした瞬間、クルミルは糸でサトルの体をグルグル巻きにした。クルミルは身動きが取れずそのまま倒れこんでしまったサトルに寄り添った。その顔はとても満足気であった。

『なるほど、これがこのクルミルの愛情表現みたいロトね』

「うゝ、誰か…助けてくれないか？」

こうしてサトルは新たにやんちゃで元気一杯なクルミルを新たに自分の手持ちに迎え入れたのであった。

~~~~~

「この道を通つ直ぐに行けばニビシテイに着くでござるよ」

「はい！ありがとうございます」

サムライ青年の案内により無事にリーリエ達はトキワの森を抜けることが出来た。次の街ニビシテイに迎うとしたその時、茂みから現れたデデンネは三人にそれぞれオレンの実をプレゼントした。

「森を護ってくれたお礼のようでござるな」

デデンネからオレンの実をリーリエは満面の笑みで受け取った。

「ありがとうございます。デデンネ」

リーリエはそうお礼をいうと、デデンネはそのまま木をつたって森の奥へと消えてしまった。

正直なところデデンネをゲットして置きたかったなあという気持ちもあつたが、また安心して森に住めるようになり嬉しそつたデデンネに森から離れさせることが出来なかつた。リーリエに続いてカノンとサトルも森の中へ消えて行つたデデンネにありがとうございます、伝え大きく手を振つた。

「本当にお主達には感謝しているのでござるよ。ありがとうございます。ジム戦頑張るでござるよ。」

「はい！それじゃあ、僕達はこれで！」

「うむ、達者で！」

サムライ青年に別れを告げたリーリエ達はニビシテイへと旅立つて行つた。

さあ、ジム戦の日はもうすぐだ！

## 第十三話 VSニビジム 最初の試練

ニビは灰色の石の色。険しき山合いのある街。

ニビシティに到着した頃には夜の六時をまわっていた。明日のジム戦に備えるためリーリエ達はポケモンセンター内に設備されているバトルの施設でポケモン達の調整を行っていた。

「シロンー！【こなゆき】!!？」

「クルミル！【はっぱカッター】!!？」

「はい、そこまで！」

「それじゃあ、ポケモンセンターへ行ってみみんなを回復させに行こう」

明日のこともあるため早めに調整を終わらせたリーリエ達はポケモン達をボールに戻すとジョーイさんの元へ向かった。ポケモンの回復をお願いをしにカウンターへと向かおうとしたが、そこには多くのトレーナーの列が並んでいた。おそらくニビジムに挑んだトレーナー達であろう。その中にはバッチを見つめている者もいれば悔しそうにしている者もいる。そのトレーナー達の様々な感情が次第に伝わってきたリーリエ達は少しばかり緊張が走ってきた。

並んでから三十分ぐらい経ったであろう、ようやくリーリエ達の番が回ってきた。

「ジョーイさん！ポケモンの回復お願いしまーす♪」

「はーいー！」

カノンの呼びかけに奥から返事が返ってきた。だが、その声はジョーイさんのものではなく明らかに男性の声がした。不思議に互いの顔を見合わせたリーリエ達の前に現れたのは五つぐらい年上の白衣を身に纏った青年だった。

「あれ、ジョーイさんではない？」

主に全国のポケモンセンターはジョーイさんが行っているものである。治療室から現れたその青年にカノンは不思議に思った。

「ああ、ジョーイさんなら他のポケモン達を診察しているよ。俺はこのジョーイさんの助手をやっている者なんだ」

「助手ですか？」

「簡単にいえば、見習いポケモンドクターってところかな」

ポケモンドクターはジョーイさんと同じくポケモン達の治療を行う役柄である。ポケモンスクールと同じく養成学校は数多く存在している。だが、医療専門分野というのもあってそこに入学できる生徒の数は限られている。厳しい試験を受かった者だけが学園の入学が許されているのだ。

リーリエ達の前にいるその青年はその学校の卒業生であり、今はここニビシテイのポケモンセンターを始めとしているいろいろな所で研修を行っている見習いドクターなのである。

「ポケモンドクターか！カッコイイ!!」

「あはは、ありがとな。でも自分はまだまだ修行中のみ。一人前になるまでもっと経験を積んで行かないといけないけどね」

その青年の話を聞いているリーリエ達に、一匹のピカチュウがカウンターに上がってきた。

「ピカチュウ!!」

サトルのピカチュウではないと分かったリーリエは少し驚くようにしてを叫んだ。リーリエとほぼ同時に叫んだそのポケモンドクターの青年も少しはっとしていた。

ピカチュウ…もしかして……

二人はほぼ同時にピカチュウがやってきた方向に目を向ける。するとそこには……

「すみません！私のピカチュウもお願いします」

一人の少女がカウンターへと向かってきた。よく見るとリーリエ達の前にいるそのピカチュウはメスであった。

「あつ、はい。お預かりしますね！」



そのままピカチュウを預けた少女はそのまま何処かへ行ってしまった。

「まあ、ここに居るわけないか」

「まあ、ここに居るわけないですよね」

「えっ??」

~~~~~

テンテンテレテン♪

回復が終えた知らせが鳴った。

「お待ちどうさま、預かったポケモンはみんな元気になったぞ」

「ありがとうございます」

先ほど知り合った青年から預かったモンスターボールを受け取ると、一斉にモンスターボールからポケモン達を出してあげた。出てきたポケモン達はみんなすつかりと元気になっていた。

「タケシくん、お疲れ様！今日はもうこれで上がって貰っても大丈夫よ」

「いえいえ、まだ手伝うことがあれば自分におまかせ下さい」

カウンターから顔を出したジョーイさんにすぐさまタケシと名乗る青年はジョーイさんの手を取り始めた。その様子にリーリエ達は啞然としていた。

「「えっ??」」

「それからもし宜しければ仕事終わりには疲れた体を癒すために、彼方のカフェでゆつくりとお茶でも…っつ!!」

ジョーイさんにデートのお誘いをしようとしたタケシ。するとすぐに後ろから感じる鋭い痺れに耐えきれずそのまま後ろの方へ倒れ込んでしまった。

「し・び・れ・び・れ」

痺れて倒れてしまったタケシはそのままとあるポケモンに足を引っ張られ何処かへ引きずり去っていく。

おそらくタケシの手持ちの内の一体であるのであろうか。ロトムは解説を始める。

『グレッグル どくづきポケモン』

毒・格闘タイプ

毒袋を膨らませて不気味な音を辺りに響かせる。猛毒をにじませた指先で相手を攻撃する』

「諸に【どくづき】を食らってたよね」

「大丈夫なんでしょうか？」

「いや、大丈夫そうではないと思うけど…」

あまりの出来事に呆然とするリーリエ達。それに失笑していたジョーイさんはまあ大丈夫だと思うことはリーリエ達に伝えておいた。

「あなた達、新人トレーナーみたいだけど。もしかしてニビジムに挑戦に？」

「はい！リーリエとサトル、この二人も含めた私達で挑戦しに行くんです！」

「そうなのね。だったら、タケシ君にジムのこと聞いてみたらいいわよ！」

「「タケシ君？」」

「そっか！もしかしたらと思ったが君たちはニビジムに挑戦しに来たんだな」

毒の痺れから解放されたタケシはゆっくりとリーリエ達の元へと戻ってきた。

「わあ！復活はやっ！」

「あのお身体は大丈夫なのですか？」

「ああ、あれはいつものことだから心配ないよ」

「いつものことって…」

『毒ポケモンの技を受けても、自力で毒を鎮静させてしまうトレーナーとは。これはデータアップロードだロト！』

これに驚いたロトムはタケシを写真に撮ると自分のデータに保存した。リーリエ達も世の中にはいろんな意味で凄いトレーナーがいるんだなあと、思うのであった。

「へえ、これが噂に聞くロトム凶鑑か！初めてみたがとても凄い発明だな」

『そう！ロトム凶鑑はすげーロト！』

「あの、すいません。タケシさんはジムのことで何かご存知なのでしようか？」

ジョーイさんが言ったことに疑問を持ったリーリエはタケシにその意味を探った。タケシもロトムからリーリエ達の方に目をやると乱れた白衣をきちんと整え、改めて自己紹介から始めた。

「俺の名前はタケシ。ニビジムは俺の弟が務めているジムなんだ」

「そうだったのですか」

「それにタケシ君は元ニビジムのジムリーダーでもあったのよ」

「元ニビジムの!!!」

「まあな！」

元ジムリーダーと聞いたリーリエ達は自然と肩に力が入り背筋をピンと伸ばした。

元々ニビジムのジムリーダーを務めていたタケシは、自分はポケモンバトルをするよりも、ポケモンを育てることに生きがいを感じるようになり、ジムリーダーを目指していた弟に正式にジムを任せるとポケモンブリーダーとして旅に出ていたようだ。

度重なる旅の中の経験でシンオウ地方のジョーイさんと病気にかかった多くのポケモン達を救ったことから本格的にポケモンドクターになることを決意したのだ。

「ジム戦は明日の朝に来るといいよ。弟には俺から言っとくから」

「そうですか。それでしたらよろしくお願いします」

「おっけ！それじゃ、ジムまで俺が連れて行ってあげるよ。明日はオフレから大した用事もないからね。明日、ポケモンセンターまで迎えに行くよ！」

「はい!!!」

これ以上仕事の邪魔になつてはいけないので、タケシとは明日の早朝にホームで待ち合わせをする約束をして一旦別れることにした。

夕飯を食べながら明日のジム対策について話し終えると、三人はすぐに寝室へ入って行った。旅の疲れが一気に出てきたのか、リーリエ達はすぐに布団に寝転がるとそのまま眠ってしまった。

くくくく

カーテンを閉め切っていない窓から入り込む朝日に眩しそうに目を擦りながらリーリエ達は起床した。

別室で眠っていたサトルと合流したリーリエとカノンは一階のレストランで朝食を済ませ、タケシとの合流場所となるポケモンセンターのホームで腰を下ろしていた。

「おはよう！おっ、どうやらポケモン達も気合入ってるようだな」

暫くして、約束の時間通りにタケシはポケモンセンターへと到着した。リーリエのポケモン達もみな気合十分なのか、溢れてくる闘志をタケシに見せていた。

「あつ！ええつと…おはようございます。き…今日はよろしくお願いします！」

「リーリエ、それはジムリーダーに言うセリフじゃない？」

「えつ…は、はい！そう…でした…ね！あはは…」

ジム戦が近づいてくるからか、リーリエは緊張のあまり普段の丁寧口調からまるでロボットのようなガタゴトの口調に変わってしまった。そんなリーリエを見たタケシは優しく震えているリーリエの肩に手を置いた。

「ふふっ、どうやら緊張しているようだね。無理もないジム戦はポケモン協会が認めたプロのポケモントレーナーとの真剣勝負だからね。だけど、トレーナーがそう緊張してしまうと一緒に戦ってくれるポケモン達にもその不安が伝わってしまう。何よりも大切なことは楽しむことだ。」

「はいー」

「うん、それじゃあ行こうか」

タケシの言葉とシロン達の顔を見たりリーリエの緊張は次第に和らいできた。一旦ポケモン達をボールに戻したりリーリエ達はポケモンセンターを出て、タケシと共にジムへと向かった。

「ここがポケモンジム」

リーリエ達はニビジムの前へとやってきた。岩タイプ専門のジムとはあって、建物全体はゴツゴツとした岩によって覆われていた。

かかって来い!!!

と言わんばかりか、扉の前に立つだけでもその圧が伝わってくる。

「それじゃ、入ろうか」

タケシの合図と共に、ジムの扉はゆっくりと開いていった。

「ジロウ！挑戦者を連れて来たぞ」

「はいー！」

タケシの呼びかけに応え、一人の少年が出迎えてきた。この人がジムリーダーなのか？現れたその人物は見た感じリーリエ達よりも二つぐらい年下の少年みたいだった。イメージしていたジムリーダーの想像図とはけっこう違っていたのだが、タケシが呼んできたというのなら、この少年はポケモン協会によって実力を認められたトレーナーであることは間違いない。

「こんにちは、僕がここニビジムのジムリーダーのジロウです。話は

兄さんから聞いています。チャレンジャーは三名で宜しいですか？」  
「はい！リーリエと申します。」

「私はカノン」

「僕はサトルです」

「分かりました。ジムのルールなのですが、基本は三対三によるシングルバトルです。どちらかのポケモンがすべて戦闘不能になってしまふとバトル終了です。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみに許されます。」

チャレンジャーを確認するとジロウはここでのジムのルールを説明した。タケシが務めていた時はニビジムは二対二のルールであったが、チャレンジャーの実力を正確に知るためという事もある。ジムリーダーを引き継ぐと同時にジムのルールを変えたみたいだ。

ただ、ジムのルールはあくまでもジムリーダーとしてチャレンジャーの実力を測るためであるので必ずそのジムのルールに従わなければならないという事ではない。もちろん、カノンのように手持ちが三体所持していないトレーナーも挑戦しにやってくる。

その場合の使用ポケモン数はチャレンジャーの所持ポケモンの数によって決めらる。

『誰から挑戦するロト？』

ロトムの一言にジム戦を受ける順番を決めてなかったリーリエ達は顔を見合わせる。

「う〜ん…：シンプルにジャンケンで決めようか」

「そうだね！よっし、ジャンケン♪」

「あつ、ちよつと待って下さい」

カノンの突然のジャンケンコールによってジム戦を受ける順番を決めた。ジム戦をやる順番を決め終わったリーリエ達はジムリーダーに連れられジム戦を行うバトルフィールドへと案内された。

ジムのバトルフィールドはジムリーダーが得意とするポケモンの

タイプに合った環境作りとなっている。ニビジムの場合は岩タイプのジムであるため、岩山の地平をイメージとしたフィールドとなっている。

ジムリーダーとチャレンジャーはそれぞれ指定されたトレーナーサイドへと立った。その他の人達はチャレンジャーへの助言等は禁止されているため観戦席へと移動する。

しかし、見慣れていないポケモンのタイプをポケモン図鑑で調べることが禁止されていないので、助言は無しという条件でロトムも一緒に連れてもいい許可が出た。

「これにより、ジムリーダーのジロウとチャレンジャーのリーリエとのジム戦を開始します。まずはジムリーダー、ポケモンをバトルフィールドに！」

審判による試合開始コールと共にジロウはポケモンを繰り出した。ジム戦では先にジムリーダーがポケモンを出す決まりがある。ジムリーダーが繰り出したポケモンを見てチャレンジャーはどんなポケモンを使つて対応してくるか見極めるためだからだ。

「行けっ！イワーク!!」

ジロウが繰り出したのはカントーのポケモンの中でも重量級のポケモンの内の一体でもあるイワークだ。

《観戦席》

「大きい〜」

観戦席で観ているカノンは初めて生でみるそのポケモンの迫力に圧倒されている。

『イワーク いわへびポケモン』

岩・地面タイプ

地中をおよそ八十キロのスピードで掘り進んでいる。通つた後はデイグダの住処となる』

「ジロウのやつ、いきなりイワークとはね。さて、リーリエさんはどんなポケモンを使うか」

そう言うタケシはリーリエの方に目をやると少しだけ顔を歪めて

しまった。それはリーリエはポケモンを繰り出す所か小刻みに震え出していたからだ。どうやら、また緊張が振り返ってきたようだ。

「やっぱり、まだ緊張しているみたいだね」

「あっ…大丈夫だよ、リーリエー！えっと…そうだ！玉葱だよ！リーリエが今戦おうとしている相手は何個も繋がっている玉葱なんだよ！」  
「野菜と思って戦えば緊張が和らぐと言いたいと思うけど…無理があるんじゃないかな」

と言いつつもサトルもリーリエの事を心配ではないわけではない。すぐにリーリエの元へ駆け寄ってやりたいと思うが、試合が始まっているため、もうただ見守ってあげることしか出来ないでいた。

### 《ジム戦》

リーリエも旅を通して、トレーナーだけでなくロケット団やレベルが高い野生のポケモンとのバトルはこなしていた。だが、それは今までカノンやサトルのように一緒に戦ってくれる友達がいたため心細いとは思わなかったからである。ましてや、ジム戦は一般トレーナーとのバトルとは違う。ジムバッジを獲得するためには勝たないといけないプレッシャーや凄腕のジムリーダーとの真剣勝負というものあって、さらにリーリエの鼓動は早くなる。

その様子を見たシロンはリーリエの首筋に少しの冷気を吹きかけた。

「ひゃん!!えっと…シロン？」

突然のことにリーリエは緊張する気持ちを忘れてはシロンに目をやる。シロンは心配いらないと呼びかけてると同時に半身心配そうにリーリエに目をやっていた。冷静さを取り戻したリーリエはタケシの言葉を思い出す。

自分が不安がってはシロン達にもそれが伝わってしまう

リーリエは気持ちを落ち着かせるため深呼吸を行なった。そして両手で祈るようにして握りしめたら、そのまま黙祷を始めた。黙祷の



中、今までの旅の経験。そしてアローラのみんなの事を思い浮かべる。そんな中、リーリエにポケモンとのふれあう楽しさを教えてくれたある一人の人物を思い浮かべた。その人物の顔を思い浮かべると不思議と安心してきた。震えが止まったリーリエに笑顔が戻った。

少しばかりか、どんな困難にも立ち向かっていく貴方に私は憧れていました。

私がこうして旅に出る決意ができたのも貴方に追いついてみたいと思ったのもきっかけの一つです。

初めてのジム戦。シロン達と何処までやれるか分かりませんが…  
どうか…少しだけでもいいので…

サトシ…わたくしに力を貸して下さい。

黙祷が終わり、改めてジムリーダーと対峙する。このジム戦に挑む誠意とともにリーリエは一回お辞儀を交わすと、最初のポケモンをバトルフィールドへと放った。

「お願いします…シロン!!!」

リーリエの掛け声と共にシロンは元気よくバトルフィールドへと立った。

### 《観戦席》

「リーリエー」

「どうやら、もう大丈夫のようだな」

リーリエの顔を見て安心したカノンとサトルは自分達の胸をそつと撫で下ろしていた。互いのポケモンが出揃った所でいよいよリーリエの初のジム戦が始まる。アローラでいうとこれがリーリエの第一の試練だ。

「それではバトル開始!!」

### 《ジム戦》

「こちらから行きます！イワーク【たいあたり】!!？」

先手を取ったのはジロウだった。初級技とはいえイワークのような身体の大きいポケモンの体当たりは真面に喰らえばひとまりもない。イワークはその身を大きく揺らすとシロンに目掛けて一直線に向かっていく。

「シロン！躲して【こなゆき】です!!？」

体当たりを躲されたイワークはそのまま岩壁へと撃墜する。無事に攻撃を躲したシロンはイワークに向けて冷気を放った。放たれた冷気はイワークにヒットし、イワークはその寒さに身を震わせている。地面タイプを併せ持っているイワークに氷タイプの技は効果は抜群だ。

「効いています。続けて【ごごえるかぜ】です!!？」

「イワーク【がんせきふうじ】!!？」

シロンは攻撃の手を緩めることはなく、すぐに攻撃を放った。するとイワークは岩石を自分の周りに積み立てるとそれが壁となり、シロンの攻撃を封じた。そして、その壁にイワークは自分の身を隠した。

「【たいあたり】!!？」

イワークは作り上げた岩石の壁ごと壊し、シロンに向かって体当たりを仕掛けた。壁のせいでイワークの動きが見えていなかったシロンは回避するまもなくそのままイワークの技を食らってしまった。

「シロン!!」

体当たりを受け、吹き飛ばされたシロンはそのままフィールド上の岩石に叩きつけられてしまった。だが、かろうじて何とかシロンは戦闘不能を免れることが出来た。

### 《観戦席》

「攻撃技を防御に使うとは、流石はジムリーダーってところだね」

ジムリーダーの戦いを見ていたサトルはリーリエを心配すると同

時にジムリーダーの戦い方に関心を持っていた。

### 《ジム戦》

「大丈夫ですか？シロン！」

リーリエの呼びかけに元気よく応答するシロン。まだ大丈夫なようだ。

「何とか耐えましたね。イワーク！【たたきつける】攻撃!!？」

「躲してイワークに飛びついて下さい！」

今度は大きな尻尾を使ってイワークはシロンを叩きに行った。その攻撃を躲したシロンはイワークの尻尾に飛び乗るとイワークの顔に目掛けて、イワークの胴体をそって走りだした。

「なるほど、そう来たか。イワーク【りゅうのいぶき】!!？」

イワークは龍のような唸り声を上げるとともに物凄い息吹をシロンに向かって放った。迫り来る息吹にシロンは吹き飛ばされそうになるが、なんとか堪えては負けじとイワークの顔目掛けて走りだす。

「負けないでシロン！【こおりのつぶて】!!？」

イワークにある程度近づくことができたシロンはすぐさま氷の塊をイワークに向かって放った。勢いよくイワークの顔面にヒットするとイワークは蹠踉めくと同時に息吹が止んだ。

「イワーク！【がんせきふうじ】だ!!？」

「【こおりのつぶて】!!？」

すぐにイワークは無数の岩でシロンに攻撃を仕掛けようとしたが、先制技である【こおりのつぶて】を先に食らってしまった。氷タイプの技を二連続受けてしまったイワークの体力は徐々に減らされていく。

「そこです！【こなゆき】!!？」

「負けるなイワーク！【りゅうのいぶき】!!？」

シロンの冷気とイワークの息吹がぶつかり合う。だが体力の限界が来ていたのかイワークは思った以上のパワーを出すことが出来ずそのままシロンの冷気に押し返されてしまった。

「イワーク!!!」

押し返されたと同時にイワークはシロンの攻撃を受け、ゆっくりとその場に倒れてしまった。

「イワーク戦闘不能！ロコンの勝ち！」

「やった！大丈夫ですか？シロン！」

最初の勝ち星を取ることが出来たリーリエ。しかし、シロンも結構なダメージを負っていた。心配そうにリーリエはシロンを呼びかけるとシロンは元気よくリーリエに向かって鳴き始め、心配ない様子を見せた。

「お疲れ様イワーク！なかなかファイトのある戦いでしたよ。ですが、次はこうはいきません。頼むぞ！イシツブテ!!!」

ジロウの二番手はイシツブテだ。だが、そのイシツブテはリーリエがよく知っているイシツブテとは姿が違っていたためリーリエは少しばかり驚いていた。

「イシツブテ!??　　お願いします。ロトム！」

『お任せを！』

ロトムはイシツブテのデータを開いた。

『イシツブテ　がんせきポケモン

岩・地面タイプ

石ころとは見分けがつかないポケモン。頑丈な体を相手とぶつけ合いながら硬さを競い合う』

「なるほど…地面タイプを持っているのですね」

《観戦席》

「リーリエ。イシツブテを見て少しびっくりしてたけど、イシツブテにもシロンみたいに他の地方とは異なる姿が存在するんだっけ？」

「うん！そうだね。ちょっと待ってて」

サトルは自分のポケモン図鑑を取り出すと、イシツブテのデータを

探した。

『イシツブテ がんせきポケモン

アローラの姿 岩・電気タイプ』

「ん？どれどれ、見せてくれないか？」

アローラのポケモンを見たことがないタケシもサトルが表示したポケモン図鑑を興味津々に見ていた。

「アローラのイシツブテは電気タイプを持っているのか。リーリエさんのロコンを見た時から気にはなっていたんだが、まだいろいろなポケモンがいるんだなあ」

また一つポケモンの不思議な生体を知る事が出来たタケシは一人静かに頷いていた

### 《ジム戦》

リーリエは元気そうに振舞ってはいるが、無理をさせてはいけなれないと思いシロンを一旦戻すことに決めた。

「シロン、暫く休んで下さい」

リーリエの指示を聞いたシロンはリーリエの元へと戻っていった。シロンが戻ったと同時にリーリエは二番手のポケモンをモンスターボールから繰り出した。

「次はこの子で行きます！お願いします。ムツクル!!!」

リーリエの二番手はムツクルだ。唯一リーリエの手持ちの中ではこのジムのポケモン達とは相性が悪いポケモンでもある。

「行ってみましょう、ムツクル！まずは…」

「イシツブテ！【ステルスロック】!!？」

ムツクルに指示を出そうとしたリーリエよりも先にイシツブテが光のエネルギーを放ち攻撃を仕掛けた。だが、その攻撃はムツクルには攻撃を決めようとはせず、光のエネルギーはムツクルの周りに飛び散り、無数の岩を浮かべたのである

「そんなー！【ステルスロック】!!!」

技の知識もある程度は持っているリーリエはこの技の主旨を理解していた。

《観戦席》

「何あの技?」

「岩タイプの技『ステルスロック』だよ。場にいる相手に攻撃するのではなく、次に出てくるポケモンにダメージを与える技だよ」

「そう、つまりあの技が発動したことでリーリエさんはむやみにポケモンチェンジをすることが出来なくなったという所だね」

「え、なんでよ!だってチャレンジャーの交代は許されてるんでしょ!なんかズルくない?」

カノンの方はジムリーダーのその技の使用に不満を抱いているようであるが、そのことも含めてタケシは説明した。

「たしかにズルいように見えるが、これもジムリーダーの責務としてジロウはリーリエさんを試しているんだ」

「試す?」

「ジムリーダーはただ勝ち続ける為だけに挑戦者と戦っているわけではない。戦術やその場の判断力、バトルの中でそういった挑戦者の秘めたる力を引き出してあげることがジムリーダーの役目でもあるんだ」

タケシの話を聞いたカノンとサトルは改めてジムリーダーという役職を再認識した。このバトルを通してトレーナー達は勝つだけでなく、様々なバトル技術を自分の経験値として受け取り、成長の糧となっていく。訪れるチャレンジャーに対して、ジムリーダーの想いというのを知る事が出来た。

そして今まさに、ジロウはリーリエに一つの試練という物を与えているのだ。

《ジム戦》

「『ステルスロック』はバトルが終わるまで効果は持続する。ポケモンを交代するタイミングを過えば一瞬にして敗北に繋がる。それにノーマルと飛行タイプの技は岩タイプのイシツブテには効果は薄い。相性の悪いムツクルでどう戦いますか?」

ジロウから降された課題。それがリーリエには重みとなって伸び掛かってくる。

「行きますよ。イシツブテ！【ころがる】 攻撃!!?」

考える間もない。イシツブテは自身の体を丸め、縦に向かって高速回転をしながらムツクルに向かって突進してくる。

「ムツクル！【かげぶんしん】です!!?」

ムツクルは自分の分身を創り出すとそのままイシツブテの攻撃を躲した。

「【はがねのつばさ】!!?」

上空へと舞い上がったムツクルは急降下しながら、硬化させた自分の翼をイシツブテの頭上に振り下ろした。

「鋼タイプの話か。イシツブテ受け止める!!?」

ムツクルの攻撃が決まる直後、イシツブテは手刀で繰り出されるムツクルの翼を真剣白刃取りで受け止めたのだ。

「えっ!!!」

「イシツブテ【ロックブラスト】!!?」

イシツブテはそのままムツクルを捕まえたまま、石の弾丸をムツクルに決めた。一発…二発と続き、最後の一発をイシツブテはムツクルの翼を離れた状態で打ち込んだ。攻撃を受けたムツクルはそのまま後ろに吹き飛ばされてフィールドに設置されている岩石に叩きつけられた。

「ムツクル!!!」

「続けて！【ころがる】 攻撃だ!!?」

さらにイシツブテはムツクルに向かって転がっていく。飛行タイプに対して岩タイプの技は効果は抜群。戦闘不能は免れたが、もうすでに虫の息であった。飛んで躲わす体力はムツクルにもうなかった。

「戻って下さい！ムツクル!!?」

間一髪の所でムツクルをモンスターボールへと戻すことが出来た。

「うん。【ステルスロック】を警戒して倒れるまで戦うと思っていた方がいい判断です」

ジロウが言った通り、岩によるトラップをリーリエはもちろん警戒

していた。しかし、後続に繰り出される他のポケモン達には申し訳ないが戦闘不能寸前のあの場面でムツクルを戻さない選択はリーリエにはなかった。

ムツクルを戻すと、リーリエは別のモンスターボールを取り出し三体目のポケモンを繰り出した。

「お願いします。キモリ！」

バトルフィールドにキモリが現れた同時に「ステルスロック」によるトラップが作動した。無数の岩がキモリの周りに浮上すると、一斉にキモリに向かって追撃し始めた。

### 《観戦席》

「あつ、【ステルスロック】が！」

「これはけっこうプレッシャーになるね」

### 《ジム戦》

「草タイプ。今度は有利なタイプで来ましたか！」

【ステルスロック】により多少ダメージ

食らってしまったキモリであったが、土埃を払うと対戦相手であるイシツブテを睨みつけた。先ほどの攻撃は逆にキモリの闘志に火をつけたみたいだ。

「行きましょうキモリ！【タネマシンガン】です!!？」

「イシツブテ！【ロックブラスト】だ!!？」

キモリとイシツブテによる攻撃はぶつかり合い相殺した。パワーは互角のようだ。

「次は【あなをほる】です!!？」

「イシツブテ！地面の動きを感じ取るんだ!!？」

キモリは地中へと身を潜めると、イシツブテは静かに目を閉じると神経を集中させ始めた。地中を掘り進んでいくキモリを野生の頃に培った直感力でイシツブテは自分の真下から飛び出したキモリの攻撃を寸前の所で躲した。

『ピ。ピ。ピイイ!!キモリの動きを読んだロト！』



これには流石のロトムは驚き、思わず声を上げてしまった。

「イシツブテ！【ほのおのパンチ】!!?」

キモリの攻撃を躲したイシツブテは炎を纏った拳でキモリを攻撃した。

「キモリ!!!」

攻撃を受けたキモリはそのまま地面に叩きつけられてしまった。何よりも炎タイプの技を受けてしまったキモリには思った以上のダメージが入ってしまった。

### 《観戦席》

「炎タイプの技を覚えているの!」

「くっ!!?草タイプ対策に覚させていたんだ」

タイプの相性で勝っているキモリが追い詰められていることにカノンとサトルは驚いていた。カノンはリーリエを心配に手を震わせ、冷静にバトルを見ていたサトルもだんだんと熱が入ってきたようで、強く拳を作りながらリーリエの試合を観ている。

### 《ジム戦》

一発だけであつても相当なダメージを食らってしまったキモリ。フラつきながらも根性で立ち上がった。

「キモリ、大丈夫ですか!」

心配するリーリエにキモリはゆっくりと頷く。

「もう一度【あなをほる】です!!?」

再び地中に身を隠したキモリ。これではさつきと同じ展開を迎えてしまうぞ!

「イシツブテ!キモリが出て来たところに【ほのおのパンチ】だ!!?」  
イシツブテの直感力を信じているジロウは冷静に指示を出す。イシツブテももう一度気配を感じながらキモリが現れるのを待った。そして、その気配を気づいたイシツブテはゆっくりと自分が立っている下に目をやった。

イシツブテが空中へとジャンプした同時に真下から岩石が吹き出

した。拳を高く上げて攻撃体勢に入るイシツブテ。しかし、キモリが現れる様子はなかった。

「えっー！」

これに戸惑ったジロウははれてくる土煙の中で岩石が吹き飛んだ場所に目をやると、そこには大きな穴が出来ておりその穴の中にはキモリが身を潜めていた。

そう、キモリ自身はまだ地中から飛び出していなかったのだ。

「【タネマシガン】!!?」

穴の中から放たれるキモリの【タネマシガン】は空中で身動きが取れないイシツブテにヒットした。効果は抜群だ。

「決めさせていただきますー！キモリ、【はたく】攻撃です!!?」

今度こそ地中から飛び出したキモリは背後に回り、大きな尻尾で力強くイシツブテを真下へと叩いた。落下のスピードも加り、勢いよく地面に叩きつけられたイシツブテは目を廻してた。

「イシツブテ戦闘不能！キモリの勝ちー！」

「やった！ありがとうございます。キモリ！」

《観戦席》

「すごいリーリエー！」

「うん！リーリエの方はまだ一体も失っていない。これなら行けるよ」

「たしかにポケモンの数だけでは勝ってはいるが、リーリエさんのポケモン達はみんなダメージを負っている。まだこの勝負はどっちに転ぶか分からないぞ」

スコア的にはリーリエに軍配が上がっているのは確かであるが、状況的にキツイのはリーリエの方でもあった。最後まで何があるか分からない。それはリーリエも分かっている。

《ジム戦》

「お疲れイシツブテ。リーリエさん、先ほどのキモリの動きにはすっかり騙されてしまいました。お見事です」

「ありがとうございます！」

「さあ、これが僕の最後の一体だ！行けっ!!？」

こうして、ジロウの最後のポケモンがフィールドに放たれた。現れたポケモンはリーリエも見たことがないポケモンだった。

『ヨーギラス いわはだポケモン

岩・地面タイプ

主に土を主食としている。大きな山ひとつ食べ終わると成長のため眠り始める』

現れたのはジョウト地方で確認されたポケモン、ヨーギラスだ。フィールドに立つなりヨーギラスは凄まじい雄叫びをあげた。恐らくさっきまで戦ったイシツブテやイワークよりも強いポケモンであると、リーリエはそう感じた。

「キモリ行けますか？」

イシツブテ戦での戦いに勢いがついたのか、キモリは溢れんばかりの闘志を燃やしていた。その気持ちに応えるようにリーリエはキモリのまま行くことに決めた。

「キモリ！【タネマシンガン】です!!？」

先手必勝。勢いよくジャンプしたキモリは無数の種をヨーギラスに向かって撃ち込んだ。しかし、ジロウとヨーギラスは慌てる様子が無い所か躲す素ぶりを見せていなかった。

「避けない!!？」

その光景にリーリエは驚いていた。キモリの技が迫ってくる。するとジロウはゆつくりとヨーギラスに技の指示を出した。

「ヨーギラス！【てっぺき】だ！」

鋼タイプの技、【てっぺき】。自分の体を鋼の様に硬化させて防御力を高めたヨーギラスは迫り来るキモリの攻撃を受けた。キモリの技は確かに決まったはずだ。

だが煙がはれると、そこにはほぼ無傷の状態で立っているヨーギラスの姿があった。

### 《観戦席》

「いくら防御力を高めたからと言って効果は抜群の技を受けても、あの程度のダメージしか与えられていないなんて…」

ヨーギラスの行動には、カノンとサトルも驚いていた。

### 《ジム戦》

ヨーギラスの行動に驚いたりリーリエだが近づいた隙を狙おうと、すぐにキモリに指示を出した。

「【でんこうせっか】です!!?」

「ヨーギラス！【ストーンエッジ】!!?」

自慢のスピードでヨーギラスに迫るキモリ。ヨーギラスは自分の体に二本の白い光の輪を包み込ませると、自分の周りに多数の鋭利な石が現れ、相手に向かって放たれた。迫り来る石の乱射をキモリは自慢の瞬発力で躲していく。

しかし、何発も撃ち込んでくる【ストーンエッジ】との差が生まれ、てしまったようで、あともう少しの所でその内の一つがキモリに決まってしまった。その後、連鎖するかのようにな数の石がキモリに命中していく。

「よしー・【あくのはどう】!!?」

さらにヨーギラスは手から悪意に満ちた黒と紫の光線をキモリに放つ。躲しきれなかったキモリはそのまま黒いオーラに包み込まれてしまった。

「キモリ!!」

キモリの安否を確認するリーリエ。土煙がはれると、そこにはボロボロになりながらも根性で立ち上がっているキモリの姿があった。

「大丈夫ですか！キモリ!!？」

リーリエの方にキモリは目をやる。キモリは軽く笑みを浮かべ、軽く拳を上げたが…

「あつ…」

そのままフラつき始めるとゆっくりと地面に倒れ込んでしまった。

「キモリ戦闘不能！ヨーギラスの勝ち！」

《観戦席》

「キモリ…負けちゃた」

「イシツブテの【ほのおのパンチ】が思った以上に効いていたんだね」

《ジム戦》

「戻って下さいキモリ！ありがとうございます。後はゆっくり休んで下さい」

これでリーリエも一体が戦闘不能になってしまった。ヨーギラスの方はキモリとのバトルを感じさせていないほど、パワーが溢れていた。スピードで攪乱させて一気にチャンスを狙って行くことに決めたりリーリエはいま残っている二体の中でスピードが速いポケモンを繰り出した。

「もう一度お願いします。ムツクル！」

再びバトルフィールドに姿を現したムツクル。それと同時に無数の岩がムツクルの周りを浮上すると、そのまま追撃した。

「ムツクル!!!」

岩のトラップによってダメージを負ったムツクルはそのまま地面に倒れ込む。その後、根性で翼を広げて空へと舞い上がった。

《観戦席》

「[ステルスロック]は岩に対する相性分のおよそ八分の一のダメージを負ってしまふ。ムツクルには相当なダメージが入ったな」

「リーリエ。苦しくなってきたね」

タケシの説明の通りだと飛行タイプのムツクルは普通なら戦闘不能になっても可笑しくないダメージを負ったはずだ。バトルの流れはジロウになってきたことに少しながらカノンとサトルは感じていた。

《ジム戦》

「ムツクル！ [はがねのつばさ] !!?」

「ヨーギラス！ [ストーンエッジ] !!?」

翼を硬化させ急降下するムツクルに無数の石が乱射される。

「さらに [でんこうせっか] !!?」

「[でんこうせっか]によるスピードも加わったムツクルは無数の石を躲し着ることが出来た。そして、そのままヨーギラスに硬化させた翼を当ててすることに成功した。」

《観戦席》

「決まったー！」

「[でんこうせっか]によってさらにムツクルのスピードを加速させるなんていい作戦だよ」

《ジム戦》

「もう一度、 [はがねのつばさ] !!?」

「[てっぺき]でガードしろ！」

再びヨーギラスに迫るムツクル。もう一度技が決まると思ったが、体を硬化させたヨーギラスは腕でムツクルの [はがねのつばさ] を受け止めた。

「[ばかぢから] !!?」

ムツクルの攻撃を止めたヨーギラスは物凄いパワーでムツクルを叩きつけた。

「ムツクル!!!」

格闘タイプの技はムツクルには効果はいまひとつであったが、もうすでに虫の息でもあったムツクルを戦闘不能にさせるのには、十分すぎる威力であった。

「ムツクル戦闘不能！ヨーギラスの勝ち！」

「ありがとうございます。ムツクル！よく頑張ってくれました」

《観戦席》

「残りはシロンだけか」

「ああ…。リーリエさんの勝敗はロコンの氷タイプの技を上手く決められるかどうかにかかっているね。だけど、そう一筋縄にいかないのがジロウだ」

「頑張れ！リーリエ！シロン！」

《ジム戦》

「最後は貴方です。お願いしますシロン！」

リーリエの指示にシロンは大きく吠える。リーリエの最後のポケモンが今、バトルフィールドに現れた。

「気合いが入ってるようだね。さあ！これが最後のバトルだ!!？」

最後の戦いをむかえたこの最初のジム戦。そこには試合する前、緊張のあまり体を震わせていたリーリエの姿はどこにも無かった。泣いても笑ってもこれで勝者が決まるのだ。

「シロン！【ムーンフォース】!!？」

「ヨーギラス！躲して【ばかちから】!!？」

月のエネルギー砲をヨーギラスに放つシロン。その技をヨーギラスはジャンプして躲すと、パワーを貯めた右腕でシロンに迫ろうとしていた。

「【こおりのつぶて】です!!?」

シロンも氷の礫でヨーギラスに迎え撃った。重なり合う二つのパワーの衝撃波によりシロンとヨーギラスはお互いに後ろの方へと吹き飛ばされてしまった。

「シロン!!!」

「ヨーギラス!!!」

なんとか立ち上がったシロンはすぐに体勢を立て直した。ヨーギラスはとうとうとすぐに立ち上がってはいたが、その表情は少しばかりか辛そうであった。やはり「【てっぺき】で防御力を上げていたとはいえ、攻撃が効いていないというわけではなかった。ここにきてキモリとムツクルの頑張りが形となって現れたのだ。

しかし状況がリーリエ達に向いているとは限らない。シロンの体力も限界が近いし、長引かせるのも危険であった。

ヨーギラスに有効なのは氷タイプの技。しかし、むやみに撃った所で躲されたり、イワークの時みたいに岩タイプの技で壁を作って防いだりしてくるかもしれない。一体どうすれば……

……壁を作る……

一瞬にしてリーリエの脳裏に何かが閃いた。一か八かに賭けてみるしかない。覚悟を決めたリーリエはシロンを呼ぶ。卵の時からずっと一緒にいたシロンも口に出さずともリーリエの考えが不思議と分かっていた。お互いに軽く頷きかけると、すぐにその策を実行に移した。

「シロン！ダッシュです!!?」

シロンは渾身の力で地面を大きく蹴り、ヨーギラスの方へと走って行った。



《観戦席》

「えっ？ヨーギラスに向かっていくよ」

「リーリエは何を考えているんだ」

突然のリーリエとシロンの行動に二人は目を見開いてしまった。

【でんこうせっか】のようなスピードに乗れていない、これでは【ストーンエッジ】の格好の的になってしまう。

《ジム戦》

「シロン！そのまま【ごおりのつぶて】です！！？」

「何するか分からないけど、これで止めです。ヨーギラス！【ストーンエッジ】！！？」

「シロン！そのまま氷をもっと大きく！！？」

容赦無くヨーギラスの攻撃がシロンへと撃ち込まれた。だがシロンは氷の塊を形成するとすぐに撃つことはなく、その形を保ちながらゆっくりと周りの空気を冷やしながら氷の塊を大きくしていった。大きく形成された氷の塊は次々に撃ち込まれていく石の弾丸から護る壁となり、シロンはヨーギラスの攻撃を跳ね返しながら前へと進んで行く。

「なるほどね。ヨーギラス！【ばかぢから】に切り替えろ！！？」

【ストーンエッジ】から【ばかぢから】に切り替えたヨーギラスはその氷の塊に向かって拳で殴りつけた。ヨーギラスの攻撃で砕かれていく氷の塊は周りに飛び散った。だが、それ以上に驚くことはシロンの姿を確認しようと氷の後ろに目をやると、そこにいるはずのシロンが忽然と姿を消していたのだ。

「えっ！！？」

突然の事に驚いたジロウもヨーギラスも辺りを見渡しシロンを探し始めた。だが、砕けた氷の破片によって視界を遮ぎられてしまい、良く見渡すことが出来ない。焦りを感じたヨーギラスは必死に目を凝らして探していると、背後から何かの気配を感じた。

振り替えてみると、そこにはシロンの姿があった。気づいた時にはシロンは口を大きく開いて攻撃体勢に入っていた。

「シロン！最大パワーで【こなゆき】です!!?」

ありつただけの力を込めて、シロンはヨーギラスに凄まじい冷気を浴びさせた。あまりの勢いにヨーギラスは空中へと飛ばされてしまった。

「くっヨーギラス！【ストーンエッジ】!!?」

「【こおりのつぶて】です!!?」

なんとか空中で体勢を立て直したヨーギラスだったが、技を発動する前にシロンの氷の礫がヨーギラスに命中した。

「ヨーギラス!!!」

技を受けたヨーギラスはそのまま地面へと落下していく。倒れたヨーギラスは目を回し、再び立ち上がる様子はなかった。

「ヨーギラス戦闘不能！ロコンの勝ち！」

よって勝者はチャレンジャー、リーリエ！」

勝負は決した。リーリエの勝利だ。

「やったああああああああ!!!」

『見事な勝利ロト！』

リーリエの喜びに応じて、シロンも急いでリーリエの元へと駆け寄ると元気よくリーリエの胸の中へと飛び込んだ。

「シロン！よく頑張りましたね!!!お疲れ様です！ありがとうございます!!!」

リーリエはシロンを優しく抱きかかえるとそのまま自分の頬をシロンの頬に重ね合わせた。シロンも嬉しそうに鳴いていた。

《観戦席》

「勝ったああ！リーリエが勝った！」

「すごいよリーリエ！」

「ああ…見事なバトルだった」

カノンとサトルも自分の事のようにリーリエのジム戦勝利を祝つ

た。久々に熱いバトルを観たタケシも大きな拍手を送っていた。

ジム戦を終えたリーリエの元にジロウがやって来た。リーリエも頑張ってくれたムツクルとキモリをモンスターボールへと出すと、二体もシロンと一緒にリーリエの前へと並んだ。

「リーリエさん！貴方の臨機応変な対応。そしてそれに応えてくれるポケモン達の戦いぶり、実に見事でした」

「此方こそありがとうございます。わたくしやシロン達にもとてもいい勉強になりました」

そしてジロウはリーリエの前に綺麗な布で覆ったお盆トレイを差し出した。そこには銀色に光り輝くバッチが添えられていた。

「それでは受け取って下さい。これがニビジムを降した証、グレーバッチです」

「ありがとうございます」

リーリエはそう一礼を交わすと、グレーバッチを受け取った。

「グレーバッチ！ゲットです!!!」

リーリエがグレーバッチを持っている手を高く上げると、シロンを含めた三体も喜びの声をあげた。

こうして、リーリエの初めてのジム戦は見事な勝利に終わった。

だが、ポケモンリーグに出場するためにはあと七つ集めなければならない。次なる挑戦を胸に、リーリエは暫くシロン達とこの勝利の喜びを分かち合うのであった。

## 第十四話 暴走

午前中のリーリエのジム戦を終えてから、午後からの試合はカノンが挑戦することになった。リーリエと同様、白熱としたバトルが続いていき、そして遂に勝負が終えようとしていた。

「ゴローン戦闘不能！フシギダネの勝ち！」

よって勝者はチャレンジャー、カノン！」

「やったああ！お疲れフシギダネ♪」

「おめでとうございます！カノン」

「やったね。カノン！」

「うん！」

無事にカノンは勝利を収めることが出来た。流石に緊張していたのか、バトルが終わったと同時にカノンはその場で崩れ落ちてしまった。

「ニビジムを降した証、グレーバッチです」

「ありがとうございます♪」

バッチを受け取ったカノンはヒコザルとフシギダネと一緒に喜び合っていた。さあ、最後はサトルの出番だ。改めてサトルはジムリーダーのジロウに挑戦をお願いしようとしたが、ジロウは申し訳なさそうにサトルに答えた。

「それでサトル君はなんだけど…回復させているとはいえ連続のバトルはヨーギラス達には負担が大きすぎる。ですからサトル君のジム戦は明日に回してもいいですか？」

確かにこうも連戦が続いてしまうとジロウのポケモン達は普段通りの力を発揮出せない可能性がある。

「分かりました。それでしたら明日また伺います」

了承したサトルは改めて明日の朝一番に挑戦させて貰う約束をジロウと交わすと、リーリエ達はポケモンセンターへと帰っていった。リーリエ達がジムを跡にした後、今回の反省点を含めてタケシはジロウに今日のバトルの事について話しかけた。

「お前もどうだったジロウ？二人のバトルは」

「僕の方こそいろいろと勉強になったよ。特にリーリエさんのバトルスタイルは何となくサトシさんと似ていましたね」

それはタケシも感じていた。ポケモン達の力を信じ、ポケモン達の特徴を生かした臨機応変なバトルスタイルをして戦うリーリエの姿は何となくサトシと重なって見えていた。

「そうだったな。あいつ…いま何処で何してるんだろうな」

何処か懐かしそうにタケシは、ジムの天井に設置されているスプリンクラーを見ながらそう思っていた。

~~~~~

ポケモン達を回復し終えたリーリエ達は夕食を取っていた。ポケモンセンター内のレストランはバイキング形式であり、各々自分達が食べたい分だけ持っていけるのである。

自分を取り終えたカノンは席の方へと目をやるとサトルの姿がない事に気付いた。カノンはすぐに先にテーブルについているリーリエに聞いて見た。

「リーリエ。サトルは何処行ったか知ってる？」

「サトルなら明日の調整しに行ってくると言っていました。お手伝いしようと思ったのですが、様子を見るだけだから大丈夫だと」

「そっか♪サトルもあんなに頑張るとは感心！感心！」

サトルは明日のためにポケモン達の再調整を行なっている事を知ったリーリエとカノンは先に食事を済ませて置くことにした。

「それにリーリエは最初はどうかと心配したよ。急にまた緊張しだしたりするんだもの」

「本当に心配をお掛けしました」

「だけど、バトル前に目を瞑ってからは気持ちに余裕が生まれたよね！あの時は何を思ってたの？」

今日のジム戦の事を話そうとしたカノンは真つ先にその話題を切り出した。正直、緊張して今にも倒れそうだったリーリエはどう立ち

直ったのか、バトルとは関係ないが少し気になっていた。質問されたリーリエは少し頬を赤らめながら答えた。

「今までの旅とアローラにいた時の自分を振り返ったのです。特にアローラにいた頃はポケモンバトルの楽しさをサトシから教わっていました。それで彼の事を思い浮かべたら急に安心することが出来たんです。」

仲間達との思い出が今のリーリエの力の源になっているのかもしれない。そう嬉しそうなリーリエを見ていたカノンは確信めいたようにリーリエにもう一つの疑問をぶつけた。ぶつちやけ、これが一番聞きたかったことかもしれない。

「……ねえ、リーリエ」

「はい？」

「前から気になっていたんだけどさあ…」

カノンの目が真剣ですね。何なのでしょうか。そう思いながらリーリエはカノンの質問に耳を傾けた。そして…カノンはご飯を口に頬張りながらリーリエに聞いてみた。

「リーリエってサトシのこと好きなの？」



わたくしが…サトシのことを…  
そんな事考えたことも…

混乱する中、サトシの顔を浮かべるリーリエ。カノンに言われたからということもあつたのか、浮かべるだけでも熱が出るぐらいに  
さらに顔が赤く染まってしまった。

「そ…それは、で…でもサトシはわたくしのあ…憧れでもありません、  
一人の…お…お友達というわけ…で…ありまひてえ…そ…そんな」  
「わかった！リーリエ落ち着こう」

流石にここまで動揺するとは思わなかったカノンはリーリエをさらに落ち着かせる。何よりも周りの視線が気になって仕方がない。そして、さらにヒートアップしているリーリエに口トムがとどめを刺す。

『リーリエの心拍数が急激に上がりだした口ト。これが恋する人間の  
特徴口トね！』

恋…恋…

恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋  
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋  
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋  
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋  
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋  
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋  
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋  
恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋恋

リーリエは壊れた…



「計測しないで下さい!!!」

『あれえええええ!!!』

「ロ…ロトム!!!」

リーリエの「はたく」攻撃がロトムに決まった。叩かれたロトムはそのままおもいつきり遠くの壁に叩きつけられてしまった。もう手に負えない…さらに混乱するリーリエを冷やして落ち着かせようと思つたシロンは冷気を放つ。

「えっ!?」

マイナス五十度の冷気がリーリエに包み込まれる。シロンもこんなに取り乱すリーリエを見たことがなかったため相当焦っていたのであるうか、力の加減が出来ずそのままリーリエは氷漬けになつてしまった。

「わあああーリーリエがあああ!!!」

ひとまず騒ぎが収まったが、また別の問題が起きてしまった。

~~~~~

バトル施設でサトルはポケモン達の技の調整を行っていた。三休ともコンディションは良く明日のジム戦に気合が入っている。その気合が新たな成長の糧となつたのか、その内の一体のヒトカゲは新たな技を覚えたようだ。

「このタイミングにこの技を…すごいよヒトカゲ!」

明日のジム戦に対抗できる技を覚えてくれたようで、ヒトカゲも嬉しくその場を小刻みにジャンプを繰り返している。

すると、サトルはピカチュウの方へと目をやると少し不安げな表情を浮かべる。

「ピカチュウ。やっぱり僕は…」

あることを気に欠けているサトルは自信無さそうに呟くと、ピカチュウは頬の電気袋から発生させた静電気をサトルの指に放つ。ピリツとした感覚に驚いたサトルはピカチュウに目をやる。ピカチュウの真剣な目を見たサトルは決心した表情でピカチュウの頭を撫でる。

「ごめんピカチュウ。トレーナーである僕が信じてあげないといけないよね」

ピカチュウと同じようにヒトカゲとクルミルもサトルに寄り添うようにして近づいてきた。頼りになる自分のポケモン達を見たサトルは胸を張って立ち上がると、改めて自分の決意を固めた。

「明日は僕達の初めてのジム戦だ。トレーナーとしてまだ未熟だし、頼りない所もあると思うけど、それでも僕と一緒に戦って欲しい。だから…明日はみんなでが…がんばりーりエして行こう!!」

サトルなりに和ませようと必死にポケをかました。恥ずかしがるサトルに三体は笑いだす。その光景を見たサトルも一緒に笑って笑い出した。暫く笑いあってからサトルは三体ともにポケモンセンターへと戻っていく。

「なんか、騒がしいね」

ポケモンセンターでは少しレストランの方で騒つく様子が見られた。その原因が自分の知り合いが引き起こしていたことは今のサトルは知るよしもなかった。

ちなみにリーリエは無事に人口冬眠から目覚めたようだ…

~~~~~

「待ってましたよ。サトル君」

「おはようございますジロウさん。今日はよろしくお願いします」

翌日、再びリーリエ達はニビジムに訪れた。気合が入っているのかサトルはポケモン達をモンスタールボールに入れずにいた。

リーリエとカノンは観戦席へと移動し、サトルとジロウは向かい合うようにしてトレーナーサイドへと立った。

「これにより、ジムリーダーのジロウとチャレンジャーのサトルとのニビジムのジム戦を開始します。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンが全て戦闘不能となりますとバトル終了となります。また、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。まずはジムリーダー、ポケモンをバトルフィールドに！」

審判の合図と共にジロウは最初のポケモンを繰り出した。

「行けっ！イシツブテ!!？」

「最初はイシツブテか。よし」

リーリエ戦では「ステルスロック」などを使いかなり手強そうだったポケモン、イシツブテが今回のジロウの一番手らしい

「頼むぞ！クルミル!!？」

サトルの戦法は草タイプを持つクルミルだ。イシツブテに対して相性はいいが、虫タイプも備わっているため岩タイプの技もクルミルには効果は抜群だ。最初は互いに弱点がつかれている者同士のバトルとなった。

「それではバトル開始!!!」

? サトル vs ジロウ?

「イシツブテ！【ロックブラスト】!!？」

「クルミル！【いとをはく】!!？」

イシツブテによる岩の弾丸がクルミルに向かって打ち出される。その攻撃をクルミルは口から発射した糸をフィールドに設置されている岩にくっつけ、自分の体ごとその岩に向かって糸を辿るようにしてイシツブテの攻撃を躲した。これは初めてサトルがクルミルと戦った時に見せた戦法だ。

「今度は相手に向かって【いとをはく】!!？」

今度はイシツブテに向けて糸を発射し、イシツブテの体を縛り上げた。

「そのまま投げ飛ばせ!!」

そのままクルミルはイシツブテを糸で縛り上げたまま、遠心力を使って勢いよく投げ飛ばした。投げ飛ばされたイシツブテは勢いよく岩に叩きつけられた。

### 《観戦席》

「す…すごい」

『あれがクルミルのパワーロトか!』

### 《ジム戦》

クルミルのフルパワーにより岩に叩きつけられたイシツブテは結構なダメージを負っていた。その様子を見たクルミルは自慢げに胸を張っている。

「いいね。イシツブテ!」「ころがる」 攻撃!!?」

「はっばカッター」で迎え撃て!!?」

体を高速縦回転でクルミルに向かって走り出すイシツブテ。そのイシツブテに向かってクルミルは無数の葉の刃で応戦する。だが、そのクルミルの攻撃をパワーで弾き返されてしまい、イシツブテによる攻撃はそのままクルミルに決まってしまった。

「クルミル!!!」

イシツブテの転がるを食らったクルミルは岩におもいつきり叩きつけられてしまい、その衝撃で崩れ落ちる岩の瓦礫の下敷きになってしまった。焦り始めたサトルに追い打ちをかけるようにジロウはあの技を繰り出す指示をイシツブテに送った。

「イシツブテ!」「ステルスロック」!!?」

交代して出てきたポケモンを襲う技。クルミルがすぐに攻撃する事が出来ないこのタイミングにジロウはこの戦いを有利な方へと進

めるために仕掛けようとしていた。

《観戦席》

「えっ？ここで『ステルスロック』？」

「トラップを仕掛けることでさらにサトルにプレッシャーを与えに行っているようです」

あの攻撃の恐ろしさを身を持って体験はしたリーリエとカノンはお互いに冷や汗を流していた。

《ジム戦》

岩のトラップを仕掛けようとイシツブテは光の線をクルミルの周りに打ち出した。「ステルスロック」を貼られたら厄介だ、サトルはクルミルの根性を信じて技の指示を送った。

「クルミル！『はっぱカッター』!!？」

サトルの想いが届いたのか。クルミルは「はっぱカッター」で瓦礫ごと弾くと、そのままイシツブテの「ステルスロック」を仕掛けようと打ち出された光の線を打ち消した。そして、阻止するだけでもなくそのままクルミルの攻撃はイシツブテにも決まったのだ。

「今だ！『いとをはく』で縛り上げろ!!？」

「イシツブテ！『ほのおのパンチ』!!？」

ふらつくイシツブテに糸で縛り上げようとしたが、イシツブテは炎を纏った拳でクルミルの糸を燃え消した。イシツブテは苦しい表情を浮かべていながらも、根性で「ほのおのパンチ」で攻撃をしようとクルミルに向かって突進していく。

「『はっぱカッター』!!？」

そんなイシツブテを止めるようにクルミルは再びを攻撃を始めた。クルミルの攻撃はイシツブテに当たったが、怯むことなくそのままクルミルに「ほのおのパンチ」を食らわせた。この攻撃により四倍ダメージを負ったクルミルはその場で倒されてしまった。イシツブテ

も攻撃を決めた途端、全ての力を出し尽くしたようであり、ふらつきながらその場で倒れてしまった。両者が再び立ち上がる様子はないかった。

「イシツブテ！クルミル！共に戦闘不能！」

### 《観戦席》

先鋒から激しい戦いを見せた二匹のバトルは同時に戦闘不能となった。その息詰まる戦いをリーリエとカノンは固唾を飲んで見ていた。

「相打ち…ですか」

「息が詰まるバトルだったね」

### 《ジム戦》

サトルとジロウはそれぞれのポケモンをモンスターボールへと戻した。

「戻れイシツブテ！ご苦労様でした」

「戻れクルミル！ありがとう！ゆっくり休んでくれ」

戦ってくれたポケモンにお礼の一言を述べた後、ジロウは二体目のポケモンをバトルフィールドへと放った。

「行けっ！イワーク！！？」

その大きさに圧倒されながらもサトルは二体目を放った。

「頼むぞ！ヒトカゲ！！？」

サトルの合図と一緒にヒトカゲは小さな火の玉を口から放ち、気合いをあげた。両者のポケモンが出揃った所で審判による開始のコールが入った。

「ヒトカゲ！【あなをほる】！！？」

「イワーク！地面に向かって【たたきつける】！！？」

弱点を突こうとヒトカゲは相性の良い地面タイプの技を仕掛けた。

するとイワークは大きな尻尾でフィールドに向かって叩きつけた。フィールド全体に地鳴りが起こった。それによって生まれた衝撃波でヒトカゲは地面の中から叩き出されてしまった。

「ヒトカゲ!!!」

「今だ!・【たいあたり】!!?」

空中へと放り出されたヒトカゲにイワークは体当たりを仕掛けた。

「ヒトカゲ!・【メタルクロー】!!?」

負けじとヒトカゲは鋼のように硬化させた爪でイワークの体当たりを受け流すようにして躲した。さらに躲した先にある岩を蹴り上げてイワークの方へと飛び出すと、そのまま硬化させた爪でイワークは切り裂いた。硬い岩をも切り裂いてしまうほどの爪に引つ搔かれたイワークには十分なダメージが入った。

### 《観戦席》

「えっ!・【メタルクロー】!!?」

「ヒトカゲ!・【メタルクロー】を覚えたのですか!」

見たことがない技を決めたサトルのヒトカゲを見たリーリエとカノンには驚いた様子であった。

### 《ジム戦》

「イワーク!!!」

鋼タイプの技を受けたイワークはジロウの呼びかけが聞こえると、頭を左右に大きく振った。これにより気を取り直したイワークは再びヒトカゲを見つめ始めた。

「ヒトカゲ!・【あなをほる】だ!!?」

「イワーク!・【がんせきふうじ】!!?」

穴を掘って身を隠して、近づいた所で【メタルクロー】決めようと考えたサトルはヒトカゲに【あなをほる】を指示したのだが、イワー

クは岩石をヒトカゲの前後左右に打ち込むとそのままヒトカゲを挟み込んだ。

「あっ！ヒトカゲ!!!」

岩石に挟み込まれてしまったヒトカゲは身動きが取れないでいる。

### 《観戦席》

『捕まってしまったロト!』

「あれじゃあ、逃げられないよ」

### 《ジム戦》

「ヒトカゲ！脱出するんだ!」

脱出するにも岩石によってがっしりと体を固定されてしまっている。脱出しようともがけばもうほど岩石が体に食い込んでいく。

「イワーク！【たいあたり】!!?」

身動きが取れないヒトカゲに攻撃の手を止めるジムリーダーではない。大きな体を捻じ曲げイワークは勢いよくヒトカゲの方へと向かって行く。もう、この攻撃を防ぐ手がない。イワークの攻撃がヒトカゲに決まるのを黙って見てるしかなかった。

凄まじい破壊音とともに、イワークの体当たりは岩石に捕まっているヒトカゲに撃墜する。何も出来なかった、目の前で岩石が崩れ落ちていく。まるで自分の無力さを痛感させるように…

「ヒトカゲ戦闘不能！イワークの勝ち!」



何も…出来なかった…

「…ごめんヒトカゲ。ゆっくり休んでくれ」

静かにサトルはヒトカゲをモンスターボールへと戻した。

まだジム戦に負けた訳でもないが、何とも言えない敗北感がサトルを襲う。さらには自分のポケモンを見捨てるような罪悪感も感じるようになり、自分の無力さがサトルの自信をコップに徐々に罅が入るようにだんだんとへし倒されて行く。気力が無くなりつつあるサトルはそのまま呆然と立ち尽くしてしまった。

「チャレンジャー！次のポケモンを」

審判の声に反応したピカチュウは自分からバトルフィールドへと立った。そんなピカチュウの様子をみたサトルは自然と我に帰った。ピカチュウも頬の電気袋から電気を発しながら真剣な目でサトルを見ている。

反省はバトルが終わってから、サトルは一度深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

「全力でやろう！ピカチュウ!!？」

ピカチュウの気持ちに伝えてからバトルを少し中断させてしまった事に対してジロウに深々とお辞儀返した。

気力が戻ったサトルであったが、リーリエとカノンとロトムは何処と無く心配で仕方がなかった。

「うん…それじゃ、行くよ！イワーク【りゆうのいぶき】!!？」

「ピカチュウ！【でんこうせっか】!!？」

イワークは息吹をピカチュウへとおもいつきり吐き出した。それ

をピカチュウは自慢のスピードで攻撃を躲すと一直線にイワークの元へと向かった。だが【でんこうせっか】はイワークには効果が薄い。だが、サトルの狙いはこの後だ。

「そのまま！【アイアンテール】!!？」

【でんこうせっか】のスピードで一気にイワークに近づいたピカチュウは鋼のように硬化させた尻尾でイワークの頭を叩きつけた。これはリーリエがやった時の戦法だ。

鉄のように硬い一撃はとても大きいものであり、イワークはその勢いに負け地面へと叩きつけられた。

### 《観戦席》

「決まったー！」

『効果は抜群だロトー！』

カノンとロトムはさっきの心配が一気に無くなったように声をあげた。

「……………」

「リーリエ！心配ないって！さあ、応援しよー！」

さっきのサトルの様子が心配になってしまったんだろうと、思ったカノンは軽くリーリエの肩を叩いた。それに反応したリーリエはカノンに軽く笑みを浮かべた。だけど、リーリエが少し黙り込んでいたのはカノンが思っていたのとは違う。

「あつ…いえ、ここまで一緒に旅をして来たのですが、こうしてサトルとピカチュウと一緒にポケモンバトルをしているの初めて観たなあと思ひまして…」  
『そういえば、そうロトねー！』

そう、オーキド研究所から一緒に旅をしてからここまでサトルがピカチュウと一緒にポケモンバトルをしているのは、今見ている試合がリーリエにとって初めてだった。

## 《ジム戦》

「もう一度！【アイアンテール】!!?」

「イワーク！【たたきつける】攻撃!!?」

両者とも、自身の尻尾を使った攻撃をぶつけ合う。パワー互角で二体はそのままぶつけ合った反動で後ろに下がる。

「イワーク！【りゅうのいぶき】!!?」

「ピカチュウ！【10万ボルト】でガード!!?」

空中に飛び出していて回避が出来ないピカチュウは電撃でイワークの攻撃を相殺させた。だが、爆風に吹き飛ばされてしまいピカチュウはおもいつきり地面に叩きつけられてしまった。

「【がんせきふうじ】だ!!?」

さらにイワークはヒトカゲの時と同じよう岩石でピカチュウの体を拘束した。

「【たいあたり】!!?」

イワークはピカチュウを捕らえている岩ごと体当たりで粉碎した。ピカチュウはそのまま瓦礫の下敷きとなってしまった。

## 《観戦席》

「そ…そんな」

『残念だけど、勝負は…決したみたいロトね』

「……………」

この絶望的な状況にリーリエとカノンとロトムは悪しからずサトルの敗北を考えてしまった。

電気技も効かず、さらに控えのポケモンがあと一体いる。イワークを倒せたところでピカチュウの体力が十分に残っている確証がない。考えたくないが…考えてしまうのだ

《ジム戦》

「ピカチュウ！戦闘ふ…!?？」

審判によるピカチュウの戦闘不能の判断が下されようとしていた

その時…

突然の地鳴りとともにフィールド全体が大きく揺れ始めた。

「なんだ!?？」

突如のことに周りを見渡し原因の元を探そうとするジロウ。するとピカチュウが埋まっている瓦礫から凄まじい電撃が発せられた。その電撃により吹き飛ばされた瓦礫の中からボロボロになりながらも、立ち上がるピカチュウの姿があった。ピカチュウの姿に安心したリリーエ達であったが、ピカチュウの様子を目を凝らしてよく見ていると何かが可笑しいと悟った。

ピカチュウの目は血走っていており、雄叫びを上げながら、電気袋から溢れ出る電気を大きく周りに放っていた。

《観戦席》

『ピピピピピ!!!信じられないロト!ピカチュウの電圧が一気に上昇しているロト!』

「それよりも、ピカチュウの様子がなんか変ですよ!」

電撃を垂れ流しに発しているピカチュウ。その電撃によってリーリエとカノンの髪は静電気によって上へと浮かび上がってしまった。つまりピカチュウの電撃は観戦席までに影響をもたらすぐらいに強いということが分かるのだ。

「やあ、どうだい?サトル君のジム戦は」

固唾を飲んでジム戦を見ているリーリエ達の後ろから仕事の休憩の合間をとってジムの様子を観にきたタケシの姿があった。

「タケシさん!!!それが…」

「これは…一体」

リーリエ達の不安げな顔から察したタケシはバトルフィールドに目をやると、電撃を発しながら雄叫びを上げているピカチュウの姿に驚愕していた。

### 《観戦席》

「ピカチュウ!!!落ち着くだ!ピカチュウ!!!」

サトルは必死にピカチュウを呼ぶものもピカチュウはそれに応えてくれない。それどころかピカチュウはサトルの指示を聞かずに電撃を自分の身に纏うとそのままイワークに向かって突進していく。

凄まじい電気エネルギーと一緒にピカチュウはイワークへと向かっていく、空かさずジロウはイワークに攻撃の指示を出した。

「あれは…【ボルテッカー】? イワーク【たいあたり】だ!」

地面タイプのイワークに電気技は効果がない。弾き返すぐらいはためジロウはピカチュウと同じようなに物理攻撃をイワークに命じた。

ピカチュウとイワークがぶつかり合うと大きな衝撃波が会場全体に鳴り響いた。それによって吹き飛ばされた二体。煙がはれるとそ

ここにはさらに闘争心を先立てている一体と目を回して戦意喪失している一体の姿があった。

「イ…イワーク戦闘不能！ピカチュウの勝ち」

なんと、勝ったのはピカチュウだった。

### 《観戦席》

『理解不能ロト!!!イワークに電気タイプが効いたロトか!!!』

予想もしない出来事にロトムも目を回していた。この状況にリーリエとカノンも驚きを隠せないでいた。

「いや、効いてないよ」

「えっ?」

その謎を解明するようにタケシは徐ろに口を開いた。

「ピカチュウの【ボルテッカー】の威力が強すぎて、その衝撃でイワークが吹き飛んだんだ。その証拠にピカチュウは反動ダメージを負っていない。【ボルテッカー】が決まったのであれば、与えた分のダメージが自分に跳ね返ってくるはずだ」

ピカチュウの技が決まったのではなく、二体が生んだ衝撃波によって吹き飛ばされたことよってやられた。それだけピカチュウの電撃の威力が上がっていることを意味していた。だが、なぜピカチュウの電撃がここまで高くなったのか。何か知っているのではないか、リーリエは長年サトルと連れ添っているある人物に聞いてみた。

「カノン…何か知っていますか？サトルのピカチュウのこと!」

リーリエの問いにカノンは引きつった顔で横にゆっくりと首を振った。

「知らないの…それにサトルとピカチュウが戦っている所を見るのも私も初めてなんだ」

「どういうことですか?」

「トレーナーズスクールでのポケモンバトルの実技の時も、サトルは

ピカチュウを使わず私のヒコザルを借りて、授業を受けてたんだ。その時はピカチュウがバトルすることが怖いからと聞いただけだったけど…まさか、あれが原因なの…」

この表情からカノンは何も知らなかったのもであろう。だけど…カノンの話からサトルはピカチュウを使ってバトルをしようとはしなかった。

つまり…サトルはピカチュウがこうなることを知っていたことになる

### 《ジム戦》

「…よし」

呼吸を整えたジロウは最後のポケモンを繰り出した。

「なあ！ジロウ…」

「あのポケモンは？」

そのポケモンの登場に驚くタケシと新たに繰り出された大きなドリル頭につけたポケモンに首をかしげるリーリエ。ロトム凶鑑説明が入った。

『ドサイドン ドリルポケモン』

地面・岩タイプ

岩を手のひらの穴に詰めて筋肉の力で発射する。稀にイシツブテ

を発射することもある』

「切り札はリーリエと戦ったヨーギラスと私と戦ったゴローンを繰り出してくると思ってたけど…」

「ですが、あのドサイドンというポケモン。なんだか、とても強い力を感じます」

## 《ジム戦》

「落ち着くんだ！ピカチュウ!!!」

何度もピカチュウを呼びかけるサトルであったが、サトルの声には気にも止めずに暴走し続けるピカチュウは地面のタイプのドサイドンには全く効かない【10万ボルト】を連続で浴びさせていた。

必死に呼び止めようとするサトルと暴走し続けるピカチュウ。その様子をジロウは黙って見ていた。ジム戦に挑戦してくるトレーナーの中には今の自分のレベルに合っていないポケモンを繰り出してくることもある。そのため、主人として認めていないポケモンが好き勝手にバトルをして強引にジム戦に勝とうとしようとすることは珍しいことではない。

サトルはそのトレーナーとは違うことはわかっている。この状況は突然に起きてしまった事故と変わりないと。だが、一度始まってしまったジム戦を終わらせることは出来ないのも事実だ。

「ドサイドン！【ロックブラスト】!!?」

ドサイドンが動きだす。掌から岩石をピカチュウに発射していくとピカチュウは【10万ボルト】で相殺する。さらに【ボルテッカー】でドサイドンに向かっていく。

「メガホーン】で迎え撃て!!?」

それを自慢の角でピカチュウに迎え撃つ。電気技は効かないがド



サイドンは少しづつ押し出されていた。ドサイドンのパワーが押し負けていることにジロウは驚いていた。

「ドサイドン！【がんせきほう】!!?」

力一杯にピカチュウは振り払うと、両手の掌を重ねると、大きな岩石を形成し出した。「【がんせきほう】は岩タイプの中でトップクラスの技。その技がピカチュウへと放たれる。だが、そのドサイドンの切り札とも言える技をピカチュウは【10万ボルト】で再び消し飛ばしたのだ。

### 《観戦席》

『信じられない口ト！【がんせきほう】を【10万ボルト】で相殺した口トか!!』

ピカチュウのとてつもない力に圧倒されるリーリエ達。だが、ピカチュウが度々息を切らしている様子も一緒になって表れていた。

「ピカチュウ！なんだが苦しそうですよ」

「それにさっきから自分勝手に攻撃しているだけで、サトルの声が聞こえていないみたい」

もう見ていられないこの状況。リーリエは苦しそうなピカチュウを見ていられず下を向いてしまった。

### 《ジム戦》

苦しそうに冷や汗も掻いているピカチュウ。さらに雄叫びを上げるとドサイドンに向かって飛び出そうとしていた。

このままだとピカチュウの状態が危ない。ピカチュウが飛び出した直後にサトルは…

「戻れ!!ピカチュウ!!?」

空かさずフレンドボールにピカチュウを戻した。ピカチュウを戻したサトルを見て、まだジム戦終了ではないが、真っ先にカノンはサ

トルの方へと駆けて行った。カノンを見てリーリエとロトム。そして、タケシもバトルフィールドへと駆けて行った。

真っ先にサトルの元へと向かったカノン。彼の顔を覗き込もうとするが、深々と被った帽子のせいでその表情は見れないが、その体は震えていて、口元に目をやると軽く下唇を噛み締めていた。

「サトル…」

カノンはそつとサトルの腕を掴むと、それに気づいたサトルはカノンに目をやる。涙目になっているその目を拭うとゆっくりと頷くと、ジロウに目をやり深々と頭を下げた。

「すみません。き…棄権します」

「…分かりました」

ジロウはゆっくりと審判に合図を送る。

それを見た審判はこの勝負の判決を述べた。

だが、それは予想だにしていなかったことだった。

「このバトル！ジムリーダー、ジロウはチャレンジャーのレベル規定外のポケモンを使用したことによる反則負けとみなす！よって、このバトルの勝者はチャレンジャー、サトルとする！」

「「えっ!!」」

思いもしなかった結果にサトルとカノン、そしてリーリエも声を揃えて声をあげた。

「一体…どういうことなのですか？」

「言葉通りの意味だ。ドサイドンを繰り出した時点でジロウの負けが決まっていたんだ」

訳がわからないサトルに元ニビジムのジムリーダーであるタケシが説明した。

「ジムリーダーが使用するポケモンのレベルは、現時点で挑戦者の所持しているバッチの数によって決められているんだ。だが、ジロウが最後に出したドサイドンはバッチ数が六個以上持った挑戦者に使用されるポケモン。まだ、バッチを持っていないサトル君を相手に戦わせるポケモンではないんだ」

つまりジロウは今のサトルと戦わせるべきではないポケモンを繰

り出して来たということだ。それじゃ、なんでこんなことをしたのか。悩むサトルにトレーナーサイドへとジロウはゆつくりと歩み寄って来た。

「サトル君のピカチュウがそれ以上に強い力を感じたからです。おそらくドサイドンでなければ、間違いなく他のポケモン達は一撃で倒されていたと思います。」

そう言うときジロウはサトルの前にジムバッチを差し出した。

「グレーバッチ？」

「力を制御できずに暴走していたとはいえ、自分の反則負けには変わりありません」

「いや、それでは実力で手にしたという意味にはならないはず！個人的にはそれで勝利を得ることが出来たとは思えません。バッチを受け取る資格は…僕にはないです！」

ジムリーダーの反則負け。だがサトルはこの勝敗に納得いかない。この難しい状況にタケシはある提案を二人に述べた。

「それなら、また後日に再試合をしたらどうだ？ピカチュウを抜かして、二対二のシングルバトルで、どうだろジムリーダー」

タケシの案に考えこむジロウであったが、その案にサトルは空かさず答えた。

「僕はそれでも大丈夫ですが、いいですか？」

「はい。俺もそれで構いません」

これにより、サトルのジム戦は仕切り直しという形になった。

サトルの再試合の日程を合わせたリーリエ達はジムを後にした。昼食の時間になりそうであったためポケモンセンターへと向かった。「ごめん二人とも。本当なら今日にでも次の街に向かえたのに、僕のせいで足止めを食らってしまった…」

サトルは弱り切った声でリーリエとカノンに謝罪した。そんな様子を見た二人は優しく笑顔を向けていた。

「わたくし達はそんなこと思ってませんよ！サトル!!? 謝ることはありません」

「そうだよ！気を落とさない♪落とさない♪」

「あ…ありがとう。二人とも」

「それよりもサトルのお身体が心配ですよ。ポケモンセンターに着きましたら、まずはゆっくり休ましましょう」

何よりもサトルのことが心配で仕方がなかった、リーリエとカノンは少し笑顔が戻ったサトルの顔を見て安心した。

ポケモンセンターに着くなり、すぐに三人はサトルのポケモン達をジョーイさんに預けるとレストランへと向かった。朝食を終えたと同時にサトルのポケモン達の回復が終わっていた。ボールから飛び出したヒトカゲとクルミル。そして、ピカチュウも元気よくサトルに飛びついて来た。

「よかったです。みんな元気になって！」

「それにピカチュウも落ち着きを取り戻したみたいだね」  
「うん」

そういうと、サトルはピカチュウの頭を優しく撫でた。気持ちよさそうにしているピカチュウを見たサトルはゆっくりと立ち上がると二人の前に立った。

「さっきのピカチュウを見て二人ともびっくりしたよね…」

申し訳なさそうに言うサトルにカノンは口を開いた。

「サトル…トレーナーズスクールの時からピカチュウを戦わせたくなかったのはさっきのが理由なの？」

そう言うサトルはゆっくりと頷いた。

『ピカチュウが電気エネルギーを両方の頬袋で貯めるように、電気タイプのポケモンは電気エネルギーを貯蔵できる場所があるロトよ！ピカチュウが暴走したのは電気エネルギーをうまく体に貯めることが出来なかったのが原因だと思っロトね！』

「いや…それだけでは無いと思うんだ」

その言い方からサトルはピカチュウが暴走することは分かっていたが、なぜそうなるかはサトルにも分かっていないようだった。ピカチュウを優しく抱き抱えながらサトルは意を決した表情をリーリエとカノンに向けた。

「さっきの事も含めてみんなに話しておくよ。僕と…ピカチュウとの

出会いを…」

サトルとピカチュウとの出会い。

それは、まだサトルがトレーナーズスクールに通う前の話。心安らぐトキワの森での出逢いから始まったのだ。

『了解！ さあ、始めようとするか』

同時刻、不敵な笑みを浮かべながらその人物はポケモン博物館の中へと入って行った。

## 第十五話 少年とポケモン達

??????

「あー！ここがトキワの森なんだ！」

「サトル君！そんなに行ってしまうと、逸れてしまうぞ！」

「ご…ごめんなさい。ボルグ博士！」

初めて野生に生きるポケモン達を前に胸を弾ませ、走り出そうとしていたサトルをボルグは優しく注意を促した。

碧深き渡るトキワの森。父の知人であるボルグという研究員に連れられ、サトルは初めて野生ポケモン達が潜むエリアへと足を踏み入れた。

もうじき、十歳の誕生日を迎えるということで、将来ポケモントレナーとして旅立つ日に備え、自分のパートナーとなるポケモンを探しに訪れたのだ。

「初めてのフィールドワークに気持ちが弾んでしまうのは分かるが、ポケモンを持っていないサトル君にはここは危険地帯でもあることは忘れずにな」

「はーいー」

ボルグの言いつけにサトルは元気よく答えた。見渡すと気持ちよさそうに日向ぼっこをしているキャタピーや進化の時をじっと待っているトランセル、そしてトキワの森を訪れたサトルを歓迎するかのようには太陽の光に照らされ銀色に輝く鱗粉を撒きながら頭上を一斉に飛んで行くバタフリーの姿があった。

それからいろいろなポケモンに出会うもののサトルは目的としているポケモンは見つからないでいた。

「ところで、サトル君が探しているポケモンは何かね？」

最初のポケモンはすでにサトル自身の中で決まっているのか。ここまで出会ったポケモンに気にも止めずに探し回っているサトルにボルグは疑問を抱いていた。サトルは満面の笑みでボルグの質問に答えた。

「それはもちろん、ピカチュウだよ！」

「ほう…ピカチュウか。それはまたなぜ何だい？」

「僕もサトシみたいなトレーナーになりたいからだよ！そんなサトシの最初のポケモンもピカチュウだからね」

先日に行われたカントーリーグセキエイ大会。そこで初出場ながらも唯一マサラタウンのトレーナーで予選を勝ち抜きベスト16入りまで果たしたサトシの戦いをテレビ中継で観ていたサトルは彼のいちファンとなっていた。いつか彼と肩を並べられるようなトレーナーになりたい。だから、彼と同じで最初のポケモンはピカチュウと決めていたのだ。

そんなサトルの話聞いた最中…

ズドーン

!!!!!!

地鳴りと共に森全体を覆うような鋭い雷が、頭上高く発せられると同時に大きな雷鳴が鳴り響いた。

「なんだ、いまの電撃は？」

空を見上げると雲ひとつない快晴。つまりさっきの雷は電気ポケモンによるものだ と推測したボルグはサトルを連れ、雷が起こった場所へと急いで駆け出した。

目的地に到着すると、周りの木々は押し倒されており焦げた形跡があった。この有様から凄まじい威力であったことを物語っている。そしてそこには身体に至る所から電流を発しながら苦しんでいる一体のポケモンの姿があった

「博士！あのポケモンは？」

「ピチューだ…」

ピカチュウの進化前に該当するポケモン。そのピチューは自分の中に溜まった電気を出そうと光のように辺り一面に散乱した。

「危ない!!!」

電気がサトルに当たらないようにボルグは自分を縦にしてサトルを電流から守った。

「行けっ！ライボルト!!？」

ボルグはピチューと同じ電気タイプのポケモンであるライボルトを繰り出した。ライボルトはすぐにピチューの元へと駆け寄ると自分の前足でピチューの身体を押しえ込んだ。すると、再びピチューの体から電気が辺り一面に放出された。

暫くして大きく放たれた電気はだんだんと治っていく。ライボルトがピチューから離れるとピチューはぐったりとその場で気を失っていた。

「ピチューが…」

「大丈夫だ！ライボルトの避雷針を利用して貯蔵できない分の電気を少しライボルトに流しただけだ。それよりも一度ポケモンセンターに連れて行かないと！」

ピチューを抱えサトルとボルグは急いでトキワシテイのポケモンセンターへと走り出した。

~~~~~

ポケモンセンターに辿り着つき、そのままピチューは治療室へと運ばれて行った。

数分後、安心した顔で治療室から出たジョーイさんは二人の元へと駆け寄った。

「大丈夫です。ピチューはすっかり元気になりましたよ！」

「ありがとう！ジョーイさん!!!」

ピチューの無事を知ったサトルはポケモンセンター内に響き渡るぐらいの大きな声でジョーイさんにお礼を言った。

「ですが…」

「何か問題でも？」

仕事の疲れでもなさそうだ。少し声を凝らしたジョーイを見てボルグは訳を聞いた。



「目を覚ましましたら、私を見るなり急に暴れて出してしまいました…」

それを聞いたサトルは無我夢中に治療室の中へと走り出していた。呼び止めようと急いでサトルの跡を追うボルグ。それにつられるようにしてジョーイも跡を追った。

治療室はガラス越しからポケモンの様子をトレーナーが見ることが出来るようになっていた。そこからサトル達は中の様子を覗いてみると、辺りを警戒しながら両頬の電気袋から電気を発しながら身構えているピチューの姿があった。サトル達に気がつくとも目を鋭く尖らせては牙を剥き出しながらこちらを睨んでいた。その表情はピチュー特有の愛くるしさがなかった。人間への憎しみ。そんなものだけが感じられた。

「あの様子だと…我々人間に酷い事をされたのであろうな…」

その言葉を聞いたサトルはすぐに治療室の中へと入る扉の前に立つと中へと入っていった。

「サトル君！ダメよ、危ない！」

サトルの思いもよらない行動にジョーイはサトルを連れ戻そうとしたが…

「ボルグさん？」

「ここは少し様子を見てみましょう」

止めに入ろうとしたジョーイさんをボルグは肩を掴んで止めた。人に懐いていない野生のポケモンに近づこうとするまだ幼い年頃の少年。今すぐにも止めるべき状況であることは分かっている。だが、サトルのポケモンに対する思いやりの感情がピチューの閉ざした心を開かせることが出来るのではという、実に根拠のない考えであるが、不思議とそれに賭けてみたいとボルグはそう思ってしまった。

サトルは治療室に入るなり、ピチューの元へと近づいていく。あまりピチューを刺激させてはいけないようサトルはピチューと同じ視線になるように体勢を少し下げたままピチューの元へと向かった。

「こんにちは、ピチュー。僕はサトル。僕は君に酷い事をしないよ。だから、大丈夫！こっちにおいで…」

電撃を仕掛けてこないだけよかったが、ピチューは近づくとサトルを見ては唸り声をあげながら警戒している。だけど、今のサトルには恐怖心ではなくピチューを助けてあげたいという気持ちが強かったのであろう、サトルは御構い無しにピチューの頬に手を差し伸べようとしていた。

「君は僕の事が嫌い？」

サトルの手が近づいてくることにさらに身構えるピチュー。いつ攻撃されてもおかしくない。それでも…

「僕は君が好きだよ！」

サトルはピチューの頬に優しく手を置いた。ピチューが電気を貯め込んでいるのは両頬にある電気袋。そこに手をやると感電してしまふ危険性もあったが、不思議なことにあれだけ電気を発していたのにもかかわらず、サトルは何事にもないように優しくピチューの頬を撫でる。するとピチューはサトルに対する警戒心が消えていき、少しずつ落ち着きを取り戻して行った。やがてサトルの気持ちが通じたピチューは自分の頬に置かれたサトルの手を優しく擦り合わせてきた。

「どうやら、もう大丈夫のようですね」

「ええー！」

ピチューの暴走が止まったことを確認したボルグとジョーイも治療室へと入っていった。再びピチューの方へと見たボルグの目にはさつきまで凶暴に暴れていたとは嘘のようにサトルに甘え始めたピチューの姿があった。その光景を見たボルグはある一つの提案が浮かんだ。だが、原因不明の暴走を引き起こすポケモンをまだ幼いサトルに任せていいのか。

だが：それ以上にこのピチューの暴走を止めたサトルの包容力に感心を持ったボルグはどうしてもサトルにピチューを任せてみようと思った。

「サトル君、そのピチューをパートナーにしたらどうだ？君が探していたピカチュウの進化前でもあるわけだしな」

突然のボルグの案にサトルは驚いた様子でいたが、サトルはピチューの方へと一瞬目をやってから元気よく答えた。

「うん！する!!!」

それにはピチューも元気よくサトルに続いて答えた。

「だったら、これを…」

そう言うと、ボルグは一つのモンスターボールをサトルに手渡した。

「フレンドボールだ！このボールはジョウト地方のボール職人であるガントツという人が作ったモンスターボールだ。材料となる緑ぼんぐりにはポケモンの気持ちを落ち着かせる香りが強く、それに鎮静効果もある。そのぼんぐりから作られたこのフレンドボールでゲットされたポケモンはなつきやすくなるし、万が一またピチューが暴走したりしてもこのボールに入れてあげれば、落ち着かせることが出来ると思う」

「ありがとうございます！」

「ただし、またあんなことが起きてしまうといけないから無理にピチューにバトルをさせないこと！それだけは約束だ」

「はい！これからよろしくね。ピチューー！」

??????

リーリエとカノンは飲み物が入ったコップを両手で握りしめながらサトルの話を聞いていた。サトルとピカチュウの出会い。そしてピカチュウの身に起こる謎の症状。サトルの話を聞き終わったにも関わらず、二人はコップに口をつけることなく、握りしめたまま固まっていた。

「普通に暮らしたり多少のバトルは大丈夫なんだけど、バトルで大きなダメージを負ったりすると、さっきみたいに暴走して制御出来なくなってしまうんだ。だから、ピカチュウにはその原因が分かるまでバトルはあまりさせないようにしていたんだ。」

「それだったら訳を話して、私みたいに二対二して貰えるようにジロウさんに頼めばよかったのに……」

「そう考えたけど、でもそれを提案すると二人とも絶対に訳を聞きに来るだろ。そのせいで二人ともピカチュウと接しづらしくなると思ったからさあ……」

まだ旅立つてから日は浅いが、ここまで一緒に旅をしてサトルとピカチュウの悩みに気づいてあげられなかったことに対してリーリエは自分を責めてしまった。だが、そのリーリエよりも……

「ごめん……サトル」

いつものような天真爛漫な彼女とは違った。少し口を濁し、少し低めなトーンでカノンは言った。

「スクール時代からいつも一緒にいるのにサトルとピカチュウにそんな悩みがあったことに気づいてあげられなくて、ごめんね。友達なのに……」

「いや、謝るのは僕の方だよ。ここまで一緒に旅をして来たのに、そんな大事な事を二人に打ち明けようとしなかった。カノンとリーリエがピカチュウの事について話して態度を変えるような人達じゃない。だけど、頭で分かっているでも消極的な方へと考えてしまう僕の悪い癖のせいで、ずっと……ずっと……黙って隠してしまっただけ……」

悩みを打ち明けられなかったことに対して自分を責め続けるサトル。そんな彼の震えている手をそっとリーリエは自分の手を重ねた。「リ……リーリエ？」

急なことにサトルは一瞬驚いてしまった。一度、深呼吸をして心を落ち着かせたリーリエは真っ直ぐな目でサトルの方へと向いた。

「わたくしは自分の悩みを平気で打ち明けるような人はいないと言い切りませんが、誰にだって打ち明けるのが怖くないという人はいないと思います。その一言でその人達との関係性がどう変わってしまうのか、どんなに頭の良い方でも人の感情までも正しい正解を導き出すことは出来ません」

……………。

「サトル、顔上げてください」

俯いていたサトルはリーリエの一言で顔を上げた。もう一度、二人の顔を見たサトルは不思議と気持ちが悪く落ちてきたような感じがした。それは、二人がいつもと変わらない表情でサトルを見てくれたからかもしれない。

「サトル。話してくれてありがとうございます。ですが、これだけは約束して下さい。これから一緒に旅をしていく仲間なのですから、もう一人で抱え込まないで下さい。もう隠し事は無しですからね！」

固いことはいらない。その言葉だけでもサトルは救われた。少し鼻声となってしまう声でサトルは返事を返す。ピカチュウの暴走の件には驚きもした。だけど、その事を知ることが出来た事でより一層、三人の絆をもっと深めていくことができたと思う。それはリーリエだけでなく、カノンもサトルもそう思ったはずだ。その証拠にあれ

だけ落ち込んでいた二人に笑顔が戻ったのだから…

「そうそう♪それぐらいのことで私達がピカチュウを怖がったりする  
と思っただけ♪サトルは一人で考えすぎなんだよ！友達なんだから  
隠し事はこれからなーしだよ！」

いつもの感じに戻ったカノン是人差し指をサトルの口元に押し付  
けた。サトルの口元から離すともう一度軽く笑みを浮かべた。それ  
を見て安心したサトルは緊張が解けたように肩の力が降りていた。

話も終わり三人は一度、自分たちの部屋に戻ろうと移動しようとし  
たその時…

ドッゴーン  
!!!!!!

建物全体が地響きで揺れ始めた。それほどの衝撃音が鳴り響いた。

「何！何！なんの音？」

揺れがおさまるとリーリエ達はポケモンセンターの窓から音が  
鳴った方角へと目をやった。その方角からは黒い煙が立ち昇ってい  
た。

「あそこは…確か科学博物館があった場所です！」

「何が起きたんだろ？」

「とにかく行ってみようよ！」

三人はポケモンセンターを飛び出すと一目散に科学博物館の方へ

と走り出して行った。

~~~~~

科学博物館は大きく損傷していた。リーリエ達が科学博物館に到着すると、そこにはタケシとジロウの姿があった。

「タケシさん！ジロウさん！」

「三人共！」

「何かあったんですか？」

「科学博物館が何者かに襲撃されたみたいなんだ」

「襲撃：まさかロケット団？」

「分からない。だが、今日は休館日だったから負傷者が出なかったのが不幸中の幸いだった」

タケシとジロウから現場の状況を聞いたリーリエ達。その直後、一台の白バイが科学博物館へと向かってきた。

「ジュンサーさん」

「みなさん、怪我はありませんでしたか？」

「自分たちは大丈夫です。」

「それは良かった。だけど、何が起こったとでもいうのかしら……」

その時、建物の中から如何にも感じの悪いトレーナー達が現れ、モンスターボールを持つとリーリエ達を包囲した。突然のことで困惑するリーリエ達を嘲笑うかのように、科学博物館から少し長めの緑色の髪をした青年が現れた。

「おっと、これはこれはジムリーダーさん。随分とお早い登場で……」

その男は挑発じみた態度を取りながら、リーリエ達に歩み寄ってきた。慌ててジュンサーはその青年に問い詰める。

「御前達一体何者なの？ロケット団なの？？」

「さあな！素直に答えるわけでもないけどよ！」

その青年が指で音を鳴らすと同時に、周りのトレーナー達は一斉にモンスターボールからポケモンを繰り出した。そのトレーナー達もリーリエ達を嘲笑いながら、ゆっくりとその距離を縮めていく。同じ戦闘服を身につけているが、彼らの胸元にはロケット団の象徴でもある【R】マークが印されていない。

「悪いが、大人しくしてもらおうからな。ジムリーダーとその御一行様達もよ。お前ら！ここは任せたぞ〜」

「待ちなさい!!!」

そう言い残すと青年は一人、科学博物館の中へと姿を消した。跡を追おうとしたがその青年の仲間のトレーナー達に行く手を塞がれてしまった。そのトレーナー達も自分のポケモンに合図を送ると、一斉に戦闘体勢へと切り替えていた。

やむを得ない。タケシは二つのモンスターボールを放り投げた。

「出てこいーウソツキーーグレッグルー！」

繰り出されたタケシのポケモン達も放たれた同時に戦闘体勢へと入っていた。それに続いてカノンもヒコザルとフシギダネをモンスターボールから出現させた。その後、タケシとカノンは同時に三人の方へと振り返る。

「ジロウー！お前はあいつを追ってくれ!!?」

「リーリエー！サトルー！ここは私達に任せて！二人はジロウさんと一緒にあいつを追って！」

二人の言葉に三人は了承した。ここで全員足留めをくらう訳にはいかない。それにこれは単なるテロ行為ではないことはリーリエ達も分かっている。きつと科学博物館内にある何かを狙っているのに違いない。

「あの男の後は僕達で追います。ジュンサーさんはできるだけ増援を呼んでください」

「わかったわー！みんな気をつけて!!!」

「はい!!!」

タケシとカノンとジュンサーを残してリーリエとサトル、そしてジロウはその青年の跡を追って科学博物館の中へと入って行った。



くくくくくくくくく

跡を追っていくリーリエ達が行き着いたのは科学博物館内に設備されているポケモン化石研究所だった。

「出てこいードサイドン！」

ジロウは自身の切り札でもあるドサイドンを繰り出すと、ドサイドンを先頭にして研究室の中へと入って行った。化石研究所ともあれば、化石ポケモンがいるはずと思っていたリーリエとサトルであったが、化石から蘇ったポケモン達は古代の環境をそのままに再現したポケモンエリアへと移されるため、化石ポケモン達が危険な目に遭わずに済んだ。

「まあ、彼奴らだけでお前ら全員を足止めとは考えてなかったし、ジムリーダーとその他二名ぐらいは俺の跡を追ってくると思ったださあ」

薄暗い影に隠れていた青年はリーリエ達が研究所に入ってくるのを待っていたかのように、不敵な笑みを浮かべながら立っていた。化石研究所に向かったのであれば、ジロウはその青年の狙いが何なのか理解した。

「そうか…御前達の狙いは化石復元マシンだな！」

「ビンゴ〜！化石ポケモンを蘇らせることが出来る素晴らしい化学発明品。これを俺たちがもつと有効に活用してやろってことだよ」

化石ポケモンを蘇らせることに使われる化石復活マシン。主に化石ポケモンの生態を研究するために使われるマシンであるため世間には出回っていない代物だ。それどころか、このマシンさえあれば化石ポケモンを何体でも蘇らせることができる。それが悪の手に渡ってしまうようなことがあれば、とても大変なことだ。

リーリエはシロンを前にして、残りのモンスターボールを手を取った。

「貴方がこの発明品を使って何をなさるかわかりませんが、見過ごすわけにはいきません！」

リーリエに続いてサトルも前に出る。

「うん！その化石復元マシンをお前なんかには渡さない！」

「そうか…なら止められるもんなら止めてみるよ！」

青年がまた合図を鳴らすと、海岸へと押し寄せてくる波のように何百体の小さなポケモン達が壁から天井からと一斉にドサイドンの体に纏わり付いてきた。一瞬にしてリーリエ達と青年の前に小型ポケモン達による大きな壁が造られた。

「このポケモン達はたしか…」

リーリエはそのポケモン達に見覚えがあった。確か、トキワの森で凶鑑広げたときに表示されたポケモンだ。

「トキワの森で僕たちが会ったペンドラの進化前、フシデとホイーガだ」

「ドサイドン！振り払うんだ」

体に纏わり付てきたフシデとホイーガをドサイドンは大きく体を振り回して振り払おうとする。だが、フシデとホイーガの毒攻撃でドサイドンは毒状態になってしまった。徐々に体力が奪われていくドサイドンはだんだんと力が抜け始めてきた。それを見かねたリーリエはシロンを前に出し、粉雪でドサイドンの体にへばりついているフシデ達を追い払おうとした。するとサトルのモンスターボールからクルミルが勢いよく飛び出してきた。

「どうしたんだ、クルミル？」

クルミルの性格から自分も加勢したいがために出てきたのかと思っただが、何かが違う。クルミルはその青年に対して身を震わせ野生独特の警戒心を露わにしていた。

「クルミル…まさか!!」

いつもと違うクルミルにサトルはある一つの結論が浮かび上がった。

フシデとホイーガ                    ペンドラーの進化前  
トキワの森                            誰かに捨てられた

次々と頭の中へと表示されるキーワードを頼りにサトルはその青年に聞いたです。

「もしかして、トキワの森のペンドラーはお前が離れたポケモンなのか！」

自分のクルミルのあの様子。きつとトキワの森出身のクルミルだからこそあのペンドラーと同じ匂いをあの青年から感じ取ったのかもしれない。そんなサトルの言葉に

「さあな、何々のことやら？」

青年は惚けた表情で軽く舌を出しながら見下した目で答えた。確証はない。トキワの森の件に関してはあの男の仕業なのか分からない。だけど、今は化石復活マシンをあいつに渡さない事が先決だ。

「皆さん！出てきて下さい！」

「ヒトカゲも頼む！」

手持ちのポケモンを繰り出したリーリエとサトル。だが、溢れんばかりにいるフシデやホイーガに行く手を遮られてしまい思うように動くことができないでいる。

「出てこいドラピオン！！？」

リーリエ達が戸惑っている隙に、ボールから飛び出したドラピオンは二本の頑丈な爪で化石復活マシンを引き剥がそうとした。

『まずいロト！化石復元マシンが!!』

「ムツクル！キモリ！ドラピオンを止めて下さい！」

唯一、空中から仕掛けることができるムツクルと垂直な壁でも登ることができるキモリはフシデ達の群れを躲しながら、ドラピオンの方へと向かって行く。化石復活マシンを引き剥がそうとするドラピオンに近づくことが出来た二体は空中へと飛び、リーリエの指示を待つ。

「させつかよ！ドラピオン！【ミサイルばり】!!?」

ムツクルとキモリの接近に気づいた青年はドラピオンに攻撃の指示を出す。指示に気づいたドラピオンは一度化石復活マシンを離すと、両腕の爪から針状の光線を二体向けて放った。惜しくも二体はドラピオンの攻撃を躲すことが出来ずに喰らってしまった。

「あのドラピオン、レベルが高すぎる！」

「戻って下さい！ムツクル！キモリ！」

一撃で戦闘不能となった二体をリーリエはモンスターボールへと戻した。二体を倒したドラピオンはもう一度、化石復活マシンを掴みに掛かろうとしていた。それを見たサトルはフレンドボールを取り出した。

「頼む！ピカチュウ!!?」

大きく投げ込まれたフレンドボールはフシデ達の群れを追い越し、その中からピカチュウが飛び出した。飛び出すと同時にピカチュウは電気袋から電気を放つとすぐに攻撃態勢へと切り替えた。

「ピカチュウ！【10万ボルト】!!?」

「ちつ、ドラピオン！【クロスポイズン】!!?」

体勢が不安定な空中でピカチュウは標的であるドラピオンに向けて、一気に電撃を放った。そのピカチュウの攻撃にドラピオンは具現化した毒の刃を叩き込んだ。衝突した二つの技は激しい爆発音と共に互いを相殺した。

「ひょえ、あのピカチュウなかなかパワーあるな」

自身の切り札でもあるドラピオンの技が打ち消されたことに青年はサトルのピカチュウの実力に驚いていた。

「【アイアンテール】!!?」

「【どくどく】!!?」

ピカチュウの攻撃がドラピオンに入る直後、近づいてきたピカチュウに向けてドラピオンは毒液をピカチュウに付着させた。

「ピカチュウ!!」

毒液を浴びたピカチュウは徐々に苦しみ出した。「【どくどく】」は単なる毒状態ではなく時間が経つにつれて減らされいく体力量が大きくなる猛毒状態になってしまうのだ。そんな猛毒状態の苦しみからピカチュウの体力は底尽きかけていた。しかし、相手のドラピオンは攻撃を止めようとしなない。

「やれやれドラピオン! 【クロスポイズン】!!?」

「弾き飛ばせ! 【10万ボルト】!!?」

再びぶつかり合う両者の攻撃。しかし、猛毒状態が響いてしまったか。さつきみみたいな攻撃力を出せなかったピカチュウの攻撃はドラピオンの攻撃に押し返されてしまった。電撃を打ち消した毒の刃はそのままピカチュウに決まってしまった。

「ピカチュウ!!」

「手こずりさせやがって、ドラピオン! 早く化石復活マシンを奪って引き上げるぞ!」

ピカチュウの戦闘不能を確信した青年はドラピオンを自分の元へと戻そうとした。

その時、

!!!!!!  
ピカッー!!!!!!  
!!!!!!

凄まじい電撃が一直線に天井へと伸びていく。神々しく光り輝く雷撃の中から全身を振るわせるほどの雄叫びを上げたピカチュウが赤く血走った目でドラピオンを睨みつけていた。

「あっー!」

「何だ! 何だ!」

何が起きたか分からない青年。再びドラピオンはピカチュウの方

へとかまえた。

「ヒトカゲ！【ひのこ】!!?」

僅かに数少なく密集しているフシデとホイーガのピンポイントを捉えたサトルはヒトカゲの炎タイプの攻撃でフシデ達を退ける事が出来た。通り道ができたそこをサトルは一目散に駆け出して行く。

「リーリエー・ジロウさん！こっちだ！」

フシデとホイーガの壁から脱出したサトルはリーリエ達をこっちに誘導させようと呼びかけた。サトルの声を聞いたリーリエとジロウはサトルのヒトカゲが追い払った場所へと急ぐ。だが、フシデとホイーガは素早い動きでサトルが穴を開けた通り道をすぐに塞いでしまった。

「リーリエー・ジロウさん！」

「サトル！貴方は早くピカチュウの元へ向かって下さい。わたくし達なら大丈夫です！」

リーリエの言葉を受け、サトルは我を失い暴走するピカチュウの元へと向かった。

「ピカチュウ！僕の声が聞こえる!!?」

走りながら必死にピカチュウを呼ぶサトル。だが、その声はピカチュウに届いていない。ピカチュウは四方八方に電撃を放ちながら、研究室全体に響き渡るような唸り声を上げ続けた。その内の電撃がドラピオンの方へと向かうとドラピオンは避けることなく大きな二本の爪でピカチュウの電撃を食い止めようとした。だが、さつきと比べものにならない威力にドラピオンは受け止めきれずにそのまま押し倒されてしまった。

「なあ!!?・ドラピオン！」

そのままピカチュウの電撃に押し返されてしまったドラピオンはその場に崩れ落ちた。ドラピオンが倒れたにも関わらず、我を忘れているピカチュウはそのまま四方八方に電撃を放っていた。

「落ち着くんだ！ピカチュウ!!!」

ピカチュウの元へと駆けつけたサトルは自分の両腕でピカチュウを抱き上げた。だが、サトルの必死の呼びかけはピカチュウの耳には

届いていない。自分の中で暴発的に起こる電撃を制御仕切れずに苦しみ悶えている。蹴きこうとしたピカチュウはサトルを巻き込んだまま電撃を放つ。

「サトルー」

急いでリーリエ達もサトルの元へと駆けつけたのだが、無数に湧き出てくるフシデとホイーガの群れに行く手を阻まれてしまう。

「シロン！【こなゆき】!!?」

「ヨーギラスー！【ストーンエッジ】!!?」

『ダメだロト！いくら攻撃してもキリがないロト!!!』

いくら倒しても数が多すぎるフシデとホイーガは群れをなす。さらに取り囲まれているため何処からともなく毒針などの攻撃が飛んでくる。その技を避けながら時には喰らいながらも戦っているシロンとヨーギラスの体力はもう限界に近づいてきてしまっている。

ピカチュウの電撃に包み込まれたサトル。だが、それでもサトルはピカチュウを呼び続けた。

「ピ…ピカチュウ！この力にのまれるな！耐えるんだ！ピカチュウ!!!」

容赦無く襲いかかる電撃に負けじとサトルは何度もピカチュウの名前を叫ぶ。こうなった場合いつもはボールに戻して解決してきたのだが、それじゃダメだ。

まだ、幼かった自分の無責任な事であれピカチュウをパートナーに選んだのは自分だ。パートナーに選ばれたそのピカチュウが頼れるのは主人である僕だけだ。だったら、僕がそんなことで逃げ出してはダメなんだ。

「正気に戻ってくれ!!!ピカチュウ!!!」

ありったけの声で叫んだサトル。すると、徐々に自分の体に流れる電流が少し弱くなっていくことに気がついた。ピカチュウの様子は、さっきまで血走っていた目が少しずつ穏やかさを取り戻しつつある。暴走が止んだのだ。

「あっ！ピカチュウが!!!」

『ピカチュウの正気が戻ったロト!』





青年の掛け声とともにドラピオンは攻撃体勢に入る。それと同時にサトルの手持ちポケモン、ヒトカゲとクルミルはサトルとピカチュウを護るようにしてドラピオンに向かい合う。ドラピオンはその二体を威嚇するように大きな声で吠え始めた。それに負けじとヒトカゲとクルミルも一緒になってドラピオンに向かって吠え始めた。すると…

「クルミル!?？」

突然、クルミルの体が発光し始めた。眩い光に包まれたクルミルは新たな姿と新たな力を授かるうとしていた。

「あれは…」

「進化が始まったんだ」

光が止み、目を凝らして見るとそこには

クルミルの新しい姿があった。すぐにロトムは図鑑を開いた。

『クルマユ はごもりポケモン

むし・くさタイプ

クルミルの進化系。葉っぱで体を包み込んで寒さを防いでいる。クルマユが住む森では木々がよく育つとも言われている』

「凄い、進化したんですね！」

「サトルさんの気持ちにクルミルが新たな力を得て応えてくれたみたいだ」

「素晴らしいロト！トレーナー!!のために進化するポケモン。ロトムは今！とても感動しているロト!!!」

「クルミル…いや、クルマユ！」  
ピカチュウを抱きかかえながらサトルはゆっくりと立ち上がった。

自分のことを信じてついて来てくれたピカチュウとヒトカゲ。そしてこんな自分の気持ちに伝えて進化したクルマユ

今度は僕が応えてあげる番だ!!

「よし、クルマユ!」【くさぶえ】だ!!?」

進化と同時に新しい技を覚えたクルマユは自身の葉に口を当て繭に包まれたような心地よい音色を奏でた。その音色を耳にしたフシデとホイーガに絶え間ない睡魔が襲いかかった。

「フシデ達が」

『【くさぶえ】の効果で眠り状態になったロト!』

リーリエとジロウの行く手を遮っていたフシデとホイーガは次々と眠り状態となってその場で眠りに落ちて行く。

「行くぞ!!?」ヒトカゲ! 【ひのこ】!!? クルマユ【はっぱカッター】!!?」

すぐにサトルは二体に攻撃の指示を下した。二体の攻撃はドラピオンに直撃した。二体による同時攻撃を食らったドラピオンは蹠踉めき始めるとそのまま背を向けた。

「よし…クルマユ…もう一度【くさぶえ】だ!!?」

油断してはならない。いくら進化したとはいえ敵のドラピオンのレベルは相当なものであることは分かっている。しかも毒タイプのポケモンでは草タイプのクルマユとは相性が悪い。このままゴリ押しして攻撃するよりも眠らせてドラピオンを行動不能にした方が勝算はある。クルマユはサトルの指示通りに再び草笛に入る。

よし！これで…

!!!!!!!  
ド  
ツ  
ツ  
ツ  
!!!!!!!

一瞬だった。ふらつきながらもドラピオンは長い尾を使って草笛を吹く直前にクルマユと隣にいたヒトカゲを同時に薙ぎはらった。「勝った気でいたようだが残念だったな。ドラピオン！「ミサイルばり」!!?」

追い討ちをかけるかのようにドラピオンの攻撃が二体にヒットしてしまった。技を喰らった二体はそのまま後ろにいるサトルの方へ

と吹き飛ばされた。万事休す、二体の体力は底を尽き掛けていた。

「〔クロスポイズン〕!!?」

「ヒトカゲークルマユ!」

畳み掛けるように再度ドラピオンは攻撃を仕掛けた。自分のポケモン達はモンスターボールへと戻してやればいいものだが、ドラピオンの攻撃はヒトカゲとクルマユどころか後ろに立っているサトルをも巻き込むほどの大きな攻撃エネルギーを放っていた。迫り来るドラピオンの攻撃。応戦しようと駆けつけるリーリエ達であるがシロンもジロウのドサイドンもヨーギラスも走っていく体力はもう残っていないかった：

ダメだ。間に合わない。

ドゴツツツツンンンンン  
!!!!!!!

ドラピオンの攻撃に飲み込まれていくサトル。それをただ見ていることしか出来なかったリーリエ達。衝撃音が止むと同時に研究室内では、勝利を確信して高笑いしている青年の声と必死にサトルの名前を叫ぶリーリエの声だけが響いていた。

サトルの安否を確認しようとリーリエは頭の中で思い浮かんでく

る最悪な状況を振り払いながらもサトルの方へと目をやった。煙が晴れていく。すると、一つの人影が見えてきた。

ある一体のポケモンの影と一緒に…

「なっ!?？」

『良かったロト!!!』

「リーリエさん!!!サトル君は無事ですよ!」

青年の驚いた表情。そして、ロトムとジロウの歓喜の声が響いた。  
「よ…よかつ…た」

サトルの姿をようやく確認し安堵したリーリエはその場で崩れ落ちる。ドラピオンの攻撃がサトルに直撃されたと思ったが、サトル含めてサトルのポケモン達も無事だった。

サトルも自分自身の身に何が起きたのか分からずにいた。ゆつくりと自分の前に目をやると、一体の大型のポケモンがサトルの前に立

ちふさがっていた。このポケモンの立ち位置からサトルは自分のこのポケモンに護つてくれたのだと理解した。

鋼鉄の四本の腕を持つそのポケモンはドラピオンの技のダメージを諸共しなかった。「クロスポイズン」を防いだにもかかわらず、そのポケモンはサトルの前から離れようとしなかった。そのポケモンは通常とは違って銀色に輝くボディをした色違い。そのポケモンはサトルを護りながら再び青年のドラピオンに向けて攻撃態勢を取った。

『メタグロス てつあしポケモン

はがね・エスパークタイプ

四本の足を折り畳んで空中に浮かぶことが出来る。四つの脳はスーパーコンピュータよりも優れている』

サトルを護ったポケモン名はメタグロス。それと同時に研究室の入り口から一人、銀髪の青年が入ってきた。

「珍しい石を見つけたから調べてもらおうと思って来たんだけど……どうやら騒がしいことが起きているようだね」

銀髪の青年は中へと入っていく。顔が見えてくるとここにいる全員は目を丸くした。その青年とは初めて会うのだがその青年を知っている。銀髪の青年は自身の手持ちであるメタグロスの元へと近づくと、サトルの肩に手を置いた。

「大丈夫だ。後は僕に任せてくれ」

メタグロスと合図を取る銀髪の青年は胸元に飾したキーストンを握り締めながら、静かな闘志を燃やしていた。

## 第十六話 チャンピオンの実力

突然襲撃された科学博物館。その場に向かったリーリエ達の目の前に現れた謎の集団。二手に別れてリーリエとサトルとジロウは主犯である青年を追っていく。奴の目的は化石復活マシンの強奪。それを防ぐべくリーリエ達はその青年に戦いを挑む。

だが、行く手をフシデ達に阻まれてしまい、なんとか切り抜けることが出来たサトルはただ一人青年と戦う。途中、クルマユの進化もあり、サトルの有利に見えたのだがドラピオンの猛攻によりサトルのポケモン達は皆、戦闘不能寸前にまでに追いやられてしまった。

絶対絶命だったその時、てつあしポケモンメタグロスを連れたトレーナーがリーリエ達の前に現れたのであった。

「サトル！大丈夫でしたか!?？」

「うん！大丈夫だよ！」

サトルの元へと駆け寄るリーリエとジロウにサトルは大きく返事を返した。サトルの手を取るとリーリエ達はそのメタグロスのトレーナーに目をやった。



「本で読んだことがあります。まさか、お会いすることができると  
て…」

「コーン!!??」

リーリエだけではない。サトルもジロウもそして、敵である青年も  
目の前の人物に唾然としていた。冷や汗を掻きながらも、青年は口を  
開いた。

「ダイゴだと…!!?? ホウエンのチャンピオンがなぜここに…」

なんと、サトルをドラピオンの攻撃から護ってくれたメタグロスの  
トレーナーはホウエン地方の最強トレーナー。

チャンピオントレーナーダイゴであったのだ。

「君が何者なのかは聞かないが、これ以上続けるのなら僕が相手にな  
ろう！」

「メーター!!!」

ダイゴの言葉に反応してメタグロスは四つの鉄足から貯めたパ  
ワーを一気にエネルギー波として周りに放った。

そのエネルギー波がリーリエ達の肌走る。一瞬、微力な痺れが身

体中を駆け巡ったような感じがしたりリーリエ達は、メタグロスから放つそのエネルギーからそのレベルの高さを肌で感じた。

そのエネルギーはその青年にも伝わっているはずだが、身を持って知ったのにも関わらず、そいつは逃げ出すどころか、まるで幼児のような無邪気に狂気に満ちた笑顔を浮かべていた。

「チャンピオンが直々に相手をしてくださるとは…ポケモンバトル好きの俺にとっては有難いことじゃねえか！」

そう言い放った青年は再度自分のモンスターボールからドラピオン以外のポケモンを繰り出した。

「タツタタタタ!!？」

ボールから飛び出したそのポケモンは口に縫いつけられているジッパ―を外しては、自分の主人と同じく不気味な表情で笑い始めた。

「あの…ポケモンは!?？」

『任せるロト!』

『ジュペッタ めいぐるみポケモン

ゴーストタイプ

強い怨念がぬいぐるみに宿りポケモンになった姿。口を開けると呪いのエネルギーが逃げてしまう』

ドラピオンとジュペッタ。その二体でダイゴのメタグロスに受けて立とうとする。すぐに青年からの攻撃の指示が入った。

「ドラピオン！【ミサイルばり】！！？」

「ジュペッタ！【おにび】！！？」

「ドローアアア！！？」

「ペツタアアア！！？」

ドラピオンとジュペッタによる攻撃がメタグロスに向けて放たれる。だが、迫り来る無数のエネルギー波と火の玉の攻撃に対し、ダイゴは動じる様子がなかった。

「メタグロス！【サイコキネシス】！！？」

「メーター！！？」

サイコパワーでメタグロスは、不規則に襲いかかる相手の攻撃エネルギーを一瞬にして空中で停止させたのだ。

「す…すごいです!!!」

『全弾止めたロト!!!』

【サイコキネシス】のパワーにリーリエ達は驚きを隠せないでいた。すると、メタグロスはそのままサイコエネルギーを相手のエネルギー波にコーティングさせると、全弾相手に目掛けて跳ね返したのだ。

【クロスポイズン】！！？」

【シャドーパンチ】！！？」

跳ね返された自身の技をドラピオンとジュペッタは打ち消そうとした。だが、メタグロスの【サイコキネシス】の威力も重ね合わされていることにより、通常よりも威力が倍になっていったのか。凄まじい衝撃波が周りに錯乱しそのままドラピオンとジュペッタは後の方へと押し返されてしまった。

力の差が歴然だ。誰から見ても勝敗の行く末は何方になるのかは言うまでもない。

だが、ダイゴはチャンピオンとして一度取り行われたバトルに気を緩めてしまうような事はない。その目は相手を全力で倒すという鋭い眼光を尖らせていた。

「悪いが舐めてかかったりはしない！全力で行かせてもらおうよ！」

空かさずダイゴは自分の胸元に飾した宝石を手にする。その宝石はダイゴの意志に反応したかのように輝きを放ち始めた。

すると同時に、メタグロスの足に装着されていた宝石も光輝きだした。

「あ…あれは！」

目の前で起きている光景に三人は釘付になっている。ただ一人、リーリエはそのパワーエネルギーを何処か懐かしくも感じていた。

エーテル財団との戦いで見せてくれたサトシとゲッコウガの力と似ていると…

「虹の煌めきよ、絆となれ」

ダイゴの持つ宝石とメタグロスの持つ宝石から放たれた光は一筋の線となり、お互いを結び合わせる。

…  
まるでトレーナーとポケモン。互いの絆が一つになるかのように



では分かっている。だが、迫ってくるメタグロスのパワーに圧倒されてしまい、不思議と体が動かなくなってしまったのだ。

気がついた頃には二体はメタグロスの攻撃に吹き飛ばされてしまった。そのまま二体は戦闘不能となる。

「戻れ！」

ドラピオンとジュペッタをボールに戻した青年はそのまま顔を伏せてしまった。

「勝負はあったみたいだね」

メタグロスを前に一歩一歩と青年の元へとダイゴは歩み寄って行く。だが、顔を上げたその青年の顔は誇らしげた表情をしていた。

「バーカー！チャンピオン相手に全力で戦って勝つてると思う訳ねえだろうがよ!!!」

すると、青年は一つのUSBメモリーを取り出すと、遠くの方にいるリーリエ達にも見える高さまで上げた。

「化石復元マシンの本体の入手には至らなかったが、このマシンの設計図のコピーは取れたし、まあ、任務成功だな！」

迂闊だった。青年は最初っからダイゴと真正面に戦う気などなかったのだ。ドラピオンとジュペッタはデータをコピーするまでのただの囷だったのだ。

目的を果たした青年は別のモンスターボールを取ると少し後ろへと下がっていく。

「つうわけで、ここらでとんずらかせて貰うぜ！フリージオー！「くろいきり」!!?」

ボールから解放されたフリージオは黒い冷気を青年を取り囲みながら膨張させていく。膨張された黒い霧はやがて辺りに散りばつていくと、そこにいるはずの青年の影は煙のように消えてしまった。

「逃げられたか…」

戦いを終えたメタグロスはメガシンカエネルギーを解き、通常の状態へと戻った。

リーリエ達はダイゴと共に博物館の外にいるカノンとタケシと合

流するべく研究所を後にした。

外へ出るとジュンサーの増援も駆けつけており、青年の仲間だったゴロツキのトレーナー達は一人残らず確保されていた。科学博物館から出てくるリーリエ達に気づいたカノンとタケシは三人の元へと駆け寄った。

「リーリエ！サトル！」

「カノン！」

「二人とも大丈夫だった？」

「うん。平気だよ！カノンも無事でよかったよ」

「ジロウ。あいつは」

「逃げられたよ。化石復元マシンの設計データを持ってね…」

「そうか、だけどマシンの本体は取られずに済んだんだ。頑張ったな。ジロウ！」

正直、ジムリーダーとしてままと設計データを目の前で盗まれてしまったことに対してジロウは自分の無力さに情けなかった。

だが、そんなジロウにタケシは被害を最小限に押さえることが出来たことはジムリーダーとして立派だったと、タケシはジロウの両肩に優しく手を置いた。

「ああ、だけど兄さん！その…化石復元マシンを守ってくれたのは…」

ジロウがそう言いかけると、科学博物館からもう一人の影が見えたことに気がついた。その人物の影を見たタケシに緊張が走った。

「久しぶりだね。タケシくん！」

「貴方はダイゴさん!!!ど…どうもご無沙汰しております」

昔、一度だけハウエン地方の石の洞窟で互いに顔合わせしているタケシとダイゴは再開を分かち合い、お互いに握手を交わした。

「えええ!!ダイゴさん!!?あのハウエン地方のチャンピオンの!!?」

カノンに至っては目の前にいる別の地方のチャンピオントレーナーを目の前にして歓喜している。

「しかし、ダイゴさん!なぜこちらに…」

「バトルピラミッドのジンダイさんに会いにね。ちょうど珍しい石も見つかったから、それを診てもらおうと思ってニビシテイを訪れたんだが…とんだ災難にあつてしまったようだ」

博物館の方へと目を散らつかせながら話すダイゴにリーリエとサトルはダイゴの元へと駆け寄った。

「ダイゴさん」

リーリエの言葉にダイゴはリーリエ達の方へと目をやった。

「初めまして、わたくしはリーリエと申します。先程は危ない所を助けて頂いてありがとうございます」

「僕はサトルです。あの…本当にありがとうございます」

リーリエに続いてサトルも助けてもらったお礼を述べ、お辞儀を交わした。その二人につられてカノンも会釈する。

「みんなに怪我はなくてよかったよ。だけど、あまりこういった無茶はしないようにね」

「…はい…」

実力をつけたとはいえ、考えてみれば犯罪者に立ち向かうのはあまりにも無謀すぎたことだ。

もし、ダイゴが助けに来なかったら今頃どうなっていたかと思うとリーリエ達はダイゴに注意された事を、染み染みと自分達の行いに反省した。

「それにしても、あいつらは何者だったんだ。ロケット団…でもなさそうだったし…」

タケシの言葉を聞いたこの場にいる全員が一斉に考察し始めた。

あの青年は最後まで自分達の正体を明かすことはなかった。仮に



ロケット団としてもカントー地方を拠点としている犯罪組織をカントーの人達で知らぬ者はいないはずだ。ロケット団であることを隠す必要性も全くもってない。

それに青年が連れていたゴロツキ達にもロケット団の象徴である【R】のマークも見当たらなかった。

後に、其奴らによってカントー地方全体がある大事件に巻き込まれてしまうとは、その時のリーリエ達には知る由もなかった。

『こちらグロット！化石復活マシンの設計データはちゃんと頂いてきたぜー！』

『データって…あんた奪ってきたのは本体じゃないの!?!?』

『仕方ねえだろが！あいつらだけならまだしも…チャンピオンに來られちゃ勝ち目なんてねえーだろー！』

『うわあ！逃げた！逃げた！おじげづいて逃げたんだ〜！』

『…黙れ、猿が…!!』

『はあああああ!!!』

『いいではありませんか。化石復活マシンの入手には成功したのだから…グロットの判断は正しかったと私は思いますよ』

『流石は姉えーさん！どっかの野生人とは違うぜ!!!』

『誰が！野生人よ!!!』

『お前ら通信機で大声だすなって。耳痛えだろうが！それからグロットは早く戻ってこい。ボスさんも首をトロピウスのように長くして待ってるぜ』

『あいさー!!!』

~~~~~

その夜、回復し終えたポケモン達をジョーイから受け取ったリーリ工達は各自のポケモン達のケアへと回った。カノンもサトルも無事に元気になったポケモン達を見ては安心している。サトルに関して

はボールから飛び出したクルマユにいきなり体当たりを諸に食らった所だった。進化して姿が変わったクルマユであったが、クルミルの時からのそのやんちゃな性格は変わっていないようであった。

「シロン。気持ちいいですか?」

「コーン!!?」

同じく自分のポケモン達の元気な姿を確認したリーリエはシロンのブラッシングを始めていた。

「ちよつと貸してみてくれないか?」

声が出た方へと向くとそこにはタケシが立っていた。タケシにブラシを渡すと、リーリエに代わってシロンの毛並みを整え始めた。

気品で主人であるリーリエにしか触られることを許されなかったシロンであったが、タケシのブラッシングが気持ちいいのか、抵抗する素振りを見せなかった。そのシロンの姿にリーリエも驚いている。

「流石ですね。タケシさん!」

「昔、俺もロコンを手持ちに加えていたことがあったんだ。その時、こうして良くブラッシングをしたもんさあ」

タケシがシロン達のブラッシングをしている時、クルマユの攻撃じやれあいから解放されたサトルはフラつきながらソファアへと腰を下ろしていた。

「サトルさん」

「ジロウさん」

疲れ果てたサトルの元にジロウがやって来た。ジロウはポケットからケースを取り出すと、サトルの目の前にそのケースを開いた。

「えっ…これは…」

その中からはニビジムバッジのグレーバッジが光輝いていた。

「サトルさんに差し上げます」

突然のジロウの言葉にサトルは目を丸くする。

「いや…でも…ちゃんとしたジムバトルを受けさせてもらってもないのに……」

公式戦のルール以外でバッジを受け取ることに疑念を感じるサトルにジロウは話を進めた。

「復元マシンを守ってくれたお礼なんかではありません。博物館での戦いをみればもう再戦しなくてもサトルさんとポケモン達の実力は確かめることができました。それにあのジムでチャレンジャーのレベル規定外のドサイドンを繰り出してしまったわけでもある。ジムのルール上で僕がサトルさんに負けたのは事実です」

再度、ジロウはサトルにグレーバッジを差し出した。

「受け取って下さい。ジムリーダーとしてサトルさんはこのジムバッジを授かるのに相応しいトレーナーです！」

その力強い言葉を聴いたサトルは静かに首を立てに振った。そのままサトルはバッジをすぐには受け取らず、バッジを持っていない反対の手でジロウに握手を交わした。

「ありがとう。ジロウさん！このバッジに誓って胸を張っていけるように頑張るよ！」

そう言いサトルはグレーバッジを受け取った。そのあと、感謝とこれからのトレーナーとしての決意表明と共にもう一度ジロウと握手を交わした。

これによりリーリエ、カノン、そしてサトルは一個目のジムバッジを手に入れた。三人は自分たちのグレーバッジをバッジケースから取り出すと、お互いに見せ合うとその喜びを共有し合った。

「それじゃあ、僕はここで失礼させてもらうよ」

メタグロスの回復を終えたダイゴはこのままポケモンセンターに泊まることなく、ニビシティを跡にしようとしていた。ダイゴの声に反応したリーリエ達は急いでダイゴの元へと向かうともう一度、ダイゴにお礼を言った。

「ダイゴさん！本当にありがとうございます。」

「そんな…。礼ならもういいよ」

「リーリエとサトルから聞きました！あーあ、私も見たかったなあ。メガメタグロス!!」

「僕も初めて見たけど、凄い力ですねよね！」

「ええ！メガシンカはトレーナーとポケモンとの絆の力で進化する進化を超えた進化であるとわたくしもスクールで習いました。能力値

だけでなくポケモンによつてはタイプや特性も変わるポケモンがいるとも聞きます。わたくしも生でメガシンカを見るのは…初めてです！」

「ん？リーリエなんか言葉を濁さなかった？」

少し言葉を詰まらせたリーリエに不思議に思ったカノンはリーリエに語りかけた。すると、リーリエはエーテル財団との戦いを思い出しながら話し始めた。

「実は…メガシンカではないのですが、それと同じような現象を見た事があるのです」

「似たような…現象？」

続けて不思議に思ったサトルにリーリエは少し頷きながら話を進めた。

「はい。本来メガシンカにはキーストンと特定のポケモンが持つメガストーンが必要となるのですが、それを必要としなくても絆の力でパワーアップする現象です」

その話を聴いたダイゴはある人物の像を思い浮かべた。丁度、リーリエ達と同一年。各地を旅している彼ならと、ダイゴはその人物の名をリーリエに解いた。

「もしかして…サトシ君の事かい!?？」

ダイゴの口から出たその人物の名にリーリエは瞬時に反応した。

「ダイゴさん！サトシの事を…存知なのですか！」

「うん。ハウエンとカロスと二度ね」

「もしかして…カロスリーグの中継で観たあれ!?？」

カノンとサトルはテレビで観たカロスリーグの事を思い出した。

その場面があったのは一回戦でのVSチルタリス戦でのことだ。チルタリスの技【りゅうせいぐん】を躲したゲッコウガの身体が水泡によつて包み込まれたその時、一瞬にしてゲッコウガの姿が変化したのだ。その衝撃的な瞬間を今でも二人は覚えている。その時も二人はメガシンカとばかり思っていたが、やはりメガシンカではないのか…

三人にダイゴは今の時点でわかっている所までリーリエ達に説明

を始めた。

「僕らもサトシ君とゲッコウガのあの力は一体何なのかはまだ分かってはいないが、間違いなくメガシンカと同等の力であることは確かだ。メガシンカエネルギーも専門に調べているカロス地方のプラターヌ博士と一緒に僕らはそれを《キズナ現象》と呼んでいるんだ」  
「キズナ：現象」

新たに追加されたワードに三人は狐に包まれたような感じが走った。それと同時にスクールでも教わっていないポケモンの新たな力を知ることが出来たことに高揚した。

「さて、そろそろ僕は行くよ。君達もこれからのジム戦頑張ってね！」  
リーリエ達の今後の旅のメールを送ると、ふと目線をリーリエ達のポケモンの方へと下ろした。その内のポケモン達に目を向けたダイゴの顔の表情筋が少し上がっているように見えた。

「あの…何か？」

ダイゴの表情に不思議に思ったリーリエはダイゴに問いかけた。

「ふふっ！また何処かで会おう。」

その一言だけを交わした後、ダイゴはポケモンセンターを跡にした。ダイゴはリーリエ達のポケモンを見て何を感じていたのか。その理由は分からなかったが、また旅の何処かで会えることを願い、去るダイゴに手を振った。

「あああああ!!!」

「うわあーどうしたの…カノン？」

突然のカノンの叫びにリーリエ達はカノンの方へと目をやる。カノンは少し身体を小刻みに震わせながら、リーリエ達の方へと目をやった。カノンの表情は何かの後悔したような感じだった。

「サイン…貰つとけばよかった…」

「あつ!!?」

カノンのその一言にリーリエとサトルも軽く後悔したのであった。

~~~~~

「次にここから近いジムはハナダシティにあるハナダジムですね。ポケモンリーグに出るにはあと七個のジムバッジが必要です。頑張ってください！」

「ありがとうございます」

「それじゃあ…」

翌日、次の目的地をハナダシティと決めたりーリエ達はジロウに別れを告げ、出発しようとしていた。その矢先…

「おーい！待ってくれ!!!」

一人の人物が慌ててりーリエ達を呼び止めようとしていた。

「「タケシさん!!!」」

急いでこつちに向かってくるタケシとジョーイの姿を見たりーリエ達は足を止めた。タケシは大きなリュックサックを背負っていることに気づいたりーリエはタケシに問いかけた。

「タケシさんも何方か向かわれるのですか？」

「実はクチバシティでこれが開催されるらしいんだ」

タケシは質問に答えるべく、一枚のチラシをりーリエ達に見せた。

そこには「アローラ祭」という文字が大きく書かれていた。

「アローラって、たしかりーリエの出身だよね？」

「ええ…」

アローラの文字に反応したカノンにりーリエは戸惑いながらも返事を返した。暫くチラシに書かれている「アローラ祭」という文字を眺めていると、りーリエはトキワシティのポケモンセンターでマオが言っていたことを思い出した。

?????????????  
!?????

「あー！そっちに行ったとき、私にもりーリエの友達を紹介してよね

「はい！……って……紹介ですか？」

「時期に分かるよ！それじゃあ」

「も????????」

マオの言葉を理解したリーリエは一人そつと頷いた。

「この祭りにはアローラのポケモン達とふれあうことも出来るらしいんだ。俺はまだアローラのポケモンと接したことがないから、これはポケモンドクターを目指すものとしてアローラのポケモン達の生態も見ておきたかったんだ。」

それで、俺はクチバシテイへと向かうんだが、なんにせ開催は一ヶ月後。それまでどうするか考えているのだが……」

そう言いかけたタケシにリーリエとカノンとサトルは同時に声に上げた。

「それだったら、一緒に行こうよ！タケシさん」

「うん！一緒に旅した方が楽しいもんね」

「はい！もちろんです！」

「ああ、クチバシテイまでよろしく！」

「此方こそ宜しくお願いします！」

リーリエ達との承諾を得たタケシはその後にジョーイさんの方へと振り向いた。

「すみませんジョーイさん！少しの間だけお暇を取らせてもらって……」

「そんなこと気にしないで下さい。タケシ君には本当に助かって貰ってるし、立派なポケモンドクターになるためですもの、私はいつでもタケシ君の味方よ」

「ジョーイさん!!!」

タケシは周りの人達の気には止めず、そつとジョーイの手を取った。

「暫しのお別れですが、自分とジョーイさんの愛の糸はイトマルの糸のように固く結ばれておりま……」

ドシュツツツツ  
!!!!!!



「し・び・れ・び・れ」

「ケケケケケ!!!」

.....。

「みなさん、に…兄さんのことよろしくお願いします」

「「あ…はい…」」

タケシを引きずながら歩いているグレッグルを先頭にリーリエ達も旅立つことにした。

「それではわたくし達はこれで！」

「さようなら」

ジロウと別れたリーリエ達は新たにタケシをメンバーに加えて、次の目的地であるハナダシティへと向かうのであった。

## 第十七話 細くも櫨の木

新たにタケシをメンバーに加え、次の街であるハナダシティへと向かっているリーリエ達は見晴らしのいい草原でランチを楽しんでいた。

「タケシの作ってくれた料理どれもとても美味しいです!」

「うん!これは絶品だよ!」

「サンキュー!こんなにも喜んで食べて貰えたら、これからも作り甲斐があるな」

タケシ特性のシチューを頬張りながら、リーリエ達は味の感想を述べていた。ポケモン達もそれぞれの好みに合わせたタケシ特性のオリジナルブレンドを含んだポケモンフーズを食べている。それぞれのランチを楽しんでいる中…

「……………」

カノンはご機嫌ななめのような顔だ。

「ど…どうしたのかノン?」

「どこか調子でも悪いのですか?」

「何か嫌いなものでもあったか?」

様子がおかしいと感じた三人はそれぞれカノンに声をかける。すると…

「…たい…」

「え?」

それからカノンはいきなり席から立ち上がると、大きな声で抱えている不満を爆発させた。

「私も新しい仲間増やしたああああいいいいいいいいいい  
!!!!!!!」

その声に木影で休んでいたポツポツ達の群れが一斉に飛び出した。突然のことにみんなも腰を抜かしてしまった。

「急にどうしたんだよ!」

突然のことにびっくりしたサトルにカノンは自分の顔を寄せては、ジト目でサトルを睨みつけた。

「どうこうもないよ! サトルもリーリエも着々と仲間を増やしているのに、私だけ野生のポケモンゲットしてないんだよ! これってどう思うよ!!」

「どう思うって言われましても…」

カノンの危機迫る表情にサトルは固まってしまった。まさにアーボに睨まれたニヨロモ状態。「へびにらみ」ってこんな感じなのかなあ…

『たしかにこの旅の中でまだ新しいポケモンをゲットしていないのはカノンだけロト』

リーリエはムツクルとキモリ。サトルはトキワの森でクルミルをゲットしている。二人は初めてゲットした喜びを知っているが、カノンはその現場を見ていただけで自分がゲットした喜びをまだ感じていないのであった。そんなカノンの様子を見たタケシはある提案を提示した。

「なら、まだ日が暮れるまで時間はある。ここらでフィールドワークしてみるのもいいかもな」

タケシのその案にリーリエとサトルも賛成した。

「僕とリーリエのゲットもカノンの協力のおかげでもあるからね。今度は僕たちがカノンのゲットをサポートする番だよ！」

「そうですね！そうしましょう。ねえ！カノン」

三人の言葉にカノンの顔から笑顔が戻った。

「ありがとう！みんな♪よーし捕まえに行くぞ!!!」

一気に元気を取り戻したカノンはすぐに野生ポケモンエリアへと向かおうとする。だが、今はまだ食事の時間。食事が済んでから探しに行けばいいと言うサトルにカノンはごめんと、照れ笑いしながら自分の席へと戻って行った。

自分たちの食事を食べながらポケモン達の美味しそうに食べる様子を見ていた。すると、何かに気づいたサトルはリーリエに声をかけた。

「リーリエ、ムツクルとキモリは？」

「えっ!?!?」

サトルの言葉に気づいたリーリエはシロン達の方へと向くと、誰も口につけていないポケモンフーズがのった皿が二つあったことに気がついた。

「シロン。ムツクルとキモリは何処にいるか知ってる?」

「コ……ン?」

シロンも首を傾げては困った表情を浮かべる。

「ムツクル！キモリ！何処にいるのですか!?!?」

リーリエはムツクルとキモリの名を呼ぶが、二体からの返事はなかった。

「ムツクル！キモリ！」

「クルツ!!?」

鳴き声に気づいたリーリエは見上げて見るとムツクルの姿があった。上空から舞い降りてきたムツクルはリーリエの肩へと停まった。「どうしたんですか?ムツクル?」

リーリエの質問にムツクルは少しリーリエの元を離れると、「はがねのつばさ」を発動させ、空を切るかのように架空し始めた。その様子からリーリエはムツクルのやりたい事が分かった。

「もしかして…バトルの練習がしたいのですか？」

「クル!!？」

ムツクルは大きく頷いた。

「おお！気合い入ってるな。ムツクル！」

「やっぱ、この前のジム戦を気にしてるのかな。ムツクルはジロウさんのポケモンを一体も倒せなかったし…」

「ク…クル〜」

サトルの一言にムツクルはがっくりと肩の力を落としてしまった。

「ちよつと、サトル！」

「あつ!!?…ごめん、ムツクル！」

急いでサトルはムツクルに対し自分の失言を謝罪した。

ニビジム戦はムツクルにとっては相性からにしても厳しい戦いであつた。それでもリーリエはムツクルが頑張ってくれたことにはとても感謝しているし、数にキリがあつたからという理由で苦手な相手と戦わせた事に対してムツクルには申し訳なかつたとも思っている。

だが、ムツクルも同じように自分はリーリエのために戦っていたのか、気にしていたようであつた。

「それならムツクル！わたくし達はバトルの練習を致しましょう。次のジム戦に備えて力をつけましょう！」

「クルツ!!！」

『だったら、ポケモンゲットしに行く人とポケモンバトルの練習をする人と二手に別れるロト』

「それなら、カノンの方は僕がつくよ」

「じゃあ、俺がリーリエの練習に付き合うとするか」

「はい、宜しくお願いします！」

それぞれのペアーは決まったが、リーリエはまだ自分の元へと戻ってこないキモリの事が気になり辺りを見渡し始める。

「だけど、ムツクルは見つかったのですが、キモリは一体何処へ…」

「ん〜、この辺りは木々はキモリにとってはいいのかもしれない」

「もしかしたら、野生のポケモンを見つかる途中に見かけるかもしれないね」

「まあ、あのキモリなら心配いらないと思うし♪任せてよりーリエ！」  
「そ…そうですか。それでしたら、宜しくお願い致します」

「よっし、行くぞー！ポケモンゲットだぜ〜♪」

「あつ、待ってよー！」

こうして、カノンにはサトル。リーリエにはタケシとそれぞれペ  
アーを組んで、ポケモンの捕獲とポケモンの育成へと別れたのであっ  
た。

~~~~~

「ヒコココ!!?」

「ピツカア!!?」

カノンとサトルは林の中へと探検していると、外れに大きな湖を発  
見した。底が見えるぐらい澄んでいるその水は野生のポケモン達に  
は最適な水飲場であろう。

「ヒコココ！」

「どうしたの?ヒコザル」

ヒコザルが指差す湖の方へと見ると、一体のポケモンがカノンとサ  
トルの前に現れた。

『マリル みずねずみポケモン』

水・フェアリータイプ

ルリリの進化系。伸び縮みする尻尾を浮き袋にして水中へと潜る。流れの速い川でも平気に泳ぐことができる』

図鑑の説明通りマリルは自分の尻尾を両手で掴むと、その尻尾の浮力で水面に浮きながら気持ちよさそうに泳いでいた。

「マリルか！水タイプのポケモンを加えるのもいいんじゃないかな」

「うん！よしあの子に決めた！」

カノンはモンスターボールからマリルと相性のいいフシギダネを繰り出した。

「フシギダネ！【はっぱカッター】!!?」

「ダネツ!!?」

いきなり飛んできたフシギダネの攻撃に即座に反応できなかったマリルに【はっぱカッター】を決めることができた。

「行つけー!!? 【たいあたり】!!?」

「ダネツダア!!?」

【はっぱカッター】を受けて、ふらつくマリルにフシギダネの体当たりも決まった。吹き飛ばされたマリルはそのまま目を回してしまった。

「カノンいまだよ！」

「うん！マリルゲットよ！」

カノンは勢いよく空のモンスターボールをマリルに向かって投げ入れた。

すると…

ドオオン  
!!!!!!

「えっ!!!」

マリルに投げたモンスターボールは何者かによって弾き返されてしまった。

「あれは??？」

マリルの前に現れた一体のポケモンにサトルは空かさずポケモン図鑑を開いた。

『ブイゼル うみイタチポケモン

水タイプ

首の浮き袋を膨らませて、水面から顔を出しながら辺りを警戒している。尻尾をスクリューのように回して泳ぐ』

ブイゼルはそのまま「ソニックブーム」でフシギダネに攻撃を仕掛けた。ブイゼルの攻撃を受けたフシギダネはカノンの方へと吹き飛ばされてしまった。

「フシギダネ!!!」

ブイゼルに押し倒されたフシギダネをカノンは抱きかかえた。

ブイゼルはマリルの方へと向くと、マリルに無事の確認を取った。その後、ブイゼルはマリルを自分の後ろへと下げて、サトル達に威嚇し始めた。



「どうやら、あの二体仲間みたいだね」

ブイゼルは頬を大きく膨らませるとそのままサトル達の手前に【みずてっぼう】を放った。水しぶきにサトル達はブイゼルの攻撃に圧倒されてしまった。

「くっ!!?頼む、クルマユ!!!」

「マユ!!?」

「クルマユ! 「くさぶえ」だ!!?」

クルマユの草笛の音色がブイゼル達の方へと奏でる。それと同時にブイゼルとマリルは水中へと潜っていった。

水中へと潜ったとしても完全に外からの音が聞こえなくなる訳ではないが、音だけでも小さくすることが出来る。これにより【くさぶえ】の効力を薄くさせる事が出来たため、二体は眠り状態を回避することができたのだ。

「潜って躲された!」

「そんなのあり!!!」

そしてブイゼルは尻尾の尾をスクリューのように回し始めると、そのまま水中へと飛び出した。水を自分の身体に纏わせながらクルマユに体当たりを仕掛けた。

「クルマユ!!!」

ブイゼルの【アクアジェット】に吹き飛ばされたクルマユをサトルは自分の胸で受け止めた。マリルも水面から飛び出すと、ブイゼルと同時に【みずてっぼう】を放った。

二体の攻撃がサトル達に当たると思ったその時…

バシユユユユユ  
!!!!!!

【タネマシガン】による攻撃が二体の攻撃をかき消したのだ。【タネマシガン】が放たれた茂みからキモリがサトル達の前へと飛び出した。

「キモリ！」

「助かったよ。ありがとう！」

「キヤモ!!？」

二人の声にキモリは頷いて返事を返す。すぐにキモリはブイゼル達に目をやると、そのまま前屈みになって戦闘態勢に入った。

ブイゼルも突然飛び出して来たキモリを睨みつけた。今にも二体は次の攻撃に入ろうとしたのだが…

「リル！」

「ブイ？」

「リルリル!!!」

「ブ…ブイ」

そんなブイゼルを見かねたマリルはブイゼルを止めようと説得に入った。マリルの言葉にブイゼルも戸惑いながらも次の攻撃を繰り返すのを辞めた。

「なんか…様子が」

「うん、なんかソワソワしてるよね」

マリルの止め方にどこか慌ただしく感じたサトル達もフシギダネとクルマユをモンスターボールへと戻した。

ブイゼルはマリルに説得させられると、何かを洩った表情でキモリの方へと歩いて行った。戦う意思をブイゼルから感じなくなったキモリも警戒することを辞めた。キモリの前へと近づいたブイゼルはキモリにゆっくりと話しかけた。ポケモンの言葉はサトル達には分からないが、ブイゼルの話を聞いているキモリの表情がだんだんと曇っていく所から、何かまずいことが起きていることが分かった。

ブイゼルの話を聞いたキモリはサトル達の方へと向く。それを見たサトル達はキモリの元へと駆け寄った。

「キモリ、ブイゼル達の身に何かあったの？」

サトルの言葉にキモリは静かに首を立てに振った。

「ブイ！」

すると、ブイゼルはサトル達にこちらに招く仕草を行なった。

「ついて来て、って言ってるのかな…」

「たぶんそうだと思う」

ブイゼルはそのまま深く頷くと、マリルを連れて水端に沿って泳ぎ始めた。事情を悟ったサトル達もブイゼル達の跡を追って行った。

~~~~~

『録画準備完了！いつでも良いロトよ！』

「コーン!!?」

リーリエとタケシは、ムツクルの新しい技の練習をしていた。

「行きますよムツクル！【つばめがえし】です!!?」

「クル!!」

「受け止めろ！ウソツキー!!?」

「ウソツキー!!?」

一気に急降下したムツクルはそのままエネルギーを溜め込んだ嘴でウソツキーに突進する。そのムツクルの攻撃をウソツキーは両腕を前にクロスしてガードした。

「よし！だんだんと様になってきたんじゃないか」

「はい！タケシのアドバイスのおかげです」

少しだけ後退りされたウソツキーの様子からムツクルのパワーに  
関しては申し分はない。

だが、「つばめがえし」は一気に急降下して相手の死角に入ってから  
攻撃を繰り出すという必中技である。つまりウソツキーが攻撃を受  
け止めることができたということは、ウソツキーにはムツクルの姿が  
視覚に入っていたことになる。

「リーリエー・タケシ！」

「サトル、カノン!?、それにキモリも！」

ロトムが録画したバトルビデオを見ながら再度リーリエとタケシ  
はもう一度練習に入るとすると、遠くの方から湖で出会ったブイゼル  
とマリルを連れて急いでリーリエとタケシの元へと走ってくるサト  
ル達の影が見えて来た。

「さつき、あの辺りの水辺でこのマリルとブイゼルに出会ったんだけ  
ど……」

「そしたら、この子が……」

「これは大変だ。急いで治療をしよう！」

サトルの腕に抱きかかえられていたのは全身傷だらけのポケモン  
だった。その様子を見たタケシは急いでそのポケモンの治療へと  
移った。

『コイキング さかなポケモン』

水タイプ

跳ねることしか出来ず、全ポケモンの中で一番弱いポケモンとして分類されている。なぜ跳ねているのかは研究者にも分からない』

傷ついたコイキングをタケシは素早く丁寧に治療していく。ブイゼルとマリルは心配そうにコイキングを見守っている。

「よし、あとはラッキーの『たまごうみ』で体力を回復させてあげれば終わりだ。頼んだぞ、ラッキー」

「ラッキー!!?」

ラッキーはタケシの指示の元に「たまごうみ」を発動する。ラッキーの回復技によりコイキングの傷は見る見るうち消えていく。あれだけ傷だらけになっていたコイキングの身体には擦り傷も一つも無くなっていった。

「コイキングは大丈夫でしょうか?」

「ああ…もう大丈夫だ! 暫くしたら元気になるだろ」

「よかったね。もう安心して大丈夫だよ!」

「コン!!?」

「キヤモ!!?」

「リル!!?」

「ブイ!!?」

コイキングの治療を終えたタケシは一瞬キモリの方へと向くと、すぐに鞆から別の傷薬を取り出した。

「キモリ、お前もなんかゲガしてるみたいだな」

三人もキモリの方へと目をやると確かに腕や足首に擦り傷がついていた。カノンの話からもブイゼルとは直接戦ったわけでもないため、その時についた傷でもないと言証する。リーリエはキモリから訳を聞こうとしたのだがキモリはリーリエと目を合わせようとはせずその質問に答えようとはしなかった。

「コ…ココ!!?」

「見て! コイキングが」

カノンの言葉にリーリエ達はコイキングの方へと振り向いた。目

を覚ましたコイキングはゆっくりと静かに起き上がった。その後、ブイゼル達を見つけると元気よくその場で飛び跳ね始めた。その様子をみたブイゼルとマリルも急いでコイキングの元へと向かった。

「これならもう心配しなくて大丈夫だ」

元気になったコイキングを見て、ブイゼルとマリルはリーリエ達に頭を下げた。

「いいって！お礼なんて〜」

「治療したのはタケシなんだけどね…」

誇らしげに言うカノンにサトルは静かにツツコミを入れた。

~~~~~

「じゃあね!!!」

ブイゼル達はもう一度リーリエ達にお礼を言った後、水路を渡って行ってしまった。

「カノン、よかったのゲットしておかなくて」

「いいよ。あの三匹の仲を引き裂くようなことなんて私には出来ないからね」

ちよつと残念そうにカノンは首を傾げながらサトルに返事を返す。リーリエ達はそれぞれの荷物を手に取ると、目的地であるハナダシテイに向かう準備をした。

「それでは行きましようか」

リーリエの合図で歩き出そうとしたが、ただ一人タケシは難しい表情でブイゼル達と別れた方へと目をやっていた。

「タケシ？」

リーリエはタケシに問いかけた。タケシはリーリエ達の方へと振

り返ると、自分が思った疑問を話し始めた。

「あのコイキング相当なダメージを負っていたから、なんか気になつてな」

「確かに、いたるところ傷だらけだったもんね」

「どうやら、タケシはコイキングの怪我が何があつて負つたものか気になつているようだ。あの怪我からリーリエ達はブイゼル達に何かの事件に巻き込まれたのではないかと考え始める。すると、何かを思い出したサトルはゆっくりと口を開いた。

「あの…もしトキワの森のペンドラーみたいに他方から来たポケモンがまたこうして暴れていたとして、ブイゼル達は元いた場所を追い出されていたとしたら…」

トキワの森での出来事、もしそうだとしたら大変なことだ。

「あの三匹の跡をつけていこうよ」

行つてもたつてもいられなくなつたリーリエ達はブイゼル達の跡を追つて行くことにした。

~~~~~

ブイゼル達の跡を追つて、暫く水路を沿つて歩いて行くと大きな川岸に辿り着いた。そこには数多くの水系ポケモン達が集まっていた。

「ここは…」

リーリエ達は茂みの影からその様子を伺っていた。すると、水ポケモン達は一対一にバトルを始めた。その中にはさつきリーリエ達と別れたブイゼル達の姿もあった。ブイゼルも自分より体の大きいポケモンシザリガーとバトルを始めていた。

そんな中、ポケモン達のバトルが繰り広げられている奥に岩場に腰を下ろして座っている一体のポケモンの姿がリーリエ達の目に止まった。

「あのポケモンは」

ロトムは素早くそのポケモンの写真を撮って解説を始めた。

『ニョロボン おたまポケモン

水・格闘タイプ

強靱な筋肉を持つ。太平洋を休むことなく泳ぎ続けることが出来る。ニョロボンの真似で泳ぎを学ぶ子供も多い』

ニョロボンの合図にバトルは始まり、バトルは終え、その繰り返しである。それを見たタケシはここがどのような場所なのかが分かった。

「わかったぞ。ここはこの辺りに住む水系ポケモン達の道場みたいなところだ」

「それじゃあ、ここでお互いに強さを磨きあっているってことなんですかね」

「すごい。私こんなの初めて見たよ」

人間が立ち入ることは決して許されないこの野生ポケモン達の緊迫とした雰囲気の中でリーリエ達はブイゼル達の方へと視線を変えてみると…

「ブイブイブ!!？」



「ココツ!!?」

「ブイブウ!!?」

ブイゼルとコイキングは何やら揉めているように見えた。どうやら、組手に参加しようとしているコイキングをブイゼルとマリルが止めているようであった。

「当たり前だ。まだ回復しきってないのに…」

「コイキング!!!」

「コーン！」

「ちよっ！リーリエ!!!」

見ていられず、その場を飛び出したリーリエはコイキングの元へと駆け寄った。だが、いきなり人間が侵入してきたことに驚いたニョロボンは鳴き声で周りのポケモン達を集めた。ニョロボンの司令に気づいたポケモン達は各々の訓練を一時中断すると、リーリエに対して威嚇し始めた。それを見たタケシ達も慌ててリーリエの元へと駆け寄った。

「違うんだニョロボン！俺たちはここを荒らしにきたんじゃないんだ」

タケシの言葉に耳を貸そうとしないポケモン達。だが、ブイゼルとマリルとコイキングは必死にリーリエ達は危害を加えるような人達ではないことを伝え始めた。コイキングの治療の痕跡も見せてはニョロボン達を説得させる。事の様子が分かったニョロボンは威嚇しているポケモン達を引き下げた。

「分かってももらえたみたいだな」

「リーリエも！コイキングが心配なのは分かるけど」

「ぐ…ごめんなさい」

「コーン…」

先走った行動に反省するリーリエを前にそれでもコイキングは組手に参加しようとしている。

「ダメですよコイキング！まだ怪我は完全に治っていないのですから！」

「なんで、そんなになるまで…」

『ここは、このロトムにお任せロト!』

事情を聞こうとロトムはコイキングに話しかける。ロトムもまたポケモン。それをヒントにロトム図鑑には新たにポケモン翻訳機能が内蔵されたのだ。

『そういうことロトね』

「ロトム。コイキングは何て言ってるの?」

『コイキングはここを通りかかるトレーナーに何度も出会することがあるロト。だけどコイキングだからという理由だけで誰にも相手にされない。それが悔しくて何としても強くなるためにここで必死にトレーニングしているみたいなんだけど…』

「ブイブイ」

『張り切りすぎて、大怪我をすることがただ絶えないとブイゼルは言っているロト』

年々、ポケモン研究員は新たに発見されたデータによって今まで図鑑に明記されていたポケモンの生態文の変更もいろいろと行なってきたはいるが、コイキングの最弱という肩書きはいまだに消えないでいる。実際、新型のポケモン図鑑として開発されたロトム図鑑にもその説明が記載されているぐらいだ。

「まあ、見た目の判断で弱いと決めつけられて傷つくのは分かるんだけど…」

「こんなトレーニングを続けると強くなるどころか身体を壊しちゃうよ」

「ココツ…」

そんなコイキングの様子をみたリーリエはある提案をみんなに提示した。

「それでしたら、わたくし達も修行のお手伝いをさしてあげたらどうでしょうか?」

「リーリエ?」

「わたくし…なんだかこの子の事ほっておけなくなってしまいましたし…ど…どうでしょうか?」

少し自信なさげに応えるリーリエであったが、彼女の意見に反対す

る者はいなかった。それどころかここにいるニョロボン含む野生のポケモン達もみな賛同していた。

「リーリエー！それ、ナイスアイディアだよ！」

「そうだな。ちょうど、リーリエのムツクルも特訓中だったわけだし。傷ついたポケモンの治療は俺に任せてくれ」

「ラツキー!!?」

「キャモ!!?」

「キ…キモリ!!?」

「クルツ!!?」

「ムツクルも!!?」

「あはは！リーリエのポケモン達はみんなバトル好きだよね♪」

キモリもムツクルも体を大きく動かしてはいつでもバトルができるようにストレッチを始めた。すると、その様子を見たブイゼルはキモリに近づくと拳をキモリの前に突き出した。

「ブイツ!!?」

「キャモ…」

二人はやる気満々だ。キモリのトレーナーとしてリーリエもブイゼルに勝負を申し出た。

「分かりました。ブイゼル！手合わせお願いしてもいいですか？」

もちろんと、ブイゼルは首を縦に振った。思いっきりバトルができるようにリーリエ達は河岸へと移動した。さっきまで組手を取っていた野生のポケモン達もキモリとブイゼルの戦いを見学しようと周りの木に腰を下ろしていた。

「よく見ておくんだぞ。他のポケモンのバトルをみるのも立派な修行だからな」

「ココツ!!?」

タケシの教えをしつかりと聞いたコイキングも今から始まるバトルを目を凝らしてみようとする。

「キモリ！【タネマジンガンです】!!?」

「キャモ!!?」

「ブー！」

先制攻撃を繰り出したキモリの「タネマシンガン」がブイゼルに向かつて放たれた。無数に迫ってくる種の弾丸をブイゼルは「みずてつぽう」で全て撃ち落とした。その後、すぐさまブイゼルは尻尾をスクリューのように回し始めると周りの川水を自分の周りに纏わせ、キモリに向かつて突進する。ブイゼルの「アクアジェット」が炸裂した。

「キヤモ！」

「大丈夫ですか!?？」

「キヤモ」

効果はいまひとつなため何とか耐えたキモリであったが、すでに頬袋を膨らませてパワーを貯めていたブイゼルの「みずてつぽう」がキモリに目掛けて放たれた。

『凄いパワーの「みずてつぽう」だロト!』

「でんこうせっか!!？」

キモリは「でんこうせっか」のスピードに乗ってブイゼルの攻撃を瞬時に躲した。そのままブイゼルに突っ込んでいくキモリに、ブイゼルは同じ先制技「アクアジェット」で迎え撃つ。迎え撃った両者の攻撃は爆風の反動とともに後退する。

「はいーそこまでー」

タケシの合図により、キモリとブイゼルのバトルは引き分けに終わった。

「頑張りましたねキモリ。ありがとうございました。ブイゼル!」

バトルによって、互いの力を認め合ったブイゼルとキモリは握手を交わした。力を出し切った二体はとても満足気な表情をしていた。

「よし!次は…」

次の練習を始めようとしたその時…

ガツシヤヤヤヤ  
!!!!!!!

「なんだ!」

音がした方へと振り返ると、木々を薙ぎ払いながらこちらに進んでくるサイホーンの形をしたメカが現れた。

そのメカはリーリエ達の前に停車する。コックピットが開き出すとその中からは見覚えのある二人組が現れた。

「なんだかんだと聞かれたら」

「答えないのが普通だが」

「まあ！特別に答えてやろう」

「地球の破壊を防ぐため」

「地球の平和を守るため」

「愛と切実な悪を貫く」

「キュートでお茶目な敵役」

「ヤマト！」

「コサブロウ！」

「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

「シヨッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

「なーんてな！」

「ボツツ!!？」

現れた二人組にリーリエとカノンは

「ヤマト!!」

そしてサトルとタケシも

「コサンジ!!」

声を揃えて二人の名を叫んだ。

「違うコサブロウだ!!!名乗っているだろ!!!」

いつものように名前を間違えられたコサンジ…いやいやコサブロ

ウはリーリエ達にツツコミを入れた。

「お前達！まだこんなことやっているのか！」

「あら、久々にみる顔もあるわね」

「何を言い出すかと思えば、我々はロケット団！滅ばぬ限り悪事の道  
を突き進むのは当然であろう」

『それよりも何ロト！そのメカは!!!』

「これか！これはルンバ博士が…」

ピリッ

突如、無線が鳴る。

ピッ

「もしもし」

『ナンバである!!!』

「……。」

「ナンバ博士に作ってもらったんだよ」

「それよりも何しにここへ来たんだ!」

「それはサンバ博士が……」

ピリッ

再び鳴る。

ピッ

『ナンバである!』

「……。」

「ナンバ博士が水ポケモン達の生態について調べたいと頼まれたから、ここの水ポケモンを全部いただきにきたんだよ」

今回のロケット団の目的はここのポケモン達の捕獲と聞いたリリーエはシロン達を前に出して身構えた。

「そんなことさせません!」

「なぐに言ってるの?今回私たちが狙っているのは野生のポケモンよ!人のポケモンじゃないわよ」

トレーナーの資格を得た者が野生のポケモンを捕獲するのは保護施設エリア以外でなら許されている。だが、ポケモンを悪事として扱っているロケット団となれば意味が違ってくる。

「だけど、ロケット団みたいな悪い人達に渡ってしまうのであれば話しは別だね」

「そうよ!それにそのボンバ博士に何を言われたとしても……」

ピリッ

鳴る。

ピッ

「パープルジャリガール!あんたによ!」

カノンはヤマトから無線機を受け取った。

『ナンバである』

「……。」

ナンバ博士はどんな耳をしているのだろう。ここにいる全員がそう思っているに違いない。

「その…ナンバ博士に頼まれたからって、ここのポケモン達がロケット団なんかが悪用されてたまるものですか!」

カノンはヤマトから渡された無線機をヤマトに投げつけながらそう言い放った。

「そうか!なら、力づくで止めてみる!」

「とおう!!」

メカの中へと入ったロケット団は水ポケモン達の捕獲に掛かった。メカの口から大きな網が発射されニョロボンを含む他の水ポケモン達はその網に捕らえられてしまった。

「ああ!ポケモン達が!!!」

「ブイイ!!!」

みんなを助けるべくブイゼルは「アクアジェット」でメカに突進する。だが、頑丈なメカにそのパワーは跳ね返されてしまい後ろへと後退する。

「ブツ!!!」

「ダメだよブイゼル!」

「ブイ?」

もう一度、向かって行こうとしたブイゼルをサトルは呼び止めた。「相手はポケモンじゃないメカなんだ。力任せに行った所で勝算はない。ここはみんなで協力し合わないとダメだ!」

「ブイ…」

サトルの言葉にブイゼルは攻撃しに行く事をやめた。ロケット団はリリーエ達のポケモンも奪おうとリリーエ達に向かつて前進してやってくる。すると、足元に目をやったサトルはある策を思い浮かべた。

「ブイゼル!マリル!あのメカの足元に【みずてつぼう】だ!」

『ピピツ!!? 一体どうするつもりロトか?』

「お願いだ！」

サトルを信じてマリルとブイゼルは「みずてつぼう」をメカの足元に目掛けて放った。水の勢いだけであのメカは止めることは出来ず、メカはそのまま一直線に向かって行く。

「そんな攻撃効くわけないでしょ」

「無駄な抵抗はもう辞めるんだなあ…つと！」

するとメカは地響きを鳴らしながら空回りし始めた。いきなりの事にロケット団は慌ただしくなる。

「なになに！どうなってるのよ！」

「ダメだ！操縦がきかない！」

メカに乗っているため足元に目をやれないロケット団には何が起きたかわからないが、リーリエ達にはその原因をしっかりと目で捕らえていた。

ここの土は水辺に近いこともあって湿った柔らかい土で出来ている。そこに水をかけてやることで水を多く吸収してしまったことに泥が生まれて、メカはそのぬかるみにはまって動けなくなってしまったのだ。

「そうか！これが狙いだったのか！」

「流石！サトル♪よっし！フシギダネ！【はっぱカッター】でロープを切るのよ！」

「ダネ!!？」

ロケット団が動けない隙にカノンはフシギダネに綱を切るよう指示を出す。この葉の刃で綱を切り、ニョロボン達は急いで脱出する。全員の無事を確認したニョロボンは全エネルギーを集中させた拳をロケット団のメカに向かって強烈な一撃を食らわした

『ニョロボンの【きあいパンチ】ロト！』

ニョロボンの一撃でロケット団のメカは操縦不能となってしまう。動かないメカを捨ててロケット団はコックピットから姿を現わす。

「よくもやってくれたわね！」

「こうなったらポケモンバトルだ！」



「出てこい！グランブル!!?」

「ツボツボ!!? お前も行け！」

「グラ!!?」

「ボツツ!!?」

メカが壊れたぐらいで引き下がる二人ではなかった。ロケット団は意地でも水ポケモン達を根こそぎ奪う気だ。

「シロン！行きますよ」

「コーン!!?」

「ココツ!!?」

「コイキング?」

ロケット団と戦おうと前に出たリーリエとシロンにコイキングは自分が行くと跳ねてはアピールする。自分達の住処を荒らそうとしたロケット団を許せないのであろう。コイキングの想いを知ったシロンもここはコイキングに任せると後ろへと後退する。リーリエはコイキングとコンタクトを交わすとコイキングを前に出して戦闘体勢へと入った。

「一緒に戦いましょう！コイキング！」

「ココツ!!?」

「コイキングに何が出来るって言うのよ！グランブル！【たいあたり】!!?」

「グラッ!!?」

「ココツ!!!」

「続けて【かみつく】攻撃よ!!?」

「グラアア!!!」

グランブルの体当たりを受けてコイキングは後ろへと吹き飛ばされてしまった。陸地に跳ねられ身動きがうまくとれないコイキングにグランブルは強靱な顎でコイキングを噛みつきにかかった。

「コイキング！【はねる】です!!?」

「ココツ!!?」

「アッハハハ!!!」

「【はねる】をした所で！」

「何が起きるわけでも…」

何かを思いついたリーリエの指示でコイキングは【はねる】を繰り出した。【はねる】はダメージも与えられないし、何の効力もないという技ではあったのだが…

「やったあ!!!」

「何が起きたあああ!!!」

噛みつこうと前乗めりになったグランブルの顎下に向かってコイキングは力一杯跳ねると、そのままグランブルを空中へと吹き飛ばしたのだ。吹き飛ばされたグランブルはコイキングと共に空高くにまで昇っていく。跳ねることしか出来ないと言われ続けていたコイキングのジャンプ力に驚愕した瞬間であった。

『リーリエ!あのコイキング【とびはねる】が使えるロトよ!』

「わかりました!コイキング【とびはねる】!!?」

「ココツ!!?」

ロトムがスキャンしたコイキングのデータからリーリエはコイキングに技の指示を送った。空中で身動きがとれないグランブルに向かって、コイキングは一気に急降下して体当たりを食らわせた。技が入ったグランブルはそのまま地面へと叩きつけられた。

「グランブル!!!」

考えもしなかったことにヤマトは動揺を隠せないでいた。

「ツボツボ【ヘドロばくだん】だ!!?」

「フシギダネ!!!」

状況がまずいと感じたコサブロウはツボツボにフシギダネに向かって攻撃の指示を出す。ツボツボの攻撃がフシギダネに向かっていくと、何処からか放たれた【みずてっぼう】がツボツボの【ヘドロばくだん】を打ち消しフシギダネを守った。【みずてっぼう】が放たれた方へと振り向くと、そこにはマリルがいた。

「ありがとうマリル!」

「リル!」

お礼を言われたマリルはカノンに向かって笑顔で返事を返した。

「ツボツボ!【ジャイロボール】だ!!?」

「ボツツ!!?」

「ブイゼル! 【アクアジェット】だ!!?」

「ブウウ!!?」

ツボツボの【ジャイロボール】とブイゼルの【アクアジェット】がぶつかり合う。押し合いはブイゼルに軍配が上がり、ツボツボはそのままぬかるんだ泥へと飛ばされた。

「マリル! 【みずてつぽう】!!?」

「リル!!?」

「だああ!!! ツボツボ!!!」

メカと同じように水を浴びたツボツボの体はぬかるんだ泥にはまって身動きが取れなくなってしまった。

「グランブル! 【かみつく】攻撃!!?」

「グラ…」

「どうした? グランブル!」

『グランブルは【とびはねる】の追加効果で麻痺して動けないロト!』

「コイキング! ツボツボに【たいあたり】です!!?」

「コオオオ!!!」

コイキングの行進の体当たりをツボツボに食らわせるとそのまま吹き飛ばされたツボツボは後方にいたグランブルと衝突した。硬い殻を持つツボツボとぶつかったグランブルは目を回してしまった。

「マリル!」

「ブイゼル!」

「【みずてつぽう】!!!」

目を回している二体に向かってマリルとブイゼルの両方の【みずてつぽう】が炸裂した。二体はそのままロケット団に向かって吹き飛ばされた。

「今だラッキー! 【たまごばくだん】!!?」

「ラッキー!!!」

ロケット団のメカに向かって、ラッキーの光り輝く大きなたまごが迫っていく。

「うわあああああ」

ラツキーの【たまごばくだん】を撃ち込められたメカはそのまま爆発した。爆発に巻き込まれたロケット団はそのまま空高く吹き飛ばされて行った。

「くっつ！またしてもかー！」

「覚えておきなさいよ!!!」

「やなきもちいい!!!」

キラッ

水平の彼方へと飛ばされたロケット団を見送ったリリーリエ達はみんなの無事を確認する。

「みんな無事のようによかったです」

バトルを終えたコイキングはリリーリエの近くの岸まで泳いで渡ってきた。

「ココッ!!?」

「凄かったですよコイキング！貴方はもつと自信を持っていけば大丈夫ですよ」

「コーン!!?」

「クル!!?」

「キャモ!!?」

「コッココ!!?」

初めて言われたその言葉にコイキングの目からは涙が滲んでいた。その後、コイキングは何度もリリーリエにお礼を言い続けた。

「マリル。さつきは助けてくれてありがとうだね」

「ダネッ!!?」

「リルル!!?」

「もうくすぐったいよ♪」

カノンとマリルもすっかりと仲良くなったようだ。その光景をリリーリエ達は微笑ましく見ていたのであった。

~~~~~

「それじゃあ、行こうか」

ポケモン達に別れを告げたりーリエ達は荷物を持って出発しようとしていた。

「リルル!!?」

「マリル?」

そんなりーリエ達の跡を追いかけるようにマリルはカノンの元へと駆け出して行った。急な別れに寂しく感じたのか。マリルはカノンの足にしがみついたまま動こうとしない。そんなマリルの様子にカノンはしやがみこんで、視点をマリルの目線の高さに合わせて。「だったら私と一緒に来ない?マリル?」

「リルル!!?」

マリルはその場に飛び跳ねながら元気にカノンに返事を返した。

「ブイブイ!!?」

「ブイゼル?」

「ブイ!!?」

「もしかして、僕に?」

すると、ブイゼルもまたサトルの元へといくと、自分も連れて行って欲しいとアピールする。

さらなる強さを求めて、いろいろなポケモン達と戦ってみたくなくなったブイゼルはロケット団で的確な判断力で指示を出したサトルを見て、サトルの元についていくことを決めていたようだ。

「よっし!わかった!」

「ピツカア!!?」

カノンとサトルはモンスターボールを取り出すと、マリルとブイゼ

ルはそのまま開閉スイッチを押して、自らボールの中へと入って行った。

「マリル！ゲットだぜ♪」

「ヒココツ!!?」

「宜しく！ブイゼル！」

「ピツカア!!?」

「カノン！サトル！おめでとうございませす」

「やったな！二人とも」

二人はモンスターボールからマリルとブイゼルを出して、もう一度顔合わせをした。すると、二体はコイキングの元へと駆け寄ると、一緒に行こうと言っているのか。二体はコイキングに手を伸ばしていた。それを見たリーリエもシロンと一緒にコイキングの元へと駆け寄った。

「コイキング。良ければ貴方の強くなりたいたいという願いわたくしと一緒に叶えて行きませんか？」

「ココツ!!?」

「どうでしょうか」

「コーン!!?」

「ココツ!!!」

「ありがとうございます。一緒に頑張りましょう！」

リーリエもモンスターボールを取り出すと、コイキングの額に開閉スイッチを押した。コイキングもそのままモンスターボールの中へと入って行った。

「コイキング！ゲットです！」

「コーン！」

「リーリエもおめでとう！」

「一気に仲間が増えたな」

「はい！」

コイキングもモンスターボールから出すと、リーリエ達はコイキング達と共にニョロボン達が住む川岸と別れを告げた。

「さようなら！みんな」

「元気でね！」

「ココッ!!!」

「リルル!!!」

「ブイブウ!!!」

ニヨロボン達も手を振りながらコイキング達の旅立ちを見送った。新たな仲間と共にリリーリエ達はハナダシテイへと旅立ったのであった。

・細くも櫨の木

みかけは貧弱そうに見えるけど強靱な意志を持つ。

## 第十八話 オツキミ山の独裁者

次の街ハナダシティに向かっていているリーリエ達。今日はもう夕暮れ時、オツキミ山付近のポケモンセンターで宿を取ることになった。

「もうすぐポケモンセンターに着く頃だ」

「やっとかく。僕はもうクタクタだよ」

「サトルはもう少し体力つけたほうがいいと思うよ」

いつも通りカノンはサトルを茶化していると…

「コーン？」

何かの気配に気づいたシロンは辺りを見渡し始めた。

「どうしたのですか、シロン？」

「ヒッコ」

「ピカ？」

「ヒコザル？」

「ピカチュウもどうしたんだ？」

シロンに続いてヒコザルとピカチュウも辺りを見渡し始める。三匹はリーリエ達から離れると、茂みの奥の方へと入って行った。

不思議に思いながらもリーリエ達もシロン達の跡を追いかけては茂みの奥へと入って行った。すると、そこには二体のポケモンが身を寄せていた。

「ピイとピッピだー」

『これは、さっそくデータアップロードだロト！』

サトルがそのポケモン達の名前を言うと、すかさずロトムはそのポケモン達の解説に入った。



『ピイ ほしがたポケモン

フェアリータイプ

そのシルエットからお星様の生まれ変わりだと信じられている。ピイをよく見た場所には流れ星が落ちてくると噂されている』

『ピツピ ようせいポケモン

フェアリータイプ

ピイの進化系、満月の夜には仲間を集めてダンスを踊る。月の光を浴びて浮かぶこともできる』

「だが、なんでピイとピツピがこんな所に？」

『たしかに、ピイとピツピは主にこの先にあるオツキミ山の周辺を住処にしているはずだ。でも、ここからオツキミ山までまだ少し離れるロトー!』

そう、ピイとピツピは滅多に人前に姿を現さないとされている珍しいポケモンだ。だから、タケシとロトムは自分たちの住処から離れた場所にいるピイとピツピに対して疑問を浮かべているのだ。

「コーン?」

「ピイ…」

「ピツピ…」

「ねえ、なんか元気がないみたいだよ」

「これはオツキミ山で何かあったのかもしれないな」

「ポケモンセンターに着きましたら、ジョーイさんに聞いてみましょうか?」

「そうだね。ジョーイさんなら何か知っているかもしれない」

「ジョーイさんには俺が聞く!」

「はい…はい…」

シロン達に付き添ってもらいながらピイとピツピを連れてリリー工達はオツキミ山のポケモンセンターへと急いで向かった。

「見えてきました!」

「おお!!あの方は!」

ポケモンセンターの近くまで行くと、急にタケシは何かを見つけたかのようにポケモンセンターの方へと全速力で走り出した。リーリエ達も目を凝らしてみると、ポケモンセンターの前にはジュンサーさんの姿があった。

「ジュンサーさん!!!」

いつも通り、タケシはジュンサーに口説きにはいる。

「もう自分の心は貴方に逮捕されてしまいました」

ズシャン!!!

「しびれびれ〜」

「ケツケケケケ♪」

『全く懲りない口ト』

グレッグルに引きづられるタケシを置いていて、リーリエ達はジュンサーのもとへと向かう。

「こんにちは、ジュンサーさん。あの…何かあったのですか？」

「それが、じつはね…」

「ジュンサーさん!!!」

声が出た方へ向くと、オツキミ山から二人のトレーナーが慌ただしくオツキミ山から走ってきた。

「あいつ強すぎて俺たちの手に負えないですよ」

「すみませんが、他をあたって下さい」

そう言い残してトレーナー達は急いでポケモンセンターの中へと入って行った。

あの二人の様子を見てオツキミ山で何かあったことは確かなようだ。ジュンサーは改めてリーリエの質問に応えた。

「それがね。オツキミ山を独占しているポケモンが出て来たの」

「オツキミ山を!!!」

「そうか…それでピィやピッピはそいつに恐れてオツキミ山から降りて来たのか」

「タケシ！復活はやっ!!」

「やあー!」

毒の痺れから解放されたタケシも加わった所でジュンサーはさら

に説明し始める。

「それでね。腕の立つトレーナーにそのポケモンの捕獲をお願いしているのだけど、そのポケモンがなかなか強くてね。それに他のポケモンと群れを成しているからゲットしに行ったトレーナーたちはみんな返り討ちにあってしまっのうの」

「そのポケモンはどんなポケモンなのですか？」

ジュンサーから聞いたそのポケモン達の名前をカノンとサトルはポケモン図鑑で調べ始めた。

『ズルッグ だっぴポケモン』

悪・格闘タイプ

視線が合った相手にいきなり頭突き攻撃を仕掛ける。皮を首まで上げて防御の体勢を取る。ゴムのような弾力でダメージを減らす』

『ズルズキン あくとうポケモン』

悪・格闘タイプ

ズルッグの進化系。縄張りに入って来た相手を集団で叩きのめす。キック攻撃でコンクリートブロックを破壊する』

「ズルッグにその進化系のズルズキンか」

「怖そうなポケモンですね」

「グループを作っているのなら、おそらくこの進化系のズルズキンがリーダーであることは間違いないな」

「じゃあ、この親玉を倒せばいいってこと?」

「そうだね」

ポケモン図鑑から目を離れたリーリエ達はオツキミ山の方へと振り向いた。

さっきのトレーナー達の様子からズルツグとズルズキンのレベルは相当なものであることが分かった。ジュンサーからの話でも何人者のトレーナーが逃げ帰っていると聞いている。そんなポケモンに勝てるであろうか。もし、また無暗に突っ走ってニビシティでの科学博物館の時みたい以太刀打ちできなかつたらどうしようとリーリエ達は考えてしまった。

「コーン…」

「シロン」

シロンは寂しげな表情でリーリエを見つめている。ふと、パイとピッピの方にも目をやると二匹とも身体を震わせながら怯えていた。「やはり…放っておくわけには行きませんか」

そう呟くとリーリエはカノン、サトル、タケシと目を合わせる。三人もリーリエと同じ気持ちのようだ。リーリエの考えに賛同し、ゆっくりと頷いた。

「ジュンサーさん! わたくし達に任せて貰えないでしょうか! このまま見過ごすわけには行きませんか」

『そうロトよ! これはカントーを巻き込むほどの大事件ロトよ! 引き下がるわけにはいかないロト!』

「いや、そこまでにはなっていないでしょ♪」

これから強敵と戦うというのにロトムとボケとカノンのツツコミで一気に緊張感が抜けてしまった。だけど、逆にみんなの気持ちが軽くなったのでよかったと思う。

「分かりました。みなさんご協力感謝致します」

リーリエ達は一度ポケモンセンターでポケモン達を回復させ、最低限の準備を整えたうえでオツキミ山の中へと入って行った。

~~~~~

オツキミ山は流れ星が頻繁に観測される山と言われ、ポケモンの進化に必要とされる月の石がよく発掘されることでも有名である。

内部には何処にあるか分からないがおつきみ広場と呼ばれる空間がある。そこには巨大月の石が供えられており、満月の夜になるとその周りをピイヤピツピ、ピクシー達が神様を祀る踊りが行われるのだ。その様子からピツピ達は宇宙から来たポケモンではないかという説が出回ったのだ。

「まずはズルズキン達の生態や弱点をしつかりと分かっておかないといけないよね」

「ロトム。先ほどの凶鑑のデータからズルズキン達について調べてもらえませんか？」

『お安いことだロト！』

リーリエ達はまずオツキミ山を探索しながらズルズキン達の情報を集めた。

『ズルッグとズルズキンは何方とも悪・格闘タイプ。この二体に有効なタイプは共通しているロト！つまり、飛行タイプ。格闘タイプ。フェアリータイプが有効ロト！』

「ありがとうございます。ロトム！それでしたら、わたくしは飛行タイプのムツクルですね」

「俺は格闘タイプのグレッグルだ」

「私はフェアリータイプのマリルがいるよ♪」

「僕には有利なタイプはいないけど、サポートするぐらいなら大丈夫だよ」

「お願いねサトル！トキワの森の時みたいに頼りにしてるんだから！」

それぞれが繰り出すポケモン。そして各々の役割を決めながら、リーリエ達は洞窟内を探索して行く。

「コン?」

「どうしたのですかシロン?」

「ねえ!何か聞こえないか?」

すると、いきなり真上から空気を切る音が聞こえて来た。その音に気づいたリーリエ達は見上げると、何がこちらに飛んでくる影が見えた。その影はもうスピードでリーリエ達の手前へと落ちると、その衝撃でリーリエ達は思わず尻餅をついてしまった。

「きゃあああ!!」

「何だ!!」

「何かが飛んできました!」

ゆっくりとその場に立ち上がると、目を凝らして一面に舞う砂煙の中に浮かび上がる影を凝視する。その影の正体はリーリエ達が探していたポケモンだった。

『ビビッツ!!ズルツグだロト!』

飛んで来た正体はズルツグだった。突然の事に驚いてしまったが、驚いている暇などリーリエ達にはなかった。見ると彼方此方にそびえ立つ岩山の後ろから、次々にズルツグ達が顔を見せていた。そしてリーリエ達の方へと一斉に睨みつけてきた。

「早速、囲まれたか」

「ズキイイイイ!!」

数十匹はいるであろう。あまりの数の多さにサトルはあらかじめこの場合の対策として一体のポケモンをモンスターボールから繰り出した。

「クルマユ!【くさぶえ】だ!!?」

「マユ!!?」

真つ向から攻めるのは勝算は低いと判断したサトルはクルマユの草笛で眠らせることにした。クルマユの草笛によりズルツグ達は次々と眠っていく。

「おお!!困った時の草笛だ♪」

「これでしたら、心配ありませんね」

安心したリーリエ達であったが、右端の岩陰の方から飛び出したズルツグがクルマユに向かって頭突きを仕掛けた。

「クルマユ!!!」

「えっ!ちよつと起きるの早くない!?」

攻撃を仕掛けてきたズルツグの方へと目を向けてみると、目を覚ましていたのは一体だけではなかった。草笛によってまだ眠っているズルツグもいれば、すぐに目を覚ましては攻撃の体勢をとるズルツグもいた。それを見たタケシは何かを思い出したようだ。

「そうか! 《だっぴ》か!!?」

「だっぴ?」

「ズルツグの特性だ。暫く経つと自身の状態異常を自力で回復させることが出来るんだ」

「それって…つまり…」

「ズルツグに対して眠り攻撃は余り期待できないということになります!」

「そんなく!!!頼みの草笛が!!!」

その言葉通りズルツグ達は一斉にリーリエ達に向かって突進していく。

「「ピイイ!!!」」

「あっ!ピイ!ピッピ!」

ズルツグ達の攻撃に恐怖を感じてしまったピイとピッピはその場から一目散に逃げてしまった。

「ダメだ!いったん引こう!!!」

マシンガンのように続けざまに飛んでくるズルツグ達の頭突き攻撃に為すすべがなく、リーリエ達は一旦その場からすぐさま退散することにした。

~~~~~

「ハア：ハア」

「なんとか：振り切ったね」

ズルツグ達が追いかけてこないことを確認した後、岩山を背にして休息を取ることにした。ズルツグ達の攻撃を切り抜けたリーリエ達はもう一度体制を立て直すべく作戦を考え直すことにした。

「どうしましょう。あんなに数のズルツグ達を一度に相手にするのは、相当厳しいと思います」

「これは：親玉のズルズキンを倒すしか手がないな」

「だけど、それこそズルズキンと対峙している時に仲間を呼ばれたら。それこそ大変だと思うよ」

「くっく!!!!せめてズルツグ達の考えていることが分かれば苦労しないんだけどなあ」

「まあ、それが出来たら確かに苦労はしないと思うけど…」

サトルのその言葉にリーリエ達は全員一斉にロトムの方へと振り返る。

『えっっっ』

~~~~~



『いや〜♪いい天気ロトね〜』

再びロトムは愛想良く振舞いながらズルツグ達の方へと近づいていく。その様子を岩山の影からリーリエ達は覗いていた。

どうやら、ポケモンの言葉の通訳機を内蔵されているロトムならズルツグ達がオツキミ山を潜伏した理由を聞けるかもしれないと考えたようだ。

「ロトム…大丈夫でしょうか」

「コ〜ン…」

「わ…分からないけど、もしロトムがズルツグ達から暴れまわっている理由を聞き出すことができたなら、すぐに解決できそうだけどね」

「まあ、そこはロトムに任せるしかないな」

「頑張れ。ポケモン通訳機♪」

その言葉通り、だいぶわざとらしいのであるが、ロトムはズルツグ達に近づくと、すぐさま計画を実行に移した。

『君たちが好き好んで暴れまわるようなポケモンではないことは君たちのその純粹さに満ちた目を見れば分かるロト。さあ、何か困ったことがあればボクに遠慮なく話してみるロトよ』

すると、先ほどまで目を細めて警戒心を先立てていたズルツグ達であったが、ロトムのその言葉に落ち着きを取り戻したみたいだ。警戒するのをやめた一体のズルツグがロトムの方へと近づいて行った。

「あれ!?…なんか良い感じじゃない?…」

透き通ったその目には邪神はいない。作戦は成功した。

…かのように見えた

『あれえええええええええ!!』

「「ロ…ロトム!!」」

野生の脅威は…そんなに甘くはなかった。

「大丈夫ですか! ロトム!」

『ピピツ!!? ボ…ボクの手には…負えないロト…』

ロトムの元へと駆けつけた途端、さっきと同じようにズルツグ達はリーリエ達の周囲を取り囲んだ。もう、話合いの余地はない。リーリエはシロンを前に出すと、すぐさま攻撃を仕掛けた。

「シロン! 『こなゆき』!!?」

「コーン!!!」

格闘タイプのズルツグには効果はいまひとつであるが、今までのバトルの経験からパワーアップしたシロンの粉雪はズルツグ達を一斉に吹き飛ばすぐらいの威力にまで誇っていた。

シロンの人吹だけでも前方を数十体で固めていたズルツグ達は後方へと吹き飛ばすことができた。

この調子なら大丈夫だと安堵した。その時

!!!ズキイイイイイン!!!

洞窟内に突然として響き渡る鳴き声にリーリエ達は思わず身震いしてしまった。だが、それはリーリエ達だけではない。さつきまで敵意を表していたズルツグ達も互いの顔を見合わせながら焦り始めた。山彦のように響き渡った声は徐々に止んで行くと同時に、その声の主がリーリエ達の前に姿を現した。

『出たロト!!』

リーリエ達の前に現れたのは、オツキミ山に入る前に凶鑑で確認したもう一体。ズルツグ達を率いるそのポケモンであった。

「親玉の…ズルズキンだ！」

再び雄叫び上げたズルズキン。それと同時に主ポケモンのように吹き上げられたオーラに押されてしまい、リーリエ達は思わず後ずさりしてしまった。しかし、押されながらもすぐにサトルはピカチュウを前にカノンとタケシもそれぞれのモンスターボールを片手に取ると、一斉にポケモンを繰り出した。

「頼むぞー！ピカチュウー！」

「ピツカア!!?」

「お願い！マリル！」

「出てこい！グレッグル！」

「リル!!?」

「グー!!?」

「シロン！【こなゆき】です!!?」

「ピカチュウ！【10万ボルト】!!?」

「マリル！【みずてっぼう】よ!!?」

「グレッグル！【どくばり】だ!!?」

一斉攻撃を繰り出すシロン達にズルッグ達はその攻撃を躲すのに精一杯だった。変則的に向かってくる攻撃に、ズルズキンも自分の攻撃に移せないでいた。さつきとは打って変わってリーリエ達が優先し出している。

「いいぞーみんなー！」

次々に攻撃が決まって行くが

「ズキイイイ！」

凶に乗るなあ。と言わんばかりにズルズキンは再度雄叫び上げると、一瞬にしてシロン達の猛攻撃を一瞬にして腕を使って大きく一振りに打ち消したのだ。

やはり進化系であるズルズキンは他のズルッグ達よりも明らかにパワーが違っていた。さつきよりも鋭い目つきで前のめりに顔を突き出してきたその表情にリーリエ達に緊張が走る。

「えっ？」

そのズルズキンの表情に何かを感じたのか。リーリエの顔は徐々に雲がかかったのかのように青ざめていく。

「どうしたのリーリエ！」

それに気づいたカノンはリーリエの肩に手を置いた。

「はい。あのズルズキンから…」

「ズキイイイ！」

だが、リーリエの言葉を遮るようにズルズキンはシロン達に向かって攻撃を繰り出すべく猛烈な威圧を漂わせながら飛びかかってきた。

『来るロト！』

ドス黒いエネルギーを拳に纏うとズルズキンはシロン達にその拳を振りかざさした。

「グレッグル！【かわらわり】！！？」

「ピカチュウ！【アイアンテール】！！？」

それに対抗すべく、ピカチュウとグレッグルは同時にズルズキンの手刀を自分たちの技で受け止めた。だが、ズルズキンのパワーによって二体はそのまま地面へと叩きつけられてしまった。叩きつけられた二体は立ち上がると、ゆらゆらとふらつき始めた。ズルズキンの攻

撃に相当なダメージが入ってしまったからと思ったが、ピカチュウとグレッグルは千鳥足になっている様子からこれはダメージによるものではないと分かった。そう、二体は混乱状態に堕ちていたのだ。

「混乱してるー!」

「【いばる】でも使ってきたのか!?!?」

【いばる】ズルズキンが相手を混乱状態にさせる技があるならこの技があがるだろう。だが、この技は相手を混乱状態にするだけでなく、相手をイラつかせ闘争心露わにし、攻撃力までも上げてしまうというリスクもある技。だが見た所、二体の攻撃力は上がっている様子はない。【いばる】による技ではないのか。そんな事を考えている間に二体に向かってズルズキンは再度攻撃を仕掛けた。黒いオーラを纏わせた一撃を決めて来た。

「ピカチュウ!!!」

「グレッグル!!!」

「なんだあの技は!!!」

「ロトム!あのズルズキン、なんて技使ってるの?」

次々に繰り出す意図のわからないズルズキンの攻撃。リーリエの指示にロトムはズルズキンのデータからそれに該当する技を調べ始めた。だが…

『からない…』

「えっ?」

予想だにしない答えが返って来た。

『分からないロト!こんな事がありえるロトか!あのズルズキンが使っている技、どれもデータにないロト!!!』

「それって…一体」

そんな事にサトルとカノンも自身のポケモン図鑑でズルズキンを調べ始めた。確かにロトムと同様、二人のポケモン図鑑でもあのズルズキンが使ってきた技が一つも当てはまらないでいる。ありもしない事に理解が追いつかないでいる。そんなリーリエ達にズルズキンは容赦なく技を繰り出して行く。

「ム…ムツクル!お願いしますー!」

「クルツ!!?」

咄嗟に向かってくるズルズキンに格闘タイプと相性のいい飛行タイプ  
のムツクルをリーリエは空かさずモンスターボールから出した。

「シロン!」【ムーンフォース】!!?」

「ムツクル!」【つつく】!!?」

二体の効果は抜群の技がズルズキンに向かって放たれる。ズルズ  
キンはダメージを受けながらもムツクルに向かって飛びかかる。

「危ない!ムツクルが!」

「【かげぶんしん】で躲して下さい!」

いくつもの自分の分身がズルズキンの周りを包囲したが、ズルズキ  
ンは思いつき回転して、分身ごと拳でムツクルを薙ぎ払った。

「ムツクル!!!」

地面へと追撃したムツクルをリーリエは急いで抱きかかえる。さ  
らにズルズキンの指示の元、ズルツグ達の頭突きの嵐が巻き起こる。

『絶体絶命ロト!!!』

怒涛の攻撃を繰り返すズルツグに予想だにしない技を繰り出すズ  
ルズキンにリーリエ達は苦戦を申し立てられる。勝利を確信したズ  
ルズキンはリーリエ達を見下すようにして見ている。だけど、負ける  
わけにはいかない。残りポケモン達も場に出そうとモンスターボー  
ルをかかげると…

「ズキィィィィ!!!」

「えっ?なにになに?」

突然吹っ飛ばされたズルツグ達。その光景にズルズキンも目を丸  
くした。背後から何かの気配に気づいたリーリエ達は同時に振り返  
った。

「ピィにピッピ!」

「それにピクシーも!」

現れたのはズルツグ達の数に負けないぐらいのピィとピッピ。そ  
してピクシーだ。その中にはオツキミ山に行くまでに会ったピィと  
ピッピもいた。

どうやら、先ほどのピィとピッピが仲間を引き連れてリーリエ達に

加戦しにきたのだ。自分たちの生まれ育ったここオツキミ山を護ろうと戦ってくれているリーリエ達の姿に自分たちも勇気を貰ったのであるうか。リーダーであるピクシーの合図に一斉に魅惑的な鳴き声をズルズキン達に向かって発した。

「これは…」

『「チャームボイス」ロト!!!』

フェアリータイプの技「チャームボイス」その技にズルツグ達は次々と吹き飛ばされて行く。中には、ピクシー達に向かって頭突きを仕掛けようとするが、声の壁に阻まれてしまい、届く前に再度吹き飛ばされてしまっていた。

それに効果は抜群の技だ。ズルツグ達には相当なダメージが入る。倒れて行く仲間たちを見ながら、どうする事も出来ないとズルツグ達は一目散に逃げ出して行った。

「やったあ!!!」

「いやまだだー」

喜ぶのはまだ早い。タケシの言った通りまだ一体のポケモンがまだリーリエ達の前に立ちはだかっていた。

「ズルズキンがまだ…」

「ズーキイイイイイイン!!!」

「リーリエ! 危ない!!!」

仲間を失ったズルズキンは自分のいま目の前にいるリーリエに向かって攻撃を仕掛けた。その攻撃を防ごうとムツクルはズルズキンに体当たりした。

「ムツクル!!!」

ムツクルは天井へと高く舞い上がるのと同時に

「クルウウウウ!!!」

ムツクルは洞窟内に響き渡るほどの鳴き声をあげた。そして!

「あっ!!!」

眩い光に包まれると、ムツクルは新たな姿。そして力を授かろうとしていた。一回り大きくなったそのポケモンは再び鳴き声を洞窟内に響き渡らせた。

『ムクバード むくどりポケモン

ノーマル・飛行タイプ

ムツクルの進化系。大きなグループを作って行動する習性がある。  
森や草原を飛び回る』

「進化…ムクバード!!!」

進化と同時にムクバードは両翼を前に出し、威嚇し始めた。突然の進化にズルズキンも少しばかり戸惑い、焦り始めているように見えた。その感情を振り払おうと、ズルズキンはムクバードに向かって飛びかかった。

ムクバードへと向かってくるズルズキンを前にリーリエは冷静にムクバードに指示を出す。その意図を察したムクバードもじつとズルズキンの方を見ながらリーリエの指示を待っていた。

「ムクバードー！「つばめがえし」です!!？」

ここに来るまでずっと練習していた技。ムクバードは目にも止まらね速さで急降下すると、一気に口に風のエネルギーを貯め込みながらズルズキンの方へと攻撃を仕掛けた。ムクバードが煙のように消えたように見えたズルズキンは体勢を崩し、もう相手を見下す余裕などもすつかり無くなっていた。

「ムツクバアアアア!!!」

「ズキイイイイ!!!」

ムクバードの「つばめがえし」がズルズキンの腹部辺りに決まった。  
「決まった!!!」



『効果は抜群ロト!!』

そのままズルズキンは後ろに聳え立つ岩山に思いつき叩きつけられた。

「ズツ…ズ…キン…」

流石に蓄積されたダメージが悲鳴を上げてきたようだ。一度は立ち上がるが、そのままふらつき始めると岩山を背にそのまま座り込んでしまった。ズルズキンからもう戦う力が残っていないと分かった。リーリエはすぐに空のモンスターボールをバックから取り出した。

「お願いいたします。モンスターボール!」

開閉スイッチが開き、ズルズキンはモンスターボールの中へと吸い込まれていった。完全にモンスターボールが閉まるまでのカウントダウンが始まる。ここまでの受けたダメージは大きい。出てこられたら真面に戦える体力がまだ残っているか難しい。そのまま収まってくれるか祈るしかない。そして…

カッチ!!?

祈りが通じた。完全に閉まった音が洞窟内に響いた。ズルズキンの捕獲に成功したのだ。

「や…やりました〜」

「やった〜」

無事にズルズキンをモンスターボールに収めたる事が出来た。緊張が解け、脱力感が一気に出てきたリーリエ達はその場に崩れ落ちてしまった。

そして、ポケモン達を早くポケモンセンターへと連れて行くべく、リーリエ達は下山した。

~~~~~

「ご協力ありがとうございました!これで本来オツキミ山に生息しているポケモン達もこれで元の日常に戻れたはずです」

「いえ…」

ズルズキンの捕獲の成功をジュンサーに伝えた後、回復を終えたポケモン達を受け取りにジョーイの元へと向かった。ズルズキンに結

構なダメージを負わされたピカチュウとグレッグルもすぐに元気になるほど、シロン達は元気になっていた。

「みんな大した怪我を負っていなくてよかったです」

「うん！」

「ピッ!!!」

足元から聞こえた声に反応してリーリエとカノンはふと足元に視線を向けると、オツキミ山付近で出会ったあの時のピイとピツピがいた。

「あれ？この子達って…」

「あの時のピイだな」

それに気づいたサトルとタケシもリーリエとカノンの元へと駆け寄った。すると、ピイはリーリエのスカートの裾を軽く引つ張ると今度はピツピが手をこちらに招く動作を行なった。その後、二体はポケモンセンターの入り口付近で足を止めると、もう一度リーリエ達の方へと振り向いた。

「ついてきてと言ってるのでしょうか？」

リーリエ達はピイとピツピの跡を追うことにした。ピイとピツピに連れられてオツキミ山の中へと入って行く。暫くして、中を歩いて行くと一つの大きな空間へと辿り着いた。

「これって…」

その中心に人一倍に大きな岩石が添えられていた。過去にここを訪れたことがあるタケシはその岩石が何なのかはすぐに分かった。

「これは月の石だ」

「月の石!?」

「それじゃあ、ここがおつきみ広場って言われる所なのか」

「ああ…ここでピツピ達はこの月の石の周りを輪になって神様を祈る踊りを始めるんだ」

タケシの説明通りピツピ達は月の石の周りで踊り始めた。満月の光がスポットライトのようにピツピ達と月の石を照らし始めると、その光に反応して月の石もより光輝き始めてきた。神秘的なダンスと月の光の神々しさにリーリエ達は見惚れてしまった。

「綺麗!!」

『データアップロードト!』

「こんな光景に出会えるなんて!わたくし、とても感動しています」

「僕たちにお礼をしているのかな…」

「きつと、そうだろうな」

~~~~~

ピッピ達の神秘的なオツキミ山での夜が明け、リーリエ達はポケモンセンターで出発の準備を整えていた。

「ズルズキンはばっちり回復していますよ」

「ありがとうございます!ジョーイさん!」

治療のほかにくつかの生体検査を行なったズルズキンはシロン達よりも一足遅くにジョーイから受け取った。

「それで、そのズルズキンはどうするの?」

「預けようにもジュンサーさんもないよね」

受け取ったのはいいが、すでにジュンサーはポケモンセンターを跡にしていた。てっきり保護施設へと預けられると思っていたのだがこの場合、ズルズキンをゲットしたのはリーリエとなるため、ズルズキンの主人はリーリエとなる。よって

「ゲットして貰いたかったから、このまま連れて行くのもありじゃないか?」

タケシの一言により決まった。ズルズキンは正式にリーリエの手持ちに加えることにしたのだ。

「そうですね!出て来てください!」

「ズキイ…」

モンスターボールから出たズルズキンは受けた傷も癒えてすっかり体力も回復していた。だが出てきたのはいいが、主人となるリーリエに背を向けてはうっすらとこちらを睨みつけているだけで、無愛想だ。

「あの…ズルズキン!今日から貴方はわたくし達の仲間です。これか

「宜しくお願いしますね！」

「コ…ン」

「ムクバー!!?」

「キャモ…」

「ココツ!!?」

戸惑いながらも返事をするシロンとキモリ。逆に新たな仲間が増えて喜んでいるムクバードとコイキング。反応はそれぞれ違うが皆はズルズキンを歓迎しているようだ。リーリエもズルズキンと握手しようと手を差し伸べる。

「ズキィー！」

「あれ?」

だが、ズルズキンはその手を握ろうともせず再びリーリエに背を向けてしまった。その態度にシロンは困り、キモリは苛立ちを立てていた。ムクバードとコイキングも啞然とした表情を浮かべていた。そんな四匹にリーリエも苦笑いで返した。ズルズキンの様子を見たタケシは優しくリーリエに語りかける。

「旅を通してこれから仲良くなって行けばいいさあ」

「そうですねーみんな戻ってくださいー！」

リーリエはシロンを残してキモリ達をモンスターボールに戻すと、ポケモンセンターを出て行った。このまま行けば、今日の昼時には着くであろう。次のジム戦のことを考えながらリーリエ達はハナダシティに向かっていく。

「ピッ!!!」

すると突然、ピイの鳴き声に気づいたリーリエ達はオツキミ山の方へと目を向けた。そこにはピイとピツピ、ピクシー達がリーリエ達に手を振っていた。

「ズルー!!!」

さらにはあれほど暴れていたズルツグ達も穏やかなそうにリーリエ達に手を振っていた。どうやら、ズルツグ達はそのままオツキミ山に居座るつもりでいるようだ。だが、笑顔を向けて手を振っているその表情からはもう昨日みたいな闘争心を先立っていなかった。これ

からはピツピ達と仲良く暮らしていくのであろう。

「さようなら！」

「ズルツグ達もみんなと仲良くするのよ！」

オツキミ山のポケモン達と別れを告げたリーリエ達は次の街ハナダシティに向かって出発した。二個目のバッジがリーリエ達を待っている。

「そういえば、リーリエ？」

「はい？」

「ズルズキンと対峙した時、リーリエなんか言いかけたことあったよね？あの時、何があったの？」

「それが……。今朝はもう見えてなかったのですが、昨日のズルズキンからは少し霧のような物が見えたのです」

「霧？」

「あれ…みなさんは気づきませんでしたか？」

「いや…僕たちには何も」

「何が見えたんだ？」

「それが…」

「黒い…オーラのようなものなんです」

## 第十九話 神秘の町

「着いたぞー！ハナダシティだ！」

ハナダは水色。神秘の色。花咲く水の街

リーリエ達は二つ目のジムがあるハナダシティに到着した。水の街だけにあつて、ハナダシティにはいくつかの噴水広場が設備されている。その水しぶきによって生み出されたマイナスイオンが大きな効果を発揮しており、街全体がとても澄んでいる。

そのおかげなのか、長旅の疲れが一気に解けた感じがした。

「くっく！！旅の疲れの一杯に効くねえ〜」

「なんだか叔父さんっぽいですよ。カノン」

ポケモンセンターに到着後、サイコソーダーを飲みながらロビーでくつろいでいると、バトル施設の方では多くのトレーナーが集まっていた。

リーリエ達もその中に入っていくと、思った通りだ。カメールとドクケイルによるポケモンバトルが行われていた。

「ドクケイル！【サイケこうせん】だ！！？」

「ドツケツ！！？」

「押し返せカメール！【みずてっぽう】！！？」

「カメツ！！？」

色鮮やかに光り輝く光線と水鉄砲がぶつかり合う。辺りを爆煙がフィールドを覆うと、それに紛れてカメールはドクケイルの後ろに周った。

「今だ！【みずのはどう】！！？」

カメールの【みずのはどう】が決まるとドクケイルは水の球体へと吸い込まれていった。さらに水の振動によって大きく頭を震わされてしまったドクケイルはその反動のせいで混乱状態になってしまった。

「とどめの【ロケットずつき】だ！！？」

「カメエ!!?」

カメールは自分の頭を甲羅の中へと引っ込めると、照準をドクケイルに合わせた。貯めたパワー頭部に込めて、そのままドクケイルに向かって突進した。

混乱状態により自分のトレーナーからの回避の指示に反応せず、そのままカメールの「ロケットずつき」がドクケイルに決まった。この攻撃によりドクケイルは戦闘不能となった。

「よっしゃああ!!!これで十連勝!」

「カメエ!!?」

勝負が決まりカメールは自分の主人とハイタッチを交わした。その後、ドクケイルのトレーナーと含めて、二人のトレーナーの健闘を讃えるかのように周りの人達から拍手が巻き起こった。

「なかなかいいバトルだったな」

「はい。カメールとの息もぴったり合っていました」

そのバトルにリーリエもタケシも拍手を交わした。そんな中、驚いたように目を丸くしてカメールのトレーナーを見ていたカノンとサトルは一斉になって声をあげた。

「ソーちゃん!!」

「ソー…ちゃん?」

すると、自分を呼ぶ声があったのか。カメールのトレーナーは周りを見渡した。

そして、カノンとサトルと目が合うとそのトレーナーはサトルとカノンに手を振った。

「おお!サトル!カノン!」

~~~~~



「いや〜こんな所で会うとはなあ！どうだったよ！俺の華麗なるバトルは!!」

「うん。流石はソーちゃんだったって感じだった」  
「んだよ！その感じって！」

ソウタと名乗るオールバックにした金髪が特徴のカメールを連れ、たそのトレーナーはどうやらカノンとサトルの知り合いのようだ。

リーリエとタケシに目をやると、ソウタは親指で自分を指しながら自己紹介を始めた。

「そういや、自己紹介してなかったな。俺はマサラタウンのソウタ！サトルとカノンとはポケモンスクールの同期なんだ！」

「そうだったんですね。初めましてわたくしはリーリエと申します」

『僕はロトム。どうもよろしく』

「うお！これポケモン図鑑かよ！おもしろ〜」

「俺はタケシだ。君のことは弟から聞いてるよ」

「弟？」

「新人ながら手強いチャレンジャーだったてな。俺の弟はニビジムのジムリーダーなんだ」

「ああ、ジロウさんか！」

初対面であったが、ソウタの人見知りのない性格につられてリーリエとタケシは自然に彼と話すことができた。互いの自己紹介を終えてソウタはシロンを見つけると、研究所で初めて会った時のカノンと同じように目を輝かせ始めた。

「こいつはリーリエのロコンか!?？色違いなんて初めてみたぜ！」

シロンをロコンの色違いと勘違いしたソウタにサトルは訂正を行なった。

「違うよソーちゃん。リーリエはアローラ地方出身でね。このロコンはリージュンフォームで変化した氷タイプのロコンだよ」

「へえ〜そうなのか。初めて知ったぜ！流石はサトルだな！」

「いや…授業で習ったじゃん…」

このやり取りも研究所であったような…

そんなことを思いながらリーリエはソウタが連れている二体のポケモンに目をやった。

「クチー!!?」

「カメツ!!?」

リーリエと目が合った二体のポケモンは元気よくリーリエに挨拶を交わした。

「クチートに……こちらのポケモンはカメールですね」

『そうロト!』

さっそく、ロトムは二体の写真を撮るとデータに保存した。

『クチート あざむきポケモン

鋼・フェアリータイプ

鋼のツノが変形した大きな顎を持つ。大人しそうな顔に油断していると、突然振り向きバクリと噛みつかれるので要注意』

そうロトムはクチートに近づきながら解説を行っている……

バツク!!!

『ロトオオオオオ!!!』

凶鑑解説の通り、ロトムはクチートの顎に思いつきり噛み付かれたのであった。

「悪い！悪い！これが俺のクチートの挨拶なんだわ！」

「とてもワイルドな挨拶ですね……」

「コン……」

「もうソーちゃん！リーリエのポケモン凶鑑なんだから壊れたらどうするのよ！」

「カノン。そこは……ロトムの心配をしようよ」

暫くして、クチートの顎から解放されたロトムはふらつきながらもカメールの解説を行なった。

『カメール かめポケモン』

水タイプ

ゼニガメの進化系。フサフサの尻尾は長生きのシンボルと言われている。甲羅の傷は強者の証』

カメールの解説を終えたロトムにリーリエはお疲れ様と声をかけ

ると同時に…

「ゼンガメの…進化系」

「オーキド研究所の頃を思い出した。」

「オーキド博士。たしかカントーの新人用ポケモンはあと水タイプのゼンガメがいると思うのですが…」

「実はのう。カノンちゃんとサトルくんが来る前にもう一人の新人トリーリエが先に研究所を訪れたんじや。それで早く旅に出たいと言うから先に選ばしてしまっただんじや」

「あ…あの時の言葉を思い出したリーリエはカノンとサトルに目をやった」

「あつ！もしかして研究所でカノンとサトルが言っていた人というのは…」

「そのまさかだよ!!」

「ん？何がだ」

リーリエの一言をきっかけに何かを思い出したようにカノンとサトルはソウタに迫った。

「そうだよ思い出した！ソーちゃん！なんで私達が研究所に着く前に勝手にポケモンを選んで行っちゃうのかな！」

「何だよ、俺は悪くねえだろ！そもそも約束の時間になっても来なかったお前らが悪い！」

「ちなみにソーちゃんは何時に行ったの？」

「んなこと決まってるじゃねえか、サトル！朝一番に行くって約束したんだから、日が昇ったのと同時にだわ！」

「………」

オーキド博士が少し困り果てていた理由がなんとなく分かった気がした。

「ところでお前らバッジはどれぐらい集まったんだ？」

話は急が変わってソウタはジム巡りの話題へと持ってきた。実はソウタもリーリエ達と同じようにジム巡りの旅をしているのだ。

「私達、研究所からずっと一緒に旅してたから私とサトルとリーリエは同じでバッジは今の所まだ一つよ」

「そうか！そうか！まだ一つか〜♪」

三人のバッジの数を聞いたソウタは腕を組むと、高らかに笑い出した。それと一緒にクチートとカメールもソウタと同じように笑い出した。その姿に少しカノンはムツとした

「そういうソーちゃんは何個ゲットしたのよ…」

イジケながらもソウタにも同じ質問を返すと、ソウタは自分のバッジケースを取り出した。

「俺はぎつとこんな所だな」

自慢げにバッジケースを開くと、そこにはニビジムのグレーバッジと今からリーリエ達が挑戦するハナダジムのブルーバッジ。その他にも二個のバッジが光り輝いていた。

「ええ!!もう四つも揃えたの!!」

「旅に出たの僕らとは一日違いだったよね」

「なのに、もうこんなに集めたのですか!」

「まあな!こんぐらいは最強トレーナーの俺としては朝飯前よ!」

短期間で四つのバッジを獲得したソウタにリーリエ達は目を見開きばなしだ。するといくつかのバッジを見たタケシはある疑問をソウタに問いかけた。

「見た所ハナダジムのブルーバッジは持っているみたいだが、何でまたハナダシティに?」

ハナダジムのバッジを獲得したのであれば、次の街へと向かっていくのであろうが、それでもハナダシティにいるソウタに不思議に思っただのだ。その質問にソウタはこう答えた。

「それがよ!オツキミ山にももの凄い強いポケモンが現れたと聞いてよ!カントーリーグで優勝するためにも是非ともそいつを手持ちに加えたいなあと思っつてな。ハナダシティに戻ってきたんだよ!」

ソウタが言っていることに即座にサトルは口を開いた。

「ソウちゃん。それがそのポケモン…もうリーリエがゲットしちゃったんだよね」

「はああ!!!マジかよ!!!」

「え…ええ」

ソウタが言っているオツキミ山に現れた強いポケモン。間違いなく以前リーリエがゲットしたズルズキンのことだ。

「何だよ。先越されちまつたのか」

悔しそうにソウタは頭を抱えると…

「じゃあ!仕方ないか!」

「切り替え早っ!!!」

瞬時に切り替えては、リーリエの前に自身のモンスターボールを突き出した。

「だったらリーリエ!俺とバトルしようぜ!」

「バトルですか!?!」

「もちろん!リーリエが使うのはそのオツキミ山でゲットしたポケモンなあ!俺はクチートで行くわ」

いきなりのバトルの申し立てに驚くリーリエにサトルは慌てて口を開いた。

「ちよつとソーちゃん!僕らはハナダシテイに着いたばかりだし、リーリエも疲れてるだろうだからさあ」

リーリエの体調を気遣ってソウタに注意するサトルにリーリエは「いいえ。わたくしなら大丈夫ですよ」

サトルに軽く合図を交わすと、自分のモンスターボールを手にとった。

「おお!話が分かる。じゃあ、早速バトルだ!!!」

「はい!」

ソウタの強引な性格に引っ張られて、一同はもう一度バトル施設へと向かって行くのであった。

~~~~~

「審判は俺がやろう」

審判役にはジムリーダーの経験があつたタケシが務むことにした。

「気合い入れて行くぞ。クチート！」

「クチイ!!?」

ソウタの掛け声と共にクチートはバトルフィールドに踏み入れると、角をリーリエに向かって突き出した。凶鑑解説通りの鋼の顎がバツクリと大きく開き始めた。

ちなみにクチートはトレーナズスクールの頃から一緒にいたソウタの一番の相棒だ。

そのクチートの闘志にリーリエも勢いよくモンスターボールをフィールドへと投げ入れた。そしてモンスターボールからは中腰姿勢でクチートを睨みつけているズルズキンが飛び出した。

「お願いいたしますね。ズルズキン！」

「ズキイ…」

「ズルズキンか。強そうだな。頑張ろぜクチート！」

「クチイ!!?」

「それではバトル始め！」

タケシの開始の合図と同時にクチートは大きく腕を振り回し始めた。

「こつちから行くぜ!クチート!【ようせいのかぜ】だ!!?」

「クチイ!!?」

クチートはそのまま回していた腕を前の方へと振ると、それにより薄桃色に輝く突風を生み出すとズルズキンに向かって放った。

「ズルズキン!躲して【からてチョップ】です!!?」

【ようせいのかぜ】はズルズキンには効果は抜群である。ここは攻撃を受けないようにリーリエは回避の指示をズルズキンに出したのだが…

「……………」

「どうしたのですか。ズルズキン!躲して下さい!」

声は届いてるはずなのだが、ズルズキンはその場から動こうともし

なかった。

それどころか、ズルズキンはリーリエの指示とは別に両手の平を合わせる黒い渦の様なものを形成しだした。「あくのはどう」だ。その技を「ようせいのかぜ」に向かつて放つとそのまま相殺させてしまった。打ち消されてしまったことに驚くクチートにズルズキンは薄っすらと笑みを浮かべた。

リーリエはというと自分の指示とは違った行動を取ったズルズキンに動揺してしまった。

「ようせいのかぜ」を打ち消しちゃった」

「だけど…リーリエは躲せてって指示をしたんだよね…」

「……………」

その感じは二人のバトルを見ていたカノンとサトル…そしてタケシにも伝わっていた。

「やるな、だったらこれでどうだ！【かみつく】!!?」

「ズルズキン！もう一度躲してから【からてチョップ】です!!?」

「ズキツ!!?」

今度は指示通りにズルズキンは手刀の体勢を取ったのだが、リーリエの指示を無視して躲さずにクチートの攻撃を真っ向から受けたのだ。

「ズ…ズルズキン!!?」

何処ともない嫌な感じ、それはだんだんと確信へと変わって行く。

ズルズキンはリーリエの言うことを聞くつもりがない。そのズルズキンはまた指示とは別に勢いよくジャンプすると勝手に次の攻撃へと切り替えた。空中へと飛び出したズルズキンはそのままクチートに向かつて膝蹴りを仕掛けた。

「躲せー」

ソウタの指示にクチートはギリギリの所でズルズキンの攻撃を躲した。

「ズ…キーン…」

攻撃を躲されたズルズキンはそのまま地面に自分の膝を強く打ち付けてしまった。クチートにダメージを喰らわせるのとは逆にズル



ズキンには大きなダメージが躲された代償として受けてしまった。

「ズルズキンにダメージが！」

「今のは【とびひざげり】だと思うよ。あの技は躲されると逆に自分にダメージが跳ね返ってきてしまうリスクがある技なんだ」

サトルの解説の通りズルズキンは自分の膝を両手で押さえつける。痛みが緩和した所でズルズキンはクチートに対して怒りの感情を表した。

怒り狂ったズルズキンは「あくのはどう」をクチートではなく四方八方に打ち続けた。いきなりのズルズキンの暴走にバトルをどころでは無くなってしまうた。

「ズルズキン落ち着いて下さいーきゃあつ!!!」

バトルが始まった時からリーリエの指示を聞こうとしなかったが、今は完全にリーリエどころか誰からの声も聞こえていないようだ。

「戻って下さいー！」

止むを得ず、リーリエはズルズキンをモンスターボールへと戻した。騒動が収まりリーリエはその場に崩れ落ちてしまった。その様子にカノン達はリーリエの元へと急いで駆け寄った。

「大丈夫ー！リーリエ？」

「はい…わたくしは大丈夫です。皆さんはお怪我はありませんでしたか？」

「俺たちは大丈夫だ」

「何だ何だ。ズルズキンはどうしたんだよ？勝手に暴れて？」

「それが…わたくしにも何が何だか…」

突然のことに頭の中を整理しきれないでいる。だが、分かっているとおればズルズキンはリーリエの言う事を全く聞いてないことだ。そんなズルズキンのモンスターボールを不安気に見ていたリーリエにタケシは口を重たそうに開いた。

「リーリエ。モンスターボールは野生のポケモンを捕獲するための道具であって、ゲットしたポケモンを強制的に言う事を聞かせるような道具ではない。ゲットされてもそのトレーナーの実力を認めない。そういう考えを持つポケモンがいても珍しいことではないんだ」

「そ…そうなんですな」

野生のポケモンがゲットされるといふのはそのトレーナーの実力をポケモン自身が認めた証でもあるとも言われている。戦いを通してそのトレーナーの実力や根性を測るポケモンもいるそうで、稀にツタージャのようなにトレーナーの実力に見切りをつける、自分からそのトレーナーを捨ててしまうポケモンもいるぐらいなのだ。

それからリーリエはズルズキンのモンスターボールへと視線を落とすとそのまま塞ぎ込んでしまった。ズルズキンとの間にある大きな壁があるような感じもしてしまい、どうしたらいいのかも分からない。

「なくに！…これからズルズキンと仲良くしていけばいいさ！焦る必要は無いんじゃないか？」

「そうそう♪ソーちゃんの言う通りだよリーリエ！こういう時こそがんばりリーリエだよ」

「くつす!!？そのフレーズも久々に聞きましたよ！」

「そうですね」

ソウタとカノンの声に励まされてリーリエはゆっくりと顔を上にあげた。

「そうと決まれば、ポケモン達を一度ジョーイさんに診てもらってから、ジムに行こうぜ！お前らのジム戦も見たいいな！」

そう言う四人はポケモンセンターへと入っていた。

シロンやコイキングのように自らリーリエを主人として認めてくれたポケモンもいれば、ムクバードのようにバトルを通して絆を深めたり、元は別のトレーナーのポケモンであったキモリがリーリエを慕うようにポケモン達にもいろいろな想いを持ちながらトレーナーについて行っていることを尊重しないといけない大切さを改めて知ることが出来た。

まだズルズキンとも出会ってから日が浅い。まだお互いに知らないことばかりであるが、いつかズルズキンとも心を通わせることを願いながらリーリエはズルズキンのモンスターボールをバックの中へ

と閉まうと四人の跡を追ってポケモンセンターへと入って行った。

~~~~~

ポケモン達の回復を済んだリーリエ達はソウタを先頭にしていよいよハナダジムへと向かった。

「いいか！ハナダジムは水タイプのジムだ。しかも、フィールドは水のフィールド。足場は水に浮かぶ円にかいた浮島だけでとても不安定だ。水系ポケモンと空中戦を得意とするポケモンがいた方が戦いやすいかもな！」

「てっ、いつから先輩になった気分でのよ」

「まあ、経験者の言葉は信憑性があるし心強いけどね」

不思議なことに楽しい会話をしているとあつという間に目的地に着いてしまうものだ。気づくとリーリエ達は大きなジュゴンのイラストが貼られている施設へと辿り着いていた。

ここが目的地であるハナダジムだ。

「なんかニビジムと違ってジムって感じじゃないよね」

「ハナダジムはジムと水中バレーショーと兼用しているからな。ジムのバトルフィールドは時々、水中ショーとして使われることもあるんだよ」

その水族館みたいな外見に本当にジムなのかと少し首を傾げたサトルにタケシは説明を加えた。

一同はジムの中へと入ると、すぐ目の前には大きな水槽が貼られていた。流石は水ポケモンのジムだけのことはあって、各地方のいろいろな水系ポケモンが泳いでいた。その光景にロトムはたくさんのデータが得られると言って、ハナダジムの水ポケモン達にカメラを回すとその情報を収集していった。

「あら、いらっしやい。ハナダジムへようこそ」

水ポケモン達に見惚れているリーリエ達に向かって一人の女性が近づいて来た。黄色のロングヘアをしたお嬢様気質の女性にタケシは一瞬にして前へと腰掛けた。

「お久しぶりです！サクラさん!!!」

「あら、タケシくん！」

「北風のスイクンの様にやって参りました！この再開の喜びを共に分かち合いましょ…」

ズシユユユン!!!

「しびれびれ」

「ケツケケケケ♪」

「タケシさんって面白い人だな！」

「うん…そうだね」

この光景にソウタを除く三人はもう見飽きていた。引きずられて行くタケシを後に代表としてリーリエはサクラに挨拶をした。

「こんにちは。わたくし達はハナダジムに挑戦しに参りました。サクラさんがジムリーダーでしょうか？」

リーリエの言葉にサクラは笑顔で返事を返した。

「いいえ、ここのジムリーダーは私の一番下の妹のカスミなのよ。でも、ごめんなさい。今日はチャレンジャーが三人もいらつしやったから、いま戦っている人で今日は閉めちゃうと思うの……」

申し訳なきように謝る様子からリーリエ達は日を改めて出直すことを告げると、そんな四人を慌てて引き止めるようにしてサクラは一つの提案を述べた。

「折角来て頂いたのに悪いわ……」

「そうだ！ だったら、バトルの見学でもしていかない!?？」

「えっ…それは……」

「大丈夫よ！ バレないように上のサイドステージから覗けば！ 行きましょう！」

「あ…あのー！」

呼び止めるリーリエ達の声を聞かずにサクラは手招きしながらバトルフィールドへと案内し始めた。

「なんか自由な人だね」

カノンの言葉に一同は賛同しながらもサクラの後を追いかけていった。

~~~~~

サクラに連れられてリーリエ達はバトルフィールドを全体的に見渡せるサイドステージへと案内された。

ハナダジムはソウタの言った通り、水系ポケモン達が戦いやすい水のフィールドとなっていた。そして、ジムリーダーサイドには自称おてんば人魚の如、カスミが立っていた。そしてカスミを見つめるチャレンジャーサイドには一人のトレーナーが立っていた。オレンジ色のショートカットにサングラスを被せたその少女は一礼するとすぐに集中モードへと切り替えていた。

「これより、ジムリーダーカスミとチャレンジャーノゾミとのハナダジム、ジム戦を始めます。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンが全て戦闘不能になりますと、バトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。それでは始め!!!」

「出て来てー！マイイスステディ!!!」

審判による開始の合図により、カスミはモンスターボールからポケモンを繰り出した。ニビジムと同様、ジムリーダーから先にポケモンを繰り出すところは同じのようだ。

「タツツ!!?」

カスミが一番手に繰り出したのは元からカントーに生息していた水系ポケモンのタツツだ。

《観戦席》

『タツツー ドラゴンポケモン

水タイプ

サンゴの陰を住処にしている。危険が迫ると墨を吐いて逃げる。背中のヒレを上手く使って前を向いたままでも前後左右に移動することができる』

ロトムの図鑑解説が終わると、

「……」

「タケシ!!?どうかしたのですか?」

タケシの驚いた表情にリーリエはタケシに問いかけた。

「ああ、それが……」

リーリエの呼びかけに反応したタケシは質問に答えようとしたのだが、チャレンジャーの呼び声とともにモンスターボールがフィールドへと放たれたのを知り、フィールドの方へと目をやってしまった。

《ジム戦》

「行っけー！ニアルマー!!!」

「ニアルマー!!?」

チャレンジャーが繰り出したのはニアルマーというハウエン地方で確認されたポケモンだ。

ニアルマーは尻尾をスプリングのようにして着地すると、その反動

を利用して空中へと大きくジャンプした。ジムのライトがスポットライトのようにニヤルマーを光り輝かせていた。

《観戦席》

「ニヤルマーだ！」

「わたくし初めて見ました」

初めて目にしたポケモンにリーリエはロトムにニヤルマーの解説を求めた。

『ニヤルマー　ねこかぶりポケモン

ノーマルタイプ

気に入らないと爪を立てるが、たまに喉を鳴らして甘える性格が一部で大人気だ。尻尾で新体操のリボンのような美しい動きを見せる』  
図鑑解説の通りによるとニヤルマーの最大の武器は尻尾にあるであろう。今から始まるバトルに胸を高鳴らせているが、タケシの言いかけた事を思い出したリーリエはもう一度タケシの方へと振り向いた。

「タケシはあのチャレンジャーの方をご存知なのですか？」

「ああ、シンオウ地方を旅していた時に知り合ったんだ」

そう続けると、タケシは眉間にしわを寄せながら、顎に手を置くと難しそうな表情を浮かべていた。

「だけど、なぜトップコーディネーターのノゾミがカントー地方に来てジム戦をやっているんだ？」

「トップコーディネーター？それってポケモンコンテストのことなの？」

ポケモン：コンテスト？　トップコーディネイ：ネーター？

聞いたことがない単語に首をかしげるが、これから始まるバトルから少しでもジムリーダー対策に繋がるヒントを探ろうと、リーリエは疑問に思いながらもバトルフィールドに再び目を向けた。

《ジム戦》

ここでおさらいしてみると、ソウタの言った通り水のフィールドで

水系以外のポケモンは数カ所にある浮島を足場変わりにして戦わなければならぬ。こうなれば、水系を得意とするジムリーダーの方が有利とも見えるし、チャレンジャーには厳しすぎるとも思える。このバトルではよりチャレンジャーは判断力が勝負の鍵になるとも言えるよ。

「ニアルマー！・【シャドークロー】！！？」

「ニアルル！！？」

先制したのはチャレンジャーだ。ニアルマーは自身の自慢の爪に黒い影を纏わせる。さらにその影は大きくなり爪を形成させると高く飛び上がっては急降下でタツツー目掛けて突進した。

「タツツー！・墨で体を隠して！！？」

「タツツツ！！？」

タツツーは寸前のところで水面に潜ると墨を名一杯に放った。これは「えんまく」による技ではなくタツツーが持つ本来の性質である。う。

ニアルマーはタツツーの姿を見失うと、攻撃の手を辞めては浮島へと着地した。無用に攻撃をして外してしまうと相手の攻撃の糸口を誘ってしまうからというニアルマーの独自の判断だ。

「もう一度飛べ！ニアルマー！」

ニアルマーは凶鑑明記に記された通りに尻尾を使って、天井に向かってジャンプした。鳥ポケモンに負けないほどの頭上まで上がったニアルマーは再び爪を立てた。

「水面に【シャドークロー】！！？」

「ニアル！！？」

今度は水面に向かって思いっきり【シャドークロー】をぶつけた。その衝撃により生み出された波は他の波とぶつかり合い、荒々しく水面を揺さぶり始めた。その波に押し出されたタツツーは水面から顔を出した。強く押し出される波に身動きが取れていない。大きく揺れる波に飲まれているタツツーに次の攻撃を加えることは難しいが、水を通すこの技には関係がなかった。

「【10万ボルト】！！？」



水は電気を通す。水面深くまで潜られると効果はあまり期待できないが、水面近くまで上がってきたのであれば水系のタツツーにはダメージを与えることができる。一面に帯びた電撃はタツツーに向かって走り出す。

「タツツー！飛んで！」

カスミの発言にチャレンジャーもリーリエ達も驚いた。タツツーが飛ぶ!??そんなことが…

タツツーは押し寄せる波に踏ん張りながらも、下に向かって口から水を放射すると、ジェット機のように上へと飛んだ。波から解放されたタツツーは同時に「10万ボルト」も躲すことにも成功した。

「ねっとう」よ!!?」

「タツツ!!?」

タツツーはそのまま熱湯をニヤルマーの頭上へと放たれた。上から一気に降り注ぐ熱湯は水中スクリーンのように範囲を広げては足場が不安定なニヤルマーに降りかかった。

「ニヤル!!」

熱湯を浴びてしまったニヤルマーはそのまま追加効果で火傷を負ってしまった。これによりニヤルマーの物理攻撃は大幅に下がってしまった。

「続けて【バブルこうせん】!!?」

そんなニヤルマーに容赦なく次の攻撃が降りかかる。だが、チャレンジャーは一ミリも焦りを見せずにすぐに対処へと向かった。

「ニヤルマー！尻尾を使うんだ!!?」

ニヤルマーはスプリングラーのような尻尾を回し始めると、無数に打ち出された【バブルこうせん】を次々に絡め取って行った。この状況にカスミは思わず驚いてしまった。

「そのまま投げ返せ!!」

「【バブルこうせん】!!?」

絡め取られたタツツーの技をニヤルマーは投げ返す。タツツーは続けて【バブルこうせん】を放つとニヤルマーが飛ばした【バブルこうせん】をかつ消した。流れを自分に向けるためにカスミはすぐに指

示を出す。

「きあいだめ」!!?」

パワーを集中し始めたタツツーを見てチャレンジャーは急いでニヤルマーに指示を出す。

「ニヤルマー!」【シャドークロー】!!?」

すぐにニヤルマーは攻撃を仕掛けたのだが火傷状態なため思う以上にパワーを発揮できていなかった。

「タツツー!」【バブルこうせん】!!?」

ニヤルマーの攻撃は次のタツツーの攻撃を防ぐことが出来なかった。

「ニヤルル!!!」

「ニヤルマー!!!」

タツツーの攻撃に吹き飛ばされたニヤルマーはその場で倒れてしまった。

「ニヤルマー戦闘不能。タツツーの勝ち」

《観戦席》

「おお!」【きあいだめ】で攻撃を急所に当てやすくしたうえでの攻撃か。こりや、効いただろうな」

「だが…それだけではない」

熱が入ったソウタの言葉にタケシが付け加える。

「おそらくカスミのタツツーの特性は《スナイパー》だろうな。急所に当てた技の威力をさらに上げる特性なんだ。これにより【きあいだめ】と特性の効果で急所に当たった【バブルこうせん】の威力がさらに高まったんだ」

「つまり、いまの攻撃は補助技と特性の効果によるコンボなのですね!」

「そんなところだ!」

リーリエとタケシの解説に三人も納得した表情を浮かべた。何よりも技だけでなくポケモンの性質も上手く活用した二人のバトルセンスにジムリーダーだけでなくチャレンジャーの方の方も上級トレーナーであるとリーリエ達は感じた。

《ジム戦》

「ご苦労だったね。ニヤルマー」

戦闘不能になったニヤルマーを戻すと、焦り始めたのか。少し表情が曇ってきてしまっていた。

これが…ポケモンジムバトル

コンテストバトルみたいには行かないか…

何よりもニヤルマーはノゾミの一番の相棒だ。パートナーノゾミのチームの中でも数々の試練を乗り越えてきた猛者でもある。ニヤルマーを先発に出して流れをこちら側に向けようとしたのだが、そう上手くは行かなかったみたいだ。

ノゾミはいったん落ち着きを取り戻すためにここカントー地方に訪れる前にジム巡りの提案を進めてくれた先輩とのやり取りを振り返ったのであった。

## 第二十話 ノゾミの研鑽

く ジョウトのポケモンコンテストく

「ニヤルマー！ 【10万ボルト】 !!?」

「ムウマージ！ 【シャドーボール】 !!?」

「ピジョット！ 【フェザーダンス】 !!?」

「【シャドークロー】 !!? 【おにび】 !!?」

しまっ…

「ラプラス 【ぜったいれいど】 !!?」

「ニヤルマー、ムウマージ、バトルオフ！よって優勝はサオリさんでござります」

??????????

シンオウ地方でのグラントフェスティバルで優勝後、ノゾミは次の地方でのトップコーデイネーターの称号を得るために旅を回っていた。しかし、そのトップコーデイネーターの肩書きが足枷になってしまったとは旅立つ前のノゾミはまだ知らなかった。

トップコーデイネーターを目指す者としてコーデイネーターの多くはノゾミの名を知らない人はいなかった。彼女の姿を見れば誰もが振り向いては彼女を警戒をしていた。だが、その視線が返ってノゾミには大きなプレッシャーとしてのしかかったのだ。シンオウ地方のトップコーデイネーターとして誰よりも以上に華麗に見せなければならぬと思ひ込み結果的に実力が空回りしてしまうことが目立つようになってしまった。そして、常に上を見て戦ってきた彼女が消沈してしまう出来事があった。

ジョウトのコンテストでの決勝。その相手はサオリというカントー地方のトップコーデイネーターであった。他地方のトップコーデイネーター同士のバトルだけあって、この日のコンテストは多くの人が注目していた。だが、その戦いは呆気なく終わった。私は逆転不可能と思えるぐらいの大差でポイントを減らされてしまう所が、自分の二体をあっけなく戦闘不能にさせられてしまった。同じトップコーデイネーターという称号を手にはしているとはいえ、実力の差は歴然としていた事に強気な性格の彼女であったが、抜け殻のように何も考えられなくなってしまうのだ。

ここに來て彼女は停滞期に入ってしまったのだ。

キツサキシテイ

シンオウ地方の北陸に位置する。寒さに覆われており、年中雪が降り続ける。時にはダイヤモンドダストも観測させることもあるこの街はノゾミの出身地でもある。

地元へと戻ったノゾミは初心に還り、昔の映像を元に研究を行った。

いや…

一から出直すというのは良く言いすぎた。

本当は…退化していく自分から逃げたんだ。

また、負けるという事から…

一つの頂に立つてから次の頂への一步を踏み出せないでいる。

ヒカリも私に追いつこうと頑張っているのに今の自分を見せてやれない。

そんな私にスズナせんぱいはある提案を持ちかけた。それを聞いた時は今でも驚いている。

「私がジム巡りを…」

キツサキシテイのジムリーダーズズナ。彼女が提案してきたのはまさかのジム巡りの挑戦だった。その言葉にノゾミは理解ができなかった。コンテストバトルとジム戦では試合の形式は違いすぎる。それなのになぜスズナは提示してきたのか。それはスズナなりの真意があったのだ。

「私ね。ノゾミとヒカリちゃんとの決勝戦を見てて思ったんだけど

ね。もしあの時、宣言時間がまだ少しでもあつたら、勝つてたのはヒカリちゃんだったかもと私は思うんだ」

それは私も少しながら思っていた。ヒカリとの決勝はそれは本当にわずかな僅差だった。もしあの時、時間までまだ足りていたら、ヒカリに負けていたかもしれない。

そんなことを思いながらもスズナはさらに説明を付け加えた。

「ノゾミは自分のポケモン達の技の発動前の姿勢を華麗に見せたり、時には相手の技を利用してポケモン達を輝かせては相手のポイントを奪うのがノゾミのコンテストバトルスタイル。一方でヒカリちゃんもノゾミと同じようにコンビネーション技などでポケモン達を輝かせていたけど、ポケモン達の技の威力もポケモンの魅力の一つとして見せていたよね。そこがヒカリちゃんにあつてノゾミには無かつたものよ」

スズナの言葉を聞いてノゾミは理解した。自分のポケモン達に足りなかったのは攻撃力だ。コンテストとなると関係ないのではないかと思うが、実際にはそうではない。

どんなにポイントを減らされようとバトルオフ戦闘不能にすれば逆転ができる。勝ち上がるためには最良の手段でもあると言える。技の組み合わせが鍵となるが、ポケモン達の個々の強さという点ではヒカリに劣っている部分があると感じた。

「一緒に旅をしてきたサトシ君の影響でもあるかな。ジム戦もコンテストも一緒にになってお互いに磨いてきたから、ヒカリちゃんはそのスタイルを掴むことが出来た。彼と出逢っていなければ今のヒカリちゃんはいなかったと思うわ」

今の私に足りない…もの…

「先輩…私…」

??????????????

この挑戦はきつと今の私を大きく前進させてくれる。だけど挑戦するからには中途半端にこなしたりはしない。ジムバッチを集めるのならリーグにも出場する。そしてリーグ優勝を目標に全身全霊、ありったけの力をニヤルマー達と一緒にぶつけていく！

自身の胸に手を当ててはノゾミは一旦大きく深呼吸をした。ゆっくりと息を吐きながら次のプランを頭の中で整理をし、次のモンスターボールを手を取った。

「リーファイア！Ready, GO!!?」

「ファイア!!?」

ボールから出ては宙返りを見事に決めたりーファイア。着地の瞬間に空に舞う少量の水しぶきがその美しい毛並みを輝かせた。

《観戦席》

「草タイプのリーファイアか」

「可愛い!!!」

「確かイーブイの進化系の一つなんですよね」

『その通りロト!』

『リーファイア しんりよくポケモン

草タイプ

イーブイの進化系。植物のように光合成をするためリーファイアの周りは澄んだ空気に包まれる。争いを好まないが仲間を守る為ならば尻尾の葉っぱを尖らせ刃に変えて戦う』



ロトムの凶鑑解説が終え、タツツー対リーファイアの試合が始まる  
としていた。

スコアはジムリーダーのカスミが残り三体。対してノゾミは残り  
二体となる。この先の展開はどうなるか。リーリエ達は次に始まる  
試合に集中した。

### 《ジム戦》

「リーファイア！【マジカルリーフ】!!?」

「タツツー！【バブルこうせん】!!?」

双方の技がぶつかり合うと、すぐさまカスミは次の指示を繰り出  
した。

「タツツー！【れいとうビーム】!!?」

「タツウ!!?」

草タイプの弱点となる氷タイプの技を繰り出した。だが、ノゾミは  
その技を待っていたかのように微笑んでいた。

「リーファイア！そのまま待機！」

「ファイア!!?」

指示通りリーファイアは前屈みの体勢で迫り来る【れいとうビーム】  
を前に静止した。

### 《観戦席》

そんなノゾミの指示に驚いた一同。

ソウタとロトムは思わず声を上げてしまった。

「おいおい！当たっちゃまうぞ!!?」

『理解不能。理解不能。リーファイアに氷タイプの技は効果抜群ロトよ  
！』

二人の声につられてリーリエ達もノゾミの意図が分からないまま  
その光景を見ていたのだが、

「まさか…」

ただ一人タケシだけは何かを思い出したような顔をしていた。

《観戦席》

水系ポケモン以外は行動範囲が狭まっているハナダジムでは躲すのも至難である。迫り来る「れいとうビーム」をリーフィアはノゾミの指示が来るまで一歩足りとも動こうとしないでいる。誰もが勝負を投げたと思えない状況下でノゾミは右手を大きく上げた。

「今だリーフィア！回転しながら【つばめがえし】!!？」

「れいとうビーム」の直撃を食らう寸前にノゾミはリーフィアに指示を出した。リーフィアは軽く微笑むと体を大きく右に回し始めた。遠心力によって生み出される風のエネルギーは鋭く優しくリーフィアを包み込んだ。しかし、リーフィアが飛び込んだ先はタツツアが放った「れいとうビーム」が向かってきている。ギリギリまで引きつけて躲すのかと思いきやそのままリーフィアは一直線に飛び込んだ。誰もがもうダメだと思ったのだが、直撃と同時に水色に発光したその光の先では信じられないことが起こっていた。

直撃したと思った「れいとうビーム」はリーフィアの作り出す風の眉に取り囲まれ、リーフィア本体には当たらずに外へと逃がされていた。さらに受け流したどころか、リーフィアを包み込むように氷を形成し始めた。見る見るうちに大きくなったその氷はリーフィアを包み込んだまま矢の如くタツツアに向かって直進する。

あまりの予想だにしない事にカスミは慌てて指示を出すもの間に合わずタツツアはそのまま直撃を受けてしまった。衝撃で飛び散った氷の破片の中からリーフィアは華麗にフィールドに浮かぶ浮島に着地する。その前には目を回したタツツアが浮かんでいた。

「タツツア戦闘不能！リーフィアの勝ち！」

「よし！上手くいったね。リーフィア！」

「ファイア!!？」

ノゾミは軽くガッツポーズを取ると、リーフィアも振り向いては返事を返した。

観戦席ではそんな二人をリーリエ達は呆然としながら観ていた。

《観戦席》

「今のつて！」

「もしかして、氷のアクアジェット!?？」

「おいおい…もしかしてあの技か！」

「こおりの…アクアジェットですか？」

サトルとカノンとソウタの言葉にリーリエは首を傾げた。サトル達の話によるとシンオウリーグの中継でサトシのブイゼルがやつてのけた相手の技を利用した攻撃らしい。流星はサトシ。臨機応変な事をすると思つたやさき、その事を聞いたタケシは自慢げそうに口を開いた。

「あの技は元々一緒に旅をしていたヒカリっていうトレーナーが考えたコンテスト技なんだ。なかなか上手く出来なかつたけど、サトシがその技を完成させたんだ。まさか、ノゾミがやってくるとは思わなかつた」

「つまり…ノゾミさんのリーフィアのあれはポケモンコンテストによって生み出された技なのですね。相手の技を取り組んだコンビネーション技！本には決して載っていない戦法！間近で観ることができてわたくし感激です!!」

「」「」………「」「」

「ん？」

一瞬時が止まった。コンビネーション技の説明よりもタケシのあの一言にリーリエ達は同時にタケシの方へと振り向いた。何のことだと思いうたケシにリーリエは質問をしようとしたのだが、カスミが二体目のポケモンを繰り出した事で、リーリエ達はもう一度バトルフィールドの方へと振り返った。

### 《ジム戦》

「行くのよ。スターミー!!!」

「フツ!!?」

カスミの二体目はエスパータイプを合わせている水タイプのポケモン。スターミーだ。

「次はスターミーか。リーファイア! エスパータイプの技には気をつけていくよ!」

「ファイア!!?」

こう見えて水ポケモンの中でも素早さの数値が高いポケモンだけの事もあって、ノゾミはリーファイアに注意を促した。

「リーファイア! 【マジカルリーフ】!!?」

「ファイア!!?」

「スターミー! 【バブルこうせん】!!?」

「フツ!!?」

お互いに遠距離系の技を放った。放たれた二つの技は相殺された。

「リーファイア!」  
「リーフブレード」!!?」

爆煙の中をリーファイアはジャンプしては尻尾の葉を刃に変えて、スターミーに斬りつけに飛び出した。瞬時にリーファイアの攻撃に気づいたカスミは指示を出す。

「スターミー!もう一度」  
「バブルこうせん」!!?」

「かげぶんしん」!!?」

近づけさせまいとスターミーは「バブルこうせん」を放つ。それをリーファイアは自分の分身を作り出してはスターミーを戸惑わせる他、次々とスターミーの攻撃を躲して行く。

「まずいわ!!」  
「スターミー!水の中へ!」

スターミーは攻撃を止めると、リーファイアの攻撃を寸前の所で躲した。

「そのまま」  
「こうそくスピン」!!?」

水中に潜ったスターミーは自身を高速回転させながらリーファイアに向かって突進していく。攻撃を仕掛け終わると水に潜っては姿を消す。攻撃を躲した所で隙がないためにリーファイアはスターミーを捕らえることができないでいる。

「飛べ!リーファイア!!」

スターミーによる連続攻撃から逃れる為にそのままリーファイアは天高くまでジャンプした。そしてすぐに攻撃に移した。姿が捕らえられないが、この技なら関係ない。

「マジカルリーフ」!!?」

虹色に輝く葉をリーファイアは撒き散らした。不思議な事にまるで葉の一枚一枚に意志を持っているかのように、葉は水中で姿が見えていないスターミーに向かって行っている。

「サイコウエーブ」!!?」

「マジカルリーフ」は必ず当たる必中技。スターミーは不思議な念波光線に対抗した。双方の技が激突すると、フィールド上の水がスターミーを中心に前後左右へと波打ちを立てた。そのおかげで中心

にいるスターミーの姿をノゾミとリーファイアは捕らえることができた！

「今だ！」「リーフブレード」!!?」

「スターミー！もう一度【サイコウエーブ】!!?」

「ファイアアア!!!」

「フツウウウ!!!」

落下の速度も加わったリーファイアの「リーフブレード」とスターミーの【サイコウエーブ】が激突した。【サイコウエーブ】は使うたびに技の威力が上がる技であり、一発目よりも大きな念波光線でリーファイアを押し返そうとした。だが、リーファイアは負けじと雄叫びを上げながら力一杯に念波光線事スターミーに葉の刃を振りかざした。

二つの衝撃に爆煙と爆風が生まれた。その衝撃波に飛ばされないように身構えるカスミとノゾミの目の前では割れていた水が再び元の形へと戻り、二体を飲み込んだ。暫くしては静かに揺らいでいる水の中から二体のポケモンが浮かび上がってきた。

「スターミー！リーファイア！共に戦闘不能！」

結果は両者ドロロー。懸命に闘った二体をカスミとノゾミはお礼を言いながらモンスターボールへと戻した。これで両者共に残すポケモンは一体ずつ。次がラストバトルとなる。ベテラントレーナーの二人の実力によりリーリ工達は一言も発さずに固唾を飲んでいた。

ここまでハードな闘いをしてきたカスミは気分を一旦落ち着かせるためにノゾミに談笑を持ちかけた。

「ジムとコンテスト。その両方を挑戦してくるチャレンジャーもここ最近多くなってきたから、私なりにコンテスト技の対処法も勉強してきたつもりだけど…貴方の創造力には驚かされるわ。流石はトップコーデイネーターね！」

「ありがとうございます！ですが、まだバトルは終わっていませんよね！」

「そうね！」

カスミは最後の一体であろうモンスターボールをノゾミの前に向けた。

「ジム戦としては初心者であると思うけど、貴方の実力に見込んでハナダジム！私の切り札を貴方にぶつけるわ！」

カスミの切り札。つまりハナダジムの主ともいえるポケモンだ。その言葉を聞いたノゾミに一気に緊張が走った。

「行くのよ！マーズイステディ!!!」

自分の決め台詞と一緒に力一杯にフィールドにモンスターボールを投げた。

「ギャラアアアア!!!」

青白い光と共にモンスターボールから出てきた全身に青い鱗に覆われ、三叉の角が特徴のそのポケモンは赤い眼光でチャレンジャーを睨みつけては雄叫びを上げた。その雄叫びに吹き飛ばされそうになるノゾミの目の前に降臨されたその強敵に怖気付く所か不思議と胸が踊っていた。

「ギャラドスか…」

《観戦席》

「くつつ！すげー迫力だぜ！」

「ギャラドスですね！」

『ギャラドス きょうあくポケモン

水・飛行タイプ

コイキングの進化系。非常に凶暴な性格。ギャラドスを怒らせたある街は一晚のうちに焼き尽くされて跡形もなくなつたと言われている。破壊の神と呼ぶ地方も存在する』

《ジム戦》

目の前にした強敵にノゾミも最後の一体が入ったモンスターボールを手を取った。一度そのモンスターボールを見つめると、カスミの方へと顔を上げた。

「カスミさん！私は最後のこの闘い！こいつと全力でぶつかっていきますー！」

するとノゾミはある物を取り出した。それを見たカスミの目は鋭くなった。

「…面白いわね。だったら私も全力でぶつかっていくわ！」

それを見たカスミもノゾミと似たある物を取り出した。

《観戦席》

「一体…何を話てんだ？」

『ん…あの二人から強い力を感じるロト！』

誰もが二人の会話の意図を探っている中、リーリエとサトルはまさかという顔をしていた。そう、二人だけはかつてそのある物を目にしていた事があるからだ。

《ジム戦》

「さあ行って！エルレイド！GO!!!」

「エルレイ!!？」

ノゾミの最後のポケモンがバトルフィールドへと放たれた。

《観戦席》

「エルレイド…」

そのポケモンをカノンはポケモン図鑑をかざした。

『エルレイド やいばポケモン

エスパー・格闘タイプ

キルリアの進化系。誰かを守ろうとすると伸び縮みする刃で戦う。居合の名手で礼儀正しいポケモンである』



《ジム戦》

「さあ！最初っから飛ばして行くよ！エルレイド!!!」

「エルレイ!!?」

「私達も行くよ！ギャラドス!!!」

「ギャア!!?」

両者同時に自分のポケモン達に合図を送ると、同時にある掛け声をバトルフィールド全体に響き渡るように上げたのだ。

「メガシンカ!!!」

「エルレエエエイイイイ!!!」  
「ギャアアアアラアアア!!!」

二人のトレーナーは自身のキーストーンに呼応すると、二体の持つメガストーンも激しく光り出した。ギャラドスには凶暴さが増しエルレイドには清く優雅な立ち並びに姿を変えた。

《観戦席》

「なんだ！なんだあれ!!!」

初めてみるその現象にソウタは身を乗り出した。カノンも空いた口が塞がらないぐらいに呆然としている。

「やっぱり…」

「メガ…シンカ!!!」

《ジム戦》

光り輝く発光と共にメガシンカエネルギーで姿を変えた二体は大きく身構えた。

さあ！最後のバトルだ！

「ギャラドス！【あまごい】!!?」

「ギャラ!!?」

「エルレイド！【つるぎのまい】!!?」

「エルレイ!!?」

ギャラドスは再度雄叫びを上げると、室内にも関わらず、その中に雨雲を発生させた。ポツリと一滴落ちるとすぐに激しい豪雨となった。その雨に打たれながらエルレイドは神経を集中させると自身の刀を鋭く尖らせた。雨に濡れたその刀は美しく磨きかかり一段と鋭く見えた。

「行けっ！【しんくうは】!!?」

「ギャラドス！【ハイドロポンプ】!!?」

エルレイドの真空波とギャラドスの猛撃の水流が打ち出された。二つの技がぶつかり合うとギャラドスの【ハイドロポンプ】がいとも簡単にエルレイドの【しんくうは】を打ち消した。

「躲してー」

とつさにエルレイドはその技を躲したが、「ハイドロポンプ」の衝撃で水が大きく揺れると、バランスを崩してしまった。

「【あまごい】の効果が大きいの。防ぎきれないか！」

天候を味方につけたギャラドスの攻撃にノゾミとエルレイドに緊張が走る。

### 《観戦席》

怒涛の戦いの中、サトルとリーリエとタケシによる考察が始まっていた。

「ギャラドスはメガシンカすると水・悪タイプに変化するから、エルレイドの格闘技が決まれば大きなダメージを与えられるよ」

「ですが、それはエルレイドのエスパ―技はギャラドスに効果が無いとも捉えられます。反対にギャラドスの悪タイプもエルレイドには効果は抜群。技が一つ封じられているとなればエルレイドよりも有利であると考えられます」

「それに、【あまごい】によって水タイプの威力が上がっている故に降り注ぐ雨が視界を少しでも遮る働きも兼ねている。水のフィールドを上手く作っているカスミの方が有利と言えるな」

### 《ジム戦》

ギャラドスの牙とエルレイドの刀が交じり会う音が響きあう。引いては打ち。引いては打ちと二体のポケモンは少量のダメージに抑えながら交えていた。だが、状況下はリーリエとタケシの推測通りになる。

悪タイプと変わったギャラドスに対して効かないエルレイドの得意技【サイコカッター】もギャラドスの攻撃を凌ぐための防御技となっているし、雨で視界が遮られる所か唯一の足場も滑りやすくなっている、うまく動く事が出来ないでいる。

「エルレイドー！」

ノゾミは何度も呼びかけてはエルレイドが混乱しないように注意を払っていた。

「【しんくうは】!!?」

「【ハイドロポンプ】!!?」

二つの技がぶつかり合うと大きな水しぶきが立ち上る。ノゾミはギャラドスの動きに注意するようにエルレイドに呼びかける。

「ギャラドス!!」

カスミの声が聞こえると同時に、水しぶきが晴れるとギャラドスの姿がなくなっていた。だが、ここまでの闘いでノゾミにはギャラドスの行動パターンを読んでいた。水中に潜つての下から攻撃だ。その証拠に薄っすらと水の底から黒い影が浮かんでいる。

エルレイドはその場からジャンプすると、ギャラドスが顔を出す瞬間に格闘タイプの技を決めようと身構えた。

だが、一枚上手だったのはカスミの方だった。

「ギャラドスー!」【ぼうふう】!!?」

ギャラドスは水中から顔を出さずに、フィールドの水と一緒に激しい竜巻をエルレイドを包み込んだ。中心にいるエルレイドはその竜巻に封鎖されてしまった。

「どお?」このコンボは!これを打ち破ったチャレンジャーは一人もいないんだから!」

【つるぎのまい】で攻撃が上がったとしても激しい竜巻にエルレイドの技で打ち消すのは難しかった。しかし、これを前に諦めるノゾミではない。悩みに悩んだノゾミはある策をエルレイドに指示を出す。

「エルレイド!」【しんくうは】!!? 同じ回転で打て!!!」

「お…同じ回転?」

「エルレイ!!?」

ノゾミの指示通りエルレイドはギャラドスが作り出した竜巻の回転方向と同じに真空波の竜巻エネルギーを中心に放った。力任せに突破するよりも、性質を利用する。同じ方向に内側から膨張させたエルレイドの竜巻がギャラドスの竜巻を一気に錯乱させた。

【ぼうふう】を打ち消しちゃった…」

突破された事がなかったこのコンボを打ち勝ったノゾミとエルレイドに驚いていたのだが、そんな暇はない。そのエルレイドの方を見ると竜巻によって天井に届く位置にまで高く飛んでいた。

【つるぎのまい】!!?」

さらに攻撃力を上げたエルレイドを見て、カスミはすぐに指示を出した。

「ギャラドスー！【かみくたく】!!?」

水中から大きく飛び出したギャラドスはエルレイドに向かってその大きな牙を具現化させたエネルギーを放った。空中で身動きがとれないエルレイドにギャラドスの「かみくたく」が迫る。悪タイプの技はエルレイドに効果は抜群。だが勝負を決めようと急かせすぎたのか、それはギャラドスを近くまで引き寄せるためのノゾミの策だとはカスミに気づいていなかった。

エルレイドは「つるぎのまい」で大きく刀を舞ったその風圧によって雨雲を打ち消した。打ち消した部分から差し込むフィールド上を照らすスポットライトの光にギャラドスは目を奪われてしまった。

しまったと思ったがもう遅かった。次の指示を出そうとするカスミの前にノゾミはありったけの力で指示を出した。

「エルレイド！【インフアイト】!!?」

「エルレエイイイ!!」

四段階攻撃力が上がった力でエルレイドはバランスを崩したギャラドスの懐に飛び込むと突撃する。

拳の猛攻にエルレイドの最後の拳がギャラドスを思いっきり水面へと叩きつけた。

「あっ!!」

大きく上がった水しぶきがリーリエ達がいる観戦席まで上がった。水の中からはメガシンカエネルギーが解かれたギャラドスが浮かんでいた。浮島に着地したエルレイドはノゾミの方を見ると拳を高く上げた。それを見たノゾミも同じように拳を上げた。

「ギャラドス戦闘不能！エルレイドの勝ち！よって勝者はチャレンジャー、ノゾミ！」

審判の判定により、ノゾミの勝利となった。

「ありがとうギャラドス。ゆっくり休んでね」

「エルレイド。ご苦労様」

互いに健闘してくれた二体をモンスターボールに戻すと、バトル

フィールドの中心で握手を交わした。バトルに負けたカスミもとても満足げな表情をしていた。

「ありがとうございます！ノゾミ！貴方のコンテスト技には惑わされてばかりだったわ」

「こちらこそ！カスミさんとのこの試合で華麗に技を見せるだけじゃダメだと改めて分かりました。これを経験にポケモン達の技の威力も魅力の一つとして磨いて行きたいと思います」

「ありがとうございます！じゃあこれ受け取って！ハナダジムを降した証、ブルーバッジよ！」

「ありがとうございます！」

初めて手にしたジムバッジをジムバッジケースに閉まった。ポケモンコンテストと違った胸が熱くなるようなこの闘いはノゾミのこれからの糧になるだろう。シンオウ地方を回っていた頃では考えられなかった闘いに高まる感情を抑えながらノゾミは大きく深呼吸をした。ここ始まるんだ。

#### かのじよ ノゾミの研鑽が

二人の健闘に観戦席からは大きな拍手が巻き起こっていた。

## 第二十一話 VS ハナダジム 水のフィールド

「サクラ姉さん。なんで勝手なことをするの!」

ノゾミとの試合が終わり。何処となくサイドステージから聴こえてくる拍手に目をやると、そこには自分の一番上の姉であるサクラとタケシ。そして大勢の一般トレーナーの姿があった。

それを見て驚いたカスミはすぐにサクラから事情を聞くと、身勝手な姉に対して注意を促し始めた。

「だって、折角いらしてくれたトレーナーさん達に何もせず帰ってもらうなんて出来なかったもん」

「だけど、私はともかくチャレンジャーのことを考えてよ! あんたもよタケシ! 元ジムリーダーなら解るでしょ!」

「いや〜すまん」

カントーにいなながらも互いに忙しく、あまり顔を合わせる事がなかったため久しぶりに会えて内心嬉しかったのであったが、軽率な行動を取った二人に言いたい事で頭が一杯になってしまった。

「あら、なんの騒ぎ?」

「おお!!! アヤメさん!!!」

と、カスミの二番目の姉のアヤメが帰ってくると、脱兎の如くタケシはアヤメの元へと駆け寄った。

「相変わらずお美しい。どうでしょうか。この後、一緒にお茶でも」

グリッ

「いてててててて!!!」

「まだ話は終わってないでしょ!」

そんなタケシにカスミは耳たぶを引っ張りながら、アヤメから引き離した。そして、

「なにになに? どうしたの?」

「おお!!! ボタンさん!!!」

今度は三女のボタンが帰ってくる。

「貴方の心の恋人。自分タケシがここハナダジムへと戻って参りました。」

ズシユン!!!

「しびれびれ!!!」

「ケツケケケケケ!!?」

【どくづき】で麻痺したタケシをグレッグルはカスミの元へと身を渡した。渡し終えたグレッグルはそのまま自分のモンスターボールの開閉スイッチを押すと戻って行った。

「タケシさんって本当肉面白い人だな!」

「うん…そうだね」

「あはは…」

サクラとタケシが怒られている中、そんなリーリエ達の方には一人の人物が歩み寄って来た。

「やあ!あんだ達。観戦席に座ってた人達だよね」

リーリエ達の方へ歩み寄って来たのは、先ほどカスミとのバトルに勝利して、ジムバッジを手に入れたノゾミだった。

「あっはい!あの…ごめんなさい。盗み見るような真似をしてしまつて…」

「大丈夫だよ!だけど…コンテストと違って下手に緊張したから、なんか恥ずかしいな」

すぐにリーリエは勝手に試合を見学してしまつた事を謝ると、ノゾミは照れ臭そうに笑っていた。

そんなノゾミにカスミの説教から逃れたタケシが歩み寄る。タケシの姿を見たノゾミも軽く手を上げては合図を送った。

「久しぶりだな!ノゾミ」

「久しぶりだねタケシ。そうか!あんだとサトシはカントー出身だったよね!」

タケシとの再会を終えた後、リーリエ達の前に振り返ると自己紹介を始めた。

「私はシンオウ地方のキツサキシテイのノゾミ。訳あつてカントーでジム巡りをしているんだ」

「シンオウ地方!!!」

シンオウ地方と聞いたカノンは一步前進すると、目を輝かせながら



ノゾミの手を握った。

「実は私もシンオウ地方出身なの！小さい時にカントーに引越してきたんだけどね！」

「そ…そうなんだ」

突然の事に驚くノゾミをそっちのけにカノンの質問漬けのマシンガントークが吹き荒れる。これを見かねたサトルはすぐにカノンの肩に手を取るとそのまま引き離れた。

終始一同はカノンの破天荒さに苦笑いをした。

「そうだ。ノゾミ！どうしてカントー地方に来てジム巡りをしに来たんだ？コンテストの方はどうした？」

「ああ…やっぱり変に思うよね。なんせ昔の私はジムとコンテストを掛け持っている人を嫌ってたんだからね…」

ジムとコンテストの両方のチャレンジは一つの事に全力に取り組めていない姿勢だと嫌悪していた。そんなノゾミがジム挑戦しているのにタケシが疑問に思っている事は無理もない。ノゾミはふとモンスターボールから自身の相棒であるニヤルマーを出してあげると、ニヤルマーの顎を撫でながらその質問に答えた。

「ちよつと停滞しちゃってね。今の私に足りない部分…一から鍛え直すという意味で挑戦しているんだ」

「そうか…で、どうだ!?？ジム戦をやった感想は」

「コンテストとは違う熱さを感じたよ。サトシがあんなに熱くなる理由も分かるな。てっ、あいつの場合は熱くなりすぎってのもあるけど！」

「あははは！それもそうだ！」

そんな二人の談笑を聞いていたリーリエ達はある事を思い出した。思い出したリーリエはすぐにタケシに問いだした。

「そうだ！タケシ。貴方に聞きたいことがあります！」

「？」

~~~~~

「まさかこんな偶然がこうも重なるとはなあ!」

「僕たちも驚いたよ。まさかタケシがサトシと一緒に旅をしていた仲間だっただなんて…」

「俺もさあ。しかしあのサトシが留学とはなあ。彼奴のことだ口クに勉強としかしないだろ」

「あ…それは一理あるわ」

「確かにサトシは常識では通用しない所もあるからね」

「ここまで一緒に旅をしてきたのにも関わらず、こんな接点があったとは今になって分かった。」

そのままリーリエ達はノゾミとタケシと同じようにサトシと旅をしていたカスミを加えて、ポケモンセンターでお茶をしていた。

「それよりも聞かせてよ!サトシさんと旅した話!」

目を輝かせているカノンの他、サトルとソウタも大きく頷いていた。自分たちの憧れているトレーナーと旅をしていた人が目の前にいるのなら話を聞きたいのは当然の反応だ。カノンの問いにまずは最初に旅と一緒に同伴したタケシとカスミが口を開いた。

タケシが初めてサトシと出会ったのは自分がニビジムのジムリーダーをしていた頃に挑戦者として現れたのがきっかけだった。その後、サトシにジムバッジを渡したと同時に自分の父に背中を押された事もあって、世界一のポケモンブリーダーになるべくサトシと旅を始めた。

カスミはというとタケシみたいに最初から友としてではなく、ただ自分の自転車を壊された修理代を支払わせるためについて行ったと言った方が正しいのであろう。ただ、そのきっかけがなければサトシと旅をする事はなかったと思うと、少しばかりその最悪な出会いには

感謝している。

そのまま今のリーリエ達と同様にジム巡りの旅をしてやつとの想いで八つのジムバッジを集めたサトシは始めてのポケモンリーグへと出場した。ただ、ほんとうどのバッジはお情けなんだけど、という言葉にはリーリエ達は少しひっつかかてしまった。

ポケモンリーグの話題に変わるとその当時を中継でみていたサトルとカノン。そしてソウタも話題に加わった。

「確かセキエイ大会はリザードンの戦意喪失で負けたんだよね。その後にはリザードンとはどうやって仲良くなったの?」

「あーそれはねー!」

カスミの話からカントーのポケモンリーグが終わった後、オレンジ諸島のポケモンジムへと挑戦しに行つたと言う。その途中、一時的に離脱したタケシに代わって、ケンジを加えて旅をしたと言う。そう、リーリエ達がオーキド研究所で出会ったオーキド博士の助手のその人だ。

そして、道中でのポケモンバトルので強敵トレーナーとの勝負に敗れたりザードンをサトシは夜通し看病した事をきっかけに心を開いたという。今はサトシの主力ポケモンとして活躍している。なお、オレンジ諸島でのポケモンリーグは優勝を果たしている。だが、オレンジリーグは他の地方とのポケモンリーグとは異なるために優勝してもチャンピオンリーグへの参加資格が得られるわけではなかった。

オレンジ諸島での旅を終えた後にはタケシと再会を果たすと、そのままジョウト地方へと向かったと言う。

「でも今じゃ本当に想像つかねえよな。だってその次のジョウトでのシロガネ大会。あの時のリザードンVSカメックスの闘い凄かったもんなー!」

「うんーサトシさんとリザードンの強い信頼関係はテレビ越しでも伝わって来たからね!」

ここまでの話を聞いてサトシとリザードンの関係には意外だったようだ。タケシ達の話からサトシも今の自分と同じような壁にぶつかっていた事にリーリエも驚いていた。

「そういや、何でホウエンリーグでは他のポケモン達を使わなかったのかな？今までにゲットしたポケモンを使えば優勝は出来たはずなのに…」

「ホウエン地方では初心に戻って、最初のパートナーのピカチュウだけを連れて新たな気持ちで旅を始めたみたいなんだ。だからホウエンリーグではホウエン地方でゲットしたポケモン達で挑もうと最初から決めていたんだ。」

「私が一番好きなのはシンオウリーグかな。何よりもゴウカザルVSエレキブル！手に汗握りながら観ていたもん。ねえ、ヒコザル！」

「ヒココツ!!？」

「そしてイツシユリーグにカロスリーグ！」

「あそこでルカリオに進化してしまうのは想定外だったね」

「惜しかったよな〜」

「ゲッコウガにはびっくりしたよ！まさかメガシンカとはまた違う進化をしちやうなんてね！」

「それは私も観たわ。あの水タイプの子でしょ。欲しいなあ〜」

「相変わらずだな。カスミは！」

「あはは！私はジョウト地方まで一緒に旅をしてきたんだけど、彼奴の無鉄砲振りに着いて行くのは大変だったわ」

「ふふっ！それはわかる気がします」

「だけど、一緒に旅をしたからこそ彼奴からもいろいろと教えられた事もあるのよね」

「ああ、そうだな。今は何処で何してるのかな…」

ふと、タケシの一言につられてリーリエはサトシを思い浮かべながら天井へと視線を当てた。そんなリーリエにカスミは好奇心満載な表情でリーリエに問いかけた。

「ねえ、今度はアローラにいた時のサトシの事教えてくれない？」

「はい！もちろんです！」

~~~~~

後半はアローラでのサトシとの話が盛り上がった。気がつけば日は落ち、空の暗転と共に月が顔を出していた。

そのまま夕食を終えると、カスミはジムへと戻り、リーリエ達はそれぞれの宿泊先へと荷物を降ろした。ネグリジエに着替えたリーリエはシロンを抱きかかえながら、光る満月を眺めながっていた。

「サトシの旅の話。わたくしが学校へ行き、休みの日には部屋で本読んでいた頃には、サトシはいくつもの地方を転々と旅をしていたのですね。自分の足で踏み込んで行ったからこそ、得られた経験を自分の中へと吸収して、自分を作り上げて行ったのですね。外に出ないと分からない事は本当にたくさんありますね。シロン！」

「コーン!!?」

旅をしていればいずれ再会できると思ったのですが、本当にサトシは今何処にいますのでしうか。まだ旅を始めてもうすぐ一ヶ月となりますが、少しばかりが強くなったわたくしを見て貰いたいものですね。

「わたくしは…彼に…近づけたのでしょうか」

シロンの頭に自分のあごを乗せながら、サトシの事を思うリーリエに…

「えっ!??サトシさん!?」

「!!」

突然、部屋から現れたらカノンに驚いた。今回はハナダジムの対策を練るために一人の時間も必要なのかと思い、部屋はみんなバラバラになっている。だから、リーリエの様子を覗きに来たカノンにリーリエ

エは驚いたのだ。そして、カノンは少しばかり頬に赤みが混じっているリーリエを見てはカノンは悪そうな顔でリーリエの顔を覗いた。

「大丈夫だよリーリエ！この事は私とのだけのひみ。つ♡たがらね！」

「ちよ／＼／カ!!!カノン／＼／」

「私も出来る限りのサポートはしてあげるからね♪」

「だ／＼／だから／＼!!!そんなんじや、ないですってえええええええ／  
／／／／／／／」

~~~~~

翌朝、再びハナダジムに訪れたリーリエ達。水のフィールドによって反射された太陽の光に眩しく目をこするリーリエは向かい合うカスミに丁寧にお辞儀返した。

再びハナダジムに訪れた理由…決まっている！それは…

「おはようリーリエ！昨日は良く眠れた？」

「ええ！カスミ！今日は宜しくお願い致しますね！」

ハナダジム戦！リーリエの二回目となるジム戦だ！

「ただいまより、ジムリーダーのカスミとチャレンジャーのリーリエによるハナダジム、ジム戦を開始します。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンがすべて戦闘不能になりますとバトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。」

ジムのルールはニビジムと変わらない。呼吸を整えたリーリエは先にカノン達がいる観戦席の方へと振り返った。

「シロン！今日は応援お願いね！」

《観戦席》

「コーン!!?」

リーリエの呼び声にシロンは大きく返事を返した。今回はシロンはお休みのようだ。

「シロン。今日は一緒に応援しようね♪」

「コーン!!?」

「さて、リーリエがどんなバトルするか楽しみだね！」

リーリエの今の実力を興味津々に眺めるノゾミと一緒にカノン含む四人もリーリエの二回目のジム戦を見学する。

《ジム戦》

「行くのよ。ヒトデマン！」

「へア!!?」

審判の合図と同時に先に繰り出したのはジムリーダーのカスミだ。カスミの先鋒はヒトデマン。昨日見たスターミーの進化前に該当するポケモンである。

「一体目はヒトデマンですね」

『お任せを』

すぐにロトムはヒトデマンの写真を撮ると解説を始めた！

『ヒトデマン ほしがたポケモン

水タイプ

海辺に多く生息している。夜になると中心のコアが赤く輝き出す。まるで星のように見える』

昨日とは違うポケモン。やはりノゾミさんの時とは全く選出が異なりますね。

ここは水のフィールドでわたくしのポケモンの中で自由に動き回れるのは…

この子です！

「コイキング！お願い致しますー！」

「ココツ!!?！」

リーリエが選んだのは同じ水タイプのポケモンのコイキング。リーリエの手持ちに加わってからの初陣にコイキングは気合が入っている。水のフィールドって事もあるが、何よりもリーリエのコイキングは頑張り屋であり自分の信念を貫こうとする強情な部分もある。先鋒に選んだのもその勢いで流れ掴むためでもあるとも言えよう。

《観戦席》

「リーリエの一体目はコイキングだ」

「水系同士のバトルか！面白くなりそうだな。頑張れよリーリエ！」



ソウタの声援に気づいたリーリエはさらに気合が入る。もう一度コイキングとコンタクトを取ったその後、すぐにコイキングはヒトデマンと向かい合った。

《ジム戦》

「いくわよ。リーリエ！」

「こちらも全力で行きます！」

それぞれの意気込みを述べた同時に…

「バトル開始!!!」

審判による試合開始の宣言が下された。

？リーリエVSカスミ？

「さあヒトデマン！『バブルこうせん』!!？」

「へア!!？」

先に攻撃を仕掛けたのはカスミの方だ。無数に撃ち込まれた泡の砲弾が一斉にコイキングに向かって行く。水系のコイキングにとつて効果はいまひとつであるが、追加効果で素早さを下げられてしまう場合もあるため、直撃は避けたいものである。

「コイキング！『はねる』です!!？」

「ココツ!!？」

コイキングは尾を勢いよく水面に叩き込むと、その反動で天井に向かって飛び上がった。ただ跳ねるだけのこの技も使い方によっては緊急回避にもうってつけの技だ。

「そのまま『たいあたり』です!!？」

「コツ!!？」

「へアツ!!!」

一気に急降下した体当たりはヒトデマンのコアの中央部位を捉えた。世界最弱と言われたポケモンにしては、リーリエのコイキングの物凄いパワーにカスミは一瞬目を見開いていた。

急降下で勢いがついたとはいえ、あのパワー…あのコイキング相当鍛えられているわね。

リーリエのコイキングの攻撃力から見て良く育て上げられている

とカスミは感心した。

「ヒトデマン！【こうそくスピ】よ!!?」

「もう一度【たいあたり】です!!?」

「ヘア!!?」

「ココツ!!?」

それぞれの技の指示を聞いた二体は水中へと潜ると同時に互いにぶつかり合う。地上とは違って自由に泳ぎ回れる水系ポケモン同士の水中バトルは迫力がある。観戦席にいるカノン達にもそれは伝わっていた。

元々カスミは物理攻撃しか覚えられないコイキングに対し、接近戦に持ち込まれないためにも特殊攻撃で距離を取っていくつもりでいたのだが、リーリエとコイキングの根性を前に真つ向勝負を受けて見たくなつたみたいだ。目の前のトレーナーを見て熱くなるのは誰かの受け売りなのかもしれない。

「ココツ!!!」

「ヘア!!!」

二人の指示の後からコイキングとヒトデマンはどちらとも勢いが衰える事なく激しいぶつかり合いの嵐を巻き起こしている。息を切らしながらも負けじと突っ込んで行く二体を見ればいつ体力が尽きてもおかしくないのは上級トレーナーでも初級トレーナーでも理解できる。

次です…あの攻撃で一気に決めます！

もう一度、コイキングとヒトデマンがぶつかり合うその瞬間にリーリエは別の指示を下した。

「コイキング！【じたばた】です!!?」

リーリエの指示を聞いたコイキングは体を大きく揺らし始めた。【じたばた】は体力が残り少ないほど威力が増す技であり、その最大威力は二百もなる。最強物理技とも称される【ギガインパクト】を超える威力を発揮するのだ。この攻撃力ならヒトデマンの【こうそくスピ】ごと吹き飛ばすのは容易いと思つたのだが…

やっぱりね…そうくると思つたわ。

コイキングが覚える技を全て理解しているカスミにはリーリエの手の内を読んでいた。カスミの指示がなくともヒトデマンは攻撃をするのを止めると、接触するギリギリの所で躲した。攻撃が躲されたコイキングの真下に潜ったヒトデマンは距離を取ると頭頂部の先端部位をコイキングに向けた。

読まれていたリーリエはとっさのヒトデマンの行動にすぐに対処する事が出来なかった。

「ヒトデマン！【みずてっぽう】!!？」

勢いよく噴射された水流はコイキングに攻撃を食らわせただけでなくそのまま外へと一気に押し出しては放り出した。打ち上げられたコイキングは身動きが取れない状態になってしまった。そこに追い打ちをかけるようにして水面から顔を出したヒトデマンはさらに攻撃を仕掛けた。

「いまよ！【バブルこうせん】!!？」

「へアア!!？」

「コイキング！もう一度【じたばた】です!!？」

「ココココ!!？」

空中で身動きが取れないコイキングにヒトデマンの攻撃が迫りくる。だが、その攻撃をコイキングは体を揺らし始めると尾を使って次々と弾き返しては防いでいく。

「そのまま【とびはねる】!!？」

「コオオ!!？」

全ての【バブルこうせん】を防いだコイキングはそのまま猛スピードでヒトデマン目掛けて突進していく。風のエネルギーを纏っているため、先程食らわせた【たいあたり】よりも攻撃力は増しているであろう。

「ヒトデマン！【ダイミング】!!？」

「へア!!？」

迎え撃つきだ。ヒトデマンはいったん水の中へ潜ると、水の衣を纏いながら一気に水面から飛び出した。

まるで空と海の衝突だ。それぞれの技がぶつかり合うと、火花を散

らしながらの押し合いが始まった。一瞬でも気が緩むとやられてしまうこの場面、一步も引かない二体はやがて大きな衝撃波と同時に水面へと叩きつけられてしまった。

「コイキングー！」

「ヒトデマンー！」

暫くの静寂の中、二人に緊張が走った。やがて二体のポケモンが水面から現れた。

「コイキング戦闘不能！ヒトデマンの勝ち！」

水面から顔を出したコイキングは目を回していた。最初の勝ち星を手にしたのはカスミだった。

《観戦席》

「軍配が上がったのはカスミさんの方か」

「コイキング…頑張ったのに」

「コーン…」

《ジム戦》

「ココツ…」

勝負に敗れたコイキングはそのままリーリエの元へと戻った。勝利を得られなかったことに落ち込んでいるコイキングにリーリエは優しく頭を撫でては励ました。

「ありがとうございます。コイキング。良く頑張ってくれましたね！」

「ココツ…」

「これからもっと頑張って行けば良いのです！今はゆっくり休んでください」

「ココツ!!?」

リーリエの言葉に笑顔が戻った。元気になったコイキングを見て

安心したリーリエはモンスターボールへと戻した。

モンスターボールへと戻した後、すぐにリーリエはヒトデマンの状態を確認した。

コイキングのおかげでヒトデマンもかなりのダメージを受けているはず。まだ勝負は終わっていません。頑張ってくれたコイキングのためにも絶対に勝ちます。

決意を新たにリーリエは二体目のポケモンをバトルフィールドへと投入した。

「キモリ！お願い致します！」

「キヤモ！！？」

「キモリ！相手は水系のポケモンです！この場では水中では上手く動けない貴方の方が不利ですが、落ち着いて勝ちを取りに行きましょう！」

「キヤモ！！？」

気合十分に飛び出したキモリはリーリエの忠告を聞くと、そのまま対戦相手であるヒトデマンを睨みつけた。そんなリーリエのキモリにカスミは身構えた。

「草タイプね。行くわよ！ヒトデマン！」

「ヘア！！？」

カスミの合図にヒトデマンもさらに気合を入れ直した。そして審判による開始の合図が下された。

「新しい力をぶつけて行きましょう！キモリ！【エナジーボール】です！！？」

「キヤモ！！？」

先に動いたキモリは両手を合わせると、翠緑に輝くエネルギー砲をヒトデマンへと放たれた。キモリの新しい技に驚いているカノン達の声が響きながらヒトデマン目掛けて放たれた。

「ヒトデマン！【こうそくスピン】！！？」

「ヘア！！？」

ヒトデマンは水中に潜ってキモリの攻撃を躲したら、そのまま高速回転を加えた体当たりをキモリに仕掛けた。

「躲してー」

スピード自慢のキモリはギリギリのところまで躲す。昨日のノゾミのスターミーの【こうそくスピン】を見る限り、また水中に潜られてしまわれては捕える事が出来ない。そうはいくものか。

「キモリ！水面に向かって【はたく】攻撃です!!?」

「キヤモ!!?」

リーリエの指示でキモリは大きく尻尾で水面を叩いた。衝撃で水しぶきが舞う中、ヒトデマンはそのまま水中から弾き出された。そしてキモリはヒトデマン目掛けて飛び出した。

「来るわよーヒトデマン【みずてっぽう】!!?」

「へア!!?」

ヒトデマンは向かって来るキモリに攻撃を仕掛けようとしたその瞬間

「へ…へア…」

ヒトデマンの攻撃をする手が止まってしまった。何が起こったか分からないカスミはヒトデマンの様子を伺う。見た感じ身体が痺れてしまっているようだった。

「まさか！麻痺してるの!!!」

そうヒトデマンはさつき受けたコイキングの【とびはねる】の追加効果により麻痺状態になっていたのだ。ヒトデマンには特性《しぜんかいふく》があるが、ジムリーダーの交代は認められない。そのルールによってヒトデマンの特性も活用されない。動きが止まったヒトデマンに向ってキモリは距離を詰めて行った。

「【エナジーボール】!!?」

「キヤモ!!?」

動けないヒトデマンに接近できたキモリは【エナジーボール】を押し当てた。緑色の発光とともに吹き飛ばされたヒトデマンはそのままカスミを通り越してジムの後の方の壁へと叩きつけられた。カスミはヒトデマンを呼びかけるも、ヒトデマンは壁に張り付いたままコアが点滅しながらぐったりとしてしまった。

「ヒトデマン戦闘不能！キモリの勝ち！」

「やった！ありがとうございます。キモリ！」

「キヤモ！！？」

コアの点滅はヒトデマンの戦闘不能を知らせるものだったようだ。一体目を倒せた事にリリーエとキモリはお互いにガッツポーズを取った。

「ありがとうヒトデマン。ゆっくり休んで」

ヒトデマンの状態を見抜けなかった事を反省してからカスミはリリーエの方へと顔を向けた。

「行くのよ！スターミー！」

「フツ！！？」

カスミの二番手はその進化系のスターミーだ。昨日のノゾミ戦では【こうそくスピン】や【サイコーウエーブ】を使ってくる事は分かっている。その技に注意するよう頭の中で整理すると、次の試合に集中した。

「始め!!!」

「キモリ！【エナジーボール】です!!？」

「【こうそくスピン】よ!!？」

キモリが打ち出した技をスターミーは【こうそくスピン】で軌道を変えながら躲すと、キモリに向かっていく。

「【でんこうせっか】!!？」

躲されてもプランはあった。次にキモリは物凄い速さでスターミーへと近づいていく。これはニビジムでも見せた【でんこうせっか】のスピードを利用しての追い討ち攻撃だ。一気にスターミーへ近づいた直後に【エナジーボール】を当てるのがリリーエの狙いだ。そして、その狙い通りにキモリはスターミーへと近づく事ができた。そして、すぐにキモリは【エナジーボール】を放つ体勢を作った。

「まずい！スターミー！【こごえるかぜ】!!？」

「フツツ!!?」

「キヤモ…」

「キモリ！」

だが、カスミはすぐにスターミーに別の攻撃の指示を下すと、スターミーは横回転したまま冷気でキモリを吹き飛ばした。

「負けないでキモリ！もう一度【でんこうせっか】です!!?」

「キヤモ!!?」

リーリエは再度同じ作戦でスターミーに接近しようとしたのだが、さつきよりも明らかにスピードが落ちてしまっている。すぐにキモリの接近に気づいたスターミーはそのまま【こうそくスピン】で弾き返した。

《観戦席》

「おい！キモリのスピードが落ちてるぞ！」

「【ごごえるかぜ】の追加効果で素早さを下げられたんだ」

シロンも使う技なので、追加効果にはリーリエも分かっていたのだが、まさか元から素早い種族値を持つキモリが肉眼でもすぐに追いつけてしまわれるほど素早さが下がっているとは思わなかったのである。

《ジム戦》

弾き返されたキモリはジムの壁にひつついていた。冷やされた足を見ては辛そうな表情をしていた。下唇を噛み締めながらリーリエの指示を待つ。

「キモリ！【エナジーボール】!!?」

「スターミー！【サイコーウェーブ】!!?」

「キヤモ!!」

自慢のスピード愚か動作まで若干鈍ってきたキモリよりも先にスターミーの攻撃が決まってしまった。吹き飛ばされたキモリは水中へではなく近くに設置されている浮島へと不地着する。

「続けて【バブルこうせん】!!?」

「フツ!!?」

さらに起き上がれていないキモリに【バブルこうせん】が襲いかか



る。すぐにリーリエはキモリのモンスターボールを取り出した。

「戻ってください！キモリ！」

間一髪のところできモリをモンスターボールに戻す事が出来た。

「危ない所だったわね。さあ、次はどの子で来るのかしら」

互いに手持ちが二体であるのにカスミは余裕そうな表情を見せる。まだ隠している手段があるのかとリーリエの頭の中を遮るが、両手で軽く両頬を叩くと、集中と自分に言い聞かせた。

「ムクバード！お願い致します！」

「ムックバー!!?」

リーリエの最後のポケモンはムクバードだ。空中戦を得意とするムクバードにはどんなフィールドが来ても関係はなかった。

「行くわよ！スターミー！【ごごえるかぜ】!!?」

「フツ!!?」

「躲して！【でんこうせっか】!!?」

「ムクツ!!!」

今度は【ごごえるかぜ】を躲すと、スターミーの背後へと回り込んだ。そのままスターミーに体当たりを仕掛けるムクバードにカスミはすぐに指示を出す。

「スターミー！潜って！」

スターミーは水中へと潜ると、ムクバードの攻撃を躲した。だが、水中に潜ったとなると、昨日見た【ごごそくスピン】の連続攻撃が来るかもしれない。リーリエはすぐにムクバードを上昇させて距離を取らせた。

「【ごごそくスピン】!!?」

「【かげぶんしん】!!?」

案の定。リーリエの読んだ通りの攻撃が飛んで来た。それをムクバードは複数の分身を作り上げて躲すと同時にスターミーを惑わした。

「それなら、スターミー!!!」

カスミの指示にスターミーは再び水中へと潜る。すぐに出て来ようとはせずに、スターミーは体を大きく回転させると渦潮を発生させ

た。その渦潮は大きな水流とともに空中にいるムクバードへと放たれた。

「ムッククク!!!」

「ムクバード!!!」

立ち昇る水流を纏った竜巻にムクバードは吹き飛ばされた。スターミーは水中にいるため攻撃が届かない。大きく巻き起こる渦潮に太刀打ちできないでいる。

《観戦席》

「地形を利用した水ポケモンならではの技だね。流石はジムリーダー。見せてくれるね」

「んだよ。俺の時はあんな事してこなかったぞ！」

カスミの咄嗟の判断に一回は驚いていた。対して威力が高くない【こうそくスピン】をこうもアレンジを加えて攻撃力を倍増させるなどジムリーダーとしてでなくベテラントレーナーとしてカスミの強さを感じた。

《ジム戦》

「どうしたら…」

激しく巻き起こる竜巻はだんだんと範囲を広げてはムクバードを再び飲み込もうとする。竜巻を見続けたリーリエは昨日見たカスミのギャラドスの暴風を対処したノゾミのエルレイドを思い出すと一つの案を絞り込んだ。

「ムクバード！体を回転させながら【はがねのつばさ】です!!?」

ムクバードは翼を硬化させると、体を右に回転させ始めた。

「そのまま竜巻の中に!!!」

「ムックバアアア!!!」

ムクバードはそのまま竜巻の中心部へと一直線に突っ込んで行った。中心部は無風であり、僅かな空洞になっているはずであった。そこを辿れば水中に潜っているスターミーに攻撃を決める事が出来る。さらに回転を加えることによって渦潮の回転力をも利用して攻撃力を高める働きも加えている。一直線に突き進んで行くムクバードは底にいるスターミーの姿を捕えると、そのまま遠心力で威力を上げた

硬化させた翼をおもいつきり振りかざした。

「フッ!!」

振りかざされた翼によって、衝撃でプールの水が割れると攻撃を受けたスターミーはそのまま水中の外へと放り出され浮島に不着した。ムクバードはそのまま割れたプールの水からすぐに飛び出すと、そのままスターミーに向かって行く。

「頑張つてスターミー!・【バブルこうせん】!!?」

「ムクバード!・【かげぶんしん】!!?」

すぐに立ち上がったスターミーは【バブルこうせん】でムクバードを狙い撃ちする。それをムクバードは再び分身を作り出してはその技を躲した。

「そのまま【でんこうせっか】!!?」

「クルルル!!?」

分身を残したままムクバードは一直線にスターミーへ突っ込んで行く。異様なスピードと前後左右にどれが本体か見分けがつけられない分身達を引き連れたまま、ムクバードの【でんこうせっか】が決まった。

「【ごごえるかぜ】!!?」

「【つばめがえし】です!!?」

蹠踏めきながらもスターミーは冷気をムクバードに向かって放つ。それをムクバードを負けじと嘴にエネルギーを集中させると、冷気の突風に押されながらも急降下しつつスターミーに向かって突撃した。追撃されたスターミーはそのまま後ろの方へと吹き飛ばされると、ヒトデマンと同じようにコアが点滅してしまった。

「スターミー戦闘不能!・ムクバードの勝ち!」

スターミーの戦闘不能が審判の口から下されると、ムクバードは空中を飛び回りながら勝利を喜んだ。

「やりましたね！ムクバード！」

「クルル!!？」

「お疲れ様。スターミー。ゆっくり休んでね」

《観戦席》

「やるね！リーリエ」

「ああ！【つばめがえし】も物に出来たようだな」

「かっこいいよ！ムクバード!!!」

「コーン!!？」

《ジム戦》

スターミーを戻したカスミはルアーボールを手にした。それを見たりリーリエとムクバードはすぐに集中モードへと入った。

現時点では二体を残しているリーリエの方が有利とも見えるが、最後まで何が起きるか分からないのがポケモンバトルだ。水のフィールドからも不利な状況は変わりにないことはリーリエには分かっている。

「リーリエ！この子が私の最後のポケモンよ!!!」

「はい！」

「行くのよ！サニーゴ！」

「サゴサゴ!!？」

カスミの最後のポケモンはサニーゴだ。

『サニーゴ さんごポケモン』

水・岩タイプ

サンゴの枝は太陽の光を浴びると七色にキラキラと輝きとても綺麗。折れても一晩で元通りに生えてくる』

水岩タイプであるなら、ムクバードの【はがねのつばさ】なら大ダメージを与える事が出来る。だが、それはサニーゴも同じである。

リーリエはムクバードのこのままの勢いに任せて続投させることに決めた。

「ムクバード…【はがねのつばさ】!!?」

「クルル!!?」

「サニゴツ!!!」

ムクバードの攻撃は見事にサニゴの頭部に直撃する。岩タイプは鋼タイプの技に弱い。サニゴは頭部を抑えながら悶えている。

「いいですよ。ムクバード!もう一度です!」

「ムツクバー!!?」

手応えを感じたリーリエは再度ムクバードに同じ指示を出す。ムクバードもスピードに乗っては硬化させた翼で空を切りながらサニゴへと迫って行く。だが、すぐにカスミはサニゴに指示を出す。

「サニゴ!【パワージェム】!!?」

「サニゴツ!!?」

指示を聞いたサニゴは宝石のように神々しく光り輝くエネルギー砲をムクバードに向けて放った。放たれた【パワージェム】はムクバードに直撃する。

「大丈夫ですか!??ムクバード!!!」

「ムツク!!?」

技を受けてプールへと急降下していくも、なんとか翼を広げたムクバードは不着寸前の所で体勢を立て直した。

立て直したもののムクバードは蹠跟めきながら飛行していた。岩タイプの技も、もちろんムクバードには効果は抜群である。

もう一度の接近攻撃は危険ですね。でしたら、サニゴの様子を伺うのが適切。

リーリエはムクバードに後退するよう指示を出す。

「ムクバード!ここは【かげぶんしん】です!!?」

「ムツク!!?」

さらに分身を出現させてはサニゴの周りを取り囲む。安全な対策を取ったつもりでいたのだが、それはいとも簡単に崩されてしまっ

た。

「みずのはどう」!!?」

サニーゴは球体状に形成させた水のエネルギーを分身するムクバードではなく、プールにと放った。プールに放たれた「みずのはどう」は振動によって大きく四方八方へと波打ちをあげた。

飲み込まれたムクバードの分身が次々と消えていくと、本体を残したままムクバードを押し出した。

「立て直してー!」【でんこうせっか】です!!?」

「ムツク!!?」

「パワージェム」!!?」

「サゴ!!?」

押出されたものの力一杯に翼を広げたムクバードは猛スピードでサニーゴに突っ込んでいく。その予想外のカウンターにカスミもサニーゴもすぐには対処できないと思っていたのだが、幾多の挑戦者と戦ってきたハナダジムのジムリーダーを甘く見てしまった。

ムクバードが接近する方へとサニーゴは「パワージェム」を放つ。躲すすべがなくそのままムクバードに直撃する。

「ムクバード!!!」

氣力を果たしたムクバードはそのままプールへと不着してしまつた。

「ムクバード戦闘不能!サニーゴの勝ち!」

二回目の攻撃には流石のムクバードも耐える事が出来なかった。「戻って下さい。ムクバード!ありがとうございました。ゆっくり休んでください」

懸命に戦ったムクバードを戻すと、最後の一体を解き放つ。

「行きましよう！キモリ！」

「キヤモ!!?」

飛び出したキモリは軽やかに浮島に着地を決めた。その様子はスターミー戦でのダメージ感じさせないほどであった。

ハナダジムは終盤へと向って行く。

「キモリ！【エナジーボール】!!?」

先手必勝に相性の良い草タイプの技を放ったキモリの技はサニーゴへと向って行く。するとカスミは冷静に対処する。

「サニーゴ！【ミラーコート】!!?」

「サツゴ!!?」

躲さずにキモリの【エナジーボール】を受けたサニーゴはそのままそのエネルギーをキモリへと跳ね返した。跳ね返されたエネルギーはキモリを包み込んだ。包み込まれたキモリは雄叫びを上げながら吹き飛ばされてしまった。

《観戦席》

「跳ね返された!!!」

「そうなんだよ！あのサニーゴこの技を使ってくるから厄介だったんだよ！」

リーリエを含む観戦席でバトルを見ているカノン達もサニーゴの【ミラーコート】に驚いていた。だが、驚いていたのは跳ね返された事ではなく、その威力にだ。

【ミラーコート】は自信が受けた特殊ダメージを倍返しに跳ね返す技だ。サニーゴは岩・水タイプ。キモリの草タイプの技はサニーゴには通常よりも四倍近いダメージを受けてしまう。そのダメージを倍返しされてしまったら、キモリには相当なダメージが入ったのは間違いないな」

ジョウト地方で一緒に旅をしていたタケシにはカスミのサニーゴが【ミラーコート】を使ってくるとは予想していた。それよりもキモリの【エナジーボール】を受けてもサニーゴはすぐに攻撃に移せるほどでいた。おそらく【エナジーボール】の直撃を食らう所でわざと霞めて受けるダメージを最小限に抑えていたのかもしれない。受けた

ダメージをおさえた所であっても、キモリに跳ね返ってくる四倍ダメージの倍返し威力はかなりのものだ。

「だけど、『ミラーコート』はサニーゴもダメージを受けないと発動できないんですよ！だったら、まだリーリエの方が優先だよ」

「コン!!?」

カナンの言ったように、技を受け流されようとも霞めたダメージは蓄積されれば長くは持たない。それに「ミラーコート」を発動させる前にサニーゴを先頭不能にすればいいのも確かだ。だが、カスミのサニーゴにはあの技も持っていることはタケシ以外に知る者はいない。

《ジム戦》

「キャ…モ…」

「大丈夫ですか！キモリ！」

サニーゴの「ミラーコート」には驚いたが、リーリエもカノンと同じような事を考えていた。「ミラーコート」の長所と短所を理解しているリーリエの目は諦めていなかった。

だが、ここでタケシが予想していたもう一つのサニーゴの技がカスミに指示される。

「サニーゴー・【じこさいせい】!!?」

「サツニ!!?」

その技も使えることにリーリエは啞然とした。サニーゴは自身を光り輝かせると、見る見る内に受けた傷が治して行く。光終えたサニーゴを見ると小刻みにジャンプしている元気に回復したサニーゴの姿があった。

【ミラーコート】に【じこさいせい】によるコンボ。受けたダメージを回復させられてしまえば、どう立ち回ればいいのか分からない。今は戦いの中でその攻略法を見つけるしかない。

「キモリ！【でんこうせっか】です!!?」

「サニーゴー・水の中へ」

キモリの【でんこうせっか】を避けるとサニーゴはキモリの技が届かない水の中へと避難した。

【じこさいせい】!!?」



さらに安全な水中の中で【じこさいせい】で回復する。

「水面に【はたく】攻撃です!!?」

「キャモ!!?」

「サニゴツ!!!」

ヒトデマンの時にやった戦法でキモリはサニゴを水の中から引っぱり出すと、すぐにサニゴの姿を捕らえた。

「今です!・【エナジーボール】!!?」

「みずのはどう!!?」

吹き飛ばされたサニゴにキモリは【エナジーボール】を叩きつけるも、サニゴはそれを【みずのはどう】で相殺させた。

「【じこさいせい】!!?」

「サニツ!!?」

じこさいせい

まさか…

もしかしたら…

何かを察したリーリエは一か八かではあるけど、その可能性に賭けてみる事を決めた。その真剣な目はキモリにも伝わっていた。キモリも自分の主人であるリーリエに全てを任せる気ている。キモリと相槌を立てるとキモリに指示を出した。

「キモリ！【エナジーボール】です!!？」

「キヤモ!!？」

《観戦席》

「えっ！【エナジーボール】!!!」

「【ミラーコート】の倍返しを食らっちゃうぞー！」

「たしかに冷静な判断ではないみたいだね」

《ジム戦》

わたくしの読みが正しければ…カスミの次のこうげきは…

「サニーゴ!」【ミラーコート】!!?」

「サニゴツ!!?」

「躲して下さい!」

再びキモリの【エナジーボール】を受けたサニーゴはそのまま力一杯に跳ね返した。跳ね返された技はキモリに迫ってくるが、瞬時にキモリはそれをジャンプで躲した。するとすぐにリーリエは…

「もう一度!」【エナジーボール】!!?」

なんとすぐに【エナジーボール】をキモリに指示を出す。カノン達は再びサニーゴの【ミラーコート】の餌食になってしまうのではないかと思っていた。だが、

「サニーゴ!」【パワージェム】!!?」

今度は【ミラーコート】ではなく別の技でキモリの技を相殺させて防いだ。

やはり、そうですね。

何かを確信したリーリエはふと笑みを浮かべると、それに気づいたカスミはふとリーリエに笑みを立てて返した。

### 《観戦席》

リーリエの破天荒な攻撃の指示にサトルは突然に何か閃いたかのように、その場に立ち上がった。

「そうか…これは逆に【ミラーコート】封じになっているんだ!」

【ミラーコート】封じ?どういうことだよ?サトル?」

最初の【エナジーボール】を【ミラーコート】で防いだのだが、二回目の【エナジーボール】は【パワージェム】で打ち消した。この一部始終を見てサトルの閃きは確信に変わった。

【ミラーコート】を発動するには倍返しにする技を受けなければならぬ。だけど、それはサニーゴにとっては大きな負担になるんだよ。その証拠にサニーゴは小まめに【じこさいせい】で回復しているからね」

サトルの言った事にカノンとソウタはまだ意図を掴めていない様

だが、それを聞いてサトルの言っている事を理解したノゾミも口を開いた。

「なるほどね。一回の【じこさいせい】だけでは完全に回復するのに追いつけていない訳だね。一見して強力な技とも見えるけど、全ての技を【ミラーコート】で対処してしまえば先に力尽きるのはサニーゴの方になる」

「そういう事だよー」

それを聞いてやっと分かったカノンとソウタは同時に声を揃えた。

「それに気づいちやうなんて、凄いやりーリエー」

「コーン!!?」

サトルとノゾミの説明で【ミラーコート】の欠点を知る事が出来た。

分析から勝つための糸口を探り当てながら、大きな逆境を跳ね返していくりーリエの力強さに元ジムリーダーでもあったタケシは感心していた。

《ジム戦》

りーリエの観察力にはカスミも驚かされた。多くの挑戦者はサニーゴの【ミラーコート】を前に萎縮してしまうのだが、りーリエは諦めず戦いの中から勝利への活路を導き出して来た。

「本当に…驚かせてくれるわね」

初心トレーナーとは思えない諦めない強情な精神。カスミにはりーリエとサトシが重なって見えているようだった。

「どうしました?カスミ」

「なんでもないわ。さあ、行くわよ!泣いても笑ってもこれがラストバトルよ!」

「はい!」

カスミの声にりーリエも大きく返事を返した。両者の気合の入った声にキモリもサニーゴも一段と身構えた。

「キモリ! 【エナジーボール】!!?」

「サニーゴ! 【みずのはどう】!!?」

二つの技は一気に衝撃波とともに相殺された。

「【でんこうせっか】です!!?」

その衝撃波に飛ばされないように堪えながら、キモリは思いっきり地面を蹴り出すと一直線にサニーゴへと突っ込んでいった。

「迎え撃つてー！」

キモリのスピードから躲するのが難しいと判断により、サニーゴは躲さずに硬いボディでキモリの【でんこうせつか】を受けた。効果はいまひとつであったが、キモリの強烈な体当たりにはサニーゴも決めたキモリも後退した。

「ジャンプです!!！」

「キヤモ!!?！」

さらに今度は地面を大きく蹴ると、キモリは天井高くまで大きくジャンプした。サニーゴの姿を捕えると、両手を前に出した。

「【エナジーボール】!!?！」

「【みずのはどう】!!?！」

再び両者の技が激突した。さっきとは力一杯に込めて放ったため、すぐに相殺はされずに重なり合うエネルギーから火花を散らしながらの押し合いが始まった。

一気に肩を付けようとリーリエはもう一度【エナジーボール】を指示するわ。それなら一度回復させてから【ミラーコート】で勝負を決めるわ。

そう読んだカスミはサニーゴに【じこさいせい】を指示する。だが、ふとキモリの方へと目をやったカスミは目を見開いた。

キモリは空中に跳んだまま尻尾を大きく回し始めたのだ。そしてそれを見たリーリエは力一杯にキモリに指示を出した。

「キモリ! 【エナジーボール】に【はたく】攻撃です!!?！」

「キヤアモ!!！」

キモリはそのまま尻尾でぶつかり合う【エナジーボール】を力一杯に下へと叩きつけた。叩きつけられた【エナジーボール】はそのまま一気に押し出されては【みずのはどう】を打ち消しながら、サニーゴの方へと撃ち込まれた。

「サニゴッオオオ!!！」

押し出されたスピードにサニーゴは気づくも躲す時間がないまま、

そのまま緑の発光に包み込まれてしまった。

「サニーゴ!!!」

サニーゴを呼びかけるも、「エナジーボール」の衝突により爆煙が生まれた。爆煙が晴れた頃にはプールで目を回しているサニーゴの姿が確認された。サニーゴの様子を見た審判は大きく手を上げてコールした。

「サニーゴ戦闘不能！キモリの勝ち！」

よって勝者はチャレンジャー、リーリエ！」

「やったあ!!!やりましたよ。キモリ！」

「キャ：キャモ!!?」

審判の声にリーリエは大きく跳び上がった。勝負が終えたキモリがリーリエがいるトレーナーサイドに戻ると、リーリエは思いつきりキモリを抱きしめた。キモリは若干頬が赤く染まりながらも、涼しげな表情で返事を返した。

《観戦席》

「勝ったああああ!!!」

「コーン!!!」

「凄くいいバトルだった！」

勝負を終えた二人に大きく拍手が巻き起こった。

《ジム戦》

「お疲れ様。サニーゴ！」

「サゴ…」

「気にしないで！よく頑張ってくれたわ。ゆっくり休んでね」

サニーゴに感謝の意を伝えると、すぐに休ませてあげるようにルアーボールへと戻した。ルアーボールをしまうと、カスミは今日のジム戦で頑張ってくれたコイキングとムクバードも加えて喜び合うリーリエの元へと向かった。

「やるわねリーリエ。凄く楽しかったわ！」

「カスミ。お手合わせして頂いてありがとうございます！」

互いに握手を交わすと、カスミはポケットから青く光る雫をモチーフにされて作られたバッジをリーリエの前に差し出した。

「さあ！受け取って、ハナダジムを降した証のブルーバッジよ！」  
「ありがとうございます！カスミ！」

お礼を言ってカスミからブルーバッジを貰うと、そのまま天高く掲げた。

「ブルーバッジ！ゲットです！」

「ココツ!!?」

「キャモ!!?」

「ムックバー!!?」

こうしてリーリエは二つ目のバッジを手にした。

~~~~~

「一緒に行けたらって…思ったけどな」

「ごめん。アローラの水系ポケモンには興味があっただけど、急にジムを閉めることはできないわ」

その後、カノンとサトルのジム戦を終えてはその後みんなで祝勝会を挙げた翌日、リーリエ達はクチバシテイへと旅立とうとしていた。

一緒にアローラ祭に参加しに行かないかとタケシに誘われたのだが、急にジムを閉める事は出来ないかと残念そうにカスミは断った。

「何処かでサトシにあったら、宜しく！って伝えといて！」

「ああ！」

「五人はこれからのジム戦頑張るなさいよ！ポケモンリーグには私も応援しに行くから！」

「ありがとうございます。カスミ！」

「うん！がんばりーリエ！」

「がんば…リーリエ？」

「気にしないで下さい／＼／＼／＼」

こうしてカスミと別れたリーリエ達はハナダシティを後にした。しばらくの間、アローラのポケモンに興味を持ったソウタとノゾミも加えて一同はクチバシティへと旅立った。



## 第二十二話 友情の灯火

見事二つ目のジムバッジを手にしたりリーリエ達は開催間近になったアローラ祭に向けてクチバシテイへと向かっていた。

「うめー!!! サトル達こんな美味しい飯喰いながら旅して来たのかよ!」

「どうよ! 羨ましいでしょ♪」

「なんでカノンが威張ってるの?」

「本当に美味しいよ。私にも教えて欲しいほどだよ」

「だな! タケシ、おかわり!!!」

「おう! たくさん食べてくれ」

ハナダシテイで出会ったソウタとノゾミもメンバーに加えた一同は暫しの休憩を挟んでランチタイムを楽しんでいた。

「そーいや、リーリエは?」

「ああ…リーリエなら彼処にいるよ」

リーリエを探すカノンにノゾミは向こう岸へと指をさした。その方角にはリーリエとオツキミ山で捕獲したズルズキンの姿があった。

「ズルズキン! わたくし特製のポケモンフーズ。良かったら食べてみませんか♪」

「……………」

「……………美味しいですよ♪ 貴方もきつと気に入ってくれると思いますの!」

「……………」

「えっ…と、もし今は食欲なければまた後にしましょうか?」

「zzz…」

「うつ／＼／」

「おい…泣きそうだぞ」

『リーリエに対するズルズキンのなつき度はおよそ1.5%ロト』  
「余計な事しない方がいいと思うよ。ロトム」

「リ…リーリエ!!! ほら! こっち来て一緒に食べよ!!!」

なかなかズルズキンと打ち上げれずに、今にも泣き出してしまいそ

うなりーリエをカノンはりーリエの手を引いて、食卓の方へと向かっていく。

そんなりーリエをズルズキンは少し振り向いては目をやるが、そのまますぐに眠った。その様子からノゾミもりーリエとズルズキンの今の関係性がどういうものかは察した。

合計五杯もおかわりしたソウタは満腹なった腹を叩きながら立ち上がった。

「食った！食った！食ったらバトルの練習だ！付き合えサトル！」

「いや：僕はまだ食べ終わってないよ」

「んだよ。じゃあ、自主練でもして待ってるからな！行くぞ！クチー トー！」

「クチ!!？」

そのままソウタはクチー トを連れて、林の中へと入って行った。

「忙しい所はサトシに似てるね。ソウタは」

「言われてみればな」

そんな会話をしていると、さつき林の中へと潜って行ったソウタが慌てた様子で戻って来た。

「みんな！ちよつと来てくれ!!!」

慌てた呼びかけにりーリエ達はすぐにソウタの元へと駆け寄った。昼食を取っていたポケモン達に留守を任せてから全員がソウタの元に集まると、そのソウタの跡を追いながら林の中へと入って行った。

入ったと言ってもすぐの場所だった。茂みを掻き分けた先には、木々に囲まれた巨大な岩山が聳え立っていた。そして、ソウタはその岩山の少し上辺りの所を指差した。

「あのポケモンは…」

『ボクにお任せをロト!』

そこに居たのはポケモンだった。そのポケモンは身を丸めながら此方の方を警戒しながら、リーリエ達を見下ろしていた。

『ヒノアラシ ひねずみポケモン

炎タイプ

臆病な性格でいつも身体を丸めている。背中から炎を噴き上げて身を守る。怒った時の勢いは良いが、疲れている時は不完全燃焼してしまう』

ロトムの解説により、そのポケモンはジョウト地方の初心者用ポケモンとしても渡されている炎タイプのポケモン、ヒノアラシである事がわかった。周りにトレーナーらしき人物が見当たらない所、野生なのかもしれない。野生ではあまり確認されるのが難しいポケモンであるため、リーリエ達は暫くヒノアラシに釘付けとなった。

そして、ある事にリーリエ達は気づいた。少しばかりか呼吸がしづら iba かりか弱っている様子でもあった。その状態からあのヒノアラシは怪我をしているのではないかと推測する。

「かなり弱ってるみたいだな…すぐに治療を…」

タケシはすぐにヒノアラシの状態を見ようと近づいて行った。それを見たヒノアラシは…

「ヒノオ!!?..」

すぐにリーリエ達に向かって炎を放った。繰り出されたヒノアラシの攻撃はリーリエ達のすぐ足元よりも前の方へと放射された。

「かえんほうしゃだ！」

『弱つているとはいえ凄いパワーロト！』

野生ポケモンとは思えない威力の火炎放射に放ったヒノアラシの様子を見ると、今度は冷や汗を少し掻きながらさつきよりも呼吸が乱れているのが分かった。一刻も早く治療しなければならぬと判断したタケシはすぐにサトルの方へと目をやった。

「サトル！クルマユの「くさぶえ」を頼む！」

「分かった！」

サトルは急いでクルマユを呼びに走った。

「頼む！クルマユ!!!」

「マユツ!!?」

連れて来たクルマユの草笛でヒノアラシは静かに眠った。

タケシはそのまま眠ったヒノアラシを抱えて岩山を降りると、すぐにいい傷薬など必要な回復道具を手にして治療を行った。治療を続けていくと、少しずつタケシの表情が曇ってきている様に見えた。何かに引つ搔かれた傷などから何かの事故に巻き込まれたわけではなく、明らかに他のポケモンによる攻撃によって負った傷である事がわかった。その傷は一刻も早く治療しないといけないぐらいの深手だったと言う。

「よし！これで大丈夫だ！」

『流石はタケシだロト！』

「ありがとうございます。タケシ」

リーリエ達に見守られながらも、ヒノアラシの治療は無事に終わった。治療終えたがヒノアラシはまだぐっすりと眠っていた。

目が覚めた後、刺激させて体に負担を掛けてはいけなと思ったリーリエ達はヒノアラシが目を覚ます前にここから離れる事を決めた。

起きた時に体力をつけられる様にヒノアラシの側にオレンの実を置くと、そのままリーリエ達はヒノアラシと別れた。留守を頼んだポケモン達をモンスターボールに戻しては近くのポケモンセンターへと向かい始めた。

~~~~~

「どのポケモンセンターに来ててもポケモンバトルは耐えないね」

日没後には雨が降ると予想されていたので、それまでにリーリエ達はポケモンセンターに着くことが出来た。

「あいつ…大丈夫かな…」

ソウタはヒノアラシと別れた方へと向いていた。最初にヒノアラシを見つけただけあって、ここポケモンセンターへと向かう道程の途中でもソウタはヒノアラシの事を気にかけていた。タケシからの怪我の状態を聞いたからでは、また他の強いポケモンに襲われないかどうか心配なのだ。

「きつと、大丈夫だよ。ソーちゃん」

そんなサトルの言葉にソウタも頷いた。オレンの実も置いてきたのだ。それを食べればもうばっちり回復しているはずだ。と言い聞かせては心配事を振り払った。

すると、バトル施設ではそんなもやもやとした気持ちを一気に吹き飛ばしてしまうぐらいの白熱としたバトルが行われていた。

興味を持ったリーリエ達はすぐにバトル施設へと向かった。そこで戦っていたのは、ここカントーではノーマルタイプと分類されているラツタと顎の周辺を炎で覆っている大きいポケモンが対峙していた。

「おお!!あのポケモンなんだ?」

「あれはエンブオーだ」

「エンブオー?」

タケシからそのポケモンの名前に聞き覚えがない一同にロトムは空かさずそのポケモンの解説を行った。

『エンブオー おおひぶたポケモン

炎・格闘タイプ

炎の顎髭を蓄えているポケモン。髭の炎が燃え上がるのは気合が入った証。パワーとスピードを兼ね備えた格闘技を身につけている。』

ロトムの説明が終わったその直後、そのエンブオーの「かえんほうしゃ」がラッタに炸裂した。炎に包まれたラッタはそのまま戦闘不能となった。

「あく、ラ…ラッタ…」

「俺たちが勝ったのは当然の結果だ。この『ファイアウオーリアーズ』に敵などいるものか」

勝利を得たエンブオーのトレーナーは高らかに笑い出すと、エンブオーをモンスターボールへと戻した。戻したエンブオーのモンスターボールを仕舞うとすぐにラッタのトレーナーの方へと歩き出した。

戦ったトレーナー同士、互いの健闘を讃え合うための握手を交わすのかと思いきや、そのエンブオーのトレーナーはとんでもない事を口にした。

「さあ出せよ！お前の中の強いポケモン！」

なんと負かした相手からポケモンを奪い取ろうとしているのだ。

「何あいつ！」

エンブオーのトレーナーを睨むカノンを前にすぐにソウタはそのトレーナーも方へと走り出した。

「おいおい！お前！負けた相手からポケモン取ろうと済んじゃうねえよ！」

ソウタはラッタのトレーナーの前に立つと、エンブオーのトレーナーを睨みつけた。

「なんだ？お前には関係ないだろ！」

突然出てきたソウタに呆れた表情で返事を返した。そのトレー

ナーにソウタに続いてノゾミも歩み寄っては言い返した。

「たしかに関係ないけど、あんたの今のやり方を見て黙って見過ごす訳にはいかないよ!」

出てきたソウタとノゾミだけでなく他の四人の人影に気付いたエンブオーのトレーナーは面倒臭くなったのか。何も言わずにその場を立ち去った。

「大丈夫?君」

「うん:助けてくれてありがとう」

「それよりも何なのあいつは!凄くやな感じの人」

「彼はスワマ:イツシユ地方から来たトレーナーみたいなんだ。何がなんでも強いポケモンを手に入れようと勝負に負けた相手から無理矢理ポケモンを奪おうとするんだ」

勝負を受けられたラッタのトレーナーはそのエンブオーのトレーナーであるスワマについて話した。しかもそのバトルは互いの同意ではなく、スワマから無理矢理バトルを受けさせられた物が多いと聞くことタチの悪い事だった。

~~~~~

ラッタのトレーナーを助けた後、リーリエ達はポケモンセンター内のレストランで夕食を取り始めていた。

「他方からやって来て本当に迷惑もいい所だわ!」

「まあまあ、もう済んだことだ。気にせずに食べようじゃないか」

スワマに対して物凄く頭にきていたのか文句を言いながら料理を食べているカノンを取ケシは慰めていた。

そんな矢先、噂をするとリーリエ達が座っている近くにスワマの声

が聞こえた。その発声音は彼の声を聞きたくなくても、自然に耳の中へと入ってしまうほど大きなものだった。

「まあ、こんな所だな。今日もいい収穫だったぜ。よくやったなエンブオー！」

彼はエンブオーを連れては大量のモンスターボールを並べては高らかに笑っていた。

そして、すぐに耳を疑う事を言い出したのだ。

「やっぱり強いポケモンはこうやって手に入れた方がいいさあ。地道にポケモンを育てあげるなんて、そんなまどろっこしい事してられつかよ。あのヒノアラシも捨てて正解だったわ」

!!!!!!!

「野生では珍しいし、技もそれなりに使える物を持っていたから思わず捕まえたけど、バトルになると弱すぎて話になんねえからな。見たかエンブオー！彼奴をあつ岩山に置いた時の反応よ！逃したのに連いて来るわ。来るわ。思い出しただけでも笑っちゃおうよな!!!」

岩山に置いて行った。との発言からそのヒノアラシはポケモンセンターに来る前にリーリエ達が治療したヒノアラシであった事が分かった。

「おい……てめー!!!」

「ちよつとソーちゃん!!!」

怒りが頂点に達したソウタは止めるサトルの声を振り払うと、スワ



マの方へと向かっていく。ソウタの接近に気付いていなかったスワマはそのままソウタに襟元を掴まれてしまった。

「痛ってな！何だよ。お前！」

「さっきのどういう意味だ！」

ソウタの危機迫る表情にも気にも止めずにスワマはその口を開いた。

「意味も何もそのままの意味さ！俺の満足いくレベルにあのヒノアラシは達していなかった。だから捨てた。それだけのことだ！」

「くっ!!!」

「落ち着きな。ソウタ」

ソウタの肩にノゾミはそつと手を置いた。止められたソウタはそのままスワマを掴んでいた手を離れた。乱れた服を整えながら険悪そうに見るスワマにノゾミは話し始めた。

「手持ちのポケモンを逃がすことはそう珍しくない。あんたに限らずやっているトレーナーもいるから、その点に関しては、とやかく言うつもりはないよ」

その後、ノゾミは少し声のトーンを上げると続けて話を進めた。

「だけどねーあんなに傷ついた状態で逃がすことはないんじゃない！少なくとも傷つけてしまった時はまだあんたの手持ちであったはずだ！バトルで傷ついたポケモンはすぐにポケモンセンターで診せて上げる事はトレーナーの役目として絶対に怠ってはいけない事だと思っよう！」

ノゾミの言葉に跡を追ってきたリーリエ達も静かに頷いた。だが、その言葉を打ち消すかのようにスワマは不敵な笑みを浮かべると、そのまま反論し始めた。

「はあ？どうせ捨てるポケモンをわざわざポケモンセンターで治療受けさせてどうするんだよって話だ！逃した時点であいつはもう俺の手持ちじゃない。その後、どうなるかなんて知った事じゃねえわ!!!」

その無責任な発言には流石に殴りかかろうとしたソウタを止めたノゾミも手を震わせていた。

「あんた…想像以上のクズだね」

その怒りに答えるかのように、轟く雷鳴と同時に窓の外から雷の光がポケモンセンターを照らした。

「あ…雨」

天気の詳細は当たったみたいだった。そして雷によって会話が遮られてしまったためか、スワマはリーリエ達に背を向けるとその場を立ち去った。

「おい！待てよ!!!」

ソウタの声に気にも止めずに立ち去るスワマの方を見ていると、突然に思い出したかのようにカノンが声を上げた。

「ねえ！あのヒノアラシ！まだあの岩山にいるんじゃない!!!」

スワマの会話からは捨てられても彼の元へと行こうとしていたと言う。怪我が治ったとしても、まだあそこで彼が来るのを待っているとしたら…

最悪な事態を想定してしまったリーリエ達はジョーイさんからレインパーカーを借りると、急いでヒノアラシがいたあの岩山へと駆け出して行った。

~~~~~

降り注ぐ豪雨。鳴り響く雷鳴。行く手を遮る突風。それでもリーリエ達は休む事なく走り続けた。そして、ヒノアラシを見つけたあの岩山へと到着した。

『いたロト!!!』

ロトムが指した先には、岩陰に身を潜めては雨風を凌いでいたヒノアラシの姿があった。やっぱり、まだ彼処を離れていなかったんだ。すぐにヒノアラシの元へと近づこうとソウタは岩山を登り始めたそ

の時。

突然に草むらから現れたオニスズメ達がヒノアラシを攻撃し始めた。

「やめろ！オニスズメ!!!」

ソウタの声に反応すると、その内の一体がソウタに攻撃を仕掛けた。

「シロン！【こなゆき】!!?」

「コーン!!!」

すぐにリーリエはシロンの【こなゆき】でオニスズメを振り払った。すると、残りのオニスズメ達も一斉に攻撃を仕掛けたリーリエ達に向かって飛びかかってきたのだ。

「フシギダネ！【つるのムチ】!!?」

「ニヤルマー【シャドークロー】!!?」

前方から飛んできたオニスズメをカノンとノゾミとで対抗した。

「クチート！【ようせいのかぜ】!!?」

「シロン！【こなゆき】!!?」

さらに真上から攻撃を仕掛けたオニスズメをソウタとリーリエで追い返した。

「ピカチュウ！【10万ボルト】!!?」

最後にサトルのピカチュウで全羽のオニスズメを一網打尽にした。尻尾の避雷針により雷の力を受けた【10万ボルト】のパワーにオニスズメ達は為すすべもなくその場を退散した。

無事にオニスズメを追い払ったリーリエ達はすぐに雨で冷え切ったヒノアラシの体を毛布で包んだ。タケシはすぐにラッキーとクロバットをモンスターボールから出現させた。

「ラッキーは【たまごうみ】!!?クロバットは超音波を頼む！」

ラッキーの力で回復させた後、クロバットの超音波で心電図を通してヒノアラシの脈を計り始めた。

「しっかりしろよーヒノアラシ!!!」

すぐに毛布に包んだヒノアラシをソウタは抱きかかえると、そのままリーリエ達はポケモンセンターへと急いで戻った。

~~~~~

ポケモンセンターに到着後、すぐにジョーイにヒノアラシを診せた。すぐにジョーイはヒノアラシを連れて救急治療室へと運んだ。

そして三十分後、ヒノアラシを抱きかかえたジョーイがリーリ工達の前に現れた。

「ジョーイさん！ヒノアラシは…」

「大丈夫よ！タケシ君の応急処置のおかげもあってすぐに回復したわ」

「そうですか…よかったです」

日中にタケシが治療したばかりであったために大事に至らなかったのは幸いであった。さつきまで傷だらけで体を震わせていたヒノアラシだが、治療室から出てきた表情を見ればもう心配はいらないようだ。

「ヒノ!!!」

「みなさん！ヒノアラシが…」

いきなり何かを見つけたのか。ジョーイの腕から離れたヒノアラシは一目散にある者へと駆け寄って行った。

そう…

「なんだ、お前…」

あの男スワマにだ。ちょうど、自室へと戻ろうとした姿を目撃されたみたいだ。

「ヒノ！ヒノ！」

見つけてはヒノアラシはスワマのズボンの下を引っ張りながら何かを訴えているようだった。

その様子からこのヒノアラシは自分の手持ちにいたポケモンであ

る事に気付いた。だが、かつての自分の手持ちにいたヒノアラシをスワマは何事もないように冷めきった目でヒノアラシを見ていた。

「ヒノアラシ！」

「あっ…お前」

「何だ…またお前らか」

ヒノアラシを追っていたリーリエ達と鉢合わせになった。リーリエ達が来てもヒノアラシは一切こっちは振り向かずスワマの方をジッと見ていた。

あの嵐の中でポケモンセンターに連れて助けて上げたのはリーリエ達の方であったのだが、やはり自分の主人。どんな形であろうと、ヒノアラシはこれほどスワマを慕っていたっていう事は今のヒノアラシの姿を見れば誰にでも分かっていた。そんなヒノアラシの姿を見たサトルはただ一人スワマの方へと近づいて行った。

「サトル？」

サトルの行動に疑問を持ったカノンであったが、サトルはその口を静かに開いた。

「確かに最初っから強いポケモンもいるし、弱いポケモンだっている。だけど、どんなポケモンだって努力次第では必ず強くなれると僕は思っている。勝ちたいなら強いポケモンを使えばいいという君の考えを否定するつもりはないけど、ポケモン達と信じて二人三脚に頑張って強くなって行くのも悪くないんじゃないかな？その方がバトルに勝った喜びはもっと大きな物になると僕は思うんだ！」

力強くサトルはスワマに訴えた。トレーナーとして旅立つ前はあまり自分から前に出る性格でなかったのに、今の自分の行動には驚いていた。

サトルの言葉に背中を押されたりリーリエ達も力強くスワマの方へと目をやった。同じようにスワマにもサトルの言葉を聞いてから考え方を改めて欲しいと思った。

しかし…

「それがめんどくさいんだよ…」

「えっ!?？」

その言葉にサトルだけでなくリーリエ達も耳を疑った。スワマの目は厳しくこちらを睨んで来た。その目からは何かしらの憎悪が感じられた。

「お前も…」

そしてその目は自分の足に寄り添うヒノアラシに向けられた。それでも離れないヒノアラシに対して苛立ちが最高潮になったスワマはおもいつきりヒノアラシがしがみついている反対の足を上げ始めた。

「いつまで俺に寄り添っていやがんだああああ!!!」

「ヒノアラシ!!!」

そして、そのままヒノアラシを蹴り飛ばしたのだ。ヒノアラシはサトルの一步手前の所まで放り出されてしまった。

「おい！お前何しやがんだ!!!」

「まだ病み上がりなのよ!!!」

ソウタとカノンも同時にヒノアラシは抱きかかえるサトルの元へと駆け出した。スワマは荒々しく息を吐き出しながらサトル達を睨み返した。

「つたくよーマジでバカなポケモンだわこいつ！俺はもうお前の事なんてどうも思っただねえんだよ!!!」

「ヒノ…」

「俺はなあ。ポケモンを捨てる時は自分もつらい思いをしている様な振りをするんだよ！そうしないといつまでも引きずる奴が出てくるからだ！あーあ!!!別れのつらさの振りしとけば大概のポケモンは諦めてくれるのよ！」

何かが切れたのか。スワマは平然と吐き捨てるようにヒノアラシを罵り始めたのだ。

「あんた！自分が何を言ってるか分かってるの!!!」

「お前！それでもトレーナーか!!!」

流石のスワマの言動や行動にノゾミも滅多に感情的にならないタケシも口を揃えてはスワマを非難した。

それなのに、スワマはポケモンセンターを利用している他のトレー

ナー達の目にも気には止めずに、トドメを刺すような言葉を力一杯放った。

「何とでも言ってる！力こそ正義だ！トレーナーが才能あるポケモンを求めるのは当然だろうがよ!!!」

「ふざけないで下さ!!!」

ここにいる誰もがその人物に目が集まった。その人物は震える両手でスカートの裾を握り締めながら声を上げた。涙で滲む敵意を持つその目はスワマに向けられていた。

「ヒノアラシの辛さを貴方は何も感じて上げられていないのですか！ポケモンは貴方が強くなるための道具ではありません!!!自分のしゅ：親から見放されてしまったこの痛みが：どれほど辛くて苦しいものか：貴方は知っていますか!!!」

過去の自分と照らし合わせるかのようにリーリエは思った事を吐きだした。感情的になり涙声になりながらも叫んだ。

少しの沈黙が空くとスワマは何事も言わずに立ち去る事なく、今度は自らリーリエ達の元へと近づいてきた。

『な…何か用ロトか!!!』

リーリエを守るように前に出たロトムの声にスワマは応えた。

「そこまで言うなら実力を見せて貰おうじゃん!?!?」

「実力…」

「そのヒノアラシと俺のポケモンで対一のバトルだ。勝ったら、土下座でも何でもしてやるよ!」

言い争うに疲れを感じたのか分からないが、スワマは白黒はつきりつける提案を述べてきた。

「よし! だったら俺が…」

「相手はお前じゃくて、お前だ!」

勝負を受けようと前に出たソウタを退けてはスワマはある人物を指差した。

「わ…わたくしですか?」

スワマが指名したのはリーリエだ。

「お前…なかなか可愛いかもなあ」

リーリエを指名するとスワマはニヤリと笑うと、さらに条件を述べてきた。

「ただしお前が負けたら俺の女になれ! その条件なら勝負してやってもいいぞ!」

「お前!!! いい加減にしろよ!」

流石の事にソウタはブチ切れた。今にもスワマに殴りかかろうとする勢いで前に出た。そんなソウタをリーリエは呼び止めた。

「待つてください! ソウタ!!!」

呼ばれた事に気付いたソウタはリーリエに振り返る。そして、リーリエの決心がついた目を見ては後退りした。

そして、今度はリーリエがスワマの前へと踏み込んだ。

「分かりました。お受け致しますよう!」

「ちよっ…待ってよ! リーリエ!!!」

無茶な条件に止めようとするカノンにリーリエは心配ないと頷く。

「大丈夫です!」

その表現を見たカノンは止める事が出来なくなった。そして、再び



リーリエはスワマの方へと向くと一気に表現が固くなった。

俺が負けるかよ。と不敵に笑うスワマに対し、リーリエはさらにスワマを睨み返したのだ。

~~~~~

ヒノアラシを連れてリーリエはバトルフィールドに立った。向かい合うスワマはすぐにモンスターボールをフィールドへと投げ入れた。

「出てこい！クイタラン!!!」

「クイイ!!?」

『クイタラン アリクイポケモン

炎タイプ

尻尾の穴から空気を吸って体内で炎を燃やす。炎を舌の様に使い攻撃する』

ロトム of 解説からクイタランはヒノアラシと同じ炎タイプのポケモンである事が分かった。クイタランは両腕の鋭利の爪を立ててはヒノアラシを威嚇する。図鑑では長い舌がクイタランの武器かと思われたが、あの爪もクイタランにとっては最大の武器には違いない。バトルが始まる前にリーリエはヒノアラシとコンタクトを交わし

た。

「ヒノアラシー！全てわたくしに任せて下さい！」

「ヒノ…」

リーリエはヒノアラシに呼びかけるものの、ヒノアラシは自信なげそうに返答した。

その姿はこのバトルを見守っているカノン達にも不安が伝わっていた。だが、互いのポケモンが出たからには始めるしかない。タケシによる試合開始のコールが宣言された。

「それでは、バトル開始！」

？リーリエVSスワマ？

「クイタラン！【ほのおのムチ】だ!!？」

「クイ!!？」

クイタランは特徴である長い舌を伸ばすと、炎纏わせながらヒノアラシに向かって攻撃を仕掛けた。

「躲して下さーい！」

リーリエの手持ちではないが、ヒノアラシはリーリエ指示に従っていた。足元を狙ってきた【ほのおのムチ】をヒノアラシはジャンプで躲した。

「行きますよ！【かえんほうしゃ】!!？」

「ヒノ!!？」

着地したすぐにヒノアラシは背中から炎を吹き出すと口の中で炎を溜め込んだ。ヒノアラシは貯めた炎をクイタランに向かって放射しようとした。

「ヒ…ノ…」

だが、放射した直後にヒノアラシはクイタランの後にいるスワマと目があった。

元トレーナーと戦うことに躊躇いがあつたヒノアラシは溜め込んだ炎エネルギーを消すと放射するのを止めてしまった。

「ヒノアラシ!?」

『ビビッ! 何故、攻撃をしないロト!』

攻撃を止めたヒノアラシに驚くりーリエの不意をつくようにクイタランはヒノアラシに接近した。

「クイタラン! 「みだれひっかき」!!?」

クイタランはその鋭利な爪でヒノアラシを連続で切り裂き始めた。

「ヒノオオ!!」

「ヒノアラシ!」

「コーン!!?」

クイタランの攻撃にヒノアラシはかなりのダメージを受けてしまった。まだ戦闘不能にまでダメージは受けていないが、その目からはスワマと対峙しなければならぬのかという迷いが見られた。それはりーリエもシロンにも伝わっていた。

『りーリエ! このままじゃまずいロト!』

ロトムの言う通り。このままでは負け待っただけだ。観戦席にいるカノン達からの声援が聞こえるもヒノアラシには逆にそのせいで頭を悩ませてしまう事になった。

闘志が感じられないヒノアラシに対してスワマは呆れた表情をした。

「ははっ! 力がない上に頭の悪いポケモンだったな。あんなだけ罵倒したってのにまだ俺のことを主人と見るんだな」

負ける試合ではない余裕からかスワマはもうバトルには集中していなかった。クイタランも顎の周囲を掻きながら詰まらなそうにしていた。

その態度にりーリエは不謹慎に思っているのは言うまでもない。勝ちたい。あんなトレーナーに負けたくないと思っっている。

しかし、りーリエがどんなにヒノアラシのためにと思っただ勝

負であっても、一緒に戦ってくれるポケモンの気持ちがあわないとその想いは無となる。

「時間の無駄だ！終わらせろクイタラン！【だいもんじ】!!?」

「クイイイ!!?」

炎タイプの中でも強力な技を放つクイタランは一気に尻尾から大量の空気を吸い込み始めた。徐々に腹部周辺が熱が籠ったように赤くなると、大の字に形成された炎エネルギーをヒノアラシに放った。迫り来る【だいもんじ】を前にもヒノアラシは呆然と立ち尽くしていた。その目からは躲す気力がないほど虚ろんでいた。

「ヒノアラシ!!」

「ヒノ!!?」

鋭く尖った声が聞こえたヒノアラシは反射的に体が動いた。【だいもんじ】を躲した事よりも声が出た方が気になったヒノアラシはすぐに声の主であるリーリエの方へと振り向いた。

やっと試合開始から初めてリーリエとのコンタクトを合わせる事が出来た。すぐにリーリエはヒノアラシに呼びかけた。

「貴方の気持ちはわかります。ですが、貴方が彼に立ち向かう覚悟が無ければこのままでは負けてしまいます」

その言葉を掛けなくてもヒノアラシ自身も分かっているはず。だけど、言わない訳にはいかなかった。分かりきっている事を改めて聞かされたヒノアラシはさらに自身なさげに下の方へと視線を下げてしまった。

「ですから、ヒノアラシ…」

そんなヒノアラシにリーリエはさつきよりも大きな声で呼びかけた。

「スワマ<sup>彼</sup>のために戦いましょうー！」

「ヒノ…」

「「えっ!!?」」

「はあ!!?」

リーリエの発言にカノン達や対戦相手のスワマも顔を歪めていた。この発言の意図が全く理解ができないのだが、リーリエは満面の笑顔

でさらに続けた。

「彼に自分は弱くない所を見せてあげるので！僕は強いんだと！貴方の期待に応えられると！彼の元に戻りたければこのバトルに勝つて貴方の実力を見せてあげればいいのです！」

「ヒノ…」

「まだ出会ったばかりのわたくしであります、お願いします！それまでわたくしと一緒に戦って下さい！」

まだ出会ったばかりの…いや、手持ちでもない自分の事を優しく真剣に向き合ってくれているリーリエにヒノアラシは黙ったままりーリエを見つめる。

そして…

「ヒノ!!?」

迷いが吹っ切れた。ヒノアラシは再度、対戦相手の方へと振り返った。それはスワマにはなくクイタランにだ。ヒノアラシはもう一度、背中から一気に炎を吹き出すと力一杯叫び始めた。

「本当にリーリエは凄いとレーナーだよ」

今にも消えそうであった小さな灯火に決意の炎が灯った。ポケモンの心を動かすリーリエの素質には驚くばかりだ。

「ヒノアラシ！【スピードスター】です!!?」

「ヒノオ!!?」

「ちっ!!クイタラン！【ほのおのムチ】で撃ち落とせ!!?」

「クイ!!?」

無数の星型のエネルギー弾を炎を纏わせた舌で防いで行く。だが、やる気を取り戻したヒノアラシの攻撃には力強さがあつた。さつきまでと様子が変わった事にまずいと思ったスワマはすぐにクイタランに指示を出した。

「クイタラン！【だいもんじ】だ!!?」

スワマは一気に勝負を決めるため大技をクイタランに指示した。クイタランが再び尻尾で周りの空気を溜め込もうとしたその瞬間をリーリエは見過ぎなかつた。

「今です！ヒノアラシ！【えんまく】!!?」

「ヒノオオ!!?」

放たれた煙幕はクイタランの周りを包み込んだ。痛くも痒くもないその技をスワマは高らげに笑っていた。

「目眩しのつもりか！そんなんでなあ…」

「クツ…クイ!!!」

「どうした！クイタラン!!?」

煙幕など敵にはないと思っていたスワマだが、突然むせりだしたクイタランを見ては慌てた様子を見せた。何をされたか分からないスワマにリーリエは口トムを前に説明を始めた。

「ポケモン図鑑の明記通りなんです。クイタランは体内で炎を生成する際には尻尾の穴から空気を体内へと取り入れる必要があります。ですが、このように煙幕が充満されてしまった以上、十分に空気を溜め込むことが出来ないはずです！」

「くっ!!!」

クイタランの生態を上手く利用したりリエの戦法にスワマはさつきまでの余裕がすっかり無くなってしまっていた。

「自分のポケモンじゃねえのに…なんでこんなに息があつてやがんだよ…」

戸惑いが隠しきれずに漏れた声を噛み締めていた。

「ヒノアラシ！【スピードスター】!!?」

「ヒノオオ!!?」

「クイイイイ!!!」

「くっそ!!!クイタラン!【きあいだま】!!?」

「クイイイ!!?」

「【でんこうせっか】です!!?」

「ヒイノオ!!?」

「クウウ!!!」

ペースは一気にリーリエ達に傾いた。以外にも素早き関係は互角ではあったが、クイタランのパワー系攻撃を前には、ヒノアラシの先制攻撃に追いついていない。

ヒノアラシの【でんこうせっか】がクイタランの腹部に命中すると、足を滑らせては後へと倒されてしまった。

すぐに起き上がるも、上空には反動で飛び上がったヒノアラシが口を開いてクイタランに攻撃を向けていた。

「行きます!最大パワーで【かえんほうしゃ】です!!?」

「ヒノオオ!!?」

【かえんほうしゃ】がクイタランへと放たれた。炎タイプの攻撃は効果はいまひとつだが、ヒノアラシの力一杯込めた攻撃は受け止めきれないほどのパワーを放っていた。

「クツ…クイ…イ」

「クイタラン!!!」

ヒノアラシの炎技を受け続けたクイタランは発火爆発を引き起こすと、そのままクイタランは力無くし後へと崩れ落ちて行った。

「クイタラン戦闘不能!ヒノアラシの勝ちだ!」

『勝った口ト!!!』

「勝ちましたよ!ヒノアラシ!!!」

「ヒノオオ!!?」

タケシのコールにより勝負に勝ったりリーリエは急いでヒノアラシの元へと駆け寄った。優しく頭を撫でられたヒノアラシはシロンと一緒に喜び合った。

「やったあ!!!」

「勝ったぜええ!!!」

その後、カノン達もリーリエの元へと駆け寄った。みんなでヒノア

ラシの勝利を褒めたえると、自身持つことができたのか。さつきまでと違って足を小刻みにしながら喜びを体で表現した。

「戻れ、クイタラン！」

スワマはクイタランを戻すと、そのままリーリエ達の元へと向かった。

『何か文句あるロトか!?』

近づくスワマにみんな身構えるように警戒した。だが、スワマはさつきと違って穏やかな雰囲気を出していた。

「いや、俺の負けだ。素直に負けを認めるよ」

いちやもんをつけてくるかと思いきや、スワマはあっさりと自分の敗北を認めた。

人が変わったように振る舞うスワマに動揺するが、そんなリーリエ達を置いてヒノアラシに視線を合わせた。

「済まなかったなヒノアラシ。才能が無いと言ったのは俺の間違いだったよ」

ヒノアラシに自分がした事を謝るとさらに話を続けた。

「なあ！まだお前が俺の事を忘れられていないんだったら戻って来るか?」

「ヒノ…」

「もう一度俺と組んで最強の『ファイアウオーリアーズ』を結成させて行こうぜ！」

そう言って、スワマはヒノアラシを手を差し伸べた。

「ヒノアラシ…」

「コーン…」

スワマの元に戻ることにヒノアラシの願いであったかもしれないが、さつきまでのスワマのヒノアラシに対する態度を見てしまうと、素直に送り出してやる事が出来なかった。

ヒノアラシが望むなら戻らせてあげたい。だけど、素直に送り出してあげられない。そんな矛盾とした複雑な気持ち交互していた。

「さあ行こうぜ！ヒノアラシ！」

「ヒノ…」



リーリエはそんなヒノアラシを見てみると、さっきまではスワマの元に戻りたいと思っていたはずなのに何故か分からないがリーリエの方へとチラつかせながらもスワマの元に戻る事に躊躇っている様子を見せていた。

「何迷う事があるんだよ！ほら、来いよ！」

今度は自分の元へと連れようとスワマはヒノアラシの手を取ろうとした。

その瞬間、ヒノアラシは後退りした。その行動にリーリエ達もスワマも、ヒノアラシ本人も驚いていた。

「だけど、これではつきりしたみたいだ。」

「どうやらお前の元には戻らないみたいだな！」

タケシの言葉にヒノアラシも自分の今の気持ちが無処に傾いていたのが分かった。

そんなヒノアラシを見てスワマの顔つきがまた変わった。

「だったら…力尽くで奪ってやるよ!!!」

すると、モンスターボールを片手に攻撃を始めようとした。

「出てこい！エンブオー！こいつら纏めてやっちなえ…」

「ヒノオオ!!!」

「コーン!!!」

「ヒコオオ!!!」

「ピイカアチュウウ!!!」

攻撃を仕掛けるスワマからリーリエ達を守ろうとヒノアラシは「かえんほうしゃ」を放った。さらにシロンとヒコザルにピカチュウもそれぞれ別の技をスワマへと放った。

「くっ／＼／覚えてろおおお!!!」

丸焦げになったスワマはそのままエンブオーのモンスターボールを仕舞うと、一目散に逃げ帰って行った。

「いい気味よー！べえ!!!」

「ヒココ!!?」

「ポケモンを育てるよりも、まずは己を育てるんだな!」

こうしてスワマとの件に決着がついた。

「助けてくれてありがとう。ヒノアラシ」

「コン!!?」

「ヒノ…」

自分達を守ってくれたヒノアラシにリーリエは感謝の言葉を伝えた。そのままヒノアラシはリーリエ達と見つめ合った。

暫くの静寂した中、ソウタが一步前へと踏み出した。

「リーリエ。お前がゲットしてあげてくれ」

突然のソウタの言葉にリーリエは驚きながらソウタに返答した。

「ですが、ソウタはあんなにヒノアラシの事を思っていたのではありませんか。でしたらソウタがゲットされた方が…」

「心配していたのはみんな一緒だろ。だけどヒノアラシがこうして立ち直る事が出来たのはリーリエが力になってくれたおかげだぜ。このヒノアラシに相応しいトレーナーはリーリエだと俺は思う」

「ソウタ…」

リーリエはゆっくりと振り返った。想いはみんなソウタと一緒にいたい。何よりもヒノアラシが望んでいる。

リーリエは頷いて承諾すると、モンスターボールを取り出した。そして、ありったけの声でヒノアラシを誘った。

「一緒に行きましょうー！ヒノアラシ!!!」

「ヒノ!!?」

その言葉を待っていたかのようにヒノアラシはリーリエの元に向かって飛び出した。

リーリエが持っていたモンスターボールに自らの手で開閉スイッチを押すとモンスターボールへと吸い込まれて行った。カウントダウンが始まるまでもなくヒノアラシはリーリエのモンスターボールにすっぽりとおさまった。

「やったねリーリエ!」

「はい!!」

こうしてリーリエは新しく初の炎タイプとなるポケモン、ヒノアラシをゲットした。

リーリエとヒノアラシの友情の灯火はこれからの冒険の中でどう明るく照らしていくのであろうか。

## 第二十三話 ポケモンバトル

?三年前?

【マサラタウン ポケモンスクール】

「ヒコザル戦闘不能!クチートの勝ち!」

「よっしゃあ!いいぜ!クチート!!!」

「クチツ!!?」

「何やってるのよサトル。大丈夫ヒコザル!?!?」

「ヒココ…」

「あ…あんな勝ち方ある訳ないだろ。相性的に炎タイプのヒコザルの方が圧倒的に有利のはずなのに…」

「それは俺が天才だからだろ。授業の成績はトップだけど、実戦になるとダメだな。サトルは」

「なあ!!!ヒコザルの【ひのこ】を食べて防ぐなんてやり方なんて、ソーちゃんは発想が無茶苦茶すぎなんだよ!」

「だけど、勝ちも勝ちだぜ!クチートの性質を上手く使った俺の勝利の結果には変わりはないぜ♪サトル君♪」

「くっ／＼／」

こんな戦い方。僕は全く理解できない。

????????????????

クチバシテイを目指すリーリエ達。

今日のところはリーリエ達はその途中にある街。ヤマブキシテイのポケモンセンターで一泊することにした。

「さあージム戦だージム戦ー！」

「ちよつと待ってよー！ソーちゃん！」

そう。ここヤマブキシテイにもポケモンジムがあるのだ。

ヤマブキシテイが見えてきたその直後、急に丘を下って走り出すソウタをリーリエ達は跡を追いかけてながらヤマブキシテイゲートをくぐって行った。

「てか、ソーちゃんはヤマブキシムには挑戦した事があるの？」

道に迷うことなくポケモンジムへと向かっていくソウタを見てサトルは一度ソウタはヤマブキシムに挑戦しに行つた事があると思つた。サトルの声にソウタは胸を弾ませながら答えた。

「おうー！今回を入れると八回目だなー！」

「は…八回目なのですか！」

ここまでの旅を共にして、ソウタのポケモントレーナーとしての實力は新米トレーナーとは思わせないほどの實力である事は分かつた。

ポケモンセンターでの野試合でも幾多のトレーナーを相手に負けなしであつたソウタが七度も負けているジムリーダーがいる。リーリエはソウタの発言に驚いていた。

暫く走っていくとポケモンジムのロゴマークが貼られている建物が見えてきた。その瞬間にソウタの高揚感が次第に強くなつてきた。強敵と戦える喜んでいるソウタは本当にサトシと似ている所がある。

てか、マサラ人はみなそうなのか？

「見えたー！見えたー！ナツメさん!!!もう一度ジム戦お願いしまーす!…ぐほっ!!!」

ジムの扉に向かって飛び出したソウタであつたが、自動ドアは迫るソウタに反応せず、そのままソウタはクチートと一緒に扉に正面衝突した。

「大丈夫？ソウター！」

「いてて…なんで開かないんだ」

『なんか書いてあるロト!』

ロトムが指した先には一枚の張り紙が貼ってあった。そこにはこう書かれていた。

『勝手ながら申し訳ありませんが、暫くジムを休館いたします』

まさかの休館の知らせだったのだ。

~~~~~

ヤマブキシジムが閉まっていたため、一同はポケモンセンターへ向かうとした。

「仕方ないよ。ジムリーダーも忙しいかもしれないだし」

ジム戦が出来なかったソウタをなだめるようにサトルは声をかける。

「それか、修行の旅に出てたりしてね♪」

「ジムリーダーだぜ? そんな訳ないだろ」

「いや、そうとも言えないよ」

カノンの言葉をソウタは否定すると、ノゾミはそれを指摘した。

「私の地方にいるジムリーダーのメリッサさんは武者修行で良くジムを留守にする事はあるんだよ」

「ジムリーダーが修行に出向く事があるのですか?」

「ああ、ジムリーダーもただ挑戦者を待っているだけではなくて、挑戦者から学んだことを生かして鍛え直すジムリーダーは結構いるもんだぞ」

『タケシも元はジムリーダー。サトシとも旅に出たのもそれが理由ロト』

「いや、俺の場合は元々なりたかったポケモンブリーダーを目指して旅に出たんだ。その時はジムは帰ってきた親父に頼んだんだ」

「ジムリーダーもいろいろと大変なのですね」

ジムリーダーについては以前ニビジムでもタケシからいろいろと聞いた事もある。ジムリーダーも一人のトレーナー。そうやって挑戦者と真剣に向かい合う事で自身も鍛えている事にジムリーダーの偉大さをもう一度知る事になった。

「ねえ、ソーちゃん。ヤマブキジムのジムリーダーはどんな人なの？」

「おう！ジムリーダーのナツメさんはエスパーポケモンの使い手。強すぎて全く歯が立たなかったんだよ」

「エスパータイプ。確かに強そうですね」

「そうなんだよ！だからいつも一体目に完封されちゃうんだ」

その言葉を聞いて一同はまた驚いた。ジムは基本三対三のバトル。つまりジムリーダーは一体だけで三体のポケモンを倒した事になる。その事実には驚かないトレーナーはいないだろう。

「さて、この後みんなはどうする？」

「わたくしは一度、ジエームズと連絡を取りにいけます」

「私も友達と少し話して来るよ」

「俺は旅の整備品の買い出しだな。サトル達は どうする？」

「そうだな…」

ポケモンセンターに着いたリーリエ達はまず先にポケモン達を回復させた後、宿泊する部屋を男女別に取りに行ったのだが、その後、日没まで時間が充分に残ってしまった。

リーリエとノゾミは連絡。タケシは買い物。ソウタはというとかチート達のモンスターボールをもってはすぐにバトル私設の方へと行ってしまった。特にやることがなければ、ポケモン達の特訓をと考えていたのだが、そんなサトルをカノンは下から覗き込見始めた。

「じゃあ、サトル。私とデートでもしよっか♪」

カノンからのデートという発言にサトルは少し顔を赤らめた。

「デ／／／デートって／／／／ま…まあいいけど…」

「へえ〜デートって事是否定しないんだ〜」

「／／／!!!」

からかい上手のカノンさんにギクシヤクされたが、特にする事が見つかからないのでサトルはカノンと一緒にヤマブキシティを回ることにした。

~~~~~

ヤマブキシティはカントー地方の中央に位置する街で東西南北と四つのゲートから入るようになってる。

最近では最大都市なだけあって隣のジヨウト地方からの観光客が来日しやすいようにとコガネシティと繋ぐリニアが設備された。中心部にそびえ立つ「シルフカンパニー」本社を初めてとして、サトルとカノンは幾度なく建っている高層ビルに驚きながら街を観光していた。

「初めて来たけど流石は大都市だね。」

「ねえ！あそこのクレープ屋さん行こうよ！」

見つけたクレープ屋に向かってサトルの手を取るとカノンは全速力で走り出した。

「モモンの実のクレープとオレンの実のクレープお願いします♪」

それぞれのクレープを買うと、二人は公園の噴水広場の前のベンチへと腰掛けた。

クレープに噛り付くと、物凄い激的な甘さにカノンは身を少し震わせた。

「ん／／／やっぱり激甘すぎる〜」



「だ…大丈夫？」

「別に甘いのは苦手じゃないけど、甘すぎるのはやっぱり限度があるよ。」

モモンの実は木の実の中でも甘さが最も際立つ木の実だ。その甘い香りに野生のポケモンが引き寄せられてしまうぐらいに糖が高い。

「これ飲む？」

「ありが…とう」

その甘さに耐えられないカノンにサトルは少し苦めなブラックコーヒーの缶をカノンに手渡した。これを飲んで少しでも甘さが引いたらと思つて渡したサトルであつたが、渡されたカノンはサトルの顔を見るなり、薄っすらと頬が赤くなつていく。何のことか分からなかつたサトルであつたが、カノンが放つた一言に全てを理解した。

「ねえ…これって飲みかけだよね？」

「えっ…てうわあああ!!!」

自分が鈍感だつたわけではない。慌ててサトルは立ち上がると、手をばたつかせながら必死に訂正しようとする。

「ごーごめん!!! 昔の癖で！」

「ち…違う！別に嫌つてわけじゃくて…」

理解されるとさらに恥ずかしさが上つてきたカノンもサトルと同じように手をばたつかせ始めました。

気まづくなつた二人は暫く互いの顔を合わせようとせず沈黙してしまつた。何か別の話題を出そうにも、噛みしめているその口を開くことができないでいる。

そんな二人に…

「押っ忍!! 君たちもしかして旅のトレーナーかい？」

「うわあ！」

「きやあ！」

突然サトルとカノンの前に現れたのは道着を着こなした如何にも厳つそうな男性と同じ道着を着こなした若い男性集団だつた。腰に巻いた帯をしつかりと締め直すと、気合が入った声で二人を見つめていた。

その圧倒的な威圧に二人は反射的に首を立てに振ってしまった。

「やはりそうか！ならここ訪れたという事は我がヤマブキジムの挑戦者と見た！」

「我がヤマブキジムの」

「もしかして…ジムリーダー？」

「押忍!!そうとも！」

自らヤマブキジムのジムリーダーと名乗る男にサトルとカノンはさつきとは違って、互いの顔を思わず見合わせた。

「でも、ヤマブキジムは暫く休館するって…」

「どうだ挑戦者！受けるのか!?？受けないのか!?？」

「「押忍!!」「」

「「……………」」

~~~~~

「押忍！私がヤマブキジムのジムリーダーのノブヒコと申す。挑戦者は君ら二人でいいか！」

「あ…はい」

「押忍！よろしくお願ひしまーす！」

二人はノブヒコの導きにより道場へと招き入れられた。その道場の看板にはジム施設を表すロゴマークが貼られていたので本当にジム施設だったのだと思った。

サトルとカノンは奥の大部屋へと進めらると、その中はシンプルなバトルフィールドが設置されていた。すぐにノブヒコはトレーナー

サイドに立つとサトルを指差した。指名されたサトルはすぐにノブヒコと同じくチャレンジャー側のサイドに立った。後にされたカノンは審判台が立ってあるすぐ近くの所で待機するよう言われてそちらの方へと移動した。

「押忍！ただいまより、ジムリーダーのノブヒコとチャレンジャーのサトルによるヤマブキジム、ジム戦を開始する。使用ポケモンは三体。どちらかのポケモンが全て戦闘不能となりますとバトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます！」

審判を任せられた弟子の一人がジムのルールを説明を行なう。その他の者達はバトルフィールドを取り囲むようにして座っていた。

「押忍！俺の一番手はこいつだ！気合だ!!!ワンリキー！」

「リキー!!？」

「ワンリキーか…」

ノブヒコはカ一杯にモンスターボールをバトルフィールドへと放った。中から現れたワンリキーは自慢の力瘤を見せると己の力強さをアピールしてきた。

『ワンリキー かいりきポケモン

格闘タイプ

全身が筋肉となっており子供ほどの大きさしかないのに大人百人を投げ飛ばせる。一日中修行しても物足りない。』

ここのジムの雰囲気的に思ってたけど、ここのジムのエキスパートは格闘タイプか。

図鑑をしまったサトルは最初の一体を決めると、モンスターボール

を取り出した。

「よし頼むぞー！ブイゼル！」

「ブイ!!？」

ブイゼルが出てくるなり、ワンリキーはブイゼルに挑発をする。それに対してブイゼルはワンリキーを睨み返した。

「試合開始！」

？サトルVSノブヒコ？

審判のコールが響いた直後、指示を待たずにワンリキーはブイゼルに向かって走り出した。

「ワンリキーー！『からてチョップ』!!？」

「リキー!!？」

スタートが出遅れたブイゼルに向かってワンリキーは早くも距離を詰めてきた。サトルはすぐに先制攻撃でブイゼルをワンリキーと真っ向からぶつけた。

「ブイゼル！『アクアジェット』だ!!？」

「ブイ!!？」

両者のぶつかり合いと同時にそれぞれの技のエネルギー波によって後ろへと吹き飛ばされた。

「大丈夫ブイゼル!!？来るよ！」

「ブイ!!？」

吹き飛ばされたブイゼルは倒れる事なく踏み止まった。サトルからの応答に答えるとすぐに身構えてはワンリキーの出どころを疑った。

だが、そのワンリキーはブイゼルとの衝突後、吹き飛ばされるとそのまま目を回して倒れていた。

「ワンリキーー戦闘不能！ブイゼルの勝ち！」

「おおお!!!ワンリキー!!!」

「えっ…」

「ピカ…」

「ブイ？」

「えっ…勝っちゃったの？」

「ヒココ…」

ノブヒコはバトルに敗れたワンリキーを抱きかかえると、その場で悔し涙を流した。それにつられて他の道場の人達も一緒になって涙を流しながら、ワンリキーの健闘を讃えた。

それよりもあつさりとジムリーダーのポケモンの一体を倒してしまった事にサトルもピカチュウもブイゼル。そしてそのバトルを見届けているカノンとヒコザルも思わず啞然としていた。

~~~~~

ポケモンセンターではリーリエはオーキド研究所で母ルザミーネに付き添っているジェームズと連絡を取っていた。ルザミーネの容体は悪化することはなく、ウツロイドの神経毒の血清から解毒薬も改良中である事を伝えられた。

「そうなのですね。ジェームズありがとうございます」

「コン!!?」

『奥様にも今のお嬢様のお姿をご覧に頂いて欲しい者です。お嬢様も見ない間にこんなに立派になられて、ジムバッジもお二つも獲得なされてジェームズは感激であります!!』

「大袈裟ですわよ。ジェームズ」

「アローラ祭が終わったら、一度研究所の方へと戻ろうと思います」

『分かりました。その時はご馳走作ってお待ちしております。その時はお友達も連れて』

「はい！それではまた連絡いたします！」

『はい。良い旅を』

一方ノゾミもハウエン地方で修行している友人と連絡を取っていた。

『ちよつと！ポツチャマ!!!私はいまノゾミと話してるんだから邪魔しないですよ!』

『ポチャ!!?ポツチャマ!!?』

「相変わらずだね」

停滞してから暫く連絡を取れていなかったため、久しぶりに会えた事にノゾミも背負っていた重荷が外れたかのように健やかな気分になっっていた。

『でも良かった。これでも心配してたんだからね』

「ごめん。少しの間コンテストは離れるけど、怠らないように鍛錬は積んでいくから」

『私もホウエンのポケモンコンテストで必ずグランドフェスティバルで優勝するわ。私の目標はいつでもノゾミだもの。今度は必ず貴方に勝つわ!』

「ありがとう!私もこの旅で何か見つかりそうな気がするよ」

『ノゾミなら見つかるよ!大丈夫!だいじょーぶ!』

「あんたの大丈夫はあてにならないけどね」

『何ですよ!ふふっ／＼／＼じゃあ、私もうすぐコンテストだから切るね。』

タケシに宜しく言つといて!後、サトシも何処かで会ったら』

「うん。それじゃあ」

同じタイミングで通話を終えたノゾミとリーリエはすぐに合流した。

「ノゾミ!終わりましたか?」

「うん。今丁度ね」

そして、ポケモンセンターのゲートから大量に買い物袋を背負ったタケシと腕を回しながら大らかな気分にいるソウタとも合流した。

「こつちも買い出しは終わったぞ」

「俺もだ!今日も全勝!全勝!」

「クチ!!?」

残りはサトルとカノン。リーリエはすぐにロトムを通してカノンにメッセージを送った。送ってからのものの数分でロトムへとカノンからのメッセージを受け取った。受け取ったメッセージをロトムは

読み上げる。

『カノンからメッセージが届いたロト！どうやら、別のヤマブキジムにいるらしいロト』

カノンからの返信に一同は驚いた。

「別の？ヤマブキジムは二ヶ所あるのですか？」

「はあ？そんなの俺知らないぞ？」

「うん…。ジムはここ数年でたくさん建設されるようになったが、同じ街に二ヶ所のジムが建てられるのは聞いたことないぞ」

二人がいるいまのジムをソウタとタケシは違和感を覚えていた。そんなタケシに一人の男が話しかけてきた。

「あれ？君はタケシ君では」

「貴方はもしかして…」

顔見知りなのかタケシはその男と握手を交わした。タケシから事情を聞いたその男は思い当たる節があったのか。少し頭を掻きながら説明した。

~~~~~

サトルが挑戦しているヤマブキジムではノブヒコが二体目のポケモンを投入しようとしていた。

「押忍！行けっニョロボン！」

「ボン!!？」

「二体目はニョロボンか…」

「ブイ!!？」

同じ水系同士に火がついたのか。ブイゼルは一段と毛を逆だてると、そのまま身構えた。

「ブイゼル！【みずてっぼう】だ!!？」

「ブイ!!?」

「こつちも気合の【みずてつぼう】だ!!?」

「ボン!!?」

同時に放たれた水鉄砲はそのまま押し合いに入る。だが、パワーは二段階進化系のニョロボンに及ばずそのままブイゼルは押し出されてしまう。

「回り込むんだ!」

サトルの指示にブイゼルは水鉄砲によって濡れた床を利用して、上手くニョロボンの背後へと滑り込んだ。パワーには敵わないが、スピードに関してはブイゼルの方が一枚上手だ。その素早い動きにニョロボンはブイゼルが自分の後ろに回られた事に気付いていない。

「ブイゼル! 【かまいたち】!!?」

「ブイ!!?」

スクリューの働きを持つその尻尾でブイゼルは風を生み出す。風の刃へと形成されていくそのエネルギーをニョロボン向かって放つ。

「後ろだ! ニョロボン 【しんくうは】!!?」

ブイゼルの攻撃に気付いたノブヒコはすぐにニョロボンに指示を出した。ノブヒコの声にニョロボンは後ろへと振り返ると同時に、真空波を鎌鼬に打ち込んだ。

「打ち消された!」

「ブイ!!?」

技の威力は【かまいたち】の方が大きい。しかし、初級の技で打ち消してしまうニョロボンのパワーに力任せの攻撃は危ないと悟った。

「戻ってブイゼル!」

サトルはブイゼルを戻す事に決めた。ブイゼルをモンスターボールを仕舞うと、ピカチュウに目を向けた。

「ピカチュウ! ここは君で行く!」

「ピカ!!?」

サトルの声に応答し、ピカチュウはバトルフィールドへと立った。苦手な電気タイプが相手でもニョロボンは恐れる事なく仁王立でピカチュウの出方を見つめた。その自身は主人のノブヒコも一緒だっ



た。

「ニョロボン！【しんくうは】!!?」

「ボン!!?」

「【アイアンテール】で打ち消すんだ！」

「ピツカア!!?」

ピカチュウはニョロボンの方へとダツシユすると、真空波を硬化させた尻尾で打ち消すと、そのままニョロボンの頭上へとジャンプした。

「いまだ！【10万ボルト】!!?」

「ピツカアチュウウウ!!?」

「ニョロボン！【ビルドアップ】だ!!?」

頭上から放たれた電撃に対して、ニョロボンは躲すどころかそのまま筋肉を膨張させては力を込めた。しかし…

「ボーン!!!」

ニョロボンは電撃が浴びてしまうとそのまま後退してしまった。

「何故だ！防御を上げたのに!!!」

ノブヒコは防御を上げてピカチュウの電撃を耐え凌がせる作戦に出ていたようだが、その事にサトルは指摘し始めた。

「あの…【10万ボルト】は特殊攻撃ですから、防御を上げてても意味ないのでは…」

「ぬおお!!!そうだったか！」

サトルの訂正を聞いてノブヒコは両手で頭を抱えながら大声をあげた。その様子にサトルとピカチュウは少し調子が崩れてしまったのは言うまでもない。

「なんか、ジムリーダーにしてはなんか威厳というのがないよね」

「ヒコ…」

それはカノンも一緒だったようだ。

「だが、上がったのは防御だけではない！攻撃もだ！ニョロボン！【きあいパンチ】だ!!?」

「ボン!!?」

ノブヒコは失敗を取り返すようにして、ニョロボンに再度指示を出

した。しかし、その技の選択もミスだったようだ。【きあいパンチ】は拳に力を集中させなければいけないが、集中が途切れて仕舞うと、上手く力を貯められなくなってしまう。つまり、攻撃を受けてしまったら失敗してしまう技なのだ。

それを知っていたサトルはピカチュウに攻撃の指示を出した。

「ピカチュウ！【ボルテッカー】!!?」

「ピカピカ!!?」

電撃を纏ってピカチュウはそのままニョロボンへと突進していく。パワーを貯めている最中はニョロボンは攻撃する事ができない。

「ピカピッカア!!?」

そのままパワーが貯まる前にピカチュウの【ボルテッカー】がニョロボンに炸裂した。

「ニョ…ロ…」

「ニョロボン!!!」

電気タイプ最強クラスの技を受けたニョロボンはそのまま目を回してしまった。

「ニョロボン戦闘不能！ピカチュウの勝ち！」

「やったね！ピカチュウ！」

「ピッカアチュ!!?」

二勝目もサトルとなった。ピカチュウとハイタッチを交わすその様子をノブヒコは楽しみに笑い出した。

「なかなかやるぞよ。少年！だが、そう簡単にバッジは渡さんぞ!!!」

気合を入れ直したノブヒコは最後のモンスターボールを取り出した。

「押忍!!全身全霊！気合だああ!!!」

道場内に響き渡る発声量と一緒にノブヒコの最後のポケモンが放たれた。

「あのポケモンは…」

そのポケモンは同じく道着を着こなしており、正座をして精神統一をしていた。そして、モンスターボールから解かれたと知ると、黙祷した目を開いては気合の一言を言い放った。

『ダゲキ からてポケモン

格闘タイプ

帯を締めると気合が入りパンチの破壊力が増す。修行を邪魔すると怒る』

「ピカチュウ休んでくれ！」

「ピカ!!?」

静かなる気迫。サトルはあのダゲキがこのジムの切り札であると思っただ。

反動ダメージもあって多少ダメージを受けているピカチュウをそのまま続投せずに、一旦休ませる事に決めた。

「よし！ヒトカゲ！」

「カゲ!!?」

サトルはピカチュウを戻してヒトカゲを出した。尻尾の赤く燃え上がる炎をさらに大きく燃え上がらせたヒトカゲは自身に気合を入れていた。そのヒトカゲの様子にダゲキはその闘志に一礼を加えた。

「開始!!」

「ダゲキ【ビルドアップ】だ!!?」

「ダゲキ!!?」

「ヒトカゲ！【ひのこ】だ!!?」

「カゲ!!?」

ニョロボンと同じようにダゲキはパワーを貯めた。光り輝く膨張する筋肉がその攻撃力を思い知らせてくる。パワーを貯めるその隙

にヒトカゲは火の粉を放った。

「【からてチョップ】で粉碎だ！」

「キツ!!？」

ヒトカゲの火の粉を振り払ったダゲキはそのままヒトカゲの頭上へとジャンプした。

「そのまま【からてチョップ】!!？」

「ヒトカゲ！【メタルクロー】だ!!？」

頭上から振り下ろされる主刀にヒトカゲを硬化させた爪で対抗した。ダゲキの方へと飛び出すと、そのままダゲキの手刀とヒトカゲの硬化した爪が衝突した。

「カゲエ!!!」

「ヒトカゲ!!!」

だが、攻撃力を上げていたダゲキの攻撃に押されてしまい、ヒトカゲをフィールドへと叩きつけられてしまった。

「まずは一体だ！ダゲキ！次は【ローキック】だ!!？」

次にダゲキは空中で一回転すると今度は踵落としを仕掛けた。ダゲキの接近に気付いたヒトカゲであったが、すぐに体を退かす時間がないほど距離を詰められていた。

「ヒトカゲ！【あなをほる】!!？」

起き上がって躲す時間がないならと、サトルは穴を掘って躲す様にと指示を出した。

サトルの狙い通り瞬時に下へと潜ったヒトカゲはダゲキの攻撃を躲す事に成功した。

「何いいい!!!」

攻撃を決められなかったダゲキの背後へとヒトカゲは飛び出した。

「今だ！【ひのこ】!!？」

「カゲエ!!？」

「ダアア!!!」

「続けて【りゆうのいかり】だ!!？」

火の粉によって躊躇めいたダゲキに今度は青白い炎を放った。竜の形状となった青い炎はダゲキに襲いかかる。

「ダゲキ！【からてチョップ】!!?」

又もやダゲキは手刀でヒトカゲの攻撃を防いだ。押されながらも気合でヒトカゲの青白い炎をたた切った。攻撃技を防御として使うダゲキの攻撃力は並大抵の強さではない事をサトルとヒトカゲは再認識も兼ねては痛感させられた。

「ダゲキ！【きあいパンチ】!!?」

ヒトカゲの攻撃を打ち消したその右手で今度はニヨロボンの時と同様に力を蓄え始めた。しかし、【きあいパンチ】の欠点は分かっている。

「パワーを貯めている今がチャンスだ！ヒトカゲ！【メタルクロー】!!?」

ヒトカゲの攻撃はそのままダゲキに命中した。これでなんとか【きあいパンチ】を防ぐ事が出来た。次の一手をと考えようとしたその時、ダゲキの技がヒトカゲを捕らえた。ダゲキの技を防いだサトルは次の一手を考えようとしたその時…

「カゲ!!!」

「ヒトカゲ!!!い…今のつて…」

ヒトカゲはダゲキの攻撃を受けてしまった。しかもその技は【きあいパンチ】だった。

「押忍！我がダゲキは技だけでなく精神も鍛えておる。何事にも恐れぬその闘志。 怯むことなどない!!!」

怯むことは…ない

「そうか…あのダゲキの特性は《せいしんりよく》か…!!!  
!!!……………?」

いや、待てよ。【きあいパンチ】と《せいしんりよく》は全く関係ないはずだ。

特性《せいしんりよく》は怯むことがない特性だ。その特性を使えば【きあいパンチ】を発動できるのではと思う人達もいると思うがそれは違う。それに【きあいパンチ】が発動できないのは

『集中力が途切れてしまったために』のはずだ。

精神力を持ったポケモンは怯ませる技を受けても攻撃する事が出来るが、技を受けた直後に集中力が途切れるため【きあいパンチ】を出す事は出来ない。そのはずなのに攻撃が決まってしまった。

それはつまり自身も攻撃されている感覚に気に留めないぐらい精神を研ぎ澄ませていた事で集中力は途切れる事なく【きあいパンチ】を放つ事が出来たみたいだ。

そんな事が実際にあるのか。いや、今更何を言っているんだ。とサトルは自分に言い聞かせる。

この旅の中で理屈では通用しない経験をいくつもしてきた。ポケモン勝負に正解はない。ワザや特性の使い方。その無茶苦茶な発想や根拠がぶつかり合い、調和されて、思いも寄らない事が起きるのがポケモンバトルなんだ。

「虫の息だな！ダゲキ【ビルドアップ】だ！」

ヒトカゲの状態を見て、すぐに攻撃をしてこないと分かったノブヒコはヒトカゲを倒した後も考えてダゲキに攻撃と防御をもう一度あげるように指示を出した。

「これでとどめだ！少年！【からてチョップ】だ!!？」

ヒトカゲの頭上にジャンプをしたダゲキは攻撃を振りかざした。体力の消耗が底にきている状態では穴を掘って躲すとしても間に合わない。だけど、ヒトカゲの目は諦める事なくダゲキの方を睨みつけていた。そのヒトカゲの諦めない気持ちはサトルにも伝わっている。ヒトカゲに早く指示をと…サトルは自分自身でも思いも寄らない事を口走った。

「ヒトカゲ!!! 噛み付いて受け止めるんだ!!!」

「カアゲ!!?」

ヒトカゲは自分に振りかざしてくるダゲキの手刀目掛けて噛み付いてダゲキの「からてチョップ」を防いだ。

「な…何!!!」

「出来た!!!」

攻撃力を上げているのにも、ダゲキの手刀を防いだヒトカゲにさらに予想だにしない事が起こった。

「カアゲエエエエエ!!!」

ダゲキの手刀を振り払い、力一杯に吠えたヒトカゲの体が青白い光に包まれた。爪も牙も一段と鋭くなり、一回り大きくなっていくヒトカゲに目が離せない。

「ヒ…ヒトカゲ」

「リザアアアアア!!!」

オレンジ色の炎を靡かせて赤く大きな体になったそのポケモンは姿が変わったと同時に炎を天井に向かって放射した。

その姿にサトルは喜びと同時にポケモン凶鑑を開いた。

『リザード かえんポケモン』

炎タイプ

ヒトカゲの進化系。燃えたぎるような性格でいつも戦う相手を探している。強敵と立ち向かうと気分が高ぶり尻尾の炎が青白く燃え上がる事もある』

バトル中の進化も予想に反した事だ。サトルは一つの試合で起こった破茶滅茶な出来事に対して笑みがこぼれた。

「進化とは！なかなかの気合と根性だ！さあ来い!!!」

「ダゲキ!!?」

ノブヒコとダゲキも進化したヒトカゲを前にさらに気分が高揚したのか。今までに聞いた押忍を今日一番に響かせた。その声に負けないようにサトルもリザードに指示を出した。

「行くぞリザード！進化した力を見せるんだ！「かえんほうしゃ」だ!!?」

「ザアア!!?」

新たに「かえんほうしゃ」を覚えたりザードの炎は一直線にダゲキに向けて放たれた。その火炎放射をダゲキは両腕を前にクロスさせてガードした。

ヒトカゲの時と比べ物にならない火力にダゲキは少しずつ後ろの方へと押されてしまっていた。

「むむ!!!なんとという威力!」

「ダゲエ!!!」

火炎放射を大きく両腕を広げて弾き飛ばしたダゲキは息を少し荒らしながらも身構えた。しかし、火炎放射が晴れた先にはリザードの姿は無く、代わりに一つの大きな穴が出現していた。

「なあ!!!下だ！ダゲキ!」

「ダゲキ!!!」

察したノブヒコはダゲキに注意を促すものの、ダゲキの足元からリザードは「あなをほる」でダゲキをアッパーで空中へと放り出した。



「【メタルクロー】だ!!?」

「ザア!!?」

リザードはジャンプをして一瞬にして飛ばされたダゲキの上を取ると、下に向かってダゲキを切り裂いては地面へと叩き落とした。

叩き落とされたダゲキは蹠跟めきながらも立ち上がった。着地したりザードはそのまま両爪を立ててはダゲキを威嚇する。そんなリザードを前にダゲキは拳を前にして身構えた。

「全ての力を拳に貯めろ!!!ダゲキ!【きあいパンチ】!!?」

「キイイ!!!」

「ザアアア!!?」

右拳に再び力を込め出したダゲキをリザードはそのパワーが解放されるのを待つかのようにダゲキを見つめている。

それは戦いの余裕から出てきたものではない。真正面から互いの力を打つかって行きたい闘志の表れによるものだ。ボロボロになりながらも戦ってくれた二体のポケモン達の意味を尊重しようと、サトルもダイヤも自分のポケモンの想いを了承した。

「行くぞ!少年!!!」

「はい!!!」

ダゲキのパワー貯めが終わった。リザードも大きく息を吸い出した。勢いよくまた燃え出した尻尾の炎が次の攻撃を繰り出す合図に見えた。二体からひりつく緊張感がサトルとダイヤ。その試合を見届けているカノンにも伝わっていた。

「ダゲキ!【きあいパンチ】だ!!?」

「リザード!【かえんほうしゃ】だ!!?」

ダゲキがリザードに向かって走り出した直後にリザードの火炎放射がダゲキに襲いかかる。ありったけの力で放射された火炎放射をダゲキは拳で応戦する。

「ダ...ダゲ...」

火力と周りから吹き荒れる熱風に身体中の体力が奪われるも、ダゲキはリザードの火炎放射を押し出しては前へと進んでいく。

リザードもそんなダゲキの様子を見て、火力を上げていく。それに

応えるようにリザードの尻尾の炎がさらに燃え上がると、リザードの体から赤きオーラが立ち昇った。

「ザアアア!!!」

「ダゲエエエ!!!」

リザードの特性《もうか》によりさらに火力が上がっていく。リザードの熱意だけでなく、サトルの闘志も加わった火炎放射にダゲキは太刀打ちするべくが無くなった。

そのまま火炎放射に包まれたダゲキはその場に倒れた。

「ダ：ダゲキ戦闘不能！リザードの勝ち！よって勝者はチャレンジャーサトル！」

「やったよー！リザード！」

「ザア!!？」

バトルが終えた直ぐにリザードはサトルの方へと飛び出した。姿は変わっても中身はヒトカゲの頃の人懐っこさは変わっていないかった。抱きついてきたリザードに倒されたサトルの元へとカノンは急いで向かった。

「やったね！サトル！」

「うん！」

ダゲキをモンスターボールに戻したノブヒコはサトルの方へと歩み寄る。

「サトル殿。君とポケモン達の熱き友情。しかと見させて貰ったぞ！より高みを目指してこれからのポケモン修行を育むが良い」

「はい！」

「押忍！では！」

清々しいバトルの相手をしてくれたサトルと固い握手を交わすとその場を立ち去ろうと背を向けた。

「ちよくと待ってよ。ジムリーダーさん♪」

背を向けたノブヒコをカノンはその笑顔と裏腹の威圧を向けた。その視線に背筋が凍りついたノブヒコは少しずつ目線をサトルとカノンの方へと向いていく。

「な…何かな。お嬢ちゃん」

「サトルは勝ったんでしょ？ だったら渡す物があるよね」

「わ…渡す物。さて、何んだけなく」

「ダ…ダケ」

サトルも勝負の余韻のせいで忘れていた事を思い出した。そうだ。ジムバッジだ。だけど、ノブヒコの様子からジムバッジを渡さないよりも渡せないような様子に見える。

慌てるノブヒコを前に大部屋の扉が勢いよく開いた。そこにはリーリエ達と知らない大人の男の人が立っていた。

「それは出来んだろ。そもそもここは公認のポケモンジムではないのだからな」

「カノン！ サトル！」

「リーリエ！ それにみんなも！」

「ちよつと今のつて！ どういう意味？」

男の声にノブヒコは核心を突かれてしまったようだ。そして、サトルとカノンも同時に顔を見合わせては驚いた。混乱する二人にもう一度その男は説明を始めた。

「言葉通りの意味さ。ここはポケモン協会から公認を貰っていないポケモンジム。ジムでもなければ彼はジムリーダーでもない」

「ええええええ!!」

ここがポケモンジムではない事が分かったサトル達にノブヒコは弟子共々と土下座して謝罪をした。

話を聞いてみると、どうやら自身のトレーナー修行のためにジムリーダーと偽ってジム巡りをする実力のある猛者とバトルに引つ張ろうとするためだったと言う。

しかし、そのせいで本来のヤマブキジムと間違われてしまうのも事実。ノブヒコはもうこういうことはせずにはちゃんとポケモン協会の

ジム認定試験を受けるために修行をする事を誓った。

「騙してすまなかった。ジムバッジは授けられんが…」

サトルとカノンの前に立つと、一人の弟子が二つのモンスターボールを手にはダイルの元へと渡った。その二つのモンスターボールを取ったダイルは開閉ボタンを押した。

「エビシエ!!?」

「サワア!!?」

中から二体のポケモンの姿が現れた。

「パンチの帝王エビワラーとキツクの破壊神サワムラーだ。どちらか一体を授けよう！」

~~~~~

「はあくなんだったんだろ」

「でも、いい修行にはなったよ」

ヤマブキジム道場からポケモンセンターに帰って来たリーリエ達は夕食の時間までロビーのソファでぐったりとしていた。

「まあ、ヒトカゲはリザードに進化したし、カノンはエビワラーゲットだし、結果オーライじゃねえか！」

「ザアド!!?」

「エビシエ!!?」

ポケモンを受け取ったのはカノン。無理に連れてこられた故にバトルも出来なかったためのお詫びの印なのか。サトルから譲渡の権利を譲って貰った事でカノンは四体目に格闘ポケモンエビワラーを入手した。

「ナツメが戻るのはまだ先だが、前よりももっと力をつけて戻ってくるらしいから。楽しみにしといてくれ」

「はい！ありがとうございます！」

「それじゃあ！」

「え…消えた」

そう言っつて、リーリエ達と一緒にいた男は額に手を当てた瞬間にその場から一瞬にして消えてしまった。

「ああ、ナツメさんのお父様は正真正銘の超能力者だからね」

「へえ〜そうなんだ〜」

何かと振り回された一日だったためカノンはタケシの一言に途方にもない返事で返した。

何がともあれ、ヤマブキシティを出ればクチバシティまでもうすぐだ。明日の事を話しながらリーリエ達の夜は更けていくのであった。

~~~~~

【小ストーリー】

明日の事で眠れなくなったりリーリエとカノンはバトルの特訓をしていた。

「ありがとうリーリエ！付き合っつて貰っちゃって」

「ヒコ!!？」

「そんな構いませんよ！」

「コーン!!？」

「サトルもどんどん力つけてきてるから私も頑張らなくちゃと思ってね」

「へえ〜♪カノンはそんなにサトル事が好きなんですねぇ♪」

サトシの事で散々からかわれ続けたリーリエからの仕返しか。少し悪戯を仕掛けるかのような目でカノンの顔を覗き込んだ。

／／／／／／／／

「えっ／／／？」

顔が熱のように赤くなるカノンの顔を見てリーリエは何て声を掛けたらいいか、分からなかった。

∴T o b e c o n t i n u e

## 第二十四話 VS ダークカイリユ

目的地のクチバシテイまであと少しの所まで来たリーリエ達。その風に当たりながら、ランチを楽しんでいる中、リーリエは今日もズルズキンと打ち解けようと頑張っていた。

タケシにも教わってズルズキンの好みに合わせたポケモンフーズを持って、コミユニケーションを取って行くもののズルズキンはそれに対して興味を示すどころかリーリエとも目を合わせようとしなかった。

「今日もダメ？」

「ええ…」

諦めて自分の昼食を取りに戻ろうとしたその時、

「ズキツ!!」

ズルズキンに向かって攻撃が放たれた。突然のことに驚いたリーリエはすぐに技が放たれた方角へと目をやった。そこには、ズルズキンを睨みつけては怒りを露わにしているキモリが立っていた。

「キヤモ!!?キヤアモ!!!」

ここまでのズルズキンの主人であるリーリエに対する態度に我慢が出来なかったのか、キモリは鋭くズルズキンを叱責し始めた。

「ズツツ!!?」

「おいおい!待て待て!」

「やめろ!二人とも!!!」

攻撃を受けたズルズキンは物凄く怒り始めているのは言うまでもなかった。普段の強面からさらに怒り狂ったズルズキンの表情には思わず足が竦んでしまう程だった。

だが、リーリエはすぐに喧嘩を始めようとする二体の間にすぐに入って行った。

「止めて下さい!キモリ!ズルズキン!」

リーリエの呼び声に我が戻ったキモリとズルズキンは構えることをやめた。しかし、ズルズキンはリーリエの登場に驚いていただけで、すぐにキモリの方へと見直すと、両手を合わせて【あくのはどう】

を撃つ体勢に入った。シロンの注意のおかげで早く気づいたリーリエはズルズキンのモンスターボールを取り出した。

「戻って下さい！ズルズキン！」

ズルズキンをモンスターボールに戻したりリーリエはゆっくりとキモリの方へと振り返った。

「キモリ…気持ちは嬉しいのですが、急に攻撃なんてしたら誰だって怒りますよ」

「コーン!!?」

「キャモ…」

ズルズキンの態度に許せなかったとはいえ、リーリエの言う通り。キモリは先走ってしまった行動に深く反省した。

「返せ！泥棒!!」

すると、いきなり大きな声がリーリエ達の耳の中へと入ってきた。

『向こうの方からロト！』

何処からかと辺りを見渡すと、それに気づいたロトムの後を追って行く。

声がした方へと進んで行くと、そこに道端で倒れている男性の姿があった。

「大丈夫ですか！」

すぐに男性の元へと駆け寄るリーリエ達はゆっくりと男性の体を起こしあげた。

目立った外傷はないようだが、男性は一呼吸したうえでゆっくりと口を開いた。

「きゅ…急に二人組の…男に…私のポケモンが…」

男性の焦る様子や言動からリーリエ達はポケモンを奪われてしまったのではないかと推測する。すると、リーリエ達の元へと一台の白バイクがこちらに向かってきた。

「どうしたの?」

「ゼニツ!!?」

「ジュンサーさん！」



立ち寄ったジュンサーに事情を説明した所、ジュンサーは思い当たる節があるような表情を浮かべた。

「ポケモン泥棒。もしかしたら…」

「知っているのですか？」

「情報があつたの。ここ近辺でポケモン泥棒を働く二人組がいるっていう情報ね。私たちは其奴らの行方を追いにここまでやってきたの」

「ゼニツ!!?」

「二人組って、もしかしてロケット団？」

「いや、僕たちが知っている二人組じゃないよ。この人も二人組の男の人って言ってたし」

ロケット団か。それともポケモンハンターなのか。一刻も犯人逮捕をしなければもつと被害が増えてしまう。ジュンサーは男性から二人組の男の特徴などを聞き始めた。

「犯人は私達が必ず捕まえます」

「ど…どうか、お願い致します」

ジュンサーはそのまま男性の証言から逃げた先に向かって歩き始めた。

事の事情を聞いたリーリエ達は互いにアイコンタクトを取ると急いでリーリエはジュンサーを呼び止めた。

「ジュンサーさん！わたくし達にも出来ることはありませんか？」

「うん！人数は多い方がいいもんね♪」

「私達はジム巡りの旅をしているトレーナーです。腕には自信があります」

そう言うリーリエ達にジュンサーは一般トレーナーを巻き込んでしまうのはいかがかと、少し躊躇っている様子であった。しかし、ノゾミが持つキーストンからメガシンカポケモン使いつて事やリーリエ達は皆バツジ二つ以上を持つ実力のあるトレーナーである事がわかった。

悩んだすえジュンサーはリーリエ達にも犯人逮捕の協力をお願いする事にした。

「わかったわ！お願いしてもいい？」

「はい!!!」

こうして、リーリエ達はジュンサーと共にポケモン泥棒を追う事に決めたのであった。

~~~~~

『ゼニガメ かめのごポケモン

水タイプ

甲羅に閉じこもり身を守る。相手の隙を見逃さず水を吹き出して反撃する。丸い形と表面の溝が水の抵抗を減らすので速く泳ぐ事ができる』

ロトムがゼニガメのデータをとり終えた直後、ジュンサーはすぐにタケシの方へと目をやった。

「遅れちゃったけど、久しぶりね。タケシ君」

「はい。ゼニガメ！俺のことは覚えてるか？」

「ゼニゼニ!!？」

タケシが呼びかけた一体のゼニガメはタケシに目を向けると、元気よく頷いた。手を取って再開を喜ぶタケシとゼニガメの姿にサトルは大体の意図が分かっていた。

「タケシ！そのゼニガメってもしかして」

「ああ！サトシのゼニガメだよ！」

やっぱり。ジョウトのシロガネリーグで使っていたサトシのゼニガメを観ていたサトルは、一早く察しがついていた。

それを聞いた他のみんなもサトシのゼニガメに注目が集まった。

「へえ、サトシのポケモンなんだね。この子は」

「ちようど今の俺たちみたいにくチバシテイに向かう途中だったか

な。そこでゲットしたんだ」

ゼニガメを仲間に加えた定期を話すと、タケシは他のゼニガメ消防団員を見てある事に気がついた。

「ですが、いつものゼニガメ団のメンバーではないみたいですね」

そう、サトシのゼニガメがリーダーとして活動していた他のメンバーではない事に気がついた。

「ええー！今はポケモン消防団は規模を増やして色々な水ポケモン達もいるわ。ゼニガメ団もその一つでね。初代にいたゼニガメ達をそれぞれをリーダーにして、五つのグループに分けているのよ」

すると、一体のゼニガメがシロンに話しかけてきた。

「ゼニ？？」

「ゴン？」

「ゼニツ！！？」

「コーン！！？」

すぐに打ち解けあった二体はそのまま一緒に並んで歩いていた。

「あらら、もう友達になったの？ゼニガメ」

「この子女の子なのですか？」

「消防団には雌のポケモンはあまりいないから、同じ女の子がいてこの子も嬉しそうね」

世間話はそれぐらいに、タケシは本題となるポケモン泥棒の情報についてジュンサーに質問した。

「いつからそのポケモン泥棒が現れるようになったんですか？」

「私に要請があったのは今さっきだったの。彼らから奪われたポケモンの被害は昨日で数十件に及ぶわ」

『たった昨日でそんなにロトか!!!』

「ええ…ただの泥棒にしては足取りが掴みづらい計画的な犯行だわ。私が見るにはその二人組は上の命令で動いている可能性があるの」

「二人だけじゃないってことね」

「だから、貴方達がついて来てもらう事に対してちょっとはどうしよっかと思っただけど、反対はなかったわ。なにより、元ジムリーダーのタケシ君にキーストンを所持しているノゾミさん。それにジム

バッジを二つ以上も所持しているリーリエさん達。これほど心強いって事はないわ」

ジュンサーから言われた事に照れくさそうに表情を歪めるリーリエ達の前に二人組の人影が見えてきた。

「おい、あそこに誰かいるぞ」

何かを見つけたソウタがゆっくりと指した方へと見て見ると、その二人組は大きな袋を担いでは、土がついた一つのモンスターボールを祓っていた。異様に大きな袋を持っている事に不審に思ったジュンサーはこの二人組はそのポケモン泥棒ではないこと推測した。

断言ではないが、見るからに怪しそうな二人を前にして黙るつもりはなかった。

「そこまでよー！」

「な！何々!!!ジュンサー!!!」

ジュンサーの姿を見たその二人組は思った以上の動揺を見せていた。

「おい！トロイ!!!これって俺たち見つかつちまつたオチじゃね?」

「だから言っただろ！へボーイ！兄貴の命令無視に欲なんて出すからだろー！」

「やっぱり、上がいるのね。貴方達の親玉はどこなの!?!?」

ジュンサーの質問に答えることなくへボーイとトロイはそれぞれ一つずつモンスターボールを取り出すと、思いっきり投げ入れた。

「出てこいー!ドゴーム!!!」

「行ってこいー!アリアドス!!!」

「ドゴオ!!?」

「アリアリ!!?」

『ドゴーム おおごえポケモン

ノーマルタイプ

木造の家を粉々にするほどの大声を出して相手を痛めつける。足

を踏みならしてパワーを貯めている』

『アリアドス あしながポケモン』

虫・毒タイプ

お尻からだけでなく口からも糸を出すので見ただけではどちらが頭なのか分からない。常にお尻から出す特別な一本の糸を辿って行くくと巢に繋がっている』

「ここを通さないって所を見ると、あの先に親玉いるってことだよね」  
そう口にしたサトルは自分のモンスターボールを取り出した。それを見たソウタもモンスターボールを取り出すと、リーリエ達の前に立った。

「ここは俺とサトルで何とかするから、みんなは先に行ってくれ！」

『二人で大丈夫ロトか！』

「心配ねえって！」

ここで全員で足止めされる訳にも行かないのは先決だ。ここはサトルとソウタに任せることにした。

「分かった！二人とも後でね！」

カノンの呼び声に相槌を立てたサトルとソウタ。二人に任せてリーリエ達は二人が阻む奥の道へと進んで行った。

「おいおい！行かせちまっていいのかトロイ！」

「兄貴なら心配ねえさ！へボー！俺たちはちやちやと此奴らを倒してポケモン奪つちまえばそれでいいんだよ！」

ヤンキー口調で平然と喋り出す二人を前にして、身構えたサトルとソウタはそれぞれの手にしたモンスターボールを投げ入れた。

「頼んだよ！クルマユ!!!」

「俺はこいつだ！出てこい！ヒビダルマ!!!」

「マユ!!?」

「ダルヒビ!!?」

「ヒビダルマ?」

『ヒビダルマ えんじようポケモン

炎タイプ

体内で1400度の炎を燃やす事でダンプカーをパンチで破壊するほどのパワーを作っている。戦いで弱まると岩のように動かなくなる。心を研ぎ澄まし精神力で戦うのだ』

サトルはクルマユ。ソウタは炎タイプのえんじようポケモンのヒビダルマを繰り出した。四人のポケモンが出揃うと、すぐにヘボイが動き出した。

「ドゴーム！【ハイパーボイス】!!?」

「ドゴオオ!!?」

「ヒビダルマ！【かえんほうしゃ】だ!!?」

「ダルオオ!!?」

大きく息を吸い込んだドゴームが放った大音波を前にヒビダルマは火炎放射でドゴームの技を相殺した。打ち消された技から発生した煙が目眩しとなってしまった事により、サトルとソウタはすぐ近くの木にアリアドスが葉っぱの茂みに身を潜めながら接近している事に気付いていない。

「アリアドス！【ナイトヘッド】!!?」

「アリリ!!?」

お尻の糸で体をワイヤーのように吊るして降りてきたアリアドスは禍々しい黒紫色のオーラを放ち始めた。その技の威力にクルマユとヒビダルマは前へと踏み出せないでいた。微かにその技の衝撃波を打たれながらもサトルはクルマユに指示を出す。

「くっ！クルマユ！アリアドスに【はっぱカッター】だ!!?」

「マユユ!!?」

力一杯に葉の刃をクルマユはアリアドスの方へと撃ち始めた。ク

ルマユの攻撃に気づいたアリアドスは主人のトロイの指示がなくても自分からお尻から出した糸を切ると、クルマユの攻撃をなんなく躲した。しかし、ただ躲しただけではない。躲しながらもクルマユとヒビダルマの方へと顔を向けていた。

「今だアリアドス！【クモのす】!!?」

「あっ!!!」

「足が!!!」

それぞれの足元に糸で作られた包囲網を二体とサトルとソウタの方へと撃ち込まれてしまった。アリアドスの糸で足を固定されてしまったサトルとソウタは必死に蹴くが、なかなか抜け出す事が出来なくなってしまう。

「よっしやー！ドゴーム！【じしん】だ!!?」

勢いよくジャンプしたドゴームは全体重を乗せて勢いよく降下していく。跳びはねる事が出来ないサトル達にドゴームの地震攻撃が迫ってくる。何とか脱出の糸口を探ろうと必死に頭を悩ませているサトルの前にソウタはヒビダルマに叫んだ。

「させっか!!!ヒビダルマ！【サイコキネシス】で動きを止めろ!!?」

「ダルヒイ!!?」

炎タイプでありながら、エスパークタイプの技を使えるソウタのヒビダルマは両目を青白く光らせると、着地寸前のドゴームの動きを制止させた。

「おお!!!」

「何だよ!!!」

【サイコキネシス】をかけたのはドゴームだけでなく、アリアドスにもトロイとヘボイにもかけていた。一気に二人と二体の動きを止めたソウタのヒビダルマのパワーにサトルも驚いていた。

「そのまま投げ飛ばせ！」

「ヒビダル!!?」

一気に後ろの方へと投げ飛ばされた泥棒二人組はそのまま自身のポケモン達の下敷きにされていた。

「今だクルマユ！【いとをはく】!!?」

「うおおお!!!」

「か…絡まって…うわあ!!!」

蜘蛛の巣で動けないもののクルマユは自分たちがされたのと同じように、糸で泥棒二人組をそのまま縛り上げていく。身体中に糸で縛られた泥棒はバランスを崩すと、地面へと倒れ込んでしまった。

「よし!もうあいつら攻撃の指示を出す余裕もなくなってるぞ!」

「今だクルマユ!【むしのさざめき】だ!!?」

「マユマアア!!?」

クルマユは自分の両手の葉を擦り合わせると、それにより発生された音波を一気に解き放った。

「ぎぎぎあああ!!!」

吹き飛ばされた二人組にもうなす術はなくなっていた。

「よっしゃあ!やったぜサトル!」

「うん!ソーちゃんもナイス!」

勝機を失った二人を見たサトルとソウタは勝利のハイタッチを交わした。

勝利に喜んだクルマユもすぐにサトルの元へ向かうと糸でサトルを絡めると勢いよく飛び込んできた。

「うわああ!!!よ…よくやったよ。クルマユ」

「マユ!!?」

「ナイスファイトだったぜ!ヒヒダルマ!」

「ダルヒヒ!!?」

それぞれの主人の元に戻ったクルマユとヒヒダルマにも労いの言葉を上げてから、二体をモンスターボールへと戻した。

「くっ…くっ…」

「俺たちが…こんなガキ共に…」

サトル達に敗れたへボーいとトロイは唇を噛み締めながら悔しそうにしていた。

「ソーちゃん!僕たちも行こう!」

「そうだな!」

ポケモン達を戻したサトルとソウタは逃さないようにクルマユの



糸で木に縛り付けたヘボイとトロイを置いて、リーリエ達の跡を追おうとしていた。

その時…

ビビビツ  
!!!!!!!

トロイのズボンのポケットから何かしらのサイレンが鳴り響いた。その音を聞いたヘボイとトロイの表情はだんだんと希望が見えてきた顔をしていた。その表情に何らかの違和感を感じたサトルとソウタは同時にピカチュウとクチートを場に出しては辺りを警戒し始めた。

「ミラーボレーダーの反応。まさか!!!」

「兄貴!!!助けに来てくれたのか!!!」

そう叫んだ直後、何処からともなく陽気な音楽が徐々にサトルとソウタに近づいてくる。音がする方へと目をやると、そこには何とも強調的なアフロヘアーをした派手めの全身紫色のコーデイを着た男がムンフォークをしながらサトルとソウタに近づいてきた。

ヘボイとトロイの様子を伺ったその男はダンスをやめるとサトルとソウタに向かい合った。

「ほんと、だらしないわね。あんた達は！こんなお子様に負けるなんてね」

「まさかおまえがそいつらの親玉か！」

ソウタが叫んだその直後、一つのモンスターボールが空高く放たれると、オレンジ色の体を身に纏ったポケモンが翼を広げてサトルとソウタを呆然と見つめていた。

すぐにピカチュウとクチートを向かい合わせると、アフロヘアーのその男はサングラスを掲げると不敵な笑みを浮かべながら、指示を出した。

「【ダークストーム】!!?」

~~~~~

「もう一人は一体何処へ行ったんだ!?!」

「隠れ宿らしき建物すら見当たらないようだね」

まだ親玉の足に追いつけない事に疑問を浮かべたリーリエ達の足が止まった。

その直後、すぐ後ろから大きな爆発音が鳴り響いた。

「爆発！」

「サトルとソウタがいた方角からじゃない?」

「まさか!!!」

「しまった!鉢合わせたのね!!!」

リーリエ達は急いでサトルとソウタの元へと全速力で引き返した。ひたすらに駆け出していくと薄っすらと特徴的なアフロヘアを持っている人物の影が見えてきた。

そして、その男に近づいていくと、その足元にはサトルとソウタがぐったりと倒れ込んでしまっていた。

「サトル!!!ソーちゃん!!!」

背後から突然に聞こえたカノンの呼び声にミラーボは振り向いた。その先のミラーボの目には倒れている二人と同じ年頃の少年少女とジュンサーの姿があった。

「大丈夫よ!この子達に危害を与えるつもりはないわ。ただ、この子達のポケモンちゃん達を私のミラーボ組織に入れてあげようとしていた所よ♪」

得意げなダンスと一緒に陽気に返答するミラーボにリーリエ達はポケモン達を前にして一斉に身構えた。

すると、ミラーボが持っていたラジカセから新しい曲をかけると同時に五個のモンスターボールを取り出した。そのモンスターボールからは頭に大きなオオニバスを被ったポケモン達がミラーボと共に踊りながら出現した。

「あのポケモン達は?」

『任せるロト!』

そのポケモンをロトムはいつも通り解説し始めた。

『ルンパッパ のうてんきポケモン

水・草タイプ

陽気な音楽を耳にすると踊り出す習性がある。陽気なリズムで体を動かす事でパワーを増幅させている』

ミラーボを中心に円を囲むようにして、リズムに合わせて踊っていた。踊っているルンパッパは陽気そうに見えるが、何処となく見透かされているような気ではかならなかった。

「ルンパツパー！」

「それに五体とわね」

私含めて五人と一人一体を相手に出来る数ではある。だが、まだ初心トレーナーとはいえサトルとソウタは多くの戦いを経験してはもうベテラントレーナーに負けないぐらいの力をつけてきている。

しかし、そんな二人を同時に倒したトレーナー。尚且つ、手下二人を高度かつ纏める統率者。そんな人がタイマン勝負を許すわけがない。一気にリズムを狂わされてしまえば勝算が限りなく低くなる。それに：トレーナーが持てるポケモンの数は六体。残り一体の手持ちも気になるところだ。

それらの事を慎重に頭に入れたリーリエ達は一人ずつ前へと身構えた。

「貴方をポケモン密漁の疑いで逮捕します！」

「やれるものならやってみなさいよく！ミュージックスタート♪」

ミラーボの合図と一緒にルンパツパ達のステップがだんだんと早くなってきた。狂わされる前に此方からリズムを崩していくしかない。

「ゼニガメ消防団！一斉に【みずてつぼう】よ！」

「シロン！【こなゆき】です!!？」

「ゼニツ!!？」

「コン!!？」

ゼニガメ団の水流とシロンの冷気がルンパツパ達に向かって放たれた。しかし、すぐにミラーボの指示が流れるとルンパツパ達は一斉に体を曲げるなりして技を躲した。

「It, sion stage!!!ルンパツパ【あまごい】♪」

「パルンパ♪」

「ルンパツ♪」

「ルンパツパ♪」

三体のルンパツパはさらにダンスを大きく表現し始めると、湿った空気が広がってきた。やがて形成された小さな雲が一つ一つと重なって膨張し合う事で大きな雨雲を発生させた。

「お願い！エビワラー!!!」

「行くぞ！グレッグル!!!」

「頼んだよ！エルレイド!!!」

「エビシエ!!?」

「グウウ!!?」

「エルレイ!!?」

降り注ぐ雨の中、リーリエ以外のみんなもそれぞれのポケモンを繰り出した。

「グレッグル！【どくばり】だ!!?」

「グウウ!!?」

「エビワラー！【メガトンパンチ】!!?」

「エルレイド！【サイコーカッター】!!?」

「エビシエ!!?」

「エルレイ!!?」

ポケモンを繰り出したタケシ、カノン、ノゾミはすぐに技の指示を行なった。

「躲しなさい」

迫る三体の格闘ポケモンの技をルンパツパ達は物凄い速さでいとも簡単に躲した。

だが、躲された事よりもその見かけから予想だにしない素早さにリーリエ達は退いてしまった。

「hey!もつとテンポ上げて!ワンチュウ!ワンチュウ!」

ミラーボの手拍子によるリズムに合わせて、ルンパツパ達はステップを踏みながら、アイススケート選手のような速さでリーリエ達を攪乱していく。

「なんてスピードなんだ!!!」

「あれはルンパツパの特性《すいすい》による効果だ!雨の時は素早さが通常よりも二倍になるんだ!」

ノゾミの答えにタケシは率直に返した。

ルンパツパは特防が高くてその他は平均的な能力値ではあるが、決して低いわけではない。雨のおかげで水系タイプの技が通常よりも

高くなってもいるし、特性《すいすい》のおかげで素早さも増している。

つまり、今のルンパツパ達は攻撃も素早さもトップクラス級であるという事だ。そして、それが目の前に五体といるのだ。

《すいすい》には《すいすい》ですわね！

今のルンパツパ達の能力を把握しているリーリエはすぐにそれに対等に渡り合えるポケモンを選んだ。

「お願いします！コイキンググ!!!」

「ココツ!!?」

「【たいあたり】です!!?」

「コオ!!?」

「ルンパ!!!」

ルンパツパと同じく特性《すいすい》であるコイキングはモンスターのボールから飛び出すと、すぐに一体のルンパツパに向かって光の矢のようなスピードで体当たりを繰り返した。

「ちっ！ルンパツパ！【ギガドレイン】!!?」

「エビワラー！【バレットパンチ】!!? ヒコザル！【ひっかく】よ!!?」

「エビシエ!!?」

「ヒコオ!!?」

コイキングの攻撃を受けたルンパツパは持ち堪えて技を繰り返そうとするが、エビワラーの先制攻撃とヒコザルのスピード攻撃に間に合わずしてその二体の攻撃を受けてしまった。

一体のルンパツパが後退すると、さつきまで陽気に踊っていたルンパツパ達が急に慌ただしくなってきた。一体が欠けてしまった事によりリズムを崩されてしまったからなのか。ミラーボが軽く舌打ちをしていた事からなんとなく推測が出来る。

結果的にルンパツパ達は先程までのコンビネーションとは打って変わって、分裂しては各々で攻撃を繰り返す始めた。

「躲せ!!!」

「いぞグレッグル！【どくづき】だ!!?」

「グルル!!?」

その内の一体のルンパツパの攻撃を躲したグレッグルはそのまま毒を纏った手刀をルンパツパの下顎目掛けて突き飛ばした。

「しんくうは」!!?」

「エビツ!!?」

「今よヒコザル! 【あなをほる】!!?」

「ヒココ!!?」

「ルンパア!!」

エビワラーの真空波で吹き飛ばされたルンパツパはその後のヒコザルの地中からによるアツパーで吹き飛ばされた。

「ルンパツパー! 【かみなりパンチ】!!?」

「受け止めろ!」

「エルレイ!!?」

「そのまま 【インファイト】!!?」

「エルレイ!!?」

ルンパツパの電気を帯びた拳を両腕でガードしたエルレイドはそのまま連続攻撃を浴びせた。

勝手に動いたルンパツパ達を見てはミラーボは喝を入れると、手拍子でルンパツパ達のリズムを戻し始めた。

「ルンパツパ達! さらにテンポアップよ!!!」

ミラーボの声と手拍子によりルンパツパ達はもう一度リズムに合わせてステップをし始めた。もう一度、感覚を掴めてきたルンパツパ達は横一列に並んで身構えた。

「ルンパツパー! 全員で 【ハイドロポンプ】よ!!?」

口を開けたルンパツパ達は 【ハイドロポンプ】を一斉に放射した。雨の中でのその威力は押し寄せてくる濁流かのようにリーリエ達に迫ってくる。

「シロン! 【こなゆき】です!!?」

「ヒコザルは 【ひのこ】!!? エビワラーは 【しんくうは】!!?」

「グレッグル! 【どくばり】だ!!?」

「エルレイド! 【サイコカッター】!!?」

「ゼニガメ! 【ハイドロポンプ】!!? その他の団員は 【みずてっぽう】

!!?」

それぞれの特殊攻撃技でルンパツパ達の「ハイドロポンプ」に対抗した。しかし、水系技最強クラスの技の前に為すすべも無くに押し負けてしまった。

何とか直撃は避けて、押し出した事により威力も多少落ちていた事もあって、戦闘不能は免れたのだが、リーリエ達は少しだけ吹き飛ばされてしまった。雨によって泥濘んだ泥を払いながらリーリエ達はもう一度立ち上がった。

しかし、ルンパツパ達もかなりのレベルの上にコンビネーションも厄介だ。天候をも味方に行っている故に真っ向から挑んでも勝算は少ない。

「カノン！タケシ！ノゾミ！少しだけルンパツパ達の気をそらして下さい！」

「えっ…う…うん！」

「分かった！」

「やってみるよ！」

リーリエの掛け声にカノンにタケシにノゾミはルンパツパ達の注意を引き寄せた。意図は分からないがリーリエを信じて三人はルンパツパ達を言われた通りに攪乱させる。

「ジュンサーさん！」

次にリーリエはジュンサーとゼニガメ団にその意図をミラーボに聞こえないように話した。それを聞いたジュンサーはゆっくりと頷いた。

「よし！いいみんな!!ひたすらに【みずてつぽう】よ!!?」

「ゼニユユ!!?」

次にゼニガメ団はルンパツパの足元掛けて水鉄砲を放った。

「闇雲に打った所でそんな攻撃は怖くはないわよ♪」

ミラーボの言った通り水草タイプのルンパツパには水鉄砲は大して怖いものではない。だけど、リーリエの狙いはダメージを与えることではなかった。

「今ですシロン！【こなゆき】!!?」



「コーン!!?」

シロンの冷気がルンパツパ達の足元に広がって行く。すると、ゼニガメ団の水鉄砲もあって急激に冷やされた地表の水分が柱状に凍っていくと、地表は大きくと持ち上がった。きた。

平らだった地表の形状が変わり、凍った氷柱を踏みつけては鳴る音に気が立つルンパツパ達は徐々にフォーメーションが再び乱れ始めてきた。

ミラーボのルンパツパ達の強さとなる一つの要がフォーメーションダンスだと思ったりリーリエはそのテンポをまず崩して行くべきだと考えたのだ。それはコイキングの体当たりを受けた一体のルンパツパによって一瞬でも隙をつく事が出来たからだ。

「コイキング! 【たいあたり】です!!?」

「ゼニガメ! 【ロケットずつき】よ!!?」

「コオ!!?」

「ゼニ!!?」

コイキングとサトシのゼニガメの突進によって、リズムバランスが取れなくなったルンパツパ達を一斉に吹き飛ばした。

「ルンパツパー!もつとテンポを上げて行くわよ!!!」

ダンスを取り柄としたフォーメーションを考えていたミラーボは音楽を流してルンパツパ達を立て直そうと、ラジカセのスイッチに手をかけた。

「ピカチュウ!あのラジカセに【10万ボルト】だ!!?」

「ピツカチュ!!?」

気がついたサトルの指示にピカチュウは電撃でミラーボが持つラジカセを破壊した。立て直させる術が無くなったルンパツパ達は個人でリズムを取ろうとするのだが、もう先ほどまでのキレがなくなっていた。

「グレッグル! 【どくづき】だ!!?」

「エビワラー! 【スカイアッパー】!!?」

「エルレイド! 【サイコッター】!!?」

畳み掛けるかのようにルンパツパ達はそのままミラーボの方へと

吹き飛ばされていく。

「嘘だろ!!!」

「ミラーボ兄貴のルンパツパ達が!!!」

「しつかりなさい!ルンパツパ達!!!」

「ル…ルンパ…」

何とか立ち上がろうとするルンパツパに頃合いを見たリーリエはすぐにシロンを自分の前へと置いた。

「カノン!ノゾミ!お二人をすぐに此方の方へ!」

「分かった。エビワラー!サトルとソーちゃんをこっちに連れ戻して!」

「エルレイドも頼む!」

ふらついているルンパツパ達の間を見て、サトルとソウタの救出を行なった。すぐに二人を抱きかかえたエビワラーとエルレイドは急いでリーリエ達の元へと戻って行った。

「ありがとう!」

「助かったぜ!」

こちら側へと戻れたサトルとソウタを確認したリーリエはバツクからバングルを取り出すとそれを自分の右腕に装着した。

「これで決めますわ!シロン!!!」

「コーン!!?」

中心部に光る宝石がリーリエの掛け声と一緒に白く輝き始めた。それを光景したカノン達はリーリエに注目が集まった。

「えっ…あれってメガバングル?」

「いや、違う!」

キーストンの輝きと匹敵するぐらいの光を灯している。その光を灯しながらリーリエはシロンの呼吸に合わせてポーズを取り始めた。

「何する気よ!ルンパツパ達!【ハイドロポンプ】よ!!?」

嫌な予感を察したミラーボはルンパツパ達に攻撃の指示を送るも、ポーズを取り終えたリーリエから灯された光が一気に解放すると、そのまま前にいるシロンにその光が集まった。

「天から静かに降り注ぐ雪」

「無数に煌めく氷の結晶」

「熱き我がソウルとともに」

「今再び 天へと昇れ！」

【レイジングジオフリーズ】!!!

足元から氷の氷柱が出現すると、その上にシロンを乗せたまま天高くと聳え立つ。その上からルンパツパ達を見下ろしたままシロンは巨大な冷凍砲を一気に撃ち込んだ。直撃したルンパツパ達は一瞬で氷の華にその身体の自由を奪われると、一気に爆散した氷の花びらとともにその場に崩れ落ちていく。

光り輝く氷の破片が舞う中でルンパツパ達は目を回していた。

「す…：凄い」

氷タイプ最強技の【ふぶき】よりも上回るその力にカノン達は呆然

と立ち尽くしてしまった。

「久しぶりですけど上手く出来ましたね。シロン！」

「コーン!!？」

膨大な力を放ったシロンを抱きかかえながらシロンの頭を優しく撫でた。

リーリエとシロンの力に驚いたジュンサーもルンパツパ達の戦闘不能を確認すると、バックから手錠を取り出した。

「観念なさい！貴方達をこのまま連行させて貰うわ！」

戦闘不能となったルンパツパ達を戻したミラーボはゆっくりリーリエの方へと顔を向けた。

「勝った気でいるのはまだ早すぎなくいかしら♪そうよね！二人とも」

「全くもってその通りですぜ！ミラーボの兄貴！」

「兄貴はまだこれっぽっちも本気にしてないんだからな！」

だけど、ミラーボ達はリーリエ達に向かって小刻みに体を動かしながら挑発をしてきた。

『負け惜しみロト！ただのハツタリロト！』

だと思いたい。だが、そう指摘するロトムにサトルとソウタはゆっくりと怖々しく口を開いた。

「みんな!!!ハツタリなんかじゃないよ！」

「ああ…あいつらはもう一匹、ポケモンを持ってやがるんだ！」

プライドが高く前向きなソウタもその発言をした途端に背筋が凍る表情を向けていた。普段のソウタとは違う様子にリーリエ達にもその嫌な予感が爪先から頭の先まで一気に駆け上がってきた。

ミラーボは最後のモンスターボールを取り出すと、軽くキスをするようにと上へと大きく放り投げた。

「さあ、行くわよ！私の可愛いカイリユーちゃん!!!」

繰り出されたのは、カントーに登録されているドラゴンポケモンの中でも高い能力値を持つポケモンのカイリユーだった。

『カイリユー ドラゴンポケモン

ドラゴン・飛行タイプ

心優しいポケモンで海で溺れた人やポケモンを助けたという話を良く聞く。しかし、普段は穏やかであるがその逆鱗に触れると全てを破壊し尽くすまで止めることはない』

「出たな…カイリユー」

「知ってるのか？ソウター！」

「ああ…俺とサトルはあのカイリユーにやられたんだ」

リーリエ達は上空から見下ろしているカイリユーに目が集まった。その表情は凶鑑に明記されている事とは違っていた。目元は隈のよくな跡があり、何かに操られているような生気が感じられない目をしていて。身構えようともせずと呆然とこちらを見つめている。

「え…」

「リーリエ…どうしたの!?？」

カイリユーに何かを感じたのか分からないが、突然にリーリエの顔が青ざめていくのに気づいたカノンはリーリエに呼びかけた。

そして、リーリエはそのままカイリユーを見つめたまま口を開いた。

「同じです…」

「えっ!?？」

わたくしのズルズキンの時と同じです。  
一体…何なのですか。  
あの…

黒いオーラは…

怖がるリーリエから連鎖していくかのように、その恐怖心は他の者へと強制的に伝わってしていく。人数も手持ちポケモンもリーリエ達の方が多いのではあるが、その安心感を凌駕させるほどの恐怖をカイリユウは漂わせていた。

ミラーボのカイリユウの危険度を察したノゾミはすぐにキーストンを取り出した。

「行くよエルレイド！メガシンカ！！」

「エルレエイ！！」

メガシンカしたエルレイドは両腕の刃を構えた。

「ほお！それがメガシンカね。良いわね♪」

余裕たっぷりのミラーボを無視してすぐさまメガエルレイドはカイリユウの元へと飛び出した。

「エルレイド！【サイコカッター】！！？」

「エルレイ！！？」

「待つてくださいい！ノゾミ!!!」

リーリエの注意は間に合わずノゾミはメガエルレイドに指示を出した。メガエルレイドはサイコパワーを放つ両手でカイリユーの上を取った。カイリユーもその接近には気づいていたのだが、まだ身構える事もなく呆然と迫るメガエルレイドに視線を向けていた。

そして迫るメガエルレイドと距離を詰めた事を確認したミラーボはカイリユーに攻撃の指示を送った。さっきまでの甲高い声ではなく、その曇った攻撃の指示のトーンはこれから始まる恐怖の幕上げとなった。

「カイリユー…【ダークラッシュ】!!?」

ミラーボの声を聞いたカイリユーはドス黒いオーラを纏った拳でメガエルレイドの【サイコカッター】ごと跳ね返したまま地上へと叩き落とした。

攻撃を決めたカイリユーの目には闘志はなかった。

「エルレイド!!!」

砂煙が晴れた中ではエルレイドのメガシンカは解けてしまっていた。メガシンカエネルギーが解けたという事は戦闘不能を意味するものだ。一撃で倒されたエルレイドをノゾミは唇を噛み締めながら

抱きかかえた。

「そ…そんな…」

「メガシンカポケモンでも歯が立たないって言うの…」

メガシンカポケモンが倒された事に慌てふためくりーリエ達に容赦なくカイリユールの牙が剥かれた。

「続けてカイリユール！【ダークストーム】!!？」

翼を大きく広げたカイリユールはりーリエ達に向かってきつきと同じドス黒いオーラを纏わせた竜巻でりーリエ達のポケモンを一斉に吹き飛ばした。

「シロン!!!コイキング!!!」

「ヒコザル!!!エビワラー!!!」

「グレッグル!!!」

「みんな!!!」

吹き飛ばされたりーリエのポケモン達はそのまま一瞬で戦闘不能となってしまうた。

「良いぞ！兄貴！兄貴！」

「流石はダークポケモン！技の威力も他のポケモンとは一味も二味も違うぜ！」

戦闘不能になったポケモン達の元へと急ぐりーリエ達の耳にはミラーボの手下の一人が発したキワードがひかかった。

「ダーク…ポケモン？」

「何よ…それ!!!」

苦し紛れの問いに答えてやるつもりはない。ミラーボはいますぐにでもカイリユールに指示を出しそうな笑みを浮かべていた。

『解析不能！解析不能！何ロトか!!!あのカイリユールは!!!』

ロトムもカイリユールをスキャンしては調べるものの情報が出てこない。

りーリエの方へと顔を向けたソウタは緊張が走る自分の気持ちを抑えながらりーリエに問いました。

「りーリエ…きつきシロンがやったやつ！あの技！あの技をもう一回撃つ事は出来ないのか!?!？」



「で…出来ません。あれは…Z技は一回の戦闘でしか撃てない技なのです！」

「そんな…」

これはリーリエの誤算だった。ルンパツパ達を倒せばミラーボの手持ちは残り一体。それに対してリーリエ達の全員の残りポケモンの数は数十体はいた。ルンパツパ達を倒せば残り一体なら押し通せると思っただけで先にZ技を放ってしまったのだが、あのカイリユースは普通ではない。真面に戦った所で勝ち目はないと悟ってしまう。勝機も同時に吹き飛ばされてしまい、カイリユースの恐怖に支配されてしまったリーリエ達は残りのモンスターボールに手をかける事さえ出来なくなってしまう。

「さあ、そろそろあんた達のポケモンを纏めてミラーボ組の戦力として頂くわよ」

軽く指を鳴らした音に反応したカイリユースを連れてミラーボはゆっくりとリーリエ達の方へと近づいていく。

近づくミラーボに警戒するよう視線を向けたままリーリエはシロンとコイキング。そして近くに吹き飛ばされていたシロンと仲良くなった雌のゼニガメの三体の上へと覆い被さった。

「嫌です！絶対に渡しません！」

その声で気がついたシロンはリーリエを守ろうとボロボロの体を引きずりながら、ミラーボに強く威嚇した。

「シロン！その怪我じゃ危ないです！早く下がって!!!」

リーリエの悲痛な声に反応はあったが、シロンは戻ろうとはしなかった。そんな姿に哀れに思ったミラーボの口がゆっくりと開いた。

「カイリユース…!」【ダークラッシュ】で止めを刺しちやて」

「カイウオオオ!!!」

カイリユースの雄叫びに地面は震え、ドス黒いオーラを体全体に纏わせた。そして、その攻撃はリーリエとシロンに向かって放たれた。

「リーリエ!!!」

「やめろ!!!」

迫るカイリユースの攻撃の前にリーリエはすぐに体を起こしてシロ

ンを抱きかかえた。しかし、ほぼ時速約2400kmで滑空するカイリユーの速度を前に躲す時間はなかった。

自分の身を盾にシロンとコイキングを庇いながらリーリエはゆっくりと目を閉じた。

「リザードン！【かえんほうしゃ】！！？」

カイリユーに向かって一直線に放たれた火炎放射。そのパワーに押し返されたカイリユーは上空へと吹き飛ばされた。

火炎放射が放たれた方へと顔を向けるとそこには一体のリザードンがカイリユーに威嚇していた。

『リザードン かえんポケモン

炎・飛行タイプ

ヒトカゲの最終進化系。強い相手を求めて空高く飛び回る。苦しい戦いを経験したりザードンほど炎の温度は高くなると言われている』

「ドラゴンクロー」!!?」

「グウオオ!!?」

さらにリザードンは一気にカイリユウの前へと移動すると、その鋭い竜の爪でカイリユウを切り裂いた。全く歯が立たなかったカイリユウを相手にダメージを与えているリザードンの強さに驚くばかりだ。

そしてそのリザードンのパトナーである一人の青年がリーリエ達を守るような形で姿を現した。

「おいおい！良いところぞ！」

「何なんだよ！お前は！」

「お前達に答える必要はない」

さつきまで勝利を確信していたヘボイとトロイの焦りの返答に対して青年は答えるのを拒否した。拒否したのと同時に腕に装着されたメガバンブルに埋め込まれたキーストンを飾した。

「我が心に応えはキーストーン！進化を超えろ！メガシンカ!!!」

「グウオオオオ!!!」

メガシンカー！自身のメガストーンが輝きだすと、リザードンの体は立ち待ちに黒いウロコに覆われた。メガシンカをした事に火力が上がった炎はオレンジが混じった赤い炎から白が混じった青い炎へと変化した。

「マノン！今のうちに!!!」

「うん！ハリサ！【つるのムチ】でここまで引っ張って!!!」

「ハロ!!?」

すぐにアランの呼び声に応答したマノンはハリマロンのハリサの

蔓でリーリエや他のみんなを安全な後ろの方へと運んだ。

「大丈夫!!?!しっかりして!」

「すいません!..ありがとうございます」

押し殺されそうな声を振り絞って、リーリエはマノンにお礼をする。

全員の無事を確認したアランはリザードンと一緒にカイリユーに身構えた。

「リザードン! 【ドラゴンクロウ】 !!?」

「カイリユー! 【ダークラッシュ】 !!?」

アランとミラーボの同時による指示でリザードンとカイリユーも同時に距離を詰めた。リザードンの爪とカイリユーの拳が重なるとリザードンは力一杯腕を振り下ろすと、そのまま空を飛んでいるカイリユーを地面へと叩き落とした。

「な!!」

リザードンの想像以上の攻撃力にミラーボは逆に追い詰められてしまっていた。

「【ダークダウン】 よ!!?」

「躲せ!リザードン!!」

起き上がるカイリユーは次の攻撃をリザードンに放つが、すぐにリザードンはその技を躲した。

「防御まで下げられたら、厄介だからな」

その発言にミラーボから初めて焦りが生まれた。

「ダーク技を把握している。あ:あんた何者よ!」

「言ったはずだ。答えるつもりはないと!」

アランの力強い声に反応したリザードンも雄叫びを上げた。そのリザードンの強さに押されたミラーボは急いでカイリユーに指示を出した。

「生意気いい!!!カイリユー! 【ダークストーム】 !!?」

「【かえんほうしゃ】で押し返せ!!」

カイリユーの黒い竜巻とリザードンの火炎放射がぶつかり合った。しかし、リザードンの火炎放射はそのまま黒い竜巻を簡単に消し飛ば

してしまった。リザードンの火炎放射がカイリユーに命中するとその熱風にミラーボは顔を引っ込めてしまった。

再び顔を上げた頃にはリザードンはカイリユーの真ん前に位置すると、ありつたけの炎エネルギーを身体中にへと溜め込んでいた。

「リザードン！『ブラストバーン』!!?」

「グウオオ!!?」

「カイウオオ!!!」

カイリユーを拳で地面へと叩きつけたその直後、その威力に大地が割れると、マグマのように地中から炎が噴き上がると、大きな爆発が起こった。

爆発が晴れた頃にはカイリユーは地面に伏せたまま起き上がる力が無くなっていた。

「そ…そんな…バカな」

リザードンのレベルに開いた口が塞がらないミラーボは呆然と立ち尽くしてしまった。

カイリユーの戦闘不能を確認したアランは一つのスナッチボールをカイリユーに向かって投げ入れた。

開閉スイッチが開いたスナッチボールはそのままカイリユーを中へと吸い込まれていった。完全にカイリユーが入ったスナッチボールはそのままアランの手の中に収まった。

「兄貴のカイリユーが…!!!」

「もしかして、あいつはスナッチ団なのか！」

「どうでもいいわよ！キイイ!!!今度会った時！覚えてなさいよ!!!」

またダークポケモンをスナッチされたミラーボは悔しながら今まで奪ったモンスターボールをそのままにして一目散に逃げ去ってしまった。

深追いするよりも、まずはリーリエ達をポケモンセンターへと運ぶことを優先としたアランはメタグロスの「サイコキネシス」でリーリエ達の救助を始めた。

~~~~~

「ここは…」

目が覚めたらそこは病室のベッドの中にいた。気がついたリーリエに二体のポケモンが飛び出した。

「きゃー！シロン！！それに貴方はゼニガメ！」

「コン！！？」

「ゼニ！！？」

その二体の声に反応したロトムもリーリエの元へと向かった。

『リーリエ！よかったロト。目を覚ましたロト！』

「ロトム…貴方も無事で…よかったです」

シロン達の安否の確認も取れたリーリエは急いで起き上がった。

「カノン！サトル！み…みなさんは！！！」

『大丈夫ロト！みんな大した怪我はしていないロト！みんなもゆっくりベッドで休んでいるロト！』

「はあ…よ…良かったです」

それを聞いて安心したリーリエはすぐに体を崩した。シロンとゼニガメの頭を撫でていると、一人の少女が病室へと入ってきた。

「良かった！気がついてくれて！」

「貴方は…たしか！」

「私はマノン！この子はハリサ！物凄い爆発音が聞こえたから何かなと思っ行ってたら…よかったよ。間に合っって！」

「助けて頂いてありがとうございます。わたくしはリーリエ。この子はシロン。本当に何てお礼を申したら…」

「寝てて！今は体を動かしてはダメだよ！」

「ハロロ！！？」

起き上がるリーリエの体をマノンは急いでリーリエの体を支えた。

そのままゆっくりと体を倒したり、リエはすぐに目を閉じると、そのまま眠ってしまった。

暫く寝て元気を取り戻したリーリエはすぐにみんなとも合流した。カノンもサトルもソウタもタケシもノゾミもジュンサー。そして他のポケモン達の容体はそんなに大したものではなかった。

「みなさん本当に御免なさい。私の責任だわ。なんて、謝れば!!!」

「ゼニガメエガ!!?」

「ジュンサーさんが謝る必要はありません。自分達から申し出た事ですから」

巻き込んでしまった事に謝罪するジュンサーをタケシは優しく口を開いた。

「みなさん！お身体の方は」

「ポケモン達も含めてもう大丈夫さ！」

「ああ、とにかくみんな大事に至らなくて良かったよ」

「本当にありがとう！マノンさん！マノンさんが来てくれなかったら、私たち……」

「お礼は私じゃなくてアランに言ってよ！」

「アラン……さん」

リザードンを使っていた青年の名前だろう。その名前を呟くと青いマフラーを掛けたその人物がリーリエ達の元へと向かってきた。

「マノン！怪我をした人たちはもう大丈夫なのか？」

「うん！みんなもう大丈夫そうだよ！」

マノンの言葉に安心した表情をアランは浮かべた。すると、サトルは彼の元へと向かった。

「やっぱりアランさんですよね！カロスリーグ優勝者の！」

「ああ……そうだ」

その答えにカノンとソウタも思い出したようで一斉に驚いた。カロスから来たトレーナーのアランはカロスリーグの決勝でサトシを

倒した優勝者である事を聞いた。

サトシの実力を知っているリーリエとタケシとノゾミはその事を聞いて一緒になって驚いたのも無理はなかった。

カロスの優勝者を前にテーシヨンが上がるのであったが、それよりも先ほどのミラーボが使っていたカイリユーがどうしても気になっていた。その議題にリーリエはすぐにアランに質問した。

「そういや、アランさん！さっきのカイリユーって…あれは」

「大丈夫だ！このカイリユーはちゃんと国際警察本部の人に保護して貰う事になつている。何も心配する事はない」

「そうだよ！だから安心して！」

「ハロ!!？」

カイリユーの安否は任せられる事をアランとマノンから聞いた一同は撫で下ろした。

怖かった感情はあつたが、悪い人たちに使われていたカイリユーに内心、心配していたからだ。

しかし、リーリエが言いかけた事はそれとは別の案件だった。

「黒いオーラ…」

その単語を聞いた直後、アランとマノンの表情が固くなった。

「あのカイリユーから微かに見えたんです！その黒くて…ただならぬいオーラという物が…」

リーリエの見た黒いオーラ。それに対してカノンも答える。

「リーリエ！それってオツキミ山の時も言っていたよね！ズルズキンからも黒いオーラみたいな物が見えたって！」

「はい！あの時は偶然かと思つたのですが！先程のカイリユーからも同じような黒いオーラが見えたのです！」

その証言にマノンはアランに顔を傾けた。マノンの心配そうな表情を見たアランはリーリエに言う。

「リーリエ。そのズルズキンを見せてくれないか？」

「えっ…は…はい」

何故ズルズキンをと思ったが、アランの真剣な目つきから、リーリエはズルズキンのモンスターボールを取り出した。



「ズツ!!?」

ズルズキンが出て来た直後にアランはスカウターみたいなものを取り出すと、ズルズキンを調べ始めた。調べる時間はものの数秒で終わった。スカウターを閉まったアランにマノンはいかける。

「どう?アラン」

「ダークオーラは消えている。もうリライブもしなくていいかもしれない」

アランとマノンは納得したものの、リーリエ達には何んなのかさっぱり分かっていない様子でいた。それも当然だ。ダークポケモンの存在すら知られていないのだから。本来は国際警察からもダークポケモンについては内密にと言われていたのだが、肉眼でもダークオーラが見えるリーリエに隠し通すのも無理だと思ったアランはリーリエ達にダークポケモンについて話す事にした。

オーレ地方。ダークポケモン。戦闘マシン。シャドー。スナッチ。リライブ。

そしてこれからカントー地方に起こるかもしれない危険。

知っている情報を全てリーリエ達に話した。アランの話はどれも信じ難く非情的なものだった。話の最中でも顔が次第に青ざめていく者もいれば、空いた口が塞がらない者も出て来た。しかし、ミラーボの件を思い返せば節当たる部分は出ていた。

リーリエはゆっくりとズルズキンのモンスターボールを取り出すと只々それを眺めていた。アランからズルズキンのダークオーラの反応がないので心配はいらないと報告された。今思えば、オツキミヤマでの戦闘時に見せていたズルズキンの攻撃技はダークポケモンのみが覚えるダーク技の中の一つである事も分かった。

ダークオーラが見えるリーリエについては一度、国際警察本部の人に伝える事になった。ただ、今日の事があつたため整理も難しいし、無理をさせる訳にはいかない。

アランからのダークポケモンの情報を聞き終えると、みんな各自の自室の方へと向かった。

~~~~~

その夜、アランとマノンはリーリエの事について話していた。

「リーリエさん。ダークポケモンのオーラは見えていたけど、ダークポケモンについては何にも知らない様子だったよね」

「ああ、流石に嘘はついていないだろ。ダークポケモンに関しては最近になってカントーのジュンサーさんの耳に入ったぐらいだから」「何でリーリエさんだけがそれを見る事が出来たのかな？」

「ダークオーラはポケモンの負の感情に反映されて浮かび上がる靄だ。もしかしたら、ポケモンの気持ちを本当に良く理解している人にはそれが見えるのかもしれないな。実際にオーレの英雄と言われた二人のうちの一人も裸眼でダークオーラを見る事ができた人だからな」

「リーリエさんは心の底からポケモン達の事を想いやれる優しい人なんだね」

「ああ。…だからこそ…余計にそういう人には見えてほしくないものだな」

今夜は満月がよく見える。夜風に吹かれながら手に届きそうなそれを見つめていた。

隣の部屋では満月に手を合わせ、これ以上苦しめないポケモン達が出ない事を祈る少女の姿もあった。

## 第二十五話 アローラ祭！全員集合！

クチバはオレンジ。夕焼けの色。夕焼け色の港町。

朝からこの街では船舶だけでなく多くの人々の歓声が響き渡っていた。

ジウンサーが運転する一台のパトカーから飛び出した少女はパートナーのシロンと一緒にクチバシティへと走り出した。街へと近づくにつれて、目に映るもの。鼻に届く懐かしき故郷の香りが自然と入ってくる。

走って行く彼女は見覚えのある五人の人影に向かって大きく手を振った。事前に到着の知らせを受け取っていた彼らも彼女に向かって大きく手を振り返した。

リーリエ「マオ！カキ！マーマネ！スイレン！」

シロン「コーン!!？」

マオ「リーリエ!!!」

再開のハグを交わしたリーリエとマオ。後の四人も彼女の周りに集まってはスクール以来の再開を喜び合った。

リーリエ「お久しぶりですみなさん!!!」

スイレン「リーリエ久しぶり！」

カキ「ククイ博士から聞いたぞ。リーリエ！ジム巡りしてるんだってな！」

マーマネ「なんか見ないうちにシロンも逞しくなったみたいだね」

シロン「コン!!？」

トゲデマル「モギユ!!？」

アママイコ「アーマイ!!？」

アシマリ「アウアウ!!？」

バクガメス「ガアメス!!？」

シロンもトゲデマル達と久しぶりに会えた事に大喜びでいた。すると、リーリエは残りのモンスターボールを手に出すと一斉に解き放った。

リーリエ「みなさん！出て来てくださいー！」

中から現れたのはここまでリーリエがカントーを旅して出会った仲間達。リーリエのポケモン達にマオ達は目を光らせていた。

リーリエ「この子達はわたくしがここまで旅をした中で出会った仲間達です。アママイコ達もよろしくお願いしますー！」

リーリエの紹介を終えると、キモリ達もアママイコ達の元へと駆け寄ると改めて挨拶や握手を交わした。しかし、等のズルズキンは近づこうとはしなかった。

ズルズキンの事についてマオ達に説明をしていると、カノン達もリーリエの元へと合流した。

リーリエ「ジュンサーさん。ここまで送って頂いてありがとうございます！」

ジュンサー「いいのよ。私も警備の仕事でクチバシテイに戻る予定だったし！それじゃあ、みんな楽しんで！」

サトシのゼニガメ「ゼニゼニ!!?」

クチバシテイにリーリエ達を送り届けたジュンサーとゼニガメ消防団はそのまま仕事へと戻ろとしていた。

ゼニガメ「ゼニ…」

ただ、シロンと仲良くなったゼニガメは少しリーリエ達と離れるのが寂しいようだった。それに気づいたジュンサーはリーリエに声をかける。

ジュンサー「リーリエさん。この子の事お願いできないかしら？すっかりシロンちゃんと仲良くなったみたいだから」

リーリエ「分かりました！わたくしは大丈夫です！」

その声を聞いたゼニガメは喜んでシロン達の輪の中へと入って行った。

ジュンサーを見送ったその後、リーリエは改めてカントーで出会ったカノン達を紹介し始めた。

リーリエ「皆さん！こちらにいるのは、わたくしが通っていたポケモンスクールの仲間。マオにカキにマーマネにスイレンです」

アローラ組「「「よろしく!!!」」」

カノン「カノンです♪」

サトル「サトルです。初めまして!」

ソウタ「ソウタだ!よろしく!」

タケシ「俺はタケシだ」

ノゾミ「私はノゾミ。よろしく!」

マノン「私はマノン。この子はハリサ。それから隣にいるのがアラン」

アラン「宜しく」

お互いに自己紹介が終わると、カノンはすぐにマオ達のポケモンを見つけると、好奇心満載に近づいて行った。

カノン「うわああ!!!見た事ないポケモン達だ!可愛い!!!この子はカッコいい!!!きやああ//////」

ソウタ「こいつはすげーぜ!!!なあ!誰か俺とバトルしようぜ!なあ!」

サトル「二人とも。とにかく落ち着いて」

見た事ないポケモン達を前に興奮気味のカノンとソウタをやれやれといった表情でサトルが押さえた。

『アママイコ フルーツポケモン

草タイプ

いつも元気に飛び跳ねている。元気な姿と甘い香りで周りにポケモンが集まってくる』

『バクガメス ばくはつがめポケモン

炎 ドラゴンタイプ

背中  
の甲羅の棘は爆発物。うっかり触ると爆発してしまう。火山を住処にしている』

『アシマリ あしかポケモン

水タイプ

水のバルーンを作り上げるのが得意。大きなバルーンを作るためコツコツと練習を繰り返している』

『トゲデマル まるまりポケモン

電気 鋼タイプ

背中  
の針は普段寝かせていて戦闘になると一気に逆だてる。長い毛は避雷針の役割を持ち落雷を引き寄せると電気袋に溜め込む』

ロトム  
の登場を確認したマーマネとカキはロトムの方へと向かった。

マーマネ「ロトム図鑑も久しぶりだね！」

ロトム『カキ！マーマネ！また会えて嬉しいロト！』

ロトムとも久しぶりに再会したマオは一番気になっていることをリーリエに告げた。

マオ「そういやリーリエ！サトシは！サトシには会えたの？」

サトシの言葉にカキ達もリーリエにサトシに関して質問し始めた。その質問に対してリーリエはマオ達が期待している答えを応えることができなかった。

リーリエ「あの…それが」

スイレン「そうか。リーリエもサトシとは再開できていないんだ」  
カキ「また会えると思っただけどなく」

スクールを卒業してから、久しぶりに会えると楽しみにしていたマオ達であったが、リーリエもサトシと再開出来ない事を知り残念そうに肩を落とした。

暫く話してから、カノンがリーリエに声を掛けた。

カノン「ねえ！リーリエ。ここから別行動取らない？」

リーリエ「別行動ですか？」

ノゾミ「そうだね。こうして久しぶりに再開できた訳なんだし」

タケシ「俺たちは俺たちで見て回るよ」

リーリエに気を遣ったのか分からないが、その提案にリーリエは大きく頷いた。

リーリエ「そうですね。分かりました。ではみなさん後ほど！」

こうして暫くの間、各自別行動でアローラ祭を見て回る事に決めた。

いったんカノン達と別れたリーリエは、マオ達と一緒にククイ博士の元へと向かう事にした。

~~~~~

ククイ博士「ここにいるのはアローラ地方のポケモン

草タイプのモクロー。炎タイプのニャビー。水タイプのアシマリ

だ！」

????「見た事ないポケモンばかりだ！なあ！ルカリオ！」

ルカリオ「リオツ!!？」

そのククイ博士はアローラのポケモンを紹介していくセミナーを開いていた。アローラのポケモン達の生態に興味を持った他地方の

幾多のトレーナーがククイ博士の元へと集まっていた。その中で一際一番高い声でやたらとテーションが高いトレーナーがいた。

ククイ博士「おお！そうか！このお祭りではその他にもアローラ出身のポケモンが沢山いるから楽しんでくれよ！」

???「ありがとおっちゃん！良しいろんなポケモン達に会いに行くぜ！ルカリオ！」

そのままそのトレーナーはパートナーのルカリオを連れて屋台の方へと神速の如く走り去って行った。

ククイ博士「サトシに似て元気な子だったな」

その少年の後ろ姿を見届けたククイ博士に一人の少女が走ってきた。その呼び声に振り向いたククイ博士はその少女に向かって大きく手を振った。

リーリエ「ククイ博士!!!」

ククイ博士「おお!!!あはは！リーリエ。久しぶりだな！」

リーリエ「お久しぶりです！博士！」

カントーへと旅立った我がスクールの卒業生であるリーリエだ。ククイ博士の元へと駆けたリーリエはそのまま博士の胸へと飛び込んで行った。

急に飛び込んで来たリーリエに押し倒れそうになりながらもククイ博士はリーリエとの再開を喜んだ。

ククイ博士「ロトムもリーリエのサポートありがとうな」

ロトム『どういたしましてロト！』

ロトムを胸を張って答えると、聞き覚えのある声がリーリエの元へと向かって来た。

オーキド校長「こうして卒業生に会える事ができてうれしシビール！」

カントーのロコンを抱きかかえ、ポケモンギャグを得意とするその人物を見てリーリエはすぐに挨拶に向かった。

リーリエ「お久しぶりです！オーキド校長先生！」

卒業以来の再会にリーリエはさらに胸が高鳴っていた。だが、あることを質問すると同時に顔に雲がかかったかのように少し不安げな



表情へと変わった。

リーリエ「博士。アローラ地方の方はどうですか？」

リーリエが母のルザミーネの治療のためにカントー行きの船へと乗る時も、まだアローラ地方の至る所ではウルトラビーストによる被害で崩れている所が目立っていた。

身内が犯してしまった事もあって、旅をしている時も気にかかっていたリーリエの不安な表情に察したククイ博士とオーキド校長は安心した表情で答えた。

ククイ博士「ああ…君のお兄さんグラジオ君が率いるエーテル財団のおかげもあって、何とか立て直しつつあるよ。ここカントーでこんなお祭りを開くことが出来たぐらいだ。もう大丈夫さ！」

オーキド校長「それにこのアローラ祭は復興祭でもあるのじゃ」

リーリエ「復興祭ですか？」

オーキド校長の言葉にリーリエは首をかしげた。

オーキド校長「アローラ地方の魅力を広めるだけでなく、かつてのアローラの活気を取り戻す事もこの祭りを開催する目的でもあったのジャラランガ！」

マオ「それに向こうにはイリマさんも来てるんだよ！」

リーリエ「そうなのですか！」

ママネ「ねえ！挨拶しに行こうよ！」

一旦、オーキド校長と別れたリーリエ達はイリマがいる方へとククイ博士の案内の元、向かう事にした。

~~~~~

ククイ博士によると、イリマはデイグダの穴と呼ばれるダンジョンの近くで祭りの手伝いをしていると聞いた。

リーリエ「イリマさん！」

自分の名前が呼ばれたイリマは駆け寄るリーリエ達に目をやると、自分のパートナーであるイーブイを抱えて、自分もリーリエ達の方へと駆け寄った。

イリマ「これはリーリエさん！お久しぶりです」

リーリエ「イリマさんも参加なされていたのですね」

イリマ「もちろん。アローラの復興を祈願してお祭りなのです。参加しない訳にはいきませんよ」

イーブイ「イーブイ!!？」

イリマとの久しぶりの再会に喜んでいるリーリエ達に一人の青年が歩み寄る。

???「イリマ！友達か？」

その人物にイリマは直ぐに答えた。

イリマ「はい！彼らは僕のスクールの後輩なのです」

???「じゃあ俺の後輩でもある…って俺は途中で引越したからそうではないか」

イリマと親しげに話す青年にリーリエ達の目が集まった。自分の後輩でもあると耳にしたがアローラ出身のトレーナーなのか。その人物をリーリエ達の誰一人も知らなかった。

マオ「イリマさん。そちらの人は？」

マオの問いにイリマはその青年をリーリエ達の前へと紹介した。

イリマ「彼は僕のスクール時代の同期のユーゴです。今はカロス地方に住まわれているのですよね」

イリマの口から出たそのユーゴという青年はイリマとポケモンスクールの同級生であったようだ。生まれ育ちはアローラ地方であるが、母親の仕事の都合で今はカロス地方に住んでいる。その後もイリマとは連絡を取り合う中であるため、もちろんウルトラビーストの件については聞いていた。

「ジュナ!!？」

そして、ユーゴの後方で物静かに直立している一体のポケモン。葉っぱで出来た大きなフードを被り、オレンジ色の模様で覆われてい

るその眼光は歴戦を潜り行けて来た勇姿を感じさせる迫力だ。

カキ「このポケモンは…たしか」

ロトム『ボクにお任せロト!』

『ジュナイパー やばねポケモン

草・ゴーストタイプ

翼に仕込まれた矢羽を番えて放って攻撃する。100メートル先の小石を貫く程の制度がある』

スイレン「か…かつこいい!」

カキ「歴戦の勇者って感じだな」

ユーゴのジュナイパーの風格にスイレンは目を輝かせ、カキは勝負と交えて見たい感情が出ていた。みんなの目線に気づいたユーゴは優しくジュナイパーの首筋を撫で始めた。さつきとは変わってジュナイパーは目を閉じて気持ち良さそうにじやれ始めた。

ユーゴ「ジュナイパーとは長年の連れ染めなんだ。俺のパートナーというよりも、家族みたいな奴さ」

ジュナイパー「ジュナ!!?」

優しくあやすユーゴを前に続いてイリマはユーゴについて話し始めた。

イリマ「ちなみにユーゴさんは僕なんかよりも素晴らしいトレーナーですよ。もしかしたらアローラ最強のトレーナーになっていたかもしれない人ですから」

ユーゴ「おいおい大袈裟に言うなよ。イリマ」

ポケモンスクールでは最強の卒業生と言われるイリマがユーゴの実力を賞賛している様子にリーリエ達はユーゴについて質問し始めた。

マーマネ「えっ、そんなに凄い人なんですか？」

マーマネはの発言にイリマは自分の事のように話し始めた。

イリマ「もちろん。彼はアローラの全ての試練を達成しており、全てのZクリスタルを揃えております。それにカロス地方へと引越してから、幾多のポケモンリーグで実績を上げているのですよ」

カキ「全ての試練！それってつまり島キングのハラさんや島クイーンのライチさんにもポケモンバトルで勝っているという事なのですか！」

スイレン「す…凄すぎる」

アローラの全てのZクリスタルを手に行っている事にも驚いたが、まだそれは序の口だった。聞けばポケモンリーグでも数々の実績を残していた。

初めての挑戦したカロスリーグでは大人でも勝ち上がるのが難しい本戦トーナメントにまで進みベスト8まで勝ち上がっている。その後は他の地方にも転々とジムバッジを集めてはリーグに参加をし、ホウエンとジョウトのポケモンリーグでは準優勝を果たしているのだ。

聞けば聞くほど写し出されるユーゴの実力と権威にリーリエ達は驚かされた。そして、さらに驚かされる事をイリマの口から告げられたのだ。

イリマ「そして今はカントーリーグに挑戦中なのですよね」

ユーゴ「まあな」

一同「カントーリーグ!!!」

マオ「それって、リーリエのライバルって事」

イリマ「と言いますと？」

リーリエ「はい！わたくしも今シロン達と一緒にジム巡りの旅をしているのです！」

イリマ「リーリエさんが！それは驚きましたね」

マーマネ「だけど、ユージさんは他のポケモンリーグにも出てる実力者なんだよね」

スイレン「強敵ライバルここに現る！」

ユーゴ「それじゃあ、リーリエ。お互いにポケモンリーグに出場できるようジム巡りの旅頑張っで行こうな」

リーリエ「はい！いまからでもカントーリーグが楽しみになってきました！」

シロン「コーン!!？」

ユーゴというポケモンリーグの優勝候補トレーナーを前に自分の闘志を燃え上がらせた。

ユーゴだけではない、カノンにサトル。ソウタとノゾミとライバルが現れる事にリーリエは彼らとポケモンリーグと戦える事に胸を弾ませていた。

マオ「リーリエ。暫く見ないうちにサトシに

似てきてない？」

カキ「見たいだな」

スクール時代では見ないリーリエの成長にマオ達は驚かされるばかりであった。

~~~~~

一方、リーリエと別行動を取ってアローラのポケモンを見て回っているカノンとサトルとソウタは一体のポケモンに釘付けになっていた。

カノン「嘘…これがナツシー…なの？」

ソウタ「何食ったらここまで首が長くなるんだよ…」

ナツシー「ナツシ〜♪」

カノンとソウタが呆気に取られて見ているのはカントー地方のナツシーとは違う姿をしたナツシーだった。カノン達が見ているナツシーはアローラ地方の強い日差しを浴び続けた結果、首部分が急

激に成長して通常のナツシーよりも全長が5倍近くとなっているアローラのナツシーだ。

サトル「そういや、アローラのナツシーは草とドラゴンタイプみたいだね」

カノン「えっ!!!ドラゴン!!!」

ソウタ「何処にドラゴン要素があるんだよ!」

他のドラゴンタイプのポケモンと見比べてみると、鋭い爪や牙。翼を持たないアローラのナツシーにカノン達は頭を悩ませた。

アローラのナツシー以外にもリージュンフォームを成し遂げたポケモンやアローラにしか生息しないポケモンと触れ合う事が出来た。

ソウタ「サトルも珍しくソワソワしてるな!」

カノン「普段は私達の保護者係なのにね」

サトル「そ…そりや!アローラのポケモンをこんなに身近で見れるんだよ!そりや僕だって…」

すると、一体のポケモンがカノン達の前に姿を現した。

???「クウゝ!!?」

そのポケモンは大きく手を上げて万歳した状態でカノン達に手を振っていた。

ソウタ「おお!!!あれもアローラのポケモンか!」

カノン「可愛い!!!手振ってる!」

???「クウ!!?」

カノン達が自分の元へと近づいてくると、そのポケモンはサトルを優しく抱擁した。

サトル「あはは!モフモフしてて気持ちいい!」

始めて目にする人懐っこいポケモンに感激していると、後からリーリエ達の姿が見えてきた。

ソウタ「リーリエ!あのポケモンなんだ!?!?」

カノン「もう人懐っこくて可愛いすぎるのゝ♡」

そうやってカノン達はそのポケモンに指を指すと、リーリエ達の顔は一気に真っ青になった。

リーリエ「サトル!!!すぐに離れて下さい!!!」

急いでサトルに向かって忠告するも…

ギヤアアアアアオアアアアアアアアアアアアアアアア

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

遅かった…

『キテルグマ ぶこうわんポケモン

ノーマル 格闘タイプ

圧倒的な筋力を身につけている非常に危険なポケモン。大きく手

を振るがこれは警戒の印。アローラではもつとも危険視されているポケモンである』

キテルグマの凶鑑明記を確認したカノンとソウタも一気に青ざめた。

ソウタ「非常に：危険」

ククイ博士「ああ、まあ見た目があれだからな。初めて見る人にはそう危険とは思わないだろ」

被害を受けたサトルは背骨を抑えながら悶えていた。

リーリエ「サトルは：大丈夫ですか？」

カノン「こう見えてもタフだからね、大丈夫。だいじょーぶ♪」

ソウタ「お前の言う大丈夫はあてになんねえからな」

~~~~~

一方、タケシとノゾミは同じくアローラのポケモンを興味津々と観察していた。

ノゾミ「アローラ地方だと見た目だけでなく、タイプも変わるんだね」

タケシ「ああ！これは他のもいろいろ観ておきたいな！」

その二人に一人の大男が歩み寄って来た。

???「OH！誰かと思えば久しぶりだな！」

いきなり声をかけられたタケシとノゾミは声をかけられた方へと振り向いた。逞しい上腕二頭筋を持ったその人物を見たタケシはその大男と握手を交わした。

タケシ「マチスさん！お久しぶりです！」

親しげにタケシと握手を交わしたのだが、ノゾミは自分の何倍もの身長で見下ろしているマチスの迫力に圧倒されていた。

リーリエ「タケシ！ノゾミ！」



途中でアランとマノンとも合流したりーリエ達はタケシとノゾミの方へと向かって行くと、タケシ達と一緒にいたマチスの姿を見たソウタとマノンは同時に声をあげた。

ソウタ マノン 「マチスさん!」

マチス 「おお! 金髪ボーイにカロスガール! どうだ、その後のジム戦は!?!」

二人の姿を見たマチスはソウタの髪を掻き乱しながら頭を撫でては、マノンに対しては大きくハグをした。

りーリエ 「タケシ。この方はどちら様ですか?」

タケシ 「あつりーリエ。みんな。この方はマチスさん。ここクチバジムのジムリーダーだよ!」

りーリエ 「ジ…ジムリーダーですか!」

クチバジムのジムリーダーとしたりーリエは声をあげると、マチスはりーリエの方へと視線を変えた。

マチス 「HEY! WELCOME TO! クチバシテイ!」

りーリエと近づいたマチスはそのまま少し怯えてるりーリエに大きく挨拶代りのハグを交わした。

マチス 「嬢ちゃん! もしかしてクチバジムに挑戦する気かね?」

りーリエ 「え…ええ」

マチス 「OK! ここジムリーダーのマチスはいつでも君の挑戦を待っているよ!」

見かけによらずフレンドリーなマチスにりーリエはたじたじになるもの、しつかりと返事を返した。マチスの隣にいるポケモンも頬の電気袋から電気を帯びながらりーリエ達を見つめていた。

??? 「ライライ!!?」

そのポケモンに気づいたマーマネは自分がいるアローラ地方とは全く違った姿をしたそのポケモンに驚いていた。

マーマネ 「もしかして…ライチュウ!!」

ククイ博士 「この地方のライチュウだ!」

マーマネの言葉に説明を付け加えたククイ博士。ロトムもマチスが連れているライチュウの写真の撮ると、新しくデータに加えた。

『ライチュウ ねずみポケモン

でんきタイプ

ピカチュウの進化系。身体に電気が貯まっていくと攻撃的な性格に変わってしまう。長い尻尾はアースの役割になっている』

マオ「こつちのライチュウは電気単体なんだ」

カノン「電気単体？」

ククイ博士「ああ！ライチュウにもアローラの特有の姿があつてな！アローラのライチュウは電気とエスパータイプなんだ」

ソウタ「エスパー持ちかよ！強そ！」

そんな会話が始まった矢先、ククイ博士はリーリエやマオとかつての教え子達の前へと立った。

ククイ博士「そうだ！みんなに聞いてもらいたい事があるんだ！」

みんなの視線が自分に集まった所でククイ博士は両手を大きく広げては満面の笑みでリーリエ達にこう告げた。

ククイ博士「我々アローラ組とその他の同盟地方組で燃えるビツクバンのようなバトルを行おうじゃないか！」

## 第二十六話 Z技VSメガシンカ 前半

『まもなくバトルエリア5でアローラのトレーナー対同盟地方組によるポケモンバトルを開催いたします！ご観戦にならねたいお客様は時間内に中央に設置されたバトルフィールドまでお集まり下さい』

四六時中賑わうポケモンバトル施設。その中央エリアに位置するバトルスタジアムの周りには多くの人達が押し寄せていた。

遙々カントーから出向いてくれたアローラのトレーナーの実力も見ようと、その熱気はバトルが始まる前から湧き上がっていた。

マオ「あつ、カノン！みんな！こっちこっち！」

カノン「ありがとうマオ！席取って貰っちゃって！」

先に席を取っていたマオ達は後から来るカノン達に大きく此方へと手招きした。

マーマネ「あれ？ソウタは出なかったの？」

ソウタ「ま…まあな」

カノン達が遅れた理由は同盟地方組として参加するトレーナーを決める話し合いをしていたためであった。試合形式は各5名による1体1のシングルバトルだ。みんな席へと着いた瞬間にバトルフィールドへと一人の人物が足を運んだ。

オーキド校長「アローラ！アローラから参られました。ここカントーの世界的ポケモン研究員オーキド・ユキナリの従兄弟に値します。ナリヤ・オーキドと申します」

観戦に来た人達に丁寧挨拶をするとオーキド校長はそのまま深

く一礼をした。一礼をしたオーキド校長に観戦客から拍手が巻き起こった。

オーキド校長「ポケットモンスター。縮めてポケモン。この世界にはわしら人間と同じく伸び伸びと暮らしています。その数は400と500と日に日にその数は新種が確認されるたびに増えていきます。そして、数々の研究の中では、まだ誰も知らないポケモン達に隠された秘めたる力が確認される事もしばしばであります」

するとオーキド校長はポケットから二つのある物を取り出すと観戦客のみんなに見えやすいように高く上へとあげた。モニターにも写されたその二つの宝石は太陽の光に照らされ、神々しく輝いていた。

オーキド校長「これはキーストンとメガストーンと呼ばれる物です。これは多くの人達の耳に入ったと思われれます。そう！メガシンカです。カロス地方で確認された特定のポケモン達に起こる戦闘中のパワーアップ現象。それと同じように私等のアローラ地方でも良く似た力があります」

そして、反対側のポケットからはひし形状に形成された光り輝く小さな宝石を取り出した。

オーキド「その名をZ技！このZクリスタルと言われる宝石を使うことで一回の戦闘の中で一度だけ発動させる事が出来るいわば、技のパワーアップ現象です。今日の試合の中で、その二つの力を存分に味わっていききたいと思います。長々とした前置きはもうこれぐらいにして、早速、計10名のトレーナーによる熱き燃えるポケモンバトルを行なって貰いまそーナンス！」

バトル開始の宣言を下されると会場は一気に大きな声援に包まれた。メガシンカとZ技を課題とされたポケモンバトル。観戦席にいる他のポケモントレーナー達の中には空のモンスターボールを握りしめている人がチラホラ見かけた。それほどみんな、どんなバトルが見られるか待ち遠しくて仕方がないのであろう。

会場が盛り上がりを見せる中、第一試合目が始まろうとしていた。

???『あ…あゝ♪おつとご来場の皆さま。まもなくチームアローラ対

チーム同盟地方によるポケモンバトルを始めさせて頂きます。実況は私達、スイクン・ヤマトと!」

??? 『ライコウ・コサブロウがお送りさせて頂きます。さらに特別ゲストとしてクチバジムのジムリーダー、マチスさんにも起こし頂きました!』

マチス 『ベリーハードなポケモンバトル!俺も見るのが楽しみだぜ!両者の健闘を祈る!』

実況者の紹介も終わった所で一人目のトレーナーがバトルフィールドへと姿を現した。

カキ 「アローラの先鋒は俺だ!」

アローラ組の一番手はカキだ。カキはウラウラ島の島クイーンライチの試練を突破し、Z技を発動させるために必要なZリングを授かったトレーナーだ。次期島キング候補にも上がっているその実力が、Zリングに装着されている炎のZクリスタルと共に熱く燃え上がる。

### 《観戦席》

マオ 「頑張れ!カキ!!!」

マーマネ 「カキ!ファイト!」

サトル 「こっちは誰が出るんだろ」

### 《バトルフィールド》

カキに続いて反対側のトレーナーサイドからも一人の青年が姿を現した。腕にかざしたキーストンを輝かせながら、カキと向かいあつた。

アラン「こっちの先鋒は俺だ。カキ」

アランの登場にカキは笑みを浮かべた。サトシを倒した強敵。それが脳裏に張り付いた彼はさらに闘志を燃え上がらせた。

ヤマト『先鋒戦！カキ選手VSアラン選手！』

コサブロウ『試合開始！』

？カキVSアラン？

カキ「行くぞ！バクガメス!!!」

アラン「行けっ！リザードン!!!」

同時に投げ込まれたモンスターボールから出てきた二体のポケモンは炎を身体中に巻き上げながら向かいあつた。

バクガメス「ガアメス!!?」

リザードン「グウオ!!?」

互いの対戦相手を見つめ合う二体のポケモン。ここは炎タイプ同士らしくカキとアランは同じ技を同時に指示を出した。

カキ「バクガメス！【かえんほうしゃ】だ!!?」

アラン「こっちも！【かえんほうしゃ】だ!!?」

放たれた両者の火炎放射は混じり合い爆炎を生んだ。吹き荒れる熱風に体が焼かれそうになるその感じはさらに二人のトレーナーを熱きバトルへと誘った。

アラン「飛べ！リザードン!!!」

バクガメスと違って飛行タイプを合わせ持つリザードンは武器の一つでもある翼を広げて大きく滑空し始めた。

カキ「バクガメス！もう一度【かえんほうしゃ】だ!!?」

バクガメス「ガアメス!!?」

空中戦を得意とするリザードンに対してバクガメスには遠距離攻撃でしか技が届かない。飛び回るリザードンに何発ものの火炎放射を放射するも、リザードンはそれを容易く躲していく。

アラン「【ドラゴンクロー】!!?」

リザードン「グウオ!!?」

さらに躲すだけでなく、その鋭利な爪でバクガメスの技を打ち消した。

カキ「くっ!!!」

バクガメス「ガアメス!!!」

スピードだけでなくパワーも魅せられたアランのリザードンにカキに汗が流れる。

アラン「そのまま急降下! 【かみなりパンチ】 !!?」

バクガメス「ガアメエ!!!」

今度は電撃を纏わせた拳で攻撃を仕掛けた。【ドラゴンダイブ】のような迫り来る迫力に怯んだバクガメスにその技が炸裂した。

アラン「押さえつける!!! リザードン!」

さらに拳に纏わせた電撃がバクガメスの身体中へと帯びて行く。駆け巡る電流にバクガメスは苦しみながらも耐え続けた。リザードンも負けじと押し付けながらその手を引くことをしない。倒されるのも時間の問題かと思うアラン。しかし、リザードン共に気づいていなかった。帯びた電流がバクガメスの手や足にそして：甲羅にへと流れていることを

カキ「バクガメス! 【トラップシエル】 !!?」

バクガメス「ガアメス!!?」

リザードン「グウオオ!!!」

甲羅の棘は爆発物。電流がバクガメスの甲羅の棘を刺激した事で大きな爆炎がフィールドを包み込んだ。その威力に思わず吹き飛ばされたリザードンはすぐに立て直す事が出来ず、その技の威力と反動がリザードンの全身の動きを止めてしまった。

カキ「今だバクガメス! 【からをやぶる】 !!?」

怯んでいる隙にカキはバクガメスの攻撃力と素早さのステータスを上げた。さっきの攻撃力を見ればうかうかかど攻撃をする訳にいかない。多少の防御を捨てることになろうとも、全力でぶつかって行くしかない。

カキ「行けっ! 【ドラゴンテール】 !!?」

アラン「リザードン！【ドラゴンクロウ】!!？」

体を駒のようにフル回転させたバクガメスはエネルギーを貯めた尾を振り回しながらリザードンの方へと飛んで行く。アランの声を聞いたリザードンも竜の爪でバクガメスの攻撃に対抗する。

アラン「飛べりザードン！」

リザードン「グウオ!!？」

もう一度、バクガメスの出方を伺うためにアランはリザードンを空中へと移動させた。リザードンが飛んだ事を確認したアランはバクガメスの方へと目をやると、バクガメスはゆっくり後ろへと倒れると仰向け状のままリザードンの方へと体を向けた。

カキ「行けっ！バクガメス！」

カキの指示を聞いたバクガメスは甲羅の棘を爆発させるとその衝撃波で体を一気にリザードンの方へと飛ばした。

アラン「何!!!」

カキ「そこだ!!!【ドラゴンテール】!!？」

空中戦を得意としないバクガメス。しかし、カキの機転で空中にいるリザードンへ近づくことに成功した。その勢いのままバクガメスは尾をリザードンの頭部へと叩きつけると、そのままリザードンは地上に向かって落下した。

衝撃音と一緒に地面へと叩きつけられたリザードンは砂埃が舞う中、すぐに立ち上がった。無事に着陸したバクガメスもリザードンへと向かいあった。第一試合から奇想天外な戦いに会場は盛り上がる。その歓声の中、アランとカキは互いの実力を確かめ合う事が出来た。

アラン「まさか…そんな使い方をしてくるとはな！」

カキ「これは彼奴の受け売りみたいなもんで！」

アラン「それじゃあ、そろそろ全力を出させて貰うぞ！」

腕のキーストンに手を置くとその輝きは辺り一面へと発光し始めた。

カキ「来るか…」

その強い光はアランとリザードンの闘志を反映させているようだ。リザードンのメガストーンも輝きだすと、より一層リザードンは翼を



大きく広げてはその体を大きく見せ始めた。

アラン「我が心に応えよ！キーストン！進化を超えろ！メガシンカ  
!!!」

リザードン「グウオオオオオオ!!!」

七色の光に包まれたリザードンはそのまま炎の色と共に姿を変貌させた。

カキ「これがメガシンカか！面白い!!!」

バクガメス「ガアメス!!?」

目の当たりにしたメガリザードンにカキとバクガメスは武者震いを立てた。初めてのメガシンカポケモンとのバトルにもう一度気合を入れ直した。

アラン「リザードン！【ドラゴンクロー】!!?」

カキ「バクガメス！【ドラゴンテール】!!?」

再びぶつかり合う両者の攻撃。弾ける火花を散らしながら互いのパワーをぶつけ合う。

カキ「バクガメス!!!」

しかし、メガリザードンの一振りにバクガメスは一気に押し負けてしまった。吹き飛ばされたバクガメスは後ろへと後退させられてしまった。

カキ「【からをやぶる】で攻撃力を上げたのにも押し返されるとは  
…」

アラン「俺のメガリザードンXはメガシンカをすると特性《かたいつめ》になるんだ。この特性によって【ドラゴンクロー】の威力はさつきよりも数倍は跳ね上がっている」

カキ「くっ!!!バクガメス！【かえんほうしゃ】!!?」

アラン「リザードン！【かえんほうしゃ】!!?」

### 《観戦席》

マオ「メガリザードン…X?」

マーマネ「Xってどういう意味なの?」

両者の火炎放射が交える中、マオとマーマネはアランが言っていた事に対して疑問を浮かべていた。その議題に対してマノンはポケモン図鑑を取り出しながら口を開いた。

マノン「リザードンのメガシンカは他とは違って二種類に分かれているの。アランのリザードンはドラゴンタイプが追加された物理攻撃重視のメガリザードンX。もう一方は日差しを強くさせる特性【ひでり】が追加された高い火力を備えた特殊攻撃重視のメガリザードンYなんだよ!」

カノン「へえ、メガシンカはパワーだけじゃなくてタイプや特性が変わるのもいるのね」

《バトルフィールド》

カキ「バクガメス!!!」【ドラゴンテール】!!?」

アラン「リザードン!もう一度【ドラゴンクロウ】!!?」

【からをやぶる】でもう一度攻撃力を上げたバクガメスは今度は負けじとリザードンのパワーに応戦した。だが、【からをやぶる】の効果で防御力は大幅にダウンさせてしまっている。バクガメスの体力はもう長くは持たない。

カキ「一気にケリをつけるぞ!バクガメス!!!」

カキはZリングを掲げた。ホノオZから感じるオーラに気づいたバクガメスもゆっくり後退すると、大きく身構えた。

カキ「俺の全身!全霊!全力!全てのZよ!アーカラの山の如く!熱き炎となつて燃えよ!」

赤く光るホノオZのパワーがバクガメスに集まって行く。そのパワーを受けたバクガメスは太陽のように燃え上がる大きな火炎玉を形成し始めた。

カキ「【ダイナミックフルフレイム】!!!」

バクガメス「ガアメエエエエ!!!」

そのパワーをリザードンに向かってバクガメスは大きく放った。リザードンは躲す様子はなく両腕を前に出すと、迫るバクガメスの乙技を迎え撃った。逃げる事なく乙技を受けて立ちたいリザードンの気持ちを考慮し、アランも一言も発さず迫る乙技に目をやっていた。放たれたホノオ乙技はリザードンを飲み込むと、密集されたパワーが一気に解放された。吹き荒れる熱風に顔を手で押さえながらも、ジツとカキはアランのリザードンの様子を伺う。発された爆煙がフィールドに包みこむ中、観戦トレーナー達も固唾を飲んで乙技を受けたりザードンに注目した。徐々に晴れてくるバトルフィールドからは低い獣のような呻き声が聞こえた。晴れてくるその爆煙の中からは口から漏れ出す青い炎を燃やししながら、リザードンが立っていた。

カキ「ま、まさか!!!」

アラン「これが乙技か。大した威力だな」

ホノオ乙技を耐えたアランのリザードンにカキは唾然としてしまった。再び吠えるリザードンに我に返ったカキはすぐにバクガメスに指示を出した。

カキ「くっ!!!バクガメス!【ドラゴンテール】だ!!?」

カキの声を聞いたバクガメスもすぐにリザードンの方へと突進して行く。だが、それは焦りから生まれた誤算。アランはバクガメスを射程範囲まで引き寄せるまでリザードンを待機させた。

アラン「リザードン!【ブラストバーン】!!?」

射程範囲に入ったバクガメスを確認したアランの合図にリザードンは炎を纏わせた拳で地面を割った。中からは吹き出す炎が迫り来るバクガメスに向かって放たれた。

カキ「バクガメス!!!」

ホノオ乙と同等の攻撃がバクガメスを飲み込んだ。爆炎が晴れるとそこには俯せ状で倒れているバクガメスのその姿があった。目を回しているバクガメスを確認した審判は旗を大きくリザードン側に大きく掲げた。

ヤマト『バクガメス戦闘不能！リザードンの勝ち！』

コサブロウ『先鋒戦の勝者は同盟地方チーム、アラン選手!!!』

第一試合から白熱した熱い戦い！会場からは二人を讃える声援が鳴り響いた。

カキ「よく頑張ったな。バクガメス」

バクガメス「ガアメス…」

バクガメスを支えるカキにメガシンカが解けたりザードンと一緒にアランが向かっていった。

アラン「熱いバトルをありがとうカキ。炎の乙技か。流石に俺のりザードンも耐えてくれるかどうかまでは分からなかった」

リザードン「グウオ!!？」

カキ「こちらこそありがとうございました！良い体験をさせて頂きました！」

バクガメス「ガアメス!!？」

カキ「また俺とバトルをしてくれませんか!!？」

アラン「もちろん。だけど、その時は俺とリザードンもさらに強くなっているからな！」

握手を交わす二人にさらに声援が起こった。だが、バトルはまだ終わっていない。次のバトルが始まろうとしていた。

コサブロウ『次鋒戦！両者前へ』

???「はいー」

次に始まる第二試合目。二人のトレーナーがバトルフィールドへと姿を現した。

ヤマト『次鋒戦！スイレン選手VSノゾミ選手！』  
コサブロウ『試合開始！』

？スイレンVSノゾミ？

ノゾミ「行くよ！エルレイド！R a d y   g o!!!」

エルレイド「エルレイド!!？」

スイレン「お願いね！アシマリ！」

アシマリ「アウ!!？」

バトルフィールドへと勢いよく放たれたエルレイドは鋭く磨き上がった刃を振り回し、アシマリは大きなバールンを形成させて爆発させては自身の力を大きくアピールした。

試合開始のコールと同時にスイレンとアシマリはすぐに動き出した。

スイレン「アシマリ！【バブルこうせん】!!？」

アシマリ「アウ!!？」

ノゾミ「エルレイド！【サイコカッター】!!？」

エルレイド「エルレイド!!？」

アシマリの泡光線とエルレイドの光の刃が相殺されると、ノゾミは怯むことなく次の指示を出した。

ノゾミ「【つるぎのまい】!!？」

光り輝きだしたエルレイドの刃はさらに鋭くなった。

ノゾミ「もう一度！【サイコカッター】!!？」

もう一度放たれた光の刃がアシマリに向かって放たれた。向かってくるサイコパワーを蓄えた光の刃の前にアシマリは大きく身構えた。スイレンの方へと視線を合わせると、スイレンはアシマリの

考えている事がわかったようにゆっくりと頷いた。

スイレン「バルーン!!!」

スイレンの合図でアシマリはバトル開始前と同じぐらいの大きな水風船を形成した。その中に「サイコカッター」が吸い込まれると、その衝撃もバルーン諸共吸収された。

スイレン「よし！良いよアシマリ！」

アシマリ「アウアウ♪」

ノゾミ「へえくなかなか見せてくれるじゃない!?」

エルレイド「エルレイ!!？」

【つるぎのまい】で攻撃力が上がったのにもかかわらずエルレイドの技を受け止めたアシマリの水風船の強度にノゾミは驚いていた。

スイレン「よし！【バブルこうせん】!!？」

アシマリ「アウ!!？」

アシマリの【バブルこうせん】はエルレイドに向かって放たれる。エルレイドはアシマリと同様に躲す様子はなく、迫るアシマリの攻撃に向かって拳を立てた。

ノゾミ「エルレイド！【しんくうは】!!？」

エルレイド「エルレイ!!？」

何か思いついたノゾミはエルレイドに指示を出すと、エルレイドは大きく体を回転させ始めた。小さな竜巻を巻き起こしたエルレイドの【しんくうは】はアシマリに放つ事なくエルレイドを取り囲むようにして巻き起こっている。すると、アシマリの【バブルこうせん】はエルレイドの【しんくうは】と接触すると打ち消すどころか、次々と放たれた泡を巻き込み始めた。

スイレン「何これ…」

打ち碎かれる事なく、浮遊する【バブルこうせん】を纏う竜巻の中心にいるエルレイドは迫力があり鬼神の如く、ノゾミの次の指示を待つかのようにしてアシマリを見つめていた。

ノゾミ「エルレイド！【サイコカッター】!!？」

そのまま紫色に輝かせた刃のエネルギー波を竜巻の中へと流すと、サイコパワーとアシマリの【バブルこうせん】の二つのエネルギーを

取り組んだ竜巻が作り出された。

ノゾミの得意とするコンテスト技を前にスイレンとアシマリの雲行きが怪しくなってきた。

スイレン「このままだと負ける」

自分たちの今の状況がまずいと感じたスイレンはミズZをはめたZリングをかぎした。

スイレン「行くよ！アシマリ！」

飾れたミズZのエネルギーはアシマリへとその力を授けた。Z技を撃つためにスイレンとアシマリはお互いに同じポーズを取り始めた。

スイレン「届け！水平線の彼方まで！」

エネルギーが集まったアシマリは大きくジャンプすると、水の衣を体へと纏った。

そして、空を切るかのように回り始めると大きな渦潮が発生し始めた。

スイレン「スーパーアクアトルネード」!!!

アシマリ「アシャアアアアアア」

!!!!!!

大きな渦潮に乗りながらアシマリはエルレイドの方へと放った。目にしたZ技の威力に刺激を受けたノゾミはキーストンを飾した。

ノゾミ「行くよエルレイド！メガシンカ!!!」

エルレイド「エルレイイイイイイイ!!!」

サイコパワーとアシマリの「バブルこぼせん」のパワーを纏った竜巻をアシマリのZ技へとぶつけた。激しい突風に吹かれながら押し出される両者の攻撃であったが、若干、メガエルレイドの方がパワー負けしているかのように見えていた。

ノゾミ「くっ…エルレイド！【インファイト】!!？」

エルレイド「エル：エルレイイ!!?」

さらにメガエルレイドは「インファイト」で自信が作り上げた竜巻を押し出すと、そのパワーが重なって二つの技は互いに相殺された。打ち消された技の衝撃にアシマリとメガエルレイドは吹き飛ばされた。だが、先に体勢を戻したアシマリが先に攻撃を繰り返した。

スイレン「【ハイドロポンプ】!!?」

ノゾミ「【サイコカッター】!!?」

アシマリの水タイプ最強クラスの技を前に躲す術がなかったメガエルレイドは二刀の刃でクロスするようにしてアシマリの「ハイドロポンプ」を防いだ。

押されながらもなんとか技を耐えきったメガエルレイドであったが、その様子を見たノゾミは審判にコールした。

ノゾミ「すいません。参りました」

ノゾミの降参宣言聞いた審判はアシマリの方へと旗を大きく上げた。

ヤマト『ノゾミ選手の棄権により』

コサブロウ『勝者スイレン選手!』

二試合目の戦いを終えて二人は互いに握手を交わした。

ノゾミ「ごめんスイレン。こんな形で勝負を終わらせてしまっただ。」

実のところ、以前戦ったダークカイリューとのダメージが残っていたのであった。みんなからの推薦で事もあって本調子でもないのに戦いを挑んでしまったスイレンに対してノゾミは深く謝罪をする。そんなノゾミにスイレンは和かに笑顔で返した。

スイレン「じゃあ、いつかまた何処かで本気でぶつかり合おうよ!私、それまで楽しみにするから!」

その言葉に励まされたノゾミはもう一度スイレンと握手を交わした。

ノゾミ「うん!いつか必ずね!」

バトルを終えたスイレンは戦ってくれたアシマリを抱きかかえて、



ゆっくりと会場からは出て来た。

リーリエ「お疲れ様です！スイレン！」

スイレン「うん！次はリーリエ！頑張ってね！」

リーリエ「はい！」

アシマリ「アウアウ!!？」

シロン「コーン!!？」

スイレンとハイタッチを交わしたリーリエはバトルフィールドへと足を踏み入れた。

リーリエ「行きますよ！シロン！」

シロン「コン!!？」

### 《観戦席》

マオ「リーリエだ！頑張れ！リーリエ!!!」

アママイコ「アアマイ!!？」

マーマネ「行けー！リーリエ！」

トゲデマル「モギユユ!!？」

### 《バトルフィールド》

歓声が包まれる中、相手選手が現れるのを待つリーリエの前に、一人のトレーナーが姿を見せた。

タケシ「手加減はしないぞ。リーリエ！」

リーリエ「はい！」

ヤマト『中堅戦！ジャリ：リーリエ選手VSタケシ選手！』

コサブロウ『試合開始！』

?リーリエVSタケシ?

リーリエ「行きますよ！シロン!!!」  
シロン「コーン!!?」

リーリエの声と一緒にシロンは元気よくバトルフィールドへと飛び出した。久しぶりの公式戦に胸が踊るタケシは自身の最高のパートナーが入ったモンスターボールを大きく振り投げた。

タケシ「俺はこいつだ！出てこい！ハガネール!!!」

ハガネール「ネエエル!!?」

モンスターボールから解き放たれたそのポケモンはダイヤモンドのように輝いていた。体長約9メートルのその巨体の迫力にリーリエとシロンには緊張が走ってきた。

ハガネールはリーリエのシロンと同じくタケシが初めて手にした相棒だ。このバトルに参加するのにあたってジロウから転送してもらったのだ。

### 《観戦席》

カノン「大きい!!!」

マーマネ「あのポケモンは!!?」

サトル「ハガネールだ!」

『ハガネール てっへびポケモン

鋼・地面タイプ

地中の高い圧力と熱で鍛えられた体はあらゆる金属よりも高い。丈夫なアゴで岩石を噛み砕き進む』

マオ「強そう…」

ソウタ「タケシの切り札みたいだな」

### 《バトルフィールド》

久しぶりのバトルとも合ってハガネールはとても気合いが入って

いた。タケシは元ニビジムのジムリーダー。タケシとの本気のバトルにリーリエとシロンはだんだんと燃えてきた。

リーリエ「シロン！【こなゆき】です!!?」

シロン「コーン!!?」

先に動いたのはリーリエとシロンだ。シロンの冷気が一気に放たれると、フィールドの地面を凍らせながらハガネールに向かっていく。ジロウとのジム戦と比べて技の威力が上がっているシロンの技にタケシは感心を持つ。

タケシ「ハガネール！【ジャイロボール】だ!!?」

ハガネール「ネエエル!!?」

攻撃技も上手く使えば防御に徹する事も出来る。攻撃こそが最大の防御って事だ。かつての旅の友から教わった技術でタケシはリーリエに立ち向かう。

リーリエ「もう一度！【こなゆき】です!!?」

シロン「コーン!!?」

冷気を放射させたシロンの攻撃が再びハガネールへと迫って行く。バトルを楽しむハガネールの表情につられて、タケシはある策をリーリエに見せた。

タケシ「次はこれを見せよう。ハガネール！【ジャイロボール】!!

?カウンターシールドだ!!!」

ハガネール「ネエエル!!?」

ハガネールは体を高速回転させると、シロンの【こなゆき】を防いだ。ここまではさつきと同じ光景であったが、それだけでは終わらなかった。

シロンの技を防いだけだけでなく、ハガネールはさらに高速回転のスピードを上げると、【ジャイロボール】の攻撃エネルギーは範囲を大きく広げてはそのエネルギー波をシロンに向かって放たれた。

シロン「コーン!!!」

リーリエ「シロン!!!」

ハガネールの以外な攻撃防御にリーリエは驚いてしまった。リーリエだけではない。このバトルを見ていた観戦客達もハガネールの

予想だにしない攻撃方法に魅了され、会場の歓声がより一段と高くなってきた。

リーリエ「【こなゆき】を防いだけじゃなくて、同時に攻撃技へと変動されたのですか!!」

攻撃を防御に使う戦法はサトシの戦いぶりから学んだ所もあつたが、タケシが見せた防御と同時に攻撃を仕掛けるカウンターシールドにリーリエは少し圧倒されてしまった。

タケシ「勝負はこれからだぞ！ハガネール！【あなをほる】!!?」  
ハガネール「ネエエル!!?」

攻撃の手を緩めないハガネールは「ジャイロボール」を解除したすぐに地中へと潜り始めた。一瞬にして消えた巨体の体を持つハガネールにリーリエとシロンはさらに焦りが生じてしまった。地響きがなり、その振動がだんだんと大きくなると、辺りを一目散に目を凝らすシロンの真下からハガネールは一気に地上へと飛び出した。

リーリエ「シロン!!!」  
ハガネールの攻撃によつてシロンは真上へと吹き飛ばされてしまった。身動きが取れないシロンに対してハガネールは攻撃体勢へと再度切り替えてきた。

タケシ「そこだ！【しめつける】攻撃!!?」  
向かって来るハガネールはその長い尾でシロンを捕らえようと仕掛けてきた。それを見たリーリエはすぐさま指示を出した。

リーリエ「シロン！【こおりのつぶて】です!!?」  
シロン「コン!!?」  
ハガネール「ネエール!!!」  
リーリエ「続けて【ムンフォース】!!?」  
シロン「コン!!?」  
ハガネール「ネエエル!!!」

近づいてくるハガネールに向かってシロンは氷の弾丸をハガネールの頭部に向かって放った。シロンの攻撃に怯むハガネールに今度は【ムンフォース】をぶつけると、そのパワーにハガネールは大きく後ろへと倒された。自分よりも何倍の大きさのハガネールに負けじ

を取らないシロンの勇姿に会場はさらに盛り上がりを見せた。だが、バトルの経験上からもタケシ達の方が一枚上である事は分かっている。覚悟を決めたリーリエはZリングを前に出した。

リーリエ「シロン！長引かせてはこちらが不利です！Z技で一気に勝負を決めます！」

シロン「コーン!!?」

タケシ「受け立つぞリーリエ！行くぞハガネール！」

リーリエ達がZ技を仕掛けてくる事がわかったタケシは自分の上着を大きく脱ぎ捨てた。

リーリエ「あれは!!!」

カキに負けないぐらい鍛え上げられた肉体。そして胸元にぶら下がっているキーストンにリーリエの目が集まった。

タケシ「俺達は強くて硬い石の男！ハガネール！メガシンカ!!!」

ハガネール「ネエエエルウウ!!!」

タケシのキーストンとハガネールナイトが共に光り輝き出すと、ハガネールの体はさらに硬く、大きく、光沢にさらに磨きがかかってきた。メガシンカによりさらに厳つきが増したハガネールの姿にリーリエとシロンはさらに身構えた。

リーリエ「メガ：ハガネールですか」

メガシンカを遂げたハガネールを前に、今度はリーリエのコオリZが白く光り輝きだした。

Zリングからパワーを受け取ったシロンの体は白い光に包まれた。それに対してハガネールは躲そうともせず、タケシと一緒にシロンのZ技が繰り出されるのを岩のように大きく待ち構えていた。元ジムリーダーとしての血筋が走ったのか、タケシとハガネールはリーリエとシロンの本気の本気な力を実つ向から受け止めようとしている。それに答えるように解放されたシロンのZ技が勢いよく撃ち出された。

リーリエ「レイジングジオフリーズ!!!」

シロン「コオオオオオン!!!」

シロンの雄叫びと一緒に氷柱が次々と形成され逃げられないようにメガハガネールの周りを包囲する。その一本の氷柱の頂に立つシ

ロンは狙いを定めて大きな冷凍光線を発射した。発射された冷凍光線は大きなメガハガネールの体を冷気で発生した霧にシロンごと包み込んだ。コオリ乙の放つ冷気で一気に下がった気温が徐々に標準値まで戻ったのと同時に冷気の霧も晴れてきた。

その中から一呼吸を終えたメガハガネールがリーリエを睨みつけていた。

タケシ「よし！よく耐えたぞ。ハガネ…」

乙技を耐えてくれる事を信じていたタケシはシロンの姿を確認し始めた。しかし、それを見てタケシは驚いた。そのシロンはメガハガネールの側まで距離を詰めていたのだ。

タケシ「何だと！」

リーリエ「今よ！【こおりのつぶて】!!?」

シロン「コーン!!?」

シロンを確認したリーリエはすぐに先制技でメガハガネールに攻撃を決めた。

乙技を決めた事にリーリエは決して安堵していなかった。相手は自分達よりも幾多の経験を積んできたトレーナーだ。自分たちの今の実力で一気に戦闘不能まで持ち込める可能性は低い。リーリエは乙技を決め技としてではなく、あえてタケシとメガハガネールの注意を払って、シロンを近づけさせるために乙技を利用したのだ。

リーリエ「【こなゆき】です!!?」

タケシ「くっ！ハガネール！【ジャイロボール】だ!!?」

蹠跟めくメガハガネールにシロンはさらに攻撃を重ねていく。しかし、やられっぱなしには行かない。すぐにメガハガネールは【ジャイロボール】によるカウンターシールドを展開させて、シロンを技ごと吹き飛ばした。

タケシ「これでとどめだ！ハガネール！【ストーンエッジ】!!?」

ハガネール「ネエエエエエル!!?」

メガハガネールは尾で一気にフィールドを叩くと、形成された岩柱が道を作るように一直線にシロンへと向かって行った。

リーリエ「シロン!!!」

連なる岩柱にシロンは攻撃を受けてしまった。立ちはだかる砂埃を前にリーリエはシロンの無事を願った。砂埃が晴れるとその中から大きな氷の球体が姿を現した。

タケシ「なっ！これは!!!」

リーリエ「凄いです！シロン!!!」

なんと、その氷の球体の中には身構えるシロンの姿があった。これはシロンの独自の判断によるものだろ。メガハガネールの攻撃が決まる瞬間にシロンは自分の周りを冷気で冷やし始めると、その作られた大きな氷の球体に自分の身を包み込んだのだ。そのおかげでシロンは「ストーンエッジ」の直撃を凌いだみたいだ。そのシロンの判断にタケシは思わず拍手を送った。

タケシ「やるな！シロン！」

リーリエ「ありがとうございます！攻撃は最大の防御！シロンもしっかりと何処かのトレーナーさんの戦いを見ては学んでいたそうです！」

シロン「コーン!!?」

タケシ「それは奇遇だな！さっきのカウンターシールドと言い、俺も何処ぞやのトレーナーから色々教えて貰っていたからな！」

ハガネール「ネエル!!?」

さっきまでの戦いから見せなかつた二人に少し笑顔が溢れた。そして、すぐにバトルの方へと目を向けた。

タケシ「さあ、もうそろ終盤戦だ！来い!!!」

リーリエ「勝たせていただきます！わたくし達の全力をもう一度ぶつけてみせます!!」

気合いが入った自分達らのトレーナーに反応するようにシロンとメガハガネールは前へと進んだ。

リーリエ「【こおりのつぶて】!!?」

タケシ「【ジャイロボール】だ!!?」

シロンの次々に撃ち出される氷の弾丸をメガハガネールは体を高速回転させてその技を打ち消していく。

タケシ「【あなをほる】!!?」

ハガネール「ネエエル!!?」

シロンの連続攻撃が終わると、メガハガネールは咄嗟にその身を地中へと沈めた。地中を潜ったことに現れた大きな穴。それを見たリーリエはシロンをその穴の側へと移動させた。

リーリエ「シロン! その穴に【こなゆき】です!!?」

地中では逃げられないメガハガネールにシロンはその穴を通して冷気をぶつけに入った。シロンの攻撃が入るその直後、その誘いに乗ってくれた事に笑みを見せるタケシの姿がリーリエの瞳の中に映った。はつとするリーリエを他所にタケシは指示を出した。

タケシ「ハガネール! 【ジャイロボール】だ!!?」

シロンの攻撃が決まる寸前にハガネールは地中の中で体をフル回転させ始めた。そして、周りの土を掘り起こすようにして地中を巻き上げ始めると、一気に地表にまでその振動が差し掛かった。その振動に地面が割れてシロンはその中へと巻き込まれてしまった。

リーリエ「シロン!!!」

リーリエの声が虚しく、シロンはそのまま一気に空中へと放り出されてしまった。落下して地面に叩きつけられたシロンはそのまま目を回していた。

ヤマト『シロン…じゃなくて、ロコン戦闘不能! ハガネールの勝ち!』

コサブロウ『よって中堅戦の勝者はタケシ選手!』

勝負が決してリーリエはすぐにシロンを抱きかかえた。

リーリエ「シロン。頑張りましたね」

シロン「コーン…」

タケシ「お疲れ! ハガネール!」

ハガネール「ネエル!!?」

戦ってくれたポケモン達にお礼を言った後、リーリエとタケシは握手を交わした。

リーリエ「流石は元ジムリーダーですね。完敗でした」

タケシ「いや、正直勝てるかどうかは俺にも分からなかったさ!」

リーリエ「またお相手して下さい!」



タケシ「ああ！またやろう！」

二人の健闘に会場からは拍手が巻き起こった。傷ついたシロンを抱いてリーリエはすぐにバトルフィールドを後にした。

すると、向かいからは次にバトルを行うアローラ側のトレーナーがリーリエに近づいて行った。

ロイヤルマスク「リーリエ君！ナイスファイトだったぞ！」

リーリエ「ありがとうございます！ロイヤルマスクさんも頑張ってください！」

互いに一言だけ交わして、リーリエはカキとスイレンの元へと戻って行った。

ククイ博士（カントーを旅して随分と成長したな。リーリエ）

教え子の成長に心を踊らせるククイ博士は切り替えて、多くの観戦人が待つバトルフィールドへと姿を現した。右拳を高く上げるとアローラの人達はその男の登場に歓声が湧き起こった。

マーマネ「来た！ロイヤルマスク!!！」

マーマネも自分のロイヤルマスクと同じ覆面を被り始めた。マーマネの様子やアローラの人達の熱狂から物凄く強いトレーナーであることは伝わる。そして、そのロイヤルマスクと交える相手トレーナーの方へと目を傾けたのだが、ロイヤルマスクの登場から同盟地方組側のトレーナーが一向に姿を見せる気配がなかった。

カノン「全然出てこないよね」

サトル「どうしたんだろ」

マノン「まさか：出られなくなっちゃったとか？」

ハリサ「ハロ：」

ソウタ「何やってんだよ！罰金もんだ！」

ざわつく会場にヤマトとコサブロウは対処していると、慌ただしい声を発しながら全力疾走でバトルフィールドへと向かってくる一人のトレーナーとそのポケモンの姿が見えた。

??? 「だああああ!!!間に合えええ!!!」

全力で走り行くその少年は会場へと入るその直後に道端の小石に足を取られて躓いてしまうと、転がりながらトレーナーサイドの方へと向かって行った。

??? 「よっしやあ!間に合った!!!」

ルカリオ「リオ…」

何かと慌ただしかったその少年は自分のトレンドマークとも言えるバンダナを思いつきり引つ張ってはゴムのように額を叩きつける、気合いを入れ始めた。

ククイ博士（あの子は…さつきの…）

その少年はさつき自分の講義を聞いてくれたトレーナーと知ったククイ博士はその少年の実力を知りたくなる衝動に思わず笑みが溢れてしまった。

ヤマト『副将戦!ロイヤルマスク選手VSコテツ選手!』

コサブロウ『試合開始!』

? ロイヤルマスクVSコテツ?

コテツ「さあ!行こうぜルカリオ!」

ルカリオ「リオ!!?」

コテツの呼び声に応じてルカリオはバトルフィールドへと華麗に降り立った。

ルカリオの登場をリーリエ達はそのバトルを控え室から見ていた。

リーリエ「あのポケモンはたしかルカリオですね」

ロトム『シャッターチャンスロト!』

『ルカリオ はどうポケモン

格闘・鋼タイプ

あらゆる物が発する波動をキャッチする能力を持つ。その能力で相手の考えや動きを読み取る事もできる』

ルカリオの登場に静かに燃え出したロイヤルマスクも一気にモンスターボールを空中へと解き放った。

ロイヤルマスク「行くぞ！ガオガエン!!!」

ガオガエン「ガオオオ!!？」

腰に巻いた炎のベルトを燃え上がらせたガオガエンはその闘志を対戦相手のルカリオに向けられた。

### 《観戦席》

カノン「ガオガエン……」

始めてみるそのポケモンにカノンはポケモン図鑑を開いた。

『ガオガエン ヒールポケモン

炎・悪タイプ

強烈なパンチとキックで戦う。闘争心に火がつくと腰のまわりにある炎もひと際激しく燃え上がる』

マーマネ「炎タイプのガオガエンに対して鋼タイプのルカリオか。それならガオガエンが有利だね！」

サトル「だけど、ルカリオには悪タイプのガオガエンに対して有利が取れる格闘タイプも持っているよ！」

ソウタ「五分五分ってところだな」

マノン「ねえマオ？あのロイヤルマスクっていう人はどれだけ強いのか？」

マオ「そりやもうメチャクツチャ強いよ！アローラでは負けなしの人だもん！」

### 《バトルフィールド》

両者のポケモンが出揃った所でコテツとルカリオは共にお揃いの腕のバンダに装着されたキーストンとルカリオナイトを輝かせた。

コテツ「ルカリオ！メガシンカだ!!!」

ルカリオ「リオオオオオ!!!」

メガシンカしたルカリオはさらにガオガエンを鋭く睨みつけた。強敵とのバトルにさらに喜びの感情が湧いたガオガエンも大きく雄叫びを上げた。

コテツ「ルカリオ！【グロウパンチ】!!?」

メガルカリオ「ルオ!!?」

ロイヤルマスク「ガオガエン！【じごくづき】!!?」

ガオガエン「ガアオ!!?」

両者の拳が火花を散らしながら激しく交わり始めた。その衝撃波はモニター越しで見ているリーリエ達にも大きく体を痺れさせた。

コテツ「行くぞ！マスクのおっちゃん!!!」

ロイヤルマスク「来たまえ！少年!!!」

向かい合う強者の魂に会場はさらにヒートアップした。

そのバトルを控え室で観戦している少女も体を震わせながら、キ―

ストーンがついたネックレスを煌めかせながらモンスターボールを握りしめていた。

## 第二十七話 Z技VSメガシンカ 後半

試合開始15分前

カノン「まずはアランさんとノゾミは決定でしょ！」

サトル「そうだね。あのZ技に対抗するにはメガシンカポケモンの力が必要だと思うよ」

マノン「それじゃあ、あと3人だね。誰がいいかな」

前にリーリエがミラーボとの戦いに見せたZ技。その威力に対抗できるのはメガシンカポケモン達と睨んでいたみんなはメガシンカを扱えるトレーナーを中心に同盟地方チームの出場選手を決めていた。

ソウタ「それじゃあ、この中でジムバッジの数が多いこの俺が出るとするかな〜♪」

いま現在、キーストンを所持しているトレーナーは二人のみ。残りは今いる中で実力が高い者から選ぶのが等しい。残りの出場メンバーを決めようとしたその時、一人のトレーナーが慌ただしくカノン達の方へと走って来た。

コテツ「なあなああ！ポケモンバトルするんだってな！俺も入れてくれよ!!!」

ルカリオ「リオ!!??」

サトル「ええ…と君はたしか…」

コテツ「いいだろ！いいだろ！俺もキーストンとルカリオナイト持ってるんだからよ！」

ルカリオ「リオ!!??」

コテツを見て何かを思い出しかけたサトルを遮ってコテツは腕のバンダに装着されているキーストン。ルカリオはそのお揃いのバンダに埋め込まれているルカリオナイトをカノン達に見せて来た。

アラン「メガシンカ所持者なら尚更だな」

ノゾミ「そのようだね。それじゃあ、お願いして貰ってもいいかな」

コテツ「マジで！やった！任しとけ！」

こうしてコテツを入れて三人目が決定した。そして、すぐにサトルはもう一人のトレーナーを推薦した。

サトル「それからタケシだね」

タケシ「俺か？」

カノン「そうだよ！元ジムリーダーの実力見せてよタケシ！」

元ジムリーダー。自分たちよりも旅の経験が長いタケシが適用されるのは当然であった。みんなからの期待の目を向けられたタケシは大きく胸を張った。

タケシ「よし！久々に本気のバトルをしてやるかな」

ソウタ「よし決まったな！行くぞ!!!」

こうして：五人目？も出揃ったかのような雰囲気を保しながらソウタは先頭にバトルフィールド会場へと向かおうとしていた。残りのメンバーからバツジの数が多いのはソウタである事は確か。なら、残りのメンバーから実力的にソウタが適任となる。全員ソウタの後に続こうとしたその時：

???「ねえ：まだ悴って残ってるかな」

長いロングストレートの髪を掻き上げながら一人の女性が訪ねて来た。

~~~~~

コテツ「ルカリオ！【グロウパンチ】!!？」

ロイヤルマスク「ガオガエン！【じごくづき】!!？」

ルカリオとガオガエンの気合いが入った攻撃が会場全体へと衝撃波が流れ込んで来た。体にひりつく感じを受けながら、コテツという

トレーナーを見ていたサトルは口を大きく開いた。

《観戦席》

サトル「思い出した！そうだよ。コテツさんだよ！」

マオ「サトルの知り合いだったの？」

マオからの質問にサトルは首を横に振るが、その人物の事に対してはサトルは知っていた。

サトル「違うんだけど、彼はイツシユリーグでサトシさんと戦っていたトレーナーだよ」

ソウタ「そうか！あの人か！フルバトルだったのに五体でサトシさんに勝った人じゃなか！」

マオ「ちよつと…待って！」

マーマネ「サトシに勝ったトレーナー…」

サトルの発言につられて思い出したソウタも話に加わった。しかし、それよりもマオとマーマネが驚いたのは、サトシに勝った事があるというワードだった。

サトシの実力は二人も知っている。ロイヤルマスクがいくら強くてもその実力はアローラ地方のみでしか発揮されていない。世界の壁というのか、マオとマーマネは悪い予感が遮ってくる中、ロイヤルマスクの応援を続けた。

《バトルフィールド》

ロイヤルマスク「ガオガエン【かえんほうしゃ】!!?」

腰の炎のベルトから放射された火炎放射がルカリオへと放たれた。炎タイプの技を苦手とするルカリオであったが、その技を前に焦る様子になかった。

コテツ「ルカリオ！【ボーンラツシユ】で防いじまえ!!?」

ルカリオは光る棒を具現化させると、円のよう垂直回転させると、向かってくる火炎放射を意図も簡単に防いでみてしまった。

コテツ「そのまま！【はどうだん】!!?」

防ぎった火炎放射の残り火が散らつく中でルカリオはすぐに波動エネルギーを球体状に形成し始めると、気合いの入った声でガオガエ



ンに向かつて撃ち出した。

トレーナーとそのポケモンであるルカリオの一球入魂に撃ち出された【はどうだん】を見たガオガエンは笑みを溢しながら右手にパワー集中し始めた。

ロイヤルマスク「ガオガエン！【じごくづき】!!?」

苦手な格闘タイプの技をガオガエンは力一杯の突きでルカリオの【はどうだん】を打ち消した。

ロイヤルマスク「よし！ガオガエン！【ビルドアップ】だ!!?」

鍛え上げられた筋肉をさらに膨張させたガオガエンは攻撃と防御を同時に高め始めた。その技を見たコテツはざる賢そうな笑顔でルカリオに指示を出した。

コテツ「おつちゃん。その技頂き！ルカリオ！【まねっこ】だ!!?」  
精神を研ぎ澄ませて鋭い眼光でルカリオは肉体強化させたガオガエンを睨みつけた。同時にガオガエンの【ビルドアップ】を放つポージングをイメージさせると、ルカリオはそれを真似た。見事にガオガエンとの行動をシンクロさせる事が出来たルカリオは覚えていないはずの技【ビルドアップ】を成功させた。

《観戦席》

カノン「何？あれ…」

ソウタ「ま…真似っこだ?」

サトル「言葉通りの技だよ。相手の技を真似てその技を自分の物のようにして発動できる技だよ」

マノン「じゃあ、その技を使えばどんな技も発動出来ちゃうって事なの!?!」

ハリサ「ハロツ!!?」

【まねっこ】の仕組みを理解した所でサトル達はバトルの方へと目を向けた。

《バトルフィールド》

ロイヤルマスク「【かえんほうしゃ】!!?」

コテツ「もう一回【まねっこ】!!?」

サトルの説明通り、ガオガエンの火炎放射とその技をまともや真似たルカリオの火炎放射がぶつかり合った。

コテツ「ルカリオ！【グロウパンチ】!!?」

相殺された爆炎を蹴散らして、ルカリオはガオガエンに向かって走りながら、カ一杯拳にパワーを集中させ始めた。

ロイヤルマスク「ガオガエン！【ビルドアップ】!!?」

繰り返して打ち出した事で硬くなってきたルカリオの拳は徐々に攻撃力を上げてきている。自慢の【じごくづき】で受け止めようにもそうはいかなくなってきた事を感じたロイヤルマスクはガオガエンの肉体をさらに強化させる事に決めた。

再び身体を大きく見せたガオガエンの筋肉は降り注ぐ太陽の光に反射された事で鋼の身体のように硬く見えた。ルカリオの攻撃を胸筋で受け止めて弾き返すと、両腕を大きく広げて後退するルカリオに向かって狙いを定めた。

ロイヤルマスク「【DDラリアット】!!?」

ガオガエン「ガアオ!!?」

身体を大きく駒のように回転させ始めたガオガエンは邪悪なエネルギーを纏いながらルカリオに向かって突進した。

ルカリオ「リオ!!!」

ガオガエンのエルボーがルカリオの喉元を捕えるとルカリオはその反動で吹き飛ばされた。

コテツ「大丈夫か！ルカリオ！」

ルカリオ「リオ!!?」

急所に当たったルカリオをコテツは必死に呼びかけた。その声に反応して戦闘不能寸前の所で持ち堪えたルカリオであったが、ダメージは大きい。

ロイヤルマスク「行くぞ！ガオガエン！」

そろそろ終盤の時と睨んだロイヤルマスクはここまで戦ったコテツとルカリオの実力に敬意を表じて、自分達のありったけの力をぶつける事に決めたのだった。

ロイヤルマスク「燃え上がれガオガエン！勝利の炎でリングを焼き

尽くせ!!!」

ガオガエン「ガアオオオ!!!」

ガオガエンZの力が与えられたガオガエンはそのエネルギー源を大きく解き放った。まるでプロレスのリングに立たされたように感じさせるような威圧感を漂わしながらガオガエンは力一杯に吠え始めた。

ロイヤルマスク「ハイパーダートククラッシャー」

ガオガエン「ガアオオオオオ!!!」

!!!!!!!」

大きくジャンプしたガオガエンは大の字に身体を広げると、ベルトから溢れ出た炎がその身を包見込ませると、そのままルカリオへと真つ逆さまに落ちて行つた。

コテツ「ルカリオ!【まねっこ】だ!!?」

ルカリオ「リオ!!?」

ガオガエンから感じるパワーに対して同じパワーをぶつけてやると考えたコテツはZ技を真似させようとルカリオに指示を出す。ルカリオはガオガエンの動きを観察して真似しようと試みるも

ルカリオ「リオ?」

コテツ「ありや?」

ルカリオはガオガエンのZ技を真似したつもりが「DDラリオット」を発動してしまった。あまりにも強力なZ技を真似しようとしても、その力までも模倣する事は難しかったみたいだ。元にした技を発動したルカリオであったが、ガオガエンのパワーに歯が立たず、その押し負けてしまった。煙が晴れた頃には勝利の雄叫びを上げているガオガエンと力無くし倒れたルカリオの姿があった。

ヤマト『ルカリオ戦闘不能!ガオガエンの勝ち!』

コサブロウ『副将戦の勝者はロイヤルマスク選手!』

ロイヤルマスク「エーンジョイ!!!」

ガオガエン「ガアオ!!?」

勝利の決めポーズを決めたロイヤルマスクの勝利に会場は大歓声に包まれた。戦闘不能となったルカリオを抱えながらコテツはロイヤルマスクの元へと向かった。

コテツ「あくあ！やっぱそのZ技を真似するには難しかったなく。だけど、おつちゃん！すんげー面白い試合だったぜ！なあ！ルカリオ！」

ルカリオ「リオ!!？」

ロイヤルマスク「いや、もしその判断ミスが無ければ私もどうなっていたかは分からなかった。私達もギリギリであったのは定かだ」

ガオガエン「ガオ!!？」

コテツ「サイキューー！今度会った時はまたリベンジさせてくれ！」

ロイヤルマスク「おお！勿論だ！」

固い握手を交わした所で最後はコテツとルカリオを加えてロイヤルマスクの決めポーズを行なった。二人の熱い戦いに再度、観客席からはコールと同時に拍手が巻き起こった。

そして、次がラストバトルだ。

互いに二勝二敗での大将戦。その最後の戦いへと二人のトレーナーがバトルフィールドへと歩き出した。

ユーゴ「よし！」

幾多のバトルを経験しているとはいえ、どのバトルも気が抜けない。精神統一を行なったユーゴは一呼吸して気持ちを落ち着かせた。

カキ「最後はユーゴさんですね！」

スイレン「みんなで全力で応援しています！」

リーリエ「頑張ってください！」

ユーゴ「もちろん。ここまでみんなが戦ってくれた分のためにも必ず勝ってみせるさ！」

リーリエ達からエールを受け取って、ユーゴはバトルフィールドへと立った。

《観戦席》

マーマネ「最後はユーゴさんだ！」

マオ「頑張れ！ユーゴさん!!!」

最後のアローラサイドのトレーナーの登場に会場はバトルが始まっていないのに一気に高揚感が上がる。

そして、その歓声が賑わう中で、いよいよもう一人のトレーナーが

入場した。腰まで下ろした髪を揺らしながら登場したそのトレーナーの姿に一気に会場の目が奪われた。

マオ「うわあ！凄く綺麗な人！」

マノン「なんか大人の女性って感じでかつこいい！」

《バトルフィールド》

最後の選手が出揃った所でいよいよ最後のバトルが始まろうとしていた。

ヤマト『大将戦！ユーゴ選手VSアイラ選手！』

『コサブロウ』試合開始！』

？ユーゴVSアイラ？

試合開始の合図がなった途端、バトルフィールドの中心を回るようにして、突風が吹き荒れた。その風の吹き荒れに木の葉が舞うと সেইで大半の人達の視界が遮られてしまった。視界がぼやけていても、必死にバトルフィールドの方へと目をやると、舞い上がる木の葉の中で黄昏ながら一体のポケモンが瞬時に現れた。

ジュナイパー「ジュナ!!？」

森の英霊のように翼のマントを翳しながら振る舞うジュナイパーの登場に会場からはさらに高い声援が鳴り響いた。

カキ「ユーゴさんはやっぱりジュナイパーか！」

スイレン「こつちまで緊張してくるね」

リーリエ「相手のアイラさんはどんなポケモンで来るのでしょうか」

なんとなくユーゴが繰り出すポケモンを予想していたリーリエ達。そして気になるのはアイラの繰り出すポケモンだ。そんな彼女に注

目してみると…

アイラ「かつこいい!!!その子がジュナイパーね♪アローラのポケモン相手は初めてだから頑張るぞ!」

初めて見るジュナイパーを前にはしゃいでいるアイラからは緊張感はなくなかった。見た目のクールなギャップから子供のようにはしやぎ出すアイラに可愛らしいさがあったが、

アイラ「それじゃあ、行くね」

モンスターボールを取り出したと同時にその目は一気に戦闘モードへと切り替えた。その鋭い眼光に背筋が凍るような衝撃を受けたリリー工達は息をのんだ。

アイラ「行くよ!バシャーモ!!!」

バシャーモ「バアシャ!!?」

モンスターボールから出現したバシャーモは腕から熱い炎を放射させると、勇ましくその場で気合の雄叫びを上げた。

ロトム『バシャーモロト!』

まだ無いデーターなため、ロトムは急いで撮影を行なった。

『バシャーモ もうかポケモン

炎・格闘タイプ

戦いになると手首から灼熱の炎を吹き上げ勇敢に挑み掛かる。相手が手強いほど激しく燃え上がる』

初めて見るポケモン。そしてアイラのバシャーモの気迫にリリー工達は息をのんだ。

そのバシャーモを眺めているのはリリー工達だけではない。アイラを同じチームへと迎えたタケシ達も最後の勝負を見届けていた。

タケシ「バシャーモか」

ノゾミ「バシャーモは炎と格闘タイプだよね」

アラン「ああ、相性だとバシャーモの方が有利だが、バシャーモの

打撃技はゴーストタイプのジュナイパーには効果はない。この勝負も五分五分というところだな」

互いの推測などが立てられる中、ユーゴとアイラは同時にポケモン達に指示を出した。

リーリエ「あれ？」

二人が合図を出すと、ジュナイパーとバシャーモは瞬時にその場から姿を消したのだ。

カキ「ジュナイパーとバシャーモは…どこに…」

突然と消えた二体に戸惑うリーリエ達。それはこの試合を見ている人達も急な光景に釘付けとなってしまった。誰一人も声が発さなくなつたこの沈黙の中で、微かに空を切る音が聞こえてきた。

スイレン「えっ!!! いつの間に!」

音がする方へと自然と首を上へと向けて見ると、ジュナイパーとバシャーモは真上で激しいぶつかり合いを行なっていた。目にも止まらぬ速さで二体は相交っていた。

リーリエ「お互に凄いスピードです!」

その素早さにリーリエ達は悟つた。明らかにレベルが違う。まるでポケモンリーグの決勝戦を見せられているような錯覚だ。

ユーゴ「ジュナイパー! 【リーフブレード】!!?」

ジュナイパー「ジュナ!!?」

バシャーモ「躲して!」

バシャーモ「バシャ!!?」

互いの実力を把握した所でここで初めてユーゴからの技の指示が下つた。

ジュナイパーは鋭利な翼で刃のようにバシャーモに斬りつけにかかった。振りかざされる手刀をバシャーモはタイミングよく擦りもせずに躲して行く。その動きに全く無駄がない。

カキ「【みきり】を使っていないのになんて反射神経なんだ」

ノゾミ「この程度じゃ私達を倒す事は出来ない。そう感じさせているみたいだね」

アラン「それほどの修羅場を潜ってきたんだらうな。あんな動き…

並大抵のトレーナーですら作り上げる事は難しい」

ここにいる全員がこの試合に誰一人と目を離していない。抱きしめている力が少し強くなっている事に違和感を感じたシロンはリーリエの顔を覗き込んだ。シロンの目に映ったリーリエの表情は固かった。

ユーゴ「下がれジュナイパー！」

無駄な体力を消費させないためにもユーゴは一旦、ジュナイパーを下げた。バシャーモから離れた事を確認するとアイラは容赦なく攻撃を指示した。

アイラ「バシャーモ！【かえんほうしゃ】!!？」

バシャーモ「バシヤア!!？」

進化してさらに強力な業火となった火炎放射がジュナイパーに勢いよく放たれた。

ユーゴ「【リーフブレード】!!？」

苦手な炎技であろうともジュナイパーは焦る事なく火炎放射を素早く斬り裂いた。

アイラ「やくるゝ♪」

一瞬にして火花と散った火炎放射を見たアイラはジュナイパーに拍手を送った。

余裕そうなアイラを見たユーゴは少し挑発を送った。

ユーゴ「どうやったたら、本気になってくれるかな？」

アイラ「貴方がその気にさせてくれたらね♪」

綺麗なロゼリアには棘がある。

アイラのその返答を後悔させてやろうと、ユーゴはジュナイパーに次の指示を送った。

ユーゴ「ジュナイパー！【リーフストーム】!!？」

ジュナイパー「ジュナア!!？」

ジュナイパーの周りを巡回し始めた木の葉は密集すると、竜巻となって暴風のようにバシャーモを襲い始めた。

アイラ「バシャーモ！【ブレイズキック】!!？」

バシャーモ「バシヤシヤシヤ!!？」



荒ぶれる木の葉の刃を次々とバシャーモは炎を立ちのぼらせた足で蹴り飛ばし始めた。葉の一枚一枚を正確に逃さず蹴り落として行った。そして、蹴り飛ばしてながらもバシャーモは【リーフストーム】を放ち続けているジュナイパーに向かって進んでいつている。

ユーゴ「バシャーモを近づけさせるな！【リーフストーム】を続ける！」

ジュナイパー「ジュナ!!？」

アイラ「何度やっても同じよ！」

怯まずに攻撃の手をやめないジュナイパーに対して疲れを感じさせないバシャーモの猛攻が続く。枯れた木の葉に互いの視界が遮られながらも一歩も引かない。

アラン「うまいな」

リーリエ「えっ？」

何かに気づいたアランにリーリエは首を傾げた。

アラン「バシャーモのトレーナーは相手の策に気づいていないみたいだからな」

リーリエ「ユーゴさんの策ですか？」

アランが気づいた意図が分からないままリーリエは再びモニターへと目を向けた。

ジュナイパーは防がれながらも、【リーフストーム】で攻撃をし続けた。バシャーモによって枯れ果てた大量の木の葉がフィールドを覆って行った。しかし、それがユーゴの狙いだった。互いの姿が遮られるほどの多量な木の葉が充満された所で、ジュナイパーは翼に隠し持った羽根の矢を取り出して弓の弦に重ねて狙いを定めた。

ユーゴ「ジュナイパー！【かげぬい】!!？」

放たれた矢はバシャーモに向かって追撃された。漆黒の色に染まる矢はバシャーモの死角を捕らえていたため、気づかずにそのまま命中した。

ここで【かげぬい】の効果を知っていたリーリエにもユーゴの狙いというのを理解した。

ユーゴ「ジュナイパー【ブレイブバード】!!？」

「かげぬい」が命中したその直後、ジュナイパーは次の攻撃へと切り替えた。翼を広げて高く飛び上がると、一気に急下降化してパワーを貯めると低空飛行でバシャーモ目掛けて突っ込んで行った。

接近するジュナイパーに目を配ったアイラは急いでバシャーモの様子を伺った。衝撃で起こった黒い霧が晴れると首の肩を回すバシャーモの姿があつた。大したダメージを負っていない様で、今にも指示を出せばバシャーモの素早さなら簡単に躲す事が出来る距離でいた。すぐにアイラの指示を聞いたバシャーモはすぐに行動に移した。

バシャーモ「バシヤ？」

アイラ「バ：バシャーモ？」

躲そうとしたバシャーモであつたが、硬直されたかのように体を動かす事が出来なくなつていた。よく見ると自分の影が地面に射抜かれてしまつているように固定されてしまつていた。自分と体を結ぶ影の線に足を掴まれてしまった様な感覚だ。必死に足を動かさそうにも影がそれを許さないでいた。走行している内に迫つてきたジュナイパーの攻撃がバシャーモの胸元に炸裂した。

バシャーモ「バシヤアア!!!」

アイラ「あつ!!!」

効果は抜群の飛行タイプの攻撃を受けた衝撃で吹き飛ばされたバシャーモは落下すると、強く背中を地面へと叩きつけられてしまった。何とか立ち上がるバシャーモであつたが、それを見たアイラ目にはさつきまでバトルを楽しんでいた余裕が消えていた。ゆつくりとキーストンを握りしめると、バシャーモナイトと共に光り輝き出した。

アイラ「バシャーモ！メガシンカ!!!」

バシャーモ「バアシヤアア!!!」

ユーゴ（やつと本気を出してくれたようだね）

メガシンカしたバシャーモにユーゴは自然と笑みを浮かべた。アイラの指示でメガバシャーモは四方八方へと高速移動し、ジュナイパーを攪乱させ始めた。移動するたびに加速していくメガバシャー

モに対して、逆に相手の視覚から消えて出方を伺われてしまっている  
ジュナイパーは必死でメガバシャーモの姿を捕らえようと必死に  
なっている。

アイラ「行けっ！【つばめがえし】!!?」

何処から分らない見えない攻撃がジュナイパーを襲う。ジュナ  
イパーも【リーフブレード】で対抗するもののメガバシャーモの攻撃  
をギリギリの所で受け流すのに精一杯だ。時間が押していくと不利  
と考えたユーゴはZリングを構えた。

ユーゴ「行くぞ！ジュナイパー!!」

ジュナイパー「ジュナイ!!?」

ジュナイパーに宿るジュナイパーZの力がみなぎると、その光のパ  
ワーにメガバシャーモは思わず距離を引いてしまった。

Zパワーを身に空中へと飛び上がるジュナイパーはそのまま周りに  
羽根の矢を浮上させると、その矢を自分の周りで回転し始めた。お  
そらくこれが最後の攻撃となるだろ。ユーゴとジュナイパーは持て  
る限りの力を全部出し切る勢いでアイラとメガバシャーモに向かっ  
て最後の一撃を放った。

ユーゴ【シャドーアローズストライク】!!!!

ジュナイパー「ジュナアア

ア!!!!」

!!!!」

一気に降下するジュナイパーの威圧に一瞬怯んでしまったメガバ  
シャーモ。しかし、彼は逃げようとはせずに迫るジュナイパーに身を  
構えてはアイラの指示を待つ。

アイラも気合を入れるため男顔負けの気迫のある声を会場全体に  
放った。その声に答えるようにバシャーモも大きな声で炎を灯した  
足をジュナイパー目掛けて蹴り上げた。

アイラ「バシャーモ!!!!【ブレイズキック】!!!!」

バシャーモ「バシャアア!!!!」

互いの行進の一撃が相交る。爆発による爆風が一気に会場全体に

吹き荒れた。飛ばされないように小物類を手で押さえながら観戦客の人達は飛ばされないように必死で耐えし乗っている。

控え室にいたリーリエ達もその衝撃による地響きに耐えながらも、モニターから目を逸らさないようにしていた。爆煙が晴れると、二体のポケモンは互いに見つめ合いながら直立していた。二体の雰囲気にも緊張が走る。暫くの静寂の中、小刻みに動く足を抑えようとする一体のポケモンはそのまま硬く目を閉じると、そのまま崩れ落ちてしまった。もう一度、立ち上がるうにも気力を出し尽くしてしまった体を支える事は出来ずに再びその場へと力尽くしてしまった。

ヤマト「バシャーモ戦闘不能！ジュナイパーの勝ち！」

コサブロウ「大将戦の勝者はユーゴ選手！通算でチーム・アローラの勝利です！」

結着のコールが宣言されると、観客席から拍手と歓声が一気に鳴り響いた。ユーゴとアイラは互いのパートナーを支えながら固い握手を交わした。会場から溢れた拍手は二人がバトルフィールドを退場した後でも、暫く鳴り止む事はなかった。

リーリエ「凄い試合でしたね。シロン」

シロン「コーン」

二人の試合を観戦したリーリエも暫くはその場を動けずにいた。ベテラントレーナー同士のバトルに圧倒され、世界のレベルの高さを身を持って知る事が出来た。

カントーリーグではこのレベルのトレーナーと戦っていかなくてはならない。リーリエにとってこの経験は今一度、自分たちの力不足に目を向け、自分とポケモン達のバトルをどう見つめ直すべきかと考えさせられる物になったのかもしれない。

~~~~~

アローラ祭が終わった翌朝、荷物を整えたリーリエ達はポケモンセンターへと出てきた。

リーリエ「皆さん！ここまで本当にお世話になりました！」

リーリエはクチバシテイまで同行してくれたタケシ達に感謝を述べた。そう、アローラ祭が終わったという事は、ここからみんなは各々の道へと渡ってしまうのだ。

リーリエの言葉にここまで一緒に旅をしてきたみんなも返答した。

タケシ「こっちこそ久しぶりの旅、楽しかったよ！」

ソウタ「次会った時は、もっと強くなってる俺を見せてやるよ！」

ノゾミ「旅に誘ってくれてありがとうね。リーリエ。また何処かの街で！」

アラン「ああ、また何処かで会おう」

マノン「うん！」

ハリサ「ハロツ!!？」

それぞれの言葉を聞いた後、リーリエはカノンとサトルの前へと歩み寄った。

リーリエ「カノン。サトル。オーキド研究所からここまでいろいろとお世話になりました」

慣れない地方での旅に心細かったリーリエを旅の最初からサポートしてくれたカノンとサトルとも今日で別々となってしまふ。

もつと強くなるためにも

ここからは一人で旅を続けようと思う

それは昨夜にサトルとカノンの口から告げられた事だった。昨日のポケモンバトルを見て何かを感じたのはカノンとサトルも同じ

だったようだ。

カノン「こつちこそ！私もリーリエと友達に慣れて本当に良かったよ！」

サトル「楽しかったよリーリエ。ここからお互いジム巡りの旅。頑張ろうね！」

リーリエ「はい！じゃあ、もしまた何処かの街で出会う事ができましたら、その時は…」

そして、三人は同時に口を揃えた。

リーリエ「バトルしようぜ！」

カノン「バトルしようぜ！」

サトル「バトルしようぜ！」

ヒコザル「ヒココ!!？」

ピカチュウ「ピカピカ!!？」

シロン「コーン!!？」

より強くなった自分達と再開することを約束して、リーリエ以外のみんなはクチバシテイを後にした。

分かれ道に沿ってみんなの影が見えなくなるまで手を振り続けた。全員との別れを終えたリーリエはシロンと向かい合う。そんなリーリエにククイ博士が歩み寄る。

ククイ博士「それでリーリエはこれからどうするんだ？」

その言葉聞いたリーリエはシロンと同時に声を揃えた。

リーリエ「わたくしはもちろん！」

シロン「コーン!!？」

リーリエ「クチバジムに挑戦です！」  
シロン「コーン!!？」

新たな決意と共にリーリエとシロンは新しい一歩を踏み出した。  
3個目のジムバッジに向けてリーリエは思いっきり拳を上へと突き出したのであった。

## 第二十八話 VSクチバジム 怒涛の雷撃

アローラ祭が終わり。カノン達とも別の道へと向かったリーリエはその夜、明日のクチバジム戦に向けて特訓を行っていた。

リーリエ「シロン！【こなゆき】!!？」

シロン「コーン!!？」

カキ「受け止める！バクガメス！」

バクガメス「ガアメス!!？」

シロンの冷気をバクガメスは自慢の甲羅で防いだ。効果はいまひとつではあるが、アローラの頃と比べ物にならない威力にバクガメスは後ろへと押されてしまった。

リーリエ「パワーは十分ですね！シロン！」

シロン「コーン♪」

カキ「見ないうちに本当に強くなったな。シロン！」

バクガメス「ガアメ!!？」

驚かされたカキとバクガメスもシロンの成長を賞賛した。

二人のバトルの特訓を見ていたマオ達も見違えたリーリエとシロンに関心していた。

マオ「明日がジム戦か。アローラという大試練みたいなものなんだよね。見るの楽しみだな」

アママイコ「アーマイ!!？」

マーマネ「リーリエは今ジムバッジは二つ。明日のジム戦に勝てば三つ目だね」

トゲデマル「モギユユ!!？」

スイレン「頑張ってね。リーリエ！精一杯応援するからね」

アシマリ「アウアウ!!？」

リーリエ「はい！頑張ります！この調子で三つ目もゲットだぜ！…です」

クカイ博士「サトシの口癖がうつつたみたいだな」

オーキド校長「そのようすな」

アローラの仲間達に囲まれながら、リーリエは明日のジム戦に向け



てさらに気合を入れ直した。

ククイ博士「それでリーリエは明日どのポケモンで挑戦するんだ？」

マオ「リーリエの手持ちからはムクバードとコイキングは電気タイプと相性悪いよね」

スイレン「あと、ズルズキンは言うこと聞いてくれないよね…」

カキ「となると、シロンとキモリとヒノアラシで行くのか」

リーリエ「そうですね。そうなりますね」

リーリエの現段階での手持ちは6匹。その中から3体選出しなければならぬが、明日のジム戦の相手であるマチスは電気タイプのエキスパートである事は分かったので、選出させるポケモンもほぼ決まっていた。

マーマネ「それでいいと思うよ。リーリエのキモリには地面タイプの「あなをほる」を覚えているし、マチスさんはライチュウの他にコイルも使っているようだね。コイルは鋼タイプを持っているから炎タイプのヒノアラシはうってつけだよ！」

マオ「流石は電気タイプの事はマーマネにお任せだね♪」

ロトム『リーリエ！ボクのデータでもこのパーティでの勝率は90%と出ているロト！』

リーリエ「わかりました！よっし！」

リーリエはシロン以外の2つのモンスターボールを取り出すと、その中からキモリとヒノアラシが飛び出してきた。

リーリエ「シロン。キモリ。ヒノアラシ。明日のクチバジム戦は貴方達で立ち向かいます！よろしく願いますね！」

リーリエの呼び声に明日のバトルメンバーとして選ばれたシロン達も同時に気合の声を上げた。逞しいシロン達の表情にリーリエは優しく微笑みかける。

この調子なら明日のジム戦も勝利する事ができるその気持ちはリーリエの緊張感を和らげていた。

~~~~~

翌朝、朝食を終えたリーリエ達はクチバジムに到着した。最初の頃と比べて下手な緊張はしていない。絶好調のこのうえなしです。

リーリエ「たのもー!!!:です」

気合の入った声と一緒に勢いよく扉を開いたリーリエはジムへと入っていく。それに続いてマオ達も入っていくと、自動的に扉は閉じていった。一瞬の暗転の中、マーマネが慌て出す間もなくすぐに明かりがついた。

リーリエ達の目の前にはジムリーダーマチスを慕うトレーナーが出迎えにやってきた。

案内人1「おつとチャレンジジャーか！」

案内人2「お出ましですぜ!リーダー!」

その声に応えたマチスが暗い部屋の奥から姿を現した。身長2メートルと元軍人として鍛え上げられた筋肉を動かしながら、リーリエ達に近づいていく。一度会っているリーリエとその姿に光輝く目を向けているスイレンの他はその迫力に圧倒されてしまっていた。

リーリエの前に着いたマチスはゆっくりと手を前に差し出した。

マチス「グッドモーニング!キュートホワイトガール!待つてたぜ!リーリエちゃん」

リーリエ「グッドモーニングです。マチスさん!今日は宜しくお願ひします」

お互いに握手を交わしたリーリエはマチスの案内でバトルフィールドへと向かった。

ジムのバトルフィールドはそのジムリーダーが得意とするタイプに沿って造られてあるのだが、このジムはとてもシンプルな造りになっていた。

リーリエとシロンはトレーナーサイドへと立ち、マチスもジムリーダーサイドへと移動した。観戦席で見守るマオ達の中で審判によるジム戦のルールが綴られた。

審判「OK!!!ただいまより、ジムリーダーのマチスとチャレン

ジャーのリーリエによるクチバジム、ジム戦を開始しマース！使用ポケモンは三体！どちらかのポケモンが全て戦闘不能になりますとバトル終了となりマース！なお、ポケモンチェンジはチャレンジャーのみ認められマース！それでは、ジムリーダーのマチス！最初のポケモンをフィールドへGO!!!」

審判の合図を聞いたマチスは一つのモンスターボールを取り出した。

マチス「それじゃあ、始めようか！GO！モンスターボール!!!」

勢いよく投げ込まれたモンスターボールから一体のポケモンが放電させながらバトルフィールドへと姿を現した。

??? 「ビリリ!!?」

### 《観戦席》

スイレン「えっ！本当にモンスターボール！」

スイレンのポケに転げ落ちる一同。すぐにマーマネが訂正に入る。

マーマネ「違う！あれはビリリダマだよ！」

マオ「あはは…でも私あのポケモン始めて見たよ」

### 《ジム戦》

マチスの一体目はモンスターボールと瓜二つと言っていいほど似ているポケモン。ビリリダマだ。

『ビリリダマ ボールポケモン

電気タイプ

発電所などに現れるポケモン。モンスターボールに似ているのは保護色のためだと言われているが、簡単に爆発してしまう』

リーリエ「それでしたら、わたくしは…」

ロトムからビリリダマの情報を得たリーリエも一つのモンスターボールを取り出した。

リーリエ「ヒノアラシ！お願いします！」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

モンスターボールから飛び出したヒノアラシはそのまま背中を炎を一気に吹き出した。

マチス「Oh！いい炎だ。暑いね！ベリーホット！その熱き魂をぶつけてこい！」

リーリエ「はい！」

最初は電気タイプと炎タイプでのバトルとなった。両者のポケモンが出揃った所を確認した審判は試合開始のコールを宣言した。

審判「それでは、バトルSTART！」

リーリエの3回目のジム戦が今始まった。

?リーリエVSマチス?

試合開始と同時にビリリダマはヒノアラシの周りを高速移動した。動き回るビリリダマに焦点を合わせようとするヒノアラシであるが、ビリリダマの脅威のスピードに目が追いついていない。目線を合わせてもすぐに見失ってしまうビリリダマの動きにヒノアラシは早くも翻弄されてしまった。

《観戦席》

マオ「なんてスピードなの！」

カキ「ビリリダマって、あんなに速いポケモンなのか！」  
外見から素早いイメージのないビリリダマのスピードにマオとカキは手に汗を握りながら驚いていた。

ククイ博士「ビリリダマの進化系のマルマインは全ポケモンの中でも素早さは上位にあたるポケモンだ。その進化前となるとビリリダマの素早さは全ポケモンの中でも軍を抜くぞ」

### 《ジム戦》

ビリリダマのスピードに戸惑うヒノアラシ。しかし、リーリエがビリリダマに対してヒノアラシを選んだのはこのスピードに対抗させるためでもあった。

いろいろなポケモンの本を読んできたリーリエにはビリリダマの素早さに関しては承知の上であった。

リーリエ「ヒノアラシ！【ニトロチャージ】です!!?」  
ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

発動するたびにスピードを上げて行くという追加効果がある【ニトロチャージ】でヒノアラシは体当たりを仕掛けた。一発目を躲したビリリダマであったが、急いで方向転換させたヒノアラシの二つ目の攻撃を躲す事が出来ずにそのまま攻撃を受けてしまった。

さらに加速して行くヒノアラシをビリリダマは目で追っていた。立場が逆になってしまった状況下で、マチスはすぐにビリリダマに攻撃の指示を送った。

マチス「ビリリダマ！【スパーク】!!?」  
ビリリダマ「ビリッ!!?」

身体から電気を放電させたビリリダマは電気を纏ったまま体当たりを仕掛けた。ヒノアラシの炎の体当たりとビリリダマの電撃の体当たりは激しい火花を散らしながらぶつかり合っている。

だが、【ニトロチャージ】は使うたびに素早さが上がる技だ。これ以上使わせる訳にはいかないマチスはここで戦法を変えるためにビリリダマを一度、後退させる。

マチス「NEXT!【ソニックブーム】!!?」

横に高速回転するビリリダマはそのまま空気の衝撃波をヒノアラシに向かって放った。

ヒノアラシ「ヒノオオ!!!」

足元を狙われたヒノアラシはその衝撃波によって宙へと飛ばされた。しかし、飛ばされながらも体勢をビリリダマの方へと向けたヒノアラシは背中をもう一度勢いよく立ち上らせた。

リーリエ「頑張つて下さいヒノアラシ!【かえんほうしゃ】です!!?」

ヒノアラシ「ヒノオオ!!?」

ビリリダマ「ビリイ!!!」

リーリエ「続けて!【スピードスター】です!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

火炎放射を受けて動きが止まったビリリダマに対して、ヒノアラシはさらに「スピードスター」も畳み掛けた。ヒノアラシの連続攻撃に次々とダメージが蓄積されていく。

### 《観戦席》

マオ「凄い!リーリエが押ししてるよ!」

マーマネ「行つけー!リーリエ!!!」

見る限り流れはリーリエの方へと吹いている。風に乗ったリーリエとヒノアラシの攻撃は嵐のように巻き上げられていた。

このまま押し切れば一勝は間違いないと思われるこの場面。

カキ「だが:マチスさんはなぜ攻撃の指示を出さなくなったんだ?」

しかし、自分のポケモンがやられているのに全く指示を出さないマチスにカキは違和感を覚えていた。

### 《ジム戦》

怒涛の攻撃を受けたビリリダマは苦しそうに蹲っているようであった。戦闘不能まで持ってこれたと確信したリーリエは力一杯に拳を前へと突き出しながら指示を出した。

リーリエ「止めの【ニトロチャージ】です!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

全身の身体を炎で燃え上がらせたヒノアラシは一直線に走り出した。向かう先にいるのはビリリダマだ。ふらつくビリリダマにヒノアラシはどんだん距離を詰めていく。あと数センチの所まで近づき、技が決まりそうになったその瞬間にここでマチスは口を開いた。

マチス「ビリリダマ!【じばく】!!?」

ビリリダマ「ビリリリ!!!」

その瞬間にビリリダマの身体が眩く光始めた。ビリリダマの懐に飛び込んで行ったヒノアラシは急に止まることが出来ずにその光にのみこまれてしまった。激しく発光する光に視界を奪われてしまったリリーリエは微かに残るヒノアラシの影を見つめるも、その直後、激しい爆発音と共に大きな衝撃波がバトルフィールド一帯に轟いた。

リリーリエ「ヒノアラシ!!!」

シロン「コーン!!?」

凄まじい衝撃と突風に襲われるもリリーリエは必死にヒノアラシを呼びかけた。爆煙が晴れたバトルフィールドの中央でリリーリエが見たのは横倒れる二体のポケモンの姿だった。

審判「ビリリダマ!ヒノアラシ!共に戦闘不能!」

残りの体力ゲージを攻撃エネルギーに使用して自身の戦闘不能を引き換えに放った捨て身の攻撃にヒノアラシは耐えることが出来なかった。

### 《観戦席》

マオ「じ…自爆って」

ククイ博士「まさか、こんな手を使ってくるとはなあ」

攻めきっていたリリーリエの攻撃を全て無に返したその技にみんなもマチスの行動に唾然とした。

### 《ジム戦》

リリーリエ「ごめんなさいヒノアラシ。ゆっくり休んで下さい」

戦闘不能となったヒノアラシをモンスターボールへと戻した。

ビリリダマは爆発する危険なポケモンである事は多くのトレーナーは認識している。もちろんリーリエもだ。しかし、爆発系の技を使えばそのポケモン自身も戦闘不能になってしまう技である。覚えていたとしても、余程自分が不利な状況でない限り使つてこないはずだとリーリエはその技に対してあまり警戒していなかった。

なのにマチスは自分の手持ちが一体失われるリスクを負ってきた。このタイミングでの自爆攻撃を仕掛けてきた事にリーリエは動揺してしまった。

マチス「よくやったぞ！ビリリダマ！」

当のマチスは自己犠牲であってもその技に伝えてくれたビリリダマに感謝の言葉を述べながらモンスターボールへと戻した。

そして、すぐに審判の合図よりも先に次のポケモンを繰り出した。次に繰り出されたポケモンはマチスの最高の相棒であるあのポケモンだった。

マチス「GO！ライチュウ！！」

ライチュウ「ライイ！！？」

マチスと同じように仁王立ちを構えたライチュウはチャレンジャーであるリーリエを見つめた。クチバジムの切り札でもあるここでのライチュウの登場がさらにリーリエを焦らせる。勇ましいライチュウの表情に恐縮するリーリエは次のポケモンを選び始めた。

リーリエ「え…えっと、次は…どの子に」

シロン「コン！！？」

気持ちの整理がついていないリーリエの表情を見たシロンは自ら名乗り出た。シロンの声を聞いたリーリエはゆっくりと頷いた。

リーリエ「分かりました。シロン！お願い致します！」

シロン「コーン！！？」

勢いよく飛び出したシロンは毛を逆立てては威嚇する。ライチュウもそんなシロンに対して頬の電気袋から微力な電気を放出させていた。

マチス「次はアローラのロコンか。さあ、何処からでもかかって来



い！」

マチスの自身に満ち溢れた声に応えて、リーリエから攻撃が仕掛けられた。

リーリエ「シロン！【こごえるかぜ】です!!？」

まずはライチュウの動きを鈍らせるために素早さを下げに行く。

リーリエ【ムーンフォース】!!？」

そして、そこを尽かさず威力の高い【ムーンフォース】を放った。月の神秘的な光に包まれたシロンから溢れたエネルギー砲がライチュウへと撃ち出された。

マチス「ライチュウ！【10万ボルト】!!？」

それに対してライチュウは力一杯の電撃でシロンの技と交差した。相殺されるかのように見えたが、ライチュウのパワーは桁違いの強さを誇っていた。【ムーンフォース】を破るとそのままシロンに向かって電撃が襲いかかってきたのだ。

リーリエ「か！躲してシロン!!!」

驚くリーリエはすぐにシロンに指示を出した。かろうじて躲す事ができた電撃はそのまま地面に当たると激しく爆散した。その威力はバトルフィールドに大きな穴が出来るほどであった。【ムーンフォース】を打ち破ったのにも関わらないその威力がリーリエをさらに驚かせる。マチスのライチュウの強さに戸惑うリーリエに関係なしにシロンに向かって新たな攻撃が仕掛けられた。

マチス「NEXT！【アイアンテール】!!？」

アースの役割を持つ長くて鋭利な尻尾の先端を鋼のように硬質化させると、そのままシロンに向かって振り下ろされた。

リーリエ「躲して！」

シロン「コン!!？」

鞭のように攻撃してくるライチュウの技を避けたシロンはライチュウに向かって大きな口を開いた。

リーリエ【こおりのつぶて】です!!？」

シロン「コーン!!？」

氷の弾丸をライチュウに向かって撃ち出した。空を切るそのス

ピードに乗った氷の弾丸は一直線に飛んで行くのだが、

ライチュウ「ラアイ!!？」

それをいとも簡単に尻尾で命中する前に一瞬にして打ち砕いた。飛び散る氷の破片が煌めく中、その煌めきと負けないほどの電撃をライチュウはシロンに向かって放った。

マクス「ライチュウ！【10万ボルト】!!？」

ライチュウ「ライチュウ!!？」

生き物ように蠕く電撃はバトルフィールドを削りながらシロンに向かつて走って行く。

シロン「コオオオン!!!」

リーリエ「シロン!!!」

命中した電撃はシロンをそのまま壁際の方へと飛ばした。壁に激突したシロンは痺れる身体を振り払いながら、痺れた足を震わせながら立ち上がった。

シロン「コオ…コ…」

リーリエ「戻って下さい！シロン！」

これ以上戦わせるといけないと判断したリーリエはシロンをモンスターボールへと戻した。

### 《観戦席》

不安が漂う空気は観戦席に座っているマオ達にもそれが伝わっていた。

ククイ博士「リーリエ。攻め止まっているようだな」

カキ「すぐにシロンを戻した事ですか？」

スイレン「なんで急に…最初は結構強気に攻めていたのに…」

オーキド校長「さっきのマクスのビリリダマによる【じばく】の所為じゃの。マクスさんの破天荒振りの戦いを受けてリーリエ君は最初よりも慎重になってしまったみたいじゃの」

ククイ博士「ええ…その所為でリーリエのさっきまでの勢いを吹き

飛ばしてしまっただ。流石はジムリーダー。相手のポケモンを倒すだけでなく、こんな形で挑戦者の心理を揺さぶってくるとわな」  
マーマネ「リーリエはマチスさんの術中にはまっちゃったって事なんだね」

《バトルフィールド》

シロンを戻したリーリエは大きく深呼吸した。そして自分自身を落ち着かせると、ライチュウの分析に入った。

リーリエ（ライチュウの攻撃を避けつつ、少しずつダメージを与えた後、一気にスピードに乗って倒すしていくしかありません）  
技を打ち破ったのに関わらず、フィールドを破壊するほどの威力からライチュウの攻撃力は的力避けるべきであること。シロンの「こごえるかぜ」の効果でライチュウの素早さは通常よりも下がっているはず。

シロンの頑張りのおかげで、その分に有利に持っていけている事を入れたリーリエは次のモンスターボールを投げた。

リーリエ「お願いします！キモリ！」

キモリ「キャモ!!？」

登場するなり、すぐにキモリは敵意を出すライチュウに身構えた。

リーリエ「キモリ！【あなをほる】です!!？」

キモリ「キャモ!!？」

キモリはそのまま拳を床に向かって一気に振り落とした。衝撃で舞う砂埃が一瞬マチスとライチュウの視界を遮った。砂埃が晴れるとそこにキモリの姿はなく一つの大きな穴があった。ライチュウの攻撃を通さない地中から攻める戦法に出たリーリエの案。

しかし、弱点である地面タイプの技の対策が出来ていないほどジムリーダーは甘くはなかった。

マチス「【でんじふゆう】!!？」

ライチュウ「ライ!!？」

ライチュウは自分の足の裏から帯び始めた電気で磁力を作ると、その力で自分の身体を宙へと浮かべた。

キモリ「キャモ!!?」

リーリエ「そんな!!」

足元から攻撃を仕掛けたキモリと同じタイミングに浮上したライチュウにその攻撃は届かなかった。この状態ではライチュウに地面タイプの技を当てることが出来ない。技の一つを封じられたキモリにライチュウは大きく尻尾を回し始めるとキモリに向かって叩きつけた。

マチス「【アイアンテール】!!?」

ライチュウ「ラーイ!!?」

ライチュウの攻撃を躲したキモリであったが、鞭のように動かすライチュウの尻尾は軌道を変えると、再びキモリに攻撃を仕掛けた。

キモリ「キャモ!!!」

見切れなかったキモリは鋼のように硬い尻尾に打たれると、そのまま地面へと叩きつけられてしまった。

リーリエ「頑張つて下さいキモリ!【エナジーボール】です!!?」

すぐに起き上がったキモリは【エナジーボール】を放った。翡翠色に輝くエネルギー砲を前に力に自信があったライチュウは電気を電気袋へと貯め始めた。

マチス「ライチュウ!【10万ボルト】!!?」

強烈な電撃が放たれると、【エナジーボール】を打ち消しながらキモリへと迫って行った。

リーリエ「キモリ!【でんこうせっか】でライチュウを攪乱するのです!」

キモリのスピードを利用して、ライチュウの電撃攻撃を躲すと、電光石火でライチュウの周りを走り始めた。キモリのスピードに翻弄されたライチュウに対して、キモリは四方八方から体当たりを仕掛けた。

リーリエ（やった…これなら少しずつですがダメージを与えることが出来ます。）

キモリのスピードに手も足も出ないようなライチュウに次々とキモリの電光石火が決まって行くのに安堵するリーリエであったが、その油断が次なる不幸を招いた。

キモリ「キャ…モ…」

リーリエ「えっ…どうしたのですか？キモリ！」

突然キモリの動きが鈍くなった事にリーリエはある事を思い出したかのようにして、思わず声を上げてしまった。

リーリエ「ああ…そうでした！」

電気タイプのライチュウの特性。その注意がなかった。

### 《観戦席》

マオ「キモリどうしちゃったの！」

アママイコ「アーマイ!?」

リーリエが途中から思い出した事も踏まえて、ククイ博士がみんなに説明を始めた。

ククイ博士「カントーのライチュウの特性は《せいでんき》なんだ。

《せいでんき》はほとんどの電気タイプのポケモンが持っている特性であって、物理攻撃を仕掛けたそのポケモンを麻痺状態にしてしまうんだ」

《せいでんき》による物である事はわかった。しかし、それ以前に驚いたのはまた別の事だった。

スイレン「リーリエらしくない。リーリエならカントーのライチュウ

の特性についてだって知ってたはずなのに…」

アシマリ「アウアウ!!？」

カキ「くっ…焦り始めているからだ。落ち着け！リーリエ!!!」

バクガメス「ガアメ!!？」

ガラガラ「ガアラガラ!!？」

ポケモンの知識が豊富な彼女ならライチュウの特性にだつて知っていたはずだ。しかし、ピンチな状況がリーリエに冷静さを失わせ、思考の範囲を狭わってしまったのだ。一度、思考が鈍るとミスは連鎖していく。ポケモンバトルの恐ろしさの一つをいま、リーリエは体験してしまっているのだ。

《ジム戦》

リーリエ「いつ…一体どうしたら…」

自分の失態が悔やまれる。スカートの裾を固く握り締めながら歯を食いしばる。気持ちに押しつぶされそうになるリーリエを見たキモリは会場全体に響き渡るようか雄叫びを上げた。

キモリ「キャモ!!?」

ライチュウ「ラアイ?」

キモリ「キャアアモモ!!!」

リーリエ「キモリ…」

自分の主人に喝を入れたのか。それとも、気合を入れ直したのか。分からないけど、そのキモリの行動がリーリエの力になった。両頬を自分の掌で軽く叩いたリーリエはキモリ目線を合わせた。

マチス「んく!ガッツあるじゃねえか!」

キモリの行動に試合中でありながらも、思わず拍手をしてしまうほど感心してしまった。キモリの強気にさらに闘志を燃やすライチュウ。リーリエとキモリはゆっくりと頷くと早くも次の攻撃へと移った。

リーリエ「キモリ!もう一度【あなをほる】です!!?」

キモリ「キャモ!!?」

マチス「残念だが、その技は喰らわないぜ!ライチュウ!【でんじふゆう】!!?」

ライチュウ「ライ!!?」

さつきと同じ手でキモリの攻撃を躲すライチュウの足元から瓦礫が一気に砂埃と一緒に飛び出した。キモリの登場を見計らってライチュウはもう一度、自分の尻尾を前に突き出した。キモリの姿を捕らえようとすると、そのキモリは穴の中から翡翠色のエネルギー砲を形成し始めていた。これはニビジムでジロウのイシツブテに倒した時と同じ戦法なのだ。

リーリエ「【エナジーボール】!!?」

キモリ「キャモ!!?」

ライチュウ「ラアイ!!!」

マチス「OH!!!」

放たれた「エナジーボール」はライチュウへと命中した。浮上していたライチュウにダメージが入ると磁力が解けては地面へと倒れ込んでしまった。

リーリエ「もう一度、【あなをほる】!!?」

攻撃の手をやめないキモリは再び穴を掘って身を隠した。その行動にマチスはライチュウに指示を出す。

マチス「ライチュウ!穴に向かって【10万ボルト】だ!!?」

ライチュウは電気袋を貯めると、すぐに電撃を撃ち込む体勢に入った。すると、その背後から掘り進んでいたキモリが一気に飛び出してきた。

リーリエ「そこです!【はたく】攻撃!!?」

キモリ「キャモ!!?」

背後を取ったキモリはすぐにライチュウに向かって尻尾で攻撃に入った。ライチュウの後ろを取った事にリーリエとキモリは手応えを感じた。だが、キモリの攻撃が当たる直前にライチュウも自分の尻尾を大きく回し始めた。

マチス「捕まえろ!」

ライチュウ「ライ!!?」

すると、ライチュウは長い尻尾を利用して向かってくるキモリをガツチリと拘束したのだ。

キモリ「キャモ!!?」

予想外の攻撃の防ぎようにキモリは方向転換する事が出来なかった。

リーリエ「キモリ!振りほどいて下さい!」

慌ててリーリエも指示を送るが、がっしりと巻きついているライチュウの尻尾から必死に逃れようとするものの、脱出する事ができないでいた。マチスはゆっくりと右腕を天を仰ぐようにして伸ばすと、そのままライチュウにとどめの一撃の指令を送った。

マチス「ライチュウ!【かみなり】だ!!?」

ライチュウ「ライアイチュウ!!?」

ライチュウの雄叫びと一緒に発生した磁場によって雷雲を呼び起こした。雷鳴を轟かせながらキモリとライチュウの上へと膨張していく雷雲はそのまま雷を突き落とすとした。

キモリ「キヤモモ!!!」

リーリエ「キモリ!!!」

アースの役割を果たすライチュウの尻尾に向かって落ちた雷はキモリを直撃した。バトルフィールドを光り輝かせるその雷に視界が奪われてしまった。

雷が止んで目を開けた直後リーリエが見たのはライチュウの前へで痺れ動けなくなっているキモリの姿だった。

審判「キモリ戦闘不能!ライチュウの勝ち!」

草タイプのキモリであったが、ライチュウのパワーを耐える事ができなかった。リーリエはキモリをモンスターボールへと戻した。

リーリエ「戻って下さいキモリ。ありがとうございました。ゆっくり休んでください」

キモリが倒れてしまった事により、リーリエの手持ちはシロンのみとなってしまった。リーリエの額からは少しずつ汗が流れ始めていた。リーリエはマチスのライチュウの圧倒的な強さを前に思わず尻込みしてしまっていた。

### 《観戦席》

マーマネ「キモリ:やられちゃった」

カキ「後はシロンだけか。マチスさんにはライチュウを含めて後二体いる。」

ジムリーダーの怒涛の戦法に弱気な発言が出てしまうのも仕方がない。心配になる故に自然と口が閉じてしまっているみんなを見てスイレンはその場に立ち上がった。

スイレン「でも!まだ負けたわけじゃないよ!ポケモンバトルは最後までどうなるか分からないだからさ!」



スイレンの声を聞いたマオも一緒になって立ち上がった。

マオ「スイレンの言う通りだよ！まだ終わってない！さあ、私達も名一杯応援するよ！」

マーマネ「うん！」

カキ「だな！」

後から続いてマーマネとカキも立ち上がった。そして全員の手を合わせて、めい一杯の声でリーリエにエールを送った。

「頑張り！リーリエ!!!」

## 《ジム戦》

リーリエ「みなさん」

マチス「いいフレンド達じゃねえか！なあライチュウ」

ライチュウ「ライイ!!?」

マオ達からの声援はもちろんリーリエに届いていた。勇気をもらったリーリエはモンスターボールからシロン出現させた。

モンスターボールから出てきたシロンの目を見てリーリエは驚いた。全く迷いが無い目。諦めている者の目ではなかった。その目を見たリーリエは固い決意と一緒にシロンにゆつくりと頷いた。

リーリエ「シロン！ここから厳しくなつていきますが頑張りましょう！貴方の力をマチスさんに見せるのです！」

シロン「コーン!!?」

力一杯に吠えるシロンはそのままバトルフィールドへと向かった。汗を拭いたリーリエも深呼吸を入れてからすぐにマチスとライチュウと向かいあった。

それを見たマチスも自然と笑みが浮かんでいた。

マチス「OK！行こうかりーリエちゃん。FINALROUNDだ！」

リーリエ「まだ最後ではありません。諦めたりしません！わたくしたちは絶対に勝ちます！」

シロン「コーン!!?」

それぞれの意気込みが語った所で試合は再開された。空かさず動いたのはマチスのライチュウだった。

マチス「ライチュウ！【10万ボルト】だ!!?」

ライチュウ「ラーイ!!?」

十八番の【10万ボルト】がシロンに再び襲いかかった。怒涛の雷鳴を響かせながら向かってくる技にリーリエとシロンを逃げる事はなかった。逃げるどころかシロンは自分の体を回転させ始めた。その動きに思わず眉間にシワを浮かべるマチス。そのシロンの不思議な行動はさらにマチスを驚かせた。

リーリエ「シロン！【こなゆき】!!?カウンターシールドです！」

回転しながら放った冷氣はシロンを囲みながら放たれた。遠心力が加わって通常よりもパワーが上がったシロンの【こなゆき】はシロンを守るバリアーとなり、ライチュウの電撃から身を守った。さらにそれだけではなく、そのままシロンの冷氣はライチュウの電撃を押さえると同時にライチュウへと攻撃が決まった。防御をしながら攻撃を決める。それがこのカウンターシールドの特徴だ。旅立つ前にタケシにこの戦法を教わったのが正解だったみたいだ。

マチス「おお！アンビリーバボ!!」

奇想天外な攻撃にマチスは両手で頭を抱えた。同じくシロンの攻撃に驚いているライチュウも少し慌てている様子であった。リズムのテンポを崩す事が出来たリーリエはさらに攻撃の指示をシロンに伝えた。

リーリエ「次は【こおりのつぶて】!!?」

シロン「コーン!!?」

ライチュウ「ラーイ!!!」

バリアーを解いたシロンはそのまま氷の弾丸を撃ち込んだ。【こおりのつぶて】がライチュウの腹部に直撃すると、そのままライチュウは後ろへと後退した。

ライチュウ「ラーイ!!?」

しかし、シロンの攻撃を受けながらも、ライチュウは尻尾を使ってシロンをはたき出した。

リーリエ「シロン!!!」

飛ばされるシロンであったが、体勢を整えて倒れる事なく踏ん張ると、そのままライチュウに向かって全力ダッシュをした。

ライチュウ「ライチュウ!??!」

マチス「何だと!!!」

捨て身の根性でライチュウの懐へと入ったシロンはさらに攻撃の体勢へと入った。

リーリエ「シロン!【ムーンフォース】!!?」

シロン「コーン!!?」

またもや技が命中すると、ライチュウは後ろの方へと吹き飛ばされました。なんとか踏みとどまったのだが、足元が蹠踉めいて来ている様子でいた。圧倒的な力を見せてきたとはいえ、察しのライチュウにも限界が近づいていた。今までに貯めてきた体へのダメージがここにきてリーリエ達にチャンスを与えた。

リーリエ「今ですシロン!【こなゆき】!!?」

シロン「コーン!!?」

吹雪に該当するほどの猛烈な冷気を放ったシロン。力を振り絞って放たれた冷気はライチュウへと向かっていく。

しかし、マチスも負けてはいられなかった。会場全体に響き渡るような声を振り絞った。

マチス「ライチュウ!【10万ボルト】!!?」

マチスの声を聞いたライチュウも今持てる力を振り絞って、電撃を放った。

両者の技がぶつかり合うとそのまま押し合いに発展した。今までほどの技も蹴散らしていたライチュウの【10万ボルト】であったが、最初に比べて明らかにパワーダウンしているのか、シロンの猛烈な【こなゆき】に対して抑えるのに精一杯の様子でいた。

リーリエ「頑張つて!シロン!!!」

マチス「負けるな!根性を見せろ!ライチュウ!!?」

自身のパートナーの応援に応えようと、二体は一步も引き下がらなかつた。押されては押し返すのが繰り返されてが二体の体力ゲージ

を減らしていく。辛い表情を浮かべながらも根性で立ち向かっていく。気力だけで体を支えている中、決着の時が近づいてきた。

ライチュウ「ラアアアイ!!!!!!」

マチスに負けないうらいの雄叫びを上げると、さらに電撃の威力を高めてきた。火事場の馬鹿力が加わった電撃はついにシロンの冷気を振り払った。

そして…

シロン「コーン!!!」

ライチュウの電撃に飲み込まれたシロンはそのまま後ろの壁へと激突されてしまった。

シロン「コオ…」

痺れた体をうまく動かす事が出来ないままシロンはライチュウへと一点に見つめていた。足元がおぼつかず、静電気が体を蝕んでいく。

しかし倒れそうになりながらも、シロンは根性でバトルフィールドの方へと歩いて行った。

リーリエ「ありがとう…シロン」

シロン「コ…オン…」

気がつくとき、シロンはリーリエに抱きかかえられていた。さっきまで自分の足で歩いていたのに、錯覚する意識と困惑されるが、全く動けない自分の体への感覚を受け止めたシロンは全てを理解した。

涙ぐむリーリエの表情に安心したのか、疲れが溜まったシロンはそのまま眠りについた。

審判「ロコン戦闘不能！ライチュウの勝ち！

よってWINNERジムリーダー、マチス！」

勝敗が決まった。事務を終えたライチュウの頭をマチスは優しく撫で始めた。

マチス「よくやったな。ライチュウ」

ライチュウ「ライ!!？」

疲れが溜まったのはライチュウをマチスはモンスターボールへと戻した。

シロン抱えたリーリエも涙を拭くと、そのままマチスに向かって一礼をした。

リーリエ「マチスさん！ありがとうございました！」

リーリエの言葉に合図を送ったマチスはそのままバトルフィールド

ドを跡にした。マチスが奥の部屋へと消えていった後でも、リーリエはその場を動けずにいた。

試合が終わって観戦席から降りてきたマオ達もリーリエにかける言葉を失っていた。

ククイ博士「こうゆう時もあるさ。トントン拍子に勝ち進んで行けるほど、ジム戦というのは甘くはない」

ククイ博士の言葉が現実を通す。ジムはポケモンリーグへの登竜門。ポケモン協会が認めたプロのトレーナーとのバトルだ。簡単に勝てるものではない。

だけど、それが分かっているにも悔しいものは悔しい。こみ上げてくる涙を引っ込めようとシロンに顔を埋めながらも、リーリエは必死に自分の気持ちを押しさえつけていた。

## 第二十九話 再スタート

クチバジムから飛び出したリーリエは傷ついたシロンを抱えながら急いでポケモンセンターへと駆け出した。美しい白い毛並みが焦げた痕のように黒ずんでボロボロになっているシロンは初めて見た。痺れが取れずにシロンの白い体毛から流れる静電気がリーリエの体を刺す。そんな痛みを感覚神経から脳へと伝達されているはずだが、リーリエの頭の中はそんな情報を受け取っていない。いまはシロンや他のポケモン達を一刻も早く治療させなければならぬ事で一杯だからだ。立ち止まる事なくポケモンセンターまで全力疾走したリーリエはすぐにシロン達をジョーイさんに任せた。

ジョーイ「お待たせしました。お預かりしたポケモン達はみんな元気になりましたよ」

リーリエ「ありがとうございます。ジョーイさん」

シロン達の回復が終わる頃にはすっかり日が沈んでいた。それと同じようにモンスターボールから出て来たシロン達の表情も沈んでいた。

シロン「……」

キモリ「……」

ヒノアラシ「……」

バトルに負けてしまった事に肩を落とす三体にリーリエは軽く手を叩くと皆の目をリーリエの方へと向けた。

リーリエ「そんなに落ち込まないで下さい。また修行を積んで再挑戦すればいいのです。」

次こそは絶対に勝ちましょう！」

マオ「リーリエは大丈夫？」

無理に笑い繕っているのではないかと心配していたマオであったが、振り向いたリーリエのその顔には落ち込んでいる様子がない。

リーリエ「負けてしまった事に対しては勿論悔しかったです。ですが、今回の敗北は決して無駄ではありません。今回は私もマチスさんとライチュウの力に萎縮してしまった事にも原因がありました。次はそうならないようにポケモン達と一緒に研鑽して行くまでです！そして、次は必ずクチバジムを攻略してみせます！」

その言葉にシロン達も顔を上げた。自分たちのトレーナーが気持ちに押し負ける事なく目標を蚊がけて前へと見る。その姿にさつきまで落ち込んでいたキモリ達の曇った表情が消えていた。リーリエの前向きさに影響されたキモリとヒノアラシも合図を送った。

キモリ達の返事に応えると、奥から他のみんなもリーリエへと近づいて行った。

スイレン「そうだよ！リーリエ！」

カキ「俺たちも出来ることがあったら協力させてくれ！」

マーマネ「こういう時こそ、僕たちに頼ってよね♪」

ロトム『持つべきは仲間ロト！』

アローラのみんなもリーリエに励ましの言葉をかけた。その言葉を聞いて嬉しかったリーリエは満面の笑みで皆んなにお礼をした。

リーリエ「ありがとうございます。みなさん！」

そんなリーリエの表情を見たククイ博士とオーキド校長の心配の種もすっかりと消え去って行った。

オーキド校長「どうやら、心配は要らなかつたようですね。ククイ博士」

ククイ博士「ええ、リーリエは強い子です。なんたつて俺の教え子ですから」

元気を出したところで、リーリエ達は食堂へと向かった。

シロン「……………」

しかし、シロンだけはまだその曇った表情がまだ消えていなかった。



~~~~~

リーリエ「シロン！何処ですの！シロン!!!」

翌朝、ヤマブキシテイで連絡を取っていたジエームズからルザミーネの容態を聞いていたリーリエは一度顔を見せにと、マサラタウンのオーキド研究所へと戻ろうとしていた。しかし、その出発の日の朝にリーリエの目の前からシロンが姿を消してしまったのだ。

マオ「見つかった？」

スイレン「ダメ…」

マーマネ「こつちもだよ」

ロトム『ダメだ。シロンの気配も感知できないロト…』

カキ「何処いったんだ。シロン」

別々に探したみんなと合流するものの、シロンを見つけた者はいなかった。

リーリエ「ムクバード！シロンは見つかりましたか？」

ムクバード「ムク…」

カキ「リザードンはどうだった？」

リザードン「グウオ…」

空から探しに出たムクバードとリザードンにも聞くが、二体とも同じように首を横へと振った。

ククイ博士「どうやらスランプしてしまったのはシロンの方だったみたいだな」

オーキド校長「ここは二手に分かれて探した方が宜しいですな！」

もう一度、二手に分かれて搜索しようとした。その時…

???「ジュラ？」

一体のポケモンがリーリエ達の方へと近づいて来た。突然現れたそのポケモンに驚くりーリエ達であったが、そのポケモンは何かを抱えているように見えた。すると、リーリエはその正体がわかるとすぐ

にそのポケモンの方へと近づいて行つた。

リーリエ「あつ！シロン!!」

シロンはそのポケモンの腕の中で眠っていた。リーリエに続いて他のみんなもシロンの方へと向かった。

『ルージュラ ひとがたポケモン

氷・エスパータイプ

腰を振るようになして歩いている。油断すると釣られて人も思わず踊ってしまうほど軽やかだ』

シロンを抱きかかえるようにしてリーリエ達の前に現れたのはルージュラだった。スキャンしたロトムはすぐにルージュラのデータをアップロードした。

ククイ博士「だが、ルージュラは寒い地方に生息するポケモンだ。それが何故?」

ククイ博士の言う通りでルージュラは主に寒い地域に生息しているポケモンであつて、街外れにいる事自体珍しいポケモンであつた。リーリエ「ルージュラ!その子はわたくしの大切な友達なんです!」

ルージュラ「ジュラ!!?」

リーリエの言葉を聞いたルージュラは長く伸ばした銀髪をリーリエのおでこへと押し当て始めた。そして、同じようにシロンのおでこにも当てると目を閉じては瞑想に入った。

カキ「何だあれ?」

オーキド校長「おそらく二人の記憶を辿っているようじゃの。」

ルージュラはサイコパワーを使ってリーリエとシロンの記憶のページをめくり始めた。リーリエとシロンとの出会いまで二人の絆をまとめた集を見通すとルージュラは納得したように頷くと眠っているシロンをリーリエと渡した。

リーリエ「ありがとうございます。ルージュラ」

シロン「コーン…」

ルージュラにお礼を言うリーリエの声に気づいたシロンはぼやける視界の中、リーリエの顔の方へと見上げた。

リーリエ「シロン！もう心配かけて！」

眠りから覚めたシロンをリーリエは固く抱きしめた。その様子を見たマオ達も急いでリーリエの元へと駆け寄った。どこも怪我をしていないシロンの様子に安心する一同の前に一人の人物が歩み寄ってきた。

???「ルージュラ！その子のパートナーは見つかったの？」

ルージュラ「ジュラ!!？」

その主の声に応えたルージュラはそのままその人物の方へと向かっていく。それを見たと同時にみんなの疑問が一気に解消された。野生のポケモンではないと分かった以上、その人物はルージュラのトレーナーであることが分かった。

すぐにリーリエはその人物の方へと駆け寄って行った。

リーリエ「シロン…わたくしのロコンを見つけて頂きありがとうございます！  
ございました！」

???「いえ…私は特には。無事にトレーナーの元へ帰れて良かったわね。シロンちゃん」

シロン「コン!!？」

深々と礼をするリーリエの前にもう一人の人物が茂みの掻き分けてやってきた。キテルグマに間違えそうな見覚えのある体型をした男性はリーリエを見つけると軽く手を上へと挙げた。

マチス「HEY！もしやった思ったがやっぱりか」

リーリエ「マチスさん!!!」

こんなにも早く再開する突然のマチスの登場にリーリエは驚いた。マチス「ここではったりとカンナさんと会ったもんで挨拶しにと行ったら、白いロコンを抱えていたもんだから、もしかしてと思ったがびつくりしたぜ！」

大らかに笑いながら彼女の名を口にしたマチスの言葉にククイ博士とオーキド校長は互いに顔を見合わせた。驚いている二人にリーリエ達は何のことだか分からないままククイ博士はルージュラのトレーナーの前へと立った。

ククイ博士「カンナさん…もしかして貴方は四天王のカンナさんでは？」

マーマネ「四天王？」

マオ「何ですか。それ？」

四天王とは各地方にいるチャンピオンと同等の実力を誇る4名のトレーナーの事である。ジムリーダーと同じように得意とするエキスパートがあり、ポケモンリーグのチャンピオンがチャンピオントレーナーと戦う前に立ちはだかる登竜門となっている。

ククイ博士「つまりカンナさんはここカントー地方でチャンピオンを含めた最も強い四人のトレーナーの内の一人って訳だ」

カンナ「そんな、大それた事ではありませんわ。それよりもこの子を無事にトレーナーさんの元へと帰せてよかったわ」

謙遜しながらカンナは優しい目でシロンを見つめた。すると、その視線に感じたようにシロンはゆっくりと目を覚ました。目を覚ましたシロンを見たリーリエの腕に力が入った。どこも怪我はないことを確認した後、リーリエはシロンを自分の目線に合わせるようにして抱きかかえた。

リーリエ「シロン。何故、飛び出してしまったのですか？」

シロン「コーン…」

シロンはリーリエの顔を見るなり不安げな表情を浮かべてしまっていた。そんな答えにくそうにしているシロンの頭をカンナは撫で始めた。

カンナ「私が見つけた時はその子。一人で特訓をしていたわ」

リーリエ「特訓ですか…」

それを聞いたリーリエはシロンの考えていることが理解できた。

リーリエ「悔しかったのですね。シロン」

初めての敗北。それはリーリエの頑張りに応えられなかった事になる。その悔しい気持ちを抱えてしまったシロンに気づいてあげられなかった自分をリーリエは悔いてしまった。

リーリエ「貴方の気持ちを分かっていた気でいたようです。ごめんねシロン…」

シロンの頭を優しく撫でると、囁き声でシロンに謝った。そんなリーリエの頬にシロンは舌で舐めると、リーリエはシロンの頬に自分の頬を合わせるようにして擦り合わせた。そんな二人の幸せそうな表情を見た一同も不思議と笑みが溢れていた。

ルージュラ「ジュラ!!?」

カンナ「貴方が珍しいわね。あの子が気になるのね」

ルージュラ「ジュラ!!?」

突然カンナに訴え出したルージュラにリーリエ達は首をかしげた。自身のポケモンであるルージュラの気持ちをカンナはすぐに理解すると、リーリエの方へと歩いていった。

カンナ「リーリエちゃん…だったかしら。もしよかったら私達でよかったです、シロンちゃんのパトルを見てあげましょうか?」

リーリエ「シロンをですか?」

カンナ「ルージュラが見てあげたいってね。もし良かったら話だけど…」

カンナのその発言に少し驚いているリーリエの肩をククイ博士は軽く手を置いた。

ククイ博士「折角だから見て貰ったらどうだリーリエ。四天王に付き合っつて貰うなんて滅多にない事だぞ」

ククイ博士の言葉にリーリエとシロンの顔つきが一気に変わった。カントー最強のポケモントレーナーの一人でもあるその人物にバトルを教える。断る理由なんてなかった。

リーリエ「よろしくお願いします!」

シロン「コーン!!？」

~~~~~

カンナ「こちらは大丈夫よ」

リーリエ「はい！」

リーリエ達はもう少し歩いた先にある大草原へと移動していた。本来ならポケモンセンターのバトル施設で行ないたかったのだが、四天王のカンナが訪れたとなれば、多くのギャラリーがカンナの元へと集まってくるのは予想が出来ている。

多くの人達が注目している中ではリーリエとシロンも落ち着いた稽古をつけてあげられる事が出来ない。なので、この離れで行なう事にした。幸いにも周りには野生ポケモンはいないようだ。

リーリエ「シロン！【こなゆき】!!？」

シロン「コーン!!？」

シロンの放った冷気は一直線にルージュラへと放たれた。しかし、ルージュラは躲す素振りを見せずに両手を前へと差し出した。シロンの粉雪を受け止めると、一気にそのパワーをかつ消した。

カンナ「パワーはなかなかね」

シロンのパワーに関心していると、すぐにリーリエは他の技をシロンに指示を出した。

リーリエ「次は【ムーンフォース】です!!？」

リーリエの指示を聞いたシロンは高く飛び跳ねると、月のエネルギーを蓄えたパワーを放った。

カンナ「ルージュラ！【れいとうパンチ】!!？」

迫る【ムーンフォース】に対して、ルージュラは冷気を纏わせた拳を叩きつけた。互いのパワーは相殺されて爆煙が生じた。ルージュ

ラの様子を伺うリーリエとシロンの前にはダメージを諸共しないルージュラが平然と立っていた。その優雅な姿にリーリエとシロンは思わず足を引いてしまった。

シロンの実力を大体引き出す事が出来たカンナは今度はこっちから攻撃を仕掛けてみる事にした。

カンナ「ルージュラ！【サイコネシス】!!？」

ルージュラのサイコパワーにより金色に光る髪が生き物かのように蠢き始めた。パワーが溜まりきったサイコパワーはそのままシロンに向かって放たれた。青白く光る光線を前にすぐにリーリエは指しを出す。

リーリエ「シロン！カウンターシールドで防御です！」

シロン「コン!!？」

迫る【サイコネシス】をシロンはカウンターシールドで対抗する。しかし、四天王が育てたポケモンの力は伊達ではなかった。押し返すどころか防ぎきれなかったシロンはそのまま吹き飛ばされてしまった。

シロン「コーン!!!」

リーリエ「シロン!!!」

飛ばされたシロンへとリーリエはすぐに駆け寄った。シロンには大したダメージは無く、問題なく起き上がるとリーリエの腕へと寄り添った。練習に付き合ってくれたルージュラと共にカンナはリーリエの方へと歩み寄る。

カンナ「パワーの方は申し分ないわ。それに攻撃を防御に補う戦法も素晴らしかったわ。少しだけだけど、良く育てられているわ」

リーリエ「ありがとうございます！褒められましたよシロン」

四天王に褒められた事にリーリエとシロンは太陽のような笑顔で喜んだ。そんなリーリエの元へとマオ達も駆け寄った。

マネ「うん！この短期間でシロンは本当に強くなっているのは私達も感じてるよ」

スイレン「リーリエ達がカントーに出発した日と比べて見違えてたもん」

強くなったシロンにマオとスイレンもそれぞれの感想を述べ始めた。マオ達の言葉にカントーに上陸してからこれまでいろいろな経験して来た事が十分に力の糧になっていている事をリーリエとシロンは改めてそれを感じた。

しかし、強くはなっているがこれ以上に強くなる方法はあるのか。その議題に少し頭を悩ませる様子を見たカンナはある一つの質問をリーリエ達に聞いてみる事にした。

カンナ「ポケモンを強くさせるにはみんなは何をしたらいいと思う？」

カンナの質問にリーリエ達は一斉になって考え始めた。

カキ「もつと強くさせるには…やっぱりもつといろんなトレーナーとバトルさせるのが一番か？」

ロトム『それか新しい技を取得させるのも一つの手であるロトよ！』

マーマネ「それか…進化だね」

各々思った事を口に揃えて自分の答えを言い始めた。そして、マーマネの解答にリーリエは何かを思い出したかのように、自分のバック探り始めた。

リーリエ「進化…」

シロン「コン…」

何かを見つけたリーリエはそれをバックの中から取り出した。

オーキド校長「おや？リーリエ君。それはもしかや」

リーリエの手に握られているのは涼やかな水色の光を纏うまるで氷のような石だった。

それはかつてラナキラマウンテンの洞窟で手に入れた物だった。

リーリエ「はい。こおりのいしです」

カンナ「アローラのロコンをキュウコンへと進化させる石ね」

リーリエ「はい」

あれからシロンに使わずバックの奥へと眠っていた氷の石を見てわ進化という単語がリーリエの脳裏を過っていく。少し戸惑いながらも氷の石をシロンの前へと差し出した。



リーリエ「シロン。貴方はどうです？」

シロン「コン…」

氷の石を前にシロンは少し困り果てた顔を浮かべていた。手にした時も一緒だった。自分の姿が変わる事が怖いのか。シロンは進化をあまり望んでいなかった。だからリーリエはあの日から氷の石を取り出すことはなかったのだ。それにリーリエ自身もこの氷の石を使う事を少し拒んでいる事も確かだ。

リーリエ「シロン。わたくしの正直な事を言ってもいいかな」

シロン「コン？」

リーリエ「わたくしは強くなるためという理由で貴方を進化させたくはありません。進化をすればステータス等が上がるのは確かですが、一度進化させてしまつたら、元にも戻りません。貴方が姿形が変わつてしまうのが怖いのはわたくしは知っています。しかし、それはあくまでわたくしの思考です。貴方が進化を望んでいるのならわたくしは貴方の意志に任せようと思っています」

リーリエの言葉にシロンは何を浮かべたのか分からないが、恐る恐ると氷の石へと近づいて行った。しかし、眺めるだけで触れようとはしなかった。その様子にリーリエだけでなくマオ達も不安げであった。一刻の沈黙の中でマチスはリーリエの元へと向かった。

マチス「石での進化はレベルアップで進化させるとは違う意味である事は分かっていた方がいいぜ」

リーリエ「え？」

マチスの言葉にリーリエとシロンは振り向いた。そして、相棒のライチュウの頭を撫で始めた。

マチス「俺のライチュウはこいつがまだピカチュウだった頃にトキワの森で捕まえたポケモンなんだ。そして、俺はゲットしたこいつを直ぐにかみなりの石で進化をさせたんだ」

マーマネ「すぐに？」

マチス「進化をすればポケモンはより強くなると思っていたからだ。案の定、俺とライチュウは幾多の挑戦者達を返り討ちにしてやつたぜ」

ライチュウ「ラーイ♪」

マチス「BUT…だけど、ある挑戦者との出会った事で俺は強さは進化が全てじゃないと思いき知らされたんだぜ」

気持ちよさそうにマチスに合図をしたライチュウ。そして、撫でる手を引つ込めると真剣な目つきで話を進め始めた。

マチス「その挑戦者は俺のライチュウの進化前のピカチュウを連れて挑戦しに来やがったんだ。生意気なベイビーだった。勿論、この試合は俺のライチュウの圧勝だった。もう二度とクチバジムに挑戦しに来れなくなるほどのトラウマを植え付けたぐらいに負かしてやったんだ」

カキ「それで…その挑戦者は？」

マチス「驚いた。そいつはその翌朝にまた再チャレンジしに来たんだ。しかもピカチュウのままだ。そしたら直ぐに進化させたライチュウの欠点を逆手に取ってだな」

マチスはある日の事を思い出すとたまげた様な表情で大きく手を横に広げた。

マチス「俺のライチュウはピカチュウの時に覚えられていたスピード技術を十分に身につけさせないまま進化せちまったんだ。つまり、俺のライチュウは他よりも素早さに欠けちまっているって事だ。ピカチュウを連れたそのベイビーはピカチュウの武器である素早さを生かして見事に俺のライチュウに勝っちまいやがったんだ！」

その経験がマチスが思う強さというものをひっくり返した。それ以来、マチスはライチュウにスピードで補えられなかった分を攻撃力と防御力でカバーして行く戦法に変えてきた。元からの素早さのステータスを考えるとスピードを捨てる案は惜しいと思うが、今でもマチスはクチバジムのジムリーダーとしての実力を轟かしている。

それにその戦法にたどり着けとのもマチスがライチュウの事を強く信じていたのも一つだろう。出なければ、他のライチュウとは違うバトルスタイルを作る事も出来なかったと思っただからだ。二人の絆の強さにリーリエとシロンは強さとは何か…少しわかったかもしれない。

カンナ「レベルアップとは違って石で進化させる事は能力値が上がるだけで、努力値が上がる訳ではないわ。進化させようがさせまいが、その分に経験や力をトレーナーとポケモンが一緒になって強くなっていくのは変わりないわ。経験。力。そして進化。どれも強くなる事に対して間違いでは無いわ。でもね。私は強くなるために一番大切な事は信頼関係にあると考えているわ」

カンナは再びリーリエの方へと振り返ると、再度リーリエに質問した。

カンナ「リーリエさん。貴方が今手にしているバッジは貴方の力で勝ち取った物？」

その問いに対する答えは考える間もなかった。リーリエは首を横に振ると、シロンを抱き抱えたまま立ち上がった。

リーリエ「いいえ。シロンやわたくしのポケモン達が頑張ってくれたお陰です」

カンナ「そう。」

その答えにカンナは微笑んだ。答えが済んだ所で、もう一度稽古をつけて貰おうとリーリエの足がカンナの方へ一歩踏み出したその直後、突然の爆発と共に二人の影がリーリエ達の前へと立ちはだかる。

スイレン「何！なんなの？」

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ！特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!?」

リーリエ達の目の前に現れたのはコイキングと出会った湖以来の登場となるあの二人だった。リーリエはすぐにその二人を睨みつけた。

リーリエ「ヤマトにコサブロウ!何しに来たのですか!!?」

コサブロウ「違あう!コサンジだつて:いや、当たってるな」

思わず条件反射的に否定し始めたコサブロウはその口を閉じると、ヤマト共にモンスターボールを取り出した。

マオ「他にもロケット団がいるのね!」

ロケット団と対峙するのは初めてではないマオ達もリーリエと一緒に身構えた。

ヤマト「メンバーは変わっているみたいだけど、ジムリーダーに四天王もいるなんてね。ゲツトのチャンスよ!行くわよ!コサンジ!」

コサブロウ「お前は間違えるのかよ!!!」

ヤマトの合図に二人は同時にモンスターボールを投げ入れた。

ヤマト「行くのよ!デルビル!!」

コサブロウ「行けっ!ツボツボ!!!」

デルビル「デェル!!?」

ツボツボ「ボツツ!!?」

モンスターボールから飛び出したデルビルとツボツボは体を大きく広げて此方を睨みつけ始めた。ロケット団のポケモンを見たリーリエ達はそれぞれ各自のモンスターボールへと手を伸ばし始めた。すると皆がそれぞれのポケモンを繰り出そうとしたその時、カンナの手がリーリエの肩へとそつと置かれた。

カンナ「ここは私とリーリエちゃんだけでやらせて貰えないかしら」  
リーリエ「カンナさんとタッグですか!!?」

突然の申しにみんなの手が止まった。カンナの言葉に承諾するとリーリエはシロンをカンナはルージュラを前に出した。

それぞれのポケモンが場に並ばれると、相性の良さを考えてヤマトのデルビルの先制攻撃からバトルが始まった。

ヤマト「デルビル!【かえんほうしゃ】!!?」

リーリエ「シロン！【こなゆき】!!?」

デルビルの火炎とシロンの冷気がぶつかり合った。しかし、すぐにシロンの冷気がデルビルの火炎を打ち消すかのように推し始めた。オーキド研究所の時はいとも簡単に押し返されてしまったが、もうあの頃のシロンではない。以前よりも大幅に上がったシロンの攻撃はデルビルに直撃した。

コサブロウ「ツボツボ！【ヘドロばくだん】だ!!?」

冷気を放ち終わったシロンに向かってヘドロ攻撃が襲い掛かった。攻撃を撃ち終わったシロンはすぐにその攻撃を躲す事が出来ない。その様子を見たカンナはルージュラに指示を出す。

カンナ「ルージュラ！【サイコキネシス】!!?」

サイコパワーでツボツボの攻撃を制止させると、そのままツボツボに向かって撃ち返した。

リーリエ「【こおりのつぶて】!!?」

自分の攻撃を浴びたツボツボに向かって氷の弾丸が放たれた。鋭く一直線に放たれた氷の弾丸の威力にツボツボは主人であるコサブロウの手前まで放り出されてしまった。苦手な炎タイプの技を打ち消す冷気。その小さな体格には似合わない威力を発揮した氷の弾丸。それを見て確信を持ったカンナはリーリエの耳元へそつと呟いた。

カンナ「リーリエちゃん。次は【れいとうビーム】を支持してみて!!?」

突然の言葉に一瞬にしてリーリエの視線はカンナの方へと向けられた。

リーリエ「【れいとうビーム】!!?ですが、シロンはまだその技を使った事が…」

カンナ「ないだけで、その技を使えるぐらいの力はこの子にあるわ。【こなゆき】のパワーを全体に放出させるのではなく、【こおりのつぶて】の様にエネルギーを一点に集中させて糸を針穴に通すようなイメージで撃ってみて」

カンナの提案にリーリエとシロンは見つめ合う。すると、シロンは尾を振り回しながらリーリエに向かって鳴き始めた。自身に満ちた

その声を聞いたリーリエは決心した。

リーリエ「やりますよ！シロン！」

シロン「コーン!!？」

合図と共にシロンは固く目を閉じると、エネルギーを貯め始めた。そのシロンにシンクロするか様にしてリーリエも固く目を閉じ始めた。

ヤマト「デルビル！【かえんほうしゃ】やっちゃって!!？」

そんなシロンに向かってデルビルは再度火炎放射を放ち始めた。迫る火炎放射に対してカンナとルージュラは手を出す事なく、真剣な目でリーリエとシロンの様子を伺う。徐々に近づいてくる火炎放射の熱風が顔に当たるが二人に焦りはない。そして、同時に目を開けるとリーリエは力一杯にシロンに向かって新しい技を指示をした。

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】です!!？」

シロン「コオオオン!!？」

冷たい冷気が放射された。そしてその冷たいエネルギーが光線のように帯び始めると、一気に火炎放射を打ち消した。

打ち消しながら地面を凍らせながら走る【れいとうビーム】はデルビルを吹き飛ばした。

リーリエ「やった…出来ました！」

初めて出来た新しい技にバトル中ではあるが、リーリエとシロンは互いに喜び合った。

ヤマト「デルビル!!!」

コサブロウ「くつつボツボ！【ジャイロボール】だ!!？」

後退したデルビルに代わって今度はツボツボの攻撃が向かった。シロンの力を引き出せた事を確認したカンナはルージュラに対して静かに指示を出す。

カンナ「ルージュラ【あくまのキッス】!!？」

ルージュラ「ジュラ♡」

ルージュラの投げキッスを受けたツボツボの回転が少しずつ弱まっていくと、静かにツボツボは地面へと倒れ込んだ。

ツボツボ「zzzz」

カンナ「次は【サイコキネシス】!!?」

眠りについたツボツボをサイコパワーでロケット団に向かって投げ返した。投げ返されたツボツボにヤマトとコサブロウは逆に吹き飛ばされてしまった。

一箇所に纏められたロケット団に向かってリーリエとカンナはトドメの攻撃へと入った。

リーリエ「シロン! 【れいとうビーム】!!?」

カンナ「ルージュラ! 【ふぶき】!!?」

二体による同時の氷攻撃がロケット団を空高くまで吹き飛ばした。

ヤマト「久しぶりの登場なの!!!」

コサブロウ「あんまりだ!!!」

「いやな気持ちいい!!!」

ロケット団は氷に閉じ込められたまま、流れ星のように空の彼方へと消えてしまった。

ククイ博士「やったな。リーリエ! 【れいとうビーム】の習得もおめでどう」

マオ「カツコ良かったよ!リーリエ!」

アママイコ「アーマイ!!?」

マーマネ「凄い!凄いや!」

トゲデマル「モギユユ!!?」

二人の戦いぶりにマオ達はリーリエの元へと駆け寄った。リーリエもシロンを抱き抱えながら照れ臭そうに頬を赤くした。

そんな二人にカンナはルージュラをモンスターボールへと戻すとリーリエを呼び止めた。

カンナ「ポケモンはトレーナーのためにトレーナーはポケモンのために、強さは貴方たちのような信頼関係にもある事は覚えておいて。これからも互いを信じて、時には笑ったり、喧嘩したり、泣いたり、一緒にいる時間を大切にして行ってね。その時間が貴方達をもっと成長させて行くわ」

その言葉にシロンの悩みも吹き飛んだかのようにリーリエに向かって元氣よく鳴いた。その声にリーリエも嬉しくなってはシロン

の頬を自分の頬と擦り合わせた。そして、カンナの方へと目を向けると、深々とお辞儀で返した。

リーリエ「ありがとうございました！カンナ先生！」

シロン「コン!!？」

その声にカンナもクスリと笑い出した。

カンナ「ふふ！それじゃあ、私はこれで。また何処かで会いましょう」

そのままカンナはリーリエ達に別れを告げるとそのまま森の奥へと行ってしまった。カンナの姿が見えなくなるまで見届けたリーリエはすぐにマチスの方へと振り返った。

リーリエ「マチスさん！わたくしたちはもっと修行を積んでまたクチバジムに挑戦します。その時は必ずジムバッジをゲットしてみせます！」

マチス「グレイト！その時でも容赦はしないぜ」

ライチュウ「ライ!!？」

再チャレンジの意思を固めてはリーリエとシロンの闘志が燃え始めた。ここから二人の再スタートとなったリーリエとシロン。二人のこれからポケモン修行の旅はまだまだ続くのであった。

【マサラタウン】

くオーキド研究所く



翌日の朝、チャイムが鳴った。リーリエ達が一旦戻ってくると思ったジエームズはディナーの支度の中、玄関の方へと向かうと、その扉を開いた。

ジエームズ「お帰りなさいませ！お嬢様！」

扉を開けたジエームズの目に飛び込んだのは…

「ピッカ!!?」

ピカチュウだった。そして、そのピカチュウが自分の主人であるその少年の肩へと登り始めた。ピカチュウを追いかけるようにして追っていた目はやがてその少年と目が合った。その少年を見たジエームズの目は大きく見開いた。

ジエームズ「これは…またお会いすることが出来るとは…お久しぶりです」

サトシ「お久しぶりです！ジエームズさん！」

ピカチュウ「ピッカツチュ!!?」

### 第三十話 サトシ

マサラタウンへと帰ってきたリーリエは皆を引き連れてオーキド研究所のドアを開けた。

リーリエ「ジエームズ！ただいま戻りました！」

玄関の扉を開けたリーリエはジエームズの名を呼んだ。しかし、いつもだったらリーリエが到着する五分前には使用人を引き連れて出迎える筈なのだが、待とうにもそのジエームズの姿はなかった。時間厳守の彼には珍しい事でありリーリエは少し戸惑ってしまう。

スイレン「ジエームズさんどころか、誰からの返事もないね」

ククイ博士「何かあったのか？」

オーキド校長「おい！ユキナリ！！着いたぞ！」

オーキド博士の名を叫んだが、その声にも反応がなかった。妙な静けさに嫌な予感がするリーリエ達であったが、どうする事も出来ず、ただその場を立ち尽くしている他なかった。

ロトム『事件の匂いがするロト！だったらここはアローラ探偵のこのロトムにお任せするロト！』

自分の好きな探偵ドラマの主人公と同じ髪型のカツラを被ったロトムは探偵気分になろうとしていたその時、一つの影がリーリエ達の前へと現れた。すると、その影は猛スピードでリーリエ達の方へと突進してきた。

マオ「こつちに来たああ!!!」

マーマネ「何！何！何いいいい!!!」

突然のことに慌ただしくなるリーリエ達に向かって突進してきたその影はオーキド校長を包み込んでしまった。

リーリエ「校長先生!!!」

カキ「なっ!??!」

ククイ博士「うわあ!??!」

紫色のその影に飲まれたオーキド校長を助けようと必死に引き剥がそうとしたカキとククイ博士もがその影に飲み込まれてしまった。

ヘドロのようなその身体をスキャンし始めたロトムは解析始めた。その正体はなんとポケモンであったのだ。

『ベトベトン ヘドロポケモン

毒タイプ

ヘドロが溜まる場所や湿気が多い場所を好んで生活している。身体から染み出している体液は鼻が曲がるほどの強烈なおいを放つ』

ククイ博士達を飲み込んだその正体はアローラの姿とは違うカントーのベトベトンだった。三人の男性を呑み込んだベトベトンの体格の大きさにリーリエ達は驚く一方であった。そんなリーリエ達の前一人の顔がベトベトンの体から飛び出してきた。

オーキド博士「ふはあ!!!」

間違いないオーキド博士だ。

リーリエ「オーキド博士!!!」

オーキド博士「おお！リーリエ君。帰って来たかね」

ジエームズ「お帰りなさいませお嬢様！」

リーリエ「ジエームズも!!!」

誰からの声もなかった理由が分かった。みんなこのベトベトンに捕まってしまったようだ。

オーキド校長「ユキナリ！」

オーキド博士「おお！ナリヤ！」

ククイ博士「お会いできて光栄です。オーキド博士。私はククイと

申します」

カキ「今は挨拶よりも何とかしませんか!!!」

ベトベトン「ベトベト〜ン!!?」

軟体の体を持つベトベトンから脱出しようにもどうする事も出来ない一同に向かつて奥から人影がこちらに向かつてきた。

ケンジ「いた!あそこだ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

駆けつけてきたのはケンジと…ピカチュウ?リーリエにはそのピカチュウはどことなく初対面ではないような感じがしてきた。そう思っていると、奥からもう一人の影が現れた。

???「戻れベトベトン!!!」

その人物はモンスターボールを向けると、ベトベトンをボールの中へと戻した。ベトベトンに解放させてへトへトなみんなの前に現れたのは赤い帽子と青いシャツを身につけた一人の少年。

リーリエ「えっ…」

その人物を見たリーリエ達は目を大きく見開いては釘付けとなった。当たり前だ。スクール時代を友に過ごした仲間の一人がそこに立っていたのだからだ。

サトシ「みんな!久しぶり!!!」

ピカチュウ「ピツカチュウ!!?」

!!!!!!  
サトシ  
!!!!!!

みんなは早走りにサトシの方へと駆け出した。久しぶりの再会にサトシもみんなと手を取り合いながらこの喜びを分かち合った。

マオ「サトシ！サトシだ！」

カキ「久しぶりだな！サトシ！」

スイレン「元気にしてた!?？」

マーマネ「あくなんだか僕…涙が出てきたよ」

ロトム『サトシ!!!久しぶりロト!』

サトシ「あはは!!!」

抱きかかえていたシロンもピカチュウの姿を見るとアママイコ達と一緒にピカチュウの元へと駆け出した。揉みくちやになりながら楽しそうにしているポケモン達の様子に微笑ましく見つめていたリーリエにサトシは目をやった。

サトシ「リーリエも久しぶり！オーキド博士から聞いたぜ！ジム巡りしてるんだってな！」

リーリエ「はい！お久しぶりです！サト…」

いつも通りサトシと再会の握手を交わそうと手を握ろうとしたのだが…

サトシ「どうした？リーリエ」

リーリエ「えっ／＼い…いやいや！な！何でもありません／＼／

／

サトシの手を取ろうとしたリーリエの右手は時を止められたかの



聞いていたのだが、こうして自分の目で確認する事が出来たりーリエはそつと胸を撫で下ろした。オーキド博士からは容体は変わらず安定。グラジオから受け取ったウツロイドのデータから神経毒の解毒剤の調合を進めていると聞かされる。まだ完成には遠いが、脳や他の臓器には何の外傷もなく、解毒剤が投与されればすぐに目を覚ます事を告げられた。

無事に回復へと進んでいる事を聞かされたりーリエは改めてオーキド博士達に礼をした。再び応接室へと戻ると同じようにりーリエの母を心配に思っているマオ達にもりーリエは案件を伝えた。自分の母のせいで危険な目にあわされたのにもそれを聞いたみんなは自分のことのように喜んでくれていた。マオとスイレンに抱きつかれた途端、りーリエは一滴の涙を零した。

~~~~~

サトシ「グレーバツジにブルーバツジ！すげえよりーリエ！まさかジロウとカスミに勝っちゃうんだなんて」

りーリエ「そんな…シロン達が頑張ってくれたおかげですよ」

ソファアードでくつろぐサトシ達はここまでのりーリエのカントー地方の旅の話で盛り上がっていた。ソファアの背もたれに寄り添うとサトシは自分がカントー地方を旅していた頃を思い出した。

サトシ「タケシにカスミかく懐かしいな。それにノゾミもジム戦をしにカントーに来てるのかく久しぶりに会いたいな」

マオ「それと、アランさんとマノンにも会ったんだよ」

サトシ「それは知ってるんだ」

サトシはそう返事をする、さつきとは深刻な顔つきに変わった。サトシの表情にりーリエ達は息を飲んだ。一瞬の間の後、サトシは口を開いた。

サトシ「実はアランから聞いてたんだ。ダークポケモンの事とりー

リエの事は」

ダークポケモンのワードにただ一人、リーリエが動いた。

リーリエ「それはつまり…サトシはダークポケモンの事はご存知だったのですか！」

サトシ「ああ！今は俺も国際警察の人と協力してダークポケモンの足を辿っているんだ」

ピカチュウ「ピカピカ!!？」

リーリエ「やはり…それほど深刻なのですね」

カキ「あのさ、悪いんだけど」

スイレン「ダークポケモンって何のこと？」

ここまでのサトシとリーリエがそれぞれ旅の道中で出くわしたダークポケモンの事をマオ達にも説明した。本当は秘匿すべき内容であったが、二度もダークポケモンに襲われている事もあり、危険性を考慮してカントー地方に残っているマオ達にも身の安全のため話す事にした。

話の内容からマオ、スイレン、カキ、マーマネの表情は曇ってきた。そんなみんなの顔を見たサトシは話題を変えようと立ち上がると、リーリエの方へと視線を向けた。

サトシ「そうだ！リーリエやろうぜ！」

リーリエ「や／／やるって!!何をですか？」

突然のことに驚くリーリエであったが、モンスターボールを手にした右手を向けられた事でサトシが次に言おうとしている事が何となく察しがついた。

サトシ「何ってポケモンバトルだよ！強くなったリーリエとやってみたいんだ！いいだろ？」

リーリエ「わたくしが…サトシと」

このサトシからバトルの誘いはスクールの時にかけられた誘いは違う感じをリーリエは捉えていた。少しの笑みを浮かべるとすぐにその場を立ち上がると、真剣な眼でサトシに向けた。

リーリエ「やるからには勝ちますよ。サトシ！」

お淑やかなお嬢様として育てて来たリーリエからのイメージとは



正反対の言葉にマオ達は驚いた。

マオ「おっ！リーリエがサトシに対して強気だ！」

マーマネ「サトシとリーリエのガチバトルか…」

カキ「面白そうだな！」

スイレン「うん！見てみたい！」

サトシとリーリエとの暫くぶりの再会を果たしたマオ達も今の二人の実力が気になっていたようで、その提案に一同は賛成した。そうと決まれば全員は中庭の方へと飛び出していった。

~~~~~

ケンジ「審判は僕がやるよ！二人とも準備はいいか？」

サトシ「頼んだぜケンジ！」

リーリエ「よろしくお願いします！」

中庭へと場所を移したリーリエとサトシは向かい合わせになるようにして位置についた。スクール頃とは違う緊張感がマオ達も伝わっていた。その感情はリーリエもサトシも同じだった。

サトシ「ピカチュウ！君に決めた！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

相棒のピカチュウの名を叫ぶと、ピカチュウはサトシの肩から勢よく飛び降りた。

リーリエ「やっぱりピカチュウですね。わたくしは勿論！シロンです！」

シロン「コン!!？」

ピカチュウに対してリーリエは迷わず自分の相棒の名を叫んだ。顔を見合わせるピカチュウに対してシロンは一声をあげた。まるで負けないよと言っているみたいであり、その返答に対してピカチュウ

も軽く返事をした。

久しぶりのサトシとのバトル。だけどあの頃とは違うのは、これは授業の一貫ではなくトレーナー同士の真剣勝負である事だ。

そして、サトシの視点から言わせると目の前に立っている相手はポケモンスクールのリーリエではなく、ポケモントレーナーのリーリエである事だ

ケンジ「試合開始!!!」

?サトシVSリーリエ?

サトシ「ピカチュウ!【10万ボルト】!!?」

ピカチュウ「ピツカアチュウ!!?」

リーリエ「シロン!【れいとうビーム】!!?」

シロン「コオオン!!?」

開始の合図と共にピカチュウの電撃とシロンの冷気が炸裂した。爆煙が晴れるとサトシとリーリエは狙い通りの表情を浮かべた互いの顔を見合わせた。

シロンの得意技【こなゆき】から最上位となった【れいとうビーム】はシロンの挨拶代りの技となった。ピカチュウが最初に繰り出す技を予想していたリーリエはその技に【れいとうビーム】を決めることが出来た事に思わず笑みを浮かべた。その顔を見たサトシもリーリエの心情を感じたのか同じように笑みを浮かべた。

リーリエ「【ごごえるかぜ】!!?」

切り替えてリーリエは次の指示を唱えた。身震いしてしまいそうな冷気が風のようにピカチュウに向かって押し寄せて行った。咄嗟にその技をジャンプして躲したピカチュウはシロンの頭上を捕らえた。

サトシ「次は【アイアンテール】だ!!?」

リーリエ「真上です！【こおりのつぶて】!!?」

硬化させた尾を叩きつけるようにして向かってくるピカチュウに向かってシロンは氷の弾丸を飛ばした。目に止まらない速さの氷の弾丸はピカチュウの腹部を捕らえた。反動で飛ばされたピカチュウは何とか地面へと着地するが、思った以上に重い攻撃がのし掛かっていたピカチュウの足は蹠踉めいていた。

リーリエ「シロン！【ムーンフォース】です!!?」

シロン「コーン!!?」

シロンの【ムーンフォース】がピカチュウに炸裂した。しかし、ずっと友に戦ってきた相棒の身体能力を信じていたサトシは地面を転がって行くピカチュウに向けてすぐに指示を出した。

サトシ「ピカチュウ！【でんこうせっか】!!?」

ピカチュウ「ピツカ!!?」

サトシの声を聞いたピカチュウは地面を強く蹴ると、光のような速さでシロンに向かって飛び込んで行った。光のような速さで迫るピカチュウの攻撃を躲す事が出来なかったシロンはそのまま後ろの方へと吹き飛ばされてしまった。

シロンに攻撃を浴びさせたピカチュウは高くジャンプすると電気を帯びた尻尾をシロンに向け始めた。

サトシ「今だ！【エレキネット】!!?」

【エレキネット】は網目状に帯びた電気の包囲網で相手を捕縛する技だ。尻尾で大きくその技をシロンの方へと放つと、シロンを包み込もうと電気の網が襲いかかった。

【でんこうせっか】を受けた直後での次の攻撃にシロンはすぐには回避移す事が出来ずにいる。その様子を察したリーリエはすぐに指示を送った。

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】!!?カウンターシールドです!!!」

リーリエの声を聞いたシロンはそのまま氷のバリアーを展開させた。【エレキネット】を防いだ【れいとうビーム】はそのままピカチュウに向かって攻撃し始めた。

ピカチュウ「ピツカア!!?」

シロンの予想外な攻撃にピカチュウは思わず後退してしまった。その技を見たサトシも呆気にとられた様子でいた。ジム戦や他の試合でも使ってきたカウンターシールドをリーリエとシロンは十分に物にしたようだ。

サトシ「リーリエ!それってカウンターシールドじゃん!」

リーリエ「はい!サトシが編み出したこの戦術にはわたくしもシロンも助かっています!」

昔に自分が考え出した戦法を使ってくれた事に驚きと嬉しさがこみ上げてきたサトシとピカチュウにさらに闘志を燃え上がってきた。その直後にピカチュウはシロンに向かって突進し始めた。無防備に突っ込んでくる様子に何かしらの違和感があったリーリエだったが、そのままシロンに攻撃の指示を唱えた。

リーリエ「シロン!連続で【こおりのつぶて】です!!?」

シロン「コーン!!?」

サトシ「今だピカチュウ!【アイアンテール】だ!!?」

突っ込んでくるピカチュウに対してシロンは無数の氷の弾丸を放ち始めた。迫る氷の弾の嵐に怯むことのないピカチュウは尻尾を硬化させたままその速度を緩めようとはしなかった。そのうちの【こおりのつぶて】の一発がピカチュウへと命中しそうになったその瞬間、ピカチュウは【アイアンテール】をぶつけた。

しかし、驚くのはここからだ。ピカチュウはそのまま弾き返すのではなく氷の弾を一発ずつ伝ってシロンとの距離を詰めに行った。リーリエ「えっ!!!」

サトシ「どうだリーリエ!名付けて氷のつぶて封じだぜ!」

そのまま高い位置まで飛び上がったピカチュウは頬袋に溜め込んだ電気を放電し始めた。サトシとピカチュウの奇想天外な戦法に戸惑うまでもなくリーリエとシロンもピカチュウに狙いを定めた。

リーリエ「シロン!【れいとうビーム】です!!?」

サトシ「ピカチュウ!【10万ボルト】!!?」

双方の技は互いを譲らずにそのまま相殺された。巻き起こる爆煙

が晴れると、シロンは「エレキネット」により拘束されてしまっていた。電気を帯びた網を振りほどくも出来ないシロンの様子を見たリーリエは右手を審判を務めたケンジに合図を送った。

リーリエ「参りました〜」

シロン「コ〜ン」

降参を宣言したリーリエとシロンを見てケンジはコールした。勝負が決したピカチュウとシロンはお互いの主人の元へと戻っていった。

サトシ「お疲れピカチュウ！」

ピカチュウ「ピツカア!!？」

リーリエ「頑張りましたね。シロン！」

シロン「コン!!？」

サトシ「シロンもやるようになったじゃん！技のどれも強力だったし、すんげー強くなってる！」

リーリエ「流石はピカチュウですね！サトシ達もさらに磨きをかけているのが分かりました！」

リーリエとシロンは見合わせると互いに笑い合った。サトシの強さに助けられ、旅の中ではその強さを目標に進んでいたリーリエとシロンにとつて、今回のサトシとピカチュウとの試合はアローラの頃の自分と比べて大きく成長している事を実感する事が出来たと思われる。

自分達のこれからの高みへと目指してくためにも負けた経験も大切する事の大切さをシロンにも伝わったであろう。その様子は負けた事よりもピカチュウを相手に頑張つて闘うことが出来た嬉しそうな表情から伝わっていた。

サトシ「リーリエ！続けて行くぞ！」

リーリエ「はい！」

~~~~~

翌朝、荷物をまとめたリーリエは再びジム巡りの旅へと出発しようとしていた。

リーリエ「ジエームズ。引き続きお母様の事よろしくお願いします」

ジエームズ「お嬢様もお気をつけて」

ククイ博士「頑張つてこいリーリエ。俺もオーキド博士と一緒に一刻も早くルザミーネさんの体調が戻られるよう最善を尽くして行くよ！」

リーリエ「ありがとうございます。ククイ博士！」

そして、研究所を出たリーリエに遅れて残りの五人も急いで研究所を飛び出した。リーリエと肩を並べると、皆はオーキド博士達の前へと立った。

オーキド校長「みんなも慣れない土地であるが、気をつけるんじやぞ！」

オーキド博士「サトシ。みんなの事頼んだぞ！」

サトシ「はい！」

ピカチュウ「ピカツチュ!!？」

みんなが出揃った所でリーリエの合図で見送るオーキド博士達に旅立つ挨拶を交わした。

リーリエ「それでは…」

行つて来ます  
!!!!!!

こうしてサトシ、マオ、カキ、スイレン、マーマネを加えて新たなスタート切ったリーリエは振り返ることなく走り出した。その跡に続いてサトシにマオとカキにスイレンに転びそうになりながらも跡を追うマーマネも走り出した。輝き様の輝きにも負けない朝日に向

かつて走り行くリリーエ達の影が見えなくなるまで、その後ろ姿を  
オーキド博士達は見送ったのだった。

### 第三十一話 うずまきカップ

サトシ「行くぞ！みんな!!!」

ピカチュウ「ピツカア!!？」

ロトム『待つロト!』

マサラタウンで再開を果たしたサトシを含めて、再びトレーナー修行へと旅立ったリーリエ達はクチバシテイの港町で海水浴を楽しんでいた。

カキ「青い空。白い砂浜。アローラの輝きに負けない日差しにヴェラ火山のようなこの暑さ。俺は今、それを全身に浴びてい…うおご!!!」

潮の香りを楽しみながら太陽の光を全身に浴びていたカキに向かって水鉄砲が放たれた。目に入った水を拭った目線の先には卑しく笑っているサトシとマーマネの姿があった。

マーマネ「カキ！訳わからない事を言っていないで早く来なよ！」

サトシ「そうだぞ。カキ！」

カキ「つたく…やったな！お前ら！」

勢いよく海へと飛び込んだカキはサトシとマーマネに向かって仕返しに手のひらで掬った水を浴びさせた。トレーナースクールの頃と変わらずにはしゃいでいる三人の甲高い声に答えるようにして他の三人も海水浴場へと向かった。

スイレン「どう？準備できた二人とも？」

マオ「うん！」

リーリエ「ええ！」

遅れて着替えを済ませた三人もサンダルに履き替えると、熱く燃える砂浜の上に足を置いた。

一番最初に着替えを終えたスイレンはスクール時代の頃に着ていたスク水ではなく、少し大人びた赤いハイビスカスがプリンされた紺色のワンピースを着用している。

二番目に出てきたマオはエメラルドグリーンホルターネックの水着を着用していた。胸元とおへそ辺りのフリルのパンツについて



いる黄色い紐がとてもチャーミングであり、身長が高いマオのスタイルをよく写している。

最後に出てきたリーリエは自分の肌の色とも似合う白を中心としたバンドウフレアビキニと少し片足が見えるぐらいのロングパレオを使用した水着となっている。

マーマネ「もう遅いよ三人とも！」

マオ「仕方ないでしょ！色々と準備があるんだから！」

スイレン「マーマネ。そんなんじゃモテないよ」

トゲデマル「モギユユ!!？」

マーマネ「ト…トゲデマルまで」

するとマオは久しぶりの水着に恥ずかしそうにしているリーリエの肩を掴むと、サトシの前へと押し出した。驚いてこちらを見ているリーリエに意地悪そうな目を送ってはサトシに問い出した。

マオ「ねえねえサトシ!どう?リーリエ似合ってる?」

リーリエ「えっ!な//マ//マオ!!!」

マオの発言にさらに戸惑い出したリーリエは慌ててサトシの方へと振り向いた。

リーリエ「……………」

水着を見られる恥ずかしさとどんな返事が来るであろう期待と不安に早くも押しつぶされそうになる。だんだんと早くなる鼓動の音が聴こえる中、口を開く事が出来ないリーリエは黙ってサトシを見つめる。

サトシ「ああ!リーリエってやっぱり白色が似合うよな!」

リーリエ「そ////そうですか!」

その返しに顔をさらに赤くするリーリエは見られないように自分の頬に両手を当て始めた。それでも赤らみは薄れていく事はなく目の前にいるサトシの顔を直視出来ずに困っていると、向こうから聞き覚えのある声にそれは助けられた。

???「サトシ!リーリエ!」

二人の名を呼ぶ声に顔を向けると、そこには見覚えのある顔があった。

サトシ・リーリエ「カスミ!!!」

ピカチュウ「ピツカア!!?」

久しぶりにカスミの顔を見たピカチュウは尻尾を大きく振り出すと、一直線にカスミの方へと飛びだした。

カスミ「ピカチュウ!久しぶり!」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

サトシ「それよりも何でカスミがここに?」

カスミ「まあオーキド博士から聞いてたつてのもあるけど、理由はこれ!」

すると一枚のチラシを取り出すと、その見覚えのある文字にサトシは真っ先に反応した。

サトシ「うずまき…カップつて…ジョウト地方での」

そこに記されていたのはうずまきカップの開催日時だった。かつて、ジョウト地方を旅していたサトシはその大会に一度だけ出場した経験を持っている。その大会が明日、ここクチバシティで行なわれるのであった。

カスミ「そう!水タイプのポケモンを使うジムリーダーとして参加しない訳には行かないわ!」

さらに水系ポケモンを極めていくためにもこの大会に参加せざる理由などはなかった。ハナダジムをカントー地方で一番のジムにする事を目標に突き進むカスミには絶好の修行の場でもあるのだ。

サトシ「面白そうだな!よし決めた。俺も出るぞ!」

そしてこの大会を耳にして参加しないサトシでもない。サトシの出場宣言を聞いたカスミもそのことばを待っていたかのようにして微笑んでいた。

カキ「そうなれば俺もだ!」

スイレン「よし!私も出る!」

サトシに続いてバトル好きのカキに水系ポケモン使いのスイレンも参加の意義を述べ始めた。他のみんなの参戦を喜んでいるとサトシはある事に気がついてしまった。

サトシ「ちよつと待つてよ。カスミ!うずまきカップつて事は…」

慌てふためいているサトシを宥めるようにしてカスミは頷いた。察したサトシも言いづらそうに此方に視線を変えてきたのだが、リーリエ達はその様子にからも何を言いたいのか分からなかった。見かねたカスミはリーリエ達に説明した。

カスミ「あのね。この大会に出場するためには最低でも水系ポケモン二体以上が必須なのよ」

サトシ「実はそうなんだ」

それを聞いたカキ達は残念そうに肩を落としてしまった。

カキ「水系ポケモンじゃないとダメなのか」

スイレン「ええ、残念……」

マオ「なら、二人の応援だね」

大会に出られないみんなと同じように残念がるリーリエであったが、そんな彼女に向かって一体のポケモンが此方に向かって走ってきた。そのポケモンを見たシロンは大きく尻尾を振り始めた。

ゼニガメ「ゼニ!!?」

喜ぶシロンの視線の先へとリーリエも振り向くと、一体のゼニガメがリーリエへに向かって飛び込んできた。

リーリエ「もしかして……貴方」

突然のことに驚いたが、それよりも見覚えのあるこのゼニガメとまた会えた事に驚いていた。すると、もう一つの人影がリーリエ達の前へと現れた。

ジュンサー「久しぶりねリーリエさん！それとサトシ君とカスミさんも！」

再会したジュンサーの後ろからもう一体のゼニガメが姿を現した。そのゼニガメは他の子とは違ってサングラスをかけていた。取ったサングラスの中から覗かせる瞳は光り輝き出すと真っ先にサトシの方へと走って行った。

ゼニガメ「ゼニゼニ!!?」

サトシ「ゼニガメ！」

ピカチュウ「ピツカア!!?」

自分の方へと飛び込んでくるゼニガメをサトシはその勢いを受け

止めきれずにそのまま尻もちをついてしまった。だが、そんな事はお構いなしだった。何にせよ、長年の友と再会を果たしたからだ。

サトシ「久しぶりだなゼニガメ！」

ゼニガメ「ゼニゼニ!!？」

カスミ「ゼニガメ！久しぶり！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

お互いの再会を喜びあっているサトシとゼニガメの様子をリーリエ達は遠くからその様子を微笑ましく眺めていた。

マオ「あのゼニガメって？もしかして」

リーリエ「ええ！サトシのポケモンですよ！」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

スイレン「それで、その子は？」

リーリエ「この子はサトシのゼニガメがリーダーとして務めているゼニガメ消防団の団員なのです」

マーマネ「ゼニガメ消防団!!？」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

なんて話を進めていくと、サトシはある提案をゼニガメに持ちかけた。

サトシ「なあ！ゼニガメ。俺たちうずまきカップに出場するんだけど、どうだ？久しぶりに一緒にバトルしないか!!？」

それに断る理由はなかった。久しぶりのサトシの手持ちに戻ってのバトルにゼニガメはピカチュウと一緒ににはしやぎ始めた。

するとサトシのゼニガメはリーリエの元へと向かったゼニガメに話しかけ始めた。ゼニガメが話している事を理解したサトシはリーリエにも提案を持ちかけた。

サトシ「リーリエ！そのゼニガメ凄く懐いているみたいだし、一緒に参加してみたらどうだ？そうしたら、うずまきカップに出場に必要なラインに届くんじゃないかな！」

リーリエ「えっ!!？」

少し驚いたリーリエはゼニガメの方へと目を向けた。暫くゼニガメと見つめあっているとゼニガメの方からリーリエに対して大きく

領いた。

リーリエ「いいのですか？」

そう聞くとゼニガメは目を大きく輝かせ始めた。ジュンサーも優しく微笑み返してくると、リーリエはジュンサーにお礼の返事を返した。

リーリエ「宜しくお願いしますね！」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

ジュンサーからの許可を貰ったリーリエはゼニガメを加えてカスミに連れられて大会への出場登録を済ませに向かった。無事に登録を済ませると、そのまま太陽が沈むまで遊び続けた。

~~~~~

翌朝、リーリエ達はうずまきカップが行われるクチバのバトルドームへと向かった。そこで参加登録を済ませると、サトシ、カスミ。そしてリーリエは選手控え室へと案内された。

フィールド形式はハナダジムと同じく足場を置ける複数の浮島が浮かんでいる水のフィールドとなっている。天井も開いており、そこから流れ込む太陽の光が緩やかに流れる水面に光を与えていた。

リーリエ（水着とは聞いてなかったのですが…）

他の選手が次々とバトルを繰り広げる中、いよいよ自分の番が来たリーリエはバトルフィールドへと向かい始めた。うずまきカップは水系ポケモンのみを使用としたルールであるのためなのか。出場選手はみんな水着着用での参加となっていた。海水浴イベントでもあるためか観戦している人達のほとんども水着を着用しているのだが、バトルフィールドに立つと大きなモニターに自分の姿がくつきりと映し出されるため、恥ずかしくないと言ったら嘘になってしまう。

リーリエの対戦相手が見えると審判による試合開始の合図が下された。集中力を高めるため深呼吸し終えたリーリエはモンスターボールを取り出した。

リーリエ「出てきてください！コイキング!!!」

コイキング「ココツ!!?」

コイキングは登場と同時に水中へと潜ると勢いよく水の中から飛び出して行った。久しぶりのバトルとも合ってやる気は十分だ。大きな水しぶきを巻き上げたコイキングの自慢の跳躍による力強さを見た観客から大きな声援が響き渡った。気合の入るコイキングにリーリエの恥ずかしさも吹き飛んで行った。

互いにエールを呼び合っていると、対戦相手であるトレーナーのダイはリーリエのコイキングを見ると少し鼻笑いをした。

ダイ「コイキングとは…お嬢さんにしては似合わないポケモンを繰り出しますね」

リーリエ「似合わない?」

ダイ「君の美しさにはどうも釣り合いそうにないポケモンってことさ!」

すると会場からは何処ともなく大きな女性陣による歓声が会場中に響き渡った。

ダイは資産家の父を持つ御曹司である御坊ちやまトレーナーだ。長くて煌めかなストレートな茶髪に飲み込まれてしまいそうなブルーアイ。色白の肌の美貌には多くの女性達を虜にされた…のである。

ダイ「それに寄りによって、美しさだけでなく強さにも浮かばれないコイキングが相手では、僕のポケモン達の美しさや強さを十分にこの会場にいる人達に披露することが出来ないではないか…」

リーリエ「むっ!」

コイキング「ココツ!!?」

マオ「何なの!あの人!」

スイレン「感じ悪い」

ダイの言葉にリーリエとコイキングは少しの怒りが込み上げてき

た。その感情は観戦席で観ているマオ達にも伝わっていた。

前髪を大きく払うと、ダイは百数個のダイヤモンドが付けられたゴージャスボールを取り出した。

ダイ「君のような女性には可憐でゴージャスなポケモンがお似合いです！僕のポケモンのようにね！」

ダイが繰り出したそのポケモンは太陽の光によって全身の鱗から七色の光を会場内に光り輝かせた。

リーリエ「綺麗……」

コイキング「ココツ……」

その美しさに息を飲んでしまうもののリーリエはすぐにロトムに凶鑑の解説をお願いした。

『ミロカロス うつくしきポケモン

水タイプ

ヒンバスの進化系。人々が争いを始めると湖の奥から現れてはその神秘的な美しきで荒んだ心を癒すと言われている。世界一美しいポケモンと言われている絵画や彫刻のモデルにもなっている』

淑やかそうに見えるポケモンであるが、コイキングの姿を見るなり、すぐき警戒モードへとミロカロスは鋭い目つきで睨みつけた。しかし自分の何倍の大きさを持つミロカロスであるも、そんな事にビビるリーリエのコイキングではなかった。

審判「それでは試合開始！」

?リーリエVSダイ?

ダイ「さあミロカロス!【しんぴのまもり】!!?」

ミロカロス「ミロロロ!!?」

試合開始と共にミロカロスはさらに自分の美しさを光り輝かせた。

コイキング「ココツ!!!」

その光に目を奪われたコイキングは思わず目を瞑ってしまった。相手の姿を捕らえられないコイキングの様子を見たダイはすぐに攻撃へと切り替えさせた。

ダイ「ミロカロス!【たつまき】!!?」

ミロカロス「ミロツ!!?」

尻尾を大きく回し始めたミロカロスは竜巻を発生させると水を巻き上げながら、コイキングを大きく空中へと放り出した。

マーマネ「まずい!!!」

カキ「あの高さに放り出されたら身動きが取れないぞ!」

力強い攻撃からダイのミロカロスは見掛け倒しではない強さを誇っている事が分かった。冷静にコイキングへと視線を向けたリーリエは指示を送った。

リーリエ「コイキング!そのまま【とびはねる】です!!?」

コイキング「ココツ!!?」

リーリエの声が届いたコイキングも空中でありながらも体勢を整えると、そのままミロカロスに向かって急降下する。空のエネルギーを纏わせた体当たりがミロカロスへと迫っていく。

ダイ「僕のミロカロスの【たつまき】を利用して攻撃を仕掛けてくれるとはね…」

余裕そうに眺めるダイは次の攻撃をミロカロスに送った。

ダイ「【ハイドロポンプ】!!?」

ミロカロス「ミロツカア!!?」

コイキング「ココオ!!!」



強烈な水流攻撃をコイキングへとぶつけた。何とか押し切ろうと「ハイドロポンプ」による水流に立ち向かっていくコイキングであったが、圧倒的なパワーを前に弾かれてしまった。そのまま水面に叩きつけられてしまったが、すぐに水面から顔を出すとリーリエに自分の安否を伝えた。

ダイ「進化前と進化系。その壁もこのポケモンバトルに置いては勝敗を大きく左右させるものだ。その穴を状態異常や天候操作で補って活路を見つけるトレーナーもいるが、神秘のベールに包まれた私のミロカロスの前では…それはあまり期待できない」

自分の狙いを見透かれてしまった様なダイの目つきにリーリエは少し息をのんでしまった。「とびはねる」の追加効果で麻痺を狙いにくくものの、神秘のベールに護られているミロカロスにその効果は見込めない。さらに特性《ふしぎのうろこ》を前ではその状態異常も裏目に出してしまうのも確かであった。

ダイ「それに世界一の美しさと強さを持つ僕のミロカロスが世界一弱いコイキングになんかに負ける未来も見えやしませんかね！」

リーリエ「……………」

ロトム『リ…リーリエ。落ち着くロト…』

さらコイキングに対して無礼極きまりない言葉を並べていくダイに対してリーリエからは少しづつ黒いオーラが溢れ出ていた。自分の大切なポケモンが馬鹿にされたのなら当たり前だ。

サトシ「あれ…相当…怒っているよな」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

カスミ「怒って当たり前よ！やっちゃえリーリエ！」

おこリーリエの怖さは何となく知っているサトシはモニター越しからでもリーリエの氷のように冷たい目に背中を刺されるような感覚に襲われた。それは同じようにピカチュウにもサトシ同様に思わず身震いを立ててしまっていた。

ダイ「もう勝利は決した！私の美学の波にこのまま飲まれるが良い！ミロカロス！【なみのり】だ!!!」

ミロカロスの神秘的な光が放つと同時に観客席まで飲み込んでし

もうほどの高波を発生させた。そのまま高波はコイキングに向けて流れていく。

スイレ「た…高い」

アシマリ「アウ…」

カキ「あれじゃあ、逃げられないぞー！」

逃げ道はないように見えるこの状況であるがリーリエに焦りはなかった。その様子に追い詰めている様に見えるダイの方が少しの違和感を感じていた。

リーリエ「コイキング！思いつきり【はねる】です!!?」

コイキング「ココツ!!?」

リーリエの合図を待っていたコイキングは思いつきり尻尾を水面に叩きつけると、その反動で上に向かって飛び出した。雲に届きそうな位置まで高く飛んだコイキングに会場の目線は一気に釘付けになった。その驚異の飛躍力にはダイもミロカロスも驚いた。

リーリエ「そのまま最大パワーで【とびはねる】!!?」

コイキング「ココツ!!」

そのままミロカロスに向けて垂直落下したコイキングの突進はミロカロスの【なみのり】とぶつかり合った。お互いの攻撃エネルギーが爆散すると、その衝撃によって蒸発してしまった海水は一気に天に昇ると、一つの雨雲を生み出した。コイキングの攻撃力に他のコイキングに無いものを感じたダイはリーリエのコイキングを睨みつけた。

ダイ「貴方のコイキングは他のコイキングと比べてパワーがあると認めよう！しかし所詮は最弱の分類！それでもまだ僕のみロカロスにとつては…」

ポツツ…

鼻に冷たい感触にダイの言葉は途切れてしまった。上を見ると、発生させた雲から少しずつ雨が降り始めていた。

雨…

リーリエ「さあ、コイキング！ここから貴方の本領を發揮するところ

ろです!!!」

コイキング「ココツ!!?」

リーリエの声と同時にコイキングはミロカロスに向かって泳ぎだした。

リーリエ「コイキング! 【たいあたり】!!?」

ミロカロス「ミロツ!!!」

ダイ「早い!!!」

まるで電光石火の如くのスピードに乗ったコイキングの体当たりがミロカロスの懐に入った。その後、コイキングはその機敏な速さを生かしたままミロカロスの周りを泳ぎ始めた。明らかにさつきまでは違う動きにダイもミロカロスも驚愕していた。

ロトム『コイキングの特性は《すいすい》! 雨の中では素早さが上がるロト!』

そのままコイキングは連続での体当たり攻撃を仕掛けていった。ダメージが重なっていくにつれて目で追いつらなくなっていくそのスピードを前にミロカロスは如何するも出来なくなっていた。

ミロカロス「ミ:ロ」

追い詰められていくミロカロスと牽制が逆転されて来た事にダイの余裕が一気に打ち消されてしまった。コイキングの素早さの対処法が全く掴めないダイは考える時間を稼ぐべく防御にへと徹し始めた。

ダイ「ミロカロス! 【じこさいせい】だ!!?」

ダイの指示にミロカロスは回復技を繰り出した。だが、ミロカロスのダメージは想像以上に受けており、完全に回復するまでにはいかなかった。

リーリエ「トドメの【たいあたり】です!!?」

コイキング「コオオオ!!?」

全身全霊の力で繰り出した体当たりはそのまま自分の倍以上の大ききのミロカロスを後方へと吹き飛ばした。

ミロカロス「ミ:ロオ:」

そのままミロカロスは水面から起き上がることなく目が回っていた。

審判「ミロカロス戦闘不能！コイキングの勝ち！よって勝者はリーリエ選手！」

試合終了のコールが鳴った。見事勝利を収めたコイキングはリーリエの元へと戻っていった。

リーリエ「お疲れ様です！コイキング！」

コイキング「コオ!!？」

シロン「コーン!!？」

ダイ「そ…そんな。僕たちの美しさが…」

マオ「やったああ！リーリエ!!!」

カキ「ナイス試合だったぞ!!!」

そのまま会場からはリーリエとコイキングに向けて大きな歓声と拍手が沸き起こった。おそらくコイキングの勝利を疑っている者が多かつたのか分からないが、殆どの人はスタンディングオーバーションで健闘を讃えていた。リーリエ達が退場するまで止むことない拍手に向かってリーリエは喜びを胸に大きく手を振り返した。

カスミ「どう？サトシ。リーリエの戦い」

サトシ「ああ、リーリエ。本当に強くなったんだな」

ポケモントレーナーとして戦うリーリエの姿にサトシ達も拍手を送ったのであった。

~~~~~

ポケモンセンターに戻ったリーリエはコイキングと一緒に誰もいない屋外プールで今日の試合を振り返っていた。

リーリエ「自分よりも大きなポケモンを相手に貴方は負けじと戦う姿はとてもカッコ良かったです。最後までわたくしの事も信じてくれてありがとう。またわたくしはポケモン達に助けられてばかりで

ダメですね。明日はもつと的確な指示を送れるように頑張ります」

そう言い終えた直後に勢いよく跳ねたコイキングは水しぶきを  
リーリエへと浴びせ始めた。

リーリエ「きやつ！もう／＼冷たいですよ！」

シロン「コーン!!？」

そうコイキングの方へと目をやると、コイキングは真剣な目でリー  
リエに何かを訴えるように見つめていた。

自分の頑張りだけではない。リーリエのお陰で助けられた場面は  
いくつもあつたと、

そう言っているかのように感じた。

リーリエ「コイキング？わたくしが貴方の主人で良かったですか  
？」

その問いにコイキングは嬉しそうに飛び跳ねていました。明日も  
頑張ります！

## 第三十二話 最弱から最強へ

「ブイ？」

潮の香りが混じったイタズラ風が自分の目を隠すまでに伸びた前髪を思いつきり吹き上げた。風が吹く方へと視線を向けたイーブイの目に写ったのは大きなバトルドーム。そこから絶え間なく鳴り響く歓声が響いていた。

うずまきカップ2日目。問題なく勝ち進んだリーリエは遂に準決勝への駒へ進めた。

『さあ、出張うずまきカップ！残す試合はあとわずか！果たして優勝のしんぴのしずく』を手にするのは一体誰なのか！まもなく準決勝第一試合が始まります！』

観客のヒートアップした歓声はリーリエの耳にしっかりと届いていた。ここまで一緒に力を合わせて戦ってきたコイキングとゼニガメに目を合わせた。

リーリエ「行きましょう。コイキング！ゼニガメ！」

リーリエの声に二体はそれぞれ返事を返したと同時にリーリエ達はバトルフィールドの方へと向かって歩き出した。

一足先にバトルフィールドへと立ったリーリエは次の対戦相手に心を躍らせていた。サトシとカスミ。この二人も順当に勝ち進んでいればいつかは当たることは予想はついている。

そして、ついにその時が来た。

『準決勝第一試合！サトシ選手対リーリエ選手！』

リーリエ「準備はいいですか。ゼニガメ！」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

サトシ「ゼニガメか。それなら俺はこいつだ。ワニノコ!君に決めた!」

ワニノコ「ワニワニ」

カキ「ワニノコか!」

スイレン「あの子可愛い!踊ってる!」

ロトム『踊るワニノコ!データアップロードロト!』

早くもこのような形でサトシとの再戦となるリーリエであったが、このバトルはいつもよりも実力が伴われる試合になると言われても過言ではなかった。それは研究所の時はアローラにいた頃から良く知るピカチュウとシロンとのバトルであったため技や癖などあらかじめ情報をお互いに知った上でのバトルであったからだ。

この試合は事実上、トレーナーの腕が試される模範解答が付いていない白紙のバトルなのだ。

『!!試合開始!!』

?リーリエVSサトシ?

リーリエ「ゼニガメ!【みずてつぼう】です!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

サトシ「ワニノコ!こつちも【みずてつぼう】だ!!?」

ワニノコ「ワニヤア!!?」

共に放たれた水鉄砲は一直線に水面を切りながら互いの攻撃を打ち消しあった。

『両者放たれた水鉄砲は相打ちに終わった!共に攻撃力は互角のようだ!』

ジョウト地方から幾多の試合経験を積んでいるサトシのワニノコは進化はしていないが、進化系ポケモン相手にも劣らないパワーは

持っている。しかし、ゼニガメ消防団として日々訓練し続けているゼニガメも負けていなかった。相殺された水鉄砲の冷たい水しぶきが肌に優しくかかる中、リーリエは次の攻撃を支持した。

リーリエ「【こうそくスピン】!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

技を打ち終えたにも関わらず、甲羅に潜ったゼニガメは身体を横回転し始めると、そのままワニノコに向かって突進し始めた。速攻攻撃を仕掛けたゼニガメにさつきまで陽気に踊っていたワニノコは鋭く目を尖らせて静かにサトシの支持を待っていた。

サトシ「ワニノコ!【かみつく】攻撃!!?」

ワニノコは大きく開いたその牙でゼニガメの甲羅をガツシリと受け止めてみせた。

『なんとワニノコ!その大きな口でゼニガメの攻撃を受け止めた!その鋭く尖った歯で身体を固定されたゼニガメは身動きが取れないぞ!』

実況者の言う通り、回転を止められたゼニガメは抜け出そうと身体を大きく揺らし始めたのだが、甲羅の溝にガツシリとはまったワニノコの歯はそんなゼニガメを逃そうとはしなかった。

サトシ「いざワニノコ!そのまま離すなよ!」

それでも、逃げ出そうと藻がこうとするゼニガメを見つめながらリーリエは突破口を探り当てた。

リーリエ「ゼニガメ!ワニノコの口に向けて【みずてっぼう】です!!?」

ゼニガメ「ゼ:ゼニイ!!?」

リーリエの支持を聞いたゼニガメは頭をワニノコの口の方へと向けると、思いつきり水鉄砲をお見舞いしてやった。

口の中へと溢れかえるぐらいの水量に顎が外れそうになるワニノコはよろけ始めると、体勢を崩した瞬間にゼニガメはジェット噴射みたいにワニノコの口からの脱出に成功した。

リーリエ「ゼニガメ!そのままもう一度【みずてっぼう】です!!?」  
脱出に成功したゼニガメはさらに空中から狙いを定めてワニノコ



に向かって水鉄砲を放った。

サトシ「ワニノコ！ 躲して【きりさく】攻撃だ!!？」

怯んだワニノコであったが、サトシの声を聞くと一瞬にして我へと返った。そのまま迫ってくる水鉄砲の先にいるゼニガメを見つけると、ターゲットに向かって大きくジャンプしてゼニガメの攻撃を躲した。

ゼニガメへと接近したワニノコは鋭利な爪を立てると大きく切り裂いた。

ワニノコ「ワニヤア!!？」

ゼニガメ「ゼニツ!!」

ワニノコの攻撃を受けたゼニガメはそのまま浮島へと叩きつけられてしまった。急所に当たりやすい攻撃でもあつてその威力にゼニガメはかろうじながらも、立ち上がってみせる事が出来た。

リーリエ「大丈夫ですか!?!？」

リーリエの声にゼニガメは何とか返答する。しかし、バトルに対して手加減するのは懸命に立ち向かっている相手に失礼な事だと思っているサトシはトレーナーになったばかりのリーリエに対してもその攻撃の手を緩めようとはしなかった。

サトシ「【みずてっぽう】!!？」

リーリエに次の手を考えさせる間も与えないようにすぐにサトシは攻撃の支持をワニノコに送った。

リーリエ「でしたら!」

ワニノコの水鉄砲がゼニガメに直撃するその瞬間、ゼニガメは一つ水柱を立てるとそれを体に纏わせながら勢いよくジャンプした。

リーリエ「ゼニガメ! 【アクアジェット】です!!？」

ロトム『ゼニガメは【アクアジェット】を使えるロトか!!!』

通常では覚えない水タイプの先制攻撃でゼニガメはワニノコの攻撃を躲しながら腹部めがけて飛び込んだ。

ワニノコ「ワニヤア!!!」

攻撃を受けたワニノコはそのまま後方へと吹き飛ばされてしまった。効果はいまひとつであるが、そのパワーにサトシとワニノコは驚

いていた。しかし、その中でリーリエとこうして公式試合する事に微かな喜びがあった。

サトシ「水の中へ潜れ！」

ワニノコ「ワニャ!!？」

『水タイプならではの戦法！ワニノコは水中に潜って身を隠しました！』

ワニノコに攻撃を決めた後もゼニガメは「アクアジェット」で辺りを泳ぎながら、ワニノコの出処を探り始めた。警戒しながら見渡すも、互いの攻撃が止んだ事で歓声も聞こえない静寂に満ちた空間がリーリエとゼニガメに不安と緊張感を仰いでいく。

その感じがピークになってきた直後にワニノコはゼニガメの背後から飛び出してきた。

リーリエ「後ろです！ゼニガメ！」

サトシ「ワニノコ！【かみつく】だ!!？」

素早く気づいたリーリエであったが、背後から攻撃に急に体を後転させる事が出来なかったゼニガメは再びワニノコの頑丈な顎に捕まってしまった。

サトシ「ワニノコ！【こわいかお】!!？」

ワニノコ「ワツ!!？」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

ゼニガメが慌てて顔を出した瞬間を狙ってワニノコは鋭い眼光でゼニガメを睨みつけた。その迫力ある顔に怯んだゼニガメは一瞬にして固まってしまった。

サトシ「今だ！そのまま叩きつけろ！」

ワニノコ「ワニャア!!？」

怯んだ隙にワニノコはゼニガメの甲羅を啣えたまま大きく首を振り回すとそのまま地面にゼニガメ叩きつけた。

リーリエ「ゼニガメ!!!」

叩きつけられた衝撃に耐えられず、再び顔を出したゼニガメの目は

グルグル回っていた。

審判「ゼニガメ戦闘不能！ワニノコの勝ち！」

まだ自分のポケモンでないためモンスターボールへと戻せないゼニガメの元へと駆け寄ったリーリエは優しく抱き抱えると、急いで自分のトレーナーサイドへと戻って行った。

リーリエ「頑張りましたね。ゼニガメ」

ゼニガメ「ゼニツ…」

リーリエ「貴方の分まで頑張ります。ここから見ていて下さい」

シロンの励ましもあって元気を取り戻したゼニガメはシロンと一緒にリーリエの応援を始めた。そしてリーリエは二体目のポケモンが入ったモンスターボールを取り出した。

リーリエ「お願い！コイキング！」

コイキング「ココオ!!？」

『リーリエ選手の二体目はコイキング！ここまで圧倒的なパワーを見せてきたコイキング！今回もどんなバトルを披露してくれるのか！』

コイキングの登場に会場にいる人から大きな歓声が飛びかかった。出場者の中でも選出されにくいポケモンでもあって、ここまでのバトルを繰り広げてきたリーリエのコイキングの實力はこの場にいる多くの人達に印象付けていた。大きく飛び込んだコイキングは気合の入った目でワニノコと対峙し始めた。

サトシ「気を引き締めるワニノコ！このまま行こうぜ！」

ワニノコ「ワニワニ!!？」

サトシの声に一段と気合を入れ直したワニノコ。リーリエの次のポケモンが現れた事で試合開始のゴングがもう一度鳴り響いた。

リーリエ「【たいあたり】です!!？」

ワニノコ「ワニヤア!!!」

渾身のスピードが加わった体当たりがワニノコに向かってヒットした。コイキングの驚異のスピードを間近で見たサトシはこれには

驚きを隠せないでいた。しかし、すぐに切り替えるとジャンプして空中にいるコイキングを捉えた。

サトシ「ワニノコ! 【かみつく】で捕まえろ!!?」

すぐにワニノコも攻撃を耐えてはコイキングに向かってジャンプした。しかし、ゼニガメとのバトルの中でワニノコのバトルスタイルを分析出来たリーリエには口を大きく空けて接近していくワニノコの行動は読んでいた。

リーリエ「コイキング! 【じたばた】です!!?」

コイキングは大きく尻尾を揺らし始めると、そのまま接近してくるワニノコに向かって、その尾で往復ビンタのような攻撃で跳ね返した。

サトシ「ワニノコ!」

リーリエ「今です! 【たいあたり】!!?」

そのままフィールドに叩きつけられたワニノコを起き上がらせる間も与えず、コイキングの体当たりによる追い討ち攻撃がワニノコに決まった。コイキングの怒涛の攻撃に耐えられずワニノコはそのままダウンとなってしまうた。

審判「ワニノコ戦闘不能! コイキングの勝ち!」

『決まった! コイキングの渾身の体当たりにワニノコはダウン! 両者共に残るポケモンは一体となった!』

サトシ「よく頑張ったなワニノコ! ゆっくり休んでくれ」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ワニノコ「ワニヤア!!?」

そう頭を撫でられたワニノコは嬉しさのあまりサトシの頭目掛けて噛り付いた。久しぶりのバトルが楽しかったのか。負けはしたが二人にはとても満足がいくバトルが出来たみたいだ。もう一度、感謝を述べたサトシはワニノコをルアーボールへと戻した。

『さあ、サトシ選手! 最後のポケモンは何か!』

サトシ「やるなコイキング！次はこいつが相手だ！ブイゼル！君に決め！」

ブイゼルの入ったモンスターボールを投げようとしたその時、別のモンスターボールから一体のポケモンが飛び出してきた。

ミジユマル「ミジユマ!!？」

ピカチュウ「ピカ!!？」

サトシ「おい！ミジユマル!!!」

『サトシ選手！最後のポケモンはミジユマルだ!!』

マオ「あれ？」

スイレン「勝手に出てきちゃった！」

ミジユマルの登場に観客達からは最後のバトルともあって、大きな歓声が鳴り響いた。

その歓声に応えるように観客に向かって大きく手を振り始めるミジユマルでいた。これからバトルが始まるも知らない様子にサトシは頭を抱えていた。そんなミジユマルの様子が可笑しくてリーリエは少し笑ってしまった。

リーリエ「お茶目な子ですね。サトシ！」

サトシ「あ：ああ！まあ、いつか。頼んだぞミジユマル！」

ミジユマル「ミジユマ!!？」

本当に分かっているか分からないが、自信満々なその様子に心配の余地はないみたいだ。二体のポケモンが出揃った所で最後のバトルが始まった。

リーリエ「初めて見るの子ですが。焦らず行きましょう！【たいあたり】!!？」

コイキング「ココツ!!？」

又もや、先制して攻撃を仕掛け始めたコイキングは一直線にミジユマルに向かって突っ込んでいった。そのスピードはワニノコ戦のダメージを諸共しない様子であった。

サトシ「面白い！受けて立つぞリーリエ！ミジユマル！こつちも【たいあたり】だ!!？」

ミジユマル「ミジユマ!!?」

コイキングの根性に火を付けられたサトシは同じ技での真っ向勝負を仕掛けた。そんなサトシの熱に同じように灯されたミジユマルもコイキングに向かって突っ込んでいった。ぶつかり合う両者の体当たりはそのままお互いを後方へと飛ばした。

サトシ「ミジユマル!【アクアジェット】だ!!?」

そのまま水の衣を纏ったミジユマルはコイキングへと向かって行った。ジェット機のようなスピードが乗った先制攻撃はそのままコイキングを吹き飛ばした。

サトシ「次は【シエルブレード】だ!!?」

リーリエ「躲して【たいあたり】です!!?」

お腹に装備されているホタチを手にとると、今度はそこに水で形状させた刃を纏わせると、続けてコイキングに向かって行った。

しかし効果はいまひとつであったのが救いだったコイキングはダメージを受けながらも迫るミジユマルの姿を捉えられた事によりすぐに躲す事が出来た。

リーリエ「もう一度【たいあたり】です!!?」

攻撃を決め損ねて体勢を崩したミジユマル目掛けて、コイキングは突進して行く。

サトシ「ホタチでガードしろ!」

だがすぐに躲せないミジユマルをトレンドマークであるホタチを使わせてコイキングの体当たりを阻止させた。衝突した反動で弾き飛ばされた二体は後方へと押されて行く。

サトシ「良くやったぞミジユマル!」

リーリエ「ミジユマルの性質を生かした見事な防御ですね」

サトシ「サンキュー!」

サトシの起点を生かした指示にリーリエは賞賛する。同じようにミジユマルとコイキングも互いの力を讃え始めていた。そして、サトシの次の指示が分かっているようにミジユマルは両手を大きく広げて大技を発動させる体勢へと移っていた。

サトシ「ミジユマル!【ハイドロポンプ】だ!!?」

ミジュマル「ミジュマ!!!」

大きな水流を巻き上げたミジュマルはそれを一気にコイキング目掛けて放水された。

リーリエ「【はねる】です!!?」

コイキング「ココツ!!?」

リーリエ「【とびはねる】!!?」

サトシ「迎え撃て!」【シエルブレード】!!?」

ミジュマル「ミジュ!!?」

巨大な水流を前に躲したコイキングはそのまま空中落下を加えたスピードでミジュマルに向かって突進して行く。それを迎え撃つようにしてミジュマルは攻撃を仕掛けた。

二体の攻撃力は互角である。ぶつかり合うその衝撃によりお互いは吹き飛ばされてしまった。

マオ「相打ち!」

マーマネ「どっちが立ってるの?」

水面に浮かび上がった二体を見た審判のコールにより試合終了のアナウンスが流れた。

審判「コイキング戦闘不能!ミジュマルの勝ち!よって勝者はサトシ選手!」

サトシ「やったぜミジュマル!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ミジュマル「ミジュマ!!?」

バトルに勝利したミジュマルはサトシの胸の中へと流星の如く飛び込んでいった。ミジュマルの強烈な体当たりを受け止めたサトシはミジュマルの頑張りを褒めながら頭を撫でいく。コイキングもリーリエに抱えながらシロンとゼニガメのいる方へと戻っていった。

リーリエ「お疲れ様ですコイキング。良く頑張りましたね」

シロン「コン!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

コイキング「ココツ…」

バトルを終えたリーリエはサトシと一旦別れると、マオたちの方へ

と一人戻っていった。

マオ「お疲れリーリエ！惜しかったね」

カキ「だけど熱い試合だったぞ！」

リーリエ「はい。どの子も良く育てられていました。やっぱりサトシは強いです／＼」

その顔はバトルで負けた事よりもサトシとあれだけのバトルをする事が出来た喜びの方が強かった事を表していた。試合の勝ち負けだけでなく、負けた事から何かの経験を得た事の大切を知れる事が出来た様子からリーリエの成長の大きさを改めて知る事が出来たマオ達であった。

そして、遂に決勝戦のコールが知らされた。急いで観戦席へと座つたりリーリエはいまから出てくる二人のトレーナーにエールを送つた。うずまきカップ決勝戦。戦うのはもちろんこの二人だ。

サトシ「遠慮しないからな！カスミ！」

カスミ「あんたがどれ程成長したのか。確かめてあげるわ！」

『決勝戦！サトシ選手対カスミ選手！試合開始！！』

サトシ「ゼニガメ！君に決めた！！」

カスミ「私はこの子よ！行くのよニョロトノ！！」

ゼニガメ「ゼニツ！！？」

ニョロトノ「トニョロ」

試合開始と同時に二体のポケモンが繰り出された。サトシはカントー地方で知り合ってから長年の友達のゼニガメ。一方カスミはニョロモの頃にゲットして、今はニョロゾの分岐進化による最終形態のニョロトノをくりました。

サトシ「久しぶりだな！ニョロトノ！」

サトシの声に気づいたニョロトノは陽気なダンスを踊り始めた。かつて一緒に旅をしてきた旧友との再会に喜ぶゼニガメとニョロトノは挨拶がわりのこの技を放ち始めた。

サトシ「ゼニガメ！【みずてっぼう】だ！！？」

カスミ「ニョロトノ！【みずてっぼう】よ！！？」

打ち出された両者の水鉄砲はそのまま相殺された



サトシ「やるな！ゼニガメ！【こうそくスピン】だ!!？」

その水しぶきの中を滑走とゼニガメは甲羅に潜り高速回転しながらニヨロトノの方へと飛び出していった。

カスミ「ニヨロトノ！【おうふくビンタ】!!？」

ニヨロトノは突っ込んでくるゼニガメをそのまま弾き返した。返されたゼニガメは頭と四肢を甲羅から出すと、すぐに体勢を立て直した。浮島に無事に着地したゼニガメであったが、ニヨロトノは腕を組みながら鋭い目つきでゼニガメを睨みつけていた。

カスミ「【いばる】よ!!？」

ニヨロトノ「トニヨ!!？」

ゼニガメ「ゼニ？」

サトシ「ゼニガメ!!!」

カキ「ゼニガメはどうしたんだ？」

ロトム『【いばる】によって混乱してしまっているロト!!？」』

混乱し千鳥足になるゼニガメをサトシは必死で呼びかけるも正気が戻る気配がなかった。そこへ空かさずニヨロトノの攻撃が襲いかかってきた。

サトシ「しっかりしろゼニガメ！」

カスミ「ニヨロトノ！【みずてっぽう】!!？」

直撃を受けたゼニガメはそのままプールの方へと投げ飛ばされた。同じ水タイプ同士でも混乱状態に陥ってしまった分、完全に相手に主導権を握らせてしまった。その上相手は水タイプのジムリーダー。長年の付き合いでもあるカスミの強さやポケモン達のレベルの高さはよく知っている。常に綱渡りをしているかのような戦いに気を抜けてはいけないのだ。

サトシ「ゼニガメ！【ハイドロポンプ】だ!!？」

混乱状態は決してトレーナーの声を完全に遮断させる事ではない。そのため何度も呼びかける必要はあったが、力の籠ったサトシの声はゼニガメの耳へと届いた。瞬時にゼニガメは甲羅の中へと体を引っ込め始めた。

サトシと長年の付き合いであるカスミもサトシの強さやポケモン

達のレベルの高さ。そして信頼度の高さは誰よりも知っている。混乱させただけで安心しきっていなかったカスミはすぐにニヨロトノを構えさせた。高速回転させた甲羅の四方向から激しい水流が巻き上げられた。だが、声は届くも狙いが定まらないゼニガメの技はニヨロトノとは外れた方へと向かってしまった。

カスミ「闇雲にやっても意味ないわよ！」

サトシ「狙いはニヨロトノじゃないぜ！」

サトシの狙いは別にあつた。外れた「ハイドロポンプ」は天高く巻き上げられると、そのまま滝のようにゼニガメへと浴びせられた。水を被ったゼニガメは濡れた顔を拭うと鋭い眼でニヨロトノへと向けた。混乱状態から見事抜け出させる事ができたのはその目を見れば分かつていた。

マーマネ「混乱が解けた！」

マオ「まさか自分に「ハイドロポンプ」を浴びさせて目を覚まさせたっていうの!?!？」

カキ「無茶苦茶な事を考えるな。こう上手く行くもんでもないだろう！」

と言いつつもカキ達も彼なら自分たちも驚かせる戦術をやってくれるだろうとは期待していた。強さやレベルに信頼度。何よりもサトシと対戦して怖いのは常人には考えられない土壇場での発想力だ。

カスミ「ニヨロトノ! 【とびはねる】 よ!!?。」

サトシ「ゼニガメ! 【ロケットずつき】 だ!!?。」

高くジャンプしたニヨロトノはそのままゼニガメに向けて急降下しだした。そんなニヨロトノに向かってゼニガメも力一杯エネルギーを頭部へと貯め始めると、そのままロケットのように相手目掛けて突っ込んで行った。

両者の技が激突する。落下の加速分のパワーが加わっているニヨロトノが有利だと思えるが、一つの誤算がこの勝敗を左右させた。それはゼニガメの攻撃力が上がっているという事だ。

カスミ「あつ! ニヨロトノ!!!」

【いばる】の追加効果により攻撃力が上がった【ロケットずつき】は

そのままニョロトノの【とびはねる】を押しつけながら吹き飛ばした。強烈な一撃に叩きつけられたニョロトノはその場でダウンしてしまった。

審判「ニョロトノ戦闘不能！ゼニガメの勝ち！」

カスミ「やるわねサトシ！」

サトシ「まあな！さあ次来いカスミ！」

次のポケモンを出そうとカスミがモンスターボールを投げようとした瞬間、突如プールの中から大きなメカが現れた。

カスミ「何なの!!」

メカの登場に驚くも頭部のコックピットが開くと、その中からまたしてもいつもの二人が姿を現した。

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ！特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!？」

またしても現れた二人組。だが、サトシとカスミにとっては久々の登場を前に驚いていた。

サトシ・カスミ「ヤマト!!!コサンジ!!!」

コサブロウ「違う！だからコサブロウだって行ってるだろ!!!」

カスミ「どうでもいい奴の名前なんて覚えることはないわ！」

コサブロウ「…そんなはつきり言わなくても…」

ヤマト「もう構うことはないわ！さっさと出場トレーナーのポケモンたちを根こそぎ頂くわよ！」

カスミの一言に胸が突き刺さり落ち込むコサブロウを宥めるようにヤマトはコサブロウの声をかけた。立ち直らせたコサブロウを引っ張ってヤマトと一緒にメカの中へと戻っていった。

サトシ「させるか！ピカチュウ！【10万ボルト】!!?ゼニガメ！【みずてっぼう】だ!!?」

カスミ「出てきてサニーゴ！【トゲキヤノン】よ!!?」

ロケット団の目的が分かったサトシとカスミは一斉に攻撃を仕掛けた。突然のロケット団の登場に慌てて避難していく人達を避けながら観戦席にいたリーリエ達も急いでバトルフィールドの近くまで走って行った。

カキ「俺たちも行くぞ！バクガメス！【かえんほうしゃ】!!?ガラガラ！【ほねブーメラン】だ!!?」

マオ「アマイコ！【マジカルリーフ】!!?」

カキとマオ達の攻撃も加わるが、メカはとても頑丈に作られており、すべての攻撃を跳ね返してしまう。

スイレン「ダメ！効いてない！」

マーマネ「あのボディ固すぎる！」

コサブロウ「当たり前だ！この日のために有り金を全て使って作ったんだからな！」

ヤマト「今日という今日は失敗するわけにはいかないわ！全てはサカキ様のために！」

メカの中から現れた複数のマジックハンドがリーリエ達のポケモン達に目掛けて飛んできた。

シロン「コーン!!!」

ゼニガメ「ゼニツ!!!」

リーリエ「シロン!!!ゼニガメ!!!」

捕まったシロンとゼニガメはメカに内蔵されたカプセルの中へと閉じ込められてしまった。二体を助けようと前に出たリーリエであったが、暴れまわるメカの振動によって起きた波に足場が揺らされてしまい、そのままプールの中へと足を踏み外してしまった。

リーリエ「きやあああ!!!」

マオ「リーリエ!!!」

コイキング「ココツ!!?」

リーリエ「……………」

水の中へと放り出されたリーリエはなんとか這い上がろうと必死にもがくも、嵐のように荒ぶる波の勢いに逆らえずどんどん呑み込まれてしまっていた。沖に上がろうと手を伸ばすリーリエの手の先に一体の黒い影が見えた。視界がぼやけているが薄っすらと見える赤いボディーに誰かはすぐに分かった。

コイキング「ココツ!!?」

リーリエを見つけたコイキングは必死に尾びれを掻き回しながら一刻も早くリーリエの元へと辿り着いた。急いでリーリエを抱えて戻ろうとするが、底へと引きずり込まうとする波が容赦無く襲いかかる。時間がない。空気の泡が漏れないように口を抑え込むリーリエの顔はみるみる青くなっていく。苦しそうにしているリーリエにコイキングは必死に泳ぎ続ける。だが…

リーリエ（ゴボツツ!!!）

コイキング「ココツ!!?」

身体を波に大きく揺さぶられてしまった事でその反動で全ての息を吐き出してしまった。そのまま気を失っていくリーリエにコイキングの焦らせる。そんなリーリエとコイキングを嘲笑うかのようにして波はどんどん光が届かぬ底へと引きずり込まうと襲いかかる。

カスミ「早くしないとリーリエが！」

サトシ「ゲッコウガ！頼っ……」

リーリエを助けるべくサトシは一つのモンスターボールを投げようとしたその時……

!!!ギャアアアアアアア!!!

水の中から神経を震えさせるほどの大きな鳴き声が会場内に響き渡った。何事だと辺りを見渡すと青白く光る水の中から一体のポケモンが姿を現した。

ロトム『ギャ……ギャラドスロト!!!』

サトシたちの目の前に現れたのは凶悪ポケモンのギャラドスであった。しかし、そのギャラドスはカスミのポケモンではなかった。みんなが釘付けに見つめるその先には、ギャラドスの青く長い三叉の角に跨っているリーリエの姿があった。

リーリエ「こ……ここ……は？」

気がついたリーリエは今の自分の状況を確認しようと辺りを見渡し始めた。リーリエが目覚めた事に気付いたギャラドスはその凶悪なイメージとかけ離れたような笑顔をリーリエへと向けた。

リーリエ「ギャラドス……もしかして！」

何処か漂う雰囲気は自然とリーリエに教えてあげていた。確信付いたリーリエはギャラドスに指示を出す。

リーリエ「ギャラドス！シロンとゼニガメを助けて下さい！」

ギャラドス「ギャア!!?」

リーリエの指示を聞いたギャラドスはロケット団の方へと向かっていく。その様子を見たマオ達も突然現れたギャラドスの正体がわかってきた。

マオ「まさか!!!」

スイレン「コイキング。進化したの！」

リーリエを助けたという一心で新たな姿を手にしたコイキング

：いやギャラドスは力一杯ロケット団のメカに向かって体当たりを仕掛けた。

ヤマト・コサブロウ「うわあああ!!!」

物凄いパワーに押されたメカは蹠踉めき出したその隙にシロン達  
が捕らわれていたカプセルをギャラドスは鋭い歯で噛み砕くと、粉々  
に砕けた中からシロン達はリーリエの元へと帰ってきた。

リーリエ「シロン！ゼニガメ！良かったです！」

シロン「コーン!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

シロン達の無事を確認したギャラドスは怒りを露わに鋭い目つき  
でロケット団を睨みつけた。自分の主人と仲間を傷つけたのであれ  
ば許すわけがない。

ヤマト「ねえ…これって」

コサブロウ「非常にまずい状況だよな…」

ギャラドスの凶悪なオーラに身震いするロケット団にギャラドス  
は強烈な雄叫びを上げ始めた。

リーリエ「ギャラドス！【りゅうのいかり】!!?」

ギャラドス「!!!ギャアアアアア!!!」

そのままギャラドスは青白い炎を吐き出すと、あつという間にメカ  
は包み込まれてしまった。そのままメカはその熱に耐えきれず、オー  
バーヒートを起こすと、そのまま大爆発を起こした。

ヤマト「よりによって進化するなんて!!!」

コサブロウ「ずるいぞ!!!」

ヤマト・コサブロ「やな気持ちいい!!!」

そのままロケット団はいつも通り空高くへと吹き飛ばされました。

??????????????

ロケット団の乱入もあつて、慌ただしくなつたうずまきカップも無事に閉会式を始めることができた。優勝商品の《しんぴのしずく》を手にサトシは満面の笑みを浮かべていた。

マオ「サトシ！優勝おめでとう！」

サトシ「まあね！」

カスミ「もうゲッコウガが強すぎよね。ねえ貴方！うちのジムに来ない？」

ゲッコウガ「コオウガ…」

サトシ「ダメに決まつてるだろ！」

カスミ「もう冗談よ！」

サトシの慌てぶりを見てみんなは思わず笑い出してしまった。

リーリエ「サトシ優勝おめでとう！」

サトシ「サンキュー！リーリエもギャラドスへの進化おめでとう！」

リーリエ「ありがとうございます！」

ギャラドス「ギャア♪」

優勝はできなかつたとしても、強くなりたいたいというギャラドスの背中を押すことが出来てリーリエも優勝したぐらいの嬉しさを表現した。そんなリーリエの背中を押し出してちよっかいを出すギャラドスと目を合わせた。

リーリエ「これからも宜しくね。ギャラドス」

ギャラドス「ギャア!!？」

それにギャラドスは水平線の彼方まで聞こえるような声を上げて返事を返した。

見事コイキングからギャラドスへと進化を遂げさせる事ができたリーリエ。そんな二人の冒険もこれからも続いていく。



### 第三十三話　デイグダの穴の荒くれ者

うずまきカップを終えた翌日、ハナダジムへと戻っていったカスミと別れたリーリエ達はクチバジムへと向かった。再戦との事もあって気合十分に臨んでいたはずだったのだが…

リーリエ「そうですか…残念でしたねシロン」

シロン「コン…」

ジムを訪れた境に門番をしていたジムトレーナーからマチスは急ぎの用でクチバジムを暫くの間、休館する事を知らされた。思わぬタイミングにやる気を漲らせていたリーリエとシロンは肩を落とした。ジムリーダーが不在であるならジム戦は出来ない。リーリエ達は今後について考えるべく再びポケモンセンターへと戻っていった。

サトシ・マーマネ「美味しい！」

スイレン「マオちゃん！これ美味しいよ！」

マオ「ありがとう！アイナ食堂の新作メニュー！みんなにこうして食べて貰えてよかった！」

お昼の時間までまだ早い、腹の虫が想像以上に鳴り響くサトシとマーマネの様子から昼食を取る事にした。食堂ではなく中庭に出たリーリエ達はマオが腕によりをかけた料理を無我夢中に頬張っている。

成長したのはリーリエだけではない。卒業後、店の手伝いをしながら料理の修行をしてきたマオも料理のレパートリーを増やしながらもいつかアローラで一番の店にするためべく奮闘していたのだ。

サトシ「マオ！このコロツケも凄んげー美味しいよ！」

パチリスのように頬を膨らませているサトシにマオは微笑みながらリーリエの方へと目をやった。

マオ「サトシ！それはリーリエが作ったんだよ」

サトシ「えっ!?? そうなの?」

リーリエ「あっ／＼はい！」

もつと女の子らしさを磨こうとマオに少しずつ料理を教わっていたリーリエが振舞ったコロツケを口の中に一杯に詰め込んだサトシ

は一気に食べきると改めて料理の感想を述べた。

サトシ「美味かったぞ！リーリエ！」

リーリエ「あ／／ありがとう／／」

初めて誰かのために作ったため、若干の不安があったが、サトシの率直な感想にリーリエは嬉しかった。

マーマネ「それでこれからどうするの？」

マチスが暫くの間、不在であるならクチバシテイに長居する理由はなかったため、リーリエ達は他のジムを巡ってから再度クチバジムに挑む事にした。そうなる、ロトムはカントーのマップを表示すると、此処からの最短ルートを計測し始めた。

ロトム『ここからなら、ヤマブキシテイかタمامシシテイが近い口ト！』

指定されたのは二つのルート。以前訪れたヤマブキシテイのジムと東西に位置するタمامシシテイのジムの二箇所だった。選択肢を設けられた事に悩むリーリエにサトシは口を開いた。

サトシ「だったらタمامシシテイのタمامシジムならどうだ？リーリエ！」

リーリエ「タمامシジムですか？」

サトシ「ああ！タمامシジムのエリカさんは草タイプの使い手なんだ。リーリエの今の手持ちからしてタمامシジムを相手に相性が良いからな！シロンもそうだろう！」

シロン「コン!!？」

草タイプ。確かにリーリエの手持ちの中でもそれと対等に戦えるポケモンはいる。一度ジム戦の敗北を覚えてしまっているポケモン達もいるため、再挑戦を兼ねて相性的に負担が見えないタمامシジムが良いのかもしれない。

サトシ「だけど、相性だけでどうにかなる試合は無いって事はリーリエもわかっているはずだ！旅をしながらしっかり対策を一緒に練って行こうぜ！」

ロトム『いつも無茶なバトルを仕掛けてるサトシが言うと言得力がない口ト！』

論破され顔を赤くするサトシにリーリエ達は笑ってしまった。相性だけで勝敗が決まる訳がない事は十分に分かっている。こうしてリーリエ達の次なる目的地はタマムシシティと決めたのだ。

今後の旅の目的を決めたリーリエ達は出発するべく後片付けを始めた。すると、どこからともなく地中から覗き込んできた一体のポケモンがリーリエ達の前へと現れた。それに連なるようにしてまた一体また一体と顔を出してきた。

マオ「何？この子達？」

アママイコ「アーマイ？」

スイレン「ポケモン？」

『デイグダ もぐらポケモン』

地面タイプ

暗いところを好む。ほとんど地中で過ごす。光の届かない洞窟の中ではよく顔を出している。デイグダが通った跡の大地は程よく耕されて最高の畑になると言われている』

『ダグトリオ もぐらポケモン』

地面タイプ

デイグダの進化系。凄い力の持ち主でどんなに硬い地面でも地下100キロまで掘り進んでいく事が出来る。三つの頭が互い違いに動くのは周りの土を柔らかくして掘りやすくするためでもある』

カキ「俺の：俺のカツラを被って下さい！」

ダグトリオ「ダグ？」

サトシ「こっちのダグトリオはツルツルなんだよ」

アローラのダグトリオと違って金色の髭が生えていない事に虚しさで涙を流すカキは自分が持つ金色のカツラをそっとダグトリオの頭に被せてあげた。何のことか分からない様子でいるダグトリオの前で号泣するカキをサトシはなだめ始めた。

デイグダ　　デイグダ　　ダグダグダグ

リーリエ「まるで歌を歌っているみたいですね！」

シロン「コーン!!？」

そんなデイグダ達の合唱会を眺めていると、こちらに向かって大きな笛音を鳴り響かせるジュンサーの姿が見えた。

ジュンサー「コラー!!! 貴方達止まりなさい！」

サトシのゼニガメ「ゼニガメガア!!？」

ジュンサーの声に気づいたデイグダ達は慌てて一目散に地中へと逃げて行った。

ジュンサー「逃げられちゃったわね」

サトシのゼニガメ「ゼニツ!!？」

サトシ「何があつたんですか！ジュンサーさん！」

ジュンサー「サトシ君。あのデイグダ達のお陰で大変な事になつて  
るの！」

~~~~~

カキ「なんだこれは…」

マーマネ「僕たちが今朝通りかかった時はこんな事になっていなかったよね！」

訳を聞いたリリーリエ達はジュンサーに連れられてポケモンセンターの外へと出てみると、地面が大きく掘り返されており至る所が穴だらけになっていた。朝見た違う風景に驚くリリーリエ達は突然現れたデイグダ達の姿が頭の中を過っていた。

デイグダやダグトリオは地下百キロまで掘り進んでしまうため、それが原因となり地盤が緩んで地震を引き起こしてしまう。この事態の大ききの深刻さを理解したリリーリエ達はジュンサーと協力してこの事件を突き止める事にした。各々に意見を述べ合う中、そんなリリーリエ達の後ろから一人の男性の声が聞こえた。

???「デイグダ達はここから近い洞穴に生息しているんだ。その洞穴は掘り進んで行ったデイグダ達によって造られたクチバシテイとニビシテイを繋げた地下通路となったんだ。それに更して、その洞穴は『デイグダの穴』と呼ばれるようになった」

自分たちに言っているか。その声に気づいたリリーリエ達はその方角へと振り返えてみると、スラツと立っていたその見覚えのある二人の人物の顔にリリーリエ達はその者達の名前を叫んだ。

ユーゴ「久しぶりだね。みんな」

リリーリエ「ユーゴさん!!!」

アイラ「ヤッホー♪サトシ！久しぶり！」

サトシ「アイラ!!!」

~~~~~

思わぬ再会にリリーリエ達は自然とユーゴとアイラの元へと向かっ

た。アローラ祭で行われた団体戦で二人の強さの貫禄を感じたり、リエ達は向かい合うだけでも緊張が走ってきた。そんな中、何を言えば分からないリーリエ達の前に出たサトシは事情を知っている素振りを見せる二人に訳を聞き始めた。

サトシ「つまり：ユーゴさんにもダークポケモンの調査を…」

アイラ「そう！彼の实力は天下一品よ！加入理由なんて聞くまでもないわ！」

話を聞くとアローラ祭が終わった後、実際に戦ってユーゴの強さを知ったアイラはすぐに彼にもダークポケモン調査の依頼を頼みに行ったそう。サトシと出会った時と比べると、ダークポケモンの存在を他言せず、協力を要請しなかったアイラからしてその行動に疑問を浮かべていた。

アイラ「それと：サトシ君♪」

サトシ「??？」

そんなサトシに和かに近づいていくアイラは彼に向かって顔を覗かせた。その笑顔の裏に黒いオーラが漂わせながらだ

アイラ「ダークポケモンの事は内密にしてと言ったよね。なのにどうしてあの子達に喋っちゃった訳？」

ダークポケモンの存在を言わない事を約束していた事もあってサトシはそんなアイラから少し目線を逸らした。弁解の余地を与えないと言わんばかりかアイラは殺気を忍ばせた笑顔を向けると距離を詰めてきた。ユーゴにも協力を要請した自分はもうなんだと思っただが約束は約束だ。

サトシ「違うんだよアイラ。リーリエ達も無関係とは行かなくなっただよ」

サトシの言葉にアイラは少し顔を歪めると、詳しくサトシの話に耳を傾けた。ダークオーラが見える。それも裸眼でとの事もありアイラは少し考え事を始めた。

オーレを救った英雄の仲間にと似た眼を持つ少女もいるとの情報もある。また裸眼でダークオーラが見える淡い金髪の少女がいるとの知らせを受けていた事を思い出したアイラはリーリエの姿を

確認した。

アイラ「確かに前にアランが言っていた通りね」

サトシ「アランを知ってるの!?!?」

アイラ「同じダークポケモン調査隊員よ!当たり前じゃない!」

アローラ祭でもアランと親しげにしていた様子を見ていた事もあり、ダークオーラが見える少女はリーリエである事に間違いはない。

アイラ「その話が本当なら…見せてくれない」

リーリエ「見せるって…何をですか?」

アイラ「貴方が捕獲したとおもわれるダークポケモンよ!」

そう言われるとリーリエはバックの中から一つのモンスターボールを取り出した。中から出てきたのはリーリエ達に背を向けては無愛想にこちらを見つめるズルズキンであった。

ズルズキン「ズツ…」

ズルズキンが現れるとアイラはすぐに調べ始めた。ダークオーラは完全に消滅している事がわかったアイラはそのままズルズキンの様子を観察し始めた。特に何とも思わないズルズキンはそのままそっぽを向くと静かに居眠りを始めた。その態度にリーリエは注意するも聞く耳を立てようとしなかった。

マオ「あはは…」

マーマネ「ズルズキン…全くリーリエの言うこと聞いてくれてないんだよね」

若干、空気が怪しくなったと感じたマオとマーマネは急いでフロアに回った。しかし、その二人の発言によりアイラは疑いの眼をリーリエの方へと向けてしまった。

アイラ「貴方…本当にダークオーラを見たの?」

リーリエ「えっ…」

アイラ「ダークオーラはね。心を許したトレーナーと一緒にいる事でその閉ざされた心の扉を解放させてあげることができるリライブっていう解除法があるの。何も特別な事をしていなければ、貴方のズルズキンがダークオーラから解放されるのはその方法しかないはずなのに…どうしてズルズキンは貴方に懐いていないの?」

リーリエ「そ…それは」

オツキミ山でダークオーラを纏わせていたズルズキンを見た事もあの時に放っていた技がダーク技だとしたら説明はつく。自分が見た物に間違いはないと分かっているが、その証拠がない。ダークポケモンについて完全に理解をしている訳でもないため反論ができなかった。俯くリーリエに飽きたアイラは頭を掻き始めた。

アイラ「ただの見間違いよ。手懐けられてないそのズルズキンの愛想の悪さからそう目に写ったんじゃないの？」

すると突然に身体中から電気が走った様な感じにサトシ達は襲われた。電気タイプのポケモンによるものではない。その原因がわかったサトシ達はみんな揃ってリーリエの方へと視線を向けた。アイラの一言に逆鱗が振れたリーリエの目は死んだ魚のように冷たい目をしていった。その嫌な感じにシロンも恐る恐るリーリエから離れながら嫌な汗を少し流していた。

リーリエ「自分のポケモンと心を通わせられていない原因は主人であるわたくしにあります。初めてお会いした貴方にズルズキンの事を悪く言われる筋合いはありません！」

リーリエが怒った理由はズルズキンの事を悪く言ってくれたことだった。自分に懐かないポケモンであっても、大切な仲間である事に変わりないリーリエにとってはそれは自分の事を悪く言われるよりも許さない事であった。

アイラ「ふーん。見た感じ貴方と仲良くなれそうな気配なんてーミリも感じないけどね〜」

リーリエ「そうやって貴方みたいに直ぐに見切りをつけるような事はしませんので心配しなくとも大丈夫です！」

アイラ「心配じゃなくて忠告ですよ〜！」

リーリエ「あーそうですか！あーそうですか！お気遣い頂きありがとうございます！ありがとうございます！」

サトシ「落ち着け二人とも！」

エスカレートしていくリーリエとアイラの口論の間に入ったサト





ない洞窟の中だ。多人数で戦闘が始まれば、野生ポケモン達も大騒ぎになってしまおうし周りの窪みに衝撃が走って、落石の恐れもあって危険だ。洞窟にはスナッチボールを所持している俺とアイラとサトシ君で探索に入って、残りのみんなは散り散りになってしまったデイグ達達の保護に回ってもらいたい」

ロトム『ユーゴさんの言う通りロト。相手は得体の知れないダークポケモン。何にも知らないマオ達が行っては返っては足手纏いになるだけロト!!?』

冷静なユーゴの指示にみんなはすぐに頷いた。洞窟の異変もあるが、パニックになって街を荒らすデイグ達も放っては置けないのも事実だからだ。

マオ「分かりました!」

カキ「お任せください!」

そう承諾したサトシを除いたアローラのみんなはクチバシテイへと戻ろうとした。その矢先、リーリエは自分呼び止めるアイラの声に反応し立ち止まった。

アイラ「貴方も来て」

リーリエ「わ…わたくしも!!!」

アイラ「無関係ではないのでしょうか」

リーリエ「……………」

疑いの目を向けたアイラの目にリーリエは無言のまま了解の意を表した。こうして、サトシ・リーリエ・アイラ・ユーゴの四名はデイグダの穴へと足を踏み入れた。

~~~~~

デイグダの穴の出口はニビシテイへと続いているため抜け穴として通路に使用されたりもする。そのためランプが設備されているが、その全てが消灯している。何者かが意図的に消したのか分からないが、デイグダ達が暴れ出したのと何か関係があるかもしれないと思う。薄暗さに怯えるシロンとゼニガメを抱えながらあまり慣れないデコボコした地面を歩いていく。その覚束ない様子を見たアイラは一体のポケモンをモンスターボールから解き放った。

アイラ「ルクシオ〔フラッシュ〕!!?」

ルクシオ「シオ!!?」

アイラのルクシオによる蛍光が辺り一面を照らした。これで視界が良くなった四人は迷わず奥へと探索する事が出来るようになった。地下水脈が滴る音だけが鳴り響く様な静けさに四人の警戒心は強くなる。その証拠にある気配に気づいた四人は一斉に地面の下へと視線を向けた。

サトシ「ダークポケモンかもしれない。気をつけろよ!」

ピカチュウ「ピカピカ!!?」

その気配にピカチュウにシロン。サトシのゼニガメと消防団のゼニガメが四方八方に囲む中心から一体のポケモンが飛び出した。

ナツクラ「デイグ!!?」

ユーゴ「なんだ：デイグダ達か」

アイラ「何よ：脅かさないでよ」

デイグダの登場に安心した一同であったが、何処となく慌ただしい様子に嫌な気を感じた。そんなデイグダにピカチュウは話しかけた。

デイグダ「デイグダ!!?」

ピカチュウ「ピカ!!?」

デイグダ「デイク!!?」

サトシのゼニガメ「ガアメ!!?」

シロン「コーン!!?」

ピカチュウ達の声に不安がっていたデイグダの顔から笑顔が戻った。怖い思いはあったが、それよりも洞窟の中へと進むリーリエ達が心配であったのかもしれない。そんなデイグダにリーリエはデイグ

ダと目線を合わせようと前に歩いていくと、そのまましゃがみ込み始めた。

リーリエ「ありがとうデイグダ。ですけど心配しなくても大丈夫です。貴方が暮らしたこの場はわたくし達が必ず取り返してみせます！」

その言葉に元気を貰ったデイグダは小さく歌い始めた。その声にシロン達も思わずその場ではしゃぎ始めた。緊張感や不安から解放されたデイグダの様子を見たアイラはリーリエの行動に驚いた。原因を片付ければデイグダ達の生活は元には戻る。だけど、事件は解決してもデイグダ達の心の傷は解決されないままに終わる。それを考慮した上での行動では無いかもしいないが、それを自然とやるリーリエの心の温かさにアイラは感心を持ったのだ。

アイラ「大人しく見えて大した自身ね！」

リーリエ「えへへ／＼」

そう照れ臭そうになると、突然と地響きが起こり始めた。持ち堪えなければ倒れてしまう大きな揺れの中、デイグダとは別のポケモンが急にリーリエ達の目の前に現れた。

!!!ドリュウユウウウウウ!!!

両腕と頭に装備されている鋼の様な硬いボディを身につけるそのポケモンはリーリエ達の前へと現れた。

サトシ「あいつはドリュウズ！」

ピカチュウ「ピツカ!!?」

『ドリュウズ ちていポケモン』

地面・鋼タイプ

鋼に進化したドリルは鉄板をも砕いてしまう破壊力を持っている。

トンネル工事では大活躍する』

リーリエ「あっ!!!」

サトシ「どうしたんだリーリエ!」

ドリュウズのデータを解説し終わったその時、ドリュウズを見つめたリーリエは何かを思い出したかのような声を上げた。その様子を見たアイラはすぐにオーラサーチャーでドリュウズをスキヤリングし始めた。スキヤリングし終えたアイラは驚くようにしてリーリエの方へともう一度振り返った。

『ビビッ!研究所の時にアップデートして貰ったオーラサーチャーが反応しているロト!』

「それが反応しているって事は…」

研究所から出発する前の日にククイ博士から新しくバックアップされた事によりダークポケモンのオーラ感知出来るようになったロトムはドリュウズをダークポケモンと認定した。モンスターボールを片手に身構える四人はドリュウズの背後に潜む怪しい影を見つけた。薄暗い洞窟の中でははつきりとその顔は見えなかったが、アイラのルクシオの「フラッシュ」が眩く辺りを照らす範囲を広げた。今度のははつきりと見えたその顔にリーリエは思い出したかのように眼を見開いた。

サトシ「誰だお前ら!」

ヘボイ「hey!さすらいのミラーボの兄貴の名前を知らないなんて飛んだ時代遅れも居たもんだな!トロイ!」

トロイ「そうだな!ヘボイ!オーレではその名を知らない奴なんて

いないぜ！」

サトシの返答に対し茶化すようにして答える二人のゴロツキの後ろにいるアフロヘアーが特徴的な人物は前へと出た。間違いはなかった。ダークポケモンを扱うトレーナーの一人、ミラーボだった。ミラーボ「落ち着きなさい。あんた達！あら？どこかの誰かと思っただけど、久しぶりねホワイトちゃん」

リーリエ「……………」

ミラーボはリーリエを見つけると手を振りながら和かに挨拶をした。その挨拶に対しリーリエは返す気もならず、ただあの時の光景を思い出しながら冷や汗を流してはミラーボを睨みつけるようにして見つめていた。

サトシ「知ってるのか？」

ロトム『あいつらはダークカイリユウの時にいた奴らロト！』

アイラ「ミラーボ……」

聞き覚えのあるその名前にアイラは声荒げた。

アイラ「あんた！元シャドー幹部の一人よね！」

ミラーボ「んく私の名前どころか組織の名を知っている所、あんた国際警察か何か？まあ、これから痛い目に会う奴に説明しても意味ないわよね！ドリユウズ！やっておしまい！」

ドリユウズ「ドリユウズ!!!」

鉄のように硬い両腕の鉤爪を大きく広げると、大きく身構え始めた。戦闘に入るもそのドリユウズの目からは誠意というものが感じ取れなかった。命令のまま、ただ目の前の相手を叩き潰す事しか見れない悲しい眼をしていた。

ドリユウズを助けるべくリーリエはモンスターボールを取り出した。

リーリエ「出てきて下さい！ヒノアラシ!!!」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

鋼タイプの弱点となる炎タイプのヒノアラシを繰り出したリーリエに続いてサトシも踏み込んだ。

サトシ「なら俺もだ。行けえ！マグマラシ!!!」

マグマラシ「マグツ!!？」

その進化系のマグマラシを繰り出すと、二体は背中から猛烈な火柱を立て始めた。力強く燃え上がるその炎に怯むことなく睨みつけるドリユウズにヒノアラシとマグマラシも負けじと睨み返した。

サトシ・リーリエ「【かえんほうしゃ】!!？」

指示を聞いた二体は高くジャンプすると、ドリユウズに向けて火炎放射が放たれた。ダブルで放たれた炎はまるで巨大な生物のように大きく揺らめきながらドリユウズの方へと迫っていった。

ミラーボ「ドリユウズ! 【ドリルライナー】!!？」

そんなドリユウズも大きく回転し始めるとそのまま火炎放射を振り払いながら一直線に二体に向かって走っていった。

サトシ「マグマラシ! 【つばめがえし】だ!!？」

リーリエ「ヒノアラシ! 【ニトロチャージ】です!!？」

接近して行くドリユウズに向かって二体も一斉になって飛びかかって行った。しかし、ドリユウズの殺気立つ猛烈なパワーに二体はいとも簡単に弾き返されてしまった。

マグマラシ「マグウウ!!!」

ヒノアラシ「ヒノオオ!!!」

二体の同時攻撃をも押し返すそのパワーに圧巻される。いとも簡単に吹き飛ばされた二体は何か持ち堪える事に成功したが、早くも息が上がっていた。

アイラ「私も! 出て来てバジャー……」

トロイ「おっと! お前らは俺たちが相手しやるぜ! そうだよな! へ  
ボイ!」

へボイ「その通りだぜ! トロイ! 兄貴のような華麗なバトル見せてやるぜ!」

押されているリーリエとサトシを見たアイラも助太刀に向かおうとするも、ミラーボを慕うゴロツキの二人に行く手を阻まれてしまった。

ユーゴ「あつちはリーリエさん達に任せよう」

アイラ「分かったわ! 行くよルクシオ!」

ルクシオ「シオツ!!?」

ダークポケモンを前にすぐに向かいたい気持ちを抑えたアイラはサトシとリーリエに任せて自分のバトルに集中し始めた。

リーリエ「シロン!【こごえるかぜ】!!?」

シロン「コーン!!?」

体を悴ませる冷気を浴びるドリユウズの動きが鈍くなる隙にサトシのゼニガメの攻撃が加わる。

サトシ「よしゼニガメ!【ハイドロポンプ】だ!!?」

ゼニガメ「ガアメエ!!?」

スクリュー回転したゼニガメは大きな水流を巻き上げながらドリユウズに向けて放たれた。しかし、ダークポケモンの力を侮るなど言わんばかりミラーボは回避の指示ではなく攻撃の指示を送った。

ミラーボ「ドリユウズ!回っちゃって!回っちゃって」

ダンスのリズムに合わせてベイゴマのように体を回転させると、黒いオーラを纏う大きな竜巻を巻き起こした。とてつもない威力を肌で感じたサトシは過信でも自惚れでもない力に圧倒された。

リーリエ「あの技!カイリユウも使っていました!!」

ロトム『この技は【ダークストーム】!!?威力は最強クラスロト!!?』

ドリユウズ「ドリユウユ!!」

ダーク技最強との名の通りにドリユウズの技はゼニガメの【ハイドロポンプ】を簡単に打ち消した。範囲を広げて向かってくる竜巻に対して、狭い洞窟内で躲す場所や隙間はない。ここは総攻撃で相殺させるしかない。

サトシ「ピカチュウ!【10万ボルト】!!?マグマラシ!【ふんか】

!!?ゼニガメ【ハイドロポンプ】だ!!?」

リーリエ「シロン!【れいとうビーム】!!?ゼニガメ!【みずてつぽう】!!?ヒノアラシ!【かえんほうしゃ】です!!?」

一斉に繰り出されたピカチュウ達の攻撃はドリユウズの技とぶつかり合うと、なんとか相殺させる事が出来た。衝撃で生み出された爆風に吹き飛ばされそうになった。



サトシ「大丈夫かリーリエ！」

リーリエ「はい！」

ミラーボ「休んでいる暇なんてないわよ！ドリュウズ！【じしん】攻撃よ!!？」

ふらついた身体をなんとか起こしたサトシとリーリエだが、ドリュウズが起こした地震にさらに蹠踉めいてしまった。大きく揺れ始める大地を掘り起こすようにして地震波が攻撃エネルギーとして此方へと向かって来た。

サトシ・リーリエ「避け『ろ』て!!!」

しかし、体勢を保つのに精一杯だったため、一足判断が遅れてしまった。前方にいたヒノアラシとマグマラシにドリュウズの攻撃が命中してしまった。炎タイプの二体には大きなダメージとなりその場で倒れてしまった。

サトシ「戻れマグマラシ!!!」

リーリエ「ヒノアラシ！戻って下さい!!!」

戦闘不能となった二体を戻すと、ピカチュウやシロンは代わって前へと出た。ドリュウズは爪研ぎにおける金属音を鳴らしながら威嚇し始める。まだ体力には自信がありそうなドリュウズにシロン達では二が重い。ここはあのドリュウズと互角に渡れるパワーを持ったポケモンが良いと判断したリーリエは別のモンスターボールを取り出した。

リーリエ「出て来てください！ズルズキン！」

ハナダシテイ以来、バトルをしてこなかったがもう彼に頼るしかない。大丈夫だと自分に言い聞かせたリーリエは指示を出した。

リーリエ「ズルズキン！【からてチョップ】です!!？」

力一杯送った指示であったが…

ズルズキン「zzzz」

ミラーボ「あららくその子お眠りタイムの時間らしいわよ」

ズルズキンは夢の中にいたその状況にミラーボに小馬鹿にされてしまった。まだダメだったと落ち込むリーリエであったが、すぐに切り替えてシロン達に指示を送った。

サトシ「ピカチュウ！【エレキネット】!!?ゼニガメ！【ハイドロポンプ】だ!!?」

ピカチュウ「チュウ!!?」

ゼニガメ「ガアメガ!!?」

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】!!?ゼニガメ！【みずてつぼう】!!?」

シロン「コン!!?」

ゼニガメ「ゼニ!!?」

攻撃を放つその瞬間、ミラーボの合図によってドリユウズは大きな雲を形成させ始めた。黒紫色に浮かぶ気味の悪い雲から矢のように黒紫色の雨が降り始めた。その雨に打たれたシロン達には鋭いダメージが入ると、攻撃が止まってしまった。

ロトム『これは…【ダークウエザー】ロト!!?』

【ダークウエザー】天候系の技と同様。ダークポケモン以外にダメージを与えて、ダーク技を大幅に強化させる技だ。

サトシ「みんな!!」

ミラーボ「ダークポケモン！最強♪止めよドリユウズ！【ダークストーム】!!?」

ドリユウズ「ドリユウズ!!!」

再び回転し始めたドリユウズはまた大きな竜巻を作り出した。それも【ダークウエザー】の追加エネルギーを蓄えているため、さつきよりも大きくなっていった。あれを喰らえば間違いない戦闘不能にさせられてしまう予感が二人の脳裏に過る。万事休すかと思つたその時、ドリユウズは足元を捕られたかのように蹠踉めき出すと回転させる体勢を止めてしまうまつた。

ミラーボ「ちよつと何が起きたのよ」

いきなりドリユウズの攻撃が止まってしまった事に意味がわからなくなったミラーボはドリユウズの片足が地面にはまっている事に気づいた。硬い地面の上ではこんな事態になる訳がなく頭を抱えていると、一体のポケモンがミラーボの足元に出てくる。

デイグダ「デイグ!!?」

一体のデイグダが顔を出すと、それ続いて他のデイグダやダグトリオがどんだん地面から姿を現した。そしてさらに地面を掘り返し始めると、巻き起こる砂嵐でそのままミラーボとドリユウズを渦の中へと閉じ込めた。

ロトム『これはデイグダ達の「すなじごく」ロト!!?』

デイグダ達のおかげでドリユウズの動きを止めたその隙を逃す訳にはいかない。一斉にサトシとリーリエは反撃に出た。

サトシ「デイグダ達が動きを止めてくれている今がチャンスだ！出てこいガマガル！【ちようおんぱ】だ!!?」

ガマガル「ガアマ!!?」

出て来たガマガルによる音波でまずはドリユウズの動きをさらに鈍らせた。大音波に頭を強く振るわせられたドリユウズは混乱へと落ちてしまった。そんなドリユウズにサトシはさらにドリユウズの動きを封じ始めた。

サトシ「今度はドリユウズの足元に【マッドショット】!!?」

ガマガル「ガアルマ!!?」

泥団子のように丸まった泥をドリユウズの足元に命中させた。

サトシ「リーリエ頼む！」

リーリエ「はい！ゼニガメ！【みずてつぼう】!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

さらに泥が塗られた足に水を掛けられたことにより、水を吸った泥はさらに重くなった。その重みに足を捕られたドリユウズは大きく前方の方へと身体が倒れてしまった。

サトシ「ゼニガメ！ガマガル！【ハイドロポンプ】だ!!?」

リーリエ「ゼニガメ！【みずてつぼう】!!?」

ドリユウズ「ドリユウユウ!!」

激しい水流を浴びさせられたドリユウズはそのまま後方へと吹き飛ばされてしまった。このピンチに憤りを感じたミラーボは残りのモンスターボールの中からポケモンを追加した。

ミラーボ「こうなったらあんた達も出て来なさい!!!」

ルンパツパ「ルンパアア!!!」

一気に飛び出した五体のルンパツパはそのままリーリエ達の方へと飛び出した。

サトシ「リーリエ！」

ロトム『危ないロト!!?』

その内の一体がリーリエとの距離を詰めて来た。咄嗟にリーリエの前に出たシロンも守るべく身構えた。ルンパツパの拳が振りかざされるその瞬間、別の何かがリーリエに迫るルンパツパを殴り吹き飛ばした。自分の後ろから飛び出して来たそのポケモンに目をやった。

ズルズキン「ズツキイ!!?」

リーリエ「ズルズキン…」

シロン「コン…」

リーリエを守ったズルズキンはさらに「あくのはどう」でルンパツパ達に攻撃を始めた。ズルズキンのパワーにルンパツパ達は返り討ちになってしまった。さらに終わることなく今度は五体纏めて空中へと浮かび上げられてしまった。

ミラーボ「何よ！」

見た感じエスパー技による「サイコネシス」みたいだった。サトシとリーリエは後ろへと向くと、そこにユーゴとキツネポケモンのマフオクシーが立っていた。

ユーゴ「そのまま押さつけろ。マフオクシー」

マフオクシー「フオクシー!!?」

五体のポケモンをサイコパワーで止めたその力を前にミラーボは嫌な予感が次第に込み上げてきた。下っ端のゴロツキもユーゴとアキラに惨敗し抜け殻状態になっているため、助けを求める事も出来なかった。

サトシ「一気に畳み掛けるぞリーリエ！」

リーリエ「はい！」

サトシとリーリエ。そして二人の手元にあるZリングを見たユーゴも彼らと同じように自身のZリングも輝かせ始めた。

リーリエ「天から静かに降り注ぐ雪。無数に煌めく氷の結晶。熱き我がソウルとともに。今再び 天へと昇れ！」

Zパワーがシロンに集まると一気にそのパワーを解放させた。

リーリエ「レイジングシオフリーズ!!!」

サトシ「ちようぜつらせんれんげき!!!」

ユーゴ「ダイナミックフルフレイム!!!」

三体によるZ技がドリユウズとルンパツパ達に向かつて解き放たれた。あまりの威力にドリユウズが起こした地震とは比べものにならない衝撃波がミラーボ達を襲った。

サトシ「行つけ!スナッチボール!!!」

その攻撃を前に立つ事が出来ないの言うまでもなかった。戦闘不能になったドリユウズに向けてサトシはスナッチボールを取り出した。

サトシ「ドリユウズ!スナッチだぜ!」

ピカチュウ「ピツピカチュウ!!?」

リーリエ「良かったです!」

サトシ「みんなもありがとな!」

ドリユウズを無事にスナッチ出来た事に成功した。サトシの一言にピカチュウ達だけでなくデイグダ達も喜んでいた。

ミラーボ「きいいい!!!何よ何よ!こんなの卑怯よ!ひ・きよ・うく!!!」

ユーゴ「おっと!忘れもんですよ!」

マフオクシー「フオク!!?」

トロイ・ヘボイ「ぎよえええ!!!」

せかせかと逃げるように退散したミラーボに向けてマフオクシーのサイコパワーによってトロイとヘボイを投げつけた。

ミラーボ「覚えておきなさいよおおおお!」

二人の下っ端にぶつかかったミラーボもそのままロケット団のやなぎ感じみたいに洞窟の奥へと消えて行ってしまった。

~~~~~

ジュンサー「みんな大丈夫だった！」

サトシ「みんな無事です。それと捕獲したダークドリユウズです」  
ジュンサー「分かりました。私が責任を持って国際本部へとお送りします」

デイグダの穴を抜けたサトシ達はジュンサーにダークドリユウズを預けた。散り散りになったデイグダとダグトリオを集めたマオ達からリーリエ達の状態を説明してくれた事で自分達も加勢に来てくれ事を後から話を聞いた。ボロボロになっているお互いの姿を確認したリーリエ達は今回の勝利を喜んだ。

アイラ「リーリエちゃん!!!」

リーリエ「ア／＼アイラさん!!!」

そんなリーリエにアイラは思いっきり抱きついて来た。何のことかと混乱するリーリエの両肩を掴むとアイラと目が合った。

アイラ「まだトレーナーになったばかりなのに凄かったよ！それと……いろいろときつく当たって……御免……」

リーリエ「そんな……ダークポケモンの事をあまり知らないわたくしの発言でアイラさんを困らせてしまいました……本当に御免なさい！」  
大人気ない発言にリーリエとアイラは改めて謝罪をした。そしてさらにリーリエは続いた。

リーリエ「此処まで関わって分かったことは……ダークポケモン達の強さは本物である事。そして、その示威はトレーナーとの信頼関係から生まれるものではない事です。心を壊してまでも得られるその強さに意味なんかありません。そんなポケモンを道具として生み出している人達の事をわたくしも許せません」

それはアイラの苦しみを考慮したと述べる一文だった。ダークポケモンの強さに惚れ込む人達も少なからずいる中でリーリエはダークポケモンの存在そのものを否定した。その力強い目をしたトレーナーに出会いたいと心の何処かで思っていたアイラは少しの涙を流した。

アイラ「ありがとうりーリエ。貴方のような優しい人だからズルズ  
キンの心は解放されたんだと思うわ」

ダークポケモンの恐ろしさ。それを作り出した身勝手な人間の好  
奇心。その苦しみにより溢れ出るその涙を忘れてはいけないのだ。

~~~~~

ユーゴとアイラと別れたりーリエ達は翌日の朝。りーリエ達は次  
の街へと出発しようとしていた。

りーリエ「それじゃあ、わたくし達は次の街へと向かいます」

ジュンサー「気をつけてね。それから色々ありがとう。りーリエ  
さんはこれからの

ジム戦頑張つてね！」

りーリエ「はい！」

サトシ「ゼニガメ！これからもしつかりな！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

ゼニガメ「ゼニゼニ!!？」

りーリエ「ゼニガメも消防団のお仕事。これからも頑張つて下さい  
ね」

ゼニガメ「ゼニツ…」

それぞれの別れを告げるとりーリエ達はクチバシティを後にした。  
その後ろ姿を寂しげに見つめるゼニガメにサトシのゼニガメが彼ら  
の方へと指差した。かつて自分も同じ思いをした。そんなゼニガメ  
の気持ちを汲んであげたいのだ。リーダーとしてサトシのゼニガメ  
はジュンサーの方へと目をやると、その合図に笑顔で返した。

ジュンサー「いいわよ。行つてらしゃいゼニガメ！」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

ジュンサー「これからリーリエさんの事を助けてあげてね!」

その一言に笑顔を取り戻したゼニガメはリーリエ達の方へと歩いて行った。でも連れて行って貰えるのか。心配になったりしてその足は覚束ない。

すると、その足を止めるリーリエ達を見てゼニガメもその場で立ち止まった。不安の中でゼニガメの目に映ったのは嬉しそうに此方を見つめたリーリエの笑顔だった。

リーリエ「一緒に行きませんか!」

シロン「コーン!!?」

その言葉にゼニガメはリーリエの胸の中へと飛び込んだ。

リーリエ「これからよろしくお願いね」

ゼニガメ「ゼニツ」

リーリエ「ゼニガメ!ゲットです!」

シロン「コーン!!?」

マオ「やったねリーリエ!」

スイレン「新しい仲間が増えたねアシマリ」

アシマリ「アウ!!?」

マーマネ「こんなゲットあり」

カキ「ありだよ。あり」

サトシ「そうだぜ!なあピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

デイグダの穴の騒動が無事に解決し、リーリエは新たにゼニガメを仲間に加えた。新たな仲間と共にリーリエのポケモンリーグへの挑戦のためクチバシティを後にする。次に目指すはタママシティだ。



??? 「スナッチボールを使う三人のトレーナーとダークオーラが視える一人のトレーナーっと！要注意人物であると報告しなきゃねえ〜」  
その旅立つリーリエ達を見る人影。タマムシジム挑戦の前にその人物と対峙する事になることをこの時のリーリエ達はまだ知らない。

### 第三十四話 育て屋の少女

次のジムがあるタمامシティを目指すリーリエ達。その途中で大きな地響きがリーリエ達を襲った。次第に此方に近づいてくると察したリーリエ達は慌てて辺りを見渡し始めてみると、こっちに向かって突進してくるの一つ大きな影が見えてきた。

??? 「誰か！止めてくれ!!!」

さらにその影を追いかける人物もリーリエ達に向かって走ってくる。その慌てた様子からリーリエ達はそのポケモンが何かしらの理由で混乱しているのだと把握した。

そしてリーリエ達に向かってくるそのポケモンとは…

サトシ「ケンタロスだ！」

マオ「こっちに来る！」

暴れ牛ポケモンのケンタロスだった。鬼の形相な顔で突然に迫ってきたためにリーリエ達は反射的に避けてしまった。ケンタロスは此方を見向きもせずそのまま走り去って行く。その後を追うケンタロスのトレーナーは体力が持たずそのまま膝をついてしまった。

スイレン「大丈夫ですか！」

カキ「しつかりして下さい！」

??? 「大丈夫だ！それよりもケンタロスが！」

自分のトレーナーの事を構わずに走り進んで行くケンタロス。そのままにしておけばここを通る人達や野生のポケモン。さらにはケンタロス自身にとっても大きな被害が出てしまう。こうなってしまうた事情を聞く前にリーリエはケンタロスを止めにかかった。

リーリエ「キモリ！ケンタロスを止めて下さい！」

キモリ「キヤモ!!？」

モンスターボールから出てきたキモリは木々をつたってケンタロスを追いかけて行った。忍者のように軽やかに走り進んでいくキモリはあつという間にケンタロスに追いつく事ができた。

しかし、問題となるのはどうやって止めるかだった。自分の手持ちの中で最も足の速いキモリを出したのだが、カントー地方のポケモン

の中でも最大の攻撃力を誇るケンタロスとの力の差は歴然でもあった。そう考えているとキモリは右掌をケンタロスに向けるとそこから常盤色のような濃い緑色をした靄を放つと向かってくるケンタロスを一瞬のうちに包み込ませた。

ケンタロス「モオ…モオウ…」

キモリの技に捕まったケンタロスは一気に疲れ始めるとその場で眠るように静止し始めた。

マーマネ「ケンタロスの動きが止まった」

サトシ「あの技は?!?」

ロトム『あれは相手の体力を吸い取る技【ギガドレイン】ロト!!?』  
リーリエ「キモリ…貴方はまた新しい技を…」

咄嗟に出たキモリの新しい技【ギガドレイン】により大人しくなったケンタロスを見た一同は急いでケンタロスの元へと向かった。

体力を吸い取る技であるが、キモリが威力を最小限に押さえてくれた事もあってケンタロスは特に目立った外傷が無く済むことが出来た。

ボーム「ケンタロスを止めてくれてありがとう。私はこの辺りで育て屋をしているボームと申します」

ボームによると買い出しの帰り道で鋭利な棘が並ぶ木の枝を危うく踏んでしまった事で驚いてしまったと言う。我を返したケンタロスも恥ずかしそうにしながら反省をしていた。

ボームはこの町外れで育て屋を経営していた。育て屋は主に都合により暫くの間、代わりにポケモン達の面倒を見て欲しいというお客様の代わりに預かってお世話する事が主体となっている仕事である。また、それだけでなくポケモンの卵の世話もしていると聞くとリーリエ達は興味を持ち始めた。

ボーム「もし興味があるのでしたら、見学に来ませんか?」

サトシ「えっ!」

スイレン「いいんですか!」

ボーム「ケンタロスを助けてくれたお礼ですよ」

ポケモンの卵の話題になり目を輝かせながら話すリーリエ達を見

てボームは自分が経営している育て屋にリーリエ達を招待した。勿論、全員一致でリーリエ達は言葉に甘えてお邪魔させて貰うことになった。

~~~~~

並木が並ぶ林のトンネルを抜けると、ここを訪れた人を歓迎するかのように一面に咲いている花畑の道が続いていた。そしてその先にある一軒家こそが育て屋を経営しているボームの家である。

家の周辺ではカントーのみならず様々な地方のポケモン達が楽しそうに穏やかに過ごしていた。

リーリエ「あの……このポケモン達はボームさん一人でお世話をしているのですか？」

ボーム「私だけじゃなく家内や娘も一緒さあ。確かに大変そうに見えるが何よりも私はポケモン達を育てあげる事に生きがいを持っているしこの職に誇りを持っている。不思議と辛いという感情は今までに思った事はないのですよ」

カキ「ええ、ポケモン達も生き生きと過ごされている。うちの実家は育て屋ではなく牧場を経営しているのですが、ポケモンのお世話をすると同じ職務についている自分としては感心するばかりです」

そう和かに話すボームを見て一番に感銘を受けたのはカキだった。カキの言った通りポケモン達はストレスもなく自由気ままに過ごしている。町外れに建てたのも自然豊かな環境の中で伸び伸びと自然に育ってもらいたいがためとボームは口にしていた。

ボーム「妻のエミリーだ」

エミリー「こんにちは。どうぞ中へ」

金髪の綺麗なセミロングヘアをした女性は年下のリーリエ達に對しても深々とお辞儀をすると中へと招き入れてくれた。エミリー

は見るからにして二十歳後半の女性のようでボームとは十歳以上も年が離れていた。髭を生やした中年親父のような風貌のボームの奥さんであると紹介された時は嘘だと一瞬頭を過ぎってしまったのは言わないでおこう：

暫く庭で過ごしているポケモン達を観察しているとボームはリーリ工達とある部屋へと案内した。その部屋にはある物が丁寧に保管されている部屋だった。それを見たりリーリ工達は懐かしさも交差してそれらに見惚れていた。

カキ「これはもしかして」

ボーム「ポケモンの卵です！全てこの育て屋から見つかった物なのです」

そこには様々な模様がプリントされた卵がぎつしりと何十個いや何百個も保管されていた。育て屋では稀にポケモン卵が見つかる事もあるらしい。

するとある一個の卵が微動だにしていると神々しく光を放って輝きだした。光終わるとそこには新しい命が誕生していた。初めて目に入る日の光を眩しそうに目を擦るプリンンの誕生をリーリ工達は祝福した。

サトシ「やった！」

マーマネ「産まれた！」

そんなプリンにピカチュウ達も挨拶しに近寄っていく。ピカチュウの後に続いて歩いていくアママイコ達の背中をシロンは呆然と眺めていた。シロンにとっては初めて目にする命の火が灯された光景でもあり、そんなシロンをリーリ工は抱きかかえた。

リーリエ「シロン。貴方もこうしてわたくしの元へと産まれてきたのですよ」

マオ「そうだよシロン！シロンが産まれてくるまでリーリエが一生懸命お世話してたんだよ！」

シロン「コン!!?！」

シロンとの出会いを懐かしそうに振り返るリーリエをある一人の少女が扉の陰から此方を覗いている事に気がついた。リーリエはふ

とその少女と目線が合うと、その少女は恥ずかしそうに顔が赤くすると顔を引っ返めてしまった。

リーリエ「こんにちは」

モネ「きゃっ！こ…こんにちは」

リーリエ「ごめんなさい。びっくりさせちゃったね」

モネ「ううん。大丈夫」

ピンクのワンピースに肩ぐらいの長さのセミロングヘアに赤いカチューシャをした少女にリーリエはゆっくりと近づいていくと、それに連れてピカチュウ達も近づいて行った。

シロン「コン!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

トゲデマル「モギユユ!!?」

元気よく挨拶をするピカチュウ達。しかしピカチュウ達を目にした途端、モネは後退りを始めた。自分たちから離れていくモネの様子に驚いたピカチュウ達はその場で立ち止まった。何かに怯える表情。それを見たリーリエは何かを察したようだ。

モネ「ポ…ポケモン…」

リーリエ「だ…大丈夫?」

その様子から確信したリーリエは落ち着かせようとモネの手を優しく取ろうとするが、怖くなったモネはそのまま走り去ってしまった。

スイレン「今の子は?」

ボーム「娘のモネです。時々、私の育て屋を手伝ってくれるのですが、あの子…ポケモンが怖くて触れないのです」

カキ「そうなんですか…」

モネが去った後を見つめるリーリエは何かを決心したような顔を浮かべると、そのままモネの跡を追っていった。

リーリエ「わたくし少し席を外しますね」

シロン「コン!!?」

モネの跡を走っていくリーリエの姿を見たサトシとマオは微笑ましく互いに見合わせた。

サトシ「あの子がほっとけなくなっただらうな」  
マオ「そうかもね」

~~~~~

リーリエも同じだった。ウツロイドの襲撃によりポケモンが怖くて触れなくなってしまった。今では昔の自分とは違う。サトシやシロンとの出会い。マオ達が背中を押してくれたお陰で、今ではカントー地方を旅する一人のトレーナーとして胸を張って歩く事ができた。だからポケモンが怖くて触れないという自分と同じ境遇に立ったモネをほっとけなくなっただのである。窓から庭で遊ぶポケモン達を眺めているモネを見つけると、リーリエは彼女の名前を呼んだ。

リーリエ「モネちゃん。少しいいですか」

モネに追いついたリーリエは彼女の背丈に合うようしゃがみ込むと、彼女の顔を覗き込んだ。そんなリーリエにモネは静かに頷いた。

リーリエ「わたくしはリーリエ。この子はパートナーのロコン。名前はシロンです」

シロン「コン!!?」

モネ「うわあ!白いロコンなんて初めて見た!」

ピタッ

シロン「コーン?」

モネ「……………御免なさい…」

リーリエ「謝ることはないよ。少しずつ慣れていけばいいのですからね」

夢中になってシロンに手を伸ばそうとした所を見ると、ポケモンには興味があるみたいだった。だけど過去のトラウマのせいでその先

へと踏み出す勇気が出ていないだけであった。

モネ「私もお姉ちゃんみたいに触れるように慣ればいいのになあ」  
落ち込むモネにリーリエは優しく語りかけた。

リーリエ「私もね。モネちゃんと一緒に昔、ポケモンに怖い思いをさせられちゃってね。シロンと出会う前はわたくしもポケモンが怖くて触れることが出来なかったのですよ」

モネ「えっ…：そうなの!?？」

初めて自分と同じ悩みを抱える人に出会った事でモネはここ一番の声を上げた。

モネ「でもお姉ちゃんは今はポケモントレーナー…：だよな?」

リーリエ「はい。ですけど、シロンが卵の時からお世話をしていく内に少しずつポケモン達と触れ合っていけるようになっていきました。前途多難な道であつたけど、モネちゃんもポケモン達と触れ合ってきたい気持ちがあれば触れるようになりますよ」

リーリエの一言にさっきまで雲がかかった表情を浮かべていたモネの顔に陽の光が射し込んだかのように明るくなった。

その後モネを連れてみんなの元へと戻たリーリエは産まれたばかりのププリンの健康診断を行なっているボームとそれを見ているサトシ達と合流した。診断が終わると、風船のように元気よく飛び跳ねるププリンを見て、モネは意を決心した。

モネ「お父さん!この子…：私が面倒みてみる。いいかな?」

ポケモンに近寄ろうともしなかったモネからの意外な言葉にボームとエミリーは二人して目を丸くした。娘の敬意にボームはモネの両肩に手を置いた。

ボーム「勿論だとも!しっかり頼むぞ!」

~~~~~



リーリエ「怖がらせないようにまずはこうやって目線の高さを合わせて話しかけてあげるといいですよ」

モネ「うん！」

とは言ったものの、やっぱりポケモンが怖い気持ちに負けてしまい、数秒で視線を逸らしてしまう。何かいい方法はないのかと模索していると、リーリエは昔にサトシが自分にやってくれたことを思い出した。

リーリエ「まずはシロンから行ってみましょうか！」

シロン「コン!!？」

モネ「よ…よろしく…お願いします」

勇気を振り絞って手を伸ばすも、あと一步の所でその手を引っ込めてしまった。人に慣れているポケモンであり、見た目からも愛くるしい口コンであるが、モネにはまだまだ厳しいようだ。

リーリエ「出てきてください。ゼニガメ！」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

リーリエ「すみませんゼニガメ。暫く殻の中に潜って頂けませんか？」

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

今度はゼニガメで試す事にしたリーリエはやはり目線が合うと身を竦んでしまう事が原因であると考えていた。頭や手足を甲羅の中へと引っ込めているこの状態なら、目と目が会うことはなく、下手に緊張を起こさなくて済むと考えた。まずはポケモンに慣れさせてあげる事が先決だ。

リーリエ「モネちゃん。これならどうですか？」

モネ「う…うん！」

頭の中でただの置物と自分に言い聞かせながら近づくモネ。再び手を伸ばすと、まだまだ戸惑う様子であったが、直ぐには引こうとせず、徐々にゼニガメの方へと手を伸ばしていた。あともう少し。あともう少し。指先が甲羅に触れそうになる瞬間。

ゼニガメ「ゼニツ!!？」

焦ったくなつたゼニガメは頭を出すと、無邪気に頭を撫でて貰おうとした。お転婆なゼニガメの突然の動きに驚いたモネはまた手を直ぐに引つ込めてしまった。作戦は失敗だ。

キモリ「……………」

モネ「……………」

リーリエ「もつと愛想良くして下さい…」

キモリ「キャモ…」

冷静なキモリならと思つたが、黙っていた方が逆に怖かつたようだ。怖がらせるつもりはないのだが、キモリも何故か腑に落ちない気持ちになつてしまった。

モネ「御免なさい…」

リーリエ「大丈夫ですよ！触れ合おうとする気持ちがあるだけでも大きな進歩ですよ！」

それでも自分の不甲斐なさに元気を無くしてしまった。リーリエはどうにかしようと考え始めると、窓から何者から家の中へと入ってくる気配を感じた。振り返ると、そのポケモンは大きな口を開いてリーリエとモネを威嚇していた。その様子からここで預かっているポケモンではなく、野生のポケモンであると察したリーリエはすぐにモネの手を引つ張ると自分の後ろへと下がらせた。

リーリエ「あれはアーボ！」

モネ「お姉ちゃん…」

二人の目の前に現れたのはへびポケモンのアーボだった。突然現れた野生ポケモンの襲撃にモネは恐怖の余りにリーリエのスカート裾をギュツと握りしめた。震えるその手をリーリエは優しく握つた。大丈夫とモネを安心させるようにして笑顔を見せると、シロン達を呼び集めた。

リーリエ「シロン！【こおりのつぶて】!!?。」

リーリエ「ゼニガメ！【アクアジェット】!!?。」

アーボが攻撃を始める前に先制を取ったシロンの氷の弾丸は見事にアーボに命中した。吹き飛ばされたアーボは立て続けに先制を取るゼニガメの攻撃を受けると、そのまま地面へと叩きつけられた。

リーリエ「今です！キモリ【ギガドレイン】!!？」

さらにキモリに体力を吸い取られてしまった事によりすっかり勢いを無くしたアーボはその場で救いを求めるかのように身を縮めてしまった。しかし怖がらせたその罪は重く許さなかったキモリは最後に「でんこうせっか」浴びさせるとアーボを窓の外へと吹き飛ばした。強烈な一撃を受けたアーボはそのまま林の中へと逃げ帰っていった。

リーリエ「大丈夫？モネちゃん…」

突然に怖い思いをしてしまったモネをリーリエは優しく語りかけた。小刻みに震えだすモネの姿に慌ただしくなるリーリエであったが、それは恐怖によるものではなかったみたいだ。

モネ「凄いい！カツコ良かったよお姉ちゃん！」

憧れをぶつけるような眼差しをリーリエに見せるとそのままシロン達の方にも目をやった。

モネ「アーボが襲ってきた時は怖かったけど、お姉ちゃんとシロン達を見てたら、そんなの吹き飛んじゃった！ありがとう！」

再びリーリエに顔を見せると元気よく笑顔を見せた。その様子にほっと胸を撫で下ろすと、何かに気づいたリーリエはふっと静かに笑みが溢れた。

リーリエ「同じようにモネちゃんにお礼を言いたい子がいるみたいですよ」

嬉しそうに喋るリーリエの姿を不思議そうに見つめるモネであったが、自分の腕に何かの感触があると気づくと、自分が抱き抱えている物に目をやった。それは今の自分では信じられない事だった。

プリン「ププツ!!？」

モネ「プリン！わ…私！触れてる！」

モネはアーボから守るように無意識に優しくプリンを抱き抱えている自分に驚いた。困惑しているモネにプリンは目線の高さを合わせてモネを覗き込むと、満面の笑みをかけてあげた。その優しい表情に下手に緊張が走らなくなったモネはプリンの暖かさを感じると、そのまま優しくプリンをぎゅっと抱きしめた。

腕の中にある小さな命はモネの心をさらに暖かく包み込ませた。ポケモンへの恐怖心が消えてププリンを優しく抱くそのモネの姿にリーリエも自分の事のように嬉しくなっていた。

~~~~~

翌朝、ボーム一家と別れの挨拶を交わし出発の準備に取り掛かるリーリエ達の姿があった。

ボーム「皆さん色々お手伝って頂いてありがとうございます。」

カキ「こちらこそ色々勉強させて貰いました」

スイレン「お世話になりました」

モネ「お姉ちゃん！私もポケモントレーナーになって、ジムにたくさん挑戦して、いつかお姉ちゃんみたいな強いトレーナーになるように頑張る！」

リーリエ「はい。楽しみにしてるからねモネちゃん！」

二人だけの約束を交わすと、何かを抱えて持つて来たエミリーはリーリエの前に立った。

エミリー「それとリーリエさん。お礼と言ってはなんですが…」

大きな布が被さった物を渡されたリーリエは受け取ると不思議そうにその布を取ってみた。それは大きなショーカーズであった。そしてその中には黄色い卵が一つその中に入っていた。そうポケモンの卵だった。

ボーム「大切に育ててあげてください」

リーリエ「ありがとうございます！」

お礼を言ったリーリエは目を輝かせながら懐かしそうにその卵を眺めた。

果たして一体どんなポケモンが産まれるのであろうか。そんな舞い上がる高揚感が溢れる中、リーリエ達はタマムシティへと出発したのであった。

### 第三十五話 行方不明の研究員

タمامシ。虹色。夢の色。虹色の大きな街

タمامシテイのポケモンセンターに着くとジョーイから至急にハンサムから連絡があると伝えられたサトシは一人、テレビ電話へと向かった。

ハンサム『ドリユウズの件はご苦労だったね。サトシ君』

サトシ「いえ、アイラとユーゴさん。それからリーリエ達の助けもあってこそです！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

サトシ「それとハンサムさん。急にどうしたんですか？」

サトシの疑問に答える前に悩むように眉間にシワを寄せるハンサムは一つ咳払いをし、話す姿勢を整えた。

ハンサム『うむ…実はオーレ地方から一人の研究員がカントー地方に来日される予定だったんだが、カントー行き船の乗船する連絡を貰ったのを最後に連絡が途絶えてしまったんだ』

サトシ「それって行方不明って事じゃ…」

ハンサム『うむ。もしかしたらシャドーと接触した可能性が高い。あいつらも下手に嗅ぎ回されたくはないからな』

そう言いつつハンサムは何かを探るかのよう胸ポケットに手を入れると、一枚の写真を取り出した。そこに写されていたのは白衣を着た男性だった。

ハンサム『クレイン所長。何を隠そうスナッチマシンやダークポケ

モンをリライブさせるリライブホールの開発者だ。もし足取りが見  
つかった際にはすぐに知らせてくれ』

サトシ「分かりました。ハンサムさんも気をつけて下さい」

ハンサムとの連絡を終えたサトシは伝えられた情報を整理し、リ  
リエ達の元へと戻って行った。

一方リリエ達はポケモンセンター内に設備されているバトル  
フィールドへと集まっていた。サトシがみんなと合流してみると、  
リリエは偶然にもクチバシテイ以来に再開したソウタとポケモン  
バトルを始めようとしていた。

カキ「それじゃあ始め!!!」

?リリエVSソウタ?

審判を任せられたカキのコールと同時にリリエとソウタはほぼ  
同時に一体目のポケモンをバトルフィールドへと放った。

リリエ「お願いします。ゼニガメ!」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

ソウタ「一丁かましてやろぜ。ピジョン!」

ピジョン「ピジヨ!!?」

リリエの一体目はクチバシテイで新たに仲間になったゼニガメ。  
ゲットばかりしたポケモンだが、うずまきカップなど手持ちではない  
時からリリエとは息の合うバトルを展開していた。

『ピジョン とりポケモン』

ノーマル・飛行タイプ

ポツポの進化系。広い縄張りを持っており、侵入する邪魔者は徹底  
的に突かれてしまう。とても視力が良くどんなに高い場所からでも  
獲物の動く姿を見分ける事が出来る』

ソウタの一体目に繰り出したピジョンは、リーリエが最初にゲットしようとしていたポッポの進化した姿である。ロトムの説通りピジョンは空高く舞い上がると、その鋭い目で監視するかのようになぜニガメの周りを飛んでいる。ピジョンの目つきに緊張感がジワジワと身体中を駆け巡ってくるゼニガメであったが、リーリエとアイコンタクトを交わし、気持ちを少しづつ落ち着かせた。

準備が出きた所でまずはソウタから指示でバトルが始まった。

ソウタ「【たいあたり】だ!!?」

ピジョン「ジョ!!?」

リーリエ「躲して【みずてつぼう】!!?」

翼を折り畳んだピジョンは低空姿勢のままゼニガメに向かって急降下を仕掛けた。ギリギリの所でピジョンの攻撃をゼニガメは左に転がるようにして躲した。

ゼニガメ「ゼニユウウ!!?」

ソウタ「【かぜおこし】で打ち消せ!!?」

ピジョン「ピジョ!!?」

攻撃が外れ距離を取るために再び上昇し始めたピジョンに向かってゼニガメは水鉄砲を放った。

一直線に空を切るような早さに躲すのは遅いと判断したソウタは攻撃を技をぶつけて相殺させる事を考えた。ピジョンは両翼を大きく拍手をするかのように羽ばたかせると、大きな風を巻き起こした。強烈な風は水鉄砲を打ち消すどころか、そのままゼニガメに襲いかかった。

風によって巻き上がった砂埃が攻撃と同時にゼニガメの視界を奪った。目に入らないように顔を下に埋めたゼニガメであったが、その様子を捕らえていたピジョンはそのまま急接近した。一瞬の隙をついたピジョンはゼニガメとの距離を見事に縮める事に成功した。

ソウタ「【つばさでうつ】だ!!?」

もう一度、翼を大きく広げた。ピジョンはそのままゼニガメへと振り落とした。しかし咄嗟の攻撃であつたにも関わらず、ゼニガメは消防団での訓練で身につけたその場での状況の判断力のおかげでリーリエの指示が無くとも、自らの意思でピジョンの攻撃を躲す事に成功した。

しかし、ただではおかなかつたピジョンはもう片方の翼も使つて、連続で「つばさでうつ」を攻撃を仕掛けて行つた。

リーリエ「頑張ってください。ゼニガメ！」

シロン「コーン!!?」

ソウタ「怯むなピジョン！攻め続ける！」

クチート「クチイ!!?」

両者による攻一心不乱な攻防にリーリエとソウタは声援を送つた。しかし、ピジョンの連続攻撃に足を取られたゼニガメはバランスを崩すと、ついにピジョンの攻撃がゼニガメの腹部に命中した。

ゼニガメ「ゼニイイイ!!!」

後ろへと大きく吹き飛ばされたゼニガメは地面に引きずられるかのようにして倒れ込んでしまった。だが、戦闘不能とまで持つて行けなかつたピジョンは最後の力を振り絞るかのようにして大空へと舞い上がった。ゼニガメの攻撃が届かないぐらい高く飛んだピジョンはそのまま翼を大きく広げて停止させると、ゼニガメに狙いを定め始めた。

ソウタ「今だ！【そらをとぶ】で決めろ!!?」

風のエネルギーを纏つた身体でピジョンは一気に急降下した。

ソウタ「貫つたぜ！」

渾身に込めた力でピジョンはゼニガメへと向かつていく。その迫力を前に焦りを感じるゼニガメにリーリエは指示を放つ。

リーリエ「ゼニガメ！【しろいきり】です!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

甲羅に籠つて横回転し始めたゼニガメはそのまま自分の身体を白い霧で包み込ませ始めた。バトルフィールド一面に広がる霧のせいでゼニガメの姿を見失つた。ピジョンは体勢を崩してしまった。



ソウタ「何いい!!!」

もう一度立て直そうと空へと舞い上がったピジョンであったが、白い霧の中からピジョンの背後へと何かが飛び出した。

リーリエ「今です!『アクアジェット』!!?」

ゼニガメ「ガアメエ!!?」

互いの姿が朧に写るほど充満された白い霧の中でも消防団で培った目ははつきりとその姿を捕らえていた。

ピジョン「ピジョヨ!!!」

ゼニガメの攻撃はピジョンの腹部を捕らえ急所に当たった。そのまま押し出すようにして地面へと叩きつけると、水しぶきが飛び散る中、目を回すピジョンの姿がそこにあった。

カキ「ピジョン戦闘不能!!!」

リーリエ「その調子です!ゼニガメ!」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

まずは一勝を得たリーリエとゼニガメは互いにガツポーズを交わした。

ソウタ「まだまだ!勝負はこれから!」

ピジョンを戻したソウタは二体目のポケモンを取り出した。

ソウタ「出てこい!アーボック!!!」

アーボック「シャーボック!!?」

ソウタの二体目は育て屋でリーリエ達を襲撃したアーボの進化系。コブラポケモンのアーボックだ。

『アーボック コブラポケモン

毒タイプ

アーボの進化系。恐ろしげなお腹の模様で相手を威嚇する。模様の種類は研究結果で6種類のパターンが確認されている』

試合開始されると、アーボックはその巨体に似合わないスピードでゼニガメへと急接近した。咄嗟の事に驚くゼニガメは身構えようとするも、凶鑑明記に合ったようにアーボックはお腹に描かれる模様を大きく身体を使って威嚇すると、その恐ろしさに思わず固まってしまった。

ソウタ「アーボック！【ポイズンテール】だ!!?」

アーボック「シャアア!!?」

ゼニガメ「ゼニイイ!!!」

毒状に帯びた尾で動けないゼニガメに向かって思いつき叩きつけた。吹き飛ばされるも何とか堪えたゼニガメはアーボックを睨みつけた。

リーリエ「ゼニガメ！【アクアジェット】!!?」

お返しにアーボックの方へと飛び込んだゼニガメであったが、その様子をアーボックはチョロリと舌を出しながらそのまま身構え始めた。

ソウタ「そこだ！【どろばくだん】!!?」

十分に引きつけた所でアーボックは泥の玉をゼニガメへと発砲した。顔に泥がへばりついたゼニガメは命中率を失いそのままアーボックよりも左に逸れた所で地面へと叩きつけられてしまった。

リーリエ「ゼニガメ!!!」

ソウタ「トドメの【ポイズンテール】だ!!?」

不地着したゼニガメに容赦なくアーボックの攻撃が襲いかかった。すぐにリーリエの指示が耳に入るも、泥で視界を奪われてしまったゼニガメは冷静さを取り戻すと事が出来ず、そのままアーボックの攻撃が決まった。

アーボック「シャアア!!?」

ゼニガメ「ゼニイイ!!!」

上空へと吹き飛ばされたゼニガメは毒のダメージも加わってしまい、そのまま地面へと思いつき叩きつけられてしまった。

カキ「ゼニガメ戦闘不能！」

ソウタ「やったぜ！アーボック！」  
アーボック「シヤア!!？」

勝ち星を取り返したソウタはアーボックと共にその場で喜んだ。

リーリエ「ゼニガメ。ゆっくり休んで下さい」

ゼニガメを戻したリーリエはアーボックとの体格差に渡り合えそうなポケモンをチョイスすると、そのポケモンが入ったモンスターボールを取り出した。

リーリエ「反撃です！ギャラドス!!!」

ギャラドス「ギャラ!!？」

飛び出したギャラドスもアーボックと同じように鋭い牙で威嚇し始めた。そんなギャラドスに負けじとアーボックも口から漏らす空気の音も加えて再びお腹の模様を広げて威嚇し返した。

リーリエ「ギャラドス！【たいあたり】!!？」

ソウタ「アーボック！【かみつく】!!？」

それぞれの指示に両者とも真っ向からぶつかり合った。

リーリエ「今度は【アクアテール】です!!？」

ソウタ「だったら【ポイズンテール】だ!!？」

さらに自分たちの巨体を生かした尾を振り回すと、再び両者の攻撃がぶつかり合った。水と毒のエネルギーが激しく交差し、そのまま連続攻撃による猛攻が始まった。

リーリエ「その調子です。ギャラドス！」

ソウタ「負けるな。アーボック！」

一歩も引かない二体は疲れが開始してもその尾を止めようとはしなかった。技を跳ね返したりしながら動きが鈍った隙を狙っては完璧に胴体へと攻撃を決めている。ダメージと疲れがどんどん重なり、体力と集中力が思った以上の早さで消費していく。

リーリエ「【りゅうのいかり】!!？」

ソウタ「【へドロばくだん】!!？」

猛攻を続けてきた二体は一歩下がると、次なる攻撃エネルギーを蓄え始めた。ほぼ同時に口から放射された青白い炎と毒々しいへドロがぶつかり合うとそのまま爆発した。

リーリエ・ソウタ「あっ!!」

爆発の反動で吹き飛ばされた二体はそのまま目を回していた。

カキ「ギャラドスとアーボック!共に戦闘不能!」

ソウタ「戻れ。アーボック!」

リーリエ「ありがとうございます。ギャラドス!」

相打ちにより残りポケモンは互いに二体。ソウタよりも先にモンスターボールを持ったリーリエは最後のポケモンを繰り出した。

リーリエ「キモリ!最後は貴方です!」

キモリ「キヤモ!!?」

空中に一回転し華麗に着地を決めたキモリはそのまま拳を前に出して戦闘体勢に入った。そのキモリの姿にさらに熱を燃やしたソウタはありつたけの大声でモンスターボールを放り投げた。

ソウタ「俺はカメックスだ!」

カメックス「ガアメ!!?」

ソウタが最後に繰り出したのはなんと甲羅に設置された二本の大砲が特徴的な大型のポケモン。カメックスであった。

スイレン「カメックス!カッコいい!!!」

ロトム『あの時のカメールが進化したロト!』

カントーの中でも最大の水系ポケモンを目にしてテーションが上がるスイレン。それに釣られるように身を乗り出したロトムは撮影を始めた。

『カメックス こうらポケモン

水タイプ

ゼニガメの最終進化系。甲羅の大砲から発射されるジェット水流は戦車並みの威力。その命中率は50メートル先の空き缶に当てるぐらいの正確さ。ピンチの時は甲羅に籠って身を守る』

マオ「だけど草タイプのキモリを相手に水タイプのカメックスつて。大丈夫なの!?!?」

ソウタ「俺のカメックスは最強のカメックスなんだ! 相性なんて俺たちの前では関係ないのさ!」

カメックス「ガアメエ!!?!」

最後はまさに攻撃と防御にも優れている非の打ち所がない相手だ。体格差も何倍もあるが、キモリのやる気に満ちた目を見ると不安は無かった。相性とキモリの武器であるスピードを生かした戦術で勝ちを取りに行く。

リーリエ「キモリ! 【ギガドレイン】です!!?!」

キモリ「キヤモ!!?!」

ソウタ「カメックス! 【ハイドロポンプ】で迎え撃て!!?!」

カメックス「ガアメエ!!?!」

キモリとカメックスは同時に攻撃を放った。だが最終進化系の攻撃力を前に歯が立たず、カメックスの攻撃はそのままキモリの技を打ち消すと、勢いが衰える事なくキモリの方へと激しい水流が襲いかかってきた。

その技をキモリは咄嗟の判断で躲す事に成功したが、その水流は地面に直撃すると激しい水しぶきと一緒に爆風によってキモリは吹き飛ばされてしまった。直撃した部分は大きく風化していた。カメックスの驚異的な力を見せられた瞬間であった。

ソウタ「次は【みずのはどう】だ!!?!」

リーリエ「躲してください!」

今度は微振動が加えられた水の玉が発射された。その攻撃に瞬時に気づいたリーリエの指示のおかげでキモリは高くジャンプをして躲す事が出来た。

リーリエ「【はたく】です!!?!」

ソウタ「【ロケットずつき】だ!!?」

尾を大きく振り回し始めたキモリはカメックスの頭部目掛けて攻撃を仕掛けた。そんなキモリに向かってカメックスも真つ向勝負をけしかけた。甲羅に潜って頭頂部にパワーを溜めると、ジェット噴射を利用してキモリに向かって突っ込んで行った。

キモリ「キャモ!!!」

カメックスの猛烈な突進にキモリは受け止められずに吹き飛ばされてしまった。

リーリエ「【あなをほる】です!!?」

地面に叩きつけられる前にリーリエはキモリに指示を出す。かろうじてリーリエの声が届いたキモリは空中でありながらも何とか体勢を立て直すと地面の中へと身を隠した。

ソウタ「気をつけるよカメックス!」

カメックス「ガアメエ!!?」

カメックスは地面に潜ったキモリを注意深く観察し始めた。一転して静まり返ったバトルフィールドに二人の緊張が走る。互いの出方を見るかのようにトレーナー同士の駆け引きが始まる。

リーリエ「今です!」

リーリエの指示にソウタとカメックスは大きく構えた。その瞬間にキモリはカメックスの背後から飛び出してきた。背を向いているカメックスに一撃を加えようと、再び尾を大きく回し始めたのであったが、それと一緒にカメックスはすぐに背後にいるキモリの方へと身体を向けた。

リーリエ「えっ!!?」

カメックスの思いもよらない行動に目を丸くしたリーリエにソウタは得意げに鼻の上を掻き始めた。

ソウタ「リーリエは注意深い性格してるからな!堂々と真つ正面から来るとは思ってたぜ!」

ソウタとカメックスはキモリの行動パターンとリーリエの考えている事をしっかりと把握していた。

行動が読まれたリーリエはすぐにキモリを自分の元へと戻そうと

するも遅かった。

ソウタ「カメックス！【ふぶき】だ!!?」

カメックス「ガアメエ!!?」

キモリ「キヤアモモ!!!」

リーリエ「あっ!!!」

猛烈な吹雪によってキモリはそのまま天高く吹き飛ばされてしまった。極寒の息吹に包まれたキモリはそのまま地面へと不地着した。

キモリ「キヤ…モ」

目を回しているキモリを見てカキは勝敗コールを言い渡した。

カキ「キモリ戦闘不能！カメックスの勝ち！よって勝者はソウタ！」

ソウタ「よっしやああ!!!」

クチート「クチイ!!?」

カメックス「ガアメエ!!?」

すぐにリーリエは戦闘不能になったキモリの元へと駆け出した。下唇噛み締めながら悔しそうにしているキモリの頭に優しく手を置いた。

リーリエ「良く頑張りましたね。キモリ」

シロン「コーン!!?」

キモリ「キヤモ…」

キモリはリーリエの顔を見てゆっくりと頷くとそのまま眠ってしまった。バトルの疲れが溜まったキモリをリーリエはモンスターボールの中へと戻した。

ポケモンセンターへ戻ると一同は手持ちのポケモン達をジョーイさんに預けては昼食バイキングへと向かった。いつの間にかコロツケの大食い大会のように頬袋を膨らませながら食べているソウタにロトムは口を開いた。

ロトム『勝てたから良かったもののソウタは攻撃技ばっかで力任せに突っ走り過ぎロト。ゼニガメの【しろいきり】のような補助技を上手く使いこなして行かないとこの先厳しくなるロト!!?』

今回の二人のバトルからロトムは自分なりの分析があった。「しろいきり」のような補助技を使って場を攪乱させたり、「あなをほる」で身を隠させては勝利への活路を考えて戦うリーリエに対し、ソウタは攻撃技で攻めに迫った戦い方をしていた。この世界にはアイラやユーゴのような強敵トレーナーが立ち塞がっている。ロトムはソウタのその戦い方に今後のバトルで通用していくのには難しいと思っていた。

ソウタ「わかってないなロトム。ポケモン達のレベルだけでなく、ポケモン達との強い信頼関係も築いている俺たちの前ではどんな厚い壁が立ち塞がるうとも押し切って切り開いていけるもんなんだよ。それに攻撃こそが最大の防御を生み出すんだ！ですよね。サトシさん！」

サトシ「おう！その通りだぜ！」

マーマネ「それ：無責任すぎない？サトシ」

だが、自信家のソウタはそんな心配はないと言わんばかりに胸を張る。自分を尊敬してくれている事にいい気がしたサトシもソウタの言い分に賛同する。突っ走る性格が似ている所があるのかもしれないが：

カキ「だが、暫く振りなのにこの短期間で良くカメックスまで進化させたよな」

ソウタとクチバシテイで別れから一週間しか流れていない。そう思うとまだカメールだった頃が懐かしいと思わせるぐらいの成長速度だ。その成長速度には驚かされるばかりだ。

ハナダシテイで初めて会ったあの日も旅立った日はサトルとカノンと同日であるのにもソウタはすぐにゼニガメを進化させていた。力任せの性格であるが、ソウタにはポケモンへの愛情への注ぎ方や育て方は新人離れた力を持っているのかもしれない。

ソウタ「当たり前前だ！俺たちは一分一秒無駄にしない主義だからな！これなら今度こそヤマブキジムの攻略出来るかもな！」

リーリエ「ヤマブキジムのジムリーダーの方は戻られたのですか？」



ソウタ「おうよ！だけど…やっぱ強いわ」

さらに自信満々に声を張るソウタからヤマブキジムにジムリーダーが戻った情報を知った。だが、そのソウタがまたもや敗北してしまった事にリーリエに不安が煽られた。自分よりも実力が高い相手を負かすさらに上にいるトレーナーの存在がリーリエの手に汗を握らせた。

サトシ「ナツメさんか。俺たちも結構苦戦させられたよな。ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ふと声を漏らしたサトシにリーリエ達はそこでのジム戦の事を聞き始めた。

スイレン「サトシはどうやってヤマブキジムに勝ったの?」

サトシ「そ…それは…その…そりや勿論!気合いだよ!気合い!」  
ピカチュウ「ピ…ピカピカ!!?」

ソウタ「やっぱ凄げえぜ!サトシさんは!俺たちも気合いを入れ直してまた挑戦するぞ!クチート!カメックス!」

クチート「クチイ!!?」

カメックス「ガアメエ!!?」

スイレンの質問に対して言葉を濁すサトシに疑問は持つが、様子からサトシもかなり苦戦させられた相手である事は何となくわかった。

~~~~~

昼食を済ませたリーリエ達は手持ちのポケモン達をジョーイさんに預けると、観光に出かけた。

ソウタ「何だよ!すぐに挑戦しに行かないのかよ!」

リーリエ「今朝に到着したばかりですからね。今日はゆっくり休ん

で明日挑戦しに行こうと思っていたのです！」

マオ「それにしても大きな街だよね」

マーマネ「ここだったら旅に必要な物。全部揃っちゃうよね」

サトシ「よし！今日はみんなでどっか遊びに行こうぜ！」

「!!!賛成!!!」

カントー最大の大都市とだけあって何処もかしこもお祭り並みの賑わいだった。ある程度の色々な娯楽施設を見て回っていると、サトシとマーマネは飲食店で大食い対決。カキとソウタはバトル施設。日が暮れるまで別行動をとる事になった。

そんな中、リリーエとマオは暫く辺りを歩いていると、ある建物に興味を持ったマオはリリーエを呼び止めた。

マオ「リリーエ！ここ入ってみようよ！」

マオが指したのは光り輝くイルミネーションが建物全体を覆っている施設だった。

リリーエ「ゲームセンターですね！何だかとっても面白そうです」  
アローラではあまり見かけない施設であって、外見の派手さから不思議とわくわくして来たリリーエはマオと一緒にゲームセンターの中へと入って行った。

ゲームセンターの中はスロットやカードなど色々なゲーム施設が並んでいた。さつそくゲームで使用するコインをそれぞれ10枚と課金したリリーエとマオはゲームを楽しんだ。暫く遊んでいると、カードで次々と勝ち星を手にしていくリリーエのコインが10枚から一気に500枚と膨れ上がっていた。ポケモンバトルでの読み合いの経験が生かされたのか、着々とコインを増やしていくリリーエの元へ一人のディーラーが近づいて来た。

ディーラー「随分とコインを集めましたねお客様。どうです!??景品交換のため換金致しましょうか？」

リリーエ「景品ですか？」

ディーラー「はい！トレーナーに必要な貴重な道具。さらには極めて珍しいポケモンなどもあります」

気さくに話しかけてきたディーラーは腰に付いているモンスター

ボールを取り出すと、その中から一体のポケモンが飛び出してきた。デイラー「例えば9999枚と集められれば、このポリゴンというポケモンと交換する事が出来ます。野生での生息確認はあまりされておらず、非常に珍しいポケモンなのですよ」

驚異のコインの枚数にリーリエとマオは目を丸くした。初めて実物を見たリーリエはポリゴンの方へと顔を覗かせると、ポリゴンから黒い靄が薄っすらと見えて来た。それを目にしたリーリエは思わず声を上げてしまった。

リーリエ「ダークポケモン!!!」

驚いたリーリエは秘密他言であった事を思い出すと、口を両手を抑えるが、既に遅かった。ましてやさつきまで気さくに話しかけてきたデイラーはその名を口にしたリーリエを見ては急に顔を強張らせた。

店員「まさか…お前達。国際警察の人間か!」

そう言うと、モンスターボールからドガースを繰り出したデイラーはドガースを使って建物を煙で充満させ始めた。火事かと勘違いした他の人達は大慌てで店の外へと飛び出していく。人の波に紛れて一緒に出ようとしたリーリエとマオであったが、他のデイラー達によつて身柄を拘束されてしまった。

リーリエ（ダークポケモンの事を知っているのだとしたら…）

マオ（この人たち…もしかしてシャドーとかいう連中なの!?）

嫌な予感を感じたリーリエとマオはそのままデイラーを装うシャドーに連行されてしまった。ロトムはサトシと一緒にいるため連絡が取れない。如何にかこの場を乗り切る手段を考えるもそんなに簡単に出てこない。

一人のシャドーの戦闘員がカレンダーの裏側に隠されていた怪しげなスイッチを押すと、地響きと一緒に地下へ繋がる階段が出現した。なす術なく手錠をかけられたリーリエとマオはそのまま地下へと連れていかれてしまった。

地下へと入ったリーリエとマオはそのまま奥の部屋へと押し込まれてしまった。

マオ「リーリエ大丈夫！」

リーリエ「わたくしは平気です！シロン達は？」

シロン「コーン!!？」

アママイコ「アママイ!!？」

お互いの安否の確認をとったのだが、身体の自由を奪われたとなればどうする事も出来ない。脱出の案が出てこず焦るリーリエとマオに不安が募っていく。

度重なるシャドーとの遭遇。それだけカントー地方にシャドーの魔の手が広まっている事を思い知る。

???「だ：誰だね。君たちは」

すると、何処からか自分達に語りかける声がある方へと目を向けると、暗闇に慣れた目に一人の男性が映った。

???「こんな子供にまで：なんて酷いことを！」

その男性もリーリエとマオに気づくと、悔しそうに唇を噛み締め始めた。

マオ「貴方は：誰なんですか!?!？」

恐怖で震えながら質問したマオに対して男性は怖がらせないように離れた位置で自分の名を言った。

クレイン「私はクレイン。オーレ地方でポケモンの研究をしている者だ」

クレイン：ポケモンセンターでサトシが話した行方不明となった研究員と同じ名前であった。その名を聞いたリーリエとマオはお互いに見合わせた。

クレイン「君たちはなんで奴らに捕まったんだ？見た所、素行の悪い子には見えないと思うけど」

その人物がクレインと確信したりーリエとマオはサトシが自分達に話した事を含めて別名し始めた。二人の話から事情を聞いたクレインも知っている事を話し始めた。

ここタムシシテイのゲームセンターは裏を返せば、シャドーが作り上げた地下へと繋がるカントー地方の最初のダークポケモン研究所である真実をぶつけられた。そしてダークポケモンの心を解放さ

せるリライブの第一研究員のクレインから逆に心を永遠に閉ざす研究を手伝わせられようとしていた事を話した。

クレイン「だから急がなければ…」

一通りの事を話したクレインは自分がこのまま本部へと連れていかれてはならないと、その場で立ち上がり始めると、脱出の糸口を考え始めた。

マオ「そうですけど…手錠されたままですらどうやって逃げたら…」

両腕の自由を奪われた状態ではなす術が無いと肩を落とす三人であつたが…

リーリエ「ん？」

自分の両腕に何かしらの違和感を感じたリーリエは少し腕を動かすと、手錠が外れる音と一緒に両腕の自由が効くようになった。

リーリエ「て…手錠が…」

自由になった両腕を見てはすぐにシロンの方へと目をやった。しかし当の本人であるシロンは自分ではないと首を横に振った。すると、リーリエと同じように自分の両腕にスライムのようなネットリした感触がしたマオは恐る恐る自分の両腕に目をやった。

すると、そこに映っていたのは金属のメットのような物を被っている銀色のスライムのような体形をしたポケモン？であつた。

マオ「何？この子達？」

クレイン博士「ポケモン…なのか？しかし、こんなポケモン今まで見た事ない」

知識が豊富なリーリエも研究員のクレインにも分からないナットを被った謎のポケモンはよく見ると複数存在していた。スライム状の身体で今度はマオとクレインの手錠にへばり付くとその部分を食べ始めた。リーリエに続いて自由の身になったマオとクレインもすぐにその場を立ち上がった。

リーリエ「何か何だか分かりませんが、助けてくれてありがとうございます」

怪我はないかお互いにチェックし終わると、リーリエはそのポケモン達にお礼を言おうとしたのだが…

リーリエ「いませんね…」

マオ「何だったんだろ…あの子達」

とつくにその謎のポケモンはリーリエ達の前から姿を消していた。クレイン所長「考えるのはここから出てからだ。さあ、行こう！」謎のポケモンの助けもあってリーリエ達は出口に向かつて走り出した。研究所内部は迷路のように枝分かれした道がいくつもあつたが、ここへ連れて来られた時の記憶を辿って迷う事なくエレベーターに辿り着いた。

しかし、辿り着いた直後、階段を降りてくる足跡が聞こえた。

シャドー「お前ら！一体どうやって外した！」

シャドー「ラブリーナ様！この者達です！」

降りてきたのはリーリエ達を連れ出したシャドーの戦闘員達。その中の一人の呼びかけに応じてシャドー戦闘員の中からピンク髪のポニーテールをした人物がゆっくりと姿を現した。そして、その人物は逃げ出すクレインを見つけると、少女のように無邪気に喋り始めた。

ラブリーナ「何々?!?ちよつと〜!何処行こつていうのよ〜」

そんなラブリーナに対して額の汗を拭いながらクレインは口を開いた。

クレイン所長「何度も言わせるな!君達シャドーの協力には応じない!」

ラブリーナ「もおう!聞き分け悪いんだから〜♪ダークポケモンの何が気に入らないのよ〜あんな強くてカッコいいの!〜!博士見る目無さすぎ〜♪」

気の無いギャル系口調の喋り方に下手に緊張感を持たずに済んだリーリエとマオはクレインを護るようにして前へ歩いて行った。

マオ「とにかく私たちはここから出て行かせて貰うからね!」

アママイコ「アーマイ!!?」

ラブリーナ「だ〜か〜ら〜!出て行くななんて聞いてないわよ〜!つてか、あんた達は誰?」

そんな二人にラブリーナは鋭い目つきで睨み返してきた。氷のよう

に冷たい視線がリーリエ達の胸へと突き刺さる。そんな凍てつく二人を嘲笑うように微笑むラブリナはさらに話を続けた。

ラブリナ「とにかくあんたに出て行つては困るのよ！リライブ不可能な究極のダークポケモン “XD001” を作り上げるためにね！」  
クレイン「ば…馬鹿を言うな！私がそんな事に手を貸す訳がないだろ！」

シャドーが起こしたオーレでの事蹟はクレインは痛いほど知っている。そんな悲劇の犠牲となったポケモン達の緩和ケアを行いながらリライブの開発に謹んでいた矢先に行われようとしているダークポケモン実験の勧誘に対して強く非難した。

そんなクレインを小馬鹿にするようにして苦笑し猛省しないシャドー戦闘員の様子にリーリエとマオにも憤りが募ってきた。

リーリエ「そんな恐ろしいことをなさるなんて言語道断です！」

マオ「あんた達！ポケモンを何だと思ってるの！」

三人からの叱責に耳が痛くなってきたラブリナは怠そうに天井へと視線を上げた。

ラブリナ「うるさいな…説教なんて聞きたくないのよね〜まあ、クレイン所長同様。この計画を聞いたあんた達二人も…ここから出すわけには行かないんだよ…ね！」

怠惰な様子から一気に戦闘体勢に切り替えたラブリナは二体のポケモンを繰り出した。

リーリエ「シロン！」

シロン「コン!!？」

マオ「アママイコ！」

アママイコ「アーマイ!!？」

そしてそれと同時にシロンとアママイコも前へと出た。他の戦闘員も応戦しようとするもラブリナはモンスターボールを投げようとするその手を止めた。ラブリナの余裕そうな態度にリーリエとマオはおもわず身構えた。

クレイン所長「二人とも気をつけてくれ」

他のシャドー戦闘員やミラーボの時とは明らかに違うオーラを纏

うラブリーナ。そんな彼女の實力が嵐のようにリーリエとマオに襲いかかろうとしていた。

クレイン所長「彼女は新生シャドーの幹部の一人だ！」  
一筋縄ではいかない初の幹部との対決が始まった。



### 第三十六話 幹部登場

タمامシシテイに到着したリーリエはマオと一緒にゲームセンターへと踏み入れた。だが、そこは静かにシャドーが建設していたカントー地方のダークポケモン研究所であった。そこで閉じ込められてしまったリーリエとマオが出会ったのはカントーへと来日される前に行方不明となっていたオーレ地方の研究員のクレイン所長であった。謎のポケモンの助けもあつて脱出を試みるリーリエ達の前に現れたのはシャドー幹部の一人、ラブリナであった。

ラブリナは早々とモンスターボールからアゲハントとラブカスを出した。登場した二体は大きく鳴き始めると、氷のような冷たい視線をリーリエ達に向けた。可愛らしいポケモンから想像できない表情がリーリエ達の胸を突き刺した。

対してリーリエは二体を相手にマオとタツクを組んで挑む事になった。余りバトルの経験の無いマオに悪の組織の人間と戦わせる負担を掛けたくはなかったのだが、シロン以外のポケモン達はみんなポケモンセンターに預けたまま外へと出たので、今手持ちにはシロンしか残っていないかったのだ。そんなマオも心配するリーリエを気遣うように笑顔を向けた。恐怖心を紛らわそうとするその笑顔に胸が痛くなるものシロンだけで二体を相手にするのも厳しいのもまた事実である。お願いする他がなかった。

そして、シロンとアママイコが前に出たと同時にバトルは始まった。相手の二体はその瞬間にラブリナの指示が無くともシロンとアママイコへと向かって勢い良く前進した。

ラブリナ「アゲハント！【いとをはく】!!?ラブカス！【みずてつぼう】!!?」

リーリエ・マオ「躲して!!!」

アゲハントとラブカスの攻撃をシロンとアママイコは左右対称に躲した。お互いに反対方面へと移動したシロン達の立ち位置を追ったリーリエとマオはすぐに攻撃技を指示した。

リーリエ「シロン！【こごえるかぜ】!!？」

マオ「アママイコ！【マジカルリーフ】!!？」

二体を挟み撃ちする様にして取り囲んだシロンの冷氣とアママイコの葉の刃がラブリナの二体のポケモンに放たれた。しかし、左右からの攻撃が飛んでくる物の空を飛ぶ事が出来るアゲハントはラブカスを抱えると真上へと飛び上がった。襲いかかってくる両方からの攻撃を寸前の所で躲したのだ。

攻撃を躲したアゲハントとラブカスはラブリナの合図でシロンとアママイコにそれぞれと対峙した。

リーリエ「わたくしはアゲハントをお相手します！」

マオ「ラブカスは私たちに任せて！」

睨みつけてくる二体にシロンとアママイコも身構え始めた。そんなシロン達の様子を見てリーリエ達にも緊張が走り出した。しかし、その一方で二人を相手にしているラブリナは何処と無く楽しそうに胸を張っていた。余裕そうな表情と絶対的な自信。相手の実力を過信してしまったリーリエ達は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなっ  
てしまっそうだった。

ラブリナ「【メロメロ】!!？」

反撃して来ないリーリエ達を見て、先にラブリナは二体に指示を出した。技を繰り出した二体は睨みつけるような表情から一変、愛くるしい表情で誘惑し始めた。

リーリエ（何で【メロメロ】を…）

マオ（確かこの技は同性には効かないよね）

相手の意図が読めずリーリエとマオはただ立ち尽くすしかなかった。すると、たくさんのハート型のエネルギー波を量産していったアゲハントとラブカスは今度はそのエネルギー波を一箇所に集め始めた。収集されたハート型のエネルギー波はその場で大きく膨張し始めた。だんだんと大きくなるハートはアゲハントとラブカスの姿を

遮る壁となつて現れた。

二体の姿を見失つて焦り始めたシロンとアママイコには大きな隙が出来てしまった。

ラブリナ「つばめがえし」!!? 「ハートスタンプ」!!?」

巨大なハートの壁の中から飛び出した二体はシロン達に向かつて攻撃を仕掛けた。中央に位置する大きなハートの壁の所為で二体の行動ルートが見えなかった。

シロン「コーン!!!」

アママイコ「アーマイ!!!」

二体の技を受けてしまったシロンとアママイコは後方へと吹き飛ばされる。だが、鋭い攻撃が刺さりながらも二体は根性で立ち上がった。「メモメモ」をあんな風に使ってくる戦略とポケモン達の技術にリーリエ達は固唾を飲んだ。

ラブリナ「アゲハント!」【ぎんいろのかぜ】!!? ラブカス【みずてつぼう】!!?」

容赦のない攻撃がシロン達に襲いかかる。

鱗粉を乗せた風とスパアーの様に刺す水流が放たれた。

リーリエ「シロン!」【れいとうビーム】!!?」

マオ「アママイコ!」【マジカルリーフ】!!?」

相手の攻撃にシロンとアママイコも技で押し返し始めた。交じり合った双方の技はそのまま銀色の鱗粉を巻き上げながら相殺された。ラブリナ「時間が無いわけだし一気に片付けるわよ。戻れアゲハント!」

紙吹雪のように舞い上がる鱗粉の中でラブリナはアゲハントを戻した。

ラブリナ「出てきな! エネコロロ!!!」

次にラブリナが繰り出したのはおすましポケモンのエネコロロだった。そのエネコロロの背後から漂う黒い靄を見たりーリエは静かにマオに知らせた。

リーリエ「マオ: ダークポケモンです」

マオ「わ: 分かった」

ダークポケモンと聞いたマオは慎重にアママイコにも注意を促した。マオの緊張で震えた声にアママイコも前にいるエネコロロに注意を払った。

ラブリナ「へえ〜スカウターなしで本当に見えちゃうんだ。まあ、そんな事はいいか♪」

毛並みを逆だてるエネコロロは技を繰り出す体勢へと切り替えた。ラブリナ「エネコロロ!」【ダークウェーブ】!!?:」

黒い火の玉のような攻撃を繰り出した。その技を咄嗟の判断で躲したシロンとアママイコはエネコロロとの距離を取った。

リーリエ「地面に「れいとうビーム」!!?:」

真つ正面からの対抗を避けたリーリエはシロンに次の事を指示した。床に思いつきり冷凍光線は放射すると、エネコロロが立っている所が瞬くうちに氷の床へと変わった。

滑る床に肉球を突き刺す冷感に覚束ない状態になっていた。エネコロロの行動を制御する事に成功したリーリエはZリングを飾した。

「天から静かに降り注ぐ雪」

「無数に煌めく氷の結晶」

「熱き我がソウルとともに」

「今再び 天へと昇れ!」

リーリエ「!!!レイジングジオフリーズ!!!」

シロン「!!!ココオオン!!!」

氷のZ技が物凄い威力とスピードでエネコロロへと放たれた。いくら素早さに自身が持つエネコロロでも氷の床の上では思うようには動けない。決まれば勝利。そう脳内に過ぎったのも束の間であった。

ラブリナ「エネコロロ!」【まもる】!!?:」

シロンのZ技を受ける直前にエネコロロは守りの壁を展開した。

そのまま巨大な冷凍光線に呑み込まれると、大きな氷の華に包まれた。全ての技のダメージや効果を無効化にしてきた【まもる】であっても、強大な乙技を完全に防ぐ事が出来なかったみたいだ。しかし、それだけで十分であった。後に爆散した氷の中から出てきたエネコロロは戦闘不能を免れる事が出来た。

ラブリナ「【ダークラッシュ】!!?」

乙技を使った事でかなりの体力の消耗が出てしまったシロンにエネコロロは鋭い爪に黒いオーラーを纏わせると、そのままシロンに襲いかかった。シロンを護るべく前に出たアママイコ諸共、激しい衝撃波と一緒に辺りを吹き飛ばした。

リーリエ・マオ「きやああああ!!」

リーリエとマオはあまりの衝撃波によって後ろへと吹き飛ばされてしまった。倒れ込んだ体を何とかして起こすと、急いでシロン達の方へと目を向けた。

シロン「コオ：ン」

リーリエ「シロン！」

煙が晴れたその先には、エネコロロの前足によって体を地面へと押しさえ込まれてしまっているシロンがいた。何とか足を払いのけようとするも、力が足りずに抜け出す事ができない。

ラブリナ「ラブカス！【いやしのはどう】!!?」

さらに追い討ちをかけるように、ラブカスの力によってエネコロロの体力は回復されてしまった。

ラブリナ「エネコロロ。留めを刺してあげて」

リーリエ「シロン!!!」

絶望的な状況の中、リーリエの叫びと一緒にアママイコはシロンの方へと走り出した。アママイコの決死の行動にマオも立ち上がる。

マオ「アママイコ！【おうふくビンタ】!!?」

シロンを押しさえている足に向かってアママイコは攻撃を仕掛ける。

ラブリナ「【ダークウェーブ】!!?」

しかし、エネコロロはそのまま黒い火の玉でアママイコを吹き飛ばした。立ち上がるもアママイコも体力の限界に近づいてきている。

マオ「アママイコ…」

シロンも動けず傷つくアママイコを見てマオはどうしたらいいのかわからなくなってしまう。混乱すればするほど、悪い方向へと頭が働いていく。徐々にマオの体力も削られていた。

ラブリナ「楽にしてあげて【ハートスタンプ】!!?」

ラブカス「ラツブツ!!?」

アママイコの頭上へと跳んだラブカスは落下の速度を利用した体当たりを仕掛けた。

ラブリナの声に反応したマオは我に帰った。ボロボロになっているアママイコにさらなる攻撃が襲いかかる。覚束ない足で懸命に立ち上がっているアママイコの姿を見たマオは呼びかけた。

マオ「アママイコ!!!」

アママイコ「アーマイ!!?」

悲痛が混じったマオの声に反応したアママイコは力を振り絞ってラブカスの攻撃を躲した。そして思いっきり地面へと叩きつけられたラブカス目掛けて、アママイコは渾身の力を込めた足で踏みつけた。力が入ったアママイコの攻撃はさらにラブカスを地面へとめり込んだ。コンクリート式の床が割れるほどの力にラブカスは戦闘不能となった。

クレイン博士「あれは…【ふみつけ】か」

マオ「アママイコ!」

今の攻撃でさらに蹠踉めいてきたアママイコはガツクリと足を落としてしまった。膝をつくアママイコは苦痛を和らげようと、アローラの時の思い出を思い始めた。

マオとの出会い。アイナ食堂での日々

そしてポケモンスクール



ラブリナ「エネコロロ! 【みだれひつかき】!!?」

マオ「【おうふくビンタ】!!?」

指示を貰ったエネコロロは耐えながらもすぐにアマージョの方へと飛び出した。鋭利な爪と強靱な拳の攻防が始まった。進化した事でエネコロロのパワーにも対応出来るようになったアマージョは攻めに攻めていく。

シャドー「ラ…ラブリナ様!」

嫌な感じがした戦闘員は焦るようにラブリナへと呼びかけるが、そんな隊員に対してラブリナは強く睨み付けた。ダークポケモンが負けるはずがない。そんな想いにも決着がやってきた。

エネコロロ「ニャアア!!!」

ラブリナ「!!!」

アマージョの攻防に押されたエネコロロはアマージョと距離を取った。ラブカスの回復技を与えて貰いながらも、エネコロロの体力は限界に達していた。

マオ「行くよ! アマージョ!」

Zリングを取り出したマオはアマージョの両手を取った。マオとアマージョの祈りを乗せたその技はエネコロロへと放たれた。

マオ「!!!ブルームシャインエクストラ!!!」

アマージョ「!!!アマージョ!!!」

一面花畑の固有結界が張られると、そのエネルギー波はエネコロロへと到達したと同時に満開に咲いた。花びらが舞い散る中、吹き飛ばされたエネコロロはそのまま地面へと叩きつけられた。

ラブリナ「あゝあ、ここまでみたいだね♪それじゃあ、みんな! 帰るよ〜」

戦闘不能寸前のエネコロロを見たラブリナは見捨てるようにして、リリーエ達に背を向けると、何処かへと行ってしまった。

クレイン博士「マオさん! これを!!!」

エネコロロの状態を見たクレインはあるものをマオへと渡した。受け取ったマオはそれが何かはすぐに分かった。ダウン寸前のエネコロロに向けてそれを投げ入れた。



マオ「お願い！スナッチボール!!!」

助けてあげたい気持ちを込めたスナッチボールへはエネコロコの腹部に命中した。スナッチボールに吸い込まれたエネコロコはそのまま納めること成功した。

リーリエ・マオ「!!!やった!!!」

戦いが終わったリーリエ達は急いでシロン達を抱き抱えると、ゲームセンターの外へと出た。外に出たリーリエ達は駆けつけていたジュンサーや国際警察と思わしき人達に保護された。この騒ぎに駆けつけたサトシ達と無事に合流する事が出来た。サトシ達の顔を見たりリーエとマオは安心からかその場で膝を落とすと、暫く動けない状態が続いた。

今回対面したシャドー幹部の一人ラブリナ。国際警察がこの場に駆けつけてくる事が無ければ彼女達は早々と退散する事はなかったであろう。そう考えると、本当にどうなっていたか。自分たちの運の良さに感謝するしかなかった。

この旅での数々のシャドーとの戦い。それらはまだ序章に過ぎなかった。

シャドーのさらなる脅威はまだ続いていく。

### 第三十七話 VSタمامシジム 苧環

ポケモンセンターでのその夜。ヤマブキジム攻略のためタمامシテイを跡にしたソウタを見送った後、リーリエはタمامシジム戦に向けての特訓を始めていた。

リーリエ「シロン！【こおりのつぶて】!!?」

シロン「コン!!?」

リーリエ「ヒノアラシは【ニトロチャージ】!!?ムクバードは【はがねのつばさ】!!?」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

ムクバード「ムツク!!?」

シロンから放たれた無数の氷の弾丸をヒノアラシは全身に炎を纏わせて防御を張り、ムクバードは硬化させた翼で次々に弾き返している。攻防を同時に鍛えていくトレニングに熱が入るリーリエ達をマオ達は遠くから見守っていた。

マオ「気合入ってるねリーリエ！」

スイレン「なんだって、リーリエの再スタートなんだからね！」

練習が一段落終えたシロン達を呼び寄せたとの同時にマオ達もリーリエの方へと歩いて行った。すると、カキは何処となくリーリエの釣れない表情が気になった。

カキ「どうした?」

その問いにリーリエは少し雲が掛かった表情で応えた。

リーリエ「ええ…久しぶりのジム戦って事もあって…変に緊張してきただけなのかも…しれません」

少しだけ身震いを立てるリーリエにサトシは静かに歩み寄った。

サトシ「不安がっているとシロン達にもその不安が伝わっちゃうぞリーリエ」

そっとリーリエの肩に手を置くとサトシは優しく笑いかけた。

サトシ「過去は過去だリーリエ！リーリエはこれまでシロン達と多くの戦いを積んできたんだ。その経験は絶対にリーリエ達の力になっっているはずだ！いつも通り楽しんでいけば大丈夫さ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

サトシとピカチュウの励ましてくれたおかげで気持ちが悪くなったリーリエにシロン達も静かに歩み寄った。明日のジム戦に向けてやる気の表情を見せると、その様子を見たリーリエに笑みが零れた。

リーリエ「ありがとうございます!明日のジム戦。このメンバーと一緒に生まれ変わったわたくし達をお見せします!皆さん!明日は頑張りましょう!」

リーリエの掛け声と共にシロン達も口を揃えて声を上げた。その気合の入った声はポケモンセンター内にいる多くの人達の耳にも入ったであろう。

~~~~~

ポケモンセンターを出たリーリエ達は通算で四番目となるタマムシジムの前に着いた。タマムシジムの内装は全面ガラス張りで中の様子はあらゆる種類の植物で溢れかえっていた。

マオ「うわあ!凄い!」

ロトム『まるで植物園だロト!!?』

マーマネ「そのジムのエキスパートによって造りは他のジムとは全然違うんだね」

クチバジムとは明らかに違うジムにマオ達も驚きの声を上げていた。扉の前に立つと、薄っすらと花の良い香りが漂ってきた。その香りに惹きつけられるかのようにリーリエ達はタマムシジムへと入っていくと、それに気づいた和服を着た一人の女性がリーリエ達の元へと向かった。

エリカ「挑戦者の方ですか？」

スイレン「あつ！エリカさん！」

エリカ「あら！貴方は昨日の！」

マオ「知ってるの？スイレン」

スイレン「うん！昨日の別行動の時に会ったんだ！」

サトシ「お久しぶりです。エリカさん」

エリカ「まあサトシ君。お久しぶりございます。ピカチュウも元気そうだなによりです」

ピカチュウ「チャア〜♪」

久しぶりにサトシとピカチュウに会ったエリカはピカチュウの顎を摩りながら挨拶を交わした。するとエリカの後ろに見えた影に目が止まったサトシは嬉しそうに声をかけた。

サトシ「おーい！クサイハナ！」

クサイハナ「クサア!!？」

このクサイハナはタマムシジムでサトシと仲良くなったポケモンだ。クサイハナは主に臭い匂いを撒き散らすと言われているが、それは身を守るための行為であって、心を許した人には悪臭を振り撒いたりはしないのだ。

リーリエ「ジム戦の申しをいただきたく存じます。アローラ地方から参りました。リーリエと申します。」

深々と頭を下げたリーリエを見てエリカはゆっくりと歩み寄った。リーリエの手を優しく取ると、頭を上げたリーリエと目が合うと和かに笑顔を交わした。

エリカ「アローラ地方のトレーナーの方が訪れてくれるなんて嬉しく思います。こちらこそ本日は宜しくお願い致します」

リーリエ「あつ：はい／／よ：宜しくお願い致します！」

気品で華麗な立ち振る舞いと対応に女性であるリーリエもその姿に見惚れてしまった。お互いに挨拶を交わした後、エリカはリーリエ達を連れてバトルフィールドへと案内した。その道中では色んな植物と色んな草ポケモン達が気持ち良さそうにしている様子が目に入るためか、自然の中にいるみたいで一瞬ここが建物の中であること

を忘れてしまいそうであった。

そして、生い茂る木々の洞窟を抜けたその先に一面の花畑に囲まれたバトルフィールドがリーリエ達の前に姿を現した。対戦するエリカとリーリエを除いて、サトシ達は観戦席の方へと移動した。

審判「ただいまより、ジムリーダーのエリカとチャレンジャーのリーリエによるタマムシジム、ジム戦を始めさせて頂きます。使用されるポケモンは三体。双方何方かのポケモンがすべて戦闘不能になりますとバトル終了となります。なお、ポケモンの交代はチャレンジャーの方のみ認められます。」

ジムリーダーであるエリカの手から先にモンスターボールが離れた。太陽の光に反射された事によりさらに輝きを放つモンスターボールの中からは大量の綿毛と一緒に一体のポケモンが飛び出した。

エリカ「参います！ワタツコ！」

ワタツコ「ワツタア!!？」

白い絨毯から姿を現したのは大きく広げた三つの綿毛が特徴的なポケモン。ワタツコだ。

サトシ「エリカさんの一番手はワタツコだ」

マオ「可愛い!!!」

初めて見る草タイプのポケモンにマオは有頂天になっていた。

『ワタツコ わたくさポケモン』

草・飛行タイプ

一度風に乗ってしまうと綿帽子を巧みに操って世界一周だってしてしまう。どんな風に煽られても綿毛を自由自在に操る事が出来る』

ロトムから基本情報を貰ったリーリエはそのワタツコに対抗でき  
そうなポケモンを一体選んだ

リーリエ「先鋒は任せました！お願いします！ムクバード！」

ムクバード「ムックバー!!？」

勢いよく飛び出したムクバードは自慢のスピードでワタツコの周  
りを滑空した。一周し終わると、ワタツコの真正面に立ち止まると翼  
を大きく広げた。

カキ「リーリエはムクバードか！」

マーマネ「頑張れリーリエ！」

どちらも空中を得意とするポケモン。

風に身を任せ、ムクバードもワタツコも静かに精神を研ぎ澄ませて  
いた。

いよいよ始まる。タمامシジム戦。

審判の手が上がると同時に、森が騒めき、花々の香りがリーリエの  
鼻を突き刺さした。大自然が広がる森の中にいるような清涼感が  
リーリエの緊張の種を朗らかしてくれた。それは相棒のシロンにも  
バトルフィールドに立っているムクバードも同じ気持ちになってい  
た。両者ともに戦闘体勢へと切り替えると同時に吹き荒れる風に  
よって木の葉がバトルフィールドへと一気に舞い上がった。

審判「試合開始!!!」

?リーリエVSエリカ?

リーリエ「ムクバード!上昇して下さい!」

ムクバード「ムツクバー!!?」

先制を取ったムクバードはワタツコとの距離を離すため一気に上昇し始めた。同じ飛行タイプのポケモンであるが空を自由に飛び回るムクバードと違って、季節風に乗って空中での浮遊を保っているワタツコではムクバードがいる所までは飛んで向かう事も出来ない。ワタツコの生態を知ったリーリエの安全対策を装った指示ではあるが、焦る事なくエリカはワタツコに指示を送った。

エリカ「まずは天気を味方につけましょう。【にほんばれ】ですわ!!?」

ワタツコ「ワツタア!!?」

華麗に踊り始めたワタツコは眩い光が灯ったエネルギーを作り出すと、それを太陽に向かって解き放った。するとエネルギーを吸い込んだ太陽はさらに強い日差しをバトルフィールドに向かって照らし出した。

リーリエ「ムクバード!【でんこうせっか】!!?」

ムクバード「ムツクバー!!?」

リーリエもすぐにムクバードに攻撃の指示を送った。目にも止ま

らぬ速さでワタツコに向かっていくムクバードであったが、攻撃が決まりそうになったその瞬間、ワタツコは煙のようにムクバードの前で消えてしまった。

ムクバード「ムツク!?!?」

突然として姿を消した事に驚いたムクバードはその場で急停止すると辺りを見渡し始めた。すると自分の真上でフワフワと浮かぶワタツコに気づいた。すぐに体の向きを変えたムクバードであったが、ワタツコはそのまま風に乗ってはムクバードの周りを高速移動し始めた。

リーリエ「速い!!!」

そのスピードは鳥ポケモンの目でも追いつくのも難しい程の速さになっていた。高速移動で周りを飛び回るワタツコにムクバードはまんまと翻弄されてしまった。

ロトム『あのワタツコの特徴は《ようりよくそう》ロト!日差しが強い時は素早さがいつもよりも倍になるロト!』

リーリエ「落ちていて!ムクバード!」

シロン「コン!!?」

ふわふわと浮かぶイメージとはかけ離れたスピードをしたワタツコに戸惑い続けるムクバードにリーリエは必死に呼びかけた。そんな二人にエリカの容赦のない指示がワタツコに送られた。

エリカ「素早くなっただけでは御座いませぬわ。お次はこの技です!【ソーラービーム】!!?」

ワタツコ「ワツタア!!?」

ムクバードの背後を取ったワタツコは太陽の光を集めると、それをエネルギーに変えた太陽光線をムクバードへと放った。通常は溜めるのに時間がかかる技であるが、日差しが強いこの天気の中ではその打点を改善する事が出来る。

リーリエ「上昇して!!!」

ムクバード「ムツク!!?」

何処から攻撃されているか分からないムクバードであったが、リーリエの機転によりすぐに飛び上がる事で、その場を回避し【ソーラー



ビーム」を躲す事に成功した。さらに飛び上がったムクバードはバトルフィールドを広く俯瞰する事が出来たお陰でワタツコの姿を捕らえる事が出来た。

リーリエ「ムクバード! 【つばめがえし】!!?」

一気に急降下し始めたムクバードはワタツコへとそのまま突進して行く。いくらスピードをあげたワタツコであっても百発百中の攻撃を前では意味が為さない。しかし、気迫の表情で向かってくるムクバードに対しエリカは慌てることなく常に冷静でいた。

エリカ「【コットンガード】!!?」

ワタツコ「ワツタア!!?」

ワタツコは三つの綿を小刻みに振り始めると、辺りに綿毛が散りばみ始めた。みるみる内に一つに凝縮されていく綿毛はそのままワタツコの身体全体を包み込こんで行った。

ムクバード「ムツク!!?」

風を切りながら進み続けていくムクバードの力強い攻撃は綿毛に覆われたワタツコへと決まった。しかし衝撃により吹き飛んだ綿毛の中からはその攻撃に対し全く動じていないワタツコの姿があった。桁外れの防御力を手にしたワタツコを前にムクバードは悔しそうに見つめる。リーリエは次のプランへと移った。

リーリエ「【かげぶんしん】です!!?」

大量の分身を作り出したムクバードはワタツコを周りを取り囲んだ。

リーリエ「そのまま【でんこうせっか】!!?」

エリカ「もう一度【コットンガード】!!?」

四方からの一斉攻撃を仕掛けたムクバードであったが、再び体に纏わり付かした綿帽子によってワタツコはダメージを軽減させた。

エリカ「【アクロバット】ですわ!!?」

ムクバード「ムクク!!!」

さらに辺りに散らばる綿帽子の中、風に乗ったワタツコによる軽やかな連続攻撃がムクバードに襲いかかった。

リーリエ「頑張つて!【つばめがえし】!!?」

ムクバード「ムツクバー!!?」

ワタツコの怒涛の攻撃に耐えながらも、力一杯に翼を広げたムクバードは綿帽子を突き切りながら上空へと逃げる事に成功した。

そして、そのまま急転回させると嘴にパワーを込めるとワタツコに向かつて一気に急降下した。

エリカ「焦りは禁物ですわ。【ソーラービーム】!!?」

ワタツコ「ワツタア!!?」

だが正面から向かつてくるムクバードの姿を捕らえていたワタツコはそのまま【ソーラービーム】をムクバードに向けて放射した。

ムクバード「ムツクバア!!!」

リーリエ「ムクバード!!!」

草タイプ最強クラスの技を諸に受けてしまったムクバードはそのまま墜落してしまった。タイプの相性が有利な方が押されているこの状況に観戦席にいるマオ達も驚いていた。お淑やかに振る舞う女性の目から燃える熱い眼にリーリエも押されそうになっている。

リーリエ「ムクバード:まだ行けますか?」

ムクバード「ムツク!!?」

心配するリーリエの声を聞いたムクバードは根性で再び空へと飛び上がった。ひとまず安心したリーリエであつが、ワタツコの【コックトンガード】を攻略しなければこの状況を打破する事は出来ない。

リーリエ(【コックトンガード】:どうすれば...)

ワタツコの様子を暫く観察しながら落ち着いて突破口を探っていると、リーリエに一つの策が浮かんできた。

リーリエ「ムクバード!連続で【でんこうせっか】です!!?」

ムクバード「ムツク!!?」

防戦一方に防がれ続けていた【でんこうせっか】をリーリエは再びムクバードへと指示した。最善策も立てずに当てもなく突進しているのはあまり利口ではないと思うが、それでもリーリエを信頼しているムクバードには迷いはなかった。

そのまま光の速さで再びワタツコに向かつて翼を広げた。

エリカ「ワタツコ!【コットンガード】ですわ!!?」

もう一度綿毛を周りに集めたワタツコにムクバードの「でんこうせつか」が決まった。しかし案の定、ワタツコに対してダメージを与えられずにいた。

カキ「何やってるんだリーリエ!このままじゃあ、やられるぞ!」

スイレン「リーリエは無鉄砲に突っ込んだりしない。きつと何か閃いたんだよ!」

アシマリ「アウ!!?」

バクがメス「ガアメス!!?」

ヤケになったと思うようなムクバードの攻撃に不安が募るサトシ達であったが、リーリエを信じて固唾を飲んで見守っている。

そんなリーリエとムクバードの攻撃に何かしらの違和感がジワジワと登ってきたエリカの顔にも雲がかかってきた。

エリカ(まだ攻撃の手を緩めようとしな...このままでは体力が尽きるのも時間の問題ですわ)

油断せずに自身のパートナーのワタツコに目を向ける。相手の意図が掴められない中、流れを一気に変えようとワタツコに指示を送ろうとしたその時:

ワタツコ「ワツタ:」

微かに蹠踏めき始めたワタツコにエリカは驚いた。防御を極限まで高めたのにも関わらず、苦痛を訴えた。何が起きたのか分からないエリカはワタツコを見つめた。そして、ワタツコのある一点の箇所だけにダメージが集められていた事に気付いた。

エリカ(一箇所に向けて集中的に攻撃を当て続ける事でその部位にダメージをどんどん蓄積させていたのですね。確かにそれでしたらいくら全体の防御を高めようとも、その一点を崩してしまえば大きなダメージを与えられます)

一点狙いの攻撃。これがリーリエの策であった。限界がきたワタツコはそのままムクバードの強烈な体当たり攻撃を前に後方へと吹き飛ばされた。

ムクバード「ムツク!!?」

ワタツコ「ワツタア!!!」

ワタツコの鉄壁の防御が瓦解された事により流れは一気にリーリエの方へと傾いてきた。逆に追い詰められて来たエリカはすぐにワタツコを立て直させた。

エリカ「頑張つてワタツコ!『ソーラービーム』ですわ!!?」

ムクバードに狙いを定めて太陽光を集めだしたワタツコ。しかし

…

ワタツコ「ワツタア…」

エリカ「あっ!!!日差しが…」

ロトム『日差しがさつきよりも弱まってるロト!!?』

マーマネ「チャンスだ!リーリエ!」

トゲデマル「モギユユ!!?」

【「にほんばれ」の効力が切れた事により力を集めにくくなってしまった。完全に風向きが変わりテンポが崩されたワタツコはどうする事も出来ず、迫り来るムクバードを前にしても立ち尽くす事しか出来なかった。

リーリエ「【でんこうせっか】!!?」

ムクバード「ムクバー!!?」

一直線に突っ込んできたムクバードの攻撃にワタツコは吹き飛ばされた。さらにムクバードの攻撃はこれだけで終わらず、嘴に力を溜めた状態で迂回すると、再び飛ばされたワタツコに向かって攻撃を仕掛けた。

リーリエ「【つばめがえし】でフィニッシュです!!?」

ムクバード「ムツクバア!!?」

ワタツコ「ワツタア!!!」

ムクバードの渾身の一撃によりワタツコはそのまま勢いよく地面へと叩きつけられてしまった。

エリカ「ワタツコ!!!」

ワタツコ「ワツタ…」

審判「ワタツコ戦闘不能!ムクバードの勝ち!」

勝利の雄叫びを上げながら飛行するムクバードの様子に目をやつ

たエリカは静かにワタツコをモンスターボールへと戻した。

エリカ「お疲れ様ですワタツコ。貴方の可憐で高貴なバトルはとても美しかったですわ！」

まずは無事に先制点を取れたリーリエはそつと胸を撫で下ろした。リーリエ「やりましたね！ムクバード！」

ムクバード「ムツク!!？」

リーリエの声にムクバードも元気よく返した。二人の友情に微笑ましく感じたエリカは次のポケモンをフィールドへと繰り出した。

エリカ「お出でなさい！モジヤンボ!!」

モジヤンボ「モンジャ!!？」

エリカの二体目はモジヤンボだ。モンスターボールから飛び出したその巨体はフィールドへと着陸したと同時に大きな地響きが起こった。ワタツコと違ってパワー溢れるモジヤンボの登場に場の空気はまた一気に緊張感に包まれた。

マオ「大きい!!」

アマージョ「アジョ!!？」

サトシ「俺たちが戦ったあのモンジャラが進化したのか」

『モジヤンボ ツルじょうポケモン』

草タイプ

モンジャラの進化系。植物のツルで出来た腕を伸ばして獲物を絡め取る。再生能力が高く切つても切つてもすぐに生えてくる』

あのパワーに一撃でも当たれば一溜まりないだろう。疲れが出るムクバードを続投させる事に危険を感じたリーリエはモンスターボールを取り出した。

リーリエ「ムクバード！休んでください！」

ムクバードを戻したリーリエは次のモンスターボールへと手にかけた。

リーリエ「ヒノアラシ！お願いします！」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

エリカ「今度は炎タイプですわね！」

交代して出てきたヒノアラシは背中から炎立たせるとすぐに身構えた。苦手なタイプが相手であってもモジジャンボは恐れる事なく、すぐに攻撃を仕掛けた。

エリカ「モジジャンボ！【げんしのちから】!!?」

モジジャンボ「モジャア!!?」

タイプの相性で狼狽えない凜としたエリカの立ち振る舞い。それを真似るかのようにモジジャンボも気迫を込めた【げんしのちから】をヒノアラシへと放った。

リーリエ「躲して！【かえんほうしゃ】!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

その技を跳んで躲したヒノアラシはそのまま火炎放射をモジジャンボに向けて放った。

モジジャンボ「モジャア!!!」

轟々と畝りを上げた火炎がモジジャンボの巨大な体を包み込んだ。絶大なダメージを貰った瞬間を狙ってヒノアラシはダッシュした。

リーリエ「【ニトロチャージ】!!?」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

炎を纏ったヒノアラシの攻撃がモジジャンボへと向けられた。効果は抜群の炎タイプの技を受けたモジジャンボはすぐに立て直すことが出来ないと思っていたが…

エリカ「跳ね返さない！」

モジジャンボ「モジャア!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

火の粉が身体の蔓状に燃え移っていながらも、モジジャンボは両腕でヒノアラシの攻撃を受け止めると、そのままヒノアラシを後方へと跳

ね飛ばした。その力をアピールするかのようにはモジジャンボは両腕を振り回したりして力強さをリーリエ達に見せつけた。

マオ「うっそー!!!」

マーマネ「草タイプのモジジャンボに炎タイプの技は効果は抜群のはずなのに!!!」

炎技を受けていながらも怯むどころか平気な様子のモジジャンボの前に警戒心が高くなったヒノアラシはその場で立ち止まってしまった。

リーリエ「ヒノアラシ! 『スピードスター』です!!?」

攻め焦っているヒノアラシの背中を押してあげるようにリーリエはすぐに指示を送った。

リーリエ(ダメージが入っていないなんて事はない。何かカラクリがあるはずです。)

平気そうなモジジャンボであるが、ダメージを与えていない訳ではない。攻撃を続けるヒノアラシのためにもその謎を探るべくリーリエはモジジャンボへと注意を傾けた。

エリカ「捕まえなさい!!!」

モジジャンボ「モジャ!!?」

攻撃を受けながらも大きく伸ばしたモジジャンボの腕はヒノアラシへと走り出した。枝分かれする複数の触手を前にヒノアラシは攻撃を止めると、「ニトロチャージ」で上げた素早さを生かして躲していくが、その勢いを押し殺すように迫るモジジャンボの触手を前に遂に捕まってしまった。

エリカ「モジジャンボ! 『しびれごな』!!?」

モジジャンボ「モジャ!!?」

ヒノアラシ「ヒ:ヒノオ:」

ヒノアラシを捕まえたモジジャンボは自分の元へと引き寄せると、黄色い粉を全身にヒノアラシに浴びさせた。

ロトム『しびれごな』は相手を麻痺状態にさせる技!!?これでは折角上げた素早さも意味がないロト!!?』

硬直状態になったヒノアラシに向けてモジジャンボは畳み掛けるよ

うに攻撃を仕掛けてきた。

エリカ「【げんしのちから】!!?」

リーリエ「ヒノアラシ! 【えんまく】です!!?」

ヒノアラシを捕縛している以外の触手でモジジャンボはエネルギーを溜め始めた。その瞬間を狙ってヒノアラシは自由が利く口を大きく空けると、痺れる身体に堪えながらもモジジャンボの顔に目掛けて煙幕を張った。

突然に目の前が真っ暗になった事に驚くモジジャンボは捕らえてる触手を思わず緩めてしまった。その隙にヒノアラシは脱出するとモジジャンボからすぐに離れた。命中率も下げる事にも成功し、流れを掴んだと思いきやそんな様子に、やはりエリカは表情を崩さず、決して狼狽える様子はなかった。

エリカ「残念ですが目眩しにもなりません。モジジャンボ! 【パワーウイップ】!!?」

モジジャンボ「モジヤア!!?」

エリカの指示に我に返ったモジジャンボは地面を掘り起こすと、地響きと一緒に巨大な植物の蔓を出現させた。

ヒノアラシ「ヒノ!!?ヒノ!!?ヒノ!!?」

地中から現れたその蔓に大きく空へと打ち上げられたヒノアラシは身動きが取れない空中でジタバタし始めた。

リーリエ「落ち着いてヒノアラシ!そのまま【かえんほうしゃ】!!?」

エリカ「モジジャンボ【パワーウイップ】ですわ!!?」

同じくリーリエの声に落ち着きを取り戻したヒノアラシはそのまま火炎放射を放った。迫る火炎放射をモジジャンボは大きく腕を振り回しては、いとも簡単に打ち消してしまった。苦手なタイプの技を躲す事なく力で押し返したモジジャンボを観察したリーリエはある事に気付いた。

リーリエ（そういえば…モジジャンボは躲そうともしないどころか、あの場から一步も動こうともしていませんよね…）

躲すだけでなくモジジャンボはヒノアラシの技を同じく技で相殺さ



せ、距離を取られても自分から向かおうともしない。一見にして複数の触手があれば近づく必要はないと思えるが、これに違和感を覚えたリーリエはすぐに行動に移した。

リーリエ「ヒノアラシ！モジジャンボの足元に向かって「かえんほうしゃ」です!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

再び放たれた火炎放射は今度はモジジャンボの両足へと命中した。

エリカ「お見事」

焼け野原となったモジジャンボの足元を見てみるとある事が起こっていた。それは観戦席にいるサトシ達からでもはつきりと見えていた。

マオ「モジジャンボの足元に根が生い茂ってる!!!」

カキ「モジジャンボが倒れない理由はあれみたいだな!!!」

モジジャンボの足元で黄緑色に光る複数の根。それはまるでモジジャンボに不思議な力を与えているように見えた。

ロトム『あの技は「ねをはる」!!?根から吸い上げた養分を使つて少しずつ体力回復させる技ロト!!?』

つまりその技でモジジャンボは少しずつ体力を回復していたという真相に辿り着つけた。倒れないモジジャンボのカラクリを見破ったリーリエにエリカは賞賛した。

エリカ「素晴らしい観察力です！リーリエさん！ですが、タネが分かりになった所でわたくしのモジジャンボを攻略なされたとは限りませんわ！」

モジジャンボ「モジヤ!!?」

身体を大きく広げたモジジャンボはヒノアラシを威嚇するが、負けじとヒノアラシも背中の中を炎を燃した。

エリカ「【げんしのちから】です!!?」

リーリエ「【かえんほうしゃ】!!?」

ほぼ同時に攻撃の指示が送られた二体の攻撃は大きな爆発と共に相殺された。

ヒノアラシ「ヒノオ…」

モジヤンボ「モジヤア…」

勢いよく吹き荒れる爆風に二体は飛ばされないように地面に這い蹲るように踏ん張っている。

リーリエ「今です！【えんまく】!!?」

少し蹠跟めいたモジヤンボのその隙を見逃さなかったリーリエは爆風が止んだ瞬間を見計らってヒノアラシに指示した。指示を聞いたヒノアラシもモジヤンボが動き出す前に再び煙幕でモジヤンボを包み込ませた。

辺り一面が真っ暗になったモジヤンボはヒノアラシを直ぐに見失ったという焦りからさらに慌ただしくなってしまった。

エリカ「払いなさい！」

そんな喝を入れたような鋭い指示が動揺したモジヤンボを落ち着かせた。冷静になったモジヤンボは腕を大きく振り上げると、一瞬にして煙幕を振り払った。

エリカ「【パワーウィップ】!!?」

リーリエ「【スピードスター】!!?」

その勢いのままモジヤンボはヒノアラシに向かって【パワーウィップ】を仕掛けたのだが、広範囲に降り注ぐ星屑を前に思わず攻撃の手を止めてしまった。

リーリエ「そこです！【かえんほうしゃ】!!?」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

モジヤンボ「モジヤア!!!」

防御体勢を取ったモジヤンボに今度は火炎放射が襲いかかる。

エリカ「モジヤンボ！【げんしのちから】!!?」

しかし渾身の力で身体に燃え移った炎を振り払うと、すぐに溜め込んだ原子エネルギーをヒノアラシに向かって放った。

リーリエ「躲して！【ニトロチャージ】!!?」

次の攻撃を仕掛けて一気に決めに行こうとしたリーリエであったが…

ヒノアラシ「ヒ…ノオ」

運が悪く。【しびれごな】によって身体の痺れに襲われてしまった

ヒノアラシに【げんしのちから】が決まってしまった。爆発音と共にヒノアラシは氣力を失ったかのように空中へと吹き飛ばされてしまった。

リーリエ「頑張って！ヒノアラシ!!!」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

だが、リーリエの声によって目が覚めたヒノアラシは空中で受け身を取ると、そのまま【ニトロチャージ】を発動させてモジヤンボに向かって突進した。

モジヤンボ「モジャア!!?」

ヒノアラシのまさかの行動に判断が遅れたモジヤンボはヒノアラシの攻撃を真正面から受けてしまった。

モジヤンボ「モ：ジャア：」

エリカ「モジヤンボ!!!」

爆炎に包まれたモジヤンボは何とか持ち堪えようと試みたが、そのままゆっくりと背中から地面へと倒れ込んだ。

審判「モジヤンボ戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

エリカ「御免なさいモジヤンボ。判断が遅れたわたくしのミスですわ。後はゆっくり休んで下さい」

詫びながらエリカはゆっくりと取り出したモンスターボールにモジヤンボを戻した。モンスターボールに戻した後、エリカは勝利を喜び合うリーリエとヒノアラシの姿を見た。

指示が遅れてしまったこともあるが、何よりも勝敗が別れたのは土壇場でのヒノアラシの起死回生の一撃であるとエリカは思った。そしてそのヒノアラシを動かしたのはリーリエの根気強さとパートナーを信じる気持ちにあったのだと感じた。

華奢な少女から溢れ出るリーリエの力強さにエリカはすっかりと惹かれてしまった。そしてそんな挑戦者との邂逅に感謝を込め、エリカは最後のポケモンを繰り出した。

エリカ「我がタマムシジムの守護神！参ります!!!」

エリカの最後に繰り出したのは洋紅色に染まった大きな花が特徴

的なポケモンだった。

『ラフレシア フラワーポケモン

草・毒タイプ

クサイハナの進化系。世界一大きな花びらで獲物を引き寄せてから毒の花粉を浴びさせる。花粉を振りまいている時は物凄い音も響き渡る』

強敵を倒した後での更なる強敵を前にリーリエは無闇な連戦は避けた。

リーリエ「お疲れ様ですヒノアラシ！休んでくださいー！」

ヒノアラシ「ヒノツツ!!？」

リーリエ「ムクバード！もう一度お願いしますー！」

ムクバード「ムツクバー!!？」

再びバトルフィールドに現れたムクバードは上空へと舞い上がり、と両翼を広げてはラフレシアを「いかく」し始めた。ワタツコとのバトルでの疲れを感じさせない力強いその姿を見たエリカはよく育て上げられていると感心した。

エリカ「ラフレシア！【にほんばれ】!!？」

ラフレシア「ラツフウ!!？」

強い日差しが再びバトルフィールドへと照らされた。同じ特性の

《ようそうりよく》を持つラフレシアは軽やかにステップをし始めた。  
リーリエ「【かげぶんしん】!!?」  
ムクバード「ムツク!!?」

《ようそうりよく》のスピードに対抗するべくリーリエはムクバードの回避率を上げてきた。無数の分身でラフレシアの周りを取り囲み始めたのだが、それを待っていたかのようにエリカは笑みを浮かべた。

エリカ「【はなぶぶき】ですわ!!?」

ラフレシアは不思議なパワーを解放させると、自分の周りに強い突風を巻き起こした。その突風に吹かれながら流々と舞う花びらが一斉に全てのムクバードを飲み込んだ。

ムクバード「ムツク!!!」

吹き飛ばされたムクバードはおもわずリーリエの方へと後退した。

リーリエ「大丈夫ですか!?!?」

ムクバード「ムツク!!?」

少し苦しそうな様子を見せたムクバードだが、リーリエは慌ててモンスターボールを取り出した。

リーリエ「戻ってください!」

ムクバードを戻すと、そのまま別のモンスターボールへと手にかけた。

リーリエ「!ヒノアラシ!もう一度お願い!」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

リーリエ「【かえんほうしゃ】!!?」

エリカ「【はなぶぶき】!!?」

ヒノアラシを投入してからすぐに火炎放射が放たれた。迫る火炎放射を前にしてもラフレシアは再度、花吹雪を巻き起こした。モジャンボ戦でのダメージを引きずっていたヒノアラシの【かえんほうしゃ】は日差しが強い中でも思った以上のパワーを出すことが出来なかったためか、ラフレシアの【はなぶぶき】はそのまま炎を消し飛ばすそのままヒノアラシを後方へと吹き飛ばした。

ヒノアラシ「ヒノツ…」

リーリエ「戻って！」

ダメージを溜め込んでしまっているヒノアラシをモンスタールへと戻したリーリエはシロンへと目をやった。

リーリエ「お願いします！シロン！」

シロン「コン!!？」

やる気に満ちたシロンは元気よくバトルフィールドへと飛び出した。

リーリエ「シロン！【こごえるかぜ】!!？」

シロン「コーン!!？」

バトルへと降り立ったシロンはすぐに冷気をラフレシアに向かって放った。ヒノアラシの炎技とは逆に【にほんばれ】の効果でいつもより威力は下がっているはずだが、それに負けじと取らないパワーがラフレシアへと向けられた。

エリカ「【かげぶんしん】ですわ!!？」

シロンの技が命中する前にラフレシアは複数の分身を作り出した。【こごえるかぜ】受け流したラフレシアはそのままクバードと同様にシロンを取り囲むかのようにして対峙した。

リーリエ「跳んで！」

複数のラフレシアを前に強張るシロンはすぐにリーリエの指示通りにその場で思いつき飛び跳ねた。

リーリエ「真下へ！【こごえるかぜ】!!？」

シロン「コーン!!？」

ラフレシアの頭上を捕らえたシロンは真下に向かって思いつき冷気を流し込んだ。大きく広がる冷気はそのまま分身共々飲み込むと、分身を打ち消しながらラフレシアにダメージを与える事が出来た。

リーリエ「【こおりのつぶて】!!？」

ラフレシア「ラッフウ!!!」

本体だけを残す事が出来たリーリエはさらに先制攻撃を畳み掛けた。

リーリエ「【れいとうビーム】です!!？」

シロン「コオオン!!?」

エリカ「【はなぶぶき】ですわ!!?」

さらに【れいとうビーム】を仕掛けていくが、やられてばかりではいる訳がない。直ぐに体勢を立て直したラフレシアは【はなぶぶき】でシロンの技を相殺させた。

その後ヒートアップしていくシロンとラフレシアの戦いを見ていたサトシ達の応援にも熱が入ってきた。

サトシ「頑張れ!リーリエ!!負けるな!シロン!!!」

ピカチュウ「ピツカアチュウ!!?」

冷たい冷気と花びらの風に包まれたバトルフィールドの中でのバトルであるが、混戦攻防を繰り広げる暑いバトルは終盤に差しかかるうとしていた。

リーリエ「【ムーンフォース】!!?」

エリカ「【ヘドロばくだん】!!?」

双方の技がぶつかった衝撃を気に二体の動きが止まった。

シロン「コオ...コオ...」

リーリエ「シロン...」

シロンの体力が限界に差し掛かってきたのを見てリーリエはその場で固まってしまった。見つめる先はボロボロになりながらも必死に相手の姿を喰らい付こうとするシロン。何とかしてシロンを救い出す方法を絞り取ろうとするも極度の激しい鼓動により焦りが出始めた。

エリカ「ラフレシア。少しの間だけ待ってあげて下さい」

ラフレシア「ラツフウ!!?」

静止した相手を前に攻撃を止めたエリカの指示にラフレシアは素直に従った。トラウマのスイッチが入ったかのように冷静さが欠けてきたリーリエをエリカは静かに見守った。

リーリエ（もう一度、ムクバードかヒノアラシに交代するべきでしょうか...ですが交代したところで突破口を見つけられていないのであれば二の舞です。ムクバード達の体力も限界に達している状態でそんな無責任な判断はできない。だけど、このままだとシロンの体

力が：)

考えれば考えるほどクチバジム戦での記憶が蘇ってきた。その度に頭を過る敗北の二文字の言葉を振り払いながらもリーリエは頭を働かせるが、乗り越えたと思つた壁が背後から迫ろうとする恐怖が邪魔をする。

絶対に勝たなければならないというプレッシャーに押し潰されるリーリエに声が届いた。

シロン「コオン!!!」

そんな事を考えているリーリエに向けてシロンは叱責した。その声到我に返つたリーリエの目にシロンの姿が入つた。凛々しく立つその姿にリーリエは一呼吸を入れた。

リーリエ「ありがとう：シロン」

ポケモン達を勝利に導くために適切な指示を送ろうとしていたリーリエ。しかし、自分の思考ばかりに気を取られて、シロン達の気合と根性に応えてあげようとしなかつた事を恥じた。モジャンボ戦で勝つ事が出来たのも最後までヒノアラシの事を信じていたからこそ勝ち星を上げられたのではないか。

ポケモンバトルは頭で考えるものではない。ポケモン達と心を一つにして目の前の勝利に向かつて一緒に走り続ける事が大切なのだ。初心へと逆戻りしていた自分に言い聞かせた。

リーリエ「余計な事はもう考えません！参ります!!!」

シロン「コン!!?」

目に光が戻ってきたリーリエは気合を入れ直した。固く決意したリーリエとシロンを見てエリカとラフレシアも動き出した。

エリカ「ラフレシア！わたくし達も最後まで気を引き締めていきましよう！」

ラフレシア「ラツフウ!!?」

その言葉と同時にラフレシアは体を横方向へと高速回転させ始めた。攻撃の準備に入ったラフレシアは再び花吹雪を巻き起こした。

エリカ「ラフレシア！【はなふぶき】!!?」



花吹雪がシロンの方へと吹き飛ばされるのと同時にシロンも勢いよくジャンプをすると、空中で縦方向に高速回転をし始めた。次第に冷んやりした体毛により冷やされた空気がシロン包み込ませた。

リーリエ「シロン！【こおりのつぶて】!!？」

シロン「コオン!!？」

指示を聞いたシロンは攻撃を仕掛けた。その時、シロンのある行動がこの場に居る者達を驚かせた。

冷気に包まれたシロンはそのまま突進を仕掛けて行くと、シロンを包んでいた冷気が次第に凍り始めりと、シロンを閉じ込めたまま巨大な氷の球を作り上げたのだ。

氷の球の中に居るシロンはそのまま花びらが舞う風の中を突っ走って行くとそのままラフレシアに向かって強烈な体当たりを叩き込んだ。氷の体当たり攻撃を受けたラフレシアにダメージが入った。衝撃で砕けた氷の球の中から飛び出したシロンは思いつきり空気を取り込んだ。

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】!!？」

シロン「コオオン!!？」

ラフレシア「ラアフ!!!」

強烈な冷凍光線を受けたラフレシアはかなりのダメージが入ったものの何とか立ち上がろうと踏ん張った。

エリカ「ラフレシア！しっかり！」

ラフレシア「ラア…フ…」

しかしシロンの怒涛の攻撃にダメージが溜まってきたラフレシアは返事をするだけで精一杯みたいだ。蹠踉めくラフレシアを見てリーリエは留めの一撃を指示した。

リーリエ「【こおりのつぶて】!!？」

シロン「コン!!？」

猛スピードで放たれた氷の弾丸はラフレシアの急所に当たった。氷の破片が舞い散り、爆煙が晴れた頃にはラフレシアはゆっくり後ろへと倒れていた。

ラフレシア「ラアフ…」

明らかに目を回しているラフレシアを確認した審判はリーリエ達に向けてコールした。

審判「ラフレシア戦闘不能！ロコンの勝ち！よって勝者はチャレンジャー、リーリエ！」

勝利を得たリーリエの足はシロンの方へと走り出した。喜びの涙と笑顔を浮かべながらシロンの名を呼んだ。

リーリエ「シロン!!!」

シロン「コオン!!？」

リーリエの方へと走り出したシロンもそのまま勢いよくリーリエの胸へと飛び込んだ。

マオ・スイレン「やった!!!勝った!!!」

マーマネ「しかもリーリエのポケモンは一体も倒されてないよ！」

カキ「ああ！文句なしの完全勝利だ！」

サトシ「凄かったな！ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

サトシ達もリーリエの勝利に喜んでいた。健闘してくれたラフレシアをモンスターボールへと戻したエリカはリーリエの方へと向かった。

リーリエ「ありがとうございます！」

エリカ「諦めない力強さ。そしてポケモン達との信頼。とても良いものを見させて頂きました」

そう言うと、エリカはリーリエにジムバッジを授けた。

エリカ「これからの貴方とポケモン達の未来への健闘を祈ってこれを授与します。タマムシジムを降した証。レインボーバッジです！」

レインボーバッジを受け取ったリーリエはバッジを持っている右手を空へと突き上げた

リーリエ「レインボーバッジ！ゲットです！」

シロン「コオン!!？」

ムクバード「ムックバー!!？」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

こうして三つ目のジムバッジを獲得したリーリエはさらに喜びの

声を上げた。そんなリーリエ達の後ろから関係者の一人が慌ててジムへと入ってきた。

弟子「先生！ただいま参られました！」

エリカ「分かりました！こちらに通して下さい」

エリカがそう言うとな人のトレーナーがジムへと入ってきた。その人物と目が合ったリーリエはその者の名前を挙げた。

ノゾミ「あれ？久しぶりだね！みんな！」

リーリエ「ノゾミ!?？」

## 第三十八話 スイレンとイーブイ

？数週間前？

場所はカントー最大のフィールドワークでもあるトキワの森。ペンドラーの騒動の後はまた落ち着きのある居処を取り戻していた。

イーブイ「イーブイ♪」

目元が隠れるぐらいに伸びた前髪を靡かせながら一匹のイーブイが鼻歌を歌いながら、上機嫌に歩いていた。

デデンネ「デデ？」

そんなイーブイを木の影から眺める一匹のポケモン。皆さんは覚えてるだろうか。

デデンネ「デッ!?」

見ない顔ぶれに興味を持ったデデンネはせっせと木から降りると、そのイーブイの方へと向かって走り出した。

イーブイ「イーブイ？」

デデンネ「デデエ!!」

イーブイ「イーブイ♪」

デデンネ「デデ!!!」

何処から来たのかと尋ねるデデンネに向かってイーブイは思いつきり体当たりを食らわした。このイーブイなりの挨拶だったみたいなのか、倒れたデデンネに対して遊びに誘うようにしてはしやぎ始めた。その無邪気な様子に敵意はないと分かったデデンネは改めてイーブイに質問しようとしたのだが…

イーブイ・デデンネ「!!!」

突然、二匹に向かって振り降ろされた捕獲網にイーブイとデデンネは気づく事が出来ず、そのまま捕まってしまった。脱出しようと蹴く

二匹に向かって二人の男が歩いてきた。

シャドー要員A「捕獲成功だな」

シャドー要員B「流石はトキワの森。色んなポケモン取り放題だぜ！」

シャドー要員A「さっさと此奴らを研究所へ引き渡そうぜ」

そう言うのと、イーブイとデデンネを捕まえた網を持つと、そのまま車のトランクへと二匹を放り込んだ。放り込まれた二匹の目に映ったのは、自分たちと同じように捕まっているポケモン達の姿だった。為すすべもないイーブイとデデンネを乗せた車はトキワの森を飛び出すと、目的地に向かって車を走らせた。

さらに数日立ったその日、二人の少女の活躍によりシャドー研究所は壊滅。そこで捕まっていたポケモン達も国際警察の人達の手によってみんな解放された。

晴れて自由の身になったイーブイは見知らぬ街の活気に吸い寄せられるようにそのまま走り出して行った。そして知らぬ土地へと出てしまったデデンネも一人になる不安から、イーブイの後を急いで追いかけて行ったのであった。

？現在？

サトシ「久しぶりだなノゾミ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

ノゾミ「久しぶりサトシ！ピカチュウ！また会えて嬉しいよ！」  
ニャルマー「ニャル!!？」

シンオウ地方以来に再会を果たしたサトシとノゾミは堅い握手を交わした。ピカチュウとニャルマーも頬を擦り合わせたりして、お互いの再会を大いに喜んでいた。

サトシ「ここに來たって事はもしかしてジム戦か!?!？」

ノゾミ「いや、だけどタمامシジムは攻略したよ！」

そう言うと、ノゾミの手にはタمامシジムのジムバッジであるレインボーバッジが光り輝いていた。

ロトム『じゃあ、ここには何をしにロト?』

ジム戦が目的でないとすれば他の用はと尋ねると、ノゾミが変わってエリカが口を開いた。

エリカ「わたくしが呼びましたのです。ノゾミさんにポケモンコンテストの稽古をつけて頂くためにです」

スイレン「ポケモン…コンテスト?」

~~~~~

場面は変わって、自然とかけ離れた大都会に高揚感が舞い上がっている二匹のポケモン。

イーブイ「イーブイ!!!」

デデンネ「デデデ!!!」

興味があるものばかり目に映る二匹は人混みを恐れようともせず、手当たり次第お店に立ち寄っていた。そんな二匹の愛くるしさに胸を打たれた店主も木ノ実やらお菓子らをイーブイ達にご馳走していた。

無我夢中に頬張る人懐っこいその様子を見ていた人達もまさか野

生のポケモンとは思わなかったのであろうか。視界に入るもゲットしようとする人はいなかった。

タマムシシティを満喫した二匹は次の場所へと移動しようとする、鼻を突き刺す花の香りに揺られると、その香りがする建物の方へと向かって走り出した。

~~~~~

エリカの言ったポケモンコンテストというワードに聞き覚えのないマオ達はそれは何なのかと目を丸くしていた。言葉で説明するより実践した方が早いと思ったノゾミはニヤルマーを前に出し、モンスターボールからネオラントを呼び出した。

ノゾミ「ニヤルマー！【でんげきは】!!?ネオラント！【アクアリング】!!?」

ノゾミの指示と同時にジャンプした二匹。まずはニヤルマーが尻尾を大きく振り回すと、毛並みが静電気によって逆立てると、そのまま電撃をまるで花火のように辺り一面に展開した。

次にネオラントが水のベールをニヤルマーと共々包み込ませると、ニヤルマーが放った電気を取り込んだ水のベールはネオンライトのように光り輝き始めだした。水しぶきも相まってニヤルマーの毛並みの艶やかさやダイヤのように輝くネオラントの鱗が二匹をさらに美しく光立たせた。

演技が終わった二匹は華麗に着地すると、ノゾミの合図で観戦者であるリーリエ達に向けて深々とお辞儀した。見たことのない光景にリーリエ達は大きな拍手をノゾミ達に送った。

マオ「凄い！凄い！凄く綺麗だったよ!!!」

ロトム『こんな【でんげきは】と【アクアリング】の使い方。初め

て見た口ト!』

マーマネ「二つの技同士を組み合わせる事でこんな魅せ方を披露する事が出来るんだね!」

カキ「くううう!!!俺は猛烈に感動したぞ!!!」

幻想的な世界に囚われたリーリエ達はすっかりポケモンコンテストというのに興味が湧いたみたいだ。

サトシ「ポケモンコンテストってのはポケモンの技を使ってアピールを競う一次審査とコンテストバトルの二次審査があるんだ」

続けて演技を終えたノゾミに変わってサトシは今のを踏まえて詳しく説明した。

### 《ポケモンコンテスト》

まずはポケモンとコーディネーターによるパフォーマンスが行われる。これが最初の一次審査であるのだ。そして一次審査を突破した後、トーナメント形式によるコンテストバトルが始まる。これが二次審査でのコンテストルールであるのだ。

二次審査はシングルとダブルの二つ形式のポケモンバトルが行なわれる。しかし普通のポケモンバトルとは違ってあくまでも一次審査と同じく如何にポケモン達を華麗に見せるかが問われている。コーディネーターには一定量の持ちポイントを持っていて、自身のポケモンがダメージを受けたり、相手のポケモンの作法が良いものと審査員に判断されたりするとポイントが失われる。対戦時間の五分間の中で相手よりも多くのポイントを残す事が勝利条件である。しかし、タイムアップまでに自身のポケモンが戦闘不能になるとバトルオフ。どれだけ有利に立ち振る舞っていても、戦闘不能になったその瞬間で敗北となる。

優勝を果たすとその証であるコンテストリボンが授与される。それを各地で行なわれるポケモンコンテストに挑戦し、五つ以上のコンテストリボンを獲得すれば、コンテストのポケモンリーグ版であるグランドフェスティバルへと出場することができるのだ。



リーリエ「そしてノゾミはシンオウ地方のグランドフェスティバルの優勝者。トップコーディネーターであるのです！」

スイレン「そうだったんだ！凄いい！カッコいい!!!」

ノゾミの経歴をした一同は御ぞってノゾミの周りへと集まった。久々にコンテストに戻れたノゾミも嬉しそうに皆の質問へと答えていく。

サトシ「エリカさんとポケモンコンテストの練習って事は、もしかして近々何処かでポケモンコンテストが開かれるって事ですか？」

エリカ「ええ、ここタママシティで開かれるのですわ。わたくしもジムバトルだけでなくコンテストならではのバトルの経験して、ジムリーダーとして自分自身をさらに磨いていこうと思ひ、挑戦しようと思ったのです！」

マオ「それでノゾミにコーチをつけて貰ったのですね！」

ノゾミ「そう！」

ルールも異なってしまうえばジムとコンテストは別物と考えるところがそうでもない。コンテスト演技では威力だけでなく、ポケモンを技を使って表現させるには繊細のコントロールが必要とされる。タママジム戦でのエリカのラフレシアの「はなふぶき」も技の威力だけでなく花びら一枚一枚を上手くコントロール出来ているからこそシロン達の技を防ぎきってみせたとも頷ける。

ジムリーダーとして一つでも強くなる作法があるとなれば、かつてのチャレンジャーであっても稽古を申し出るエリカの姿はかつてタケシが言っていたことと理にかなっていた。

スイレン「あの…見学していても大丈夫ですか？」

エリカ「もちろんよ！」

コンテストの魅力に惚れ込んだ一同はお言葉に甘えて見学させてもらうことにした。すると、一匹のポケモンがこちらに向かって勢よく走ってきた。

イーブイ「イーブイ!!？」

カキ「うわあ！なんだ!?!？」

ロトム『物凄いスピードで向かってくるロト!!?!』

急に現れたイーブイにリーリエ達の着目点が一気に向けられた。一斉に視線を向けられたイーブイは何事かと首を傾げていた。

マオ「タママシジムの子ですか？」

エリカ「いいえ。何処からか迷い込んだのかしら？」

ロトム『このイーブイは95%の確率で野生のイーブイで間違いないロト!!?!』

サトシ「だけど、凄え人懐っこいぞ！」

リーリエ「ええ！シロン達とも打ち解けてますね！」

そうピカチュウ達はイーブイの方へと近づくと、それに気づいたイーブイは猛烈な体当たりで挨拶をしてきた。急な事にさらに慌ただしくなったピカチュウ達であったが、成されるがままにイーブイの体当たりを受け止めた。

カキ「そ…そうか？」

マオ「あはは…」

元氣一杯なイーブイを前に呆然とする一同にさらにもう一匹が姿を現した。

デデンネ「デデ!!?!」

イーブイ「イーブイ!!?!」

何とかイーブイに追いつくことが出来たデデンネはイーブイの近くで力尽きたようにして倒れた。そんなデデンネに前足で背中を押してやるイーブイ。こんなにもヘトヘトになるまで走らされたのは誰のせいだと言わんばかりの視線をイーブイに浴びさせた。

マーマネ「あつ！デデンネだ！」

マオ「うわあ！可愛い!!!イーブイの友達かな？」

サプライズで登場したデデンネにも注目が集まった。するとただ一人、リーリエはふと思いついたかのようにしてデデンネを覗き込んだ。

リーリエ（この子…何処かで見たような…）

そう記憶を辿るリーリエの前にシロンがデデンネへと近づいた。

シロン「コン!!?」

するとシロンを見たデデンネは驚いたように起き上がるとシロンに返事した。人見知りしないシロンの様子からリーリエはデデンネの方へと向かい始めた。

リーリエ「デデンネ…わたくしの事…覚えていますか?」

そう尋ねるリーリエを見たデデンネはゆっくりと頷いた。間違いない。トキワの森で出逢ったあのデデンネだ。

リーリエ（ですが…どうしてここにいるのでしょうか?）

トキワの森からだいぶ離れた土地にいる事に疑問を浮かべている矢先、また元氣よく飛び跳ねたイーブイは今度はアシマリに向かって体当たりを仕掛けた。

息つく間もなく向かってくるイーブイに向かってアシマリはバルーンを作り上げた。

アシマリ「アウ!!?」

バルーンの中へと入ったイーブイはそのままフワフワと宙へと浮かんだ。

イーブイ「イブイ♪」

初めての感覚に好奇心のボルテージが高まったイーブイは楽しそうにアシマリのバルーンの中でも無邪気に身体を動かした。その様子を見て嬉しくなったアシマリも小さなバルーンを作りながらイーブイを楽しませた。

マーマネ「アシマリのバルーンが気に入ったみたいだよ!」

スイレン「うん!そうみたい!」

ノゾミ「アローラ祭で対戦した時も思ったけど、これだけ大きなバルーンを作りあげる」

なんて相当な練習をして来たんじゃない?」

スイレン「うん!いつか大きなバルーンの中に入って海の中を見るのが私とアシマリの夢なの!」

アシマリ「アウアウ♪」

イーブイ「イブイ♪」

すっかりアシマリが作り上げたバルーンに夢中になっているイー

ブイ。そんなイーブイを眺めていると、突如として空から黒い球が放り込まれた。それと同時に小爆発を起こした球の中から煙幕が放たれた。

サトシ「何だ!!!」

すると高笑いが聞こえた方へと目をやると、あの二人組が立っていた。

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ！特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト!」

コサブロウ「コサブロウ!」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!?」

突如として現れたロケット団を前にリーリエ達は身構えた。

マオ・スイレン「ヤマト!!!」

カキ・マーマネ「コサンジ!!!」

コサブロウ「コサブロウだ!!!毎度毎度に何故間違える!!!」

サトシ「お前らまた何しに来たんだ!」

コサブロウ「おほん!今日の我々の目的はここタママシジムのポケモンを頂くことだ!」

ヤマト「ホワイトジャリガールとのジム戦が終わるまでこの時を待っていたのよ!」

そう言うと、ロケット団はモンスターボールを手に取った。

ヤマト「行くのよ!デルビル!!!」

コサブロウ「行けえ!カポエラー!!!」

デルビル「デェル!!?」

カポエラー「カアポー!!?」

コサブロウ「カポエラー!【こうそくスピン】!!?」

登場と同時にカポエラーは高速回転させながらリーリエ達の方へと攻撃を仕掛けてきた。だが、咄嗟に前へと出たニヤルマーはスプリングのような尻尾で開店するカポエラーを掬い上げるようにして受け止めた。回転を失ったカポエラーは呆然と立ち尽くす。

ノゾミ「やるなら容赦しないよ!ニヤルマー!【アイアンテール】!!?」

ニヤルマー「ニヤル!!?」

そのまま硬化させた尻尾で捕まえたカポエラーをそのまま地面へと叩きつけた。

サトシ「出てこいルガルガン!【アクセルロック】だ!!?」

ルガルガン「ルガア!!?」

サトシはルガルガンを繰り出した。赤く染まった目はカポエラーを睨みつけると、そのまま岩のような硬い角を向けて、カポエラーに向かつて体当たりを仕掛けた。スピードが乗った重い攻撃を受けたカポエラーはそのままコサブロウの方へと飛ばされた。

ヤマト「負けるんじゃないよデルビル!【かえんほうしゃ】!!?」

次にデルビルが火炎放射を放った。相手が炎なら水だ。すぐさまスイレンも先制技をアシマリに指示した。

スイレン「アシマリ!【アクアジェット】!!?」

アシマリ「アウアウ!!?」

デルビル「デエェル!!!」

火炎放射を打ち消しながら進んでいくアシマリの攻撃はそのままデルビルに決まった。フラつく相手ポケモン二体を前にさらに攻撃を仕掛けて行った。

スイレン「もう一度!【アクアジェット】!!?」

再び水流を巻き上げてきたアシマリは、その水流を身体に纏わずおもいつきり地面へと叩き込んだ。その反動で起こした津波にアシマリは波に乗りながら、その津波をロケット団の方へと向けて行った。

ロトム『ビビツ!!!こ!この技は【なみのり】ロト!!?』

新しく覚えたアシマリの【なみのり】を見たイーブイは勢いよくジャンプした。

イーブイ「ブーイ!!?」

スイレン「えっ! な…何!??」

アシマリがいる頂上に向かって飛び跳ねたイーブイはそのままアシマリが起こした波に乗ることに成功した。絶妙なバランスを保ちながらアシマリと一緒に波に乗るイーブイの姿にスイレンは目を見開いた。

イーブイ「イーブイ!!?」

波乗りのまま身構えたイーブイはパワーを溜め始めると、それを一気に解放するかのようにしてロケット団に向かって突進して行った。アシマリの【なみのり】による水のエネルギーを纏っているイーブイの体当たりはそのままロケット団へと直撃した。

ヤマト「またこうなるのねえ!!!」

コサブロウ「次こそは我らに勝利を!!!」

ヤマト・コサブロウ「やな気持ちいい!!!」

キラッ!

ロケット団を空高く吹き飛ばしたイーブイは反動によって目を回していたが、すぐに立ち直すと、アシマリの方へと向かって行った。

ロトム『さっきのは【すてみタツクル】 ロト!!?』

ノゾミ「アシマリの【なみのり】が加わってさらに威力が増したようだね! 実にインパクトがあつたコンビネーション技だったよ!」

エリカ「アシマリとイーブイ。とても息が合っていましたわ!」

力を合わせてロケット団を倒したアシマリとイーブイは手に手を取って喜び合っていた。そんな二匹について嬉しくなったスイレンも駆け足で二匹の元へと向かった。

スイレン「頑張ったね! 二人とも!」

スイレンの声にアシマリとイーブイは一緒に合図した。すっかり仲良くなつた二匹をスイレンは静かに笑っていた。その様子を見た

カキがスイレンに声をかけた。

カキ「なあスイレン！ゲットしてみたらどうだ？」

スイレン「えっ？」

カキの突然のゲットの提案に驚くスイレンはそつとイーブイの方へと目線を下ろした。アシマリと並んで波に乗るその姿が目には浮かんだスイレンはアシマリと親しげなイーブイを見て確信した。

大好きなんだね。海…

渚…

スイレン「…ナギサ…」

マオ「ナギサ？」

スイレン「名前！あの子の！」

マーマネ「ゲットする前から決めちゃったね！」

リーリエ「ナギサ…スイレンらしいですね！」

スイレン「えへへ／／」

スイレンはダイブボールを片手にイーブイの方へと向かった。近

づいてくるスイレンに気づいたイーブイはスイレンの前へと歩み寄った。

スイレン「居てくれる？一緒に！」

ナギサ「イーブイ!!？」

スイレンを受け入れたイーブイにダイブボールが開いた。ダイブボールへと吸い込まれたイーブイはそのままボールの中へと収まった。

スイレン「イーブイ！ゲットだぜ！」

アシマリ「アウ!!？」

こうしてスイレンは新たにイーブイを仲間にした。新しい愉快的な仲間とともにリーリエ達の旅はまた始まるのであった。

リーリエ「ところで…貴方はどうします？」

デデンネ「デデ？」



### 第三十九話 彼岸の守り神

シオンは紫。尊い色。

尊さの滲む町

タمامシシティで新たにスイレンの手持ちとなったナギサとトキワの森以来に再会したデデンネを連れてリーリエ達はタمامシティから近い町、シオンタウンへと立ち寄っていた。

シロン「コン♪」

ナギサ「イブイ♪」

デデンネ「デデ♪」

デデンネはというと、トキワの森へと帰る手段を見つかるまでリーリエ達と同行する事となった。シロンや他のリーリエの手持ちとは面識があつたり、ピカチュウ達がフレンドリーに迎えてくれたお陰ですっかり皆んなとは打ち解けていた。

水辺の近くではしゃいでいるピカチュウ達の側ではたまたま開催されていた釣り大会に出場したリーリエ達が釣り糸を垂らして、水辺のポケモンがヒットするのを静かに待っている。そんな中、アローラ一の釣り名人が本領を發揮していた。

スイレン「チョンチャー！ラブカス！ヒンバス！メノクラゲ！シエルダー！クラブ！シードラー！ホエルコ！」

吸い込まれるようにして竿にヒットしていく水系ポケモンをスイレンは次々と釣り上げて行った。その光景には釣り歴50年のベテラン名人も豆鉄砲を食らったかのように呆然としていた。

スイレン「あつ！カイオーガー!!!」

一同「こえっ!!!」

スイレン「嘘です♪」

あからさまの嘘であったも、つい本気に信じてしまう程のスイレンのその腕前には周りの人達からは拍手が喝采されていた。

リーリエ「流石ですねスイレン！」

マオ「よっ！名人！」

そしてその隣にはマーマネの自作の釣竿に興味津々に目を輝かせているサトシがいた。

サトシ「おお!!カッコいい!!」

マーマネ「まあね！」

ロトム『これは興味高い発明口ト!!?』

トゲデマル「モギユユ!!?」

マーマネ「ふふっ！例えホエルオーが相手でも折れないコシの強さを誇るハイパーロッド！1秒間に300回巻き上げるスーパーリール！全てを兼ね揃えた夢の釣り竿！名付けてウルトラDXマスターゼロツー！」

サトシ「化学の力って凄げえ!!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

各々釣りを楽しんでいる中、ため息を吐きながらピクリともしない竿を静かに見続けている人もいた。

カキ「俺は相変わらず水ポケモンとの相性は良くなさそうだな」

揺れない竿と一緒に見つめていたバクガメスとガラガラもカキに釣られて深いため息を吐いていた。周りの人よりも時間が経つのが遅く感じるほど退屈な三人の前に一人のトレーナーが話しかけてきた。

デント「それなら釣りソムリエとして君にキリツと爽やかに色々と教えて上げようかな！イツツ！フィッシングターイム!!」

いきなり話しかけられて戸惑うカキ達にお構いなく、デントは直ぐに釣りのレクチャーを始めた。

デント「いいかい！ルアーを垂らした時はいつでも花の香りに吸い寄せられるバタフリーを迎え入れてあげるように全集中の感覚をロッドを握ってる手に傾むけるんだ！」

カキ「お：おう！」

言われるがままにカキは自分の竿へと全集中へと傾けた。息を殺して静かに待っていると糸が引つ張られている感覚が腕に伝わってきた。

カキ「来た!!!」

確信ついたカキは右手で素早くリールを回そうとしたが、その手を空かさずにデントは押さえた。

デント「おつと！急いで竿を上げてはダメだよ！釣り上げる前の駆け引きこそが大勝負！しっかりと相手の動きを見て、引き上げるその隙を見つけるんだ」

その言葉を聞いたカキは言われ通りに竿を引つ張る力が弱くなっていく瞬間を静かに待った。そして、竿の軋み具合が緩くなった所でデントはすぐさま声をあげた。

デント「今だ！花嫁の美しいベールのようになやかにソフトにリールを巻き上げるんだ！」

慌てずにゆっくり、カキは焦る気持ちを押さえながら釣り糸を巻き上げた。そしてその糸の先には小さなテツポウオが姿を現した。

カキ「釣れたああ!!!」

バクガメス「ガアメエス!!?」

ガラガラ「ガラガアラ〜♪」

これにはバクガメスもガラガラも飛び上がったのはカキと一緒に輪になって喜び合った。始めての釣りを成功させたカキはデントと握手を交わした。

カキ「ありがとう！お陰で初めて釣り上げる事が出来た！」

デント「僕も釣りの楽しさを少しでも感じてくれただけでも嬉しいよ！」

リーリエ「カキ！」

マーマネ「もしかして釣れたの!?!?」

カキの喜びの声を聞いたリーリエ達はカキの方へと向かい始めた。カキの元へと向かう仲間達と一緒に見つめたデントは目を丸くした。かつての旅仲間の姿が目に入ると、その人物の名を喜んで叫んだ。

デント「サトシ！ピカチュウ！」

サトシ「デント!!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

~~~~~

スイレンの優勝で幕を閉じた釣り大会の後、一同は近くの喫茶店で身体を休める事にした。デントは胸元の蝶ネクタイを正して軽く咳払いをした。

デント「初めまして。僕はポケモンソムリエのデントです！サトシとピカチュウとはイツシュ地方で知り合ったんだ」

リーリエ「リーリエです！」

ロトム『ロトムロト!!?よロトしく!』

マオ「マオです！宜しく！」

カキ「俺はカキだ！」

スイレン「スイレンです！」

マーマネ「僕はマーマネ！よろしく！」

各々自己紹介を終えると今度はポケモン達がデントの元へと集まった。それを見たデントも子供のように目を輝かせると、初めて目にするアローラのポケモン達に軽く挨拶をした。

デント「アローラのポケモン達は初めて見たよ！こんにちは！」

シロン「コン!!?」

すると再び蝶ネクタイを結び直すと、何かを始めるかのように軽く指を鳴らした。

デント「イツツ！テイステイングターイム!!」

アローラ一同「!!!」

何が始まるか分からず戸惑うリーリエ達を見てサトシとピカチュウはその懐かしい感じを思い出しながら「また始まった」と言わんばかりの顔で笑っていた。

トレーナーとポケモンとの相性を診断し、友好を深めていくためにはどうしたら良いかをアドバイスしてあげたりするのが主な仕事である。

当初はイツシュ地方以外ではあまり知られてはいなかったが、今はソムリエ協会の設立やデントのようなポケモンソムリエの活動もあつてその名は知られるようにはなった。

ちなみにポケモンソムリエには階級がS、A、B、C、と存在してデントは上級クラスのAランクを所得している。

大勢のポケモン達の中からデントは真つ先に挨拶をしに来てくれたシロンの方へと駆け寄った。しばらくシロンを観察したデントは満足げな笑顔をリーリエの方へと目をやった。

デント「素敵なトレーナーと出逢えてこの子は幸せみたいだね。もしかして卵の時から大切に育てきたんじゃないかな？」

リーリエ「あつ！は…はい！」

デント「やつぱりそうだ！この毛並みの艶やかさ。毎日しっかりと手入れをして貰ってる。それにこの小さな体から思えないしつかりとした足の筋力。幾多の困難を一緒に乗り越えてきたんだね。あーありがとう。君たちのような強い絆で結ばれたトレーナーに出会えて僕はとても感動しているよ」

そのデントの発言に対し、驚いたカキは直ぐに口を開いた。

カキ「ど…どうしてシロンがリーリエのポケモンって分かったんですか？」

デント「別に特別な事はしてないよ。釣り大会の時、この子が一番近くにいたのは彼女だったし！すぐに誰のポケモンなのかはあの時に分かっていたさあ！」

スイレン「それでも、シロンが卵の時から育てられた事も言い当てましたよ…」

デント「凄くトレーナーを信頼しているとても純粋な目をしていて。この力強い信頼関係はゲットして出逢ったよりも、もつと大きな

出逢いがあつたんじやないかなって思っただけだよ！」

当たり前のように答えるデントであったが、初めて目にするポケモンの特徴や様子を瞬時に見ただけで、トレーナーに応接する事なんて相当な目利きに自信が無ければ出来るものではない事は素人のリーリエ達の目からも感じ取れていた。デントの腕前もあつてリーリエ達はこの短時間でポケモンソムリエの魅力を大きく味わらせられたのであった。

サトシ「ところでデント！何でカントーに戻って来たんだ？」

イツシユ地方からの旅を終えて、アイリスと共にジョウト地方へと旅立った以来の再会でもあった。デントはシオンタウンの地図を広げると、ある場所へと指をさした。

デント「ここに来た本命はポケモンタワーさあ！」

リーリエ「ポケモンタワー？」

シロン「コーン？」

ロトム『そこは僕にお任せロ…』

デント「ポケモンタワーはこの世を離れる魂達が迷わずに無事に天へと送り出してあげるためにと、この町の長であるフジ老人という人が建築をなされた魂の家なんだ。そんな立派な建物を是非一目見ようと思つてここに来たんだ」

マーマネ「へえ、随分と詳しいんですね」

デント「僕はタワーソムリエでもあるんだ！」

ロトムの出る間も与えない淡々と饒舌に話すデントは鼻を高くして胸を張っていた。

スイレン「ねえ！私達も行つてみない!?ポケモンタワー！」

カキ「そうだな！次の予定も決めていなかったしな！」

マーマネ「賛成！」

デントの話の中でポケモンタワーに興味を持ったりリーリエ達もデントと一緒にポケモンタワーへと向かう事となった。

~~~~~

デント「こ……ここが……ポケモンタワー……な……中々……ダークなテイストを。た……漂わせる……雰囲気では……な……ないか」

マオ「デントさん……大丈夫なのかな？」

サトシ「そーいやデント。幽霊とか苦手だったけな！」

ポケモンタワーに近づくと少しづつ身震いを立て始めるデントにみんな薄々と気づき始めていた。

所々に古びた面影を残しつつ人の気配もない所に建てられているだけでもあつて、足が竦んでしまいそうな雰囲気は充分に漂わせていた。

カキ「それじゃあ、何で行こうと思ったんだ？」

デント「そ……それは……タワーソムリエとして……む……無視は……出来ないからさあ！」

マニアとしての根性なのか分からないが、デントはガチガチに固まった足を一歩ずつ前へと出しながら、ポケモンタワーへと近づいて行った。そして、ここまで長く続いた林の道を抜けたと同時に一体のポケモンがデントと目が合った。

デント「うわあああああああああ!!!」

???「ヒトオオオオオオオオ!!!」

急に現れたポケモンにデントの悲鳴が鳴り響いた。その叫び声に驚いたそのポケモンも四方八方に飛び回りながら慌て始めた。

『ヒトツキ　とうけんポケモン』

鋼・ゴーストタイプ

魂が古代の剣に宿って生まれたポケモン。剣の柄を握った人の腕

に青い布を巻きつけて生命力を吸い取ってしまう』

空かさずシャッターを切ったロトムはヒトツキのデータを読み込むとそのままリーリエ達に解説し始めた。ヒトツキは隠しきれない鞆が突き出しながら草むらの中へと身を隠し震えていた。

スイレン「あっちも凄く驚いたみたい」

ロトム『怖がりなゴーストタイプのポケモンロト!』

デント「御免よヒトツキ。驚かせるつもりはなかったんだ」

ヒトツキ「ヒトト…」

落ち着いてきたヒトツキは音を立てないようにゆつくりと此方へと寄ってきた。近づいてくるヒトツキを見つめる中、不意に凶鑑の方へと目を向けたマオは疑問を浮かべた顔で首を傾げた。

マオ「この子…凶鑑のヒトツキと何か違うよね」

マオに言われ一同も凶鑑に分布されているヒトツキを見た。たしかに通常のヒトツキとは違って全体的に赤紫色を主体としていた。

デント「この子は色違いのヒトツキだよ!希少でかなり珍しい個体だよ!」

するとそのヒトツキの後ろから此方へと向かってくる影が見えた。その影がはつきりと見えるとサトシとピカチュウはそれに向かって大きく手を振り始めた。

サトシ「おーい!ゴース!ゲンガー!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ゴース「ゴース!!?」

ゲンガー「ゲンガー!!?」

ヤマブキジム攻略のためゴーストタイプのポケモンを捕まえるために訪れた以来に再開を果たしたサトシ達は手と手を取り合っていた。

リーリエ「サトシのお友達なのですね!」

サトシ「ああ!ここで仲良くなってたんだ!」



するとその後ろからも二体のポケモン達がリーリエ達の様子を伺っていた。その二体も恐る恐るに近づいてきたのだが、ゲンガー達の様子を見て安心したようにリーリエ達の元へと近づいて行った。

カキ「カゲボウズにヨマワルか！」

サトシ「お前からこんなに仲間が増えたんだな！」

久しぶりに会った最中であつたが、何かを思い出したように途端に表情を沈めたゲンガーがピカチュウに話し始めた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ゲンガー「ゲエンゲン!!？」

ピカチュウ「ピカピカ!!？」

ピカチュウの様子からしてゲンガー達は何かに困っているみたいなのはポケモンの言葉が分からないリーリエ達にも察しがついた。リーリエ達に分かりやすく説明するためにもロトムはゲンガー達から改めて事情を聞き出した。

ロトム『そんな事があつたロトか…』

マーマネ「ゲンガー達は何を言ってるの？ロトム!!？」

ロトム『ポケモンタワーに入れなくなった。助けて欲しいと言ってるロト!!？』

激しく頷くゲンガー達はポケモンタワーの方へと指をさした。肉眼からではポケモンタワーに変わった所は見当たらなかつたが、ゲンガー達の不安な様子から只事ではない事は伝わっていた。

デント「確かにゴーストタイプのポケモンがこんな昼間から外に出ているのは不思議だ…」

サトシ「分かった！俺たちに任せてくれ！」

頼りになるサトシの言葉に励まされたゲンガー達は浮遊し始める。とリーリエ達をポケモンタワーへと案内した。

~~~~~

ポケモンタワーの前へと到着したリリーリエ達であったが、一見変わった雰囲気が見られない様子に足が止まってしまった。

リリーリエ「中は夜みたいで暗いですね」

サトシ「だったらニャヒート！君に決めた！」

ニャヒート「ニャアブ!!？」

モンスターボールから飛び出したニャヒートは首の付け根にある炎袋を照らし出した。高い鈴の音を鳴り響かせながら明るく照らす炎袋はゲンガー達の不安な気持ちを優しく癒してあげた。

灯の確保が出来たリリーリエ達は勇気を振り絞ってポケモンタワーへと向かった。遠くからでは分からなかったが、内部は微かな霧に包まれていた。

リリーリエ「えっ…」

ポケモンタワーへと足を踏み入れた途端、リリーリエ達の気配を感じたみたいさらに濃い霧が現れると、前から順番にサトシ・デント・リリーリエそしてマオと包み込んでしまった。

スイレン「リリーリエ!!？マオちゃん!!？」

カキ「サトシ!!？デントさん!!？」

マーマネ「どうなってるの!!!」

ロトム『急に4人の姿が消えたロト!!？』

~~~~~

四人を呑み込んだ霧は互いの姿をкаろうじて確認出来る程に深く

ポケモンタワー内部に充満していた。逸れないようシロンを抱き抱えたリーリエはサトシ達を呼びながら歩き始めた。

リーリエ「みんな！何処ですの!!!」

デント「この霧の所為で逸れてしまったみたいだ。だけど…こんなに直ぐに離れてしまうなんておかしいね」

リーリエ「この霧も…一体何処から…」

幸いにも一人になる事はなかったリーリエはデントと一緒にさらに奥へと進んで行く。すると…

シロン「コン!?」

何かの気配を感じたシロンはリーリエ達を守るようにして身を屈め始めた。シロンの様子に危機感を感じたリーリエ達もシロンが見つめる先へと注意をやった。そして…

サレ…ココ…カラ

??? 「タチサレ…ココカラ…タチサレ！」

その声と一緒に青白い火の玉がリーリエ達の目の前へと現れた。自然発火によるものでもない。意思を持ったそれはリーリエ達の前に立ちただかった。

デント「!!!で!!!出えたああああ!!!」

青白い火の玉に包まれた正体不明の謎の物体。パニックになりかけた自分自身を振り払う気持ちでリーリエは力強くシロンに攻撃の指示を送った。

リーリエ「シロン!【こおりのつぶて】です!!?」

シロン「コオン!!?」

恐怖に負けじとシロンは氷の弾丸を放った。一直線に空を切りながら進んでいくが、氷の弾丸は当たらず、そのまま擦り抜けると後方の壁へと打ち込まれた。

リーリエ「当たらない!!!」

シロン「コン!!?」

ゆっくり近づいてくる実体の無い相手を前に足が竦むデントも勇気を出してモンスターボールを片手に取った。

デント「マイビンテージ!ヤナップ!」

ヤナップ「ヤナア!!?」

デント「ヤナップ!【タネマシンガン】!!?」

ヤナップ「ヤナップツツ!!?」

モンスターボールから飛び出したのはデントの長年の相棒であるヤナップ。すぐにヤナップも指示通りに攻撃を仕掛けるも、シロンの攻撃と同様にダメージを与える事が出来ずに擦り抜かれてしまった。しかし手の内様もない相手を前にでもリーリエとデントは何か無いかと二人で模索し始めた。硬直する二人に向かって一つの技がリーリエ達に向かって放たれた。

デント「今のは!!!」

リーリエ「【ムーンフォース】です!てことはポケモン!?!?」

ポケモンの技がヒントになったデントは一緒に迷い込んだカゲボウズ達に目を向けた。

デント「君たち【みやぶる】を使えるかい!? その技でこれの正体を見破って欲しいんだ!」

カゲボウズ「カアゲボ!!?」

ヨマワル「ヨオマ!!?」

直ぐに答えたカゲボウズとヨマワルは両目のスポットライトをその影へと当て始めた。【みやぶる】によってその姿がはっきりとしてきた時、その姿を確認したリーリエは声を上げた。

リーリエ「カ!カプ・レヒレ!!!」

シロン「コーン!!!」

カプ・レヒレ「レーシ!!?レシ!!?」

なんと霧の中に潜んでいたのはアローラの守り神と崇められている四体の守護神の内の一体であるポケモン。カプ・レヒレだった。

姿を見破られたカプ・レヒレはそのまま楽しげに回りながらリーリエへと元へと近づいて行った。何が起きてるか分からないままある一つの物をリーリエは渡された。何かを握った手の中を見てみるとそこにあったのはZクリスタルだった。

リーリエ「これは:フェアリーZ!!!」

シロン「コン!?!?」

受け取った事を確認したカプ・レヒレは呼び止めるリーリエに応じずに霧の中に隠れるとそのまま何処かへと消えてしまった。それと同時に深い霧はそのまま晴れてきた。どうやらこの霧もカプ・レヒレが作り出したものであったみたいだ。

デント「行ってしまったみたいだね:」

ヤナツプ「ヤナ:」

リーリエ「はい:それにしても何故アローラの守り神であるカプ・レヒレがカントー地方にいたのでしょうか:」

シロン「コ:ン」

不自然に思う点が脳裏を過るも束の間。

他のみんなの 心配かけまいとリーリエとデントはとりあえず外を出るために降りることにした。

~~~~~

ポケモンタワーの外に出ると、カキ、スイレン、マーマネと合流した。急に姿をくらました二人の無事の確認取れたカキ達はすぐさまリーリエとデントの元へと駆け寄った。

カキ「カプ・レヒレが…」

スイレン「不思議…なんでこんな所に居たんだろ…」

デント「何かわからないけど…まるでここに来る者を試してみた。みたいなの…感じがしたよ」

リーリエ「はい。この通りフェアリーZのクリスタルを頂きました！」

マーマネ「えっ!?? そうなの!」

カキ「まるで試練みたいだな」

カプ・レヒレの目的は何なのか。悩みに悩んでいるとポケモンタワーから逸れてしまったサトシが出てきた。

サトシ「おーい! みんな!」

ピカチュウ「ピカチュウ !!?」

ニヤヒート「ニヤブ!!?」

見た感じ怪我はなく無事みたいだ。サトシ達の安否を確認できて一安心かと思いきや、まだマオとアマージョの姿が見えないことに気づいた。

デント「サトシ! マオとは一緒じゃなかったのかい?」

サトシ「えっ!?? 戻って来てないの!??」

とその直後、マオとアマージョもポケモンタワーから外へと姿を現した。心配しているリーリエ達に向かってマオは大きく手を振った。

マオ「みんな! 私は大丈夫だよ!」

アマージョ「アージョ!!?」

スイレン「マオちゃん!!!」

マーマネ「良かった無事で！」

何がどうあれ無事に合流が出来一安心だ。そしてゲンガー達もいつものポケモンタワーに戻った事に大喜びするとタワーの周りを飛び回った。嬉しそうなゲンガー達を見ている中でリーリエはマオが抱えてる一体のポケモンへと目をやった。

リーリエ「マオ？その子は？」

マオが抱えているそれはピンク色に輝くグラシデアの花を持つ小さなポケモンだった。

シエイミー「シエイミ!!？」

デント「シエイミだ！これは中々珍しいポケモンだよ！」

幻のポケモンを前にリーリエ達は暫くシエイミーに釘付けとなった。

後から分かったことだが彼岸の守り神であるカプ・レヒレはあの世とこの世を繋げる力を持っている。中で何があったのか聞こうとマオの方へと顔を向けたが、目尻の下が僅かに赤いマオの目を見て辞める事にしたのは正解だったのかもしれない。

サトシ「ともあれ！一件落着いて事で良いよね！」

ゴース「ゴース!!？」

ゲンガー「ゲンガー!!？」

デント「そう！それに正体はカプ・レヒレというポケモンだったし！幽霊のような非科学的な物は存在しない事も立証出来たからね！」  
スイレン「そうだね！貴方の右肩に白い手が置かれているなんて私  
の見間違いよね！」

デント「……………」。

スイレン「なあゝあんで！嘘で！！」

デント「うわあああああああ！！！！」

ヒトツキ「ヒトオオオオ！！！！」

スイレンの冗談もデントには通じず、一目散にシオンタウンの方へと駆け出していった。デントの叫び声に驚いたヒトツキはそばに居たリーリエのリュックサックの中へと潜り込んでしまった。

サトシ「お：おい！デント！！」

ピカチュウ「ピカチュウ！！？」

リーリエ「ヒトツキも：落ち着いて下さい！」

シロン「コン！！？」

リュクサックの中で暴れるヒトツキを出そうと急いで開けようにも、上手くチャックを下す事が出来ない。なんとか下ろそうと格闘する中、暴れるヒトツキはリーリエのリュクサックに入っていたある物に触れてしまった。そして：

！！！！！！  
バシユユン  
！！！！！！

赤い光がリュックサックの中で光り輝き出した。輝き出したのと同じタイミングで暴れまわっていたリュックサックも静かになった。まさかと思いリーリエはリュックサックの中に手を入れると僅かに微動打にしているモンスターボールを手を取った。そして赤く点滅している開閉スイッチはそのまま静かに鳴り止んでしまった。

リーリエ「入って：しまいました：」

嵐のような静けさからサトシ達の驚愕した声がポケモンタワーの周りで響き渡ったのであった。想像が及びしないリーリエ達の旅はこれからも続いていく。



## 第四十話 前向きロケット団

次の街へと向かうリーリエ達。そんな彼らは突然として現れたロケット団に行く手を阻まれてしまっていた。

ヤマト「デルビル！【かみつく】!!？」

コサブロウ「ツボツボ！【ジャイロボール】!!？」

リーリエ「シロン！【れいとうビーム】!!？」

サトシ「ピカチュウ！【10万ボルト】!!？」

勢いよく攻撃を仕掛けに行ったデルビルとツボツボであったが、シロンとピカチュウの攻撃により後方へと吹き飛ばされると、ヤマトとコサブロウを巻き込んだ後、大爆発が起きた。爆音が響き渡る中、いつものようにロケット団はまた空の彼方まで吹き飛ばされてしまった。

ヤマト・コサブロウ「「やな気持ちいい!!」」

キラッ！

~~~~~

ロケット団員ヤマトとコサブロウ。リーリエ達の前に現れてはポケモン奪おうと企むも、毎度のように返り討ちにあっては空高くへと吹き飛ばれている。最近では目欲しい活動成果が得られていない事に苦悩する日々を送っている。ボロボロになりながらも、その場で立ち上がった二人は今日もまた日頃のストレスを大いに叫び始めた。

ヤマト「もう！何で失敗するのよ！」

コサブロウ「あのジャリボーイが旅に加わった事で彼奴らの戦力も倍増したしな〜」

この二人もまたサトシとは顔見知りでもあつて彼の實力は嫌という程知っている。只でさえ、日々トレーナーとしてかなり手強くなつ

てきているリーリエ達にも返り討ちにされるのに対し、新たにサトシとピカチュウまでもが加わったとなれば鬼に金棒だ。

ヤマト「ロケット団の名に懸けて失敗の連続はいただけないわ！」

コサブロウ「おう！こうなれば特訓あるのみだ！」

悩み落ち込む二人であったが彼らにも悪のカリスマ、ロケット団としてのプライドは持っている。このままボスであるサカキの顔に泥を塗るような事が続く訳にはいかないと二人は奮起した。

熱い志を乗せた拳を天高く突き上げると、空から一体のポケモンが二人に向かって此方に近づいて来るのが見えた。

デリバード「デリく!!？」

ヤマト・コサブロウ「えっ！デリバード!!？」

雪景色が写らない季節外れな格好をしたそのポケモンは大きな袋を担いで手を振るロケット団達に向かって降下した。ロケット団員にポケモンを支給する役目を持つデリバードの登場に二人の心は高ぶっていた。大きく手を振り誘導を送る二人はもう一体、デリバードの背中に乗っているもう一つの影に気がついた。

コサブロウ「あのニャースは確か……」

見えた影の正体はニャース。それも先日秘書の補佐役としてアローラ地方から入隊してきた悪タイプのニャースであった。

不思議に思う二人の前へと着陸したデリバードはすぐに袋の中からスマホロトムを取り出した。

ヤマト「何？」

コサブロウ「もしかして本部からか？」

新しいポケモンを支給される訳では無い事に不満が募る二人であったが、渋谷、スマホの画面に顔を覗かせた。映像が読み込み始めると、そこにサカキの秘書を務めるマトリの姿が映し出された。見たくもない顔に嫌気が指している二人にマトリは話を進めた。

マトリ『ヤマトにコサンジ！このところの成果は著しくも見積もってはいませんが、今どのような現状ですか？』

痛いところを突かれた二人は渋谷と答え始めた。

ヤマト「わ：私たちなりに！やっではいるわよ！」

コサブロウ「そうだ！この前だつてアローラ祭に潜り込んで乙技だけじゃなくてメガシンカの情報を纏めた資料も本部に送つたんだぞ！」

マトリ「潜り込んだのなら、何故アローラのポケモンの一匹や二匹を捕獲しなかったのですか？それに貴方達が送つたこの情報は先月にアローラから戻つたあの三人から伝達された内容ばかりです」

頑張つて掴んだ収穫も切り捨てられた二人は何も言い返す事も出来ず、悔しさのあまり下唇を噛み締めた。

マトリ『それと貴方達にデリバードを送つたのはまた別の理由です』

ヤマト「な…何よ？」

次に耳をしたのは二人にとって今後の活動に影響が出てしまう内容であつた。一呼吸を整えたマトリは静かに口を開いた。

マトリ『いまの手持ちの一体だけ残して、残りのポケモン達は直ちに本部へと預けなさい』

ヤマト・コサブロウ「!!!はあ!!!」

突然の事に驚く二人は「台のスマホロトム」に顔を近づけると激しくマトリを睨み始めた。二人の猛烈な態度に少し畏怖したマトリであつたが、軽く咳払いをした後、二人に納得して貰うように話を続けた。

マトリ『今このカントー地方に別の地方の組織が動き出している情報が出ました』

ヤマト「別の組織？」

それを聞いて落ち着いた二人はマトリの話に耳を傾けた。いつも自分達を卑下しているマトリの真面目な顔つきを見れば、ただ事ではない事は何となく感じた。

マトリ『ええ…。その組織はオーレ地方でダークポケモン騒動を引き起こしたと言われるシャドーという組織です』

コサブロウ「ダークポケモン？シャドー？」

ヤマト「何その？デルビル愛好家みたいな集団…」

マトリ『とにかく、我々が拠点としているここカントー地方で好き

勝手させる訳にはいきません。彼らと戦うためにも少しでも戦力が欲しいのです！」

その言葉にヤマトとコサブロウは互いの顔を見合わせた。正直な所、自分達の手持ちよりも遥かにレベルが高いポケモンの殆どは本部でスタンバイされている事は知っている。しかしそれでも団員であるヤマトとコサブロウのポケモン達の手も借りたいと頼んでくる様子から、過去最大の危機が本部に待ち受けようとしている事はこれ以上言わなくても理解した。

ヤマト「だ…だからと言って！何でわたし達のポケモンを送らないといけないのよ！」

コサブロウ「そ…そうだ！俺たちの戦力が減るだろうー！」

しかし、それでも自分達の仕事に支障が出るかもしれないのもまた事実である。何とか訴える二人であったが、いつも通りの冷たい目になったマトリは眼鏡を軽く上げた。

マトリ『定期連絡もよこさない。成果も得られない。そんな貴方達がポケモンの五体や六体持ったところで宝の持ち腐れだからです』

その言葉に深く胸に突き刺さった二人は仕方なくその命令に従う事にした。

マトリ『それで貴方達の定期連絡がこれ以上お拘らないようにそのニヤースが貴方達の監視役として旅に同行して貰うようにしました。それでは、これからの定期連絡。お忘れなきように』

こうして通信は切れた。言われた通りほとんどの手持ちをデリバードに預けると、受け取った事を確認し、本部へと帰っていくデリバードを見送りながら二人は静かに黄昏れ始めた。自分達の愚かさとは不甲斐なさ。それがまた一気に爆発した。

ヤマト「何なのよ！戦力倍増どころか！低下じゃない!!!」

コサブロウ「まあ、失敗続きだもんな。最近の俺たち…」

落ち込む二人は一緒に頭を深く下げると、本部から一緒に来たアローラのニヤースと目が合った。

ヤマト「そんでこのニヤースが私達の監視役？大した戦力にも成りそうにもないし、居てもいなくてもどっちでも良いんだけど…」

軽く愚痴を叩くヤマトに呆れた表情でニヤースは口を開いた。もちろん二人からしてポケモンの言葉が分かる訳がない。何を言ってるか分からないと首をかしげる二人の前に、本部から支給されたスマホロトムがニヤースの横に立つと、画面にメッセージが映し出された。どうやら、ニヤースが言った言葉を翻訳してくれているようだ。

ニヤース『ふん！それはこっちのセリフだニヤ！！？ニヤーは本部でゆっくりとお前達の様子を傍観していれば良かったものの、なんでおめや達の監視係にならないといけないのニヤ！！？』

コサブロウ「なるほど。その機械で俺たちと会話ができる訳か」

ヤマト「何を偉そうに…ふざけるんじゃないわよ！最近入ったペーペーが何言ってるのよ！」

その問いかけにソツポを向くニヤースの姿にさらに苛立ちを見せたヤマトは悔しさを爆発させた。そんなヤマトを落ち着かせる余裕もないコサブロウは少しの弱音を吐き出した。

コサブロウ「なあ…もしかして俺たち…コジロウ達よりも影が薄くなっているんじゃないのか？」

ヤマト「そんなの絶対嫌よ！ムサシよりも下に見られるなんて!!!」  
だんだんライバル視している彼等の方が実績を高く評価されている事に良く思わない二人はさらに落ち込んでしまった。弱々しい声で二人はお互いの現状を報告し合った。

ヤマト「ところで…あんたは何を残したの？」

コサブロウ「ツボツボだ。こいつの砂嵐は逃げるときには助けられているからな。ヤマトは？」

ヤマト「私はデルビルよ。なんだかんだ私の手持ちの中では攻撃力が一番高いし〜」

ダメ出しを貰った挙句に戦力も減らされた二人は悔しさを乗り越えて今の自分たちに腹を立て始めた。その想いが炎のように灯り始めた二人は一斉に立ち上がった。

ヤマト「こうなったら新しいポケモンをゲットよーコサンジ!!!」

コサブロウ「おう！こうなれば俺たちの分だけじゃなく、強いポケモンをどんどん本部に送ってサカキ様に俺たちの実力を知って貰う

んだ！」

奮起に満ちた二人は固い握手を交わすと、目の前に聳え立つ岩山に目を向けた。そこへ向かって二人は歩き出した。強いポケモンを手に入れるために

ヤマト・コサブロウ「いざー！イワヤマトンネルへ!!!」

~~~~~

イワヤマトンネルはカントーで最も長いトンネルが続いているダンジョンだ。日の光を通さない程に深く長い洞窟を探索するには光を照らすポケモンが必衰となっている。残念なことに懐中電灯すら所持していない彼らは仕方なく洞窟の中でなく、岩山を登り始めた。

洞窟に生息するポケモンの殆どは岩や地面タイプのポケモン。たまに地上へと顔を覗かせに出てくる所を見計らって、そこを狙うことにした。暫く登っていくと岩に擬態している一体のポケモンと目が合った。そのポケモンもロケット団に気がつくど、オレンジ色の結晶を光らせ始めた。それは攻撃の合図と言っているものだろう。

コサブロウ「あのポケモンはギガイアスだ！」

ヤマト「向こうから来てくれるなんてゲットして下さいって言うてるもんじゃない！」

ニヤース『そう上手く行くもんかニヤ？』

不思議と自信がみなぎっているロケット団はモンスターボールを手にとると、ギガイアス目掛けて走り出した。

ヤマト・コサブロウ「ギガイアス！ゲットだぜ!!!」

ギガイアス「ギガアアア!!!」

勢い良く駆け出した二人であったが、太陽光線を吸収していた事で

先にギガイアスの「ラスターカノン」が仕掛けられた。急なことにすぐに対処に移れなかったロケット団は呆気なく天高くへと再び吹き飛ばされてしまった。

ヤマト・コサブロウ「二度目のやな気持ちいい!!!」

キラッ!

~~~~~

ダンプカーも簡単に吹き飛ばしてしまうギガイアスのパワーを前に全く太刀打ちできなかったロケット団は作戦会議を開く事にした。

ヤマト「強すぎよ〜あのギガイアス…」

コサブロウ「俺らの手には負えないな。こりや〜」

ニヤース「レベルの差があり過ぎるのニヤ!!?」

ヤマト・コサブロウ「だったらお前も何かしら考えろ!!!」

そんな彼らに二人のトレーナーが近づいてきた。

???「あの…大丈夫ですか?」

ヤマト「オホホホ!大丈夫ですわ」

コサブロウ「こりやお気遣いどうも…」

振り向いたロケット団は彼らの顔を見て絶句した。

カノン・サトル「ロケット団!!!」

ヤマト・コサブロウ「げげっ!!!」

リーリエと一緒に旅をしていた頃から何度かいがみ合っていたカノンとサトルと思わぬ形で会ったロケット団はすぐに立ち上がった。

ヤマト「ここで会ったが百年目!」

コサブロウ「こうなればお前らのポケモンをゲットしてやる!」

サトル「そんな事させるもんか!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

カノン「やるなら相手になるわ！何でそんなにイライラしているか分からないけどね！」

ヒコザル「ヒココ!!?」

リーリエと別れた後、幾多のジム戦で力をつけて来た二人は恐れおののく事はなく、向かい合った。今にもバトルが始まりそうな時、ロケット団はカノンとサトルの後ろから近づいてくる一人のトレーナーに気がついた。

???「あら？何の騒ぎかしら」

その声に気づいたカノンとサトルも振り向いた。

サトル「パキラさん！」

カノン「この人達！ロケット団と言って人のポケモンを取る悪い人達なんです！」

赤いサングラスを着用したパキラと名乗るトレーナーに聞き覚えがあったコサブロウは口を開いた。

コサブロウ「パキラって…もしかしてカロス地方の四天王…」

パキラ「あら！カントー地方の人が私の事を知ってくれているなんて光栄だわ！」

ヤマト「だったら、あんたのポケモンから頂いてやるわ！」

コサブロウ「ええ!!!ちよつと待てヤマト！俺たち野生のギガイアスにも負けたのに四天王にも、勝てるわけないだろう！」

ヤマト「そんなのやってみないと分からないでしょうが!!!」

ニヤース『結果は見えてるニヤ…』

ヤマト「あんたは少しは黙ってなさい!!!」

サトル「ギガイアス？」

カノン「それってイワヤマトンネルにいたあのギガイアスの事…」  
ギガイアスの名を口にした二人に一悶着を終えたロケット団はカノンの方へと振り向いた。

ヤマト「何よ？あのギガイアスは私たちが見つけたのよ！」

コサブロウ「そうだ！そうだ！横取りしようとはなんて卑怯な奴らなんだ！」

カノン「あんた達に言われたくないわよ！」



怒るカノンの肩を優しく置き、落ち着かせたパキラはロケット団の方へと歩み寄った。こちらに向かってくる四天王を前にロケット団は固唾を飲んだ。警戒する彼らの様子が可笑しくてつい笑みが溢れた。パキラは一つの交渉をロケット団に持ちかけた。

パキラ「ねえ？もしよかったら手伝ってくれないかしら？」

ヤマト「手伝う？」

コサブロウ「もしかしてギガイアスゲットにか？」

パキラ「ええ…貴方達が見つけたそのギガイアスはダークポケモンである可能性が高いの！だから一刻も早く被害が出る前に保護して置きたいのよ」

ヤマト「ダークポケモン…」

コサブロウ「あの秘書が言っていたなあ」

二度目にして聞くその呼び名に二人は顔を見合わせた。他の地方の四天王まで訪れる辺り、自分達が考えている以上の一大事件がここカントー地方で起こるような予感が彼らに再度、植えつけられた。

戦力が削られている今こそ、彼らに同行してダークポケモンを自分達の目で確認して置くのも良いと考えたが、悪のプライドがそれを邪魔をした。

ヤマト「冗談じゃないわよ。それに私らがあんた達を手伝うメリットはございませう」

コサブロウ「おう！それにあのギガイアスは俺たちが頂くんだ。お前達の手伝いなんかするもんか！」

ロケット団の名にかけて頼まれて付いてくるような安い集団と思われたくないのか、二人はパキラの頼みを強く拒否した。しかし、二人の言動から彼らもギガイアスにもう一度、立ち向かおうとしている姿勢に気づいたパキラは曇ったサングラスのレンズを拭きながら話を続けた。

パキラ「タダとは言わないわ。手伝ってくれたら、良いものをあげるわ」

ヤマト・コサブロウ「「え!?!良いもの!!!?」

そう。これは頼みではなく交渉の話。パキラから報酬の話に耳が

動いたロケット団は目を光らせながら彼女の元へと近づいた。

フレア団に協力していた経験を持つていた彼女。悪の組織の一員である彼らが自分達に利益がない話に素直に首を縦に振るとは最初から思ってもいかなかった。案の定、報酬の話になった途端に掌を返したロケット団はその交渉を呑む事にした。

ヤマト「そうと決まればやってやろうじゃない!」

コサブロウ「おう!カントー地方の危機を救うのは俺たちロケット団だ!」

カノン「単純すぎる」

サトル「あはは…」

ヤマト・コサブロウ「いぎ!イワヤマトンネルへ!!!」

ニヤース「やれやれだニヤ…」

~~~~~

もう一度ギガイアスが居た場所に戻った一同は刺激を与えないよう岩陰に隠れて、寝ているギガイアスの様子を伺った。目を細めてジツと見つめても、ダークポケモンの特徴である黒いオーラは見えず、全く変わらない普通の野生ポケモンでしか彼らの目に写らなかつた。本当にダークポケモンなのか。疑わしい目をパキラに向けるヤマトに彼女は深く頷いた。

パキラ「アラン君とマノンちゃんが戻ってくるまで何とかあいつを足止めしておきましょう」

サトル「分かりました」

カノン「あんた達!変な企みは辞めてよね!」

ヤマト「やらないわよ!」

コサブロウ「今日ばかりは一時休戦だ」

互いに協力の有無を確認した後、それぞれギガイアスの方へと向かって歩き出した。

ギガイアス「ギガ!?？」

ロケット団達の気配に気づいたギガイアスは彼らに憎しみの念を向けてきた。

ヤマト「ギガ?と聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

二人「まあ!特別に答えてやろう」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト!」

コサブロウ「コサブロウ!」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の二人には」

コサブロウ「シヨツキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ツボツボ「ボツツ!!?」

ギガイアス「ギガアア!!!」

口実が終わると同じタイミングにエネルギーチャージを終えたギガイアスはそのまま「ラスターカノン」をロケット団に向けて放射した。ロケット団の少し前に爆発した「ラスターカノン」の衝撃により、ロケット団は大きく後ろへと吹き飛ばされた。

ヤマト「ちよつと!あんだ!」

コサブロウ「いきなり攻撃だなんて卑怯だぞ!」

尻もちをついた彼らは拳を突き上げて訴え始めた。自分たちのこれまでの事を棚に上げてギガイアスを非難しているその様子をカノンとサトルは冷めた目で見つめていた。

ギガイアス「ギガアア!!?」

ルールが存在しない野生ポケモンの戦闘は自分達のターンを待っててはくれない。攻撃エレルギーをさらに溜め込み始めたギガイアスを見て、カノンとサトルはすぐに有利とされるポケモンを繰り出し

た。

サトル「ブイゼル！【アクアジェット】だ!!?」

ブイゼル「ブイブイ!!?」

カノン「出て来てフシギソウ！【やどりぎのタネ】!!?」

フシギソウ「ソオウ!!?」

モンスターボールから飛び出した直後、ブイゼルの攻撃はギガイアスに命中した。目にも止まらない早さに一瞬の隙を作ったギガイアスに向けて、今度はフシギソウによる攻撃によって、ギガイアスは身体中の自由を奪われてしまった。

さらにそのまま続くブイゼルとフシギソウの猛攻撃を浴びせられたギガイアスは弱点を付けられた二体の攻撃を前にすっかり怯んでしまった。

パキラ「やるわね！二人とも」

ヤマト「あれま！」

コサブロウ「俺たちの出番は…無しって感じ?」

さつきと打って変わって、此方側が優勢している事に緊張感が解れたロケット団の台詞にデルビルとツボツボも軽く頷いていた。

サトル「ブイゼル！【みずのはどう】!!?」

相性の良い水技で一気に叩き込むブイゼルは水の力を中心に集めだした。しかし、そう遣られているばかりでもなかった。ギガイアスも力を込めた【ダーククラッシュ】で技を発動する前のブイゼルに大きなダメージを与えた。

サトル「ブイゼル!!!」

ブイゼルを仕留めた勢いでギガイアスはコアを光らせながら、今度はロケット団に向かって突進して行った。

ヤマト「仕方ないわね！デルビル！【かえんほうしゃ】!!?」

デルビル「デェル!!?」

コサブロウ「ツボツボ！【ジャイロボール】だ!!?」

二人の指示にデルビルとツボツボは動き出した。しかし、水タイプと違って相性の悪い炎タイプを技の前に、ギガイアスは怯むことなく突っ込んでいった。そして前方で【ジャイロボール】を仕掛けるツボ

ツボ諸共、二体を後方へと吹き飛ばした。

デルビル「デェル!!!」

ツボツボ「ボツツ!!!」

飛ばされた二体に向かってさらにギガイアスは攻撃を仕掛けて来た。エネルギーを溜め込んだ「ラスターカノン」をデルビルに向けて放射した。

コサブロウ「ツボツボ!」「ヘドロばくだん」だ!!? デルビルを守れ!!!」

ツボツボ「ボツツ!!!」

極度な防御力を持っているツボツボはコサブロウの指示を聞くと、倒れているデルビルの前に立つと、「ヘドロばくだん」を放った。しかし、ギガイアスの圧倒的なパワーの前で押し切られてしまい、直撃を受けてしまった。

コサブロウ「ツボツボ!!!」

ロケット団のポケモン達を見て、カノンとサトルもすぐに攻撃の指示を送った。

サトル「ピカチュウ!」「10万ボルト」!!? ブイゼル!」「みずてっぽう」!!?」

カノン「ヒコザル!」「かえんほうしゃ」!!? フシギソウ!」「はっぱカッター」!!?」

ギガイアス「ギガアアアアア!!?」

圧倒的な攻撃と防御を前にカノンとサトルはピカチュウ達による一斉攻を仕掛けた。ギガイアスはピカチュウ達の存在に気づくも、素早い攻撃にはすぐに躲す事は出来なかった。攻撃を受け、後方へと押し出されたギガイアスを見てカノンとサトルは確かな手ごたえを感じた。

しかしギガイアスは負けじとその場に踏ん張り止まると、身体中を廻るエネルギーをその場で一気に解放した。その衝撃波に飲み込まれたピカチュウ達はおもいつきり吹き飛ばされてしまった。

サトル「ピカチュウ!!! ブイゼル!!!」

カノン「ヒコザル!!! フシギソウ!!!」

二人のポケモン達がやられる所を見たロケット団に勝てないという文字が浮かび上がった。自分達のポケモンの状態からでも、この状況でギガイアスに勝つ手段が見つからない。歯をくいしばる二人にニヤースはゆっくり歩み寄った。

ニヤース『相手が悪いニヤ。さっさとこの場を離れた方が良いニヤ』

スマホロトムに映し出されたニヤースの言葉に二人の悔しさはさらに込み上げてきた。デルビルとツボツボを戻そうと、モンスターボールに手をかけたが、二人は無言のままデルビルとツボツボの方へと目を向けた。

ヤマト「デルビル…行ける?」

コサブロウ「ツボツボ…お前はどうか?」

その声を聞いた二体も無言のままその場を立ち上がった。しかし、彼らはそれでもギガイアスの前から逃げようとはしなかった。ダメージを引きずりながらも、もう一度ギガイアスの方へと向かい会おうとする。そんな二体の様子を見たロケット団に薄っすらと笑みが溢れた。

コサブロウ「毎度毎度! やられっぱなしで行くもんか!」

ヤマト「ええ! 見せてやるわ! 我らのロケット団魂をね!」

デルビル「デェル!!?」

ツボツボ「ボツツ!!?」

ニヤース『……………』

ヤマトとコサブロウの想いを受け取ったデルビルとツボツボは根性を入れ直した。その二体にギガイアスは怒涛の「ストーンエッジ」を繰り出した。

ヤマト・コサブロウ「躲せ!!!」

両腕を大きく地面へと叩きつけたギガイアスにより地面から無数の岩が連なると、ロケット団達に向けて放たれた。ダメージを負っていながらも、それ程にも速くない「ストーンエッジ」を難なく躲す事が出来ると、すぐに二体はギガイアスに向けて技を放つ体勢へと移した。

ヤマト「デルビル！【かえんほうしゃ】!!？」

デルビル「デェル!!？」

コサブロウ「今だ！ツボツボ！【ジャイロボール】!!？」

ツボツボ「ボツツ!!？」

デルビルの火炎放射がギガイアスを包みんだまま、同じ炎タイプに強いツボツボの攻撃はそのままギガイアスへと命中した。しかしツボツボの攻撃を受けるも、持ち堪えたギガイアスは攻撃を繰り返すツボツボをそのまま地面へと叩きつけようとしていた。前足が振り下ろされようとするその瞬間、ツボツボは【ジャイロボール】を止めた。

コサブロウ「やれ！ツボツボ！」

するとツボツボの甲羅の中から青紫色の液体が放射された。その液体が全身に浴びたギガイアスは突然のことに驚いた。

カノン「な…何!?!あの液体？」

パキラ「あれはツボツボの体内で熟成されたジュースね」

思い寄らない攻撃？にギガイアスは怯んでしまった。その隙を逃さなかったデルビルはすぐにギガイアスの懐へと潜った。

ヤマト「デルビル！【ほのおのきば】!!？やっちゃって!!！」

その瞬間をデルビルは口から吹き荒れる炎を纏わせた牙でギガイアスにダメージを与えた。だが、またしても持ち堪えたギガイアスによりさらなるピンチが襲ってきた。またしても攻撃を仕掛けるギガイアスを前に身構えるデルビルとツボツボであったが、その直後、何かに足をとられたギガイアスは前方へと大きく倒れ込んだ。

何が起きたか茫然とする一同が目にしたのは、ギガイアスの片方の足が埋まっていた様子であった。その所為でバランスが崩したとは分かるが、この【あなをほる】によって作り出された穴の正体に疑問を浮かべた。すると、背後に地面から何かが出てきた気配に気づいたロケット団は振り向くと、そこにはニヤースの姿があった。

サトル「この【あなをほる】って…」

ヤマト「もしかして…あんた？」

身体の土埃を払いながら、吐き捨てるように口を開いた。

ニヤース『ふん…ここであいつの捕獲に失敗したらニヤーマまで本部

にどやされるニヤ。ニヤの気が変わらない内に早く片付けるニヤ」  
出逢っても間も無い彼らに信頼関係は作れていないが、同じロケット団として、何よりも彼らのロケット団としての誠意に心が突き動かされたのか分からないが、ニヤースは背を向けたまま照れ臭そうに言い放った。

コサブロウ「助かったぜ！ツボツボ【ジャイロボール】だ!!？」

ヤマト「デルビル！【かえんほうしゃ】!!？やっちゃって！」

怒涛の攻撃を繰り返すロケット団達。そしてこの鬨の最中、デルビルは溢れ出てくるパワーに踊らされ、その闘争心はさらなるステージへとデルビルを案内した。

デルビル「!!!ウオオオオ!!!」

溢れ出るパワーを解放するかのよう、雄叫びをあげたデルビルの身体は突然として青白く光始めた。

サトル「あの光！」

カノン「もしかして！」

ヤマト「もしかすると!!!」

コサブロウ「そのもしかしてだ!!!」

徐々に甲高くなるその声はまるで地獄の底から響き渡るかのよう  
に聞こえ、思わずギガイアスは身震いを立てた。胴体が長くなり、悪魔の角を生やしたそのポケモンの雄叫びは山びこのように周りを反響し始めた。

ヘルガー「ヘエエエルウウウ!!!」

ヤマト「きやああ!!!ヘルガーは進化したわ!!!」

カノン「あれがヘルガー」

『ヘルガー ダークポケモン』

悪・炎タイプ

デルビルの進化系。口から吹き出す炎で火傷するといつまで経っても傷口が疼いてしまう。不気味な遠吠え聞いたポケモンはその恐



ろしさに一目散に巢へと戻ってしまおうと言われてる』

この時を待っていたかのようにパキラは静かにロケット団の方へと歩み寄った。

パキラ「もうそろそろかと思っただけど、思ったよりも早く進化したわね。受け取りな!」

そしてある物をヤマトとヘルガーに向けて投げ渡した。それを受け取った二人は目を丸くして、互いに目を向けた。

ヤマト「こ…これって!!!」

コサブロウ「キーストンと…メガストーン!!!」

パキラ「知っているなら、説明は要らないわね」

ギガイアス「ギガアア!!?」

ニヤース『考えてる時間はないみたいニヤ!』

コサブロウ「ヤマト!やるしかないぞ!」

ヤマト「ええ!」

キーストーンが装着されたメガバングルを腕に巻いたヤマトはすぐにヘルガーに合図を交わした。

ヤマト「行くわよヘルガー!」

ヘルガー「へエエル!!?」

それに応えるかのようにヘルガーは再度、雄叫びをあげると、その声に反応して、ヘルガーのメガストーンも光り輝き始めた。

ヤマト「気持ちだけでもみんな一緒!」

コサブロウ「地獄の底から解き放て!我らの力よ!」

ニヤース『今こそ!その新たな力を呼び覚ますのニヤ!』

ツボツボ「ボツツ!!?」

それぞれの口実が終えると、キーストンとメガストーンは一筋の光の線となって、互いを結び合わせた。ロケット団の絆の力が強くなると、その光を全身に浴びたヘルガーはさらなる進化を得た。

ロケット団「ヘルガー!!!メガシンカ!!!」

ヘルガー「!!!へエエエル!!!」

!!!へエエエル!!!

虹色の光に身を包んだヘルガーは全身を発熱させると、赤く染まった角はさらに大きく伸び、骨を模した装飾を形成した。さらに高熱の炎の手にした事により、幻影のように揺らめくヘルガーの姿がこの世に降臨された地獄の使いのようにも見えた。メガヘルガーへとメガシンカを完了させると、ヤマトの指示を待つ間もなく、ギガイアスへと駆け出した。

ヤマト「ヘルガー！「かえんほうしゃ」!!？」

ヘルガー「ヘルル!!？」

ギガイアス「ギイガアアア!!」

ニヤース「凄い威力ニヤ!!？」

コサブロウ「メガシンカのお陰で技の威力もパワーアップしてるんだ！」

デルビルの時よりもはるかに火力が増していて、その炎は一瞬にしてギガイアス全体を包み込んだ。凄まじい熱風に目も開けられず、動けない状態でいたギガイアスであったが、少しずつ目を開けると、負けじとロケット団の方へと歩き出した。安心が出来ないこの状況に緊張が走るロケット団の頭上から一つのモンスターボールが通り越した。

サトル「行けえ！キテルグマ!!!」

キテルグマ「クウ!!？」

サトルが投げたモンスターボールから出てきたのはごうわんポケモンのキテルグマだった。アローラ祭で出逢ったあのキテルグマだ。炎を振り払ったギガイアスはキテルグマに向かって突進する。そのギガイアスを前にキテルグマは両腕を大きく広げて待ち構えた。

サトル「キテルグマ！ギガイアスを止めるんだ!!!」

ギガイアスを掴んでその猛攻を止めたキテルグマはその力を緩める事なく、取っ組み合いが始まった。

カノン「大丈夫?!？ロケット団！」

ヤマト「まったく！」

コサブロウ「来るのが遅いぞ！」

カノンとサトルの復活に大いに喜ぶロケット団。敵として向い

合っているも、この場に置いては強い味方であった。サトルに続いてカノンもモンスターボールを投げ入れた。

カノン「よし！出てきて！エビワラー!!!」

エビワラー「エビシエ!!?」

カノン「【マツハパンチ】!!?」

出てきたエビワラーは持ち前のフットワークで近づくと、すぐにも止まらない早さのパンチをギガイアスにヒットさせた。岩も砕くその強烈なパンチに蹠踉めくギガイアスにキテルグマも渾身の力を拳に乗せた。

サトル「今だ！キテルグマ！【アームハンマー】!!?」

キテルグマ「クウウ!!?」

アローラ最強の怪力がギガイアスの全身を震わせた。この一撃によりこれまでのダメージが一気に重く重なったギガイアスはもうすっかり戦う気力が無くなっていった。その場を離脱しようと穴を掘り始めると、イワヤマトンネル内部へと逃げ込み始めた。

コサブロウ「【すなあらし】だ!!?」

空かさず甲羅に潜ったツボツボは全身をフル回転させると、そのまま巻き上げた砂埃をギガイアスに向けて放つと、その猛風に踏ん張りが利かず、倒れないよう身体を支えるために掘り進める手を止めてしまった。さらに急に巻き上げられた砂嵐の所為でヘルガーの接近に気づけず、ヘルガーの鋭い牙がギガイアスに向けられた。

ヤマト「止めよヘルガー！【かみくだく】攻撃!!?」

ヘルガー「へエエルウ!!?」

ギガイアス「ギイガアア!!!」

急所に当たったその攻撃が決め手となり、ギガイアスは倒れた。戦闘続行不能と見たパキラはスナッチボールを取り出した。

パキラ「スナッチボール!!!」

スナッチボールが見事に命中すると、ギガイアスはそのまますなッチボールの中へと吸い込まれ、そのまま捕獲された。

サトル「やりましたね！」

パキラ「ええ、一先ずはこの辺りは大丈夫そうね」

カノン「今回ばかりはロケット団のおかげね！ありがとう！ロケット…」

目的が達成され、気が緩んでしまった隙を突かれてしまった。ロケット団にお礼を言おうと、振り向いたその瞬間、突然飛び出してきたマジックハンドがパキラが持っていたスナッチボールを奪い取ったのだ。

ロケット団「こ…だあははは!!」

そこにはギガイアスが入ったスナッチボールを手にし、高笑いを上げているロケット団の姿がそこにあった。

ヤマト「このギガイアスをゲットできたのは私のヘルガーのお陰♪」

ヘルガー「へエル♪」

コサブロウ「よつて！このギガイアスは我々の物だ！」

ニヤース『さらばニヤー!』

抜け目のないロケット団は奪う物も奪った所でその場を立ち去ろうとしたその直後、頭上から降り注いだ「はっぱカッター」がロケット団達の行く手を遮った。

空へと目をやると、リザードンの背に乗っているアランとマノンがいた。

アラン「悪いがそのダークポケモンは返して貰うぞ！」

リザードン「グウオオ!!？」

サトル「アランさん！」

カノン「マノン！」

すでにメガリザードンXへと進化しているリザードンは青白い炎を吐きながら、ロケット団に対し威嚇し始めた。しかし、メガシンカという力を手にした今の彼らには負けるビジョンが見えていなかった。アラン達に向けて胸を張るロケット団はヘルガーを前に出した。

ヤマト「あらら、いいのかしら〜！」

コサブロウ「今回の俺たちは一味も二味も違うんだぜー！」

ニヤース「いや、おニヤー達ちよつと待つニヤー!!？」

且つ、一人冷静だったニヤースは二人を止めに入っただが、もう素手

に遅かった。ニヤースの忠告を無視して、ヤマトはヘルガーに指示を送った。

ヤマト「ヘルガー！【かえんほうしゃ】よ!!?」

ヘルガー「へえエル!!!」

ヘルガーの火炎放射はリザードン目掛けて放たれた。しかし、その炎をリザードンはあっさり鋭い爪で掻き消してしまった。

ヤマト・コサブロウ「あ・れ?」

啞然としているヤマトとコサブロウに容赦なくリザードンによる攻撃が襲いかかった。

アラン「リザードン！【ブラストバーン】!!?」

リザードン「グウオオオオオオオ!!?」

地面から吹き上がった炎に吞まれたロケット団はそのまま上空へと吹き飛ばされた。爆発の衝撃でおもわず手放してしまったスナッチボールはそのままパキラの手の中へと返って行った。結局いつものようにロケット団は遙か彼方へと飛ばされてしまったのであった。

ニヤース「メガシンカしても力の差は歴然だニヤァ!!!」

コサブロウ「慢心は良くないって訳だな!!!」

ヤマト「折角良い流れだったのに!!!」

ロケット団「三度目の…やな気持ちいく!!!」

キラッ

カノン「だけど…メガシンカの力がロケット団の手に渡っちゃった…」

パキラ「良いのよ。元々あれが報酬の元だったし!」

パキラ「悪の組織と言っておきながら、あの人達、ちゃんとポケモンを大切に思っているのね!」

~~~~~

一日三度も吹き飛ばされて流石に身体が堪えたロケット団であったが、全身の痛みよりもヘルガーの進化にメガシンカを手にした事への余韻に浸っていた。ダークポケモンの捕獲はならなかったものの、彼らにとってはそれ以上の成果を得られたようだ。

ヤマト「キーストンにメガストーン！この力があれば、減らされた戦力分を補えられるわ！」

ニヤース『寧ろ、それを本部に送った方が良いと思うニヤ…』

コサブロウ「いいや！この力を使えば強いポケモンをどんどんゲット出来ることも夢じゃないぞ！」

ヤマト・コサブロウ「なんだかとってもいい感じ!!!」

ニヤース『先が…思いやられる…ニヤ!!?』

アローラニヤースの加入。そしてメガシンカを手にしたロケット団。彼らの今後の活躍にも注目だ。

## 第四十一話 起きてよ！カビゴン！

クチバジムへ再挑戦のためクチバシテイへと向かうリーリエ達。だが、そんな彼らの前に一体のポケモンが行き道を塞いでいたのであった。

カビゴン「Zzzzzz…」

気持ち良さそうに日光浴して寝ているだけなのにその姿には迫力があつた。山のように聳え立つそのまん丸に太った大きな身体を前にリーリエ達は唾然と見上げていた。

デント「これは…見ている僕たちも眠くなってしまうようなテイストだね」

マオ「カビゴンはどの地方に居てもカビゴンなんだね」

地方に寄って性格が異なるポケモンもいるため、ポケモン図鑑にはその地方ならではの説明文が分岐し明記されている。例としてあげるのであれば、気性が荒い事で有名なケンタロスであるが、アローラ地方では環境の気候により落ち着いた性格をしているためライド用のポケモンとして活躍しているみたいな感じだ。

だが、他の地方ともカビゴンと変わらない様子から、興味本位で近づいたナギサやトゲデマルはカビゴンの腹の上で楽しそうにトランポリンを始め出した。食べる事以外には興味を持たないカビゴンは自分の腹の上で遊ぶナギサ達に気にもとめず、朗らかに眠り続けた。

『カビゴン いねむりポケモン』

ノーマルタイプ

一日に食べ物を400キロ食べないと気が済まない。多少カビが生えた食べ物であっても気にせず食べる。お腹を壊したりはしない。食べ終わると眠ってしまう』

カキ「だけど、これじゃあ通れないぞ！」

クチバシシティに向かうためにはこの道を通らなければならなかった。僅かに通れそうな隙間も見当たらないため、完全に行く手を遮られてしまった。

サトシ「仕方ない。クチバシシティまでは遠回りになっちゃうけど、別の道で行こう」

リーリエ「そうですね。起こすのも可愛そうですねから」

ロトム『それなら！新たなルートを検索するロト!!?』

リーリエ達は進路を新しく決めるべく、近くにあるポケモンセンターへと向かう事にした。その場を離れても、カビゴンの存在感はリーリエ達の視界から見えなくなるまで消えることはなかった。

~~~~~

何処か古ぼけた村にあるポケモンセンターに着いたリーリエは育て屋さんで貰ったポケモンの卵の手入れをしていた。シロンの時から経験している事もあって、慣れた手つきで卵を優しく磨いていた。その度にくすぐったいのか。時々、卵が僅かに動いている様子も日に日に見かけるようになった。

スイレン「あっ！またちよつと動いた！」

マオ「何が産まれてくるんだろ！楽しみだね！」

カキ「卵の模様から想像すると電気タイプのポケモンって感じがするな!!?」

マーマネ「だとしたら、エレキブルかデンリュウみたいなカッコいいポケモンになるのかな？」



スイレン「サンダーとか！」

一同「「それはない……」」

黒の縞模様に含まれた黄色の卵。その色や模様から産まれてくるポケモンを考察し合うリーリエ達をサトシとデントは微笑ましくその光景を眺めていた。

デント「ポケモンの誕生は何度見ても良いものだからね。ズルツク達は元気かい？」

サトシ「ああ！みんなオーキド研究所で楽しく過ごしてるよ！」

するとイツシユ地方で旅した思い出を語る二人の前に一人の男が映った。

サトシ「あれって……もしかして！」

特にサトシはその人物を見た途端に飛び上がると、一目散に駆け出しました。

サトシ「おーいタケシ!!!」

タケシ「おっ?」

長年、サトシの成長を見届けていた人物。自分の名が呼ばれた方に振り返るタケシもそっちへ向かって駆け出した。

タケシ「お姉ーさん!!!」

サトシ「ええええええ!!!」

しかし、タケシの目に映ったのはまた別の人物であった。サトシを通り越すと、その後ろにいる女性の方へと駆け寄ったタケシはそっと手を取った。

タケシ「この村を救いに参りました。自分はタケシ。あなたのナイトでございます」

ドシュ!!!

タケシ「しびれびれ〜!!!」

グレッググル「ケツケケケ!!?」

グレッググルに引きずられるタケシを呆気に取られる様子で見るリーリエ達。そんなリーリエにもう一人、薄紫のセミロングヘアの少女が呼び止めた。リーリエもその声の方へと振り返ると、振り返るリーリエの頬に指を立て、イタズラを仕掛けた。

カノン「久しぶり〜♪リーリエ！」  
リーリエ「カノン！」  
ヒコザル「ヒココ!!？」  
シロン「コーン!!？」

~~~~~

カノン「初めまして！カノンです！きゃー!!!本物のサトシさんだ!!!  
尊敬してます！」

サトシ「あ…ああ！ありがとう！」

同じマサラタウンの出身でもあって、彼のファンでもあるカノンはマサラのヒーローを前に自分を押しえられなかった。嬉々と迫るカノンを前に押され気味なサトシにマオ達は面白がしく笑っていた。

タケシ「おお！すっかりマサラのヒーローだな！サトシ！」

サトシ「えへへ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

グレッグル「グルウ!!？」

そんな熱烈俊彦なカノンに嫉妬？したのか少しふくれっ面なりー  
リエはカノンをサトシから引き離そうとした。

リーリエ「カノン！そんなにグイグイ行ってしまおうと、サトシが  
困ってしまいます！少し離れて下さい！」

カノン「ええく!!!いいじゃん！何でそんなに…」

……………。

カノン「そっか／＼／」

リーリエ「そ／＼／そういう意味ではありません／＼／／」

サトシ「ん？なんの話だ？」

リーリエ「聞かなくて大丈夫です!!!」

忘れた頃にやってくる揶揄うカノンの口を押さえながらリーリエは強く否定した。

デデンネ「デデデ!!？」

カノン「あれ？もしかしてこの子…トキワの森の…リーリエゲットしたの？」

リーリエ「いえ、これには事情がありました…」

カノンの事もしつかりと覚えていたデデンネもヒコザルを見つめるなり挨拶を交わした。久しぶりでもあつて驚くヒコザルもデデンネとの再会を大いに喜んでいた。

デント「そういえばタケシ。村を救いに来たとは一体どういう意味なんだい？」

タケシ「ああ…それが…」

先程タケシが口説き文句の中で伝えていた言葉がひかかっていたデントはタケシに質問した。ちなみにこの二人も互いに面識がある仲である。

何処か古ぼけた村と感じていたリーリエ達であつたが、実は此処はあらゆる作物が豊富に育ちやすく、とても恵まれた環境に位置した村であつたのだ。しかし、食べ物求めて山から降りて来たあるポケモンが此処の作物を気に入ってしまい、そこに移り住むかのようにして毎度、作物を荒らしては食い尽くしてしまうのだ。その所為で食糧不足に陥ってしまった村の住人の中には栄養失調で倒れる人も出てきてしまった。タケシはそのヘルプを受けてこの村に立ち寄つたのだ。そして、この作物を食い荒らす者の正体はリーリエ達がこの村に訪れる前に出会つたあのカビゴンだつたのだ。

マーマネ「そんな…大変な事になってたんだ…」

カキ「だつたら！あのカビゴンにはここから離れて貰わないとな！」

この村の一大事に気づいたリーリエ達は協力して野生のカビゴンを追い払う計画を立て始めた。しかしその最中、サトシとタケシは憂鬱そうに難しい顔を抱えていた。

サトシ「カビゴンか…」

タケシ「そうなんだ…それが問題なんだ…」

スイレン「何で？そんなに悩んでるの？」

カノン「うん。野生のポケモンなら誰かがゲットしてしまえば、事が済むんじゃない？」

簡単そうに言うが、みんなが思っている以上に簡単な事では無いのはこの二人がよく知っていた。そのまま疑問の顔を浮かべるみんなにサトシとタケシは自分達が知っているカビゴンの事について話し始めた。

サトシ「カビゴンは眠ったままでの戦闘だと、眠っている最中に自力で体力を回復させちゃうんだ。だから弱らせるには、まずはカビゴンを起こさなくちゃならないんだ！」

タケシ「だけどカビゴンは滅多な事では早々に起きる事はないポケモンだ。ダメージを与えられない以上、ゲットがとても難しいポケモンなんだ！」

ロトム『二人とも。随分とカビゴンに詳しいロト!!?』

サトシ「ゲットした事があるからな」

マオ「へえ、そうだったんだ」

余談だがサトシとカビゴンとの出会いはオレンジ諸島。ザボンを食い荒らすカビゴンを止める事にその村の人と協力した事をきっかけに出逢った。何となく今回の件と類似した点もあつて話しているうちにとても懐かしく感じていた。

その後、サトシとタケシからある程度の情報を得たリーリエ達はその後どうやってカビゴンを止めるか考える事にした。

リーリエ「それでしたら！サトシはどうやってカビゴンをゲットしたのですか!??そこから何かヒントが掴めるかもしれない！」

リーリエの言葉にサトシは今一度、カビゴンとの出会いから記憶を巡ってみた。そしてものの数分である一つの策が閃いた。

サトシ「そっか！食べ物だ!!!」

食いじが張っているカビゴンにとってそれは小さな弱点でもあった。食べ物を中心に置いてリーリエ達はカビゴン捕獲作戦を立てて行く事にした。

~~~~~

場面は変わって、リーリエ達はカビゴンと会った場所へと戻った。相変わらずカビゴンはあの時会った時と同じで場所を変えずに静かに寝入っていた。

タケシ「試しにだ！一度やってみようか！」

リーリエ「はい！」

要は試してみるのも一つの手だ。状態異常のポケモンは通常よりも捕獲の成功率は伸びる。まずはこのままゲット出来るかどうかリーリエは空のモンスターボールを取り出した。

リーリエ「お願いします！モンスターボール！」

寝ているため当てるのは簡単だった。命中させると、巨大な身体を持つカビゴンは小さなモンスターボールの中へとそのまま吸い込まれて行った。しかし、一度も微動打にせず、カビゴンはすぐにモンスターボールから出てきてしまった。

ロトム『やっぱりダメージを与えない限りゲットは難しい口ト!!?』

そうだったら、みんなで考えた捕獲作戦に切り替えるだけだ。

マオ「みんな！お待たせ！」

シエイミ「シエイミ!!?」

遅れてみんなと合流したマオとデントは小さな紙ケースを持っていた。中を開けると甘酸っぱい香りがリーリエ達の鼻の奥へと突き刺した。

マオ「デントと自作して作った木の実をふんだんに使ったカップケーキだよ！」

マーマネ「わああ！美味しそう〜」

カノン「この香りは私でも目を覚ましちゃうかも〜」

様々な木の実をブレンドして作ったカップケーキ。これを餌にしてカビゴンを起こそうという作戦だ。

マオ「よおおし！これでカビゴンにはばっちり起きて貰っ…」

シユユ!!!

マオ「て…」

と言いかけた途端、カップケーキが入った紙ケースごと、マオの手から一瞬にして消えてしまった。何が起こったか分からないリーリエ達は呆然としてしまった。

スイレン「マーマネ？」

マーマネ「僕じゃないよ!!!」

すると、寝息しか聞こえなかったカビゴンの方からとても満足そうにあげている声が出ている事に気がついた。

カビゴン「カア〜ビ♪」

生クリームを口いっぱい付けて幸せそうに寝ているカビゴン。

つまりあの瞬間で奪い取っていた事に一同は驚きを隠せなかった。

スイレン「なんて早技…」

リーリエ「食べ物的事になると…こんなに早く動けるのですね！勉強になります！」

カノン「今はしなくていいから！」

タケシ「これじゃあ、食べ物で吊る作戦はダメか…」

振り出しに戻ったと思えたこの状況でサトシは覚悟を決めた顔でカキの方へと向かい始めた。

サトシ「カキ！体力には自信があるよな！」

カキ「お？おお！勿論だ！」

サトシ「よし！ならこの手を使うぞ！手伝ってくれ！」

カキ「何かは分らんがオツケー！任せろ！」

~~~~~

カキ「サトシ？これはどういう事だ？」

サトシ「許せ：俺も一緒にやる」

不安そうにサトシの方へと目をやるのは無理はない。作戦に乗ったカキはサトシと一緒にりんごの着ぐるみを着せられていた。これから起きる恐怖にカキはまだ気づいていない。

キモリ「キヤモ!!？」

リーリエ「キモリ！サトシ達をお願いします！」

キモリ「キヤモ!!？」

デント「ヤナツプも頼むよ！」

ヤナツプ「ヤナツ!!？」

リーリエ達はというと茂みの中に隠れてはサトシとカキを見守っていた。まだ何をするのか聞いていないカキを横にサトシは静かにアキレス腱を伸ばしたりと準備運動を始めた。それを見て走る準備をしていることに気づいたカキの顔はどんどん真っ青になってきた。嫌な予感が的中した。

マオ「カビゴン!!!美味しそうなリンゴがそこにあるよ!!!」

カビゴン「カアビ？」

マオの声に反応したカビゴンはゆっくりと起き上がると、すぐに目の前にいるサトシとカキに気づいた。しかし、その目は人間を見る目では無かった。二人を見てある物に見えたカビゴンは口から溢れ出

す唾液を舌で拭いながらゆっくりと立ち上がった。

カキ「おい…これって…まさか…」

サトシは全てを理解したカキの肩を掴むと後ろの方へと振り向かせた。

サトシ「走れ!!!カキ!!!」

カキ「!!!そういう事なのかああああ!!!」

全速力でその場を逃走する二人に向かってカビゴンもその巨体に似合わないスピードで二人を追いかけて行った。カビゴンが踏み出す一步による地響きが背後から襲いかかる恐怖に二人は涙目になりながら全速力で走って行った。

タケシ「俺たちはハガネールに乗って移動しようー」

作戦が上手くいった事を確認したリーリエ達もあらかじめ決めていた誘導ポイントへと向かい始めた。

必死にカビゴンを誘導するサトシとカキは木々をつたって移動しているキモリとヤナップの合図を頼りに彼らも誘導ポイントへと向かって走って行った。生い茂る木々を抜けた先の平面地へと到着したサトシとカキはその場で倒れた。

カキ「もう…ダメだ…」

サトシ「お…俺も…」

カビゴンと戦いやすい場所へと誘導できたのだが、当の本人は動かなくなったりりんごを見て喜んでいた。今にも二人に飛び掛かろうとしたその時、リーリエはカビゴンに向かってギャラドスを繰り出した。

リーリエ「ギャラドス!【たいあたり】です!!?」

ギャラドス「ギャラ!!?」

モンスターボールから飛び出したギャラドスはそのままカビゴンの腹部へと強烈な体当たりを仕掛けた。

カビゴン「カアビ!!!」

突然の攻撃を前にカビゴンは後方へと押し倒されてしまった。

リーリエ「サトシ!カキ!無事ですか!?!?」

サトシ「ああ…なんとか…」



カキ「サトシ：俺はもう：お前の作戦には：乗ら：ない：から」  
二人の無事を確認したリーリエ達は一安心したその直後、上空から  
何かがリーリエ達の前に降ってきた。

ギヤラドス「ギヤラアア!!!」

リーリエ「ギヤラドス!!!」

投げ飛ばされたギヤラドスはその場でぐったりと倒れてしまった。

マーマネ「あの大きなギヤラドスを投げ飛ばしたの!!!」

トゲデマル「モギユユ!!?」

投げ飛ばされたギヤラドスをリーリエはすぐにモンスターボール  
へと戻した。カビゴンはいうと騙された事に腹を立てながら片腕を  
大きく振り回していた。穏やかに寝ていた様子から一変したカビゴ  
ンの様子を食べ物の恨みの怖さを思い知った。

カキ「行けっ！ガラガラ！【アイアンヘッド】だ!!?」

ガラガラ「ガアラ!!?」

急いで着ぐるみを脱いだカキはガラガラをカビゴンへとぶつけた。  
喧嘩っ早いガラガラはそのまま頭突きをカビゴンの腹部へと命中さ  
せた。しかし、さつきとは違い相手の出方を伺っていたカビゴンはガ  
ラガラの攻撃を受け止めると、パワーを貯めた拳をガラガラへと振り  
落とした。

タケシ「あれは【かいりき】だ!!?」

カビゴン「カアビ!!?」

カキ「躲せ！ガラガラ!!!」

躲されたカビゴンの攻撃は地面へと打ち込まれると、凄まじい大き  
な地ならしが起きた。

モクロー「クロツ!?!?」

サトシ「起きたか！モクロー！」

その地響きにサトシのリユクの中で眠っていたモクローは何事か  
と驚いては咄嗟に飛び出した。一気に目が覚めたモクローは辺りを  
見渡すと主人であるサトシに向かって攻撃的なカビゴンの姿が目  
映った。

サトシ「よし！モクロー！【たねばくだん】だ!!?」

モクロー「クロツ!!?」

サトシの危機を感じたモクローは口の中に眠らせているかわらぬのいしをかビゴンの顔に目掛けて命中させた。蹠踉めくかビゴンにさらにリリーエ達は追い討ちを仕掛けた。

リリーエ「キモリ! 【はたく】攻撃です!!?」

デント「ヤナップ! 【かみつく】攻撃!!?」

かビゴン「カアビ!!!」

ダメージのお代わりを貰ったかビゴンは受け止めきれず後方へと吹き飛ばされてしまった。眉間にシワを寄せている様子から相当なダメージを貰った事を知り、デントは空のモンスターボールを手にした。

デント「良し! モンスターボール!!!」

デントが投げたモンスターボールにかビゴンは吸い込まれた。リリーエが最初に投げた時と違い、赤いランプを点滅させながらモンスターボールは小さく微動し始めた。ついに捕獲成功かと誰もが思っていたが、惜しい所でかビゴンはモンスターボールから飛び出してしまった。

マーマネ「えっ! ダメなの!?!」

カキ「中々タフだぞ! あのかビゴン!」

いい感じにかビゴンが入ったと思っていたが、モンスターボールから飛び出したかビゴンはぐっすりと眠りに入っていた。さっきのバトルでのダメージが嘘のように消えてしまったのか。気持ちよさそうに眠っていた。

ロトム『あのかビゴン! ゲットされる直前に【ねむる】を使って体力を回復していたロト!!?』

スイレン「でも、眠っている今がチャンス! ナギサ! 【すてみタックル】!!?」

ナギサ「イブイ!!?」

マオ「私達も行くよ! アマージョ! 【トロピカルキック】!!?」

アマージョ「アツジョ!!?」

隙を見せたかビゴンにナギサとアマージョは攻撃を仕掛けた。す

るとカビゴンは大きなイビキをかき始めると、それは個体の文字へと変化すると、そのまま向かってくるナギサ達にダメージを与えた。

ナギサ「ブイイ!!!」

アマージョ「アツジョ!!!」

その技を食らった二匹はいとも簡単に吹き飛ばされてしまった。

タケシ「あれは…【いびき】か!」

ロトム『あの技は眠っている時でも攻撃を繰り返す事ができる技口ト!!?』

眠り対策も決めていて油断の隙が無い事が分かったリーリエ達は攻撃の手を止めてしまった。当のカビゴンはそんなリーリエ達に眼もくれずに何事も無いような様子で眠っている。外敵から身を守る事なく何処でも眠る事ができるのはマイペースな性格だからでは無く、その圧倒的な攻撃力と防御力を合わせ持っているからこそだと思いが知らされた。

カノン「ヒコザル!【かえんほうしゃ】!!?」

マーマネ「トゲデマル!【ほうでん】!!?」

さらにヒコザルとトゲデマルの攻撃がカビゴンへと向けられるも、カビゴンによる【いびき】攻撃が二体の技を相殺させた。

デント「なんてズツシリとした重いテイストなんだ!」

総攻撃を仕掛けているのに対し、それを物事もしないカビゴンに苦戦が悩まされる。下手に攻撃ばかり仕掛けていけば、いずれ体力が底を突いてやられるのは此方側である。

デデンネ「デデデ!!?」

終始息詰まる中、前へと飛び出したデデンネは自分の頬から電流を発生させながら、リーリエ達に訴えかけた。両手で頬を擦り合わせている動作からある一人の人物が声をあげた。

サトシ「そうだ!デデンネの技を使えば、いけるかも!」

何かに閃いたサトシはデデンネの方へと視線を向けると、視線に気づいたデデンネもサトシの方へと振り向くと、何かを感じ取ったみたいにサトシに向かって頷いた。

そのあと、デデンネはカビゴンに向かって走り出した。体格差から

どう考えても押し切られる場面、サトシは空かさずデデンネに指示を出した。

サトシ「行くぞー！デデンネ！【ほっぺすりすり】だ!!?」  
デデンネ「デデデ♪」

近づいてくるデデンネに向かって【のしかかり】攻撃を仕掛けたカビゴンの腹部に向かってデデンネは放電を浴びさせた。

しかし、ダメージが思った以上に入っていない事を知ったカビゴンは標的を目の前にいるデデンネへと向けた。

カノン「危ない!!」

しかし、拳を振りかざそうとしたカビゴンの動きが急に止まった。見ると、電流が身体中に帯びていて、苦しそうなカビゴンがいた。

デント「なるほど！麻痺状態にしてカビゴンの技を出にくくさせたんだね！」

サトシ「そういう事！」

【ほっぺすりすり】は攻撃力が低いが相手を必ず麻痺状態にさせる事が出来る相手からにしてはとても厄介な技だ。麻痺状態になったカビゴンは【ねむる】で回復をしたいものの痺れの所為で技を発動する事が出来ないでいた。

「よし・今だよクワガノン！【いとをはく】だ!!?」

クワガノン「クワツ!!?」

タケシ「ハガネール！【しめつける】攻撃!!?」

ハガネール「ネエル!!?」

クワガノンの糸にハガネールの攻撃によってカビゴンはさらに身体を自由を奪われてしまった。力が入らずぐったりし始めたカビゴンにヒコザルは全速力で駆け出した。

カノン「よおし！ヒコザル！【かえんぐるま】行っちゃって!!?」  
カビゴン「カアビ!!」

ヒコザルの【かえんぐるま】がカビゴンの顔面へと命中すると、その威力を受け止めきれず、カビゴンは後方へと倒れてしまった。バランスを崩した瞬間を見てカノンは空のモンスターボールを投げた。

カノン「行け！モンスターボール!!」

三回目の捕獲にリーリエ達はカビゴンが吸い込まれたモンスターボールに目が集まった。そして、微動だにしていた赤く光る開閉スイッチは静かに鳴り止んだ。

リーリエ「やりましたね！カノン！」

カノン「うん！新しい仲間が増えたよヒコザル！」

ヒコザル「ヒツコ♪ヒツコ♪ヒツコ♪」

捕獲に成功したカノンはモンスターボールを手に取るとヒコザルと一緒に喜び合った。

カノン「あっ！」

すると、はしゃいでたヒコザル身体は青白く光り輝き出した。リザードのように長い尻尾が生え、高く築き上げた拳にカノンは優しく自分の拳を当てた。

モウカザル「モオウカ!!？」

カノン「これからも宜しくね！モウカザル！」

モウカザル「モオウカ!!？」

~~~~~

ポケモンセンターへと戻ったリーリエ達はカビゴン捕獲の報告を村の人達に伝えた。村に平和が戻り、村の人達はリーリエ達に感謝を述べた。

タケシ「カノン！さつきオーキド博士に頼んで送って貰ったんだ！」

カノン「これは？」

カノンが受け取ったのはポロックというハウエン地方で伝わるお菓子だった。

タケシ「カビゴン専用のポロックだ！この一粒でカビゴンの一日の食分量と同じくらいの満腹量が含まれているんだ」

スイレン「これなら食費に困らなくて済むね！」

カノン「本当に〜！それだけが心配だったよ〜！」

若干そっちの心配もなっていたカノンはお礼を言ってタケシからポロツクを受け取った。すると、男子三人組の腹の虫が一斉にポケモンセンター内に鳴り響いた。

サトシ「なんか：俺も腹減ってきた」

カキ「俺もだ：」

マーマネ「僕も〜」

タケシ「よし！だったら寄りに手をかけて作らせて貰うぞ！」

デント「なら！僕も手伝うよ！」

村の危機を救ったりリーリエ達はその後、タケシとデント二人の特性フルコースを大いに堪能した。何故か始まったサトシとカキの大食い勝負を面白おかしく見ていたリーリエにカノンは声を掛けた。

カノン「リーリエ！絶対にポケモンリーグ一緒に出ようね！」

モウカザル「モオウカ!!？」

リーリエ「勿論です！約束ですからねカノン！」

シロン「コン!!？」

そして二人はさらにポケモンリーグへの決意を固めたのであった。今日は大変な一日であったのかもしれないけど、逆にそれが互いに大きな刺激になったのかもしれない。

## 第四十二話 三番勝負 VS アイラ

クチバシテイへと向かうリーリエ達一行はお昼も近くなってきた。ランチ休憩を取ることにした。料理担当を行なうデントの指示で各自、必要な食材を探しに出かけていた。

リーリエ「ありました！タポルの実です！」

シロン「コーン!!？」

デデンネ「デデ!!？」

リーリエはマオとスイレンと一緒にタポルの実を探しに出掛けていた。そんなリーリエ達に向かって一人のトレーナーが近づいてきた。その人物を見たリーリエ達は驚いた顔を見せた。

アイラ「なにになに〜!!? そんなに驚かなくてもいいじゃん♪久しぶり！三人とも！」

リーリエ「アイラさん!!!」

シロン「コーン!!？」

久しぶりにアイラとの再会にリーリエ達は一旦、木の実の採取を中止して、木陰の側にある石段に腰を下ろした。初めて会話を交わした時と違ってリーリエとアイラの間から邪険なムードは一切なく、まるで本物の姉妹のように和んでいた。あの時の二人の口喧嘩の怖さは今でもシロンやマオとスイレンの脳裏に焼き付いていた。

アイラ「そういえば！リーリエはジムを巡ってるんだったよね！」

リーリエ「はい！次はクチバジムに再挑戦するつもりですので！」

アイラ「そうなんだ！頑張ってね！」

マオ「アイラさんはジム巡りはしてないんですか？」

アイラ程の実力を備えているのであれば彼女がジムを巡る旅をしていないのは少し不思議に感じる。マオの問いに対して少し残念そうにアイラは答えた。

アイラ「興味はあるけど、私はシャドーを追ってカントー地方に来たわけだし、寄り道は出来ないかな…」

残念そうに言いつつアイラは立ち上がると、長くて綺麗な髪を靡か

せながらクルリとリーリエの方へと振り返った。覗き見るようにして顔を近づけて来たアイラに驚いたリーリエは思わず頬を赤くした。

アイラ「じゃあ、バトルしようよ!」

リーリエ「えっ!?」

アイラ「一回リーリエとバトルしてみたいなって思ってたさあ! ねえ、やろうよ!」

突然、アイラからのバトルの誘いにリーリエはハッと息を呑んだ。アローラ祭やディグダの穴での戦い。サトシからもアイラの実力に対してかなり評価していただけあって、今の実力でアイラと真面に戦えるかどうか、少し弱気になっている自分がいたのだが、アイラと戦ってみたい気持ちは前からあった。そんなリーリエの気持ちを読み取ったのかシロンは優しい笑顔を彼女に向けた。

リーリエ「それではお願いします!」

~~~~~

マオ「どつちも頑張れ!」

スイレン「ファイト!」

バトルが出来そうな場所へと移動したリーリエとアイラはモンスタールボールを片手に互いに距離を取った。髪の毛の結び目をしっかりと結び直したリーリエは軽く頬を叩いて気合を入れた。

リーリエ「ルールはどう致しましょうか?」

アイラ「じゃあ、三対三の勝ち抜き戦はどう?交代なしで先に二勝取った方の勝ち!」

リーリエ「分かりました!」

その提案にリーリエは承諾した。そしてアイラは静かに一呼吸を終えると、バトルモードへと変貌した。鋭く尖った氷のような冷たい目を向けられたリーリエは息をのんだ。アローラ祭でユーゴと対戦



した時にも見せたアイラの本気の姿は観戦しているだけでも身震いを立てさせられた。それがいぎ、自分の方へと向けられたのであればかなりのプレッシャーであった。

アイラ「コダツク！宜しく！」

コダツク「コフア!!？」

スイレン「コダツクだ！可愛い!!！」

アイラが一番手に選出したのはコダツク。アイラの手持ちの中で初めて目にするポケモンであった。コダツクは水タイプでありながら念力といったエスパ系の技も得意とする。それらに注意するよう自分に言い聞かせた後、リーリエもおもいつきりモンスターボールをフィールドへと投げ入れた。

リーリエ「ゼニガメ！お願いします！」

ゼニガメ「ゼニイ!!？」

勢いよく飛び出したゼニガメは空中で一回転させると着地と同時に少量の水を口から噴水させた。光り輝く水しぶきによって神々しく体を光らせるゼニガメの自身に満ちた顔にアイラも思わず顔がにやけていた。

？アイラVSリーリエ？

アイラ「行くよりリーリエ！コダツク！【みずてっぼう】!!？」

コダツク「コフア!!？」

リーリエに合図を送った後、アイラのコダツクはお腹の底から力一杯に込めた水鉄砲をゼニガメに向かって放たれた。

リーリエ「ゼニガメ！此方も【みずてっぼう】!!？」

ゼニガメ「ゼニイ!!？」

互いの水鉄砲はそのまま相殺させられた。パワー互角であった。

アイラ「そのまま【ひっかく】攻撃よ!!？」

コダツク「コフア!!？」

リーリエ「ゼニガメ！【こうそくスピン】!!？」

ゼニガメ「ゼニイ!!？」

バトル前の緩慢な動きと打って変わって、急速に接近したコダツクは鋭く尖らせた爪で攻撃を仕掛ける。しかし、ゼニガメもすぐに甲羅の中に潜って身を籠らせると、高速回転でコダツクを弾き返した。

アイラ「怯んでる暇はないわよ！【みずてつぽう】!!?」

アイラの迅速な指示のおかげで直ぐに立て直したコダツクはもう一度水鉄砲で攻撃を仕掛けた。しかし、効果は今ひとつなだけであって大したパワーも見込めなかったコダツクの水鉄砲は高速回転を続けているゼニガメの前では歯が立たなかった。

リーリエ「この技を前にはどんな攻撃も通りませんよ！」

アイラ「攻撃技を防御に使うなんてサトシみたいね！じゃあ…」

アイラの次の指示が分かっているみたいなのにコダツクは頭を抑えていた両腕の前に突き出すと、今度は目を鋭く尖らせた。アイラと一緒に顔つきが変わったコダツクにリーリエは少し身震いを立てた。

アイラ「【かなしばり】!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

リーリエ「あつ!!」

金縛りにより【こうそくスピン】を封じられたゼニガメは一瞬にして動きを止められてしまった。身体の自由を奪われた訳ではないが、これによりゼニガメは覚えている技の一つを使えなくなってしまった。

アイラ「これで暫く大人していてね！」

リーリエ「でしたら！【アクアジェット】です!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!?」

隙を作らせない為にリーリエはすぐにゼニガメに攻撃の指示を繰り出した。地面を思いつき蹴ったゼニガメは水を纏いその勢いそのままコダツクに向かって体当たりを仕掛けた。しかし、その接近技を待っていたかのように慌てる事なく冷静にアイラもコダツクに指示を送った。

アイラ「コダツク！【サイコキネシス】!!?」

コダツク「コファ!!?」

ゼニガメ「ゼニイ!!」

コダツクのサイコパワーにより勢いを止められたゼニガメはそのまま捕まってしまうた。その場で脱出しようともがくも、一度捕らえられてしまったら、もう逃げようがなかった。

コダツク「コフア!!!」

サイコパワーを一気に高めたコダツクはそのまま青白いエネルギー波でゼニガメを後方へと投げ飛ばした。投げ飛ばされたゼニガメは太い木の幹へと体を強く叩きつけられてしまった。

リーリエ「ゼニガメ!!!」

シロン「コーン!!!」

ゼニガメ「ゼニィ…」

その一撃にゼニガメは目を回した。試合続行不可能と判断したリーリエは右手を高く挙げてアイラに合図を出した。それを見たコダツクもアイラの所へと戻って行った。

リーリエ「ありがとうゼニガメ! ゆっくり休んで下さい」

ゼニガメをモンスターボールへと戻すと、アイラもコダツクの頭を優しく撫でてあげると、そのままモンスターボールの中へと戻した。

アイラ「ちよつと安心しすぎたのがいけなかったわね。さあ! 次はどの子でくる?」

まずは一勝得て余裕を見せるアイラにリーリエは次のポケモンをぶつけた。

リーリエ「わたくしの二番手はこの子です!」

キモリ「キャモ!!?」

軽やかに飛び出したキモリは対戦相手であるアイラに向かって拳を構えた。

アイラ「私はジャノビーよ!!!」

ジャノビー「ビィノー!!?」

リーリエの前に繰り出されたのはこれはまた初めて見るアイラの手持ちであった。連続で同属タイプのポケモンを出して、一回戦での敗北をフラッシュバックさせるアイラの魂胆にリーリエの目つきは一段と鋭くなった。

アイラ「また私からいくよ! 【リーフブレード】!!?」

ジャノビー「ビイノ!!?」

リーリエ「【はたく】で迎え撃って!」

キモリ「キャモ!!?」

互いにスピードが自慢の二体は電光石火のように接近すると、ジャノビーは鋭利な尻尾でキモリは太い尻尾で対抗した。暫く攻防が続いた後、最後の一撃を喰らわすと二体は様子見のため一旦、距離を取った。

リーリエ「キモリ! 【ギガドレイン】!!?」

着地した同時にキモリはジャノビーの体力を吸収し始めた。キモリが作り上げた緑色の霧に包まれたジャノビーは体力を吸い取られた結果、その場で足が纏れてしまった。

リーリエ「今です! 【でんこうせつか】!!?」

動きが鈍ったジャノビーを見てキモリは風を切るスピードで接近を開始させた。

アイラ「立てジャノビー! 【グラスミキサー】!!?」

しかし、ジャノビーは尾をスクリューのように回転させると、木の葉を纏わせた竜巻をキモリに向かって放った。

リーリエ「【あなをほる】です!!?」

キモリ「キャモ!!?」

荒れ狂う暴風を前であつても、落ち着いて状況を見ていたリーリエは冷静にキモリに指示を出した。地中に潜ったキモリは攻撃を躲すだけでなく、そのままジャノビーに向かって掘り進んで行った。

ジャノビー「ビイノー!!!」

真下に到達したキモリは地中から飛び出すと同時にジャノビーに強烈な一撃を浴びせた。キモリの攻撃にジャノビーは空中へと放り出されてしまった。

リーリエ「【はたく】 攻撃!!?」

キモリ「キャモ!!?」

アイラ「ジャノビー! 【いあいぎり】!!?」

ジャノビー「ビイノ!!?」

向かってくるキモリに対し、空中で受け身を取ったジャノビーは攻

撃を構えながらキモリとd十分に距離を縮む瞬間を狙った。それをキモリは僅かな距離でジャノビーの技をギリギリ見切ると、躲したと同時に大きな尻尾をジャノビーの頭部に叩き込んだ。

ジャノビー「ビィ：ノ」

地面へと思いつき叩きつけられたジャノビーはその場で目を回した。

リーリエ「やった！凄いわキモリ！」

シロン「コーン!!？」

アイラ「くっ…」

二回戦目はキモリの活躍によりリーリエに軍配が上がった。こみ上げて来る悔しさに下唇を噛みしめながらアイラはジャノビーを戻した。

スイレン「これでお互いに一勝負っ！」

マオ「次で決まるね！」

勝利を得て満足したキモリをモンスターボールへと戻した後、今度はリーリエから最後のポケモンが繰り出された。

リーリエ「わたくし側の大将はヒノアラシです！」

ヒノアラシ「ヒノツ!!？」

アイラ「私はこの子よ！行けっ！ルクシオ！」

ルクシオ「ルシィ!!？」

お互い最後に繰り出したポケモンがフィールドに到達すると、リーリエは思わず拳を固く握りしめた。一勝負っといったこの状況でリーリエの士気はさらに高まってきた。それはアイラも同じだった。そんな主人達の闘志が伝わったのか。ヒノアラシの背中の炎は吹き上げ、ルクシオの牙からは静電気がひりついていった。

リーリエ「ヒノアラシ！【かえんほうしゃ】!!？」

アイラ「ルクシオ！【でんげきは】!!？」

同時に繰り出された技はあっという間に相殺させた。今のでヒノアラシの攻撃力を見切ったアイラはルクシオに次なる指示を送った。

アイラ「【じゆうでん】!!？」

ルクシオ「ルクウ!!？」

身体中から発する電気によってルクシオの毛並みは一斉に剣山のように立ち上がった。その姿に一瞬驚くもヒノアラシも負けじと炎を立ち昇らせて対抗した。

リーリエ「このまま攻め込みます！ヒノアラシ！【かえんほうしゃ】!!?」

ヒノアラシ「ヒノオ!!?」

動けないルクシオにヒノアラシの火炎放射が突き刺さった。力を蓄える技というのは次の攻撃の威力を上げる利点に繋がるが、それと代償に大きな隙を作ってしまう。炎の海に吞まれるルクシオであったが、身体中に流れる電気の力のお陰で自分の特防を上げた事により何とか耐え凌げた。

そしてルクシオの体力を信じて見守っていたアイラにむけてルクシオは力が漲ってきた合図を視線を合わせてアイラに送った。

アイラ「ルクシオ!【スパーク】!!?」

ルクシオからの充電完了の合図を貰ったアイラは攻撃の指示を送った。エネルギーを一気に解放させたルクシオはヒノアラシの火炎放射を振り払うと、身体中から電気を発生させて、それを身に纏う感じでヒノアラシに向かって走り出した。

リーリエ「ヒノアラシ!【えんまく】です!!?」

充電により上がったルクシオのパワーは離れているリーリエにもビリビリと伝わってきた。火炎放射をやめたヒノアラシは向かってくるルクシオに向かって煙幕を放った。ヒノアラシ側からもルクシオの姿が全く確認できないほどの煙幕がフィールドを覆った。

目眩しが成功したと思ったりリーリエは次の策を考えたが、その煙幕を突き破ったルクシオはそのままヒノアラシに向かって体当たりした。

ヒノアラシ「ヒノオ!!!」

技の威力を上げていたルクシオの猛烈な攻撃を受けたヒノアラシはそのまま後方へと吹き飛ばされた。

リーリエ「ヒノアラシ!!!」

互いの姿が見えなくなるほど深い煙であったのにも関わらず、迷う

事なくヒノアラシに攻撃を決めたルクシオにリーリエは驚いていた。アイラ「そんな煙幕では私のルクシオの目を誤魔化す事なんて出来ないわよ」

そういえば本で読んだことがあった。ルクシオの進化系であるレントラーというポケモンの眼は暗闇の中でも相手の姿を捕らえる暗視スコープの役割をしている事に気がついた。進化の予兆でもあるのかわからないが、進化前のルクシオにその能力を既に手に入れさせていた事にアイラのポケモントレーナーとしての能力に感心した。

後方に飛ばされたヒノアラシは何とか立ち上がる事が出来た。そして、ヒノアラシの闘志が化身となって赤いオーラが身体中を溢れ出した。そう《もうか》が発動した合図だ。

リーリエ「ヒノアラシ！【かえんほうしゃ】！！？」

《もうか》が発動したという事はヒノアラシの体力は相当無くなっている事も意味していた。さらに背中の炎を燃え上がらせたヒノアラシの火炎放射は先程とは比べものにならない火力となっていた。その熱はアイラにも伝わっていた。

アイラ「ルクシオ！【でんげきは】！！？」

素早く繰り出されたルクシオの電撃は雷のように轟かせながら地面を掘り進んで行った。炎と電気がぶつかり合うとまたもや互いを相殺させて、爆発が起きた。

リーリエ「【二トロチャージ】！！？」

アイラ「【かみなりのきば】！！？」

爆風に煽られながらも負けじとリーリエとアイラはありつたけの声を腹の底から上げた。二人の力の力を貰った二体は最後のエネルギーを身体に身に纏わせながら走り出した。

ヒノアラシ「ヒノオオオオ！！！」

ルクシオ「シオオオ！！！」

二人に負けないぐらいの声を上げて走る二体は真っ正面からぶつかり合った。二体のエネルギー波が混じり合うと、そのまま爆発によって二台同時に後方へと飛ばされた。

ヒノアラシ「ヒノオ…ヒノオ…」

ルクシオ「ルクウ…ルクウ…」

地面に引きずられた身体を起こした二体は四本の足で踏ん張りを見せるとそのまま静かに互いを睨み合った。呼吸を荒くする二体に二人の緊張が走った。静寂に包まれながら目線を逸らす事はなかった二体はそのまま静かにその場で倒れ込んでしまった。目を回す二体を見て勝敗が決した事を悟った。

リーリエ「相打ち…」

アイラ「そのようね…」

二人は最後まで戦ってくれた二体の頭を優しく撫でたと後、モンスタールへと戻した。

リーリエ「ご苦労様でした。ヒノアラシ」

初めてのアイラとのポケモン勝負を終えて緊張が解けたリーリエはその場に座り込んだ。汗だくなりリーリエをシロンは優しく冷気を吐きながら涼ませていた。

マオ「うわあ！息が詰まったあゝ」

スイレン「どつちも凄いバトルだった」

二人の緊張感は観戦していた二人にも伝わっていた。ホツとした二人は互いに拍手を送りながらリーリエとアイラの方へと歩いて行った。

アイラ「ん／＼／引き分けとはいえ勝てなかったああ!!!悔しい!!!」

リーリエ「ア…アイラ…さん？」

急に頭を掻き蒸しながら声を上げるアイラにリーリエは少し驚いてしまった。公式戦だろう野試合だろうアイラにとつて敗北の二文字はとても自信の身体に受け付けないものなのであろう。その後はブツブツと今回の試合について一人、大反省会を開いていた。

マオ「アイラさん。やつぱ、すごく負けづ嫌いな人だね」

スイレン「サトシとカキみたい」

アイラの新たな一面を見れたリーリエ達はその姿に少し面白おかしくなってしまった。笑みが溢れたリーリエ達を見てただ一人恥ずかしくなったアイラは軽く咳払いすると、リーリエの元へと近づいて



いく。

アイラ「でもリーリエとのバトル。楽しかったわ！またやりましよう！さあ、バトルを終えた後は互いの健闘を讃えて握手よ！」

リーリエ「はい！」

最後は互いの健闘を讃える。このような配慮を心がけている様子からもアイラのポケモンバトルに対する熱意や闘志を今一度感じる事ができた。握手を交わしたリーリエは少しアイラの握力が強くなった事に気づいた。ゆっくりとアイラの顔を見てみると、アイラは真剣な眼でリーリエを見ていた。

アイラ「だけど、次は勝つ！」

リーリエ「いいえ、次に勝つのはわたくし達です！」

こうして二人は再戦の約束をした後、アイラはリーリエ達と別れた。ポケモンリーグに出場となるとサトシやアイラのような凄腕トレーナー達と戦う事になるであろう。今回の試合はそんな実力派トレーナー達と戦うためにも、さらに精神一倒を貫きもつとバトルに対して精進しないといけないと思わせる、そんなきつかけを与えてくれた物になったのであろう。それを胸にリーリエはクチバジムへの再戦に向けてさらに闘志を燃やして行くのであった。

サトシ「遅いなくリーリエ達」

ピカチュウ「ピカピイッ」

カキ・マーマネ・デント「「うん」」

## 第四十三話 二人の絆

クチバシテイを指指して旅を続けるリーリエ達。旅の道中で野試合を申し込まれたリーリエはポケモンバトルを行なっていた。

トレーナー「サンドパン！【どくばり】だ!!？」

サンドパン「サンツ!!？」

相手のサンドパンは無数の毒針を発射させた。相手の攻撃が襲いかかると同時にリーリエは素早く指示を送り出した。

リーリエ「ズルズキン！【あくのはどう】です!!？」

攻撃の指示を送ったリーリエであったが、ズルズキンはそんなリーリエからの指示を聞くつもりはなく、一直線に突き進むと無数に飛び交う毒針を手刀で叩き落とした。だが全弾を防ぎ切れる訳でもなくズルズキンは追加効果の毒を食らってしまった。毒によって身体が蝕まれているがズルズキンは痩せ我慢をしながら不敵にサンドパンを睨みつけていた。

リーリエ「ズルズキン！まずは相手の出方を良く見るんです！それから…」

ズルズキン「ズルツ!!？」

リーリエ「あつ！ま…待ってください!!!」

勢いよくジャンプしたズルズキンは膝小僧にパワーを貯めると一気にサンドパンに向かって急降下した。向かってくるズルズキンにサンドパンは【ブレイクロー】で対抗した。技がぶつかり合うとズルズキンはありったけの力で技ごとサンドパンを後方へと吹き飛ばした。岩壁に叩きつけられたサンドパンはそのまま目を回しながらその場で倒れてしまった。

トレーナー「サンドパン!!!」

サンドパン「サ…サンドオ…」

デント「そこまで！サンドパン戦闘不能！ズルズキンの勝ちだ！」

勝負には勝つ事が出来たが、ズルズキンの独壇場であったため、リーリエは遣る瀬ない気持ちであった。

リーリエ「あの…ありがとうございました」  
バトルの礼を言いに向かったリーリエであつが、サンドパンを戻したトレーナーは不満そうにリーリエの方へと振り向いた。

トレーナー「あんたに負けたんじゃない！そのズルズキンに負けたんだ！」

そう吐き捨てたサンドパンのトレーナーはそのまま去っていった。

マオ「何!?？あの人！」

ロトム『互いの健闘を讃えるまでがポケモンバトルロト！感じ悪いトレーナーだロト！』

デント「まあ勝利には変わらない訳だし、いいんじゃないかな!?？」  
確かにトゲのある言い方であつたが、あんなバトルをされたのであれば納得する方が難しいことは分かつていたリーリエはただ相手に申し訳ない気持ちでいた。バトルを終えたズルズキンの方へと目をやるとそんなリーリエの気持ちには気にもとめず昼寝に入っていた。

オツキミ山からここまで一緒に旅をしてきたのだが、今だにリーリエに心を開いてくれない様子でいる。心の底からズルズキンと一緒にバトルが出来る未来は遠のくばかりでいるこの関係性にリーリエはため息を吐くばかりであつた。

ソウタとのポケモンバトルの時のように急に暴れたりするような事は無くなつただけでも良かったと思うが、それはリーリエやポケモン達に対して興味を示さなくなった様子である事を捕らえていた。

そんなズルズキンを見てサトシは今日のためにオーキド博士から転送して貰つていた、あるポケモンの入ったモンスターボールを持ってリーリエとズルズキンの元へと歩き出した。

サトシ「よし！出てこい！」

ズルツク「ズルツ!!？」

元気一杯に飛び出したのはサトシがイッシュユ地方で仲間になつたポケモン。ズルズキンの進化前でもあるズルツクであつた。

ズルツク「ズルツ」

ズルズキン「キィ…?」

リーリエと出会う前はズルツクの群れのリーダーを務めていた事

を聞いていたサトシはズルツクとなら打ち解けてくれるはずだと考えていた。

ズルツク「ズル♪」

ズルズキン「……………」

いずれ自分が進化するであろうズルズキンにズルツクは警戒する事なく首を長くしながら大きな目で、その姿をマジマジと覗き込み始めた。しかし、その視線に居心地が悪くなったズルズキンはそっぽを向くような感じですぐにその場から離れると、すぐ側の岩壁に寄り添う形でもう一度寝入ってしまった。

マーマネ「ああ…ダメか」

トゲデマル「モギユユ…」

いつもと同じ結果に肩を落とす一同。仕方ないとリーリエ達は暗くなる内に山を降りるため荷物を纏める準備に入った。するとその直後、遠くの方から爆発音が地響きと立ち昇る爆煙と一緒に大きく鳴り響いた。

スイレン「何?!?今の爆発!!!」

アシマリ「アウアウ!!?」

ナギサ「イブブイ!!?」

ロトム『ビビ!!?あの麓からロト!!!』

すると、急に目を覚ましたズルズキンはその爆発に引き寄せられるようにしてその音がした方へと走り出した。

リーリエ「ズルズキン!何処へ行くのですの!」

急にその場から離れるズルズキンを止めようにも、リーリエの言葉に耳を貸すつもりもなかった。慌てて荷物を片手にリーリエ達はズルズキンの跡を追いかけた。

~~~~~

爆発が起きた場所に近づいたりリーリエ達は野生ポケモン同士のバ

トルである事を警戒して岩壁に身を隠しながらそつと頭を出した。するとそこでは二人のトレーナーによるバトルが繰り広げられていた。

??? 「ガブリアス! 【ドラゴンダイブ】だ!!?」

ガブリアス 「ガアブ!!?」

??? 「サウムラー! 【メガトンキック】だ!!?」

サウムラー 「サワイ!!?」

ガブリアスとサウムラーによる激しいポケモンバトル。そして、そのガブリアスを使っているトレーナーはリーリエ達がよく知る人物であった。

マーマネ 「あれ! ユーゴさんだ!」

スイレン 「相手は:誰だろ?」

一人はユーゴである事が分かったリーリエ達はそのユーゴと戦っている道着姿のトレーナーの方へと目を向けた。そして一番早く気づいたサトシが声をあげた

サトシ 「シバさんだ!」

デント 「シバさんつて:もしかして! カントー地方の四天王! 格闘王のシバさんの事かい!!?」

リーリエ 「四天王ですか!!?」

ロトム 『四天王のバトル! これはデータに押せめない訳にはいかな  
い口ト!!?』

シバは格闘タイプを扱うパワーファイトを好むカントー地方の四天王の一人である。以前その一人である氷タイプ使いのカンナと出逢っていたリーリエ達は四天王の強さとはどれ程のものかは知っていた。

シバ 「サウムラー! 【ブレイズキック】!!?」

サウムラー 「サワア!!?」

ユーゴ 「ガブリアス! 【つるぎのまい】!!?」

戦いの最中、大きく振りかぶったサウムラーは足に炎を纏わせるとガブリアスに向かって攻撃を仕掛けた。【ブレイズキック】を仕掛けて近づいてくるサウムラーにガブリアスは両腕の釜を硬質化させる

と、そのまま回転しながらサウムラーの技を受け流した。火花散るサウムラーの連続キックをガブリアスは怯む事なく立ち向かっていった。

カキ「【つるぎのまい】を防御に使ってるぞ！」

ロトム『本来この技は精神を研ぎ澄ませて攻撃力を大幅に上げていく技ロト！こんな使い方見たことが無いロト!!』

さらにそのままサウムラーの攻撃を弾き返すと、思いっきり天高くジャンプした。

ユーゴ「今だ！ガブリアス！【ドラゴンダイブ】!!？」

ガブリアス「ガアブ!!？」

シバ「サウムラー！【とびひざげり】だ!!？」

サウムラー「サアファイ!!？」

物凄い勢いで滑空するガブリアスは攻撃エネルギーを最大値まで跳ね上がらせると、サウムラーへと向かった。空を切る音がまるで龍の唸り声のように周りを響かせる。しかし、それに怯むことなくサウムラーも最大エネルギーをガブリアスへとぶつけた。

ぶつかった瞬間に巻き起こった爆煙から二体は膝をつく事なく地に着地すると、すぐに二体は互いを身構えた。自分達の力量を測る事が出来たユーゴは満足げにシバに向かい降参の合図を送った。

シバ「ふむ！この辺で良いだろうか？」

ユーゴ「はい！ありがとうございました！」

ガブリアスの大地をも震え上がせる攻撃。そして、【つるぎのまい】で上がっていたその攻撃を受け止めたサウムラーのレベル。両者のバトルにすっかり見惚れてしまったリーリエ達はユーゴの元へと走り出した。

リーリエ「ユーゴさん！お久しぶりです！」

ユーゴ「おっ！リーリエ！みんな！久しぶりだな！」

サトシ「シバさんも！お久しぶりです！」

シバ「おっ！君はいつぞやの少年！サトシ君だったなあ！」

こちらに駆け寄るリーリエ達に気づいた二人も彼らの元へ振り返った。

『ガブリアス マツハポケモン

ドラゴン・地面タイプ

身体を折り畳み翼を伸ばすとまるでジェット機のように音速で飛ぶことができる。狙った獲物は逃がさない』

サトシ「ガブリアスも持っていたのですね！」

ユーゴ「ああ！よく頑張ったなガブリアス！」

ガブリアス「ガアブ〜♡」

初めて目にしたユーゴのガブリアスに自然と皆は集まった。さっきのバトルと違い無邪気にユーゴに寄り付くそのギャップがとても愛くるしく見えた。

すると、ユーゴのバックに入ってる一つのモンスターボールから一体のポケモンが飛び出した。

マフオクシー「フオクシー!!!」

ガブリアス「ガアブ!!!」

現れたマフオクシーはそのままガブリアスをユーゴから引き離すと、鋭い目で睨みつけた。

ラプラス「ラアツプ!!?」

スイレン「あっ！ラプラス!!!」

二体の殺気に気づいたのか!? マフオクシーに続いてユーゴのリユクからはもう一体、ラプラスも現れた。ラプラスはすぐに二人の仲裁に入ると、喧嘩を始めようとした二体を静めた。

ピカチュウ「ピカチュウ!??」

シロン「コーン!??」

ラプラス「ラアプ!!?」

ラプラスに説得された二体はそのままソツポを向いた。その様子に軽いため息をつくラプラスに同情したのか…ピカチュウやシロンは慰めに向かった。

サトシ「何でマフオクシーは急に起こり出したんだ？」

ユーゴ「それが分からないんだ。ったく！もう少し仲良くしたらどうだ！」

マオ「ひよつとして、ユーゴさんのガブリアスとマフオクシーって女の子ですか？」

ユーゴ「おお！よく分かったね！」

マオ「つまり…」

リーリエ「そうですよね」

スイレン「女の戦い…」

何かを察した女性陣に対しハテナを思い浮かべるサトシとユーゴ。この二人…何処か似ているようであった。

それを他所に一体のポケモンがシバの方へと向かった。

シバ「ん!？」

リーリエ「何をしていますのですか!?!?ズルズキン！」

ズルズキン「ズルウウ!!?」

リーリエの忠告を無視してズルズキンはズカズカとシバがいる前へと進むと、鋭い目つきで何かを訴え始めた。もう一度ズルズキンを呼び止めようと向かうリーリエであったが、いつもの相手を見下すような目つきではなく、何かを決意した真剣な眼差しを送っていた。普段と違う様子にリーリエは驚いていた。すると、ズルズキンが何がしたいか気づいたサトシはリーリエの元へと向かった。

サトシ「もしかしてズルズキン！シバさんと戦ってみたいんじゃないかな？」

デント「うん！同じ格闘タイプだからシバさんのポケモン達の強さにどうやら惹かれてるみたいだね」

暫くズルズキンとにらみ合った後、シバは今度はリーリエの方へと目を合わせた。

シバ「このズルズキンのトレーナーは君か？」

リーリエ「あっ！は…はい!!」

シバの鋭い眼光を向けられたリーリエはおもはず背筋がピンっと立った。同じようにその迫力に押されたマオ達も同じようにその場



で固まってしまった。ズルズキンと同じように暫くリーリエを見続けたシバはこちらに来るように合図を送った。それを受け取ったリーリエはズルズキンと一緒にシバの方へと向かうのであった。

~~~~~

シバ「私はニョロボンで行くぞ！ウツハアー!!!」

ニョロボン「ニョロ!!?」

バトルを承諾してくれたシバはリーリエとズルズキンをバトルが出来る広い平地へと案内した。シバが繰り出したニョロボンを見てズルズキンはより一層気合が入っていた。今だに息が合わせられない事に不安なリーリエであったが、やる気を見せているズルズキンの為にもバトルへと意識を傾けた。

マオ「大丈夫かな：リーリエ」

サトシ「今は二人を見守るしかないさ」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

トゲデマル「モギユユ!!?」

デデンネ「デデ…」

?リーリエVSシバ?

リーリエ「ズルズキン！まずは…」

ズルズキン「ズツキイ!!?」

リーリエ「待ってください！まだ指示を…」

対戦相手はカントーの四天王の一人。慎重に相手の出方を見る為に指示を送るリーリエであったが、そんなリーリエの声に耳を貸さないズルズキンはそのまま真っ向から攻撃を仕掛けに行った。手刀は

ニヨロボンの頭上へと振り下ろされた。

シバ「ん…なるほど。ニヨロボン！【たきのぼり】だ!!？」

ニヨロボン「ニヨロ!!？」

攻撃してくるズルズキンを見計らってはニヨロボンは自分の前に水流を立ち昇らせた。目の前に出現した天へと登る水流の壁にニヨロボンの姿を見失ったズルズキンの動きが止まった。

ズルズキンの動きが止まった事を確認したニヨロボンは水の壁を突っ切ると、呆然と立ち尽くしているズルズキンにしがみついた。

ズルズキン「ズツ!!？」

身体を自由を奪われたズルズキン。そのままニヨロボンはすぐに攻撃の体勢へと切り替えた。

シバ「行けっ！【じごくぐるま】だ!!？」

ズルズキンにしがみついたまま前転へと高速回転をさせたニヨロボンはそのまま自分ごと地面へズルズキンを叩きつけた。

ズルズキン「ズツキイイイ!!！」

リーリエ「ズルズキン!!！」

悪タイプも備え持つズルズキンには効果は抜群だった。攻撃を決めたニヨロボンはそのままズルズキンを後方へと投げ飛ばした。しかし、負けじとズルズキンは再び地面へと叩きつけられる前に体勢を立て直すと、ニヨロボンに向かって【あくのはどう】を放った。

ニヨロボン「ニヨロロ!!？」

ズルズキンの技を受けたニヨロボンは後方へと押し戻された。技が決まったのを見たズルズキンは高くジャンプすると、今度は右膝にパワーを貯め始めた。

シバ「躲せ!!！」

ズルズキンの攻撃をニヨロボンはシバの指示のお陰ですぐに躲す事が出来た。

ズルズキン「ズキイ!!！」

リーリエ「ズルズキン!!！」

【とびひざげり】が躲された事により自身にダメージが入ってしまったズルズキンはその場で怯んでしまった。

シバ「【れいとうビーム】だ!!?」

リーリエ「【あくのはどう】です!!?」

ニョロボンが繰り出した【れいとうビーム】を見てすぐに指示を出したリーリエであったが間に合わず、攻撃を受けたズルズキンはそのまま凍りついてしまった。

シバ「決めるぞ! 【きあいパンチ】!!?」

拳を高く築き上げたニョロボンはそのまま精神を研ぎ澄ませた。氷状態で動けないズルズキンから攻撃される事なく十分なパワー貯めたニョロボンはその拳をズルズキンへと放った。

ズルズキン「ズツキイイイ!!」

そのパワーに氷が割れ、ズルズキンは後方へと吹き飛ばされるとそのまま岩壁に身体を叩きつけられた。

ズルズキン「ズルツ…」

ズルズキンはダメージで負った身体を引きずりながら、対戦相手のニョロボンの方へと歩いて行く。そんなズルズキンを止めようとするリーリエであったが、殺気を漂わせるその表情に畏怖してしまい、声を出せなかった。

リーリエ(何で…わたくし…まだ貴方に認められてないの?…:…:貴方は今…何を考えてるの?)

今のズルズキンは目の前のニョロボンを倒す事にしか頭に入っていない。だんだんと怒りが立ち昇っていくその時、予想だにしていなかった事態になってしまった。

リーリエ「あっ!!!」

リーリエの目に移ったのはズルズキンを覆っている黒い靄だった。

ユーゴ「まさか! ダークオーラ!!!」

サトシ「逃げろ! リーリエ!!!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

シロン「コーン!!?」

異変に気付き、スカウターで確認したサトシとユーゴはすぐにリーリエの方へと走って行った。リーリエはというと、あまりの事態に整理が出来ず此方に近づいてくるズルズキンを呆然と見ているしか出

来なかった。

しかし、ニョロボンとの戦いで負ったダメージが身体中を回りきったのか。黒いオーラが晴れると、ズルズキンはその場で気絶してしまった。

リーリエ「ズルズキン!!!」

シロン「コーン!!?」

倒れたズルズキンを見て我に返ったリーリエは急いでズルズキンの元へと走り出した。

~~~~~

スイレン「サトシとマオちゃんは…リーリエの側に居てあげて…」

サトシ「ああ…」

マオ「うん」

スイレン「行こう!アシマリ!ナギサ!」

スイレンを始めとした一回は目を覚ましたズルズキンの為に食べ物や水と必要な物を探しに出かけた。あれからズルズキンはバトルの疲れもあつてかグツスリと眠っていた。

だが、リーリエは混乱とショックが大きい所為で下を向いたまま一言も喋らなくなってしまった。そんなリーリエにサトシとマオも苦しくなった。

しかしこうなった以上は事実をリーリエの口から聞かないといけなくなる。ユーゴはサトシ達に軽く合図を送ると、リーリエの元へと向かった。

ユーゴ「ダークポケモン…だったのか?」

リーリエ「もう普通に一緒にいましたし…もう…だ…大丈夫かと…」

ユーゴ「済まない。責めている訳ではないんだ」

リーリエ「いいえ。黙っていたわたくしにも責任があります」

その後はみんなが戻ってくるまで沈黙が続いた。ただズルズキンの寢息だけが静かに聞こえていた。気持ちよさそうに寝ている様子からズルズキンの容体は少しずつ回復に向かっている事が分かって安心した。

サトシ「気持ちよさそうに寝てるな」

リーリエ「はい」

抜けたような返事と一緒にリーリエは顔を伏せたまま口を開いた。

リーリエ「ズルズキンを：ハンサムさんに預けようと思います」

カキ「なあっ!!!」

マオ「どうして!」

リーリエの発言に一同は声をあげた。ズルズキンと真っ直ぐに向き合って行くリーリエの姿を見てきたため驚くのも無理はなかった。どんなに軽蔑の目を向けられても無視をされても、トレーナーとして諦めたりしなかったからだ。

みんなの視線が集まっている事に感じていたが、それでもリーリエは顔を上げなかった。

リーリエ「旅を通して行けばズルズキンと心を通わせる時がいつか来るのだと信じてここまで来ました。ですが、それは軽率な考えだったのです。そもそも人間に悪用されて戦闘兵器として扱われたズルズキンがわたくし達、人間と向き合おうだなんて、そんな簡単な事ではなかったんです。ちゃんと治療を受けて元の生活に戻してあげることの方がズルズキンにとって一番良かった選択だったのかもありません」

自分の未熟さにリーリエの目からは大粒の涙が溢れて出てきた。弱音を吐かないと決意した矢先、また自分の弱さを皆の前で見せてしまったためかさらに深く顔を埋めてしまった。悔しさに体を震わせるリーリエに掛ける言葉が見つからず、マオ達も意気消沈していた。しかしそんな中、サトシとデントはゆっくりと口を開いた。サトシはリーリエの肩に手を置くと優しく微笑みかけた。

サトシ「そうかな。俺は短い間だったけど、ズルズキンはリーリエの事を一ミリも信頼を寄せていないとは思わなかったぜ！」

デント「うん！ポケモンソムリエとして僕もサトシと同じ意見かな！確かにリーリエとは距離は取っていたかもだけど、一度も目は離さなかった事はなかっただろ?!？」

二人の言葉にゆっくりと顔を上げたリーリエ。悲しげな表情を浮かべるリーリエにサトシとデントは優しく微笑んでいた。

デント「無愛想に見えていたけど、ズルズキンもリーリエとは一体どんなトレーナーなのか?!?知れたかったじゃないのかな！」

マオ「確かに…リーリエが作ってくれたポケモンフーズ。一度も残したりしていなかったもんね」

信頼は微かだが寄せられていた?!?二人の言葉にリーリエはゆっくりズルズキンの方へと顔を向けた。デイグダの穴の時は相手のルンパツパ達の喧嘩を買ったように見えたが、本当は後ろにいたリーリエ達を守ったのかもしれない。真実がわからないモヤモヤとした気持ちが見えぬ中、ユーゴもゆっくりと口を開いた。

ユーゴ「俺のガブリアスも…フカマルの時は全然俺には懐いてくれなかったんだ」

マーマネ「え?!?そんな感じには見えないのに」

その言葉にサトシ達はユーゴの方へと視線が集まった。

さっきのシバとのバトルでの二人の息のあったコンビネーションを見る限りではそうとは思えないが、驚く一同を前にユーゴはゆっくりガブリアスの頭を撫でた。

ユーゴ「こいつは俺より前のトレーナーに捨てられていてな。そのせいで俺たち人間の事を信じられなくなってしまうんだ。ゲットしたばかりの時は俺に対しては敵意むき出しで、あちこち噛まれたもんだよ！」

ユーゴ「だけど！俺も負けずに何度も何度も話しかけたりしては、仲良くなるために色々奮闘したんだ。そして一緒に特訓をして、その前のトレーナーにリベンジを果たせた事でこいつとやっと本当の

仲間になる事が出来たんだ。あの時、初めて俺に向かって嬉しそうに飛びついてきたその瞬間は今でも覚えているよ！」

マフオクシー「フオクシー!!?」

ガブリアス「ガアブ!!?」

ユーゴ「だから！リーリエも今までズルズキンと向き合っていたその時間は決して無駄ではなかったはずだ。そうやって紡いできた想いはちゃんとズルズキンにも届いているはずだよ！」

ユーゴの話聞いたリーリエは滲んだ涙を拭いながら笑い始めた。いつも通りの笑顔を見せたリーリエにサトシ達は一安心した。

するとその直後、地面が大きく揺れ出すと、リーリエ達の目の前に大きな穴掘りドリルを携えた大きなメカが現れた。

ユーゴ「一体なんなんだ!?!」

お決まりのセリフが流れた所でコックピットからロケット団が姿を現した。

ヤマト「なんだかんだと聞かれたら」

コサブロウ「答えないのが普通だが」

ニヤース『まあ！特別に答えてやるニヤ』

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ヤマト「愛と切実な悪を貫く」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

ニヤース『ニヤース！』

ヤマト「宇宙を駆ける我らロケット団には」

コサブロウ「シヨツキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

ニヤース『ニヤーんてな！』

ツボツボ「ボツツ!!?」

セリフを言い終えたロケット団は自信ありげにリーリエ達を見下ろした。そのメンバーにアローラニヤースも加入している事にピカチュウとシロンも毛並みを逆立て警戒している。

サトシ「ロケット団!!!」

ヤマト「はいはい！そんなわけで！」

コサブロウ「今度こそお前らのポケモンは頂くぜ！」

と、ロケット団のメカからマジックハンドが飛び出すと、そのまま近くで寝ているズルズキンに向けて襲いにかかった。

ズルズキン「ズルッ!!!」

リーリエ「ズルズキン!!!」

サトシ「リーリエ!!!」

ズルズキンを守ろうと飛び出したリーリエもまたマジックハンドに捕まってしまい、そのままズルズキンと一緒にメカの中へと引きずり込まれてしまった。

ニヤース『おまけも付いてきたニヤ!!?』

ヤマト「まあいいわ！一体だけでも手に入った訳だし、欲張らずにひとまずここは撤収よ！」

コサブロウ「ラジャ！」

ズルズキンの捕獲を確認したロケット団は全速前進でその場を立ち去ろうとサトシ達に背を向けた。追いついて来れないようにとロケット団は平地でなく岩壁を登って逃げて行った。

ロトム『まっ…待つロト!!!』

岩壁を登って行かれたら追いつけないとみたロケット団であったが、それに有効なポケモンをサトシは手持ちに入れていた。そのポケモンが入ったモンスターボールを手にしたサトシはすぐに解き放つた。

サトシ「ドダイトス！君に決めた!!!」

ドダイトス「ドオダア!!?」

歩く大陸と語られた、たいりくポケモン。

サトシがシンオウ地方で仲間にしたポケモンだ。モンスターボールから放たれると、サトシはすぐにドダイトスの背中の上へと飛び乗った。それに続いてシロンもドダイトスの背中へと移った。

サトシ「ドダイトス！【ロッククライム】でロケット団のメカを追ってくれ！」



ドダイトス「ドオダ!!?」

4本足の鋭い爪を硬い岩へとめりこませると、ドダイドスはサトシの指示通りにロケット団のメカの方へと身体を向けると、地響きを立てながら岩壁を登り始めた。

リーリエ「大丈夫ですか!?ズルズキン!」

ズルズキン「ズルツ…」

暗闇に目が慣れてきたリーリエはズルズキンに目立った外傷が無いことを確認した後、自分達の状況を確認しようと辺りを見渡した。太腿から伝わる冷たい肌触りから鉄製のカプセルに閉じ込められている事が分かったが、その先どうするれば良いか悩んでしまう。

すると方法を考えているリーリエを置いて脱出を試みようとかプセルに向かつてズルズキンは「からてチョップ」を繰り返した。しかし頑丈なカプセルにヒビの一つも付けられないままズルズキンはその場で膝をついてしまった。

リーリエ「大丈夫!ここはわたたくし達に任せて下さい!」

まだ回復仕切っていないズルズキンを休ませたリーリエは二つのモンスターボールを手を取った。

リーリエ「ヒノアラシ!ゼニガメ!お願い致します!」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

リーリエ「ヒノアラシは「かえんほうしゃ」!!?ゼニガメは「みずてっぽう」!!?」

出てきた二体はリーリエの指示通り、カプセルに向かつて交互に技を繰り返して浴びさせた。ポケモン達を信じて指示を繰り返すリーリエと主人のピンチを助けるべく奮闘するポケモン達。そんな彼らの後ろ姿をズルズキンは目を逸らさずジッと見つめていた。

ヤマト「これはうまく行ったわね!」

コサブロウ「今度こそ俺たちの勝利だな!」

ニャース『いや…何か近づいてくるニャ!!?』

作戦が成功し逃げ切ったと有頂天になっているロケット団であったが、何かに気づいたニャースの一言に二人は振り返ってみた。

ニャースの予感は的中していた。その後を巨体に似合わないスピードで追いかけてくるドダイトスの姿にロケット団はおもわず目を丸くしていた。

サトシ「待て！ロケット団!!!リーリエ達を返せ!!!」

シロン「コーン!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ズルツグ「ズルウ!!?」

ロトム『止まるロト!!!』

ヤマト「本当にしつこいわね!」

追って来るサトシ達を追い払おうと、コックピットから身体を乗り出したコサブロウは攻撃を仕掛けた。

コサブロウ「やれツボツボ!【ヘドロばくだん】だ!!?」

ツボツボ「ボツツ!!?」

サトシ「ドダイドス!【エナジーボール】だ!!?」

ドダイドス「ダア!!?」

コサンジ「なら【ジャイロボール】だ!!?」

サトシ「ズルツク!【ずつき】で迎え撃て!!?」

追いかけてくるサトシ達に向かって放たれたツボツボの攻撃をすぐにドダイトスとズルツクはそれぞれの技をぶつけて相殺させた。それでもロケット団は何とかドダイトスの猛威を振り払おうと、怯まずにそのまま攻撃を続けた。

しかし、サトシ達ばかり気にしてしまった事により、ロケット団は前方からのもう一組のチームに気づけなかった。

デント「マイビンテージ!イワパレス!!!」

イワパレス「イワア!!?」

先回りする事が出来たデント達もそれぞれのポケモン達を前に出して身構えていた。まずはメカを止めるために、デントはイワパレスをモンスターボールから繰り出した。

デント「イワパレス!あのメカを押しさえるんだ!」

イワパレス「イワア!!?」

イワパレスは二本の大きなハサミを使って走ってくるメカを受け

止めた。

コサブロウ「うおおお!!!」

ニヤース『なら!このまま押し倒してやるニヤ!!?』

メカを止められた事に気付いたニヤースはアクセルレバーを全開にしてメカの走行力を上げたが、四角い形にくり抜かれた巨大な岩石ブロックを背中に乗せて歩いているイワパレスの脚力を前には歯が立たなかった。

ヤマト「何とかしなさいよ!ニヤース!」

ニヤース『ポケモン使いが荒い奴ニヤ!!?』

操縦をヤマトに変わったニヤースはコックピットから顔を出すと、イワパレスに向かって「10万ボルト」を放った。

マーマネ「トゲデマル!行っけー!!!」

トゲデマル「モギユ!!?」

その電撃を飛び出したトゲデマルが《ひらいしん》により吸収し、イワパレスを守った。

カキ「バクガメス!お前も行け!」

バクガメス「ガアメ!!?」

さらにバクガメスの増援にやりロケット団のメカはすっかり動きを止められてしまった。

ヤマト「ちよこまかと鬱陶しいわね!」

コサブロウ「なんて!しつこい奴らだ!」

ニヤース『なんか変な音が聞こえないかニヤ!!?』

まるで煎餅を齧るような鈍い音が響いている事に気づいたロケット団は辺りを見渡した。その音がリーリエを捕らえた鉄製のカプセルから聞こえた事に一斉に振り返ると、予想だにしない事が起きていた。熱と冷気を交互に与えた事により伸縮と膨張を繰り返した鉄壁には大きな亀裂が入っていた。それを確認したリーリエはキモリをモンスターボールから出した。

キモリ「キヤモ!!?」

リーリエ「キモリ!はたっ…!」

ズルズキン「ズルツ!!?」

キモリに指示を送ると一緒にズルズキンもリーリエの前へと飛び出した。キモリに軽く相槌を立てると、キモリもゆっくり頷いた。ズルズキンも協力してくれる事を悟ったリーリエは同時に指示を送った。

リーリエ「キモリ【はたく】攻撃！ズルズキン【からてチョップ】です！」

キモリ「キヤモ!!?」

ズルズキン「ズキイ!!?」

ロケット団「なあ　！何い!!!」

二体の一撃によりカプセル全体に一気にヒビが入った。カプセルを粉々に割ることが出来たリーリエ達は脱出を図る事に成功した。

リーリエ「やりましたね！みなさん！ズルズキンもありがとう！」

ヒノアラシ「ヒノツ!!?」

ゼニガメ「ゼニツ!!?」

キモリ「キヤモ!!?」

ズルズキン「……………」

突然お礼を言われたズルズキンはどう返せば良いか分からず思わず目を丸くしてしまった。その後、一斉に抱きつくヒノアラシとゼニガメをリーリエは優しく受け止めるとその光景を見ながらキモリは一息つくようにして軽く腕組みをして微笑んでいた。楽しそうにポケモン達に愛情を向けているリーリエの姿にズルズキンの口元が一瞬だけ緩んだようにも見えた。

ヤマト「やつてくれたわね！出てきなさいヘルガー！【かえんほうしゃ】!!?」

ヘルガー「へエル!!?」

作戦が破られた事に逆上したロケット団の攻撃がリーリエ達を襲った。

ズルズキン「ズキイ!!!」

リーリエ「ズルズキン!!!」

リーリエ達に向けられたヘルガーの火炎放射をズルズキンは身を呈して飛び出すと、そのまま技を受け、後方へと吹き飛ばされてし

まった。

さらに岩壁に強く身体を打ち付けられた事により、シバ戦でのダメージの所為もあつてか、その場で蹲ってしまった。

ズルズキン「ズツ：ズキイ」

身体中に走るダメージに耐えながらなんとか立ち上がろうと奮起するズルズキンの様子はまたもや、だんだんと薄暗いものへと変わっていく。

ヤマト「何なのよあれ？」

コサブロウ「何だか…」

ニヤース『様子が変だニヤ？』

ヘルガー「ヘル…」

ツボツボ「ボツツ…」

ロケット団の目には見えないが、リーリエにはそれがまたハッキリと目に焼き付いていた。

カキ「まさか…またか！」

マオ「逃げて！リーリエ！」

再びダークオーラを見に纏わせたズルズキンは充血した両目をリーリエ達に見開きながらゆっくりとこちらに向かつて歩いてきた。様子が違うズルズキンにキモリ達はリーリエを守るようにして前へと出た。攻撃の準備に入るキモリ達を見たリーリエは皆に止めるように伝えた。

リーリエ「みんな！待ってください！」

リーリエの声を聞いたキモリ達は攻撃態勢を止める。その後、リーリエは逃げるよう呼び止めるマオ達の声振り切り、一人でズルズキンの方へと歩んで行く。

リーリエ「わたくしは…」

まだズルズキンの気持ちをやんと理解してあげられてないかもしれないし、お互いの信頼を結ぶのにもまだまだ時間がかかるかもしれない。それでも何度時間が経っても、差し伸べるこの手を引っ込めようとはしない事を決めた。

落ち着く気配のないズルズキンにリーリエは怯む事なく距離を詰

めていく。離れた場所にいるサトシ達はその様子を固唾を飲んで見守るしかなかった。そしてリーリエは右手でズルズキンの頬に優しく手を置いた。

リーリエ「貴方を信じています！」

荒々しい唸り声が徐々に鳴り止むと、ズルズキンはゆっくりリーリエを見つめた。

そして…

ズルズキン「ズキイ!!？」

ニヤリと笑いながらリーリエに頷いた。血走ってる目はまだ引いてないが、リーリエにはいつものズルズキンに戻っている事に気づくとゆっくり微笑みかけた。

スカウター越しでその様子を見つめていたユーゴもゆっくりサトシ達に伝えた。

ユーゴ「リライブ成功だ！」

ダークオーラが消えた事によりズルズキンはロケット団を大きく威嚇した。

ズルズキン「ズツキイイイ!!!」

雄叫びを上げながら身体中からパワーを解放させると、その声に反応するかのようには地響きが鳴り上がった。岩の破片がズルズキンの周りを浮上すると、ズルズキンは一気に青白い光を放ちながらパワーを一気に解放した。

スイレン「見て！ズルズキンの様子が！」

デント「もしかして新しい技かい？」

デントの言った通りだ。すぐにロトムはスキャンして調べ始めた。

ロトム『ビビツ!!?あの技は「もろはのずつき」!!?最強のずつき技ロト!!?』

そして思いつきりジャンプをしたズルズキンは身体中から溢れるパワーをおでこに集めると、その力をロケット団へと向けた。

ロケット団「えっ…えっ…えっ…」

肌を突き刺す攻撃エネルギーを前にロケット団は一気に消沈してしまった。

ズルズキン「ズキイ!!?」

ありったけの力でロケット団のメカにぶつけたズルズキンはその衝撃波をメカの内部に流し込んだ。その力に耐えきれなかったメカはその場で大爆発を起こした。

コサブロウ「有り金を全部つぎ込んだというのに!!!」

ヤマト「新技なんてずるいわよ!!!」

ニヤース『結局いつも通りなのかニヤ!!!』

ロケット団「やな気持ちいい!!!」

ヘルガー「へェル〜!!!」

ツボツボ「ボツツ〜!!!」

キラツ!!!

マオ「リーリエ!」

スイレン「大丈夫!?!?」

リーリエ「はい!大丈夫です!」

シロン「コーン!!?」

リーリエ「シロン!御免なさい!心配をかけて!」

ロケット団を撃退したサトシ達はすぐにリーリエの元へと駆け寄った。

ロトム『だけど急に何で新しい技を覚えたロト!!?』

ユーゴ「おそらくズルズキンが本来、覚えていた技なんだと思うよ。ダーク技が消え去った事で本来覚えていた技を思い出す事が出来たんだろうね」

カキ「つまり！これでズルズキンは元のポケモンに戻ったわけだな！」

マーマネ「よかった…本当によかったあああ!!!」

マオ「もうっ！何でマーマネが泣いてるのよ！」

シバ「悪い奴らもズルズキンの頭突つきで月の彼方まで飛んだ訳だな！ワツハハハ!!!」

和やかなに談笑している中、ズルズキンは再びシバの元へと歩み寄った。それを見たリーリエも覚悟を決めると、ズルズキンの横へと並んだ。

リーリエ「シバさん！もう一度わたくし達とバトルしてくれませんか!？」

ズルズキン「ズキイ!!？」

そのままリーリエとズルズキンはゆっくりお辞儀をした。もう一度、シバにバトルを申し込んだリーリエ達にシバはまたズルズキンの方へと目をやった。そしてゆっくりと微笑んだ。

シバ「いいだろ！」

リーリエ「ありがとうございます！やりますよズルズキン！」

ズルズキン「ズルツ!!？」

今まで彼女と心を通わせず自分の力を知らしめるために戦っていたズルズキン。それが初めて彼女と視線を交わした。その瞳は真っ直ぐ曇りなき眼であった。

~~~~~

ユーゴとシバが闘っていた場所に着くと、リーリエとシバは直ぐに



バトルの準備に取り掛かった。リーリエの前へと出たズルズキンは両腕を大きく振り回しては闘争心を高めた。遠くでサトシ達が見届けてる中、リーリエはシバに一礼した。

シバ「その闘志に見込んで我が最強が相手だ！ウツハァー!!!」

二人の熱い心に胸が刺さったシバは中央のベルトに装着されていたハイパーボールを取り出すと、大きく投げ入れた。

カイリキー「リイキ!!?」

現れたのは四本の腕を巧みに扱うカントーを代表とする格闘ポケモン、カイリキーがリーリエ達の前に立ちはだかった。

『カイリキー かいりきポケモン

格闘タイプ

発達した4本の腕は2秒間に1000発のパンチを繰り出す事ができる。スーパーパワフルなパンチを喰らった者は地平線まで吹っ飛んで行ってしまうという』

?リーリエVSシバ?

シバ!「カイリキー!【いわなだれ】だ!!?」

カイリキー「リイキ!!?」

先行を貰ったカイリキーは四本の拳を思いっきり地面に叩き込んだ。地響きと共に衝撃で吹き飛んだ無数の岩石が雨のようにズルズキンの頭上へと降り注いできた。

リーリエ「躲して下さい!」

ズルズキン「ズキイ!!?」

リーリエの声と共にズルズキンは鋭い反射神経とフットワークを使って見事、無数のカイリキーの【いわなだれ】を躲す事に成功した。

カキ「躲したぞ!!!」

スイレン「ズルズキン!ちゃんとリーリエの指示を聞いてるよ!」  
ロトム『ピピッ!ズルズキンのリーリエに対する信頼度は100%  
ロト!』

その変わりようにサトシ達の手も熱くなった。ようやくパートナーという関係になったリーリエとズルズキン。その姿にシバも嬉しそうに頷いた。

シバ「〔クロスチョップ〕!!?」

接近戦を得意とするカイリキーにとっては好都合であった。腕の前にクロスした状態で近づいてくるズルズキンを待ち構えた。

リーリエ「ズルズキン!それも…」

攻撃を仕掛けるカイリキーを見て、リーリエはズルズキンを後退させようと呼び止めようとしたが「いわなだれ」を躲しながらカイリキーへと向かうズルズキンはとても楽しそうにしていた。

リーリエ(自分のポケモンの気持ちを優先してあげる事もポケモントレーナーとしての役目です!)

真つ向勝負を望んでいるズルズキンの気持ちを優先したりリエはありったけの声で攻撃の指示をズルズキンに送ったのだ。

リーリエ「ズルズキン!〔からてチョップ〕で向かい撃つのです!!  
?」

ズルズキン「ズルツ!!?」

その言葉を待っていたように微笑むズルズキンはカイリキーの頭上を取ると、そのまま力一杯に手刀を振り下げた。

ズルズキンの渾身の一撃をカイリキーは受け止めた。両者の技がぶつかり合うと激しい火花を散らしながら互いを押し合い始めた。シバのエースとも言えるカイリキーの攻撃に負けじと劣らない様子にサトシ達は目を見開いて驚いていた。

リーリエ「次はカイリキーの足元に向かって〔あくのはどう〕です!!?」

次の指示を聞いたズルズキンはカイリキーの腕を振り払うと、一歩下がってから「あくのはどう」を放った。

カイリキー「リキイ…」

一歩手前に撃ち込められたズルズキンの攻撃は激しい砂埃と黒い霧を撒き上げてはカイリキーの視界を奪った。姿を見失ったカイリキーは慌ててズルズキンの影を探し始めた。

だが、気配に気づき空中へとジャンプしていたズルズキンを見つけたものの、もう膝小僧に攻撃エネルギーを貯めていたズルズキンはカイリキーに向かって降下した。

リーリエ「今です！【とびひざげり】!!?」

ズルズキン「ズツ!!?」

カイリキー「リキイ!!!」

【あくのはどう】を目前らましに使って、【とびひざげり】を確実に命中させる作戦は成功した。隙をつく事が出来たズルズキンの技はカイリキーの腹部へと命中した。昨日とは違い技を当てる事が出来た事にズルズキンの顔からは笑みが零れた。

シバ「カイリキー！【バレットパンチ】だ!!?」

カイリキー「リキイ!!?」

リーリエ「前の皮を伸ばして受け止めて下さい!」

ズルズキン「ズキイ!!?」

シバの気迫ある声に反応したカイリキーはその場で踏ん張るとすぐに攻撃を仕掛ける。切り替えの早さに驚くリーリエであったが、ズルズキンの性質を利用した防御指令で何とかカイリキーの攻撃を防ぐ事が出来た。

サトシ「おお!いいぞ!」

ズルツク「ズルツ!!?」

リーリエの機転のお陰で難を逃れたかに見えたが、それだけで四天王のポケモンの勢いを止める事は出来なかった。

シバ「だが!カイリキーには4本の腕がある事を忘れるな!」

カイリキー「リキイ!!?」

直ぐに次の攻撃の一手を指示した通りにカイリキーはもう二本の腕でズルズキンに攻撃を与えた。

ズルズキン「ズキイ!!!」

後方に飛ばされたズルズキンは何とか地に足をつけて踏ん張った。今の一撃を耐える事が出来たズルズキンは踏ん張りながら頭部に攻撃エネルギーを集中させ始めた。

リーリエ「ズルズキン！【もろはのずつき】!!？」

ズルズキン「ズルツ!!」

この一撃に全てを賭ける気持ちで指示を繰り返すリーリエ。そしてそれに応えるように声を上げるズルズキンは一気にパワーを解放させた。地響きを立てながらカイリキーに向かって地面を蹴り上げた。

シバ「魂を込めろ!!!【ばくれつパンチ】だ!!？」

カイリキー「リイキ!!!」

二人の覚悟をズルズキンの攻撃エネルギーに載せ、それを肌で感じ取ったシバはその闘志に見合った技でズルズキンの猛攻に立ち向かう事にした。それはカイリキーも同じだ。全ての拳にパワーを貯め始めると、ズルズキンが近づいてきたその瞬間に全てを力をぶつけた。互いの技がぶつかり合ったと同時にその衝撃波は周りにいる人達に襲いかかった。砂埃が目に入らないよう飛ばされないように堪えるリーリエはその決着がつくまで目を離すことはなかった。

地響きがおさまると二体はその場で睨み合うように立ち尽くしていた。そして、一体のポケモンの膝が地に着くと、その場で倒れてしまった。

ユーゴ「ズルズキン戦闘不能！カイリキーの勝ち！よって勝者、四天王のシバ！」

勝負が決したと同時にリーリエは自分の肩にズルズキンの腕を回した。起き上がるのと一緒に目を覚ましたズルズキンはリーリエの方へと目をやった。

リーリエ「大丈夫でしたか！ズルズキン！」

シロン「コン!!？」

ズルズキン「ズキイ…」

リーリエ「負けてしまいましたが、この初陣はわたくしと貴方がさらに強くなる大きな一歩になったと思います。なにより、わたくしは

貴方と本当のバトルが出来て凄く嬉しいです！」

リーリエの満足げな笑顔にズルズキンはゆっくりと頷いた。その顔もまた満足げであった。

サトシ「二人とも！息が合った最高のバトルだったぞー！」

デント「うん！互いを信じるフレイバーが二人の絆をさらに成長させたんだね！」

その言葉にリーリエは応援してくれたみんなに向けて笑顔で返した。ズルズキンと蓄積してきた時間は無駄ではなかった事が示された事にサトシ達も仄々とした。

~~~~~

シバ「ここを降りればポケモンセンターが見える！今日はここで休むと良い！」

日が暮れる前に峠を降りる事が出来たリーリエ達はシバの案内のお陰で今日中に着く事が出来そうだ。そんな中、身体が疼いてしょうがない様子でいるリーリエとズルズキンを不思議そうにマオは見つめていた。

マオ「どうしたの？リーリエ」

リーリエ「なんだか！先程のバトルでの熱が冷めないせいなのか分かりませんが、身体がともうずうずしているのです！」

ズルズキン「ズキイ!!!」

リーリエ「さあ！行きましようズルズキン！ポケモンセンターに向かって競争です！」

ズルズキン「ズキイ!!?」

と：変なスイッチが入ってしまったリーリエはズルズキンと一緒にポケモンセンターに向かって走り出した。その様子を楽しそうに

シロンとデデンネも後を追って行った。

マオ「ちよつと待ってよ！リーリエ!!!」

スイレン「変なスイツチ入っちゃった！」

デント「これは中々暑いフレイバーだね！」

サトシ「おもしれ！俺も付き合おうぜ！」

カキ「よし！俺たちも負けられないぞ！バクガメス！ガラガラ！」

マーマネ「えええ!!!ちよつと！待ってよ！置いていかないでく!!!」

シバとユーゴと別れたサトシ達もリーリエを追って走り出した。

長い長い旅の中でようやくズルズキンと心を通わせる事が出来たリーリエ。今後の二人の活躍に目が離せないであろう。

## 第四十四話 どんどん行くよ！ドンバトル ①

クチバシテイへ目指しているリーリエ達にカノンからの連絡を受け取っていた。どうやらクチバシテイの近くの街でポケモンのバトル大会が開かれるという内容であり、その話を聞いたリーリエ達は腕試しも兼ねて参加してみる事にした。

最近、公式バトルをやっていたいなかったサトシとカキはバトルしたい欲に飢えに飢えている状態もあって、開催場所が見えてくるなり一目散に走り出していった。その跡を追うようにして待ち合わせの場へと向かっていたリーリエ達はサトルとソウタと一緒にいるカノン達と合流したのであった。

カノン「リーリエ！みんな！こつち！こつち♪!!」

マオ「みんな、久しぶりだね！」

スイレン「あれからジム戦の方はどう？」

カノン「みんな順調よ！サトルはここに来る前に四つ目を手に入れたんだよね！」

サトル「うん！」

そう言うと、サトルのバッジケースにはその四つ目となるピンクバッジが光り輝いていた。

マーマネ「おめでどう！サトル！」

サトル「うん！ありがとう！」

サトシ「ピンクバッジって事はセキチクジムか！」

ソウタ「そうなんですよ！まあ、あのジムならサトルでも楽勝だろうな！」

リーリエ（楽勝…？）

バトル大会が開催されるスタジアムには大勢の人達が集まっていた。その半数以上は観覧希望の人達で埋め尽くされており、参加者はリーリエ達を除いてあまりいないみたいだ。何故なら、この大会は余り知名度が無いようで突発的に開かれる事も多いらしく、カノンもリーリエに連絡入れたその日に知ったぐらいであったからだ。しかしそんな中、かつての旅を思い出すかのようにサトシとピカチュウは

目をキラキラさせながら会場を見つめていた。

サトシ「ドン・ジョージさんか！懐かしいな〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

デント「今はイツシユだけでなく、定期的に他の地方でも開催したりしてるみたいだね！」

そうこの大会はサトシがイツシユ地方を旅してきた時に毎度の腕試しとして良く参加していたバトル大会！バトル施設のオーナー、ドン・ジョージ主催のドンバトルであったのだ。思い出がフラツシユバツクし、イツシユで出会った仲間たちの顔が流れ、懐かしさに物思いに更けていると、何かを感じ取ったピカチュウは辺りを見渡し始めた。

サトシ「おい！どうしたピカチュウ!!？」

ピカチュウ「ピツカ!!？」

何かの気配に気付いたピカチュウは走り出すと、その跡を追ってサトシも走りだした。人混みを抜け、その場で立ち止まったピカチュウの前にはルカリオの姿があった。

ルカリオ「リオツ!!？」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

ピカチュウに気づいたルカリオは穏やかな笑顔を向けた。するとピカチュウは少し驚いた表情でルカリオに声を掛けると、尻尾を使ってルカリオとハイタッチを交わした。

サトシ「このルカリオ…まさか」

まるで昔の友達と再会したかのように喜んでいる二体の様子。そしてルカリオから感じる波動。それはサトシの頭からつま先までと全身を駆け巡った。脳裏によぎるイツシユリーグでのある試合。確信に変わったサトシはルカリオの主の名前を上げようとしたと同時にオレンジ色のバンダナを被った少年がサトシの元へと駆け寄って来た。

コテツ「おおお!!!サトシじゃんか!」

サトシ「コテツ！やっぱりお前か!」

サトシの元へと着いたコテツはそのままサトシと拳を合わせて





マーマネ「大丈夫!?!」

二人はサトシの元へと向かうなか、見たことあるこのシチュエーションから何かを察したデントは息を切らして蹲ってるその影に声をかけた。

デント「君も相変わらずそそっかしいねベル…」

ベル「えっ!?!? 何で私の名前知ってるの?」

自分の名前を呼ばれた事に驚いたベルは顔を上げた。デントの顔が瞳に映ると、緑のベレー帽を被り直すと、満面の笑みでデントの両腕をとった。

ベル「あっ! デント君! それにコテツ君も!」

久しぶりの再会に心躍るベルはその両腕を上下に激しく振り上げた。デントは腕を持っていかれそうになりながらも、一旦ベルを落ち着かせると噴水広場へと指を指した。ベルは首を傾げながらその方角を見ると、その顔は一気に青ざめた。

ベル「うわあああ!!! サトシ君!!!」

サトシ「やつぱお前か…ベル…」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

~~~~~

ベル「御免なさい! 御免なさい! 御免なさい! 御免なさい! 御免なさい! 御免なさい! 御免なさい!」

サトシ「もういいよ…ベル」

濡れた身体を拭いているサトシに向かってベルは謝罪を連呼しながら何度も頭を下げていた。

サトシ「それにしてもベルも何でカントーに居るんだ?」

ベル「あっ! それはね! 今はパパとママと旅行中なのよ! そしたら偶然ドン・ジョージさんの主催の大会が近くで開催されるからって聞いたから、慌てて来ちゃった!」

カントーに来た経緯を話した後、サトシの後ろにいるリーリエ達に気がつくとき大きく手を振って挨拶を交わした。そして、リーリエに抱

き抱えられているシロンとその足元にいるデデンネに目が行くと、目をキラキラさせながら、猛スピードでリーリエの元へ駆け寄った。  
ベル「うわあ!!!何!?!?この子達!可愛い!!!」

お淑やかそうに見えてパワフルなベルにリーリエはきよとんとながら言葉を失っていた。

ベル「ねえ!ねえ!この子と私のエンブオーと交換しない?」

リーリエ「え...ええと...」

ベル「だったら!シユバルゴは?それとも!」

リーリエ「いえいえ!シロンは交換に出しません!それとデデンネは...」

ベル「大丈夫!この子達に聞くから!」

リーリエ「えっ...えええ!!!」

ベル「ねえ貴方達!私のポケモンにならない!?!?」

シロン「コオオオン!!!」

デデンネ「デデデ!!!」

危機を感じたシロンとデデンネは咄嗟にそれぞれの技を浴びさせ、ベルをそのまま氷漬けにしてしまった。しかし、サトシ達は慌てること無く手持ちの炎タイプのポケモンを使ってベルを氷の中から救出した。この天真爛漫な性格にはいつも振り回されていたサトシとデント。別れてから全然変わっていない様子に頭を抱えるも、コテツ同様に変わらないその様子に安心する自分もいた。

???「おっ!何だかちよつとした同窓会って感じだな!」

また聞き覚えのある声にサトシとデントは振り返る。その先には赤毛でサトシ達よりも大柄な、ゼブライカに跨る一人の少年がいた。

ケニヤン「よお!元気にしてたか!サトシ!」

サトシ「ケニヤン!久しぶり!お前も元気にしてたか!」

ケニヤン「アクセントが違うけど...まあいいか!勿論だぜ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ゼブライカ「ブロロ!!?」

ロトム『このポケモンは初めて手に入るデータロト!』

『ゼブライカ らいでんポケモン

電気タイプ

稲妻のような瞬発力を持ち全速力で走り出すと雷鳴が響き渡る。気性が激しく怒ると立髪から四方八方に電気を撃ちまくる』

ケニヤン「何だ…これ？」

サトシ「ロトム凶鑑さあ！気軽にロトムって呼んであげてよ！」

サトシとケニヤンが別れた後の事を話していると、その隣でピカチュウとゼブライカは互いの電気を浴びながら戯れあっていた。その電気に引き寄せられるようにしてトゲデマルも二体の輪の中へと入って行った。

ケニヤン「おお！なんだ…これもまた見ないポケモンだな！」

マーマネ「トゲデマルって言うんだ！宜しくね！」

トゲデマル「モギユユ!!？」

ケニヤン「おう！こいつはゼブライカ！俺の事もケニヤンって呼んでくれ！」

フレンドリーな性格もあって、ケニヤンとはすぐに打ち解けるには時間は掛からなかった。他のポケモン達も出してあげては、リーリエの他のポケモン達とも交流を交わしていた。

デント「トゲデマルも電気タイプのポケモンだからね！ケニヤンくのゼブライカの立髪から流れる痺れるテイストに引き寄せられたみたいだね！」

ケニヤン「だから…アクセントが…」

そのソムリエに邪険に思った人物がデントへと近づいて行く。

???'「カントーに行つてからも相変わらずダメダメなテイストね！Aクラスソムリエとして、もっと真つ当に貫いた刺激的なプレイヤーを醸し出せないのかしら」

デント「この声は…まさか…」

またしても聞き覚えのある挑発的な台詞。その目が捉えたのは特徴的な紫色のボブヘアの少女であった。

カベルネ「ここであつたが百年目よ！デント！今度こそ貴方より私の方が上である事を証明してやるわ！」

そう言い残し、すぐさばこの場を後にした。どうやらデントにしか見向きもしなかったのか、サトシ達もいる事には全く気付いていない様子だ。

カノン「凄く敵意むき出しだったよね…」

ソウタ「デントさんはあいつに何かしたのか？」

デント「さ…さあ…何でだろうね…」

それは当の本人が聞きたいのであろう。カベルネは思い込みの激しい性格の持ち主の事であつて、デントとの回想シーンではデントはまるで悪人のように語っていたという。しかし、難関であるソムリエの資格を短期間で所得するなど、努力家に置いては一目置かれてくる。ちなみにランクはCクラスであり、女性ソムリエの事はソムリエールと呼ばれている。

???「あんた達がいる、なんでアイリスが居ないわけよ！」

もうお約束なのか分からないが、またまた聞き覚えのある声がする方へと振り返る。そこにいたのはやはり、青緑色のタイツ型のワンピースにピンク色に近い赤髪のショートヘアを持つ少女がそこにいた。

サトシ「ラー！ラングレー!!!」

デント「君もカントーにきたのかい!?!」

ラングレー「私がかントーに居ようがこの大会に参加するかしないかはどうでもいいわ！それよりアイリスよ！アイリスは何処にいるわけ！」

この気迫にアイリス以外のトレーナーには眼中向けない勇ましいさ。押されながらも答える。

デント「アイリスとは昔にかントーで別れたんだ！サトシとはこの前、再会したばかりなんだよ」

ラングレー「そ…そうなんだ…」

サトシ・デント「……………」

ラングレー「まあ、いいわ！まだ未熟なままの彼奴に勝った所で勝った気にはなれないわ！立派なドラゴンマスターになるまで待つといてやる！」

敵意を出すのが、あの様子からアイリスと再会を僅かながら期待していたみたいだったようだ。そう言い残してラングレーもその場を去って行った。

マオ「アイリスって？」

サトシ「イツシユ地方を旅していたもう一人の仲間さあ！」

デント「彼女はドラゴンタイプのポケモンを極めたドラゴンマスターを目指して修行の旅を続けているんだ！」

聞き慣れない人物の名に反応したリリー工達にサトシは答えた。

デントからは一緒にジョウトへと向かったアイリスは到着すぐに別れて、ドラゴンジムのジムリーダーのイブキが住むフスベシティへと直ぐに向かったと言う。この広い空の下で今もこうして夢に向かって走っているアイリスの事を浮かべると一段と気合が入る。両腕を伸ばして背伸びをし、ゆっくり目を開けるとまたも見慣れた人物の顔を確認した。

カメラを片手に旅の記録を収めている少年もサトシの存在に気付いた。しかし、サトシを見るなり顔を若干赤らめるとすぐにそっぽを向いてしまった。その様子にしかめ面になったサトシはその人物の名前を大きく叫んだ。

サトシ「おーい！シユーター!!!」

シユーター「……………」

サトシ「聞こえてないのか？おーい！シユーター!!!」

シユーター「……………」

サトシ「おーい！シユーター!!!」

シユーター「やめてくれ／＼／聞こえてる！」

どうやら大袈裟に自分の事を呼び止められた事が恥ずかしくなつてそっぽを向いていたようだ。

ケニヤン「イツシユリーグ以来だな！」

デント「相変わらずトレーナー修業に勤しんでるようだね！」

シユータイー「ポケモントレーナーとして強さを求めるならもつと各地を旅をして色んなトレーナーと勝負する！基本ですよ！」

サトシ「シユータイー！出るなら全力で相手になるぜ！」

シユータイー「それは僕も同じさ！」

そう言つて和かに合図を交わしそのままサトシ達の元から離れて行つた。初めて出会つた時に見せた険悪な様子は無く、一人のライバルとして自分を見てくれた事にさらに闘志に火がついたようだ。

久しぶりのドンナマイトはサトシにとってはリーリエ達を含めた、さらに成長してきたライバル達との波乱の闘いになる事は間違いないだろう。

~~~~~

今回のドンバトルのルールは対一のシングルバトルとなつている。登録ポケモンの数は三体までと決まっていた。ここまで色んなポケモン達を仲間にしてきたリーリエにとっては悩みどころである。

リーリエ「選出は三体…どの子にしましょうか…」

受付にて出場ポケモンを記入する欄に手が止まっていた。ジムと違つて事前情報なしでの選抜。この経験はポケモンリーグに出場する前にやつて置いて良かったと思う。

難しい顔で用紙と睨めっこしているリーリエにシロンはテーブルに乗り移るとその顔をマジマジと覗き込んだ。

シロン「コン!!？」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

サトシ「勿論！ピカチュウには出てもらうさあ！」

リーリエ「シロンもですよ！」

互いの相棒のやる気を見て笑うリーリエは選抜するポケモンを選び終わると、管理人の案内でバトルフィールドへと通された。

~~~~~

長い通路を抜けると、大歓声と共にそこは白熱した光景が広がっていた。円を書くようにして出場者の登場を待ちわびていた観客達。その渦の中でスポットライトに照らされるトレーナー達。そして中央のモンスターボールがプリントされたバトルフィールド。試合前からこの場にいる全員のボルテージは一気に跳ね上がっていた。

タケミツ『今回の実況解説！テレビライモンのタケミツが務めさせて頂きます！さあ、カントー地方での開催！どうでしょうか。主催のドン・ジョージさん！』

ドン『イツシユ以外のポケモン達を見られる事にワクワクが止まらなかつたりする！』

タケミツ『それでは対戦の組み合わせを発表致しましょう！』

大画面モニターには出場者の顔写真が一斉に並べられ、トランプのようにシャッフルされた。二人一組と組まれたカードを見て、各トレーナーはそれぞれの組みと顔を合わせた。目と目があつたらポケモンバトル。その瞳に映ったトレーナーが第一試合の対戦相手だ。

- 第一試合 サトシVSコテツ
- 第二試合 スイレンVSラングレー
- 第三試合 リーリエVSベル
- 第四試合 シューティーVSカノン
- 第五試合 サトルVSデント



第六試合 マーマネVSソウタ  
第七試合 マオVSケニヤン  
第八試合 カキVSカベルネ

サトシ「第一試合目からコテツか！」

コテツ「早くもサトシとかよ！わくわくしてきた!!!」

ラングレー「悪いけど、きっちり勝たせて貰うから！」

スイレン「その言葉そのまま返してあげる！」

リーリエ「ベルさん！宜しくお願い！」

ベル「きやあ！シロンちゃん！一緒に他の人のバトルを観ていきましょうよ！」

リーリエ「…します…」

カノン「宜しくね♪」

シューティー「イツシユ以外のポケモンの実力。見させて貰いますよ！」

デント「さてと！トレーナーとしての君の力量！しっかりとテイステイングさせて貰うよ！」

サトル「はい！宜しくお願いします！」

ソウタ「しゃあ！容赦しないからな！」

マーマネ「僕だって負けないよ！」

ケニヤン「悪いけど！女の子だからって手加減はしないからな！」  
マオ「大丈夫！そうして貰うつもりはないから！」

カベルネ「デント！私と当たる前に負けるんじゃないわよ！貴方を倒すのはこのカベルネよ！」

カキ「その前に対戦相手は俺なんだが…」

それぞれの意気込みを語った所で早くも第一試合が幕を開けようとしていた。

タケミツ『まずは第一試合！サトシ選手VSコテツ選手です！』

ドン『赤い帽子を被った少年とは久しぶりだったりする！』

名前を呼ばれたと同時に二人のトレーナーはそれぞれのトレーナーボックスへと入っていた。一人は赤い帽子を被り直し、もう一人はオレンジ色のバンダナを伸ばして自分の額にぶつける。気合を入れ直した二人はさらに意気込みをぶつけた。

サトシ「イツシユリーグでのリベンジマッチ！ここで果たさせて貰うぞコテツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

コテツ「ししっ！あれから俺たちもさらに強くなったんだ！覚悟しろよな！サトシ！」

ルカリオ「リオツ!!?」

審判「それでは第一試合！サトシ選手VSコテツ選手！試合開始！」

?サトシVSコテツ?

試合開始のコールが鳴ったと同時に二体のポケモンがバトルフィールドへと放たれた。

サトシ「俺はピカチュウ！君に決めた！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

コテツ「俺は勿論！ルカリオで勝負だ！」

ルカリオ「リオツ!!？」

フィールドに入ったピカチュウは頬の電気袋から電流を発し、それに対しルカリオは群青色のオーラを発した。この二体はイッシュリーグでも対戦した事もあり、ピカチュウはそのリベンジに燃えている。そんなルカリオもピカチュウともう一度闘える事に笑みを浮かべていた。

タケミツ『ピカチュウとルカリオでのバトル！両選手の相棒同士のバトルとなりました!』

ドン『漲る闘志！解説席にいる私の所まで届いたりする!』

熱の入った実況により観客達のボルテージもマックスになった。轟く歓声はサトシとコテツの心を燃やし二人の調子を上げていく。

コテツの闘志から溢れてる波動を感じたルカリオはバングルが取り付けられている右腕を天に向かって掲げた。

コテツ「最初から飛ばして行こうぜ！ルカリオ！」

ルカリオ「リオツ!!？」

サトシ「まさか！あれって！」

ルカリオの合図を見たコテツは同じようにキーストンを持っている右腕を天へと掲げた。共鳴した二つの石は光の線を繋ぎ合わせる時、コテツからパワーを貰ったルカリオの身体は七色の虹のように光り輝き出した。

それを見て驚くサトシだったが、知らない間にさらに成長したコテツとルカリオと戦えると解った瞬間、その胸は高鳴り始めていた。

コテツ「ルカリオ！メガシンカだ!!!」

ひとまわり身体が大きくなったルカリオはさっきよりも大きい波動パワーを身体中から解き放っていた。冷静沈着なイメージから爆発的な闘争本能を得たルカリオは全神経を全ピカチュウへと全集中

した。

ケニヤン「ルカリオの姿が変わったぞ！コテツのやつ！いつの間にあんか力を手に入れたんだ！」

ラングレー「噂で聞いたことがあるわ！あれがメガシンカなのね！」

カベルネ「ルカリオから感じてくるこのテイスト！さらに強い力を感じるわ！」

いきなりのメガシンカに驚く他の選手達であったが、しかしそんな事で怯んだりするサトシのピカチュウではなかった。メガルカリオを目の当たりにしたピカチュウの闘争心もさらに高まっていた。

サトシ「メガシンカかよ！凄えぜ！コテツ!!!」

コテツ「だろだろ♪凄えだろ！」

武者震いが起きたサトシは足を小刻みに踏み込んでいた。

ケニヤン「相変わらずだなサトシは……」

カキ「ああ！彼奴は相手が強ければ強いほど燃えるからな！」

マオ「それに最初からメガシンカで来るなんてね！」

スイレン「うん……」

最初からパワー全開で向かう姿勢でいるコテツとルカリオ。さっきまでのお調子者とはまるで別人であった。言わずも何もコテツ超本気モードを目の当たりにしたリーリエ達は息を飲んだ。

リーリエ「それだけコテツさんはサトシに本気って事です！」

そしてすぐさま二体はそれぞれの主人が一発目に指示を出す前に同時に動き出した。それはもうこの技を指示をする事が分かっていたからだ。

サトシ「ピカチュウ！【10万ボルト】だ!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

コテツ「ルカリオ！【はどうだん】!!?」

ルカリオ「ルオ!!?」

タケミツ『両者の技は相殺された！パワーは互角のようだ！』

サトシ「攻めろ！【でんこうせっか】!!?」

爆煙が晴れた同時に、ピカチュウは光の速さでルカリオに向かって

走り出した。

コテツ「ルカリオ！こっちは『グロウパンチ』で対抗だ!!?」

拳にパワーを貯めたルカリオはそのままピカチュウに向かって攻撃を仕掛けた。ルカリオの攻撃に気づいていたが、ピカチュウはパワー勝負に応じるかのようにして、そのままルカリオに自分のパワーをぶつけた。またもや反動で吹き飛ばされた二体はその俊敏なスピードですぐに巻き返しに向かった。

コテツ「そのまま連続で『グロウパンチ』!!?」

サトシ「こっちは連続で『アイアンテール』だ!!?」

ピカチュウ「ピカアアア!!?」

ルカリオ「リオオオオ!!?」

続けてピカチュウは硬化させた尾で反撃を試みた。ルカリオももう一つの拳にも力を貯めると、そのままボクシングのような猛烈なラッシュを叩き込んだ。暫く両者の攻防が続くのだが、

ピカチュウ「ピツ!!!」

攻撃が決まるたびに、ピカチュウの方が徐々にルカリオのパワーに押されている事に気づいた。

ロトム『『グロウパンチ』の効果でルカリオの攻撃力はどんどん上がっているロト!!?このまま打つかり合いあえば力負けしてしまうロト!!?』

ルカリオ「リオツ!!?」

ピカチュウ「ピツカア!!!」

ロトムの言った通り。力を増幅させたルカリオは更新の一撃が込めた右ストレートでピカチュウを後方へと吹き飛ばした。受け身が取れないピカチュウが壁に叩きつけられるのも時間の問題だ。しかし、機転をきかせたサトシはすぐにこの状況を対処した。

サトシ「ピカチュウ！後方に『エレキネット』!!?」

サトシの指示を聞いたピカチュウは電気エネルギーを尾を使って、自分の後方へと弾き飛ばした。壁に網目上に広がる電気のネットを貼り付けたピカチュウはそのネットに包まれると、そのままトランポリンのようにしてルカリオに向かって勢いよく弾き飛ばされた。反

発力によって数倍のスピードを手にしたピカチュウは目にも止まらぬ速さで、ルカリオの腹部に【アイアンテール】を決めた。

鋼タイプを持つルカリオには効果は薄いはずがスピードが乗った【アイアンテール】を受け止める事は出来ず、後方へと吹き飛ばされてしまった。

サトル「凄い！相手の攻撃を利用してのカウンター攻撃だなんて！」

デント「それに應えるピカチュウも流石だよ！今まで目にしてきたトレーナーの中でもサトシとピカチュウのコンビの強さは別格だ！」

サトシ「どうだよ！コテツ！」

コテツ「へえん！そんな事ぐらいで驚かねえよ！」

壁に叩きつけられたルカリオの様子を伺うコテツにルカリオは無事を知らせる。ルカリオはまだ動ける事を見越したコテツはすぐに指示を出した。

コテツ「ルカリオ！【グロウパンチ】!!？」

再び【グロウパンチ】を発動させたルカリオ。それを見たピカチュウは前のめりになってルカリオの動きをしつかりと目で確認をする。いつ向かって来ていいように待っていたサトシとピカチュウであったが、ニヤリと笑みを浮かべたコテツは地面へと指差した。

コテツ「フィールドを利用しろ！地面を叩き割れ!!！」

ルカリオ「リオツ!!？」

視線を下へと映したルカリオは思いつ切り地面を叩き割った。足が纏れそうになる程に揺れるその衝撃によって、岩の破片が空中へと舞い上がった。

コテツ「攻めろ!!!」

雨のようにフィールドに降り注ぐ雪崩にルカリオは岩の軌道を読みながら、ピカチュウに接近を図った。

サトシ「来るぞピカチュウ！【10万ボルト】だ!!？」

ルカリオの動きを止めるべくピカチュウは電撃で対抗するも、降り注ぐ岩石がルカリオの身を守る壁となってしまうた。

司会者『なんと！ピカチュウの攻撃が防がれてしまった！』

ドン『フィールドの地形を利用した見事な戦略だったりする！』  
攻撃が通らないまま、安全に距離を詰めに来たルカリオにピカチュウはいったん後退する事にした。

コテツ「捕まえるー！」

ルカリオ「リオッ!!?」

しかし、尻尾を掴まれたピカチュウはそのままルカリオに捕まってしまうた。

コテツ「ルカリオ!そのまま【ともえなげ】!!?」

ルカリオはピカチュウの身体をしつかりとホールドする。そのまま身体を丸めて後ろの方へと転がると、蹴り上げて頭越しに投げ入れた。

サトシ「それならピカチュウ!岩を足場にして飛び回れ！」

投げ技を喰らったピカチュウは岩石に身体が当たる直前に【アイアンテール】を使ってガードした。そのまま【でんこうせっか】に切り替えると、降り注ぐ岩場を足場にして飛び移るかのようにルカリオの周りを周回し始めた。作戦を逆手に取られたルカリオは必死にピカチュウの姿を捉えようとしている。

カキ「この咄嗟の判断力!流石だな！」

シユータイー「相変わらず無茶苦茶な戦法を取るね…」

ピカチュウの高速移動にその姿を捕らえる事が出来ないルカリオに焦りが生まれる。このままではまずいと感じたコテツはバンドナを思いっ切り引っ張った後、額に強く当てると何かを閃いたかのように、威勢の良い声を上げた。

コテツ「閃いた!!!ルカリオ!目で追うな!ピカチュウの波動を感じとれ！」

指示を聞いたルカリオもコテツの声に我に変えると、両目を閉じてピカチュウの波動を嗅ぎ分ける。ルカリオの性質を生かした機転だ。

コテツ「そこだ!【はどうだん】!!?」

全集中、波動の呼吸によりピカチュウの位置を捕らえたルカリオは【はどうだん】を打ち放った。

サトシ「ピカチュウ!【10万ボルト】だ!!?」

立て直して来たルカリオにサトシは慌ててピカチュウに指示を送る。サトシの声に反応したピカチュウは踏み込んで、真上へと高くジャンプすると、電気袋にエネルギーを貯め始めた。しかし、先に攻撃を仕掛けたルカリオに間に合わず、ピカチュウに「はどうだん」が命中してしまった。

タケミツ『攻撃を決めたのはルカリオだ!!!』

ドン『いや!!!』

煙が晴れると、ダメージを引きずりながら何とか耐え凌いだピカチュウは「10万ボルト」をルカリオに放つ。

ピカチュウ「ピカチュウ!!!」

ルカリオ「リオオオオ!!!」

タケミツ『おつと！サトシ選手のピカチュウ！吹き飛ばされながらも攻撃を決めた!!!』

周りの岩石を粉碎しながら、ピカチュウの電撃はルカリオに命中した。しかし、パワーを一気に解放させた反動により着地に失敗したピカチュウは地面に叩きつけられてしまった。ルカリオもピカチュウの攻撃に思わず膝を落とすも、自身に流れる電撃を振り払って何とか耐える事ができた。

両者の猛攻に釣られて会場からは大きな歓声が鳴り響いた。

ルカリオ「リオツ!!?」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

その声に元気を貰った二体は体勢を立て直した。両者の力を認め合っている二体は公式戦で再び対戦できた事に高揚していた。その感覚はもちろん。それぞれの主人にもしつかりと伝わっている。

サトシ「やるな！コテツ！」

コテツ「お前こそ！くっうう!!! すごい楽しいぜ！」

コテツの声と共にルカリオは波動エネルギーを貯める構えを見せた。その姿にサトシとピカチュウも背を丸めて構え始めた。

コテツ「ルカリオ！「はどうだん」!!!」

会場の隅まで響き渡った音量に応じて、ルカリオは身体中から波動エネルギーを放出させた。球体状に形成されていくエネルギーは掌



に収まりきれない程に膨張していく。

マオ「大きい!!!」

カノン「あんな大きさ：防ぎきれないよー!」

リーリエ「いいえ：サトシとピカチュウなら」

誰から見ても為す術が無いと思えるこの状況下の中でサトシとピカチュウは笑っていた。これが二人の最後の一撃となる事を感じたサトシはZリングを前に翳した。

サトシ「行くぞ!ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピツカア!!?」

マーマネ「サトシ達もZ技で迎え撃つきだ!」

電気Zの力を貰ったピカチュウはルカリオと同じように大きな電撃玉を形成し始めた。二体の攻撃エネルギーを受けて、会場は地響きを立てながら唸り始めた。解説席にいる人達も含めて、観戦席にいる人達は身体が吹き飛ばされないように椅子に必死にしがみついていた。

ピカチュウとルカリオもそのパワーに押し潰されそうに足が地面にめり込んで来ているような感じがした。エネルギーが限界まで跳ね上がった事を確認したサトシとコテツは同時に指示を送った。

サトシ「コテツ!!!受け取れ!!!これが俺たちの全力だ!!!  
グギガボルト」  
!!!  
【スパークン

ピカチュウ「!!!チュウウウウウウ!!!」

コテツ「打て!!!ルカリオ!!!」

ルカリオ「!!!リオオオオオオ!!!」

両者の攻撃は激しくぶつかり合い、そして混じり、激しい爆発と共

に会場全体を震わせた。二体の安否を確かめなるべくサトシとコテツは相棒の名を呼び続けた。煙が晴れたフィールドにはフラフラになりながらも立っている一体とその場で倒れている一体の姿が見えた。勝敗が決したと分かった二人のトレーナーは歩き出した。そして、戦いを終えたその内の一匹は主人の肩に飛び乗り、もう一匹は主人の肩に捕まっていた。

審判「ルカリオ戦闘不能！ピカチュウの勝ち！一回戦の勝者はサトシ選手！」

司会者『ダイナミックなエキサイティングなバトルを制したのはサトシ選手だ!!!』

ドン『これはもはや事実上の決勝戦だったりする！いい試合だった!!!』

勝負を終えたサトシとコテツは手を取り握手を交わした。

コテツ「完敗だぜサトシ！お前ら二人ともさらに強くなったな！」

サトシ「俺たちも受け取ったぜ！コテツとルカリオの本気をな！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!?」

ルカリオ「リオツ!!?」

ピカチュウとルカリオも互いの健闘を称えて握手を交わした。お互いに全力を出し切ったのは二体の表情から読み取れる。そのまま両者は静かにフィールドを後にした。

~~~~~

第一試合の盛り上がりそのまま、早くも第二試合が始まろうとしていた。入場音楽と共に二人のトレーナーがフィールドへと歩き出した。司会者『続けて第二試合！スイレン選手とラングレー選手のバトル

です!」

ドン『スイレン選手はアローラ地方出身のトレーナーであり、ラングレー選手はイツシユ地方出身のトレーナー! さて、どんなバトルを届けてくれるか見ものだったりする!』

アシマリとナギサと一緒にトレーナーボックスに立ったスイレンは深呼吸をした後、両頬を軽く叩いて気合を入れた。アローラに広がる夕風の穏やかな海に立っているかのように落ち着いていた。

スイレン「私たちもサトシ達に負けないバトルをしなくちゃね! よし! 行くよアシマ…」

アシマリをフィールドへと指示をしようとしたその時、そのアシマリを差し置いてナギサが飛び出して行った。

ナギサ「イブイ!!?」

スイレン「ナギサ…?」

ナギサはスイレンを見るなり、尻尾を振って猛烈にアピールをしました。やる気は充分とみたスイレンはゆっくりと頷いた。

スイレン「分かった! アシマリごめんね! ここはナギサに行かせてあげて!」

アシマリ「アウ!!?」

ナギサのやる気を買ったスイレンに対してアシマリもご機嫌に手拍子をしながら承諾した。自分に決めてくれたナギサはそのまま対戦相手の方へと向いた。

ラングレー「出陣よ! バイバニラ!」

バイバニラ「バニイ!!?」

ソウタ「おっ? 何だあのポケモン!?」

サトル「バイバニラだよ!」

ソウタは徐に凶鑑を開いた。

『バイバニラ ブリザードポケモン

氷タイプ

大量の水を飲み込んで体の中で雪雲に変える。怒ると猛吹雪を巻

き起こす』

ナギサに対してラングレーが出したのはソフトクリームのような形状をしたポケモン。バイバニラであった。

ラングレー「見覚えのあるポケモンで助かったわ！」

スイレン「私のナギサを甘く見ないでね！」

ナギサ「イブイ!!？」

バイバニラ「バイバニラ!!？」

審判「試合開始！」

？スイレンVSラングレー？

ラングレー「バイバニラ！まずは【あられ】だよ!!？」

バトル開始と同時にバイバニラはすぐに体内に含めた水分を使って雪雲を発生させた。その雪雲は他の雲を取り込む事によって、膨張した雲は空一面を暗くした。そして気温は一気に下がり雪が降り始めた。

タケミツ『フィールド上に雪が降り始めました！』

ドン『会場の皆さん！風邪をひかないように気をつけるべし！』

その忠告通り会場の熱は一気にバイバニラの【あられ】によって下げられてしまった。フィールド外にも影響を及ぼしているバイバニラの力に早くもスイレンはその身を知る事となった。

スイレン「ナギサ！【スピードスター】!!？」

ナギサ「イブイ!!？」

相手にペースを掴まれないようにスイレンは先に攻撃を仕掛ける事に決めた。高くジャンプしたナギサは大きな尻尾を振り回しながら、形成させた星形のエネルギー玉をバイバニラ目掛けて放った。

バイバニラ「バニイ!!？」

スイレン「よし！命中した！」

ナギサ「イブイ!!？」

技を決める事が出来たスイレンとナギサであったが、バイバニラは大した事がない感じで笑いながらその場で回り始めた。余裕そうな雰囲気漂わせるバイバニラを見てラングレーも指示を送った。

ラングレー「バイバニラ！【ふぶき】!!？」

バイバニラ「バニイ♪」

ナギサ「イブイ!!!」

天候によつて技と命中率も格段にパワーアップした【ふぶき】がナギサに襲い掛かった。吹き飛ばされないように何とか足を踏ん張って耐えたのだが、ナギサは両後足を凍らされてしまった。

タケミツ『なんと！イブイの足が凍ってしまった！』

ドン『あの様子じゃ逃げる事も不可能だったりする！』

ナギサは腕いてみるも脱出する事が出来ない。急なピンチにスイレンはすぐに対処出来ずにいる。その間にもバイバニラはナギサとの距離を詰めにかかった。その行動がさらにスイレンとナギサを焦らせてしまう。バイバニラの接近に気づいたナギサはパニックを起こしてしまった。

スイレン「落ち着いてナギサ！【スピードスター】!!？」

ナギサ「イブイ!!!イブイ!!!」

タケミツ『おつとイブイ！スイレン選手の声が届いていないようだ！』

デント「ナギサはしっかりとバイバニラのフルコースに掛かってしまっているね！それを味わうのも時間の問題だよ！」

サトシ「落ち着け！ナギサ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

しかし、ナギサの声はスイレンどころか周りの声すらも耳に届いてないみたいだ。暴れるナギサに対し、バイバニラの次の攻撃が容赦なく襲い掛かった。

ラングレー「バイバニラ！【ふぶき】!!？」

バイバニラ「バニイ!!？」

ナギサ「イブイ!!!」

バイバナラの強烈な【ふぶき】にナギサは再度飲み込まれてしまった。針が刺さるかのような冷たい冷気にナギサは尻込みしてしまった。

ラングレー「これで終わりよ! 【ミラーショット】!!?」

吹雪を止めたバイバナラはダイヤのように輝く磨き込まれたボディから閃光から生まれたエネルギーを使って、ナギサに向けて放たれた。

ナギサ「イブイ!!!」

その攻撃によって足を捕われていた氷が砕かれると、その衝撃によってナギサは空中へと放り出されてしまった。その攻撃により戦闘不能寸前の所で追いやられたが、ナギサの耳にスイレンの声がよく届いた。

スイレン「頑張つて! 【すてみタックル】!!?」

スイレンの声援によって再び覚醒したナギサは空中で受け身を取ると、そのまま空をも切り裂く攻撃エネルギーを身に纏いながらバイバナラに向かって突進を仕掛けた。気迫に全力で向かうナギサに対し、バイバナラは怯む様子はなく、めい一杯に空気を取り込み始めた。ラングレー「【こおりのいぶき】!!?」

そのままバイバナラはナギサに対し強烈な冷気を吹きかけて対抗した。勢いよく突進してきたナギサであったが、空中にいるため踏ん張る事は出来ない。【すてみタックル】が決まる寸前でバイバナラの攻撃に押し返されそのまま【こおりのいぶき】をダイレクトに浴びてしまった。

スイレン「ナギサ!!!」

吹き飛ばされたナギサはそのまま地面に叩きつけられ、そのまま戦闘不能となつてしまった。

ナギサ「イブイ…」

審判「イーブイ戦闘不能! バイバナラの勝ち! よって勝者はラングレー選手!」

ナギサの初戦は惜しくも敗北というかたちに終わってしまった。

審判のコールを聞いたスイレンは急いでナギサの元へと駆け寄るとそのまま優しく抱き抱えた。

ラングレー「上出来だよ！バイバナラ！」

バイバナラ「バニイ!!？」

勝利を収めたバイバナラはラングレーの周りを回りながら喜んでいった。そしてバイバナラの鬨気が鎮まったように、空から太陽が顔を出し雪は止んだ。

スイレン「大丈夫ナギサ…？」

気がついたナギサに声をかけるもバトルに負けたショックで落ち込んでしまった。

スイレン「初めてにしては頑張ったよ！ここから一緒にバトルに慣れていこう！」

アシマリ「アウアウ!!？」

そうナギサの頭を優しく撫でながらスイレンはフィールドを降りたのであった。そして、次はリーリエの番がやってきた。

マオ「次はリーリエだね！」

デント「イツシユでは8つのバッジを集めた実力者でもある。ああ見えてベルはかなり腕が立つトレーナーだよ！」

リーリエ「はい！油断はしていません！」

自分の番が回ってきて気合が入るリーリエに対し、ベルは相変わらずシロンを追いかけ回していた。

ベル「ねえねえ！私のポケモンになつてよ！」

ケニヤン「やめとけよベル！次はお前の番だぞ！」

ベル「えっ！私の番！それなら早く行かなきゃ♪」

ケニヤンが助け船を出してくれたお陰でベルの意識は試合へと向けられた。

スイレン「嵐のようにやって来て嵐のように去って行った。不思議な人…」

ソウタ「なんだか落ち着きのない奴だな！」

少しの静寂の後、頭を軽く撫でたシロンをリーリエはマオに託した。

リーリエ「マオ！シロンをお願い！」

マオ「うん！分かった！」

サトシ「ん？シロンじゃないのか？」

リーリエ「ええ！最初はどうしても試してみたい子がいるのです！」

ロトム『ビビツ：試したい子？』

それだけを言いつつリーリエもフィールドへと向かって行った。

タケミツ『それでは第三試合！リーリエ選手VSベル選手です！』  
選手紹介を終えると、ベルはバックの中からモンスターボールを取り出そうとするも、なかなか目当てのモンスターボールが見つからないでいるみたいだ。

カキ「本当に強いのか…？」

マーマネ「もうそうには見えないよ…」

ようやく見つけると、そのまま持ち手をグルグルと回し始めると審判のコールを待たず、すぐにフィールドへと投げ入れた

ベル「よっし！行くわよシユバルゴ！」

シユバルゴ「シユバ!!？」

ベル「シユバルゴ！貴方のカツコ良さ！会場にいる人達に見せつけちゃって!!!」

シユバルゴ「シユバ!!？」

ソウタ「うおっ！何だあのポケモン！カツケェ!!!」

ベルが繰り出したのはシユバルゴ。アララギ博士との交換で手に入れたポケモンである。ベルの掛け声と共に二つの槍を掲げては体を大きく見せた。一段と磨き上げられた金属のボディを持つポケモンだ。

『シユバルゴ きへいポケモン

虫・鋼タイプ

高速で飛び回り鋭い槍で相手を突く。不利な相手にも勇敢に立ち向かう』



サトシ「シユバルゴか！」

デント「あの様子からにして、さらにシユバルゴとの絆が深まっている感じがするね！」

最初は馬が合わなかった二人だが、旅を通してさらに絆を高めている事は二人の様子からそう感じ取れる。シユバルゴの登場に続いてリーリエもあらかじめ手にしていたモンスターボールを握りしめた。

リーリエ「参ります！出てきて下さい！ヒトツキ！」

ヒトツキ「ヒト…」

サトシ達「二ええ!!!」

司会者『リーリエ選手はヒトツキを繰り出しました！この勝負は鋼タイプ同士のバトルとなりました！』

ドン『それにあのヒトツキは色違い！非常に珍しかったりする！』  
モンスターボールから出てきたヒトツキに歓声の嵐が巻き起こった。現状が分からないヒトツキは何のことか分からず、警戒しながら周りを見ていた。そんなヒトツキの様子にリーリエは声援を送った。

リーリエ「大丈夫ですよヒトツキ！わたくしも一緒ですから！」

ヒトツキ「ヒトト…」

リーリエの顔を見て若干落ちたヒトツキはシユバルゴへと目を向けた。ヒトツキとの初めてのバトル。どうなるかわからないが、この子の力を最大限に生かしてあげようと、リーリエは戦闘体制へと切り替えた。

審判「試合開始！」

？ベルVSリーリエ？

リーリエ「まずは【きんぞくおん】です!!？」

ヒトツキ「ヒトオオ!!!」

タケミツ『まずはリーリエ選手のヒトツキから動き出しました！』

ドン『まずは相手の能力値から下げてから相手の出方を見る作戦だったりする！』

リーリエの指示を聞いたヒトツキは金属同士を擦り付け合うような音をフィールド全体に響かせた。キイという音にシュバルゴだけでなくシロンを始めとしたこの場にいるポケモン全てが耳を塞ぎ身震いを立てていた。

ロトム『ビビツ!!頭に響くロト!!』

モウカザル「モウキャ…」

カノン「モウカザル!大丈夫?」

サトル「フィールド外にまで影響するなんて…」

マオ「以外なパワーの持ち主なのかも?」

フィールドに入っていないシロン達にこれほどの影響を及ぼしているとなると、一番近くにいるシュバルゴには溜まった物ではないようだ。同じ鋼タイプであるのにシュバルゴも頭を抱えていた。

ベル「負けちゃダメよ!シュバルゴ!【シザークロス】!!?」

シュバルゴ「シュバ!!?」

タケミツ『シュバルゴ!果敢に挑みます!』

ドン『トレーナーの想いが届いたりする!』

音に支配されたこの場面であっても、主人の微かな声がシュバルゴの力となった。二歩の槍を大きく掲げると前にクロスした状態でヒトツキへと接近した。シュバルゴの迫力ある攻めを前に動揺したヒトツキはおもわず飛び上がったしまった。

ヒトツキ「ヒトオオ!!!」

【きんぞくおん】が解除された今、こちらに風が吹いたシュバルゴはその勢いのまま【シザーグロス】を仕掛けた。

リーリエ「落ち着いてヒトツキ!【れんぞくぎり】です!!?」

ヒトツキ「ヒトオ!!?」

無駄に大きく振りかざしたのがいけなかったのか。リーリエの声が届いてから数秒の間であったが、シュバルゴの動きを見えたヒトツキは【シザークロス】を躲す事に成功した。

ベル「シュバルゴ!【てっぺき】!!?」

躲したヒトツキは指示通り鋭い刃で今度は攻撃を直ぐに仕掛けるも、ベルの素早い指示でシュバルゴはその身を鋼のように硬くして防

御に徹した。ヒトツキの短剣が突き刺さるものの、傷一つ付く事はなく金属音と共に弾かれてしまった。「れんぞくぎり」は斬れば斬る程に威力が増してくる技だが、チョコボマキから授かった頑丈な盾の前では歯が立たない。

カキ「ダメだ！ヒトツキの技が一切通ってない！」

それはその二人のバトルを観ていたカキ達にもリーリエに武が悪い事を悟っていた。

鋼タイプのポケモンは鎧に被われている物が大多数を占めており、格闘技術をなし得ていない物理では歯は立たず、鋼より脆い岩や氷は難なく砕かれては、その無機物は毒をも通さない。言わば弱点が少ないタイプだけでなく、相性の良いタイプも多く存在している。

守りこそ最大の攻撃ともいえる鋼タイプのシュバルゴの前では猛攻を続けているヒトツキの方が不利であるのは厳然たる真実なのだ。

リーリエ（確かにシュバルゴの殻は頑丈ですが、殻に被われていない部分を狙えばダメージはあるはずです！）

しかし論理的結論としてはそうだが、それが全て通用するとは限らない。こちらの攻撃が通らなれないとなれば、為す術がないと悟った相手には何処かか安心感が生まれる。その隙を狙って風向きを一気に変えれば勝ち筋がある。その隙が作れるも勝利を確信し出しているベルの様子から分かっていった。

ベル「行けてる♪行けてる♪シュバルゴ！【はかいこうせん】!!？」  
シュバルゴ「シュバア!!？」

ベルはここでなんと物理技最強クラスの技をシュバルゴに指示したのであった。ベルの指示に耳を疑うサトシ達であったが、もうエネルギーをチャージしたシュバルゴは【はかいこうせん】をヒトツキに向かつて放射した。全てを破壊し尽くすそのエネルギー砲に飲み込まれたヒトツキであったが、何事もなかったように平然と立っていた。

ベル「ええ!!!何で何で!!?効いてないの?」

リーリエも目を丸くして呆然としていたが、ダメージを受けていない事に慌てるベルの様子からにして、ヒトツキのタイプを理解してい

なかつた事に気付いた。攻撃するタイミング見計ろうとはしていたが、まさかこんな形で隙を作れたとは思ひもしなかつたため、若干戸惑ってしまった。

コテツ「何でだ!??当たったのに」

デント「ヒトツキはゴーストタイプでもあるから、【はかいこうせん】は効果が無いんだ…」

カベルネ「ゴーストタイプにノーマルタイプの技を撃ちちゃうなんて超バッドエンドなテストだわ!」

自分の愚策に自ら自滅したベルの様子をみたリーリエはヒトツキに反撃の指示を送った。

リーリエ「今がチャンスです!ヒトツキ!殻が被われていない所へ【かげうち】です!!?」

ヒトツキ「……。」

リーリエ「ヒトツキ?」

しかしリーリエからの指示が聴こえていないのか、ヒトツキは時間が停止したかのように少しの間だけ微動だけに動こうとしなかつた。そして、後から遅れるかのように影の中へとゆっくりと消えていった。

ベル「シュバルゴ!どっから現れるか分からないわ!気をつけて!」

シュバルゴ「シユバ!!?」

【かげうち】は影を通じて素早く移動して相手に叩き込む技である。ヒトツキが動き出した直後、シュバルゴも辺りを見渡してヒトツキの出方を伺っている。しかし一向にヒトツキは姿を見せずにいる。【かげうち】は先制攻撃技でもあるため、もう現れてもいい頃なのに出てこないヒトツキの気配にリーリエに不安が走った。

リーリエ「あれ?ヒトツキ…ヒトツキ!!!何処ですの!!!」

リーリエの声にヒトツキは応じる事はなかつた。リーリエの焦り具合を見て、観客達も動揺し始めていた。サトシ達も必死にヒトツキを呼びかけるもその後、再びフィールドへと姿を現す事はなかつた。

審判「ただいまの結果、リーリエ選手のヒトツキは戦意喪失と見な

します！よって勝者はベル選手とします！」

ドン『なんと!!!これは意外な決着がついてしまった!!!』

審議の結果、リーリエの負けが決まってしまった。ベルもこの決着に驚いていたが、すぐにシュバルゴの元へと駆け寄った。

ベル「シュバルゴ！やったわ！私達の勝ちよ！」

シュバルゴ「シュバ!!？」

勝敗を決したリーリエはすぐにフィールドから降りると会場の外へ向かって走り出した。

リーリエ「わたくし！探しに行つてきます！」

サトシ「俺も行くよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

スイレン「私も！」

リーリエに続いて試合が終わつてるサトシとスイレンもヒトツキの捜索に当たる。何故ヒトツキがあの場合から逃げてしまったのか。今はその答えは分からないが、早く見つけてあげべく、リーリエ達は無我夢中に駆け出した。

~~~~~

会場の外へと飛び出したリーリエはサトシ達と二手に分かれて捜索を始めた。何度もヒトツキを呼びながら走っていると丁度、日陰になつている壁の隅に身を埋めているヒトツキを発見した。最初にシロンが近寄り呼び止める。その声に気づいたヒトツキは顔を上げると、此方に向かつてくるリーリエの姿も捉えた。

リーリエ「良かった！ここにいたのですね！」

シロン「コン!!？」

怯えきつたその様子からリーリエはヒトツキが怖がつていた事に気づいた。

リーリエ「御免なさい。貴方には怖い思いさせてしまいましたね」

ヒトツキ「ヒトオ…」

恐怖かバトルから逃げ出した罪悪感なのか。ヒトツキの震えは止

まっていなかった。その様子を見たリーリエはそっとヒトツキの鞘を優しく撫でた。

練習試合もした事がないのにこんな大観衆の前でいきなり戦うことを命じられたら怖いと思うのも、ちゃんと分かってあげたら分かる事であった。試合を楽しむシロン達やポケモンバトルが当たり前と思ひ込んでしまったりする点が今回を招いてしまった種である事をリーリエはヒトツキに謝りながら深く反省した。

サトシ「リーリエ！良かった！見つかったんだな！」

リーリエ「さあ、皆んなの元へ戻りましょう！」

シロン「コン!!？」

ヒトツキ「ヒトオ…」

~~~~~

ヒトツキを見つけたリーリエ達は急いで会場へと戻って行った。そして帰ってきた時には第四試合が終わっていた。

審判「モウカザル戦闘不能！ジャローダの勝ち！よって勝者はシューティ―選手！」

タケミツ『勝利を手にしたのはシューティ―選手！ジャローダとの息もピツタリでしたな！』

ドン『ジャローダの性質を活かした見事なバトル！実に素晴らしかった！』

タケミツ『さて次は第五試合！サトル選手とデント選手のバトルです！』

ドン『サトル選手は現在カントーリーグに向けてポケモン修行に励んでいる新人トレーナー。対してデント選手はイツシュ地方のサンヨウシテイのジムリーダーである。このバトルはトレーナー対ジムリーダーの対決となったりする！』

マオ・カキ・「えっ！デントってジムリーダーだったの!?!？」

デント「あはは…：そーういや言っただけだったね！」

新事実が発覚した所で試合は後半へと入ろうとしていた。次に出場するサトルとデントはポケモン達を引き連れて、フィールドに向

かつて歩き出した。

ソウタ「マサラ魂を見せていけ！サトル！」

カノン「肩の力を抜いて！リラックスよ！」

サトル「あはは…」

ソウタとカノンの熱の入った声援におもわず顔を赤くしてしまったサトルは急ぎ足にトレーナーボックスへと向かった。

デント「初めましてサトル！いいバトルをしよう！」

サトル「はい！宜しくお願いします！」

硬い握手を交わした直後、ヒトツキを連れてリーリエ達は第五試合が始まるまでには戻ってくる事が出来た。

カノン「良かった！ヒトツキ見つけたんだね！」

リーリエ「はい！心配おかけしました！」

ヒトツキ「ヒトオ!!？」

サトシ「おっ！丁度始まりそうだな！」

リーリエに続いてヒトツキもサトシ達に何度もお辞儀を繰り返して謝り続けた。そんなヒトツキをピカチュウとシロンを初めとした仲間達が慰めていた。少しずつ元氣を取り戻した様子を見て安心してると、次のバトル。第五試合目が始まるうとしていた。

サトル「よし！行くよ！リザード!!!」

リザード「ザア!!？」

デント「方丈たる森の香り！マイビンテージ！ヤナップ!!!」

ヤナップ「ヤナア!!？」

タケミツ『サトル選手はリザード！デント選手はヤナップです！』

ドン『どんどん行くよ！ドンバトル！』

審判「試合開始！」

白熱し続けるドンバトル。次回はどんな戦いが待っているのか。

## 第四十五話 どんどん行くよ！ドンバトル ②

ドンバトル大会に参加しているリーリエ達。

第一試合はサトシとコテツ。一進一退の攻防の末、サトシの勝利となる。第二試合はスイレンとラングレー。スイレンはナギサで挑むもののバトルの経験不足が響き、ラングレーのバイバニラの前に敗れてしまう。第三試合はリーリエとベル。リーリエはヒトツキとの初めての公式試合であったが、バトル慣れしていないヒトツキはバトルへの恐怖で足が竦み、結果としてヒトツキの戦線離脱によりベルの勝利となってしまった。第四試合とシューティーとカノンであったが、相性の悪いモウカザルを相手に怯むことなく、その力強さでジャロウダが勝利の星を獲得した。

そして白熱したバトルは第六試合目と進んでいた。

サトル「リザード！【かえんほうしゃ】!!?」

リザード「ザアツ!!?」

デント「躲すんだ！ヤナップ！」

リザードの口から放たれた炎が波のようにヤナップの方へと迫っていくが、素早さに自信があるヤナップはデントの指示もあつてすぐにジャンプをして難なく躲す事が出来た。

しかしサトルは一度の攻撃に躲されても怯むことなく直ぐにリザードに次の指示を送った。

サトル「リザード！連続で【かえんほうしゃ】!!?」

リザード「ザアツ!!?」

デント「全て躲すんだ！」

ヤナップ「ヤナップ!!?」

タケミツ『ヤナップ！自慢の素早さでリザードの火炎放射を躲していきます！』

ドン『相性の悪さを感じさせない軽やかな身のこなし！流石はジムリーダーが育てたポケモンだったりする！』

連続攻撃でヤナップの体力を奪う事を狙った指示であったが、ヤ



ナツプは体力を最小限に押さえては、無駄な動きをせず、ギリギリの所で紙一重に攻撃を躲していた。攻撃が擦りもしない状況にリザードはだんだん苛立っていた。その怒りが冷静さを掻き乱す形となつてしまい、だんだんと攻撃の速度が遅くなつてきてしまった。

リザード「リザア…!!?」

サトル「リザード!焦れば相手の思うツボだ!気をつけて!」

サトルの声に冷静になったリザードは一度ヤナツプへの攻撃を止めた。我を失いかけたリザードは深呼吸をして心を落ち着かせた。平常心を取り戻したりザードは心配をかけたサトルに大丈夫のサインを送り、再びヤナツプの方へと身構えた。

デント「今の指示は素晴らしいね!ポケモン達の事をよく見ている!」

熱くなりすぎてその冷静な判断も欠けてしまう事もあるバトルの中でも、自分のポケモンの様子をしっかりと見ていたサトルの判断力をデントは高く評価した。

デント「さて、次はこちらの番だ!ヤナツプ!【タネマシンガン】!!?」

ヤナツプ「ヤナツ!!?」

今度はヤナツプが先に動き出した。その場で高くジャンプをする時、リザード目掛けて勢いよく種を発射した。空を切る音を立てながら迫る弾丸からにして、効果はいまひとつでのダメージだけでは済まされない事は分かる。火炎放射で焼き払う手もあるが、それを突き破ってくるような猛スピードで突っ込んでくる【タネマシンガン】に對してそれは難しいであろう。

サトル(あつ!そうだ!)

迫ってくるヤナツプの攻撃を前に焦る気持ちが出てしまったが、落ち着いて導き出した答えをサトルはリザードに指示送った。

サトル「リザード!【メタルクロー】だ!!?【タネマシンガン】を弾き返すんだ!」

リザード「ザアツ!!?」

爪を鋼のように硬化させたりザードは体を回転させながらその

爪でヤナップの「タネマシンガン」を弾き飛ばした。防御に使っただけでなく弾き飛ばした「タネマシンガン」はそのままヤナップの方へと飛ばされた。

ヤナップ「ヤナツ!!」

タケミツ『なんと!リザードが弾き返した「タネマシンガン」がヤナップを強襲!』

ドン『相手の力を利用した見事な戦略だったりする!』

自分の攻撃を浴びてしまったヤナップはふらつきながらもなんとか地面へと着地に成功した。ヤナップの気が逸れた瞬間を狙ってサトルは素早く攻撃の指示を出した。

サトル「今だ!「かえんほうしゃ」!!?」

すぐに放たれた火炎放射はヤナップへうねりを上げながら放たれる。オレンジ色に業火はそのままヤナップを包み込んだ。

サトシ「あっ!!」

カノン「やったの!」

と思つたが、リザードの足元から飛び出したヤナップは空かさず攻撃を決めた。予想外な動きを見せたヤナップにサトルもリザードはすぐに対処する事が出来ずまま、リザードはそのまま地に叩きつけられてしまった。リザードが立っていた場所に大きな穴があつた所から、どうやらヤナップは火炎放射を浴びる寸前に「あなをほる」を使って躲していたみたいだ。ある程度のサトルとリザードの実力を見定めたデントは蝶ネクタイを結び直した。

デント「イツツ!テエイステイングターイム!!」

タケミツ『出ました!デント選手のテエイステイングターイム!』

マオ「あく始まつちやつた:」

カベルネ「そのテエイステイグ失敗しろ!!!失敗しろ!!!」

ソムリエの血が騒ぎ出したデントはサトルのリザードをテイステイングし始めた。それに合わせてヤナップもデントの動きに合わせてながら一緒にポーズを取り始めた。

デント「パワーとテクニク!成長途中でありながらもそのリザードは最高級のフレイバーを醸し出している!トレーナーがポケモン

を想うのと一緒にポケモンもまたトレーナーを信頼している。君とリザードとのマリージュは全てのトレーナーの手本となるだろうね！」

サトル「ええつと、ありがとうございます…ごぎいます」

試合中にも構わず、自分のポケモンに対し褒め言葉を貰ったサトルは戸惑いながらも会釈した。その直後、デントはソムリエモードからまたバトルへと切り替えた。その目にサトルは身構えると、リザードへ相手から目を離さないようにと指示を送った。

デント「さあ続きを始めよう！【あなをほる】!!？」

ヤナップ「ヤナツ!!？」

タケミツ『ヤナツプ！再び地中に潜って身を隠しました！』

ドン『何処から現れるか分からなかったりする！』

ヤナップの気配を感じ取ろうと神経を集中させるものの、捕らえる事が出来なかったリザードはそのままヤナップの攻撃を受けてしまった。そしてヤナップは再び地中に潜ると、四方八方にと連続攻撃を浴びさせた。

リザード「ザア!!!」

タケミツ『ヤナップの連続攻撃！リザードはヤナップの姿を捕らえられない！』

ドン『地面タイプの技は炎タイプに効果は抜群！このまま受け続けるのも厳しい展開だったりする！』

その通りもあって、リザードは身を固めてダメージを最小限に防ごうとしているが、効果抜群の技をいつまでも耐え凌ぐ事が出来るはずがない。ダメージが重なっていきだんだんと膝が地面につき始めていた。

ソウタ「何やってんだよ！サトル！負けちまうぞー！」

カノン「サトル！リザード！頑張れ!!!」

次第にボロボロになっていくリザード。何とか策を考えたサトルはヤナップが掘った穴目掛けて指を指した。

サトル「リザード！穴に向かって【かえんほうしゃ】!!？」

リザード「リザア!!？」

サトルの指示からパワーを貰ったりザードはダメージを振り払いながら、穴に向かって大きく口を開いた。しかし、それを見たデントは全てを見透かしたような笑みを浮かべた。

デント「そう来ると分かっていたさあ！ヤナツプ！ジャンプだ！」  
ヤナツプ「ヤナツ!!?」

すぐに穴から脱出したヤナツプは火炎放射を浴びる事なく空高くへと上っていく。さらに空中で受け身を取ると、両手を広げて力を貯め始めた。

デント「お見せしよう！最高のフレイバーを！【ソーラービーム】!!?」

太陽の光を集め始めたヤナツプはそのエネルギーを撃つ準備へと入った。

サトル「でも！こっちの方が早い！リザード！そのまま【かえんほうしゃ】!!?」

チャージに時間がかかる事は分かっていたサトルは効果抜群の技で一気に蹴りを付けようとした。しかし、リザードが技を放つ準備へと入ったとの同時にエネルギーを貯め終えたヤナツプは【ソーラービーム】を放った。

ヤナツプ「ヤナツ!!?」

リザード「リザ!!」

サトル「えっ!」

予定よりも早い攻撃にサトルは目を丸くした。しかも運が悪いことに【ソーラービーム】を浴びた事により口の中に貯めていた炎エネルギーが暴発してしまったのだ。二連ダメージを受けてしまったリザードはその場で膝をついてしまった。

デント「ヤナツプ！急降下で【かみつく】攻撃う!!?」

サトル「リザード！【あなをほる】で躲すんだ!!?」

【ソーラービーム】を放った直後であるのにも関わらず、空かさずヤナツプは次の攻撃体勢へと切り替えた。ヤナツプの接近に気づいたサトルも素早く回避の指示を送るも、ダメージを受けていたりザードがすぐに動くことが出来ず、ヤナツプの鋭い牙がリザードの懐を捉え

た。

サトル「頑張れリザード！頑張れ！」

リザード「リザア……」

ヤナツプの追加攻撃を受け、背中から倒れたりリザードは力を振り絞って立ち上がろうとする。しかしジワジワと身体を蝕んでいくダメージに体力を奪われた結果、その場で力尽きてしまった。

審判「リザード戦闘不能！ヤナツプの勝ち！よって勝者はデント選手！」

タケミツ『決まった！勝ったのはデント選手だ！』

バトルが終わるとサトルはゆっくりとリザードの元へと向かった。

サトル「大丈夫!?リザード！」

リザード「リザッ……」

サトル「良かった……」

サトルの声により目覚めたりリザードは負けてしまった事でガツクリと肩を落としてしまった。だけど、ジムリーダー相手に懸命に戦ってくれたリザードはサトルは優しく頭を撫でて励ましていた。

しかし、サトルにはどうしても気になる事があった。それはヤナツプの「ソーラービーム」がリザードの技が発動する前に撃ち出された点だ。効果は今ひとつのリザードに対して、瀕死に持っていくほどのフルパワーに近い威力をどうしてあんなに早く撃ち出せたのか。

そんな二人にバトルを終えたヤナツプを肩に乗せたデントが歩み寄ってきた。二人は互いの健闘を讃えて握手を交わした。

デント「太陽の恵みを攻撃エネルギーに変えて撃ち出す技！あの状況なら地に着いている時よりも早い段階で撃ち出す事が出来るんだ！」

実はデントは「ソーラービーム」が撃ち出される時間を短縮するべく、ヤナツプが太陽との距離を縮めていた事が鍵となっていたのだ。つまり日差しが強く差し込む程、太陽のエネルギーを早く回収する事が出来るという訳だ。そのためヤナツプはジャンプする事によって日差しが強く当たる場所まで移動していたのだ。

デントの戦略にしてやられたサトルは感心するあまり肩の力が抜

けたようにして、その場に座り込んでしまった。そんなサトルの様子を心配になったピカチュウとリザードはすぐに彼を呼び止めた。しかし、そんな二匹の不安を取り除くような満足げな笑顔を見せたサトルは二匹の頭に手を置いた。

サトル「僕たちもまだまだだね二人とも！もつと頑張ろう！」

サトルのピカチュウ「ピカチュウ!!？」

リザード「リザア!!？」

~~~~~

タケミツ『どンドン行きましょう！ドンバトル！残すところは三試合！』

ドン『第六試合！マーマネ選手とソウタ選手の入場です！』

白熱したバトルが続き大歓声が鳴り止まないバトルフィールドにまた新たな出場者がフィールドへと立っていた。初めての出場に心配していたサトシ達であったが、この歓声に吞まれている様子はなく、マーマネは凜とした表情をしていた。

サトシ「落ち着いているみたいだな！」

カキ「マーマネのやつ！いい顔してる！」

マオ「マーマネもサトシやリリーエを見て感化されたんだと思うよ！」

スイレン「リリーエのジム戦を観てる時も、人一倍暑くなっていたりしてたもんね！」

リリーエ「わたくしもいつもその応援に力を貰っています。日頃の感謝を込めて精一杯応援します！頑張つて！マーマネ!!！」

シロン「コーン!!？」

アローラのみんなの応援を受け取ったマーマネは相棒の名を叫んだ。

マーマネ「頼むよ！トゲデマル！」

トゲデマル「モギユユ♪」

ソウタ「良し！頼むぜ相棒！」

クチート「クチイ!!？」

マーマネと同じようにソウタも自分の相棒のクチートをバトルフィールドへと出した。

審判「試合開始！」

? マーマネVSソウタ?

ソウタ「クチート! 【アイアンヘッド】だ!!？」

クチート「クチイ!!？」

マーマネ「躲して! トゲデマル！」

試合開始と同時に頭を硬化させたクチートはそのままトゲデマルに向かって一直線に突っ込んでいく。ソウタの速攻に驚くマーマネはすぐに自分もトゲデマルに回避の指示を送った。

マーマネ「トゲデマル! 【ほうでん】!!？」

トゲデマル「モギユユ!!？」

攻撃を躲したトゲデマルはそのままクチートの上を取った身体中の電気を送り一面に放電させた。それを見たソウタも焦る事なく素早く指示を送った。

ソウタ「【ようせいのかぜ】!!？」

クチート「クチイ!!？」

拳を思いつ切りぶん回したクチートはその風圧で発生させたピンク色の風でトゲデマルの電撃を纏わせて攻撃を防いだ。

小爆発とともに吹き飛ばされたトゲデマルにクチートは大きな顎で捕らえにかかる。

ソウタ「よっしゃあ! 今だ! 【かみつく】攻撃!!？」

クチート「クチイ!!？」

空中へ放り出されているトゲデマルにクチートの攻撃が迫る。躲す事が出来ないトゲデマルは慌てた様子でじたばたと逃れようと必死に抵抗している。

ロトム『ダメロト！捕まるロト!!？』

マオ「逃げて！トゲデマル!!」

誰も捕まると思つた中、マーマネはニヤリと笑っていた。

マーマネ「トゲデマル！【ニードルガード】!!？」

瞬時にトゲデマルは身を丸くすると、全身の針を一気に逆立てた。トゲデマルの新しい技に思わず驚いたサトシ達。しかし栗のイガのようになつたトゲデマルを見てもクチートは怯む事なく突っ込んでいく。鋼のように硬く鉄骨すらも噛み砕いてしまう自慢の大顎に相応な自信があるのか。構う事なくクチートはトゲデマルに思いつ切り噛み付いた。

カキ「あつ！」

マオ「トゲデマル!!」

呑み込まれてしまったトゲデマル。一瞬の静寂が包み込まれた後、これ以上の試合続行は不可能と判断した審判はクチートの勝利を宣言しようと口を開いた。が、その時…

クチート「クチイ？」

何かしら違和感を感じたクチートにソウタも何事かと首を傾げた。顎が徐々に開き始めると、なんと身体を丸め全身の針を伸ばして必死に抵抗しているトゲデマルの姿があつた。

タケミツ『なんと！クチートの顎にトゲデマルがガツチリとはまつてしまった！』

ドン『何というアクシデントだったりする！』

そう。トゲデマルは呑み込まれたと同時に【ニードルガード】で防御に入ると、その針が歯の隙間に挟まってしまったのだ。

ソウタ「クチート！早く吐き出せ！」

クチートはトゲデマルを吐き出そうと大きく顎を振り回し始めた。しかし、ガツチリと挟まってしまった針を一本も抜くことが出来なかつた。また同じように身動きが取れないトゲデマルもどうしたらいいか分からず、そのまま目を回している。別に牽制が逆転となつた訳でもないこの状況に慌てるマーマネ。しかし咄嗟の閃きにより、この状況を打破する手段を考えついた。



マーマネ「トゲデマル！そのまま【ほうでん】だ!!？」

トゲデマル「モギユ!!？」

マーマネの声に我に帰ったトゲデマルは指示通り体内に溜め込んだ電気を一気に解放させた。

クチート「クチイ!!!」

トゲデマルの電撃をしかもゼロ距離で浴びてしまったため、クチートに強烈な痺れが身体中を襲った。そのままクチートが膝を落としたと同時に脱出したトゲデマルはその場で転がり始めると発電し始めた。

マーマネ「トゲデマル!【びりびりちくちく】!!？」

トゲデマル「モギユ!!？」

電気を帯びたその身体のままトゲデマルはクチートに向かって転がっていく。トゲデマルの攻撃に気づいたソウタも避けるようにクチートに指示を送ったが、さっきの攻撃により麻痺状態になってしまったクチートは思うように動かす事が出来ず、そのままトゲデマルの攻撃を受けてしまった。

激しい爆雷とともにまたもや強烈一撃を叩き込まれたクチートはゆっくりと倒れてしまった。

クチート「ク…チイ…」

ソウタ「クチート!!!」

審判「クチート戦闘不能!トゲデマルの勝ち!よって勝者はマーマネ選手!」

タケミツ『運を味方につけたか!勝ったのはマーマネ選手とトゲデマルだ!』

ドン『まさしく奇跡の大逆転劇だったりする!』

自分の勝利を理解したトゲデマルは一目散にマーマネの方へと走り出した。

マーマネ「やった!よく頑張ったねトゲデマル!」

トゲデマル「モギユ」

自分の胸に飛び込んでくるトゲデマルをマーマネは力強く抱きしめていた。

ソウタ「お疲れクチート！ゆっくり休んでくれ！……。だあああ！！  
負けた！！クツソオオ！！」

健闘したクチートを戻したソウタは悔しさ全開に頭を掻き回し始めた。しかし、咄嗟のハプニングに対して対処が遅れてしまった事や確な指示を送れなかった自分に敗因があることは分かっていた。それらの反省を自分の胸の中に受け止めたソウタはマーマネと握手をした後、フィールドを後にした。

サトシ「おお！マーマネが勝った！」

ロトム『偶然が重なったいえ、見事な勝利ロト！！？』

カキ「やったな！」

スイレン「おめでとう！」

マーマネ「ありがとう！みんな！」

仲間の一人がまた勝ち上がった事にスイレンもリーリエも自分のことのように大いに喜んでいる。そして、ただ一人。その光景を眺めて次の試合へと切り替えるものがいた。

マオ「さて！アマージョ！私達もマーマネに続くよ！」

アマージョ「アジヨ！！？」

~~~~~

ドン『続いて第七試合！マオ選手とケニヤン選手の入場だったりする！』

ケニヤン「毎回アクセントが違うけど、今はそんなことどうでもいいぜ！頼むぞ！ダゲキ！」

ダゲキ「ダアキ！！？」

マオ「準備はいい！？アマージョ！」

アマージョ「アジヨ！！？」

両選手のポケモンが出揃った事を確認した審判は試合開始のコールを取った。

審判「試合開始！！」

?マオVSケニヤン?

マオ「アマージョ! 『マジカルリーフ』!!?」

高くジャンプしたアマージョはそのまま先制して攻撃を仕掛けた。七色の虹のように鮮やかな光を放つ木の葉は一直線にダゲキの方へと向けられた。

ケニヤン「ダゲキ! 『インファイト』だ!!?」

ケニヤンも怯む事なくすぐにダゲキに指示を送った。ダゲキは目にも止まらない速さのパンチを次々に繰り出すと、そのまま『マジカルリーフ』一枚一枚を粉碎させた。避けることが不可能な攻撃に対して見事な防御とも言えよう。

マオ「うっそー!!!」

ケニヤン「どうだ!これが俺のダゲキの防御技だ!」

タケミツ『攻撃は最大の防御となり!見事な対処です!』

ドン『拳一つ一つのパワーも凄まじいものであった!よく育てられてたりする!』

ダゲキのパワーに圧倒させれ動きが止まったマオ達を見たケニヤンは風向きが変わらないうちにすぐに次の指示を送った。

ケニヤン「次はこれだ! 『ビルドアップ』!!?」

上腕二頭筋。胸筋。あらゆる筋肉を膨張させたダゲキは攻撃と防御を上げた。光に照らされた筋肉はダイヤモンドのように輝いていた。

ケニヤン「そのまま連続で『からてチョップ』!!?」

能力を上げたダゲキはアマージョに向かって走り出すと、空かさずアマージョの頭上に手刀を振り下ろした。

マオ「避けてアマージョ!」

咄嗟に躲したアマージョであったが、ダゲキの攻撃はそのまま続いていた。なんとか相手の攻撃を見切つて躲しているが、ダゲキの勢い

にも押されてどんどん後ろの方へと足が竦んでしまっている。流れが一気にケニヤンの方へと傾き始めたマオは打開策をとる。

マオ「そうだ…アマージョ！「あまいかおり」!!？」

アマージョ「アジヨ!!？」

ダゲキ「ダ：キ」

アマージョの身体が漂ってきた香りにダゲキは思わず静止してしまった。

タケミツ『おっと！ダゲキの動きが止まりましたね！』

ドン『この甘い香りに闘争本能を押さえられてしまったのかもしれない！』

動きが止まったダゲキにケニヤンは必死に呼びかけるも、その声は届いていない。

アマージョが放つ甘い香りは会場にいるもの全員を惚気させていた。その馥郁たる香りはフィールドへと飛び出そうとするモクローを必死に止めているサトシが物語っている。

マオ「今よ！「トロピカルキック」!!？」

アマージョ「アジヨ!!？」

ダゲキ「ダツキイ!!!」

その隙を狙ってアマージョの渾身の蹴りがダゲキの懐へと見事決まった。

サトシ「やるな！マオ！」

ロトム『これは良い試合ロト！』

アマカジの頃から家族同然であってマオの一番のパートナー。息が合うバトルをしている様子に驚くことはないと思えるが、あまり多くのバトル経験を積んでいないトレーナーが慌てる事なく状況において的確に指示を送るのはそう簡単には出来ない。なによりもアマージョと一緒にバトルを楽しんでる姿がとても微笑ましい光景であった。

タケミツ『マオ選手のアマージョ！見事な動きであります！』

ドン『まるでバタフリーのように舞いスピアーのように刺すといった感じだったりする！』

会場の声援はマオとアマージョへと向けられていた。ダゲキはなんとか立ち上がるもアマージョの攻撃が急所へと入っていたのか立ち上がるだけでも精一杯の様子だ。しかしその声援に押しつぶされる事なくケニヤンは一気に空気を吸い込んだ。

ケニヤン「ダゲキ!!!」

ダゲキ「ダツキ!!?」

マオ「えっ!?!」

アマージョ「アツジョ!?!」

会場の声を一気に消し飛ばしてしまう程のケニヤンの声量が鳴り響く。ケニヤンの声を聞いたダゲキは自分の頬に一発拳を入れた。その光景にマオとアマージョは思わず目を丸くした。

リーリエ「自分に攻撃ですか!混乱しているわけでもありませんが!」

サトシ「そうじゃないさ!」

自滅行為と思われたその行動はその場にいた全員に驚きを与えた。しかしダゲキの鋭い眼光はアマージョへと向けられていた。

ケニヤン「気合い入れ直していけ!ダゲキ!」

ドン『自分自身に喝を入れたみたいですね!この根性!まさに格闘ポケモンだったりする!』

拳を前に攻撃体勢を取るダゲキの姿にアマージョも身構えた。睨み合う両者の緊張感は何とトレーナーにも伝わっている。しばらくの静寂の中、地面をおもいつき蹴り飛ばしたダゲキはアマージョへと一直線に走り出した。

ケニヤン「【インファイト】!!?」

マオ「アマージョ!ここは【おうふくビンタ】よ!!?」

ダゲキの連続攻撃に合わせてアマージョも全力で応戦する。目にも留まらぬ速さで繰り出される両者の攻撃は火花を散らしながら拳と拳がぶつかりあう。

アマージョ「アジョ!!?」

ダゲキ「ダツキイ!!?」

最後の一撃が決まった瞬間、その反動で二体は後ろの方へと押しだ

された。そして踏みとどまったダゲキは高くジャンプすると右腕にパワーを貯め始めた。

ケニヤン「渾身の「からてチョップ」だ!!?」

マオ「マジカルリーフ」で迎え撃って!!?」

頭上を捕らえられたダゲキに向かって虹色に輝く葉の刃が襲いかかる。アマージョの攻撃を受けたダゲキは爆煙に包み込まれた。攻撃が決まりマオの勝利を確信したリーリエ達は口を揃えて喜んだが、その想いはケニヤンの気迫によって打ち消された。

ケニヤン「怯むな!行つけええ!!」

ダゲキ「ダツキイイ!!」

爆煙から姿を現したダゲキは一瞬にしてアマージョの頭に手刀を振り下ろした。

マオ「アマージョ!!!」

シエイミ「シエイミ!!?」

落下のスピードで威力が増したダゲキの攻撃を受け止めきれず、アマージョは目を回してそのまま倒れてしまった。

アマージョ「ア:ジョ」

審判「アマージョ戦闘不能!ダゲキの勝ち!よって勝者はケニヤン選手!」

ケニヤン「だから:アクセントが違う!!!」

白熱した試合は終わりを迎えたマオはすぐにアマージョの元へと駆け寄った。

マオ「お疲れアマージョ!かつこよかったよ!」

アマージョ「アジョ:」

そんな二人にダゲキと一緒に向かったケニヤンはそつとマオに手を差し伸べた。

ケニヤン「良い試合だったぜマオ!お前の分まで頑張るからな!」

マオ「私もすごく楽しかった!ありがとう!ケニヤン!」

ケニヤン「だからアクセントが違うけど:まあいいか!」

最後は両者の握手によって第七試合は幕を閉じた。

~~~~~

タケミツ『それではこれが本日のラストバトルです！』

ドン『本日のラストバトルはカキ選手VSカベルネ選手！』

カキ「うおおお!!! ついに俺の番が来たああああ!!!」

自分の名前が呼ばれるのを待ってたばかりか、アナウンスが入るとカキの目はメラメラと燃え始めた。

ロトム『も：燃えてるロト!!?』

カノン「ずっとソワソワして待ってたもんね！」

デント「これはグレン火山のような熱いテストだね！」

カベルネ「暑苦しいテストね：どうせ勝つのは私なのに」

カキとは違ってカベルネは呆れた様子で淡々としていた。最終試合、フィールドへと立ったカキは今日のバトルで決めていたポケモンをフィールドへと放った。

カキ「頼むぞ！ガラガラ!!!」

ガラガラ「ガアラ!!?」

マオ「いつけええ！カキ!!!」

マーマネ「頑張れ!!!」

タケミツ『カキ選手はガラガラを繰り出しました！カキ選手のガラガラはアローラ地方で確認されているリージョンフォームの一種！タイプは炎とゴースト。二つのタイプを合わせ待っています！』

ドン『どんなバトルを披露してくれるのかわくわくが止まらなかったりする！』

骨棍棒を振り回してウォーミングアップをし始めたガラガラを見て、選抜するポケモンを決めたカベルネもフィールドへと放った。

カベルネ「出てきなさい！マイビンテージ！フタチマル！」

フタチマル「タアチ!!?」

デント「カベルネはフタチマル。セオリー通りで来たね！」

サトシ「タイプの相性なんさ！カキには関係ないさあ！」

炎と水のバトルとなった対戦カード。最後の試合が始まる。

審判「試合開始！」

?カキVSカベルネ?

カベルネ「イツツ！ティステイングターイム！シルブプレ！」  
カキ「……………」

カベルネ「ソムリエールとしてクールでエレガントな技で倒させて貰うわ！」

カキ「そうは行くか！ガラガラ！【フレアドライブ】!!?」  
ガラガラ「ガアラ!!?」

突然のカベルネのティステイング宣言に戸惑いを見せるも、カキはすぐにガラガラに指示を送り先手を取った。

タケミツ『カキ選手！いきなり大技による速攻です！』

骨棍棒を振り回し始めたガラガラは先端に灯っている炎を身体に纏わせた。炎の鎧を身につけたガラガラはそのまま突進を仕掛ける。しかし、フタチマルはガラガラの猛火を前にしても慌てる事なく、二本のホタチを手に取り身構えた。

カベルネ「フタチマル！【シエルブレード】!!?」

水の刃を形成させたフタチマルはガラガラに向かって飛び出した。二つの技はぶつかり合い、その反動によって二体は後退した。

タケミツ『ガラガラの猛攻に怯むことなくフタチマルも負けじと応戦していききました！』

ドン『よく育てられている！激戦の予感が漂っていたりする！』

マーマネ「カキのガラガラのパワーに対抗出来るなんて！」

ケニヤン「ソムリエだけでなくトレーナーとしての実力も付けてきたみたいだな！」

タイプ相性にも負けじと劣らないカキのポケモンのパワーを前にして怯まず受け止めたフタチマルの根性に一目置かれた。

デントへの対抗心に燃えるばかりにソムリエに酷使するばかりで



トレーナーとしての実力は然程、成長が感じられない面があると思っ  
ていたが、今の姿を見ればトレーナーとしての実力も日々磨いていた  
事も分かった。

カベルネ「フタチマル！続けて【みずのはどう】!!?」  
フタチマル「タツチ!!?」

ガラガラは攻撃を受け流したフタチマルはすぐに別の攻撃を仕掛  
けた。球体状に形成された水のエネルギー砲を放つも、すぐにその波  
動エネルギーを察知したガラガラはすぐに後退して躲した。

カキ「いいぞ！次は【アイアンヘッド】だ!!?」  
同時に頭部を鋼の鎧のよう硬くさせると、地面をおもいつきり蹴り  
上げてフタチマルに向かって突進を仕掛けた。

カベルネ「フタチマル！【シエルブレード】!!?」  
もう一度、ガラガラは技を受け止めたフタチマルであつたが、勢い  
よく飛び出してきたガラガラのパワーに今度は押されてしまった。

カキ「ほねブーメラン!!?」  
【アイアンヘッド】を決めたガラガラはすぐに別の攻撃を仕掛けた。  
カベルネ「もう一度！【シエルブレード】!!?」  
フタチマル「……。」

カベルネ「ちよつと！フタチマル！」  
ドン『おつと！フタチマル怯んで技が出せない！』

追加効果を受けてしまったフタチマルはカベルネからの指示が遅  
れて聴こえてきてしまい、気づいた時には骨棍棒が目の前に迫ってい  
た。そして、そのまま攻撃を受けて後ろへと大きく飛ばされてしまっ  
た。

カキ「攻撃を続ける！【ほねブーメラン】!!?」  
ガラガラ「ガアラ!!?」

このチャンス逃さないようガラガラはそのまま攻撃を続けた。  
再び襲いかかる攻撃にフタチマルは呆然としていた。

カベルネ「フタチマル！だったら【れいとうビーム】!!?」  
フタチマル「タ…タアチ!!?」

しかしカベルネの素早い判断のお陰で難を逃れた。フタチマルが

放った【れいとうビーム】はガラガラの骨棍棒に命中すると、骨棍棒は凍ったまま地面へと落ちてしまった。

カキ「嘘だろ！」

ガラガラ「ガアラ!!!」

タケミツ『なんと！ガラガラの骨棍棒が凍らされてしまった！』

ドン『カキ選手とガラガラにとっては思わぬアクシデントだったりする！』

シューティー「流れが変わったみたいだね…早く取り返さないと彼に勝ち目はない！」

サトシ「カキ！早く取り返すんだ！」

カキも急いで骨棍棒を取り返すよう指示を出した。慌てて取りに行こうとするガラガラであったが、そう簡単に行くわけがなかった。

カベルネ「させないわよ！連続で【みずのはどう】!!?」

フタチマル「タアツチ!!?」

フタチマルの攻撃に邪魔をされて取りに行くどころか近づくことも出来ない。武器を失ったガラガラは逃げるしか出来ない。このまま何も出来なければ負けるのも時間の問題だ。

カキ（く…そ。どうしたら…）

嫌な流れに飲み込まれそうになるカキは必死に打開策を見つけようも中々思いつかないことにだんだんと焦りが出てきてしまった。滲み出る汗を拭いながら必死に考える。

ガラガラ「ガアラ!!!」

カキ「ガラガラ!?!」

するとガラガラは弱気になる主人の姿に苛立ちを立たせていた。らしくない姿を見せてしまったカキは一呼吸を終えた後、ガラガラへと呼びかけた。

カキ「お前を信じるぞガラガラ！走れ!!!」

カベルネ「焼けになったのかしら！さあ、この技でガラガラのマリアージュにバツチり決めさせて貰うわ！【みずのはどう】!!?」

一気に走り出したガラガラは恐れることなく突き進んで行く。その様子を見ていたフタチマルは球体状に集めた水のエネルギーをガ

ラガラへと放った。このまま進めば技が決まってしまうも、カキは一切ガラガラに回避するよう指示を送らなかつた。

ケニヤン「あのままじゃ！決まっちゃうぞ！」

コテツ「早く躲してくれよ！」

間違いなく炎タイプのガラガラには大きなダメージが入ってしまふ。誰もが危機的状況であると分かっているにしても、ただアローラ組。サトシ達は誰一人として心配している様子を見せていなかった。

カキ「突っ込め!!!【アイアンヘッド】だ!!？」

頭を硬化させたガラガラはそのまま【みずのはどう】へと突っ込んだ。【アイアンヘッド】によってフタチマルの攻撃をかき消すと、そのままフタチマルに攻撃を決める事に成功した。

タケミツ『なんとガラガラ！苦手な水タイプの技を根性で打ち消してた!!!』

ドン『トレーナーの思いも乗せた熱き魂の一撃だつたりする!』

フタチマルを吹き飛ばしたガラガラはすぐに凍った骨棍棒を取り戻した。無事に所有者の手に渡ったと感じた骨棍棒にも青白い炎が灯った。

カベルネ「こんなテイスト認めない！フタチマル！【シエルブレード】!!？」

カキ「ガラガラ！【フレアドライブ】だ!!？」

力を取り戻したガラガラは強大な炎を身体に包み込ませた。そのガラガラに対抗してフタチマルも飛び出した。両者の技がぶつかり合うもガラガラの根性パワーに押し負けられてしまい、フタチマルはおもいつきり地面へと叩きつけられた。

カベルネ「フタチマル！しっかり！」

フタチマル「タアチ…」

カキ「止めの【シャドーボン】だ!!？」

ガラガラ「ガアラ!!？」

起き上がるも間に合わずガラガラのカキの熱い魂と思いをのせた一撃がフタチマルの懐を捕らえた。

フタチマル「フタチイ!!!」

カベルネ「フタチマル!!!」

攻撃を受けたフタチマルはそのままゆつくりと地面へと倒れそのまま目を回した。

審判「フタチマル戦闘不能! ガラガラ勝ち! よって勝者はカキ選手!」

タケミツ『勝負は決した! 勝者はカキ選手だ!!!』

カキ「よっしゃ!!! 良くやったぞ! ガラガラ!!!」

ガラガラ「ガラガラ!!?」

トレーナーがポケモンを信じ、ポケモンもまたトレーナーを信じる。お互いの信頼が生んだ見事なバトルとデントは賞賛していた。

カベルネ「フタチマル:よく頑張ったわ」

フタチマルを戻したカベルネはゆつくりとフィールドを降りた。そんなカベルネに近づいたデントは彼女の健闘を讃えた。

デント「君とフタチマルの刺激的なマリアージュをたっぷり堪能させて貰ったよ! さらに強くなっているようだね」

カベルネ「ふん! 同情なんて聞きたくないわ! 本当だったらあんたを叩きのめしていたはずなんだからね!」

デント「ああ:君とも戦ってみたかったさあ。だけど僕はこの場じゃなくても挑戦はいつでも受けるつもりだよ!」

その素直な対応に調子が狂ったのか顔を真っ赤にしてカベルネはデントから離れていった。

タケミツ『これにより本日の試合はここまで! 明日のトーナメントに出る選手諸君はポケモンセンターでしつかりと休息を取って下さい!』

ドン『初日からにして甲乙付け難い熱戦による熱戦であった! 明日の試合も楽しみだったりする!』

こうしてドンバトル大会初日はこれにて終了した。疲れたポケモン達や身体を休めるためリーリエ達は速やかにポケモンセンターへと向かった。

~~~~~

ロトム『すごい量のコロツケロト…』

リーリエ『本当に全部食べられるのですか…』

サトシ「もちろん！」

ケニヤン「10個は軽い！軽い！」

ポケモン達をジョーイさんに預けたリーリエ達は夕食をとっていた。バトルからの疲れからか空腹気味のサトシとケニヤンの食いつぶりにリーリエ達は啞然としていた。

ケニヤン「サトシ！明日当たる事になったら全力で相手になってやるからな！」

サトシ「ああ！俺だって全力で相手になってやる！」

食うか喋るかどつちかにすればいいのにと、器用に喋るサトシとケニヤンの前に夕食を食べ終わったシユータイーが早々と自室へと戻る姿が見られた。

サトシ「シユータイーもう食べ終わったのか!？」

シユータイー「ああ！今から明日選出する一体を決めないといけなからね！時間は無駄に出来ないさ！」

サトシ「シユータイー！明日お前と当たる事になったとしても絶対に負けないからな！」

シユータイー「なら！僕と当たるまで負けないでくれよ！」

そう言つてシユータイーはその場から離れて行った。

サトシ「ケニヤンとシユータイーに掛けた言葉はもちろん！三人にもだからな！」

デント「分かってるさ！」

カキ「おう！容赦はしないからな！」

マーマネ「今でも凄く緊張してきたけど、僕だって負けないよ！」

スイレン「うん！その粋だね！」

リーリエ「わたくし達も明日は目一杯応援しますね！」

マオ「うん！」

~~~~~

そして第二回戦を迎える朝。盛り上がりを聞きつけたのか昨日よりも多くの観戦者が集まっていた。ほぼ満席状態となった様子に多くの人に見られるプレッシャーも募るもさらに闘志が燃え上がったのもまた事実である。一回戦で負けたリーリエ達も特別枠として試合が終わるまではフィールド外で試合を観戦する事も出来た。

ドン『選手諸君！昨日はゆっくり眠られたかね！昨日と同じ暑き戦いを期待している！』

タケミツ『それでは第二回戦による対戦カードを発表致します！』

- 第一試合 カキVSラングレー
- 第二試合 サトシVSデント
- 第三試合 マーマネVSベル
- 第四試合 シューテイVSケニヤン

対戦相手が発表されると、すぐに第一試合の選手はフィールドへと案内された。

マオ「カキ！ファイト!!!」

リーリエ「頑張つて下さい!!!」

二回戦目の朝の第一試合という事もあつてカキの熱はさらに暑く

胸を躍らせている。先攻後攻のフエアを無くすために同時にポケモンを投入するのが今のルールであるが、気分が高まったカキは先にポケモンをフィールドへと放った。

カキ「行くぞ！バクガメス！」

バクガメス「ガアメス!!？」

カキが二回戦目を選んだのは一番の相棒であるバクガメスだ。

ラングレー「バクガメス!?!？」

初めて見るポケモンにラングレーは凶鑑を開いた。バクガメスの生態を調べているとタイプが分かった瞬間にその目は一気に鋭くなった。

ラングレー「なるほど！ドラゴンタイプね！ならドラゴンバスターの腕の見せ所！行くよ！ツンベアー!!!」

ツンベアー「ベアアア!!？」

相手がドラゴンタイプで来たとわかったラングレーは彼女の中でも一番の切り札でもあるツンベアーを繰り出した。

タケミツ『バクガメス対ツンベアー！炎と氷の対戦カードとなりました！』

しかし、ドラゴンタイプとはいえ炎も持っているバクガメスに対してだと氷タイプのツンベアーの方が圧倒的に不利であるが、そこはラングレーのトレーナーとしての実力の見せ所だ。

審判「試合開始！」

?カキVSラングレー?

カキ「バクガメス！【かえんほうしゃ】!!？」

ラングレー「ツンベアー！【れいとうビーム】!!？」

互いの攻撃が衝突し、水蒸気がフィールド全体を包み込んだ。

カキ「バクガメス！【からをやぶる】!!？」

姿を隠した事によりカキはこの隙を狙ってバクガメスの攻撃力を上げた。元々防御力が高いポケモンであって多少の防御力を捨てた

ところで問題はないという思い切った戦略であろうか。

カキ「そのまま【ドラゴンテール】!!?」

ツンベアー「ベエツ!!」

尻尾に攻撃エネルギーを貯めたバクガメスはそのまま高速回転し、水蒸気を払いのけながらツンベアーに攻撃を決めた。

カキ「もう一度!【ドラゴンテール】!!?」

ラングレー「負けんじゃないよ!【いわくだけ】!!?」

しかし旋回して再び攻撃の体勢を取ったバクガメスに対して、なんとか持ちこたえたツンベアーも強烈な一撃を拳にのせて振りかぶった。攻撃力を上げたバクガメスに対して負けない馬鹿力を誇ったツンベアーの一撃はそのままバクガメスを地面へと叩き込んだ。

ラングレー「そこよ!もう一発かましてやりな!」

さらに追い討ちを仕掛けてきたツンベアーにバクガメスは甲羅の棘を逆立てた。

カキ「今だ!【トラップシエル】!!?」

ラングレー「ツンベアー!!」

ツンベアー「ベエツ…」

巨大な爆炎がツンベアーを飲み込んだ。【ドラゴンテール】重たいの攻撃。【トラップシエル】による最大火力。その二点は相性の悪いツンベアーにとって充分すぎる威力であった。

審判「ツンベアー戦闘不能!バクガメスの勝ち!よって勝者はカキ選手!」

タケミツ『決まった!!!第二回戦を最初に抜けたのはカキ選手だ!!!』

カキ「バクガメス!よくやった!」

バクガメス「ガアメス♪」

三回戦目の切符を手にしたカキはバクガメスと共に大いに喜んだ。ラングレー「今回のバトルでそのバクガメスの戦い方はだいたい分かったわ!つまり次はこうはいかないって事よ!」

カキ「は…はあ…」

ラングレー「覚えておきな!」

憎きドラゴンタイプのポケモンに敗れた事は彼女にとってかなり



の屈辱的なものとなっただろう。隠しきれない敵意を見せて再びカキとバクガメスに挑む姿勢を見せた後、フィールドを降りていった。

~~~~~

ドン『それでは続いていくよドンバトル!』

タケミツ『第二試合目はサトシ選手とデント選手です!』

次の試合に呼ばれた二名はフィールドへと立った。

サトシ「まさかデントと当たる事になるなんてな!」

昨日からずつと楽しみにしていたバトルであったが、発表された対戦相手によりその楽しさをより加速させる事が起きていた。

無邪気にはしゃぐように嬉しそうに語るサトシにデントも笑って返した。

デント「サトシ!僕は君と別れてからもソムリエとしてだけでなくジムリーダーとしてもバトルの修行も方もヤナップ達と一緒に磨いてきたんだ!」

サトシと対戦する想いを語った後、デントは今日の試合に出すポケモンが入ったモンスターボールを固く握り締めた。

デント「僕たちが新たに作り上げてきた至高のフルコースを今!味あわせてあげるよ!」

サトシ「俺たちもあれからもつと強くなったんだ!思いっきりやろうぜ!デント!」

サトシもモンスターボールを取り出すと、デントの前へと突きつけた。久しぶりに会った仲間とのバトルに胸を躍らせている二人の闘志はリーリエ達にも伝わっていた。

リーリエ「かつて一緒に旅をしてきた仲間同士の対決!」

スイレン「なんか…良いよね!」

さあ、準備が整ったところでサトシとデントは同時にモンスターボールをフィールドへと解き放った。

デント「頼んだよ!イワパレス!!!」

イワパレス「イワア!!?」

サトシ「ルガルガン！君に決めた！」  
ルガルガン「ルガア!!？」

フィールドへと出現した二体のポケモンの登場に歓声は大きく湧き上がった。暑きドンバトルはまだ始まったばかりだ。

## 第四十六話 どんどん行くよ！ドンバトル ③

二日目となったドンナマイト。第一試合はラングレーを打ち破りカキが準決勝へと駒を進めた。そして第二試合、サトシとデントの試合が切つて落とされようとしていた。

？サトシVSデント？

ルガルガン「ガアル!!？」

イワパレス「イワア!!？」

審判の試合開始のコールと共に二人のトレーナーは同時に指示を出した。毛並みを逆立て鋭い爪と牙で果敢に挑むルガルガンに対してイワパレスは鋭い爪と頑丈な岩のブロックでその攻撃を受け止めた。

デント「イワパレス！【いわなだれ】!!？」

サトシ「ルガルガン！【ストーンエッジ】!!？」

距離を取るために一度後退したイワパレスは自分と同じぐらいのサイズの大きな岩をルガルガンに向けて振り落とした。雨のように降り注ぐ無数の岩の弾丸がルガルガンを襲うも、それをルガルガンは両前脚を思いつきり地面に叩きつけて、地面から多数の岩の柱を出現させ相殺させた。

タケミツ『両者の力強い攻防が繰り広げられています!!？』

ドン『パワーをパワーで粉碎させていく！これぞまさに岩タイプの底力だったりする!!？』

大技を打ち込んだルガルガンは一度イワパレスとの距離を取るべく後退したのだが、すぐに後ろにある何かにぶつかってしまった。何にぶつかったか驚くルガルガンは後ろに目をやってみると、なんと大きな岩の壁がルガルガンを後ろへと引き下がれないように聳え立っていた。

ルガルガン「ガアル!!？」

サトシ「しまった!!!」

突然として現れた岩石の正体は先程のイワパレスが繰り出した「いわなだれ」であった。攻撃と同時に、ルガルガンの逃げ場をも封じていたイワパレスはさらに大きな岩石を形成し始めた。

デント「今だ！【がんせきほう】!!？」

イワパレス「イツワア!!？」

発射された大きな岩石は後ろの岩壁と一緒にルガルガンを吹き飛ばした。

ルガルガン「ルガアア!!!」

サトシ「ルガルガン!!!」

岩の壁によりルガルガンの姿を確認できなかった所為でサトシの判断は遅れてしまった。デントの罠にはまったサトシの額から嫌な汗が流れ出る。ルガルガンの安否を確認した後は迂闊に前へ出る事は避け、相手の出方を伺うのであった。

初っ端から追い詰められているサトシの様子にリーリエ達は真剣の目で忌憚なく容赦のしないデントの姿に目が集まった。

カキ「流石はジムリーダーだな。デントはサトシ達の先のその先を讀んで指示を送っている！」

リーリエ「それだけではありません。先ほどの【いわなだれ】。パワーだけでなくコントロールも出来るように育て上げられてました！」

サトシ「ごめん！ルガルガン！大丈夫か!？」

ルガルガン「ガアル!!？」

デントの実力に圧巻を覚える中、一呼吸を終えたサトシは指示が遅れた事をルガルガンに謝罪すると汗を拭いだ。

サトシ「やってくれたなデント！」

デント「どうだい！イワパレスも前にもまして強くなったんだからね！」

イワパレス「イツワ!!？」

やられっぱなしで行くわけにいかないとルガルガンは前傾姿勢になりながらイワパレスを威嚇する。だんだんと目が純血し、興奮状態になっていくその様子を見てサトシは声を掛けて落ち着かせる。

サトシ「落ち着けルガルガン！無暗に接近を仕掛けるのは逆効果だ！ここはチャンスを伺うんだ！」

その声が届いたルガルガンも一呼吸をし、精神を落ち着かせた。ルガルガンの目は徐々に引いて行った。

デント「接近戦の技が多いのに、果たしてそう上手くいくかな!?イワパレス！【いわなだれ】!!?」

反動による痺れが解けたイワパレスは再び【いわなだれ】を発動する。降り注ぐ岩の雨の中をルガルガンは俊敏な動きで躲していく。

サトシ「ルガルガン！【アクセルロック】だ!!?」  
ルガルガン「ガアル!!?」

デント「イワパレス！【シザークロス】!!?」  
イワパレス「イツワア!!?」

躲すだけでなく隙を見つければ攻撃を仕掛けるも、ルガルガンの【アクセルロック】を簡単に受け止めたイワパレスのパワーに押しきれっぱなしでいた。

焦りが募る所為で前へと出るルガルガンをサトシは必死に落ち着かせていた。そのサトシの様子にデントは違和感を覚えていた。

デント「なかなか攻めてこないね！君らしくないんじゃないかな?」  
サトシ「ルガルガン！まだだ…」

デント「……………【いわなだれ】!!?」

それでも攻めてこないルガルガンにデントはもう少し様子見のためもう一度イワパレスに【いわなだれ】の指示を出した。

再び降り注ぐ岩の雨の中をルガルガンはイワパレスの周りを走り回った。全く大きな展開を見せない試合に観戦に来ている人たちの中には欠伸をあげ退屈そうにしている様子がちらほらと見当たるようになっていた。しかし、リーリエ達は気を緩めない試合である事は分かっている。

サトル「なんか…デントさんの方が焦っているように見えない?」  
カノン「焦ってる?」

ソウタ「どう見たって、デントさんの方が優勢に見えるだろ！」

サトル「そうなんだけど…」

息を殺して見守る中、何かを感じたサトルは口を開いた。「いわなだれ」でルガルガンを追いついでいるデント側が有利に立っているように見えるが、さっきのデントの発言もあつて全く攻めに転じないサトシに動揺を隠せていないのも確かであつた。

デント「【いわなだれ】だ!!?」

サトシ「躲せ!」

サトシの指示に従い続けるルガルガンはさらに【いわなだれ】を躲し続ける。そして、連続攻撃を仕掛けたイワパレスに若干の疲れが見え始めていた。

サトシ「後ろに回れ!」

動きが鈍ってきた所を見計らつたサトシはルガルガンをイワパレスの後方へと回した。

サトシ「【ストーンエッジ】!!?」

イワパレス「イワツ…」

サトシ「【アクセルロック】!!?」

ルガルガン「ルガア!!?」

イワパレス「イワツワ!!!」

背後を取られたイワパレスも急いでルガルガンの方へと体を向けようとするも間に合わず、そのままルガルガンの連続攻撃を浴びせられた。

素早さ負けしてしまつたと見て捉えられると思うが決してそれだけではない。イワパレスに疲れが見え始めていたように、いつ攻めてくるか分からない状況に加えて連続攻撃を繰り返すことによる疲れが重なり動きが鈍つてしまつた事も原因であつた。そして、今までルガルガンに攻撃の指示を出さなかつたのもその一瞬の隙を狙うためのサトシの作戦でもあつた事にデントは気づいた。

デント「イツシュを旅をしていた頃の君とは別人のように感じるよ。僕の知っているサトシはどんな強敵を前にしても攻めて攻めまくる!決して物怖じしない戦いを見せるトレーナーだったからね!」

サトシ「へへえ!そんだけ俺たちも成長したって訳さあ!」

今までのサトシではない。その言葉が再びデントの脳裏をよぎった。昔のサトシとは違うバトルスタイルに戸惑うのと同時にサトシの新たななるフレイバーに酔いしれている自分がいた。なによりも楽しくて仕方がない！

デント「ならイワパレス！僕たちも更なるフレイバーを醸し出していくよ！」

イワパレス「イワツ!!？」

デントの声にイワパレスはもう一度気合いを入れ直した。

デント「【からをやぶる】!!？」

殻から飛び出したイワパレスは眠るパワーを一気に解放させた。

サトシ「くっ!!？」

ルガルガン「ガアル!!？」

パワーと俊敏な素早さを手にしたイワパレスはルガルガンの周りを囲い始めた。さつきと反対の立場となったルガルガンは素早くなったイワパレスの動きに翻弄されてしまった。

デント「【シザークロス】!!？」

ルガルガンの目を盗んだイワパレスは鋏のように交差させた二本の腕でルガルガンに「シザークロス」を浴びさせた。

サトシ「負けるな！【ストーンエッジ】!!？」

デント「【がんせきほう】だ!!？」

重たい一撃を食らったルガルガンはなんとか踏み止まると岩柱を出現させて反撃に出る。「シザークロス」の攻撃を耐えた事に驚くもデントも空かさずイワパレスに指示を出す。指示が遅れたものの【からをやぶる】のお陰で素早くなった事を生かして、すぐに攻撃へと移すことが出来た。

殻へと戻ったイワパレスは巨大な岩石を形成し、ルガルガンに向かって撃ち放った。「がんせきほう」と【ストーンエッジ】がぶつかるも岩タイプ最高クラスのパワーを前にしては歯が立たず、技を打ち消されたルガルガンはそのまま【がんせきほう】を受けてしまった。

サトシ「ルガルガン!!!」

ルガルガン「ルガア!!？」

受け身をとったルガルガンは地面に叩きつけられることはなかった。

タケミツ『ルガルガン！すぐに立ち上がった！』

ドン『【ストーンエッジ】で威力を和らげたのが幸いだったりする！』

しかしこの二撃でルガルガンはかなりの体力を消耗していることは見てわかる。しかし、「がんせきほう」を使ったイワパレスを前に、このチャンス逃すことは出来ない。

サトシ「走れ！ルガルガン！！」

ルガルガン「ガアル！！？」

タケミツ『ルガルガン！走り出した！』

ドン『【がんせきほう】を打った後は暫く動けない。攻撃をするなら今がチャンスだったりする！』

【がんせきほう】はそのとてつもないパワーを打つ込めると引き換えにその反動で暫く身体を拘束させてしまう技。しかし…

サトシ「流石に反動で動けない対処法は取っていたか…」

歩みを止めたルガルガンの先には殻に閉じこもっているイワパレスの姿があった。【がんせきほう】を撃つ時に殻へと戻ったのはこのためであったのだ。殻へと潜られた状態ではルガルガンの攻撃は一切封じられてしまう。反動による弱点をそのままにして置くわけがなかった。対策もバツチリだったデントを前にサトシはさらに追い込まれる形になった。

マオ「全く隙を与えてない！」

スイレン「強い！」

気づけばまたデントに風向きが変わってきていることに驚くマオ達。デントの実力に圧巻される場面が続いていた。

デント「サトシ！もうおしまいかい！？！」

サトシ「そんなわけないだろ！」

デント「そうだよね！」

イワパレス「イワア！！？」

デント「【いわなだれ】！！？」



イワパレスの攻撃により砂埃が巻き上げられた。視界を奪ったイワパレスは再度殻から飛び出した。

デント「もう一度！【からをやぶる】!!?」

タケミツ『ここでイワパレス！二度目の【からをやぶる】を発動した！』

ドン『次の一撃に全てを賭けているようにみえたりする！』

このバトルがもっと続いて欲しいと願うもいつかは終わりを迎えてしまう。悔いを残さないようデントは力一杯最期の指示を唱えた。

デント「【シザークロス】!!」

急降下で突っ込んでくるイワパレスにルガルガンは身構えた。デントのありったけの声に刺激を受けたサトシはデントの想いを受け止めるかのように一か八かの賭けに出た。

サトシ「受け止める！ルガルガン!!」

リーリエ達「「ええええ!!」」

ロトム『なんでロト!!?やられるロト!!?』

躲す指示を取らないサトシの判断にリーリエ達は声をあげたが、ルガルガン本人はそんなサトシの指示に一切の躊躇もなくイワパレスの【シザークロス】を受け止める体勢を取った。赤く充血した目に睨まれながらも怯むことなくイワパレスはルガルガンの頭部へとハサミを振り落とした。

イワパレスの重たい一撃を受け止めたルガルガン。その威力は地面に大きな亀裂が走った。

タケミツ『【シザークロス】が決まった!!』

イワパレスの一撃により白目になったルガルガン。意識が飛びそうになる中、サトシの声がルガルガンに力を与えた。

サトシ「頑張れ!!!ルガルガン!!!【カウンター】だあああ!!!」

ルガルガン「ガアルアアア!!!」

意識を保てたルガルガンは、イワパレスから貰ったダメージを逆に攻撃エネルギーに変えると、そのまま気迫で押し返した。

イワパレス「イワア!!!」

状況を一気に奪回させるほどの一撃は大きな身体を持つイワパレ

スを簡単に投げ飛ばした。勝利を確信したデントにとってこのルガルガンの隠し球はミスティックであった。

タケミツ『「カウンター」が決まったああ!!』

ドン『攻撃力が四段回上がった「ジザークロ」! そのダメージの二倍の威力! これは相当なダメージが入ったりする!』

イワパレスを吹き飛ばしたルガルガンであったが、もう立っているのがやつとの状態だ。そして、イワパレスも根性で立ち上がった。戦闘不能になってもおかしくない一撃を受けたのにも立ち上がるイワパレスの姿に多くの人は驚いていた。イワパレスがまだ戦えるとみたサトシはすぐに指示を出す。

サトシ「ルガルガン!!! 「アクセルロック」!!?」

デント「イワパレス!!! 「ジザークロス」!!?」

防御を捨てたいま、殻へと戻る時間もないと判断したデントもイワパレスに再び技の指令を下した。

先制攻撃を仕掛けたルガルガンの技が先に決まり、そのままイワパレスは大きなハサミで再びルガルガンは地面へと叩きつけた。

その衝撃で砂埃が二体を包み込んだ。

そして…

砂埃が晴れたフィールドには今にも倒れそうなルガルガンと目を回しているイワパレスの姿が…あった

審判「イワパレス戦闘不能! ルガルガンの勝ち! よって勝者はサトシ選手!」

タケミツ『大決戦の中! 勝ったのはサトシ選手だ!』

サトシ「か…勝った…」

立っていたのはルガルガンだった。試合が終わったサトシは緊張が解けた瞬間、その場に倒れるかのように座り込んでしまった。

そんなサトシに急いで向かったデントは手を差し伸べた。

デント「おめでとうサトシ！」

サトシ「ありがとう！デント！」

たった一言だけを交わしてサトシはデントの手を取った。バトルに負けたのは悔しいがそれでもさらに成長したサトシを見れて何処か満足している自分がいたのであった…

~~~~~

タケミツ『それでは熱きドンバトル！第三試合を始めます！』

ドン『出場するのはマーマネ選手とベル選手です！』

二日目のドンバトルはまだ終わっていない。第3回戦！マーマネとベルの試合が始まろうとしている。

ベル「さあ行くよ行くよ！エンブオー!!？」

エンブオー「エンブオー!!？」

ベルが選んだポケモンはエンブオーだ！登場するなり大きな鼻から炎を吹く！初めて見るポケモンを前にマーマネは少しばかり怯んでしまっている。

タケミツ『ベル選手が選んだのはエンブオーだ!!!』

サトシ「エンブオーで来たか！」

ロトム『解析はお任せロト!!？』

『エンブオー おおひぶたポケモン

炎・格闘タイプ

アゴの炎で拳を燃やして炎のパンチを繰り出す。パワーとスピードを兼ね備えた格闘の技を身につけている。とても仲間思いなポケ

モン。』

デント「エンブオーはベルの最初のポケモンだ！マーマネはどう戦うか見ものだね！」

深呼吸をし気を落ち着かせるとマーマネはモンスターボールを取り出した。

マーマネ「あつ…トゲデマル！今回は休んでてね」

トゲデマル「モギユ…」

マーマネ「行くよ！クワガノン！！」

クワガノン「クワア！！？」

カキ「!? クワガノンでいくのか！」

ロトム『虫タイプを持つクワガノンは炎タイプのエンブオーとは相性が悪いロト!!?』

ソウタ「なあゝくに！炎タイプの技を受けなきやいいんだ！」

コテツ・ケニヤン「そうだなー！」

サトル「そう上手く行くものではないと思うけど…」

両者のポケモンは出揃った。ロトムの言う通り、マーマネの手持ちには炎タイプと相性のいいポケモンがないのがネックであった。だから今回マーマネは自分の手持ちの中でも攻撃力が高いクワガノンで勝負を挑む気だ。

両者顔を見合わせるとクワガノンはハサミから電気を帯び、エンブオーは火吹きで各々のやる気をアピールする。そんな二体を前にマーマネもベルもやる気がさらに満ち溢れてきた。

ベル「宜しくね！マーマネ君！」

マーマネ「負けないよ！ベル！」

審判「試合開始！」

? マーマネVSベル?

ベル「行くわよエンブオー！【つつぱり】!!? 【つつぱり】!!?」

エンブオー「エンボオ!!?」

マーマネ「避けて!」

クワガノン「クワツ!!?」

巨体に似合わないスピードで先制攻撃を仕掛けたエンブオー。その連続攻撃をクワガノンは全て躲けていく。

マーマネ「いいぞクワガノン!」【シグナルビーム】だ!!?」

ベル「エンブオー!」【かえんほうしゃ】!!?」

不思議な光を集めたクワガノンはそれを発射し、その技に対してエンブオーも火炎放射で対抗した。二つのパワーは混じり合い、爆発ともに相殺された。

タケミツ『両者の攻撃が炸裂しました!』

ドン『パワーは互角といった感じだったりする!』

煙がフィールドを包み込む中、怯まずマーマネは次の指示を出した。

マーマネ「今だ!」【ワイルドボルト】!!?」

電気を体から放射されたクワガノンは雷鳴の如く、エンブオーに向かって突撃を仕掛けた。しかしクワガノンの【ワイルドボルト】が迫るとエンブオーは躲すどころか迎え撃つようにして両腕を前に出した。

エンブオー「エンボオ!!?」

クワガノン「クワツ!」

マーマネ「何!!!」

エンブオーの行動に驚く一同、しかしさらに驚きの展開が待っていた。エンブオーはクワガノンの両バサミを掴んで【ワイルドボルト】を受け止めた。身体中に電気が流れ込むもエンブオーはその手を離すことなくクワガノンの勢いを押し殺した。

ベルの無茶苦茶戦法に付き合っていたお陰なのか?ダメージを追いながらもクワガノンの【ワイルドボルト】を止めたエンブオー。その手はまだクワガノンを捕らえていた。

ベル「いいわよ♪エンブオー!そのまま【かえんほうしゃ】よ!!?」

エンブオー「エンボオ!!?」

クワガノン「クワアア!!!」

マーマネ「クワガノン!!!」

身動きが取れないクワガノンは至近距離で効果抜群の火炎放射を浴びてしまった。熱風に吹き飛ばされながらも顎を掴まれたクワガノンに逃げ場はなし。

タケミツ『あつと！クワガノンには効果抜群の炎タイプの技が決まりました！』

ドン『これはかなりのダメージだったりする！』

火炎放射を受けたクワガノンは苦しそうに地面へと着地してしまった。この様子からにして次の一撃で戦闘不能になってしまいうであろう。次の攻撃が来る前に躲きたい所であるが火傷を負ったクワガノンはすぐに飛んで躲す気力がなかった。

ベル「もう一度！【かえんほうしゃ】!!? やっちゃえー!」

しかしだからと待ってくれる訳はない。このチャンスを狙ってエンブオーは大きく息を吸い込み始めた。

デント「ここまでか…」

カキ「くっ…」

誰もがマーマネの敗北を過るが、そのマーマネ自身はなんとか打開策を練り始めた。

クワガノンの残りの技を合わせて逆転の手口を探り出したマーマネはある一つの技に注目した。この技にかけてすぐにクワガノンに指示を出した。

マーマネ「そうだ…クワガノン！【いとをはく】!!?」

マーマネの声を聞いたクワガノンは糸を発射した。そしてこの糸は攻撃をするためのものではない。発射された糸はエンブオーの顎を絡め取った。

エンブオー「エ！エンブオー!!!」

ベル「ええええ!!!」

タケミツ『なんとクワガノンの糸がエンブオーの口を塞いでしまった!!!』

ドン『うむ！この状態だと【かえんほうしゃ】を撃つことは出来な

かったりする！』

咄嗟の機転により風向きを大きく変えた。サトシと出会う前の頃は何かと諦め癖もあったマーマネであったが、マオやカキにスイレン。そして現在カントーリーグに向けてさらなる成長を遂げているリーリエに刺激を受けた事がマーマネに諦めない心の灯火を灯したのである。エンブオーの動きが止まったの見計らい、マーマネ達の逆襲が始まる。

マーマネ「クワガノン！連続で【でんじほう】だ!!？」

クワガノン「クワツ!!？」

エンブオー「エンボオオ!!！」

命中率の低い技であるが身動きが取れないエンブオーに当てるのは容易い事であった。クワガノンも主人であるマーマネのためにやけどを負った身体で反撃に出た。糸の所為で思うように動けないエンブオーはクワガノンの連続攻撃を浴びせられた。この逆転の状況にベルは焦り出した。

ベル「なんとかして！エンブオー!!！」

混乱したベルの必死の声にエンブオーはクワガノンの攻撃を受けながらも、顎に灯された炎を大きく燃えあげた。燃え上がった炎はそのまま口を塞いでいる糸に引火した。

スイレン「アゴの炎で焼き切っちゃった！」

アシマリ「アウアウ!!？」

ナギサ「イブイ!!？」

動きやすくなったエンブオーはクワガノンを見つめた。行動が自由になったエンブオーを見てマーマネは更新の一声を上げた。

マーマネ「攻めるよ！【ワイルドボルト】!!？」

ベル「迎え撃って！【アームハンマー】!!？」

突進してくるクワガノンに向けてエンブオーは拳を振り上げた。両者の技が激闘し、激しい押し合いが始まった。だが…

エンブオー「エン…ブオ…」

ここでエンブオーの動きが一瞬止まってしまった。そう！クワガノンの【でんじほう】による追加効果、麻痺状態だ。当たれば確実に

相手の体の自由を奪う技にエンブオーは動きが鈍り、クワガノンの氣迫に押し負けられてしまった。

エンブオー「エンボオオ!!!」

ベル「エンブオー!!!」

一瞬の緩みが勝敗を分けた。クワガノンの猛攻に耐えきれず、エンブオーはそのまま背中から倒れてしまった。

審判「エンブオー戦闘不能!クワガノンの勝ち!よって勝者はマーマネ選手!」

タケミツ『大逆転!マーマネ選手!準決勝へ進出だ!!!』

勝敗が決し、クワガノンはマーマネの方へと戻った。マーマネ本人は勝てた事に驚きそのまま立ち尽くしていた。

マーマネ「か…勝っちゃった…」

クワガノン「クワツ!!?」

そしてクワガノンの呼びかけに我に帰り、マーマネは強くクワガノンを抱きしめた。

マーマネ「ありがとう!クワガノン!」

クワガノン「クワツ!!?」

トゲデマル「モギユユ!!?」

勝利を噛み締めたマーマネとポケモン達はしばらくの間、勝利を喜び合った。諦めない心が掴んだ勝利!見事であった。

ベル「ありがとうエンブオー!ゆっくりじっくりと休んでね!」

勝負に負けたベルはエンブオーに労いの言葉をかけてモンスターボールへと戻した。

ベル「おめでどう!マーマネ君!私に勝ったからには優勝してよね!」

マーマネ「ありがとう!ベル!僕、頑張るよ!」

~~~~~

二日目の大会。カキにサトシ。そしてマーマネと勝ち抜け、残る試合は最後となった。イッシュ地方ではライバルとしてサトシの前に立ちはだかるトレーナーである二人が今、このカントー地方で一戦を



交える事となる。この対戦カードは二人と戦った事があるサトシですら分らない物となるだろう。

ケニヤン「こうして戦うのは初めてだよな！お互い悔いのないバトルをしようぜ！」

シユータイー「ああ！よろしく！」

サトシ「二人とも！いいバトルを期待してるぞ！」

ケニヤンとシユータイー。イツシュ地方では戦う機会がなかった二人がサトシと再会を果たしたここカントー地方でぶつかる事となった。互いにトレーナーサイドに着くと、まずはシユータイーから今回戦うポケモンを選出した！

シユータイー「行けっ！ローブシン」

ローブシン「ローブシン!!？」

シユータイーが繰り出したのはローブシンだ！二つの柱を大きく振り回して、会場中にその力をアピールした！

サトシ「ローブシンか！」

リーリエ「あれがローブシン……」

『ローブシン きんこつポケモン

格闘タイプ

杖代わりのコンクリートの柱を筋力を使わず自在に振り回す技を持つ。コンクリートを作る技術は2000年前にローブシンから教わったと考えられている』

ケニヤン「悪いなゼブライカ！お前で行こうと思ったけど、今回もこいつで行かせてくれ！」

今回ケニヤンはゼブライカを繰り出すつもりであったが、相手が繰り出した格闘タイプを見てその考えは変わった。相手が筋肉を自慢とするポケモンであるのなら、ケニヤンが繰り出すのはあいつだ！

ケニヤン「今回も頼むぞ！ダゲキ！」

ダゲキ「ダツキイ!!？」

コテツ「ケニヤンの奴！またダゲキだ！」  
ルカリオ「リオ!!？」

審判「試合開始！」

? シューティーVSケニヤン?

シューティー「【ビルドアップ】!!？」

ケニヤン「【ビルドアップ】!!？」

タケミツ『両選手！同時に【ビルドアップ】の指示を送りました！』  
ドン・ジョージ『こりや、全身全霊！真つ向勝負とみたりする！』  
お互いに格闘タイプなだけでもあつて、シューティーもケニヤンも考えることは同じだったようだ。物理技が飛び交うと思われるこの試合を制するのはどちらかの一步の手で決まってしまうと考えられる。

ケニヤン「行くぞ！ダゲキ！【ローキック】だ!!？」

まずはダゲキから仕掛けて行った。ダメージを与えつつ素早さを下げてローブシンの動きを鈍らせるのも狙いだろう。

シューティー「ローブシン！【がんせきふうじ】だ!!？」

しかしシューティーはケニヤンと違う攻め方に切り替えた。【がんせきふうじ】も物理技のため【ビルドアップ】の恩恵を受けている。次々とローブシンの行く手に聳え立つ岩壁に接近をかけるダゲキを惑わしていく。

デント「ダゲキは肉体強化の技と接近戦の技しか持っていない。遠距離攻撃ができるローブシンに今のところ部があると見えるね！」

一回戦目のマオとの試合でダゲキのバトルスタイルを観戦していたシューティーはもうすでにダゲキのバトルスタイルは把握していた。

シューティーがローブシンを繰り出したと見て、もう一度ダゲキを二回戦目に続投させたのだが手の内がバレてしまっている以上は一

枚上手に攻めていかなければならないようだ。

シューティー「攻撃を続ける！」

さらにローブシンの「がんせきふうじ」はダゲキを追っていく。なんとか躲していくダゲキであったが、突然として後方に出現した岩壁に身体をぶつけてしまった。

ケニヤン「しまった！」

ダゲキ「ダツキ!!!」

膝をついた隙に前方からも岩壁が出現し、ダゲキの包囲した。逃げ場のないダゲキに岩壁が邪魔でダゲキの姿を確認できないケニヤンは次の指示を出せないでいる。

サトシ「あれ！俺との試合でデントのイワパレスがやったのと同じだ！」

デント「僕とサトシの試合を観て、瞬時に自分のバトルスタイルに取り入れたようだね！」

シューティー「ローブシン！「いわなだれ」だ!!？」

ローブシンは身動きが取れないダゲキの頭上から無数の岩の雨を振り落とした。四方八方に塞がれてしまったため躲す場所が見つからない。ケニヤンはダゲキを信じて大きな賭けに出た。

ケニヤン「そうだ！ダゲキ！「ビルドアップ」!!？」

ダゲキ「ダキイ!!？」

ケニヤンの指示を聞いたダゲキはさらに自分の攻撃と防御を高めた。しかし、無数の岩は滝のようにしてダゲキに振り落とされた。その衝撃で「がんせきふうじ」で出現させた岩壁も崩壊した。攻撃を食らったダゲキは瓦礫に埋もれてしまった思ったが、その岩が爆散すると、中からほぼ無傷のダゲキが現れた。ケニヤンが「ビルドアップ」で狙ったのは攻撃ではなく防御の方みたいだ。

ケニヤン「どうだ！俺のダゲキの鋼の肉体の前ではそんな攻撃は屁でもないぜ！」

わざと相手の技を受けてでの対処方法にシューティーは目を丸くした。しかし、それは同時にシューティーの魂を燃え上がらさせた。

シューティー「面白い！ローブシン！次は「かいらき」だ!!？」

ローブシン「ローブシン!!?」

小細工は通用しない相手と見たシューティーはローブシンが得意とする接近戦へと切り替えた。その指示に笑みが零れたローブシンは大きな鉄骨を持ってダゲキへと走り出した。

ケニヤン「【からてチョップ】だ!!?」

ダゲキ「ダキイ!!?」

対抗してダゲキも向かってくるローブシンに【からてチョップ】を仕掛けた。しかし、攻撃力を二段階あげたパワーを放つが、元から攻撃の種族値が高いローブシンの怪力に押されてしまった。勢いよく振り下ろされた鉄骨がダゲキを後方へ吹き飛ばした。

ダゲキ「ダキイ!!!」

ケニヤン「負けるな!ダゲキ!!!」

ケニヤンの声にダゲキはすぐ起き上がり体勢を立て直した。しかし、シューティーとローブシンの攻撃は容赦なく襲いかかってきた。

シューティー「【かいりき】だ!!?」

ケニヤン「負けてたまるか!!!【インファイト】!!?」

さらに鉄骨をダゲキに振り下ろされるもダゲキは【インファイト】で押し返した。ダゲキの猛攻による連続攻撃をローブシンは鉄骨を盾にして攻撃を防ぐ。しかし、ダゲキの攻撃は一発一発とどんどんパワーが上がっていき、ローブシンは防御の体勢を取るだけで精一杯であった。そして、ついにはダゲキの攻撃はローブシンを押しつけた。

ローブシン「ローブシン!!!」

シューティー「しっかりしろ!ローブシン!!!」

ダゲキの攻撃を受けたローブシンはそのまま倒れてしまった。なんとか起き上がるも、今度はケニヤンとダゲキが倒れ込んでいるローブシンを襲いにかかった。

ケニヤン「決めろ!最大パワーで【からてチョップ】だ!!?」

シューティー「ローブシン!【ばぐれつパンチ】だ!!?」

渾身のパワーを溜め込んだダゲキは勢いよくローブシンの頭上へと手刀を振り下ろした。しかし、ローブシンにすぐに指示を出したシューティーの声に反応し、ローブシンも最大のパワーでダゲキへと

攻撃を仕掛けた。

二体の拳がぶつかり合うとパワーが爆散し、大きな衝撃波がフィールドを大きく揺らした。地響きが鳴り止むと、まだ拳と拳をぶつけたまま硬直状態の二体が目と目を合わせていた。

ダゲキ「ダ…キィ…」

すると、ダゲキの両足が小刻みに震えだすと、ダゲキはそのまま倒れてしまった。

ケニヤン「ダゲキ!!!」

審判「ダゲキ戦闘不能！ローブシンの勝ち！よって勝者はシューテイー選手！」

第四試合の決着がついた。会場からは格闘タイプ同士の戦いに歓声が鳴り響いた。試合終了のコールが流れたと同時に倒れたダゲキの元へとケニヤンはすぐに走り出した。

ケニヤン「ダゲキ！大丈夫か!？」

ダゲキ「ダツ…キ」

ケニヤン「よく頑張ってくれたな！すぐにポケモンセンターに連れてってやるからな！」

こうしてダゲキを戻したケニヤンはシューテイーの元へと向かった。

シューテイー「良くやった！ローブシン！」

ケニヤン「いい試合だったぜ！次の試合も頑張れよ！シューテイー！」

シューテイー「君の気迫には何度も押し倒れそうになった。ケニヤンのダゲキの戦い方はローブシンにとつてもいい刺激になったと思う！」

ケニヤン「そうか！だけどアクセント…違う…」

シューテイー「えっ…」

~~~~~

ドン『さて！二回戦の試合は全て終了だったりする！そして！勝ち上がった4名はモニターを見て欲しかったりする！』

そして、明日の最終戦のカードが発表された。

第一試合 サトシVSカキ

第二試合 マーマネVSシューティー

タケミツ『準決勝ならびに決勝は明日行われます！』

サトシ「カキとか！」

カキ「久々だな！いい試合しようぜ！」

マーマネ「僕の相手は…シューティーか…よ…宜しく！」

シューティー「こ…こちらこそ！」

暑きドンバトル、二日目は無事に終了した！さて、明日はラストバトル。優勝するのは果たして誰か!?

# ポケットモンスターG 番外編

## ACT 1

カントー ジョウト    ホウエン    シンオウ  
イツシュ    カロス    アローラ

そして、この世界にはもう一つの地方が存在している。

### 【オーレ地方】

砂漠が広がる土地であり、街から街へは、かなり離れているためバイクやスクーターを利用しなければ少し移動には不便な地方である。

また、何かと問題が起すとても治安が悪い地方でもあるためこれと言った観光名所もなければ観光客があまり来る事もない。

イツシュ地方とはそれなりに近い位置にあるためかポケモンジム等の施設も存在していない。その代わりにポケモンコロシウムやバトル山と言ったトレーナー同士の腕試しを試すことが出来る施設等が存在している。

そんなオーレ地方はバトルが盛んな地方であつて腕試しをしに強者のトレーナーが他方から訪れてくることもあつたが、十年前ぐらいに起きたある事件を境に完全に他の地方とは隔離されてしまう地方へとなってしまったのだ。

【ダークポケモン計画】

ポケモンの心を完全に閉ざさせ戦闘能力を無理矢理上げさせることにより、ポケモンを戦闘兵器化とさせ悪事に利用させるオーレ地方全体を飲み込むほどの大事件である。後にその事件は勇敢な少年少女の活躍により、その計画は見事に打ち破ることが出来た。

今は二度とそのような悲劇を繰り返してはならないと、ポケモン協会はオーレ地方の復興に取り組んでいる。その事件で傷ついたポケモン達の心はリライブによって元の状態へと戻すことが出来、事件はこうして幕を閉じたように思えた……

クチバシテイの港に一人の少女がこの地に足を踏み入れた。腰まで下ろした青色が少し混じった美しい黒髪を風に靡かせながら、その少女は船を降りた。

「おーい！その姉ーちゃん！よかったら俺とバトルしてみねえか？」

いかにもチャラついた男性がモンスターボールを片手にその少女に近づいてきた。普通なら怖いなあという感情が表れてくるものだ



が、自分の出身にはこういうゴロツキがうろつき廻っているのは良くあることなので怖くはなかった。少女はその男に笑顔を向けると、自分のモンスターボールを取り出した。

「いいですよ、お手柔らかに♪」

バトルは一瞬にして決着が着いた。

そのバトルを見た他のトレーナー達もその少女にバトルを次々と申し込んでいく。もう二十人近くのトレーナーと戦ったのでであろうか、その少女はあれだけの人数を十五分たらずで勝利を勝ち取っていった。彼女に挑もうとする輩はもうおらず、バトル施設を出るとポケモンセンターへと向かった。

~~~~~

バトルに疲れたポケモン達を回復させている間、ソファアに腰を下ろすと、バックからポケギアを取り出した。

「アイラです。いまカントー地方に到着しました」

『おお！アイラか。長旅ご苦労であった』

「いえ、そんなに退屈するほどではありませんでした」

『そうか…』

少しの沈黙の後、連絡している相手から声が届いた。

『それでは君に早速やってもらうことは、もちろんシャドーの生き残りの調査だ』

「もちろん、それは分かりますが具体的には何をなさればいいのですか？」

『おっと…そうだな。えっと…何を…か』

「勢いだけで計画性がない所は相変わらずですね。よくそれで国際警察のリーダーとしていられるとは…」

『君は…相変わらず言葉に棘があるな(笑)そうか薔薇のような美しさを持っている君なら仕方のないことであるが…』

「まずは聞き込みから始めさせて頂きます。その後、目星がついた所を私が独自で現場へと向かいます」

言葉を遮るようにしてアイラは言い放った。頭を突きつけるような鋭い彼女の声にからかうのをやめたその国際警察の男は口を開いた。

『そうだ。少し気になることがあったのだ』

「気になること?」

『ああ：以前にイツシユで確認されているポケモン、ペンドラーというポケモンがトキワの森で保護されたという知らせを受けたんだ。だが、そのポケモンの進化前と分かるポケモンがトキワの森で確認されていなかったため、このペンドラーはトレーナーに捨てられたポケモンである可能性が高いんだが、少し私には妙に感じてな』

「妙ですか?」

『そのペンドラーはレベルもかなり高いポケモンなんだ。捨てられたにしても、そんなポケモンを捨てる理由がどこにあると思う?弱いならまだしも、強いポケモンを捨てるとは…』

確かにそれは妙だ。強すぎて手に負えなかったからか? いや、それでも戦力として考えているのなら手放す可能性は低いもの。

アイラは一つの可能性を感じた。

「わざと放たれたポケモンではないのでしょうか?」

『ん? わざとだと?』

「環境の生態を崩して、国際警察や保護施設官がそつちの問題に目を向けている時にまた別の計画を企てている可能性も考えられます」

『つまり、領土を広げることと自分達の計画を悟られないようにするためのカモフラージュということか…』

暫くアイラの推理に考え込む国際警察は少し考えた所でアイラに指示を出す。

『カントーに生息していないポケモンが暴れまわっているのはシャドーの生き残りと関わっている可能性が高い。アイラ! 君にはまずそのポケモン達の保護を任せて頂きたい! もしかするとシャドーに関わるヒントがあるかもしれない。頼むぞー!』

「了解致しました!」

その声とともに連絡は途絶えた。連絡が終わったと同時にポケモ

ン達の回復終了のアナウンスが鳴り響いた。ポケモン達が入ったモンスターボールを六つ受け取ったアイラは聞き込みを始めた。

もう、あんな悲劇を引き起こしてはいけない。  
何も出来ずにただ怯えることしか出来なかった私はもういないんだ。

今度は私が…奴らの計画を止めてやる!!!

私の名前はアイラ。出身はオーレ地方。

アイラは聞き込みを始めた。どんなに些細なことでも構わない。ポケモンセンタ―を訪れているトレーナー達からシャドーの情報を聞いて周った。

だが、もう他の地方のポケモン達がカントーにやってきていることが不思議とは感じなくなった今の時代。それに困惑するトレーナー達はおらず、まともな情報を得ることが出来ずにいた。

休憩がてらにモモンの実のフロートジュースを飲んでいるアイラの元に一人の男性が歩み寄る。

「はーい！もしかして君は観光客かい？」

「ええ…まあ」

「そうかい！じゃあここカントーのパンフをどうぞ！」

「あ…ありがとうございます」

パンフを受け取るとその男は何処かへ行ってしまった。カントーの地形についてもちようど知っておきたかったアイラはパンフレットを開いた。トキワの森やオツキミ山、イワヤマトンネル、サファリパーク。カントーのポケモンスポットや出現ポケモンについてもまで記載されており、アイラはそのページを隅々まで読んでいった。すると…ある記事に目をやった。

【ふたごじま】

『カントーの海に浮かぶ氷に覆われた島』

多くの氷タイプのポケモンが住んでいる。

捕まえに行くなら、厚木のコートと炎タイプのポケモンは準備しとけよ!!!

伝説のポケモンフリーザーに会えたら、君は超ラッキーだ!!!」

「…フリーザー…」

カントー地方で言い伝えられている伝説の鳥ポケモンのうちの一体だ。その記事を読んでいたアイラはシャドーの考えることを含めてある答えを出した。

「フリーザーの捕獲。その可能性は…」

否定できないものではない。シャドーの奴らはジョウトの伝説のポケモンと謳われる三体をダーク化させた前科がある。伝説のポケモンが拠点としている島なら、行ってみる価値はある。

アイラは洋服店でコートを購入すると、それを身に纏って、ふたごじままで行ってくれるボートへと乗り込んだ。

~~~~~

ふたごじまに近づくにつれ、周りの空気が冷やされていることが感じる。吐く息も冷やされた事により霧状となっては辺りを包み込んでいる。

異世界へと迷い込んでしまった様な感覚だ。何処かでは野生のラプラスの鳴き声が人魚の歌声のように奏でている。視界が霧によって遮られ全く周りの様子が分からず、ボートに内蔵されたレーダーを元に島へと目指していく。

身体も少しばかりか震えてきたアイラはボートの操縦士から渡さ

れたコーヒーを飲んでいると、お互いを重ね合わせている二つの島が見えてきた。

「それじゃ、暫くしたら迎えに来るでな」

「はい。ありがとうございます」

札を言ったアイラは一面氷に覆われたふたごじまへと足を踏み入れた。

「ムウマ！【おにび】!!？」

モンスターボールから現れたムウマは自分の周りに青白い火の玉を出現させる。それがライト代わりとなり洞窟内を照らした。滑りやすい地面に気をつけながら奥へと進んで行く。中にはパウワウやヤドンといったポケモンがのんびりと過ごしていた。しかし、フリーザーの影が見当たらなければ、シャドーどころか人影の姿も見えなかった。

「行った損かな」

何の収穫も得られなかったアイラは迎えが来るまで、もう少しふたごじまを探索してみることにした。すると奥から微かだが小さな光が照らされていた。不思議に思ったアイラはムウマを連れてその光が照らされた方へと歩いて行く。

アイラは通り道を抜けて一つの空間へと辿り着いた。辺りを見渡してみるとそこには一人のトレーナーとその相棒らしきポケモン、ピカチュウの姿があった。どうやら、バトルの特訓をしているのかそのトレーナーの指示の元ピカチュウは次々と自分の倍近くある大きな氷の山に【10万ボルト】や【アイアンテール】を決めていく。そのピカチュウのレベルからベテランのトレーナーであると見たアイラは駆け足でそのトレーナーの元へと向かった。

「こんにちは。少しだけ見せてもらったけど貴方のピカチュウ凄いパワーね。あんな大きな氷の山を砕いちやうなんて」

アイラに話しかけられたそのトレーナーはピカチュウを自分の元へと呼び戻すと、深々とかぶっていた赤い帽子を少し上に上げた。

「サンキュー！なんたって、ピカチュウは俺の一番の相棒だからな」

「そうなんだ。ところで、君一人？」

「ああ、トレーナー修行の途中なんだ。いろいろな地形でも戦えるようにと思って、ここふたごじまに来たんだ」

「トレーナー修行か！じゃあ、ジム巡りの旅とかしてるの？」

「いや。俺、十歳の頃にこのピカチュウを連れてポケモントレーナーとして旅立ったんだ。カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュ、カロスとポケモンリーグにも挑戦したんだ。で、今回はアローラ地方のポケモンリーグに挑戦するんだよ」

「凄い！そんなに出場したんだ！」

「まあ、優勝はまだだけどな。だからアローラリーグでは必ず優勝して、チャンピオンリーグに挑戦するんだ！なあ、ピカチュウ」

そのトレーナーの呼びかけにピカチュウはとびっきりの笑顔で応答に答えた。先ほど見たピカチュウのレベル、そしてそのトレーナーとの信頼関係を目の前にしたアイラの闘志は少しずつ燃え上がってきた。何にせよ目の前にいるのは六つのリーグに出場した経験のあるトレーナーだ。アイラのバトル魂が黙っていなかった。それはふたごじまに訪れた目的を忘れてしまうほどにだ。

「私ね。強そうなトレーナーを目の当たりにすると、バトルしたくて堪らない性格なんだよね。貴方にバトルを申し込みたいんだけど。受けて貰えないかしら？」

少し挑発じみた声でモンスターボールを片手に微笑むアイラにそのトレーナーも少し笑みを浮かべて返事を返した。

「いいぜ！受けて立ってやる！」

トレーナーの合図とともにピカチュウは両頬の電気袋から電気は発しながら、戦闘体勢へと切り替えた。

「私はアイラ！貴方の名前は？」

名を聞かれたその青年は赤い帽子のツバを掴みながら、洞窟内に響き渡るような声量で名を叫んだ。

「俺はサトシ！夢は世界一のポケモンマスターになることだ!!!」



一年中、寒さに覆われているここふたごじま。春夏秋冬をも存在していない極寒の島で二人のトレーナーによる熱いバトルが始まろうとしていた。

「さあ！出てきて!!!」

勢いよく上へと投げたアイラのモンスターボールから現われたのは…

「シャモ!!?」

炎・格闘タイプのホウエン地方のポケモン、ワカシャモだ。

「ピカチュウ！君に決めた!」

「ピッカ!!?」

互いの対戦相手を確認したピカチュウとワカシャモは一步前へと出た。ピカチュウの頬から電気が、ワカシャモの頭の鶏冠からは燃えさかる炎のように真っ赤に熱を帯びていた。

「お手柔らかにね♪」

「シャモ!!?」

「それじゃあ！行くぞ!」

「ピッカ!!?」

アイラは軽くウインクで返すと、サトシも軽く頷いては返事を返した。目と目が合ったらポケモンバトル！それがトレーナー同士の決まりみたいなものだ。

「先手必勝！ピカチュウ！【10万ボルト】!!?」

「ピイイカアアアチュウウウ!!?」

先に動いたのはピカチュウだ。軽く空中へジャンプすると、ワカシャモ目掛けて電撃を放つ。サトシのピカチュウの十八番である【10万ボルト】の威力はアイラの肌にも微力ながら感じていた。

「燃えろ！ワカシャモ！【かえんほうしゃ】!!?」

「ワアアシャアア!!?」

だが、これぐらいで怯むようなアイラとワカシャモではない。ワカシャモも【かえんほうしゃ】でピカチュウの【10万ボルト】に対抗

した。ぶつかり合った技は爆風ともに相殺された。

「行っけ！【でんこうせっか】!!?」

「ピツカア!!?」

「ごっちも！【でんこうせっか】!!?」

「シヤア!!?」

技の威力の次はスピードだ。ピカチュウとワカシャモは足元が滑りやすい氷の上でも軽やかに走り出すと、そのままお互いに衝突した。反動によって二体は後ろへと押された。

「上に飛ぶんだ！ピカチュウ!!」

さあ、小手調べはもう終わりだ。ピカチュウはさつきよりも勢いよく上へとジャンプした。鳥ポケモンの頭上を取るぐらいの高さまで上がり、その不安定な空中からすぐに電気袋から電気を発すると【10万ボルト】を撃つ体勢へと入った。

「逃がさないよ。ワカシャモ！【スカイアッパー】!!?」

「シヤツモ!!?」

「ピツ…カア！」

上空高くにジャンプしているピカチュウだがこの技の前に関係ない。空高く突き上げた拳がピカチュウの電撃が決まる前に命中した。【スカイアッパー】が決まったピカチュウはそのまま地面へと落ちていく。

「続けて【かえんほうしゃ】!!?」

さらにワカシャモの火炎放射が襲いかかる。地面へと真つ逆さまに落ちていくピカチュウに躲す手がない。

だが、ピンチをチャンスに変えるのはサトシの専売特許である。地形を利用してサトシはピカチュウに指示を出す。

「地面に【アイアンテール】!!?」

「チュウウウウピツカアアア!!?」

着地の瞬間を狙ってピカチュウは鉄の尾で氷を叩き割った。その衝撃で飛び散った氷の破片がそのまま壁となり、火炎放射を防いだのだ。

「うっそー!!そんな防ぎ方があるの！」

「ピカチュウ！【でんこうせっか】!!?」

「ピツカ!!?」

「シャー!」

予想外の事に驚くアイラ。だが、驚いている場合ではない。氷の破片と火炎放射がぶつかったことで発生した水蒸気がうまい具合にピカチュウの姿を消すことになった。ピカチュウの様子が捉えないワカシャモにピカチュウの電光石火が決まった。電光石火を食らったワカシャモはそのままアイラのいる方へと吹き飛ばされた。

「今だ!【エレキボール】!!?」

「ピカピカピカ!」

「【かえんほうしゃ】!!?」

「チュパイ!!?」

「シャーアア!!?」

ピカチュウはさらに電気を帯びた球体をワカシャモ目掛けて投げ入れた。吹き飛ばされながらもワカシャモも火炎放射でピカチュウの電撃玉を打ち消した。相殺されたことによって発生した煙が二体の前に発生した。再びお互いの姿が見えなくなったことにより、相手の出型を見て警戒し始める。

だが…

「【つばめがえし】!!?」

「シャモ!!?」

「ピイカアア!」

「ピカチュウ!!!」

発生した煙は空気よりも軽いため下の辺りはそんなに煙は密集してはいない。ワカシャモは視線を低くして煙が充満していない僅かな下からピカチュウの姿を捕らえたのだ。

「よっしゃあー!続けて【かえんほうしゃ】よ!!?」

「シャ…」

すぐにワカシャモは火炎放射の体勢をとろうとしたのだが…

「ワカシャモ?」

「シャ…シャモ…」

突然、ワカシャモの身体からは電気が帯び始めていた。そのせいで身体が痺れてしまいすぐに次の攻撃を移せなかったのだ。

「しまった。《せいでんき》…」

物理攻撃が裏目に出たか。ピカチュウの特性によって麻痺状態となったワカシャモはその場で行動停止となった。その瞬間をサトシは見過ぎなかった。

「チャンスだ!ピカチュウ【エレキボール】!!?」

動けないワカシャモにピカチュウの【エレキボール】が炸裂した。

「続けて【でんこうせっか】!!?」

「ピッカ!!?」

「シャアアア!!」

「あっ!!」

「どうだ!!!」

ピカチュウの電光石火がワカシャモの腹部に入る。戦闘不能は免れたもののワカシャモはフラつきながら立ち上がる。すると…

「シャアア…」

ワカシャモの鶏冠辺りから熱のような赤いエネルギーが発すると、徐々に赤いオーラのように身体へと纏わりつき始めた。

「《もうか》か…」

体力が寸前の所まで達すると炎タイプの攻撃力が上がるワカシャモの特性。ピンチをチャンスに変える。一発逆転を測る特性だ。

「【10万ボルト】!!?」

「【かえんほうしゃ】!!?」

両者の決め技とも言える技が交わる。

「ピィィ…」

「シャア…」

爆風によって吹き飛ばされたピカチュウとワカシャモはなんとか体勢を止めた。炎タイプの威力が上がっているのにも関わらず、それと直角以上の力を発揮するピカチュウにアイラは驚きを隠せないで

いた。

「やっぱリーグ功績者は違うわね！こんなに強いピカチユウ初めて会ったわ！」

「ああ…スツゲー強いな！アイラのワカシヤモ！」

「だけど、負けないよ！」

「俺だって！」

サトシとアイラが次の指示を出そうとしたその時。

!!!  
ツンベアアアアアア!!!

「何だ！いまの声は？」

突然の唸り声が洞窟中に響き渡った。それを聞いたアイラの様子は険しいものとなっていた。

「ごめんサトシ！バトルの方は中断させて!!!急ごう！ワカシヤモ！ムウマ！」

「待てよ！アイラ!!!」

ワカシヤモとムウマを連れて声が出た方へと走り出すアイラにサトシも無我夢中となつてアイラの跡を追い始めた。

洞窟道を抜けて、さつきよりも広いホールへと着いたサトシとアイラ。そして、その目の前には一体のポケモンがサトシ達を睨みつけていた。そのポケモンは先ほどと同じ唸り声を上げると両腕を振り下ろして冰山を叩き割った。パワーを見せつけたそのポケモンは誇らしげた表情を浮かべて、こちらを睨みつけてきた。

「あのポケモンは？」

「ツンベアーだ！」

サトシはそのポケモンの名を言ったと同時にポケモン図鑑を開き始めた。

『ツンベアー　とうけつポケモン』

氷タイプ

クマシユンの進化系。吐く息を凍らせて牙や爪を作り戦う。泳ぎが得意で北の海を泳ぎ周り獲物を捕まえる』

図鑑の解説が終わつたと同時にツンベアーは白い冷気を放つてきた。その技はサトシ達の足元に目掛けて飛んでいき、大きな氷の山を形成させた。

「うわぁー！ツンベアーの【れいとうビーム】!!?」

「おいーいきなり何すんだー！」

さらにツンベアーの【れいとうビーム】が四方八方に放ち始めた。その場で暴れ始めたツンベアーに野生のポケモン達も慌ててその場から逃げ出して行った。血走つたような目で攻撃を繰り返すツンベアーを見たサトシは話し合いが無理だと悟り、ピカチュウを自分の前へと出した。

「こうなったら、仕方ない。ピカチュウ！【10万ボルト】だ!!?」

「ピイカアアチュウウ!!!」

「ベエエアアア!!!」

「れいとうパンチ」で打ち消した!!!」

「ピカ…」

ピカチュウの電撃をツンベアーは氷エネルギーを纏わせた拳でその技を打ち消した。

「ワカシャモ！【かえんほうしゃ】!!?」

「シャアアア!!?」

「ベエツツツ!!!」

その隙にワカシャモの火炎放射がツンベアーに放たれた。技を発動した直後であったため躲す体勢を取れてなかったツンベアーにそのまま火炎放射が決まった。

「ピカチュウ！【アイアンテール】!!?」

「ワカシャモ！【スカイアッパー】!!?」

ふらつくツンベアーに効果抜群の技を振りかざすのだが、体勢を保ったツンベアーは突如黒いオーラを纏った拳で二体諸共なぎ払った。

「ピカチュウ!!!」

「ワカシャモ!!!」

二体はそのパワーに押し返されてしまった。倒れた二体に急いで駆け寄るサトシとアイラ。たった一発のはずがピカチュウとワカシャモにはかなりのダメージが入っていた。

「何だ！いまの技は…なんてパワーだ」

サトシは見たことのないその技のパワーに唖然とする。ただ一人アイラはその技を使ってきたことにより、ツンベアーの正体はつきりとした。

「やっぱり…」

さらにツンベアーは【つららおとし】で追い討ちをかける。サトシは一つのモンスターボールを取り出すと、それを上空へと投げた。

「リザードン！君に決めた!!!」



「グオオオオオ!!?」

ボールから飛び出したのはサトシの手持ちの仲間でもエース級の強さを誇るポケモン、リザードンだ。飛び出すと同時にリザードンは翼を大きく広げて飛び上がり、火の玉を軽く放射した。その様子を見たツンベアーは攻撃の対象をリザードンへと向けた。

「リザードン! 【かえんほうしゃ】だ!!?」

「グオオオ!!?」

「ベエアア!!」

リザードンの火炎放射がツンベアーに向かって放たれた。

「【ドラゴンクロー】!!?」

火炎放射からの連続攻撃。続けてリザードンは龍のような鋭い爪のように具現化されたパワーエネルギーを纏った爪でツンベアーに攻撃を仕掛ける。

すると、なんとか耐えたツンベアーは大きく息を吸い込み始めると、光り輝く白いエネルギーを口一杯に広げ始めた。その光りの輝きは「れいとうビーム」の比ではない。

「危ない! あの技は【ぜったいれいど】よ!!!」

「リザードン! 【かえんほうしゃ】!!?」

ツンベアーは一撃必殺の絶対零度をリザードン目掛けて放った。氷タイプの技ではあるがこの技に相性など関係ない。喰らえば炎も凍らせてしまうぐらいの威力を発揮する一撃で戦闘不能とさせる技だ。リザードンも火炎放射で絶対零度に対抗する。両者の押し合いが続いたのだが、リザードンに軍配が上がる。リザードンの火炎放射はそのままツンベアーの絶対零度を打ち消すと同時にツンベアーに火炎放射を決めた。

「す…すい」

相性は有利とはいえ、異常なほどの強さを誇るサトシのリザードンにアイラは口を開けながらその戦いを呆然としてしまった。

「今だ! ツンベアーを抱えて飛べ!!!」

接近したりザードンはツンベアーを抱きかかえるとそのまま上空へと飛び始めた。今までのダメージと飛び上がるリザードンのス

ピードによって生まれた風圧に身体中を押さえ込まれたツンベアーに抵抗する力が働かなかった。

「リザードン！「ちきゆうなげ」だ!!」

「グオオオオオ!!」

そのままリザードンは地球の輪を描くように回り始めるとそのまま一気に急降下し、そのまま地面へと叩きつけた。

叩きつけられた衝撃による発せられた地響きがりザードンのパワーを思い知らされる。そのままツンベアーは立ち上がることはなかった。勝利を確信したりザードンは勝利の火炎放射を放つ。

「決まった！」

「やったな！リザードン！」

「グウオ!!?」

ツンベアーを倒したサトシ達はツンベアーの元へと駆け寄った。

「このツンベアーは一体何だったんだ」

「すぐに保護した方がいいわね」

アイラはモンスターボールを取り出すとツンベアーに向けて開閉スイッチを押さえようとボールをかざす。その時、何処から飛んできたポケモンによる攻撃がサトシ達を襲い始めた。

「きやあ!!」

「な…なんだ！」

技が飛んできた方へと目をやると、そこにはツインテールに縛ったピンク色の髪をした女を先頭に同じ戦闘服を身につけた大勢の集団が現れた。

「とんだ邪魔してくれたわね。貴方達」

見るからに敵意を示している相手にサトシとアイラはポケモン達を前に出す。目の前の奴らは何者なのかも分からない。

ただ、感情には出てはいないが、アイラの視線や呼吸音から何処ともなく怒りを感じていた。一緒になって身構えるサトシの目には彼女がそう写っていた。

ダークポケモンの調査のため「ふたごじま」に訪れたアイラ。その途中に出会ったサトシと暴れまわっているツンベアーと遭遇する。ツンベアーを押さえる事に成功したのだが、洞窟の奥から現れた謎の集団からの奇襲攻撃に襲われた。

「一体何なんだ！」

突然、攻撃を仕掛けて来た集団にサトシは問いかけた。そんなサトシに対してリーダーと思われる女は見下すような目つきでサトシを睨みつけた。

「はあ？あんた馬鹿なの？誰だって言われてすんなり名乗るわけないでしょ〜」

答えるつもりはないリーダーの合図に他の団員たちはそれぞれのポケモン達に指示を出す。サトシとアイラに向かってポケモン達の技が一斉になって降り注ぐ。

「ピカチュウー！【エレキボール】!!?」

「ピツカ!!?」

ピカチュウは向かってくる攻撃をジャンプをして躲すと、ボール状に溜め込んだ電撃のエネルギーを放った。

攻撃を仕掛けて来たピカチュウを目にしたリーダーは自身のモンスターボールからポケモンを繰り出した。

「アゲハントー！【ぎんいろのかぜ】!!?」

モンスターボールから登場したと同時に相手のアゲハントは銀色に光る自身の鱗粉を乗せた強風でピカチュウの「エレキボール」を打ち消した。

「いとをはく」!!?」

「ピッ!!?」

続けざまにアゲハントは糸で一瞬にしてピカチュウの身体を拘束した。アゲハントの糸で身動きが取れなくなったピカチュウはそのまま地面へと撃墜した。

「ピカチュウ!!!リザードン!【かえんほうしゃ】だ!!?」

「グウオオ!!?」

ピカチュウを助けるべくリザードンに指示を出す。だが、リザードンが攻撃をするその瞬間に無数の氷柱がリザードンめがけて追撃された。不意打ちによる攻撃にリザードンはそのまま腹部にダメージを受けてしまった。

氷柱が飛んできた方へ目をやると、倒したはずだと思っていたツンベアーがより殺気を漂わしながら立ち上がっていたのだ。

「リザードン!」

「グオオオ!!!」

ピカチュウに絡んだ糸を解きながら、サトシはリザードンに呼びかける。その呼びかけに応じてリザードンは立ち上がると、鋭い雄叫びをあげた。

「よしリザードン!【ドラゴンクロウ】!!?」

あの程度の攻撃で怯むサトシのリザードンではない。そのまま龍の爪でツンベアーに攻撃を仕掛けた。だが、サトシの目にはツンベアーに接近してくるリザードンを見て軽く笑みを浮かべているリザードンの女の素顔が映っていなかった。笑うのと同時にツンベアーの拳からはどす黒いオーラーが纏っていた。

「まさか!!!」

変な違和感にアイラは何かを察した様子でいた。慌ててサトシの方へと振り返ると、攻撃を中止するよう呼びかけた。

「ダメ!サトシ!!!」

だが、リザードンはすでにツンベアーの懐に入っていた。そしてリザードンが爪をふりかざそうとしたのと同時にツンベアーも黒いオーラを纏わせた拳をリザードンに振りかざした。

「ツンベアー！」「ダークラッシュ」！！？」

「ベア!!!」

「グオオ!!!」

「リザードン!!!」

リザードンとツンベアーの攻撃が交わったその瞬間に一瞬でリザードンは後方で聳え立つ氷岩に叩きつけられてしまった。

「な…なんだ今の技は」

突然の事に驚き隠せないでいた。何よりもあのリザードンがこうも簡単にパワー負けしてしまった事とさっきまで戦闘不能寸前だったツンベアーの予想だにしないパワーにただサトシは呆然と立ち尽くしてしまった。

「へえ…あんた知らないの。最強のポケモンにしか使えない最強技なんだよね♡」

絶望満ちた顔したサトシを煽るように挑発すると軽くウインクをしては次の攻撃の指示を送ろうとしていた。しかし、ただ一人。ツンベアーが使った技を見て確信したのか、怒りを露わに拳を震わせているトレーナーが一人いた。

「そうやって…また罪のないポケモン達が苦しめているのね…」

「ア…アイラ?」

「どこまでお前達は…こんな…卑劣なことができるの。そのせいで、どれだけのポケモン達が心を失い傷つき、どれだけのトレーナーが悲しんでいるのか…分かっているのか!!!」

アイラのただならぬ怒りを見てはサトシは自分が思っていた以上にあの集団がいかに非道な連中であると分かった。

そして、すぐにアイラはその怒りをぶつけるように猛攻撃を浴びせ始めた。

「ワカシャモ！」「かえんほうしゃ」！！？」

「ムウマ！」「おにび」！！？」

「シャアアア!!!」

「マウ!!?」

「ぐっ!!!」

「ぐあああ!!!」

その怒りはツンベアーではなく、ツンベアーを苦しめた他の残党員に攻撃が向けられた。憤怒の炎に包まれた残党員はあまりの炎の勢いに前に出られないでいた。

ごめん…ツンベアー。すぐに助けてあげるから。我慢して…

「ワカシャモ! 【スカイアッパー】!!?」

「シャアアア!!?」

「ベエア…」

「くっ! ツンベアー! 【ダークウエーブ】!!?」

「グアアアア!!?」

「ムウマ! 【サイコーウエーブ】!!?」

「ムマアアアア!!?」

「【つばめがえし】!!?」

「シャア!!?」

「ベエツツ!!!」

攻めては防いでのヒットアンドウェイで徐々にツンベアーの体力を削っていく。

「ちっ! 二体同時じゃあ…」

やはりサトシのリザードンと戦った時のダメージが残っていたのか。明らかに動きが鈍くなっているツンベアーにアイラの二体のポケモンによる攻撃に押されてしまっている。すぐに他の手持ちで応戦しようと、別のモンスターボールを手にとろうとしたその時、アイラの左腕にある装置を見ては急に敵の女の顔色がだんだんと青く

なってきた。

なんで、あの女があ装置を：

このままではまずいと思つた矢先、すぐに残党員の方へと指示を出す。

「あんだ達！加勢しなさいよ！」

「「おおおお！！！」」

命令の元、すぐに残党員は残りのモンスターボールを手に一斉に投入しようとした。それを見たサトシはすぐに別のポケモンを繰り出してはそれを防ぐ。

「ベイリーフ！【はっぱカッター】だ！！？」

「ベイ！！！」

ベイリーフの攻撃はモンスターボールを投入しようとした残党員に向けて放たれた。ベイリーフの攻撃に、足元が不安定な氷の道に足を滑らせては残党員の動きを封じた。

「サトシ！！？」

「アイラ！こいつらの事は俺たちに任せてくれ！」

「ありがとう！サトシ！」

残党員の方はサトシに任せてアイラはツンベアーとの戦いに集中した。

「ワカシャモ！【でんこうせっか】！！？」

「シャア！！？」

「かえんほうしゃ！！？」

【でんこうせっか】でツンベアーの腹部を攻撃してバランスを崩す。そこを効果は抜群の炎タイプの攻撃を浴びさせる。怒涛の【かえんほうしゃ】の威力にツンベアーはそのまま後方へと吹き飛ばされた。

「今だ！行けっ！！！」

次にアイラは利き腕でない方の左手でモンスターボールを握りしめた。すると、左腕に装着された装着が起動し始めると、神々しく左手に握りしめられたモンスターボールが輝き始めた。急いでツンベアーを戻そうと慌てるものもう遅かった。ツンベアーに目掛けて投げられた輝くモンスターボールはそのままツンベアーを捕らえた。

捕獲のカウントダウンが始まらないまま、ツンベアーを捕らえたモンスターボールはアイラの手の中へと収まった。

「スナッチ完了ー！」

その光景に敵の残党員だけでなく、サトシも驚いていた。そのはずだ。アイラが捕獲したツンベアーは紛れもなく野生ではなく、敵側のポケモンであつたからだ。

「きいいいいい!!! 退却よー退却く!!!」

敗北を確信した後、残党員を連れて奥の方へと走り去っていく。

「待て!!!」

その後をすぐにアイラはワカシヤモ達を戻すと後を追いかけていく。すぐにサトシもリザードンとベイリーフを戻してはアイラの跡を追う。暗い洞窟を抜けていくと島の外へと出て行つた。敵の姿を探そうと辺りを見渡したのだが、冷気によって冷やされた空気によって生み出された霧が視界を邪魔をしているため姿を捉えることができなかつた。

敵の逃亡を許してしまった事でアイラは悔しさのあまりその場で崩れ落ちてしまった。砂浜の砂を握りしめている様子にサトシはアイラに声かける事ができなかつた。

~~~~~

クチバシテイのポケモンセンターへと戻ってきたアイラとサトシはポケモン達をジョーイさんに預けた後、すぐに国際警察本部へと連絡をかけた。

『ご苦労だったな。アイラ』

「ですが、すみません。幹部と思わしき人物の確保には至りませんで



した」

『いや、奴らはふたごじまのポケモン達をダーク化させていたのかもしれない。それだけでも被害を抑えることは出来たものだ』

アイラは深々と下ろした頭を上げると、もう一度、謝罪の言葉を発した。

すると、アイラの後ろから何処か聞き覚えのある声が出た。

「お久しぶりです。ハンサムさん！」

『おお！サトシくん！そうか君もアイラと一緒に食い止めてくれたのか！』

その人物を見たハンサムの目は見開いた。彼は幾多の難事件にも共に行動した事がある人物でいたからだ。

サトシも久しぶりに再会出来た事に喜びを感じていたのだが、それよりも今日あった事についてどうしてもサトシはアイラとハンサムに説明してもらいたかった。

「アイラ！ハンサムさん！そのダークポケモンって何なんですか？」

やはりと悟ったハンサムにアイラも下唇を噛み締めては目線を下にやる。そんなアイラの気持ちも分かっているが、見てしまった以上は説明しない訳にはいかなかった。

『ダークポケモン。ひと呼んでポケモン戦闘兵器。心を壊して感情を無にしたポケモンの戦闘能力を極限にまで上げて、ただ襲わせるためだけに使わされるポケモン達のことなんだ』

「心を壊す…戦闘兵器化したポケモン…」

その言葉にサトシは驚愕した。これまで旅の中でもロケット団やポケモンの売買を繰り返す密漁団であるポケモンハンターみたいな悪の組織と対面した事は何度もあった。だけど、これは非常すぎる。ポケモンの心を壊す事を平気にやってのけるその集団にサトシは怒りを通り越して呆然としてしまった。

それは相棒のピカチュウにも伝わっている。サトシは一旦呼吸を整えた。

「なあ、アイラは其奴らを追っているんだよな」

「ええ…」

決意を固めたサトシはアイラにその意を語る。

「俺にも手伝わせてくれないか」

「えっ…」

「俺！いままで他の地方を旅をして、ロケット団みたいな悪の組織やポケモンハンターとも戦って来た。だけど、ハンサムさんの話からは其奴らのやっている事はあまりにも酷すぎる。ポケモンを戦闘兵器に…感情を消すだと…よくもそんな事を平然としてやれるものだよ！こんな話を聞いて黙っていられないぜ！」

「ピカチュウ!!？」

ダークポケモンの悲劇。そしてその悲劇が自分の生まれ故郷に差し伸べられると知ってしまった以上は何もしない訳にはいかない。ピカチュウも両頬の電気袋から電力を発光させながらサトシと同じ思いである事を示した。

『サトシ君の実力はわたしも保証する。できる事なら私からもお願い…』

これまでサトシと共に悪の組織と対峙してきたハンサムはサトシの協力には賛同する。だが、その意見をアイラに告げた途端にハンサムの声を遮るようにして

「許せんせん!!!」

ポケモンセンターにいるトレーナーが一齐にサトシ達に集中が集まるぐらいの大きな声でサトシの意を強く否定した。

「アイラ？」

否定されたよりもアイラの気迫にサトシは驚いた。息を荒くしたアイラは落ち着くと鋭い目つきでサトシを睨んだ。蛇睨みを受けたかのようにサトシの身体は硬直した。背中から感じる寒気と頬から浸る冷や汗をかくサトシの前をアイラは一歩ずつ踏み込んで顔を覗かせた。

「たしかに貴方は強い事は認めるよ。だけどね…そんな正義感だけで協力を要請するのはやめてくれない」

声が出ない。アイラの危機迫る表情に尻込みしてしまった。それはモニター先のハンサムも同じだ。

「私の出身聞いたわよね。オーレ地方って。サトシは聞いた事あった？その地方の名を」

「えええと…」

「知ってるわけないよね。オーレ地方こそがダークポケモン発祥の地。その事件のせいでも他の地方とも隔離された地方なのよ。ジムもなければポケモンリーグも開催されない。ポケモン協会もオーレ地方だけは他の地方とは全く別のものと避けているのよ！」

「だんだんと震えていく右拳を左手で抑えながら、サトシに言い放つ。」

「ダークポケモン達の恐ろしさも何にもわかってない癖に…一緒に戦うなんて言わないで！」

言い切ったアイラはサトシに背を向けると、ジョーイさんに預けたワカシャモ達を引き取りに向かった。そんなアイラをサトシは引き止めた。引き止めたアイラはサトシを睨み返すと、さっきとは違って真剣な眼差しで見つめてきたサトシに驚いた。

そして今度はサトシの方から一歩ずつ歩み寄って行くとモンスタールボールを片手にアイラに向けた。

「だったら、アイラに実力を見てもらえばいいんだな」

「えっ？」

サトシの取った行動に戸惑ったが、彼が何しようとしているのかはすぐに理解できた。

「アイラ！俺ともう一度一対一のポケモン勝負をやってくれ。口だけじゃない！俺達の覚悟を見せてやる！」

「…分かったわ」

サトシの言葉にアイラは承諾した。二人はそのままハンサムとの通信を終えると、バトルフィールドへと向かって行く。両トレーナーサイドに立った二人。先にアイラがポケモンを繰り出した。

「私はこの子で行くよ！」

「マアアアンダ!!？」

モンスタールボールから飛び出したのは、ふたごじまで見たポケモンではない。赤い翼を広げて大空へと滑空する。

「ボーマンダか…」

ボーマンダに対して同じく空を飛びリザードンを出したい場面であったが、回復したとはいいいりザードンはツンベアー戦で疲れ果てている。リザードンを引つ込めたサトシは別のモンスターボールを握りしめると勢いよくフィールドへ放った。

「ゲッコウガ！君に決めた!!!」

「コウガ!!?」

モンスターボールから解き放たれるとゲッコウガは腕を組み直立した状態でボーマンダを睨んだ。

「ボーマンダ！【りゅうのはどう】!!?」

「ゲッコウガ！【みずしゅりけん】!!?」

二人のポケモンが出揃った直後、バトル開始の合図を送らないまま二体の攻撃が放たれた。そのバトルを見にきたトレーナー達には二つの技の衝撃波が身体中に走る。そして感じる。

誇りをかけた。強者同士のバトルが始まったと…

カントーの港町クチバシテイ

朝早くから一隻の船が入港した。大勢の人が荷物を持ちながら続々とカントー地方へと入国して行くと、その中から四人の少年少女も初めての他国に胸を躍らせていた。

「ねえ！あっちの方で凄い歓声が上がってない!?？どんな人がバトルしてるんだろ！」

「アーマイ!!？」

「ヴェラ火山のような燃えるバトルか！確かに気になるな！」

「ガアメエス!!？」

「ダメだよ二人とも！今はアローラ祭の準備をしないといけないんだから、まずはこっちが優先だよ！」

「モギユユ!!？」

「そうそう！リーリエもこっちに向かっているんだから、早めにやらないといけないよ！」

「アウアウ!!？」

「は〜い…！」

バトルを見学できずに残念そうな二人を引っ張って、四人はアローラ祭の準備に取り掛かっていく。

~~~~~

その気になるバトルはあつという間に人盛りで埋め尽くされていた。あまりの人数に後方では背伸びをしながらも、なんとかこれから始まるバトルを観戦しようとするトレーナーもいた。

大勢のトレーナーに注目される中、二人のトレーナーによるバトルが始まろうとしていた。

「ボーマンダ！【りゅうのはどう】!!？」

「ゲッコウガ！【みずしゅりけん】!!？」

二体の同時攻撃は互いを打ち消しあった。さらに発生した爆煙がフィールド場を包み込み始めた。辺り一面に広がる爆煙はフィールドおろか観戦しに来たトレーナーをも呑み込むほどであった。

「【つばめがえし】!!？」

「コウガ!!？」

その爆煙を払うようにして、ゲッコウガは一直線に飛んでいるボーマンダに向かって飛び出した。

ゲッコウガの攻撃はボーマンダに命中する。だが、アイラは技を決めたゲッコウガの着地するの瞬間を見逃していなかった。

「ボーマンダ！【かえんほうしゃ】よ!!？」

「ダアア!!？」

「くっ！あの状態から攻撃に移せるのか！」

空中で上手く回避できないゲッコウガにボーマンダは燕返しのだメージに絶えながらも、すぐにゲッコウガに火炎放射を放った。

アイラのボーマンダの咄嗟の切り替えに驚きながらもサトシはすぐに指示を出した。

「ゲッコウガ！【みずしゅりけん】!!？火炎放射を防ぐんだ！」

「コオウガ!!？」

サトシも水手裏剣で応戦させたのだが、その行為が裏目に出てしまった。

再びぶつかり合う両者の技により生まれた衝撃波にゲッコウガはそのまま押し出されてしまい、フィールド上に強く体を叩きつけられてしまった。

「今よー！【すてみタツクル】!!?」

「ダアアア!!?」

立ち上がるゲッコウガよりも先にボーマンダは一気に急降下すると、そのまま突進していく。

「コウガア!!!」

「ゲッコウガ!!!」

身体中にパワーエネルギーを溜め込んだボーマンダの体当たりはゲッコウガを捕らえた。自らの命を燃やすようなエネルギーを放った捨て身の体当たりにゲッコウガは吹き飛ばされてしまった。

ボーマンダはというと、反動によるダメージを振り払いながらも一度、ゲッコウガ目掛けて突進する。

「ゲッコウガー！【かげぶんしん】!!?」

「かえんほうしゃ」で薙ぎ払って!!?」

危険を回避するためにゲッコウガは複数の分身を作り出した。しかし、ボーマンダは関係がないように火炎放射で全ての分身を打ち消してしまった。

「くっー！【みずしゆりけん】!!?」

向かってくるボーマンダに水手裏剣を放つ。その攻撃はボーマンダに命中するが、ドラゴンタイプには水系攻撃は効果はいまひとつ。何事がなかったかのようにボーマンダはゲッコウガとの距離をさらに詰めていく。

「【すてみタツクル】!!?」

「【つじぎり】!!?」

再びボーマンダの力一杯の突進をゲッコウガは常闇のエネルギーを放つ刃でボーマンダと迎え撃った。だが、ボーマンダの特性の《いかく》の影響もあつたか、ゲッコウガはそのままボーマンダとの押し

合いに敗れてしまった。

吹き飛ばされたゲッコウガの安否を確認を図るサトシの声にゲッコウガは左肩を支えながら、ゆっくりと立ち上がった。

「これが…アイラの本気」

アイラとボーマンダの猛攻撃にサトシとゲッコウガの顔が次第に曇ってきた。

アイラとポケモン達の強さもそうだが、サトシはふたごじまで戦った時と明らかに違う雰囲気が漂わせている感じがした。その証拠にアイラは楽しんでバトルをしているよりも、目の前の敵を全力で叩き潰しに行くような真剣な眼差しでサトシとゲッコウガを睨んでいた。

ひたすら攻撃を仕掛けてきたボーマンダの疲れと同じくらいアイラも少し息を荒らし始めていた。ゆっくりと呼吸をした後、口を開いた。

「オーレ地方はね。ポケモンバトルが盛んな地域が有名でね。他の地方からも腕試しによくトレーナーが訪れていたの。そりやもう毎日がお祭りみたいなものだったの…」

「いつかはポケモンジムやポケモンリーグも建設してオーレ地方の魅力をもっと多くの人に見てもらいたいと思っていたのに…」

拳を少しずつ震わせながら悔しそうにアイラは話を進めた。しかし、それとは反対にその声は何処と無く弱々しいものでもあった。

アイラの怒りと悲しげな感情が伝わったのか、サトシもゲッコウガも構えるのを止めるとバトルを忘れてるみたいだにアイラの話聞き始めた。

「それがだんだんとエスカレートして、スポーツとしてでなく、決め事や賭け事にもポケモンバトルで型を付けるようになってからは弱肉強食の世界へと変貌した。強い者が偉い！強い者が正義だ！弱者は逆らうな！弱者はずつと這い蹲ってる！」

感情が爆発したかのように、徐々に声を荒らし始めてきたアイラ。すると、胸ポケットから輝しく放つ大きな宝石をぶら下げたネックレスを取り出すと前に差し出した。

その宝石に見覚えがあったサトシとゲッコウガは一気に緊張が



走った。

「勝つ事に執着したトレーナーの末路がダークポケモンを生み出した！それを生み出したのはシャドーっていう最悪組織！だけど！オーレのトレーナーのみんなはダーク化のリスクを知っていないながらも自身のダークポケモン化を受け入れた。もうオーレのトレーナー達はポケモンを一つの生き物っていう認識がなくなったの…」

その声の反応したかのようにさらに光り出すキーストーンとボーマンダに持たせてあったメガストーンが一気に光り出した。

「全ては支離滅裂な欲望のせいよ！シャドーが一度滅んだのに感謝どころか妬みを言う者の方が多かった！それを見て私は絶望した！復興して町は戻っても人の心はそう簡単に戻らない！ダークポケモンはいなくなつたけど、ダークトレーナーは増えてきた！もうオーレは救われないのよ！」

涙目になりながらも叫び続けるアイラをサトシは口を固く閉じながら、アイラの悲痛な感情を受け止めていた。

そして、キーストーンの光とメガストーンの花が結び始めると、ボーマンダの身体が一気に光り出した。

「それが…カントー地方にも同じ事が起きようとしている…させる訳にはいかない。私は!!!」

「ボオオオオ!!!」

「救えなかったオーレのためにもこの地方を守ってみせる！もう！ダークポケモンをこの世から完全に消してやる!!!」

光の強さが最高潮に達したメガストーンの花がフィールド一面に光り輝いた。アイラの募る感情の強さを表現しているかのようで、その光りは目を開けられないほどの眩しさを放っていた。

そして、アイラとボーマンダの叫びが響き渡った。

「ボーマンダ!!メガシンカ!!」  
「ダアアアア  
!!!!!!」

紅い三日月の如く。進化のエネルギーによって艶に磨きがかかるボディーをボーマンダは空を切り裂いた。その姿をサトシにゲッコウガ。そして、観戦トレーナー全員を魅了させるほどの力強さを表していた。

「これで止めよ!ボーマンダ!」  
「りゅうせいぐん!!?」

右手を大きく空に向かって指したアイラの合図とともに、ボーマンダはエネルギー砲を一気に空高く打ち上げた。

打ち上げられたエネルギーは花火のように散乱すると、流星群のよう一気にゲッコウガ目掛けて降り注がれた。迫り来る無数のエネルギー弾に観戦トレーナーの誰もがバトルの終焉を予感していた。

サトシとゲッコウガも迎え撃つどころか躲す気もないまま、ただ視線を下の方へ向けながら呆然と立ち尽くしていた。

しかし、それは決して勝負を諦めたという訳ではなかった。

本当に安易な答えだったよ。

自分の想いを貫こうとするだけで、アイラのダークポケモンに対する気持ちや自分の生まれ故郷に対する気持ちを考えてもいなかった。

考えていなかったけど…

だけど…これだけは言える

サトシとゲッコウガは同時に顔を上げた。勝負を諦めた者ではない。その力強く真剣な眼にアイラはサトシとゲッコウガに対して一瞬、恐怖を覚えた。

そして、またサトシもありったけの声でアイラに今の自分の気持ちをぶつけに行ったのだ。

「俺もアイラと同じだ！ポケモンが好きだからこそ俺も救いたい！自分の生まれ故郷だからこそ守りたいんだ！悲劇を繰り返したくないアイラの気持ちも分かっているつもりだ！だから俺もその気持ちに応える！俺たちの全力でその想いを伝えてみせる！」

アイラと同様。サトシは右拳を高く天へと上げた。そして、その動きにシンクロするかのようになゲッコウガもサトシと同じポーズを取った。

そしてゲッコウガの目がメガボーマンダの紅い翼と負けないうぐらの紅い眼を放つと、とてつもないパワーを解放した。

自分の想いと覚悟は口だけじゃない。それはこのバトルで…

応えてやるぜ  
!!!!

「行くぞ  
!!!!  
ゲッコウガ!!!  
フルパワーだあああああ!!!」

「うおおおおおおおおおお  
「コオウガアアアアアアアアアアア

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

サトシとゲツコウガの雄叫びと共にゲツコウガの力が大きな水流の渦を纏いながら一気に吹き出された。不思議な事にその光景を目の前にしたアイラにはサトシとゲツコウガが重なり合うかのように見えていた。

さらに水流の渦がゲツコウガの背中に集まると、大きな水手裏剣へと形成し始めた。

そして、明らか姿が変わったゲツコウガにアイラは驚愕した。その姿はまるで…

サトシと瓜二つのように見えた。

「ゲッコウガ！【つじぎり】!!?」

「マアンダアア!!!」

「ボーマンダ!!!」

えっ…何!?? 嘘…いつの間に

サトシの指示と同時にゲッコウガの姿が一瞬にして消えた。そして気がつくとな自分のボーマンダがゲッコウガの攻撃を受けていた。

忍びポケモンだからという訳ではない。ゲッコウガの姿に気が取られていた訳でもない。瞬間移動したかのようにボーマンダへ移動したゲッコウガのスピードにアイラは何が起きたのか分からなかった。

「くっ！【かえんほうしゃ】!!?」

「みずしゆりけん」!!?」

ボーマンダの火炎放射にゲッコウガは一回り大きくなった巨大水手裏剣を放った。放たれた技は再び交わると発生された水蒸気により二体のポケモンは包み込まれてしまった。

煙が晴れるまで待つしかないみたいね…

晴れた瞬間に一気に攻撃を仕掛けようと、ボーマンダとゲッコウガの姿が見えるまでアイラは静かに待つ事にした。

「そこだ!!!ゲッコウガ！【みずしゆりけん】!!?」

「コウガア!!?」

「ええ!!!」

ゲッコウガの水手裏剣が決まるとボーマンダは爆煙の外へと放り出されてしまった。

「互いのポケモンが見えていないのはサトシも同じはずなのに何で！  
あんな事…ゲッコウガと同じ視線でないと分からないはずなのに  
！」

同じ…視線…

まさか…サトシにはゲッコウガの見ている光景が見えているとい  
うの…

改めてサトシの方を見ていると、サトシとゲッコウガは同じ構えを  
取っていた。それに「つじぎり」や「みずしゅりけん」を指示した時  
も自分も一緒に戦っているようにゲッコウガと同じ動きをしていた。  
まさかと思うが、アイラにはサトシとゲッコウガは完全にシンクロし  
ている様に感じていた。

「ボーマンダ！【すてみタックル】!!？」

「ゲッコウガ！【つばめがえし】!!？」

ボーマンダの追撃にゲッコウガは迎え撃つ。ゲッコウガはボーマ  
ンダの体当たりをギリギリ惹きつけてから、まず下に潜り込む。そし  
て右拳で腹部に攻撃を決めると、そのまま左拳、右脚、左脚と連続攻  
撃でボーマンダを打ち上げた。

「ゲッコウガ！【みずしゅりけん】!!？」

打ち上げられたボーマンダの上に瞬時に移動すると、そのまま巨大  
水手裏剣を叩き込んだ。ボーマンダはそのまま地面に向かって落と

されたのだが、左右に大きく首を振ると砂煙を払いながらゲッコウガを睨みつけた。

「来るぞ！ゲッコウガ!!」

「コオウガ!!?」

あの猛攻に耐えたボーマンダにサトシはすぐにゲッコウガを構えさせた。両者の糸口を探り合う状況と思いきや…

「お疲れ！ボーマンダ！」

「え…」

ボーマンダのメガシンカが解けたすぐにアイラはボーマンダをモンスターボールへと戻した。一対一のバトルなためポケモンの交代はない。まだ、十分に戦えるボーマンダを戻したアイラにサトシは目が点になる。そんなサトシにアイラはさっさとサトシの元へと駆け出した。

「強いねサトシ！私達の負けだわ！」

「えっ、でも…」

「それよりも何よ！サトシのゲッコウガは!!!メガシンカじゃないわよね！本当に君は面白いトレーナーだよ！」

「えっ…えっと、ア…アイラ？」

「ピカ…」

「コオウ…」

さつきとイメージと違うアイラに両手を握られながらもサトシは戸惑ってしまった。そう感じたのはピカチュウもゲッコウガも同じだった。

~~~~~

「というわけで、サトシにもダークポケモン調査のお手伝いをさせて



頂こうと思います♪」

『お…おお！そうか。それではサトシ君よろしく頼むぞ！』

「はいー」

「ピツカ!!?」

人が変わったかのような様に和かな表情で語るアイラにハンサムも戸惑いを隠せないでいた。まあ、何事かあれ。サトシの実力をアイラは認めたのは確かな様だ。

「じゃあ、これを渡すね！」

するとアイラは複数のモンスターボールをサトシに渡した。だが、その渡されたモンスターボールは今まで見てきた物とは違う不思議な構造をしたモンスターボールだった。せれをまじまじと見ていたサトシにハンサムが切り出した。

『それは国際警察部隊が開発したスナッチマシンを元にして改良した。スナッチボールだ！』

「スナッチボール!?!?」

初めて聞く名前にさらに思考が止まっていくサトシにアイラは続けた。

「サトシはふたごじまで私が彼奴らのポケモンをゲットしたのを見たでしょ」

それを聞いてサトシは思い出した。あの時に出会った普通とは違う凶暴性があったツンベアー。ふたごじまで遭遇したトレーナーの指示を従っていたためトレーナーのポケモンであったのにアイラはそのツンベアーをゲットした。

そう、人のポケモンを別のモンスターボールでゲットすることができるのにアイラはそれを目の前でやった。

アイラはあの時、左手に装着されたマシンをサトシの前に出すと、他の人の目を気にしながら小声でサトシにこう話した。

「察しの通りよ！そのボールは他人のポケモンを奪うことが出来るボールなのよ。そしてこれが私がつけていたこのスナッチマシン。モンスターボールをスナッチボールに変える道具なの」

アイラの話からスナッチマシンは元々はオーレにいた組織「スナツ

チ団」が開発した物であつたという。

スナッチマシンは人からポケモンを奪うという悪の目的で作られたマシンだけど、今はすべてのスナッチマシンは国際警察本部に回収されて今はそういう悪い奴からポケモンを助ける物として使われているという。

「つまり、このボールで彼奴らによつてダーク化されたポケモン達を助けることができるんだな！」

『そう！だから使うときは他のトレーナーの目には十分に注意してくれ！奪われてしまったら、それこそ大問題だからな！』

ハンサムの言う通りそれがロケット団の耳にでも挟まれてもしたら一大事になる。そんな危険な事に首を突っ込んだ事を改めてサトシはその責任の重さを自覚した。

『それじゃあ、二人とも！共にダークポケモン調査をよろしく頼む！』  
その意思表示を示す様にサトシはピカチュウと一緒に敬礼した。

「ウルトラジャー!!!」

「くっ／＼／＼」

「くっ／＼／あははは!!何サトシそれ!超ウケるんだけど／＼」  
「いや／＼これは…その…」

アローラでのウルトラビーストを調査した時に発した台詞を思わず言ってしまった事にサトシは静かに赤面するのであった。

~~~~~

「じゃあ、何かあったら私のポケギアに連絡して!」

「分かったよ!アイラ」

ここでアイラと別れて調査に当たる事になった。

「サトシって、今いくつ?」

「十六だけど…」

「ふくん♪」

サトシの歳を聞いたアイラは小馬鹿にした表情でサトシを見つめた。

「ふふっ／＼／年下ね!それじゃあ、頼んだよ!後輩君♡」

そう言うと、アイラはボーマンダに乗って西の方へと移動した。

「よし、行くか!ピカチュウ!!!」

「ピッカ!!?」

アイラを見送った後、サトシの掛け声と共にピカチュウと一緒に走り出した。

微かに照らす光の一つになるべくに

サトシはカントー地方に迫り来る闇の渦へと飛び込んで行く。

